
神殺しの青

宇礼儀いこあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神殺しの青

【Nコード】

N6739N

【作者名】

宇礼儀いこあ

【あらすじ】

巨大MMORPG エルダー・テイル。そのゲーム世界にプレイヤー達が召喚される 大災害 から一ヶ月。暗殺者の弓使い シュウトは、大手の戦闘系ギルド シルバーソード を辞める決意をする。

橙乃ままれ作「ログ・ホライズン」の二次創作です。習作の見切り発車なので数回分の短編になると思……ったのですが、ダラダラと続いています。

01 アキバが出るまで

その人に初めて出会ったのは、あの 大災害 の日だった。

あの日、シユウトはいつものようにギルドの仲間と6人のパーティを組み、洞窟の前で待っていた。拡張パック ノウアスフィアの開墾 が解禁になった直後にさっそくダンジョンを試そうと思っただいのだ。

しかし、気が付いた時には仲間と3人でシブヤに、いや、「ゲームの中」に飛ばされていた。何が起こったのか全く分からない。不安、混乱、興奮、絶叫、失意、そして諦めが次々と襲いかかってきて途方に暮れる。こんなことは何かの間違いで、ほんの一時的なことでだろうと思っていた。そう思いたかった。

シユウト達はあちこちに念話を送った。直前まで一緒にいた他の3人はアキバに飛ばされていたのだが、ともかく3人でなんとかアキバへ戻り、ギルドに合流しようと考えた。

この日は何も考えられなかった。だから、なんでも良かったのだろう。人の多いところなら何処でも。誰かが、少なくとも自分ではない誰かが答えを知っているのではないかと信じたかった。

シユウトにとってもシブヤはよく行く場所だったし、だからアキバまでの最短ルートも分かっていた。けれど、念を入れて敵の弱いゾーンを通って行くことにする。この周辺の敵なら恐ろしくは無いです、だから正直、心のどこかでは戦ってみたいという欲求も

あつた。

途中、一人の ガーディアン 守護戦士 を見付けた。

白銀の甲冑……というより、単に金属光沢そのままのナイトプレートガーディアンを装備した 守護戦士 が50メートル程むこうを歩いている。しかも、ちょうどこのタイミングで、右から3体、左から4体、……計7体のゴブリンとの戦闘に入ろうとしていた。その人は武器を構えている。

シュウト達はこの異世界に来て始めて目にする戦闘がどうなるのかを見守るべく、30メートルぐらいまで近付いて行った。所詮はゴブリンでしかないわけで、余程レベルが低くでもなければソロだからといって負けることはありえない。そのせいだろうか、不思議と助けようなどとは考えつかず、ごく自然に情報を集めることを優先していた。

ゴブリンどもは甲高い叫び声をあげながら 守護騎士 へと襲い掛かっていく。それはなんとも異様な光景だった。武器を振り回しながら動くその動作はゲームとしての エルダー・テイル のそれと少し似ていて既視感を覚えさせるものだ。違うのは、現実だけが持つ圧倒的な迫力があることだろう。現実で数頭の野犬に襲われるよりも遙かに恐ろしいかもしれない。ゴブリンは動物ではなく、亜人間なのだ。シュウトは思わず自分の弓を手繰り寄せていた。

その 守護騎士 は素早く動くと、寄ってきたゴブリンの一体に

剣を振り下ろしていた。その動きを見て、シユウトは思わず「あつ」と声を出してしまい、彼らに聞えてしまったかと焦ったが、なんとか戦いの騒音に紛れてくれたらしい。

戦いに馴染んだ戦士の動き「そのもの」にしか見えなかった。勝利の予感に思わず昂ぶる気持ちが湧き上がってくる。

が、

「うへえ〜」……その 守護戦士 は気色悪そうな声を出していた。

しかし躊躇は一瞬あったかどうか。彼は巧みにポジションを変えながら、次々とゴブリンを仕留めて行く。それはソロ戦闘の教科書かと思うような戦いぶりだった。

ゲームとしての エルダー・テイル では、通常5〜6人のパーティを組んでクエストや戦闘を行う。この時 守護戦士 等の前衛は、壁役として敵をひきつけ、後衛の魔術師達への攻撃を防ぎ、その自由を確保する役割を担うことになる。このため数体の敵からの攻撃を「敢えて引き受けること」をするのだ。守られている後衛はその間に攻撃呪文を使ったり、弓を射たりして敵を倒す。この様な基本の役割分担をきちんと守ることが連携の基本にして要諦でもあった。

比較してソロ戦闘の場合はどうか。同時に数体からの攻撃を受けていては回復が間に合わずに死んでしまう。そこで動いてポジションを変え、一度に攻撃を受ける敵を限定するのだ。例えば横一列に3体の敵が襲い掛かってきた場合、そのままだと3体からの攻撃を

ただ受けてしまう。だが後衛を守る必要のないソロ戦闘では大人しく殴られてやる必要がない。理屈としては、相手の側面へと回り込み、端の1体を壁代わりに使って、他の2体からの攻撃を届かないように工夫すればいいことになる。

(ゴブリン3体を相手にするのなら僕でも同じことは出来る。でも流石に6体、7体となってくると……)

数が増えるほど指数関数的に難易度は高まる。少し組み立てを間違えると簡単に後ろに回りこまれ、囲まれてしまはずだった。ゴブリンは弱いからたとえ囲まれても問題は無いが、ゴブリンに出来ないことを、もっと強いモンスターを相手に出来るわけが無い。

その 守護戦士 は盾を巧みに使い、相手を押し返したりしながら滑らかに動き続け、ひとつひとつ丁寧に、まるで自分の動きを確認するかのように、丁寧すぎるほど丁寧に仕留めて行った。あっけない戦闘の終結。見ていただけのシュウト達は、知らず肺に溜めていた息を吐き出し、安堵していた。

「なあ、シュウト、凄かったな。ソロプレイヤーなんだろうけど、
だけど、俺達もやれそうだな？」

その戦士の戦いっぷりを隣で見ていた 武士^{サムライ} が興奮した調子でシュウトに話しかけてくる。だが、まだシュウトは放心したままでいて、その話を引き受けたのは仲間の 妖術師^{ソーサラー} だった。

シュウトは彼を見ていた。あの戦士が何を感じているのかを想像しようとしていた。

彼は立ったまま動かずにいて、ドロップしたアイテムを拾おうとせず、立ち尽くしている。何事かを考えている様子だった。それが会話を始めたシュウト達に気付くと、こちらを一瞥し、そのままふらりと林の中へと消えていった。

彼が立ち去った後には言葉にしにくい気まずさが残った。ハシヤギ過ぎたらしい。そこで別に欲しくはなかったけれど、彼が拾わなかったドロップアイテムを拾ってみることにした。最初は何でも物珍しいものだ。時間が経過してゴブリン達の死体も、血などの痕跡も消えていた。こんなところまでゲームと同じなのか、と思う。

シュウトは落ちていた一枚の金貨を拾うと、指先に「あるはずのない血の臭い」を感じた気がして「人が命を奪う瞬間を見たのか」と思い至った。

その後、彼らもモンスターと戦うことになるのだが、それは見るも無残なグダグダの戦闘でしかなくて、みんなでガツクリと肩を落とすことになった。見るのとやるのとでは大違いらしい。シュウトも敵を仕留めたが、あの 守護戦士 の漏らしたような呻き声を上げることはなかった。

これがあの人との出会いだった。まだ脳内メニューの操作に不慣れだった僕らは、相手の名前もギルドも分からないままにしまった。そうして強い印象だけが残った。

「クレセントムーンの買ったの？　お願い！一口食べさせてー！」
「コラ！わがまま言っちゃダメって」
「あ、このポテトのならいいっすよ」

シューウトは朝から並んで、やっと　軽食販売クレセントムーンの“味のする料理”を手に入れることが出来ていた。並びもしないで、幸運にも買うことができた人間（ドワーフ？）にたかっているハゲタカ女子なんぞはとつと死んでしまえ！などと思いながら、自分も我慢できずに道端でハンバーガーにかぶり付いてしまった。久しぶりに感じる「瑞々しい味わい」をとて懐かしく思いながら、そのことでなんだか複雑な気分になっていた。あまりの美味しさに、何故か落ち込まずにはいられなかったようだ。

それは曖昧な感情だった。シューウトはロクに味のしない“湿った煎餅”を、自分達がゲームの中にいるという証拠のように感じていた。だからこの「美味しい食べ物」は、この世界を“現実”だと認めなければならぬ証しだと思い、心に突き刺さるものがあつただ。

この一ヶ月は夢の中にいるような感覚で、時間だけが足早に過去へと飛び退って行った。

シューウトの所属する　シルバーソード　はアキバの街でも屈指の戦闘系ギルドだ。ゲーム攻略を目的にする「ゲーマー」の集まりとでも言えば分かり易いだろうか。

どこか馴れ馴れしい人付き合いにはカッコ悪い部分があるとシューウトは思っている。その点　シルバーソード　はクエスト以外のこ

とは勝手にやればいいというサバけた空気があり、パーティを組むのも簡単に済んだ。インして3分でパーティを組めば、後はその日の気分でクエストを選ぶだけ。そんな手軽さに惹かれたシュウトはこのギルドを選んだのだった。ゲームはゲームであるべきだと思っていたし、ゲームに現実を持ち込む必要を感じなかった。

人付き合いの薄い攻略系ギルドだったけれど、ことゲームに関しては面倒見の良い部分もあって、中伝の巻物などをギルドの仲間で融通しあう決まりのようなものがあつた。お陰で300人ぐらいたいたメンバーのほとんど全員が、その特技を中伝までは高めていたし、シュウトも含めて頻繁にクエストに出る連中であれば特技の大半を奥伝に、いくつかは秘伝にまで高めることが出来ていた。

ギルドマスターのウィリアムはいつもつるんでいるメンバーと一緒に居ることを好んでいたからシュウトとはあまり話すこともなかった。それでもたまにフルレイドの戦闘で一緒になった時にはウィリアムのプレイをかなり参考にしていた。同じ弓使いとして盗めるものが無いかを常に意識していた。

ウィリアムはゲームの素質みたいなものを強く感じさせるプレイヤーで、特に戦闘に関しては、その指揮も含めて、本当に上手かった。それは 大災害 の後も変わっていないようだった。

シルバーソード でも 大災害 に巻き込まれた時には50人以上がログインしていなかった。組織の再編とともに熱に浮かされた様な状態になり、気が付けば全員でレベル91を目指すことになっていた。「レベル100でログアウトできる」とか「これは長編クエストであり、クリアすれば全員がログアウトできるようになる」もしくは「ログアウト専用のゲートが何処かに存在している」なんて話で盛り上がっていたのだ。シュウトも毎日のように戦闘に駆り出されたし、考える間もなく戦い続けることで時間は飛ぶように過

ぎて行った。みんな必死だった。必死でいることで、「何か」から目を逸らそうとしているようだった。

そうしたある日、 円卓会議 が結成される。

それはアキバの街で暮らす人々にとつて何かが終わり、また何かが始まる日になるのだった。

ギルドマスターのウィリアムが 円卓会議 の席を蹴つたのを聞き、シュウトは シルバーソード というギルドを辞めることにした。シュウトは人付き合いがあまり得意ではないし、好きでもない。だから 円卓会議 を厭^{いと}う気持ちも分かるのだ。

(ウィリアムは、いや、“僕ら”はまだゲームを続けようとしている。でも、そろそろ“ここ”を現実だと認めなければならぬ。もうそういう時期に来ている。)

シルバーソード で彼らとこのまま一緒にいれば、嫌でも現実だと認めたくない気持ちが目に入ってしまうだろう。そうすれば、自分の中にだつて同じ気持ちがあることに気が付かずにはいられない。自分を誤魔化すストレスには耐えられそうもないし、耐えていものだとも思えなかった。

(どうすればいいのか、まだわからない。僕にとって エルダー・テイル はゲームのはずだった。あの 大災害 の日から、それが現実に摩り替わってしまった。それなのに、いつまでもゲームを続けていてはいけない。)

ただ辞めたいだけかもしれない。ただの言い訳や現実逃避かも

しない。実際、違うビジョンがあるわけでもない。

何が正しいのか、わからない。

そうして3日、いつも通りにしながら待つてみることにした。3日待つてから辞めることにしたのだ。ウィリアムが 円卓会議の席を蹴つたのは、後々のことを思えば軽率な行動だったと思つていい。けれど、その批判の意味で辞めるわけじゃないし、変な勘繰りは避けたかった。それと3日あれば何か別のことが起こつて自分の気が変わるかもしれないとシュウトは考えた。

顔馴染みの店に材料の買出しに行く。外へ戦いには出ず、サブ職の 矢師 を使って色々な矢を作ることにしたのだ。作つた内の一部はギルドのために都合することに決めていた。それに、矢に関して実験してみたいこともあった。

そうして三日が経つた。

自分では普段通りに過ごしていたつもりだったが、そう思つているのは自分だけかもしれない。一度辞めると決めたら逆に辞める事ばかり考えてしまい、かえつて決意が固くなつたかもしれない。外からみたらソワソワしていたらう。今までシュウトも何人かそういう連中を見てきた。辞めそうなヤツはなんとなく分かるものだった。だからといって別にどうとも思つたことはない。「ああ、辞めるつもりだな」と思うだけだ。せいぜい自分に降りかかる不利益の有無や、その割合を計算するぐらいのことだ。

「すまない、ギルド、辞めようと思うんだ。」

「……ん、そうか」

「あ、なんだっけ、その、昔なじみにちょっと誘われてて……」

「ああ、わかった。……じゃあ、また機会があれば、な」

準備しておいた嘘までついて、シュウトは シルバーソード を去った。仲間達はあっさりしたものだ。訊かれてもいない理由を言ったりした自分が滑稽でしかない。始めて聞かされたような顔をしてくれたのは、有り難かった。

(何か計画があるわけじゃない。だけど、とりあえず一度、アキバを出なければならぬ。)

円卓会議 の結成と同時に料理の秘密が公表されてからこつち、アキバの街は爆発したみたいになっている。この頃は新しいニューースが色々と飛び交っていたのだが、どれも自分とは関係ないところで行っているように思えて、妙にしらけた気分になっていた。

簡単に荷物をまとめて街を出る準備をすませる。ちょっとした思いつきで近接戦闘用の武器を新調しに、顔馴染みの店へと向かった。顔見知りの店員に注文を伝えたが、愛想の良かったその人の反応は薄く、シュウトが誰だか分からない様子だった。

(……………そういう、ことか)

理由は決まっていた。シルバーソードの着脱 ギルドタグ がなくなつて、シュウトは何者でもなくなっていた。単に、それだけのことだと気が付いてしまった。

こつとして虚ろな気分のまま、アキバから薄暗い森の中へと逃げるように出て行くことになるのだった。

02 カトレヤへ

モニターの中で青い光が瞬いている。

父のやっていたゲームを肩越しに見た記憶。ゲームをやってるはずなのに父の顔はなんだか辛そうで、見てはいけなかったのかもしれないと思っ、この後しばらく悩んだりしたっけ。

(懐かしい夢をみたな……)

それは何年も前の学生時代の夢だった。この日を境に修也の父はエルダー・テイルを止めた。前よりも仕事に対して一生懸命になったと言っ、母は喜んでいたが、子供心に何かが残ったのだろう。大学入りが決まり、勉強から解放されてエルダー・テイルを始めめることになる。父親を理由にする気はなくても、影響されたのは事実だろう。授業を疎かにして単位を落とすつもりはなかったし、飲み会があれば顔を出しもした。そうしてかなりの時間を費やし、大学3年の春には一人前の冒険者になっ、ていた。

窓を開ければ既に日も高く、お昼に近い時刻だった。

(それにしても……)

アキバの街を出たあと、ソロでシブヤに来て宿に泊まった。
途中でアキバへと向かう 冒険者 の何組かとすれ違う。今更ながら人と違うことをしているのだと強く感じていた。今時シブヤに向かう 冒険者 はいない。これまで人と違うことをするのが好きというわけでもなかったのに、不思議な感じがする。

(……………暇だ。)

昨日は一日部屋にこもって矢を作って過ごした。

命中率にボーナスのある矢をベースに、威力のある矢の、やじり鏃をくっ付けて即席の「高威力・高精度の矢」を作ろうと遅くまで起きていた。円卓会議 が結成され、アイテム作成の裏技が公開されて以降、生産系のサブ職を選んでいるプレイヤー達は新しいアイテムを自分の手で作り出そうとしていた。

シュウトのサブ職は 矢師 。矢を生産することに特化される専門職だったが、弓に関する特技も会得できることから生産とロールの中間的なサブ職とされている。冒険をサポートする特技が追加される 狩人 の方が全体的には便利なのだが、特殊な矢を使いたかったのと、他人の手をあまり借りたくなかったので自分で作ることにしたのだ。幸い、矢の作成は(一部の魔法の矢を除いて)炉などの作業場所を必要としない。クエスト中に矢を補充する必要からの処置だろう。

通常の矢は完全に消耗品だし、魔法の矢でも再使用できる確率は低い。かといって、矢を最初から自作するのは流石に嫌だった。筈のと呼ばれる棒状の、いわゆるシャフト部分を真っ直ぐに作るだけでもごめんなさいと謝りたくなる。メニューから作れば10秒で完成するし、規格が統一されているかのように、真っ直ぐのシャフトが

付いた矢になって出てくる。意地悪で歪んだ材料を使っても出てくるものは真っ直ぐなのだから頭が下がる。

シュウトの「鏝だけ交換大作戦」は、交換した鏝をどう固定するか？という部分に時間が掛かったが、考えるのを止めて、ああでもないこうでもないという状況と触り始めると、意外とすんなり満足の行く結果が出せた。最初に壊した何本かの矢以外は、威力も精度もない普通の矢として再利用できることも分かった。規格統一ささままといつたところだ。

（今日は、もうやることも無いんだよなあ。日々の食料を買う金に手に入ればいいだけだし。）

食べていくだけなら、銀行にある分だけでも何ヶ月かは何もしなくても良かったりする。

仕方が無く、のろのろと出かける準備をした。もう2〜3日寝ても良かったのだが、この世界には娯楽があまりにも少ない。一人でじっとしているのが苦痛になるのはとうに知っていた。ネットとまでは言わなくても、テレビが無いのはやはり痛い。

（……どちらにしても、挨拶には行くだろうし、出かけよう。）

ギルドに入っていたためか、ギルド以外に知り合いなんて殆どいない。だからってアキバに戻って別のギルドに入り直すのはさすがに無様な気もする。

八千公のいない元八千公前広場に出る。広場でやっている露天マーケットの数が少なくなっているのを横目にみながら、こちらも廃墟となった百貨店のA館・B館の間のナントカという名前の通りを指して歩く。

（シブヤの知り合いと言っても、カトレヤの葵さんぐらいだもんな……）

カトレヤ というのはシブヤの零細ギルドだが、何故だか事情通には妙に知られている不思議なギルドだった。

葵は自他共に認める“引きこもり系ギルドマスター”で、基本的に街の外には出ない。街にもめったに出ないらしい。専門の生産系サブ職があるならそんなプレイもできるかもしれないが、カトレヤのような零細ギルドでは素材の調達が間に合わない。そのため暇つぶしなのか、副業で占い師の真似事をしていた。いや、むしろサブ職でやっている占い師の方が本業なのかもしれない。どっちが表の顔なのか分かりにくい人だった。

そんな葵女史も昔は一線級のヒーラーだったらしく、今の旦那さんとの結婚を機にキアラをリメイクしたと聞いていた。今では狐尾族の召喚術師サモナー。しかもレベルはたったの23で、「永遠の23歳」を自称していた。

（……一線級、か。そんな伝説なんていくらでも転がってそうだけぞ。）

上限が80レベルになる頃から、24人体制のフルレイドや96人体制のレギオンレイドでのクエストこそがハイエンドと呼ばれるようになっていた。これまでにサーバーの歴史に残るで

あろう幾つかのクエストがあつたし、シュウトも シルバーソード
で先陣争いに加わつた経験がある。

その昔、10年ぐらい前に上限が60レベルや70レベルだった
頃はハイレベルクエストの大半が、まだ6人パーティで行うものだ
つた。一部の上級クエストがやつと フルレイド に対応するよう
になったぐらいで、 拡張パック によって追加されたばかりの
レギオンレイド での戦闘システムは、いわば戦争の真似事をする
ための、模擬戦の意味合いが強かつたらしい。

しかし、ここ数年で「ハイエンドのクエスト」は フルレイド
に必要な24人、もしくはそれ以上の組織力が要求されるようにな
つていた。結果として6人パーティで行うクエストは一段次元の低
いものだと見做されるようになっていた。特技も奥伝の上に秘伝が
追加され、装備でもファンタズマル級のアイテムは フルレイド
以上の戦闘でしか手に入れることが出来なくなつていた。

一説によれば、戦闘メインのプレイヤーに不人気だったギルドシ
ステムを活性化させる目的があつたのだとか。今でも生産ギルドの
方が圧倒的に人数が多いのがその名残だと言われている。戦闘ギル
ドの場合、人数が多いとアイテム報酬で揉める事になり易いといつ
た事情が複雑に絡み合うからだろう。最強のアイテムが欲しかつた
ら自分でギルドを作つてリーダーになるしかない。そうやって戦闘
ギルドは分散することが間々ある。

だからこそ、昔は様々な伝説が生まれては消えていった。シュウ
トの個人的な見解では、ハイエンドの人数が6人で済む事、つまり
ギルドのような組織力が必要ないことで、そもそもエピソードが残
りにくいのだと思つている。人知れず誰かが何事かを成し遂げ、し
かし、だんだんとその偉業を覚えていく人間が少なくなつていき、

本人達と共に消え去ってしまう。その逸話は記憶の片隅でおぼろげな伝説となつていくわけだ。こうして大人数のギルドでもなければ、成し遂げた本人達が居なくなつた途端に逸話が消滅するのだろう。それは半ば当然の話なのだった。

そんなわけで「昔の伝説」がどの位あるのか見当も付かないし、大半は噂に尾鰭がついた胡散臭い代物だと相場が決まっていた。

現存する幾つかの伝説のひとつを上げるとして、その最も有名なものは 竜殺し の話だろう。

ある時、いくつかの攻略サイトで 竜殺し の追加特技の情報が更新された。それはあまりにも早すぎた情報であつたため、さすがに真偽が問題となる。当時は一般に成竜（上位ドラゴン）はまだ倒せないモンスターだと思われていた。いつかレベル上限が解放され、十分に強くなつてから倒せるようになるモンスターのひとつだと考えられていたのだ。それなのに60レベル中盤にも関わらず成竜を打ち倒し、 竜殺し のサブ職を得た戦士職が日本サーバーに現れてしまう。これは世界でも最速だったと言われている。

このため 竜殺し のサブ職に関する情報は運営側のミスで流出したか、でなければもつともらしく作られたデマだろうと揉めることになった。 レジオンレイド によるものだろうとの推測もされたが、大手ギルドでも実行者が見当たらない。一部の人間によつて 拡張パック 等のデータ解析までもが行われたが、結局は本人によつて画面をキャプチャーした画像か何かで解決したらしい。

レベル上限の上がつた現在、 竜殺し のサブ職はそれほど取得が難しいものではなく、戦闘ギルドで活躍する戦士職であれば選べる程度にハードルは下がっていた。しかし、今でも 竜殺し の成り手は少ない。それはあまり魅力の無い追加特技が理由になつてい

た。戦士職でないシユウトも興味から一通り調べてみたが、追加される特技にこれといったモノがない。特に攻撃用の特技は壊滅的で期待されたアサシネイトに迫る高威力の強攻撃であったり、何発も連続で叩き込む爽快なコンボ技などは欠片もなかった。あるのは^{ドラゴンバスター}竜破斬という低威力の単発攻撃技で、戦闘中に何度でも使えることが最大の利点という技だけ。つまり対竜属性がついていてドラゴンと戦うならちょっと効率がいかもという程度に過ぎず、逆にドラゴン以外に使う場合は通常攻撃に毛が生えた程度の代物であるため（ネタ的にはいわくつきの名前なのだが）完全に名前負けしていた。これでは一流の戦士達が今までのスキル構成を変えてまでサブ職に選ばうという動機を生み出さないのも仕方が無い。

それでも一点だけ、長期戦となる対ドラゴン戦向けに回避系の特技で目玉になるものが入っている。「フローティング・スタンス」と言って、不意打ちに対する自動回避機能付きの優れたものだ。回避特技の充実している武士や武闘家にはあまり魅力的ではないが、盾での防御がメインの守護戦士には守備力を更に高めるために選択するケースが稀にあった。

しかしそれも拡張パックが追加され、より有利なサブ職を求めるプレイヤー達の影でひっそりと姿を消していくことになる。その後の吸血鬼を代表とする「サブ職の乱立時代」が来たことも大きい。この時期は開発が荒れ、強力な召喚生物や、戦闘に有利なサブ職の開発が度々行われていた。開発と修正のいたちごっこが何度か繰り返され、「程よいライン」が模索されるまでしばらく掛かることになる。そうして、なんとなく合意が形成されたのだが、竜殺しのサブ職はこの期間に絶滅した恐竜だった。シユウトも竜殺しのサブ職を使っているプレイヤーを見た事がない。いわゆる「名誉サブ職」、もしくは口の悪い連中に言わせれば「ガツカリ職」の一つだとされていた。

こういった事情も多くのプレイヤーが同じサブ職になるのを防ぐ意味があるのだろう。もしくは初期に開発されたサブ職だったため、良い意味で「バランスの悪い特技」が入っていないのかもしれない。なんとなく、ゲームを開発したアタルヴァ社が直々に作ったサブ職のような気がするのだった。

シルバースードのような戦闘ギルドは、いわば最強を目指す漢達の集団でもあったから、雑談ではこの手の話題になり易い。いろいろな話が聞けるから胡散臭いものもまた多いのだ。その中でもダントツに胡散臭いものといえば、やはり「青」の話だろう。それは確率が数パーセントのクリティカルを狙って連発する戦士の話なのだが、嘘でなければバグかチートに決まっていた。それでも再現出来ないかの議論がされるのが面白いところで、いつの時代も最大ダメージは男のロマンということなのだろう。

道路に放置された大きな瓦礫を避ければ、カトレヤは直ぐそこだった。

「おなかへったー！」

木製のドアを開けたところで、挨拶するより先に言葉が飛んでくる。声の主は奥の部屋にいるはずだ。確かにもう昼飯の時間なわけで、どうもアキバで何かしらの「お土産」を見繕わなかったのは失敗だったように思えてならない。自分の配慮のなさにダメ出ししな

がら、勝手知ったる他人の家とばかりに奥の部屋へと入っていく。

「どうも、お久しぶりです。」

「え？ おっ？……やあ、いらっしやい。ハハハ」

だらしなくぐったりとしていた葵さんは、不意の訪問者に意表を突かれた様子で、いろいろと笑って誤魔化すことにしたらしかった。通ってきた無人の受付スペースの奥はバーカウンターのような場所になっていて、カウンターの内側にはロリ体形の葵さんが鎮座ましましていた。定位置ともいう。ここでたむろしてくっちゃんべるのがカトレヤのスタイルだ。

シブヤの零細ギルド カトレヤ。

いわゆる初心者に対してマニュアルなどでは分かりにくい部分を教えたりする冒険サポート系ギルドのひとつ、のはずだ。

(……そういう僕自身が カトレヤ で学んだ一人だったりするんだだけ。)

エルダー・テイル をシブヤからスタートしたシュウトはチュートリアルクエストが終わったところで、お約束を守るべく酒場を探した。素人考えだが、情報収集はやはり酒場から始まるものだろう。初心者丸出しでキョロキョロした末に、冒険者が張り出すことのできる連絡用の掲示板に カトレヤ の名前を見つけたのが運の尽きだった。その後はいろいろ酷い目にも遭わされた気もしたが、シュウトは カトレヤ で学び、そして卒業した。アキバで戦闘ギルドに入るように勧められるまま、このギルドから飛び出したのだ。シュウトが カトレヤ に居たのは、2週間にも満たない時間でしかないが、とても長く感じていた。その後も半年に一度ぐらいは挨拶しに寄るようにしている。

「シュウトくんだったのかあ、ダーリンと間違えちゃった。」

「相変わらずアツアツですか」

「もちろんでございますとも。……そつかあ、大災害からは始めてだったね。」

じろじろと顔を見られて「そういう顔なんだ、悪くないじゃん」とお褒めの言葉を頂戴する。

「葵さんはやつぱりこつちの世界だとロリを地で行くんですね」

「残念。非実在美少女といって欲しかった。」

微妙に元ネタを分かっている気がしたが、雰囲気だけで笑い合
う。

大災害 からこつちどうしていたのか？などの話題になり、旦那さんも一緒に巻き込まれた話とか、楽しくやっているなどの話をする。笑えないことも沢山あるのだが、お互い笑い飛ばしてしまわなければやっていけない。

そして本題へと飛翔した。

「シルバーソード、辞めたんだね？」

「……はい」

当然のことだが、冒険者は脳内メニューを呼び出せば、相手の基本的な属性情報を知ることができる。葵がそんな操作をした素振りにはシュウトにはまるで見えなかったのだが、名前を呼んだ時には既に確認していたのだらう。大災害から既に一月が経過している。会話時にメニューを呼び出したりするテクニクは必須のも

ので、本来、呼吸をするぐらい自然に出来なくてはならない。葵は既にこの操作に熟達しているのだった。

脳内メニューを使えば、今のシュウトに所属するギルドタグがないことは 冒険者 なら誰にでもわかる。それでも何のギルドを辞めたかまでは知ることができない。辞めてしまったギルドは表示されないからだ。だから、知り合いがかなり多いはずの葵が カトレヤ を離れたシュウトの所属ギルドを覚えていたことを意味していて、そこに気が付いてちよっぴり暖かい気持ちになる。

「とりあえず、ダーリンが帰ってきたら食事にするから。食べていきなさいね」

「ごちそうになります」

会話につまると、ご飯もしくはお菓子を勧めるあたり「おばちゃん的会話術」なのだろうという気がしたが、まだ死にたくはないので口には出さずにおく。

その後は現在のアキバについて根掘り葉掘り問い詰められ、シュウトが知らないことだらけなのが明らかになっていった。訊かれっ放しは良くないと思い、気がついたことで質問を返してみる。

「シブヤでかなり上手いソロプレイヤーって知りませんか？」

「それって何職？名前は？」

ガーディアン

「守護戦士 だと思えます。えっと、名前とかはちよつと。見かけたのが 大災害 の当日だったんで、脳内メニューの操作とか、まだ癖になってなくて」

身長や体格、外見で思い出せることをしどろもどろになりながら説明する。どうにも説明が下手だ。

「大きめのギルドはだいたいアキバに合流しちゃってるし、ウチの旦那でもない。とすると、んー、無所属の 守護戦士 かあ。直継くんとか？……あとはジンプーか、それとも」

「その直継ってどんな人です？」

「んーと、あんま喋ったことないけど、 放蕩者 の手錬戦士くんだよ。」

「 放蕩者 、ですか」

放蕩者の茶会。

シュウトとは活動時期が重ならなかったためにあまり実感はないのだが、 シルバーソード にとっては重要な仮想敵のひとつだった。 西風 の“ 剣聖 ”もそうだし、今回の 円卓会議 を仕掛けたのだから 放蕩者 の出身者なのだ。既に自分が シルバーソード を離れているにしても、 放蕩者 の名はシュウトにとってあまり良い気分のする相手ではない。

もう一人の候補者について質問しようとしたところで入り口のドアが開く音が聞こえた。旦那さんが帰宅したのだろう。

「おかえりなさい。おなかへつたよー！」

「ただいま……………おお、これはどうも、いらっしやい」

「お邪魔します」

レイシンは 狼牙族 の 武闘家 ^{モンク} で、引きこもりの嫁を食べさせるためにソロや傭兵をやってお金を稼いでくる出来た保護者だった。いつも留守にしているから、シュウトは会って話をするのは初めてだった。なんとなく見覚えがある様な気がしたが、外で戦って

いる時にたぶん見掛けているのだろう。

名前のイメージだとクールな拳法使いなのだが、話してみると温和そうなのんびりした人らしい。

「じゃあご飯作るから火を入れてよ。……って、お茶も出してないの？」

「あー、忘れちゃってた。というか、色つきのは全部飲んじゃった（笑）」

（なんとという適当ライフ。きっと、お土産無しが正解ルートに違いない）

葵はカウンターの内側に置いてある箱をがしやがしやとまさぐると、「粗茶ですが」とただの水を注いで寄越した。何が粗茶だが、詐欺罪で捕まればいいのにも思いつきながらも、本人としては礼儀正しいつもり シュウトはありがたく木製のコップに口をつけた。

「あ、……冷たい」

「ふっふーん。即席のクーラーボックスだよん。どうだ、まいったか」

「参りました。……ってことは？」

「そ、なんと氷の精霊も召喚できちゃうのだ。これで夏場の冷房もばっちり！」

「「おおー」」

旦那さんと一緒に合いの手を入れてみたりする。一連の冗談のやり取りはともかく、冷たい水にはちよつと感動する。今のアキバならばどこかで売っていると思うが、大災害以降、水は常温で飲むのが当たり前になっていたし、味がついたのだからってごく最近の話でしかない。冷たいなんて完全な不意打ちだった。冷たい水を飲み

たかったとしたら、例えば山奥のフィールドで湧き水が出るポイントを探るか、どこかの川の上流まで行くしかなかっただろう。そんな手間をかけようと思ったことすらなかった。

「にゅふー、ドマイナーな下級精霊だけど、可愛かったから欲しかったの！どうよ、この先見性。さすがアタシ占い師。えっへん。もっとホメたたえぬわあさーい！」

「そんな無い胸そらして勝ち誇られても……」

かなり気分がほぐれたせいか、ついつい毒舌が出る。シユウト本人も悪い癖だと思っではいる。といっても言われた本人はまるで気にしたところはない。

「えっちな目でみないで！このばでいにダーリンはメロメロなんだからねっ」

葵はキャラの定まらない口調で思いつく限りの台詞を吐き出すのみである。

「……んなわけあるかよ、っと。ただいま。」

いつの間にか、後ろにもう一人、今度は ガーディアン 守護戦士 が入って来ていて、荷物を降ろしながらツツコミを入れていた。

(あ……れ………?)

「ジンぷーお帰り。遅かったじゃん」

その人は、あの日の戦士、その人だった。

03 青との出会い

あの日の戦士がすぐ近くに立っていたが、シュウトの気持ちは中途半端なものだった。驚いたり慌てたりは出来なかったし、冷静に受け止めていたわけでもない。「何故ここに？」と思いながらも同時にどこか腑に落ちもしていた。

大災害 当日の混乱していた状況の中でごく短い時間、こちらから一方的に見かけただけの相手だ。それなのに、当人を前に疑っていない自分がある。むしろ出会いたくはなかったかのように「本人ではない理由」の方を探そうとしていた。

「ああ、帰りに シンジユク御苑の森 に寄ってきた。だけどあそこの敵ってレベル74なのな、経験値入んねーし」

「言っとけば“ポット”渡しといたのにい、ってアンタ、ソロで平気なの？」

「ん、まあ、なんとか？」

「なぜに疑問形か」

慌てて脳内でメニューを操作する。名前はジン、よく使われていそうな名前だ。レベルは80で、ちょっと意外な感じがする。てっきり一線級のプレイヤーだろうと思っていたのだが。そして無所属。カトレヤ のギルドメンバーじゃないということだ。それでも顔つきや葵への態度から、中の人の年齢は30歳を超えていそうだった。

「で？」

「で、って？」

「いやいや、こっちの彼は何者だって話だろ」

シュウトは自分の話になったことにドキリとする。ジンはそのままシュウトの隣に座った。なんだか落ち着かない。空気みたいなものが違う気がした。まるで自分が新人冒険者にでもなったみたいに身構えてしまうのだ。この異世界に叩き込まれてから今まで見てきたどんな 冒険者 とも違った。“何か”が決定的に違っている気がする。

「そりゃもちろん、我が カトレヤ 期待の新戦力っしょ！」

「へー、そっか。……じゃあ、よろしくな」

「はい、こちらこそ……って、ちよっ！」

いやいや、カトレヤ に入りに来たわけではないし、そんな話だっと思ってない。もちろん、そんな気もない。無いよ。無いハズだ。………無い、のか？

「ん、ダメなの？いいでしょ？ ってか、いいよね？」

「え”っ!？ いや、まあ、……」

「どっちなよ！もう、ハッキリしなさいよ！あんだ、チ ポついてんでしょ!？」

なぜか怒られている。おかしな展開だった。しかしシュウトがプレッシャーを感じていたのは、隣に座った戦士の視線からだったりする。ありもしないプレッシャーに焦ってしまっているのだ。

「……………それじゃあ、しばらく、………だったら」

しどろもどろになりながら、良く分からない文字列を口から吐き出していた。

「……………Yes!」

葵のかなり派手なガッツポーズが決まった。

畳み掛けるような葵の言葉と、隣に座っていた戦士の視線に怯んでついオーケイしてしまった。自分でもどっちでも良かったのかもしれない。行く当てのない不安もあつたかもしれない。久しぶりに話しをして カトレヤ に対する懐かしさも感じていた。それに、時折ここに立ち寄って挨拶していたのはギルドメンバーにならなかつた事に対する申し訳無さがなかつたとも、いえない。

「それじゃあ、改めて。カトレヤ にようこそ。……ううん、教えて言わせて欲しいの。『おかえりなさい』」
「は、はあ」

聖母のような微笑み。そして噛み締めるような「おかえりなさい」のセリフ。だが、流石に恥ずかしくて「ただいま」とは言えない。……というか、このちよつと感動的なシーン風なのは、一体何なのだろう。流れが速すぎて付いていくことができない。もしかすると、いい感じの音楽でも流れれば感動できるのだろうか？そんな要素がここまでの展開のどこにあるのやら？

「なんて素晴らしいの！……その少年は強くなって帰って来たんだもの。メジャー ーグの恩知らず共ではこうは行かないわ。あいつ等は行ったらそのまま行きっぱなしだもの！」

（な、なんだか色々な意味で危険なセリフを言い始めたような気が……）

「ああつ、まるでライオンが我が子を千尋の谷に突き落とすかのよう。そう、若者を狭い世界に縛り付けるのは良くないわ。広い世界

を体験することが大事ですもの。……でもそれだけじゃ完成しないの！鮭だって生まれた川に戻ってくるのよ？それなのに哺乳類ともあろうものが帰巢本能のひとつも無いだなんて、なんって、みっともない！……ううん、シュウト君は違うのよ？別に帰ってこなくても恩知らずだなんて思わなかったわ。でも帰って来てくれたのでしよう？ 私はただ、それがとっても嬉しいだけなのお〜！」

何かの魔法効果なのか、マークを振り巻きながらくると踊っている。葵の独演会はまだ続くのだが、実況はここまででいいだろう。

隣に座っていた戦士 ジンはカウンターの内側の即席クーラーボックスを勝手に開けて冷えた水を用意していた。その気安さからするとギルドメンバーではなくても、ここには入り浸っているのだろう。ただいまとも言っていたことを思い出す。

「まあ、よくわからんけど、オメデトウ」

「あー、ありがとうございます、ます」

「……来る場所、間違えたかもな」

「いえ、ダイジョウブです、たぶん」

シュウトが嫌っていた馴れ馴れしくてカッコ悪い人付き合いそのものだった。それでも今はコレでいいのだと考える。ゲームは現実の代用品に過ぎない。だから、ゲームなんかで人との繋がりを欲するぐらいなら、現実でやるべきなのだ。

（しかし、「この世界」はもはや僕の現実になった。だから、ここではコレが正しい。）

僕はまだ、そんな風に考えていた。

遅い昼食がそのままシユウトの歓迎会となった。

カウンター席からテーブル席に移動して料理を並べるのを手伝う。冷たいお茶で乾杯し、食事を堪能した。本日のメニューは鶏肉のトマト煮。1羽絞めているので量もかなりあったが、4人で綺麗に平らげた。正直、白いご飯を食べたかったのだが、アキバの街に突如として生まれた食料品の需要に対して供給がまだ追いついていなかった。お米もその中の一つで、全体に行き渡るにはもう2〜3日掛かるのだという。それでも収穫される秋まで待たずに済むのが凄い。生産ギルドの連中がどんな魔法を使ったのか全く分からなかった。

「精米の機械化じゃないかなあ」

「でもあれって収穫をメニューでやった時点でせんべいになりませんか」

「うみゆー、稲刈りと脱穀の2回をメニューでやってそうだしねえ」

「素材アイテムのままだからか？だけど玄米は“湿せん”かもな」
「そこで発芽玄米っしょ！」

調味料が足りないので狙った味にならないと謙遜していたが、レイシンの作る料理は本当に美味しかった。素材の質が問題になるので店売りのものは値段の割りにイマイチだから自分で捕まえてきたという。こうなってくると料理の世界も元の世界同様、奥が深くならざるをえない。

「ごめんね、本当は得意なチキン南蛮を作りたいんだけど」

「ダーリンのていけん（チキン）を食べたらほっぺが恋に落ちるぜ？」

「……豚とか鳥とか絞めたりサバいたりするのって、大変そうですね」

「はじめはね。でも慣ればなんとかなるよ」

「メニューから素材アイテムにできりゃいいのにな」

「スーパーで売ってるみたいに切り身のパックで出てきたり？ぐぶつ、ぐぶつ」

「まあねえ。でもマグロの解体は一度やってみたいかも」

最後にジンがアキバで仕入れてきた果物をデザートにした。果物は味のするアイテムとして品薄&高騰化していたが、相対的に価値が下がり、店に並ぶようになって来ている。買い占めていた連中が売りに出したのかもしれない。

「歓迎会なのにお酒が無いのは寂しかったかにゃ？」

「いいですよ、あんまり好きじゃないですし」

「お酒は料理に使ったりしたいなあ」

「そっぴや、俺ってこの体だったら飲めるかもだな」

「底なし冒険者でがぶ飲み大会とかやったら単位はきつと樽タルだね」

食事が終わり、（ものすごく意外なことに）葵がお皿を洗いに行くのを目撃して、シュウトは明日は大雪か、はたまた槍ラクナロクが降りそうな不安を感じていた。窓から外を眺め、神々の黄昏ラクナロクについて考えてしまう。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

ジンが話を切り出してきた。何を質問されるのかと急に緊張してくる。

「はい、なんです?」

「ま、そんなに硬くならんでいいから。あのさ、格闘技とかの経験は?」

硬くなるなど言っておきながら、聞いている内容は硬くなるようなものの気がする。

「いえ、全然です。武器の、弓のことをちょっとネットで調べたりしたぐらいで」

弓使いだと弓道の経験者かと聞かれることが多くなる。シューウトもゲームを始めてから多少は弓道に興味が出たりもしたが、弓道をやっている友人がいないので知識はネット頼みになってしまっていた。結局はゲームをやるので忙しいということなのだろう。

「ふうん、じゃあ暗殺者の弓使いか………それと、ミリタリーとか、サバゲー（サバイバルゲーム）とかは?」

「そっちも殆どわかりません」

そういつて苦笑いする。現実世界でのスキルが持ち込めるかどうかという話なのだろう。ゲームではシルバーソードでの経験がそれなりにあるが、実生活で戦いに関する何かを経験してはいない。なんだか認められていないような嫌な気持ちになっていた。一から頑張らなければならないのだろうと考える。

「そっか、それならいいんだ」

いやにあっさりした反応で、別に残念そうでもない。単なる確認という感じだった。それが気になって、ちょっと食い付いてみる気になる。

「でも、知識とかがあった方がいいんじゃないやありませんか？」
「ん？ ……いや、難しいところだからなあ。妙に頭が硬くなるヤツとかいそうだし」

（確かにそういう部分はあるか。知ったかぶりして妙に仕切りたがる傾向があったり……）

「現代の武道はモンスター相手には全くと言っていいほど通用しないだろう。基本が対人技術だからってのもあるが、具体論は練り直さないと使えないんじゃないかな。まあ、どこにでも例外はいるもんだが、その手の例外は5%もいればいい方だろうし。結局、剣道の経験があつて サムライ 武士 をやっているヤツとか、空手やボクシングの経験者で モンク 武闘家 をやっているケースは要注意だな。逆に格闘技経験者がやつてる魔法使いは良いプレイヤーが多い気がするんだがな」

これも一般論としてならそういう傾向があるように思う。シュウトの知っている 守護戦士 も最初の頃はすり足をやるうとして諦めていたし、剣道の経験から反射神経が良くなるといったプラス要素は感じられないそうだ。一方で良く組んでいた 妖術師 は反応が良く、視野の広い、欲しい所に手が届くタイプだった。しかし、空手の経験者がやっている 武士 に上手くて強いプレイヤーがいるのも事実だった。武道のどんな要素がプラスに働いているのかは外からは分からなかった。

「 レイド 大規模戦闘 をやるなら軍隊の知識は役に立つかもしれないけど、今の俺達にその予定はないし、君は……シュウトは シルバーソード に居たんだろ？」

「ええ、まあ」

「だったら レイド 大規模戦闘 に関しては俺より経験があるってことだ

な」

そういつて笑っているのをみて、少しホツとしていた。

「シユウくんは私のイチオシだよ？自信を持つておススメできる逸材に決まってるっしょ。」

洗い物を終えた葵が手を濡らしたまま戻って来ていた。

（いやあ、保証してくれるのは嬉しいけど、一緒に戦ったりしたのと無いんですが）

「とりあえず3人になったってことでいいんじゃない？」

「ああ。あと2人は欲しいな。」

レイシンの言葉に、ジンが頷いている。葵は戦力外のままにしておくのだと暗に告げていた。

「……何かクエストにでも行くんですか？」

このメンバーで2人追加したいといえば、回復職と魔法攻撃職だろう。この規模のギルドスペースの維持費と、日々の食料代ぐらいならパーティーまでは必要ない。

「んー、ちよつち知り合いの様子が何か変でね。それで様子を見にいかたりするといいのになー、つて。ミナミにいるんだけど念話しても要領を得ないっつーか。本人達も何が起きているのか良くわかっていないみたいで。」

葵の表情からは状況が深刻なのか、そうじゃないのか、良く分かんかった。

「ミナミですか、それは遠いですね……でも、そういう話って、何かあれば 円卓会議 で何とかするんじゃない？」

これは本心からではない。実際、立ち上がったばかりの 円卓会議がこのまま自治として機能するかなんてわからないのだ。ギルド同士の潰し合いの場にならないとも限らない。今のところ面倒なことを勝手に引き受けた自警団のようなものだが、大手ギルドが軒並み参加しているのだから規模的なメリットは大きいだろう。妖精の輪の周期確認が始まったでもない現状では、零細ギルドにミナミは遠すぎる。だから役割分担としては 円卓会議かれらのすべき仕事のように思ったただけだ。

「まあ、行く行かないはともかく、何かあった時のために最低限の準備を整えておきたいってのもあるんだよ」
レイシンがにっこりと笑って付け加える。

「そそ、アキバに移動したいのもあるからに」
でも外に着ていく服がないんだけどね、と葵が話をまとめた。

今日は解散し、明日もう一度 カトレヤ に集合ということになった。シュウトも荷物を置いてある宿に帰ることにする。部屋を貰ったので明日は引越したが、荷物なんて全て魔法のカバンに入ってしまったし、それ以外のものは貸金庫にある。置いてきた荷物というのも昨晚部屋を使った時に散らかしたままにしてあるものことで、宿賃を今日のみまで支払ってあるから戻るだけだった。

廃墟となったシブヤの街をオレンジ色の光が染め上げてゆく。この世界の空気はかなり乾いていて、風が心地好い。空腹を感じていないから、今日の夕飯は必要ないだろう。

(この分だとすぐにもアキバに戻ることになりそうだな……)

考え無しに出てきてしまったものだが、不思議と良い方向に動き始めた気がしていた。

しばらくの間だけ参加するという約束だったが、このままカトレヤ に入ってしまったてもいいのかもしれない。

シュウトは、なんとなく カトレヤ のギルドタグをつけている自分の姿を想像していた。

アキバに戻った時、零細ギルドのタグをつけている僕は、シルバースード の仲間達に見られて恥ずかしい気分になるのだろうか？と、そんなことまで考えている自分に呆れてしまう。

(重症だな……)

口元を引き締め、せめて真面目な顔を作っておくことにした。

階段を下りると、酒場のざわめきが聞えてきた。

シュウトの宿泊する 大地の鈴 は中の下クラスの「冒険者の宿」で、いわゆるポリゴン・データをコピーして作られていると言われても誰も疑問に思わない普通の宿だった。一階のフロアには食事場所を兼ねた酒場スペースがあり、二階は名ばかりのロイヤルスイートが用意されている。

シュウトはあまりにも暇だったので、街の外に試し撃ちしに行こうとしていた。

夕方の早い時間に宿に戻って来たものの、引越しの準備は5分で済んでしまった。大して散らかしてもいけないし、片付けにしても何も考えずにマジックバックに荷物を放り込めばいいだけなので時間の掛かりようが無い。その後、2時間ほど部屋でぼーっとすごしていたが、それも2時間が限界だった。

一度は誰かに念話でもしようかと考えてもみたのだが、思い止まる。「暇だから念話した」などと言われたら、自分だって怒ったかもしれない。

段々と魔法使いが呪文で眠らせてくれるサービスでもあればいいのに、と八つ当たり気味に考え始め、冒険者の身体は体力がありすぎるのが問題だという結論に至った。がんばったが眠れないのだ。

仕方なく、作った矢の試し撃ちをしようと思った。少し勿体無い気もしたが、また暇な時間に作ればいい。それでも自分のサブ職矢師に「試し撃ち」といった特技でもあってくれれば、作った矢を失わずに試し撃ちができるのに、と世を僂んでみるのだが、それにはまったく意味はなかった。

酒場のスペースには冒険者だけでなく、大地人も座って食事や会話を楽しんでいる。冒険者が少なくなること、大地人にも酒場を開放しているらしい。

シブヤでも食べ物の混乱はまだ始まったばかりだったが、この宿

でも具材を挟むだけのサンドイッチの提供は既に始まっていたし、飲み物も果物を絞っただけのジュースだって注文できた。シブヤから 冒険者 は消えつつあるのだが、もうしばらくすればメニユーが充実し、大地人が食事を楽しむ店になるのかもしれない。

酒場で火を分けてもらっている時に妙な噂を耳にした。なんでも衛兵を倒した 冒険者 がこのシブヤにいたというのだ。馬鹿らしい噂話なので、やはり周囲に相手にはされていない。衛兵達は都市魔法陣から力を得るムーバル・アーマーを装備している。大半の特技も効き目がないが、そういったレベルの問題と言うよりも、違反プレイヤーに対してペナルティを科すためのシステムの一部なのだ。それは戦って勝つ対象ではない。

それでも部屋に居るよりは酒場でそんな馬鹿話でも聞いていた方がマシだったかもしれないと微笑ましく思った。

街を出て近場のゾーンで場所を探す。多少モンスターが出てもいいのでプレイヤーに遭遇しないことが絶対条件だろう。しばらくランプを持ってウロウロと彷徨う。30分ばかり歩いて、それなりに具合の良い場所を見つけることができた。ここなら今後も使えるかもしれない。

どうやって試し撃ちをするかでしばし考えてみる。

標的がないと格好が付かないのだが、ま的を自作するのはいかにも面倒だ。果たして家具のレシピにそんなアイテムがあったらどうか？アキバに行った時に探してみるのもいいかもしれない。ダーツ用

的ぐらいならあっても不思議ではない。

手頃な木にショートソードで刻んでしるしを付ける。胸の高さにひとつ、頭の高さにもひとつ×印を付けておく。

15歩ほど数えながら離れてみて、更に8歩ほど下がる。

(これで、だいたい20メートル、かな……………)

地面に足で線を引き、的の近くまで戻ってランプを置いた。まだ20時になる少し前だが、周囲はとても暗い。シュウトが立っている今の場所にしても木々に遮られる事なく夜空が見えてはいたが、電気などの街灯の無い世界での闇は濃かった。暗殺者 としても暗視 の特技を持つてはいるが、それで多少の夜目が利くと言っても、深い暗闇に対する潜在的な不安や恐怖心を克服するのは難しい。

まず通常の矢を番えて、胸の高さ的に向けて射る。右に3センチほどズレたが、20メートルの距離ならば十分な精度だろう。もう一度、今度は顔の高さに向かって射る。今度は下に少しズレた。悪くない。

次は本番だ。鏃を変えた自作の矢を番え、胸の高さの×印に向けて狙いを付ける。柔らかなランプの灯りに照らされた標的を強く見据えると、集中が増すほどに周囲の音は遠ざかっていった。あまり考え過ぎないように身体に狙いを任せるのがコツだ。魔法のショートボウが震え、矢が吸い込まれるように標的の中心に当たる。ズドンと重い響きが耳に心地好い。

小走りで確認に行く。みれば自作の矢は他の矢よりかなり深く突き刺さっていた。命中精度も高いし、威力も確認できた。実験と

しては大成功だろう。勿体無いが、もう2〜3本試し撃ちするべきだろうか、と逡巡する。

「よっ、自主練か？」

突然の声にゾクリと緊張が走る。振り返ると片手にランプを下げて
ガードイアン
守護戦士 が近付いて来ていた。

「上手い場所を見つけたな。ここならPKに襲われにくい」

のんびりとした口調が緊張感を削ぐようにしていたが、油断はせず、顔が見えないので脳内メニューで名前を確認する。

「ジンさん……よく分かりましたね」

知っている相手だったことに安堵し、肩の力が抜ける。同時に何故ここが分かったのかと疑う。偶然だけで辿り付くのは難しい場所だった。

人の少なくなりつつあるシブヤでPKの危険は減っている。しかし逆に言えば人が減っているせいでPKの成功率は高くなってしまふ。無差別のPKは待ち伏せが基本になるため、シブヤへ向かうプレイヤー、もしくはシブヤから出てくるプレイヤーを狙うことになるだろう。そうなると人の通らない場所は待ち伏せのポイントに向きになる。これらの条件を考慮しつつ、シブヤ周辺のゾーンを探して見つけた場所なのだ。モンスターならともかく、偶然で誰かに見付かるとは考えにくかった。

「いや、後をつけたりしたわけじゃないぞ。こんな場所だろ、一人でなんかしてるヤツがいるなーと思ってさ」

シュウトの声に疑いのニュアンスが混じったのだろう、ジンは少しばかり説明を付け足した。外からランプの明かりが見えてしまっていたのかとシュウトは解釈したが、何か違和感が残る。問題はな

いと考え直し、気にしない事にした。

「見たら期待の新戦力君だったから声でも掛けとこうか、ってな」
「……………自作の矢を、試してたんですよ」

的にしていた木の所まで近付いて来たジンに矢を自作したことや実験結果などを一通り説明してから矢を引き抜いた。深く刺さっていて再使用はやはり難しいようだ。足元に捨てて放置しようとしたが、考え直してマジックバツクに突っ込む。ゴミがどうかよりも、人が活動した痕跡をあまり残したくない。木には傷跡が残ってしまったてはいるが、またこの場所を利用した時に誰かに待ち伏せされる危険を少しでも減らすべきだろうと考える。

昼に知り合ったばかりの相手と会話が長く続くとも思えず、シユウトはさっさと退散しようとした。試射は成功だし、今日はここまですで充分なのは本当だろう。しかし挨拶して帰ろうとする前に呼び止められてしまった。

「ちょっと頼んでいいかな？」

「何でしょう」

「俺に向けて矢を撃って欲しいんだけど」

「はぁ？……………なんでまた」

「手で掴んだり、剣で弾いたりしてみたいんだが、……………あー、もし弓使いのプライドとかがアレならいいんだ」

「……………いえ、いいですよ」

一拍おいて了承する。そういうプライドが自分にあるかどうか考えたことも無かった。大災害からはPKに遭遇したことはまだない。単純に人に向けて撃つのが面白そうだと思ったのだった。

「じゃあ、いきますよ!」

「いつでもいいぞー」

20メートルの距離から矢を番え、弓を構える。ジンは素手で弓を掴み取ると言って右手には何も持っていない。だが鎧はつけているし、左手には盾もある。シュウトにしてもこの状態なら2〜3発命中しても死ぬことはありえないので気楽なものだ。

よく「心臓は左胸にある」と言われることがあるが、実際には殆ど中央に位置している。真っ直ぐに胸の真ん中へ向けて、つまり心臓を射抜くつもりでシュウトは矢を解き放った。

ジンは軽く手首を振るようにして矢を掴んでいた。握力で手を握りこむスピードは考えられているよりも遅いため、そのままでは矢を掴みにくい。このため手首のスナップを利用して高速で手を握らせているのだった。

「よしよし。上手くいったな」

「一回で成功しちゃいましたね。それって矢を掴む特技なんですか?」

呑気に喜んでいるジンに小走りに駆け寄ってシュウトは声を掛けた。

「いや、ガーディアン 守護戦士 にそんな特技は無いだろ。モンク 武闘家 にならあるかもしれないけど。まあ、思ったほど難しくないみたいだな。」

「そういうもんですか」

「冒険者の身体だと目も反射速度も段違いだからな。まあ、戦ってたらこんな風に集中はできないから、単なるお遊びでしかないんだけど。それに……………」

「?」

急に言いよどむ。何か言いにくいことなのだろう。気になるので先を促す。

「構わないので、どうぞ」

「んー、……一つは、今の矢ってそんなに速くないよな？」

「ああ、そうかも知れませんか」

矢の速度は瞬間的に秒速90メートルにも達するという。その場合は時速300キロを超えている計算なのだが、今は通常の矢を使用し、特技も使っていない。そうになると時速で200キロを少し超えるぐらいの速度かもしれない。シュウトの使うアーティファクト級の魔法のシュートボウなら特に努力せずとも、普通の弓よりは初速が出せるだろう。それでも時速200キロ程度であれば、現実世界でもいくつかの球技で経験できる速度でしかない。

「もう一つは、射る時のタイミングが指の動きで分かり易かった」
「なるほど……」

視力が高いので、矢を離す時の指の動きが見えてしまうという。それは仕方がないことだった。暗闇の中で射ればそもそも矢自体が見えないことになってしまう。

ジンはしばらく考え込んでいたが、

「なあ、弓を持つ時ってどうやって持ってる？」

「えっと、僕はピンチ式っていう……」

弓の番え方は3種類あると云われる。

まず地中海式。これは弦つるを人差し指・中指・薬指で引くものだ。矢は人差し指と中指の間に挟むようにし、弓の左側に矢を番える。2本を同時に射る「束ね撃ち」の特技を使う場合は自然にこの持ち方になり、2本目を中指と薬指の間に挟むようになる。

次に蒙古式。これは親指で弦を引き、矢は弓の右側に番え、指で握らずに乘せるようにしながら人差し指で弓に押し付ける風にする。

日本の弓道もこれに分類され、特に「ゆがけ」と呼ばれる専用の防具を使用し、高い命中精度を誇っている。

最後がシュウトの選んだピンチ式。番えた矢を指で持って弦を引く方法で、未開の部族にみられる使い方とされている。感覚的に分かり易いのが利点なのだが、矢を触ってしまったために命中精度は落ちる。現実ではあまり強く弦を引くことが出来ない方法らしいが、冒険者には筋力があるので問題はない。

乱戦になりがちなモンスターとの戦闘中に「しっかり構えて、ちゃんと撃つ」ような余裕はない。籠手に「ゆがけ」自体は存在していたが、右手の親指が固定されてしまったため、矢以外のアイテムを取り出したり、近接武器に持ち替えたりすることは出来なくなる。万一の可能性も考え、シュウトは蒙古式（日本式）は諦めていた。

「俺も弓道に詳しいわけじゃないんだが、能動的な離れは“はなし”で、受動的な離れが“はなれ”だと思っただよ」
何かの本で読んだ話らしい。

シュウトは親指・人差し指・中指の3本で矢を掴んでいる。矢を離す時に指の些細な動きが命中に影響してしまうため、この3本の指を同時に離すようにしていた。人間には難しくても、冒険者の身体はこの手の無茶が利くようで、繊細な作業だったが特に問題にならずにこれまでやってこれた。

しかしジンの言っている事は、その指を放す作業自体の能動性が発射タイミングを相手に教えてしまうということを意味していた。

「それって弦を強く引いて、指をすっぱ抜けさせろってことですよ
ね？」

弓道の論理では「会」が十分となる前に「離れ」てしまうことを「早気」と呼ぶが、シュウトにそこまでの深いこだわりはない。

「とりあえず、いつペン試してみてください」
「どうやら自分に向かつてもう一度矢を射てみるということらしい。
シュウトは線を引いてある所まで戻った。

「いつでもいいぞー」

20メートル向こうでジンは剣を上げて合図を送っている。今度は剣で矢を弾くつもりだろうだ。

(ええつと、どうすればいいんだ………?)

シュウトは矢を番えると、戦闘モードに入った。自分の意識が少し後ろに下がり、瞳から光を消すような状態だと本人は思っている。精密な作業なのだが身体に任せてしまえば成功することは多い。矢を掴む指先の力を必要最小限に抑える。魔法のショートボウが強く引かれ、十分なエネルギーが生み出される。それでもシュウトは弦を引き続けた。

「のわっ、た!」

バキン!と強い音が響いて、ジンのシールドに矢は弾かれていた。反応が間に合わずに盾で防いだらしい。シュウトには指先から矢が離れる瞬間が分からなかった。手の中から矢が消えたと感じた時には既に矢は飛んでいた。それほど自然に矢は離れたらしかった。同時に不思議な虚脱感がある。ステータスを確認してみたが、MPが減っている様子もない。どうやら特技を使ったわけではなさそうだった。

「どうやら上手くいったみたいだな。出所が全く見えなくて、気付いたら矢が当たる寸前だったよ」

「ちよつとこれ、練習したいんですが」

「おう。俺はパスな、……………肝が冷えた」

シュウトはさっきの感覚を忘れない内にと練習を始めた。2〜3回で大体の感覚を掴むことが出来た。この受動離れは今までの能動離れと命中精度の点でも殆ど差がないため、実戦でも十分に使えるようになった。

それからも10本以上矢を射てみたのだが、しかし先ほどの虚脱感は今も現れず、そこだけを不満に感じていた。

「上手く行きそうだな」

「ええ、問題なく使えますね。ですけど、どうも最初の時の感覚にならなくて……………」

残念だが、どうやら自分の気のせいだったか？と思いはじめていた。

「ふうん。だけど、感覚の再現はタブーだぞ。なんというか、自己ベストを目指さない」と。

(そういうものか……………)

更に何本か試し撃ちを続ける。

風を斬る「シュ」という音が聞えたのでジンの方をみると、手持ち無沙汰なのか、その場で剣を持たずに素振りのようなことをしていた。シュウトは目聡く小さな板らしきものを握っているのに気付いた。歯のようなギザギザが見える。

(……………櫛？)

ジンは髪を梳かす櫛を握って素振りをしていた。アーチのない、真っ直ぐな櫛。手の先から見えている部分は小さなナイフよりも更に短く、5センチ程度しかない。

「ジンさん、もっと重い物で素振りしないと意味がないんじゃないですか？」

変な人なんだなという感想を抱く。櫛で素振りをする人はシュウトにとつて十分に変な人だった。

「……………素振りは筋トレじゃないよ」

一回一回を確認しながら振り下ろす。

「もっと重い武器も試してみたけど、筋肉自体は負荷を掛けても変化しないらしい。レベルでステータスが成長するのに合わせているのか、固定されてる感じだな。逆に言えば鍛えられるのなら、衰えるって意味かもしれないな。」

「……………鍛えても強くないのなら、意味がないんじゃない？」

シュウトの疑問はこれだろう。練習するよりもモンスター相手に戦って経験値を稼ぐほうがいいのではないかと思う。シュウトはともかく、ジンはレベル80。あと10レベルは高められるはずだった。

「“点”に面積や体積が無いって話を聞いたことないかないか？」

「え、ああ、そんな話を聞いたことがあるような……………」

突然の話題に困惑するものの、中学か高校の授業で誰かが言った気がした。

「同様に、“線”は幅を持たない」

また一度、櫛を振り下ろす。ブレることなく、真っ直ぐの軌跡を描いている。手を止めると、ジンはシュウトの方へ向き直った。

「コレな、重い武器の方が安定するからやり易いんだ。本当ならば」

ラスチックの安っぽい定規が良かったんだけど、手頃で代わりになるもので、櫛ってだけなんだよ」

戦闘用ナイフ（ダガー）に持ち換えると、木に向かって技を繰り返した。基本技のクロス・スラッシュだろう。刃先をほんの少しだけかすらせ、木に十字の傷跡を刻んでいた。

しかし、シュウトの目には特に違いが感じられない。仮に違いがあったとしても、他の守護戦士と同じことをしてもらって比較でもしてみなければ気付けないだろう。

（そもそも、何のための努力なのだろう？ 方法も能力も同じならば、結果は同じになる。……結果だけを変えることなんて、出来るのか？）

数値範囲上の行為を、数値以上のものにする。シュウトの脳裏に「アート」という単語がひらめく。

「なんだかアートな話ですね」

思いついた言葉を口に出す病とでも言うのか、とりあえず言うだけ言ってみたが、それを聞いたジンは苦虫を噛み潰したみたいな顔をするのみだった。シュウトは我が国におけるアートの夜明けは遠いのだと思わずにはいられなかった。

04 酒場にて

アキバの街につくと、さっそく中央広場の近くにある酒場へと向かう。

葵が念話をしまくってパーティを組む相手を決め、今日はその待ち合わせだった。相手の希望もあって個室を利用して合流する手筈になっていた。店員に カトレヤ の名を告げると個室へと案内される。

約束の時間より早めに部屋に入ったつもりだったが、ドアを開けると既に先客があった。2人組の女の子で、鏡で顔をみたりしていたようだ。レイシンが挨拶する。

「どうも、遅くなって申し訳ないです。」

「いえ、大丈夫です。よろしくお願いします」

(うげっ)

それがどうも、ちょっと見覚えのある顔だったりする。

3人でぞろぞろと中に入り、席に座ろうとする。年齢的にも立場的にも一番後ろからついて来たシュウトは、ちよつど良く遠い位置に座れると思ったのだが、ジンに真ん中に座るように促されてしまった。シュウトもレイシンも比較的軽装だが、鎧姿のジンが中央なのは座りにくいからだろう。真ん中に座ったことだと思いつきり目が合ってしまう。

「あ、銀剣のシュウト」

「え？ 誰？」

「ほら、シルバーソードの」
「あー、ユミの……」

「なんだ、彼を知ってるんだ」
レイシンがちょっとホツとした感じに微笑んだ。

向こうもどうやらシュウトを覚えていたらしい。面倒なことになったと思い、溜息をそつと漏らした。

女子には 冒険者 としてのレベル以外にも別の格付けやランクみたいなものがあるらしい。彼女たちはその中でも上位ランカーに属する、いわゆる「リア充」を地で行っているタイプだった。あちこちのギルドでクエストに潜り込んでハ冒険者をやっている。

シュウトは苦手なのであまり話さないようにしていたが、ゲーム時代から シルバーソード で何度も一緒に フルレイド でクエストをやったことがあるし、 大災害 後も彼女達は傭兵と呼ばれて戦闘に参加していた。

シルバーソード 以外にも D・D・D や ホネスティ 西風の旅団 、それどころかレベル制限のある 黒剣騎士団 にも潜り込んでいたはずだ。しかも、どこへ行っても彼女らはチャホヤされているようで、「リア充がゲームなんてやってんじゃねーよ!」とか「男漁り」だの「ビッチ」だの汚い陰口も聞いた事もあった。

しかし、クエストのメンバーとして誘う方もどうかしている。結局はオフで合コンに誘うために優先してメンバーに誘っているのだろ。2人ともかなりの美人だと噂に聞いていたが、 大災害 があって、その噂が事実だったと確認される形になっていた。

シュウトを知っていたのは赤い髪の吟遊詩人バードの方で、名前はニキータ、レベルは84。男装の麗人風のスタイルで戦うので、周りからは「王子」と呼ばれている。しかし今は女性らしい服装をしていて、なんとも理知的な「お姉さん風美女」にしか見えない。

もう一人の茶髪はクレリック施療神官で、名前はユフィリア。レベルは78。戦闘時は戦う気の無さそうなデザイン重視の装備という印象だった。ニキータの「王子」に対して「姫」と呼びたがるヤツもいるのだが、シュウトの知っている範囲では半妖精ハーフビクシーと言えれば彼女の事として意味が通じていた。それがなんとモ的確な表現で、妖精の冷たく整った容貌に人間的な優しさや暖かさが加わった感じを上手く言い当てていた。どちらかと言えばボーイッシュな話し方をするタイプで、その話しやすさも人気の理由になっているようだ。

(……………気安く話しかけてくるんだよなあ。)

シュウトが最も苦手とするタイプの冒険者だった。

飲み物を注文し、最後の一人が来るまで雑談しながら待つ流れになった。これがまた合コンをしているみたいな雰囲気だったりするので、どうにも気詰まりでならない。なんで個室なんだろうと嘆息する。しかも自己紹介の流れになって余計に合コンめいていた。果たして、こういう状況の居た堪れなさに慣れることはできるのだろうかと頭を抱えたくなくなってしまった。

昨日の話し合いでミナミへの偵察は無期限延期になっていた。ジンは適当に人を集めてさっさと出かけようと思っていたらしいが、シュウトが反論した。遠征するには準備が大幅に足りていなかった。

た。

ゲーム時代ならともかく 大災害 を経た現在、フェアリーリング 妖精の輪 は
周期が分からないために使えない。つまり遠征とは飛行機ではなく、
車で旅行をするのに近い感覚のものになっている。使うのは馬なの
で車よりも更に悪い。

現実でも同じだが、海外などへ行く長期の旅行の場合、気心が知
れている相手でも旅先で仲違いすることがある。その辺りの相性だ
とか、人間性、信頼関係、役割分担などが掴めていないと遠征は失
敗し易いのだ。

それならばいつそ傭兵を雇うことも考えたのだが、本物のプロな
らともかく、学生がゲーム感覚で傭兵をやっているのが現実だつた
し、ゲーム時代ですら優秀な傭兵は引く手が数多あまたなのであって、長
期的に拘束するのは難しいと思われた。何がしかのクエストに出る
のでなければ、金を積む必要もあるだろう。

ちなみに専門的な傭兵達の場合は、気に入らないことがあつたり
面倒になると適当なことでイチャモンをつけてから帰還するように
なる。ただ帰還したいだけであっても、決して自分の都合ではない
とアピールするのだ。これはそのギルドとの縁を断たないためでも
あるのだろうし、優秀な傭兵がなんでも言うことを聞く従順な奴隷
ではない事を、雇い主側に再確認させるためにもしばしば行われて
いるようだった。

イチャモンをつけて帰還されてしまえば、リーダーとして統率力
が無いと周囲に判断されることになり、言うことを聞かないプレイ
ヤーが出たりする。パーティリーダーの向き・不向きはこういうこ
とを含めて自然と抽出されていくものかもしれなかった。

それから 大災害 の後では女の子が混じるのも厄介な問題を引

き起こした。6人でパーティを組んでいると、特に女子とのパワーバランスが色々な意味で難しく、一言では言えないぐらい面倒なものになった。会話などで「接待」が必要だったり、慣れてなければ逆に接待しすぎたりもする。それ以外にもまだ着かないのかだの、トイレだの、寝る時怖いだの、その要求は数え知れない。もちろん、色恋沙汰みたいな基本的なものもあるし、男性側にしても人間的な欲求の問題が大きくなってしまう。

このため 大規模戦闘^{レイド}の方がやり易くなるぐらいだった。各小隊の女子が集まって適当に喋ったり寝たりしてくれるようになるため、余計な手間がぐっと少なくなる。裏で密かに「女子組」などと呼ばれるこの戦法に至ってからは、戦闘ギルドでの女子の稼働率が格段に良くなっていた。こういう背景から自由が利く女子の傭兵は人数調整に重宝がられている面もある。

そんな事情からシュウトが反論し、まず「信頼できる仲間を集める」のところから一つ一つ手をつけて行く事になっていた。ジンに「信頼できる仲間を集める方法なんてねーだろ」と突っ込まれたが、葵が「人間関係で手間を惜しむのはジンプーの悪い癖だよ」と言ったことで決着がついた。

シュウトとしても 大規模戦闘^{レイド} 経験者として言うべきことは言ったという満足感があつた。

その後、葵があちこちに念話して相手を決め「かなりの切り札を切った」だの「期待していい」だのと言い、今日のこの場に至ったわけだ。

（切り札がどのと言っておきながら、初っ端からかなり大きな爆

弾を用意していたというわけだ。今の状況で女子の2人組とかありえんだろ。本当に何を考えてるんだか、あの人は……」

シュウトは心の中で葵に対する不満を爆発させていた。

その時レイシンは長期的に組める相手を探していると云ったこちらの事情を説明をしていた。

「あれ？いきなりそんな風にもっていつちゃうんですか？」

あまり組みたい相手ではないはずなのに、なんだかハラハラしてしまう。その2人を長期的に拘束するのはまず無理な話だろう。周囲の男達もあんまり許さないような気がする。

「あー、ところでさ、葵とはどうやって知り合ったの？」

見ていられなかったのか、ジンが口を挟んでいた。

「えっと、面白い占い師がいるって話で、シブヤに行った時に見てもらったんです」

雑談することにしたようだ。シュウトは苦手なのでこういう役回りには是非ともお任せしたいと考えている。

「そっかさっか、アイツ戦闘出ない引きこもりなのに異常に知り合いが多いからさ」

「そうですね、女の子の間でかなり噂になってましたから」

見ていると、ニキータはさり気なく座る向きを変えてジンの方向き直っていた。どこか笑顔のバリアみたいなものがあるように思える。

「で、占ってもらってどうだった？ インチキ占い師じゃなかった？」
「えー、それは、どうでしょう？」
「やっぱりインチキっぽかったんだ？」

ちよつと困った風の赤毛女ニキータにジンはニヤニヤ笑いながらツッコミを入れる。レイシンの前では流石に遠慮があるのかもしれない。

「でも、話してたらすっごい面白い人でそれで私達仲良くなったんです」

硬めの話ではダンマリだった茶髪のヒーラーが話に混ざり始めた。そこからは良く喋った。女の子はどうでもいいことばかりどうしてよく喋るのだろう。

「……………なんです！」

「とか言って、本当は……………」

「違いますよ！アハハハ」

どちらでもいい話ばかりなので半ば聞き流していた。

ジンさんって、意外に如才ないんだな。

ユフィリアが話し始めたことでニキータは一息つくことが出来ていた。

シユウトが興味の無さそうな顔をしている。たぶん話を聞いていないのだろう。一方でユフィリアは生き生きとしている。相手をしている守護戦士は自由に喋らせようとしているらしい。ユフィリアは天然そうに見せてもアレで警戒心が強く、相手の人品を見ている

ところがある。ただ、お喋りだから誰とでも仲良くする部分があるだけだ。

(悪くないかもなあ……)

ユフィリアと2人きりという今の状態は厳しかった。ニキータは大災害 からこっち、ずっと必死にやって来ていた。彼女にとつてこの世界は厳しかった。それはたぶんユフィが考えている以上に彼女はどうかして2人で生きる道を模索しなければならなかった。ゲーム時代はともかく 大災害 後にあちこちの大手ギルドに参加したのはコネ作りをするためだったし、重要な情報から取り残されないこと、それに逃げられる場所を確保するためだった。実際の戦闘に参加してみるとその激しさに目が眩むようだった。ユフィリアは案外楽しんでいたかもしれないが、ゲームではありえないその緊張感に張り詰めた糸が切れてしまいそうになることもしばしばだった。

今では 円卓会議 が結成され、食事が安定して確保される見通しが立って来ている。しかし、これで2人は何処かに落ち着かなければならないだろうと感じていた。人間なのだ、食事の欲求が満たされたら、次は性的な欲求を満たすことを目指すだろう。ゲームをしている男の子達は奥手で、正義感の強い人間が多いが、自棄になったり、衝動的な行動に走らないとまではいえない。自分達にとつては99人が大丈夫でも、1人の例外がいたらダメなのだ。今となつては、あちこちに良い顔をしすぎたかもしれない。他のギルドに取られまいとする勧誘が強まって来ていた。

やはり人数の多い D・D・D か 海洋機構 にするべきだろうかと考えてしまう。女の子の数からしたら 西風の旅団 も面白そうだが、あそこは別の意味で居心地が悪い……。そんなこと

を考えていた時に今回の話が回って来たのだった。極端な小規模ギルドならギルド内での恋愛に気を付ければ安全だとも言えるし、揉めた時にギルドから抜け易いのもメリットだろう。葵の顔を立てておきたいのもあったが、実はレイシンのような結婚相手がいるのがプラス要因だと思っていた。それでも今回のこれは決断を先延ばしにするための口実でしかなく、単なる現実逃避なのだった。

（ユフィだけは、私が守らないと……）

ユフィリアはこのゲームをやっていると云ったら真似して始めてしまった可愛い後輩だった。その結果、今回の大災害に巻き込む事になった。ニキータが気を張ってがんばれるのは、ユフィリアに対する責任があるからだ。

（そういえば……）

銀剣のシュウトは大手の戦闘ギルドである　シルバーソードを辞めてしまっていた。

（彼が「ここ」にいるのはどうしてなのだろう？　シルバーソードの内部で私達の知らない何かがあったのだろうか。彼が　シルバーソード　を抜けて「ここ」にいるのだとしたら、なんだろう、何か意味があるのかもしれない。例えば………何か中立的な意味合いのようなものがあって、それは私達にも有利に働いたりするものだったりもしないのだろうか？）

それはちょっと都合の良すぎる考えかもしれないと思い直して自重する。

（女の子達には睨まれるかもしれないしね）

見れば、やはりシユウトは整った顔立ちをしていた。女の子達に人気があるのも頷ける。ニキータより二つ、三つ年下だろう。女子にそっけない態度がクールだなんて言われてたりもするが、単に興味が無いのだろう。しかも彼女達のような人付き合いの良いタイプは苦手なはずだった。入って来たとき「面倒は嫌だ」と顔に書いてあるのもちゃんとチェックしている。

(だけど、……………ユフィを好きになる、かな?)

「だけど、男所帯に女の子2人で大丈夫なのか？」

考えにふけっていた意識が会話に引き戻される。このジンという戦士はストリートな物言いをするようだ。そんなに口が立つわけでも無さそうだが、それはこの場合、信頼しやすいというプラスの要素かもしれない。

「大丈夫ですよ、慣れてますから」

「え？ ニナ、いいの？」

その言葉に頷く。ユフィリアが意外に思ったのは、大災害後は女子のいないパーティに参加したことがない事を言っているのだろう。言葉にして言ったことは無かったが、彼女もやはり気が付いていたようだ。

ユフィリアは案外ノリ気のようにだった。シユウトの表情は曇っているのだが、そっちはイジワルしなくなるだけだ。

「それじゃあ、一度どこかに出かけてみて、」

ジンという守護戦士が瞳を覗き込んでくる。

「様子をみて、で、いいですか？」
言葉を引き取って、紡いだ。

「ああ、それで……いいよな？」
「いいんじゃない」

レイシンが頷いて、大体の方向性が定まる。次はどこらに出掛けるかを決める番だった。目的地が無いのはマイナスな気もするが、今は仲間集めが彼らの目的なのだろう。希望する行き先がないかと問われたところで、ジンが呟いていた。

「……お、来たな」

(え?)

ドアを開いて最後の一人が現れた。

「すみません、遅くなったみたいっスね」
「あー、いしくんだ！」
「どうもっス」

遅れて現れたのは微妙に有名な 冒険者 で、こちらもシユウトは知っていた。石丸というドワーフ族の 妖術師 ソーサラー で、古参のヘビープレイヤーなのだが、弄られキャラ扱いされていた。小馬鹿にされているのに、本人はまったくそう思っていないらしい。会話が中途半端に通じないタイプという印象がある。本人によれば、ドワー

フが一番かつこいいのだそうで、ドワーフと 妖術師 の組合せが最高だと考えているのだった。

大災害 で本人の顔付きが反映されるようになってからは、つぶらな瞳におちよぼ口となつてしまい、豪快な作りのドワーフ族男子の顔立ちと少しばかり矛盾していたが、流石にブサイクというわけではなく、可愛らしさが増した印象になっていた。以前から女の子達に構われる所があったが、この件で更に可愛いと言われるようになって「可愛いなんて心外っス」とムキになっている。

「どうもご無沙汰してるっス」

これはジンやレイシンに向かつて言っているような感じだった。

傭兵をやっている女性陣とは当然面識があるだろう。レイシンも中小ギルドを相手に傭兵をやっているらしく顔見知りでもおかしくない。ジンは曖昧な笑顔を浮かべていた。たぶん記憶にないのだろう。

「いしくん、なに飲む？」

茶髪ユフイリア女が声をかけている。女性陣が奥につめ、石丸が座るスペースを作っていた。

「いえ、持ってるの飲むでいいっス。それより何の話だったんスか？」

さっそくマジックバッグをこそそしている。最初の一杯ぐらい注文した方が良くもしたのだが、こういう場所の個室スペースは気にしなくてもいいのかもしれない。

「クエスト、どこに出掛けようかって話」

赤毛ニキータ女が答える。そっけない感じだが冷たさは感じさせない。

「何か希望とかないか？」
なんとなく分かってきたが、ジンは適当に投げっぱなしにする所があるらしい。

「魔法のアイテムが手に入るほうが嬉しい、です」
ユフィリアがジンにタメ口を使おうとして、止める。

「じゃあ、ゴブリン王のヤツとか、スザクモンみたいなやつ？」

レイシンが言っているのは定期イベントとして有名なクエストだった。

「流石に遠すぎる気がしますね。人数的にも不安がありますし、それにあれ、2ヶ月に一度だったから、えっと、今年？は無いかもしれませんよ」

シユウトは挨拶以外ではこれが始めての発言だった。

ゴブリン王の帰還 はオウウ地方のクエストだし、スザクモンの鬼祭り は西日本のクエストなので、どちらも彼らのお試しクエストには向かない。まず、その場所に辿りつくだけで2週間以上の旅になってしまうだろう。

次に、現実で2〜3ヶ月に一度のクエストだった点だ。大災害後は時間の流れが違っていて、現実での1ヶ月はゲーム内時間で1年に相当する。このため ゴブリン王の帰還 は、今の冒険者達にとっては2年に一度だけ発生するクエストということになっていた。この場合、現地に行ってみても今年はイベントがないかもしれない。今回の 拡張パック でクエスト発生条件がリセットされている可能性はあったが、そこまで言い始めたらキリがなくなってしまう。……………今回に限ってはどんな例外だってありえるのだ

から。

「それなら、豪族サファギンはどうっスか？」

石丸の言っているクエストについてシュウトは聞いたことがない。

「それ、どんなヤツ？」

ジンが頬杖をつきながら質問する。

「はい。ゴ布林王 や スザクモン と同系なんスけど、豪族サファギンを退治せよ は毎月あつたんス。今だと毎年っスね。難易度が低いんで魔法のアイテムとかは期待できないんスが、三浦半島なんで遠くはないっス。どれも一週間、つまり今だと3ヶ月の間に発生するイベントなんスけど、たぶん第二週、つまり6月末までなんで、今から間に合うのは 豪族サファギン だけだと思っス。」

分かりにくいのが、意味はつかめた。

ゴ布林王の帰還 は現実時間で1週間だけ解放される 七つ滝城塞（セブンスフォール）に侵入し、ゴ布林王を倒すクエストだった。この1週間はゲーム内時間に換算すれば約3ヶ月に相当する。大災害 が5月で、今が6月下旬だ。もし、4〜6月の間にゴ布林王を倒すクエストを成功させなければならぬのだとしたら、今からオウウまで行くのでは到底間に合わない。だから三浦半島のクエストにしようってことらしい。

「ごめん、三浦半島って、どこ？」

ユフィリアが小さめの声で石丸に尋ねていた。地理に関しては現実でどこに住んでたかにも拠るので、分からなくても仕方がないものだ。

「神奈川の南端っス。ええっと、東京湾の入り口になっている千葉と神奈川の、神奈川側っスね」

指先で机に地図っぽく形をなぞって示している。

「毘沙門洞窟つてのがモチーフになってるんすが、最初に近くの砂浜でサファギンと5〜6回ぐらい戦闘をして、その後で洞窟の豪族サファギンを倒すんす。設定ではサファギンは海の部族なもんスカら、陸のゴ布林族とは数が段違いなんスよ。それで毎年ってことらしいっス。」

「無理すれば日帰りでも行けるか？まあ、途中で一泊することになるか」

ジンはこの話で進めるつもりのような。たぶん単に面倒なのだろうとシュウトは睨んでいる。

「そうですね、タイムリーな話だし、ちょうど良いかもしれません」
ニキータが頷いた。これで決まりだろう。

「今から出発してもすぐ夜営になっちゃうな。準備して明日の朝の出発にしようか。」

「わかりました」
「了解っス」

細かい点を打ち合わせ、フレンドリストにお互いに登録する。この場は解散の流れだった。この後は各自で銀行や貸金庫に行ったり、商店で装備品の補充をしたりすることになる。シュウト達は宿も探さないといけない。シブヤに戻る場合、集合でアキバに戻るのでは朝が早く成り過ぎてしまう。

「朝、起きられんの？」

ジンが楽しそうな笑顔でユフィリアをからかっていた。

「大丈夫ですよ。慣れてますから」

ユフィリアの方はふくれっ面でちょっと怒ってみせている。からかわれるような会話に慣れているのだろう。傷付いた様子はなく、次の瞬間にも笑い出しそうな顔をしている。それをシュウトはどこか遠くの出来事のように見ていた。

「来なかったら念話で叩き起こすゾ……………つとそうだ。」

そうしてジンはシュウトの肩に触れながら、

「今回はコイツがコーラーだから。なんかあったらコイツにいつてくれ。」

コーラーとはTRPG用語で、意思決定を宣言する役割のことだ。リーダーとコーラーを別にすることもあったらしい。それはともかく、エルダー・テイルでは殆ど使われていない用語だった。シュウトが知っていたのもたまたまでしかない。実質的にリーダー役をやれということなのだろう。

「……………なんでです?」

いきなり矢面に立たされたことにも戸惑うが、ジト目で問いかける。

「もちろん、やる気のある若者に仕事を任せるのが、大人の務めつてもものだからさ。若い者同士でよく話し合って、関係を深めないとな?」

ぼんぼんと肩を叩かれる。

昨日の会話でやる気のあるところを見せすぎたのだろうか。いや、女の子と話しにくそうにしているのにも気がついていのだろうか。

確かに組むのであれば、短期間であれ、無口ではいられない。

「それじゃあ、よろしくねシュウト。私は二ナでいいから」

さっそく赤毛のニキータが話しかけてきた。どこか可笑しそうな微笑みを湛えている。

「その二ナってのより“王子”って呼ぼうか？」

笑われたと思い、知っている限りの情報を駆使して反撃を試みる。いわゆる虚しい努力というヤツだ。

「ん、どららでも？」

茶色の瞳に銀色の輝きを帯びた気がした。口元ではなく、瞳で笑っているように見えた。

「……………じゃあ、二ナで」

どうも押されっぱなしになりそうだ。

「私はユフィだから。よろしく」

長髪をかき上げて背中に流しながら、さり気なくくらいにあつさりと挨拶してくる。本人にその意思はなくても、私のことも当然知っているよね？といった態度に見える。まあ、確かに何度か話もしているし、知ってはいる。

「自分知ってますよ、ユフィさんは“半妖精”って呼ばれてるんスよね」

それを聞いていた石丸が真面目そうな顔で付け加えている。

「やめて、いしくん。それはちょっとハズいから」

失敗した、という表情になり、慌てた様子ですこし赤くなっている。そしてチラリと様子を伺っていた。その方向を見ると、ジンが

思い切りニコニコしている。このネタを使って全力でからかうのに
違いない。

ふと思いつき、

「分かった。よろしくな“半妖精”」

「ムかつく!」

肩をひっぱたかれるが、どっと笑いが起こった。

(……………しかし、衛兵でも来たらどうする気だっただらう)

まったくどうしようもない話だった。

05 責任と対処

ムカムカしながら昼食のパンを噛み千切る。味なんてロクにわかりやしない。

「シュウト、ちょっとは落ち着きなよ」

戦闘服になつてすっかり王子と化したニキータが声を掛けてきた。その顔は苦笑いしている。

「役割分担を守らなきゃ、連携は上手く行かない」

つい、イライラした声を出してしまう。

「だけど、ジンさんって凄く上手いと思う。私、MP全然減らないもん」

ヒーラー姿になったユフィリアが感心したようにジンのフォローをする。シュウトはそれで余計にムツとしていた。この状況のまさか分かっていないのだ。こういう時、女子の気楽さは余計に勘に触る。

アキバを出発したのは朝の7時頃だった。

誰も欠けることなく集合する。一番遅く来たのがジンだったため、ユフィリアは小言を楽しむチャンスを逃さなかった。そうして幾つかの確認をして出発となる。

目的地の サファギンの洞窟 まででは現実世界の直線距離で約70キロの距離になる。エルダー・テイル のハーフガイアプロジェクトによってこの距離は50キロ程になっていた。

少し説明を加えると、単純に距離を1/2にしてしまうと、面積に換算すれば1/4になってしまう。……例えば、直線距離で4キロの場合、正方形の面積は16平方キロになる。これをハーフガイアにするために面積を1/2にすれば8平方キロになり、その場合の正方形の一边は約2.8キロになるのだった。地図を描くなど厳密に測量するにはもつと複雑な計算を必要とするかもしれないが、一般の冒険者にとっては距離を7掛け(70%)として計算すること(すれば概算値として十分なものになるのだった)。

モニターを見ているプレイヤーがゲーム内の距離を厳密に計算する必要も確認する必要もなかったのだが、この世界の住人になってしまったことで距離には確かな意味が生まれていた。

50キロ程度の距離なら、自動車であれば1時間程度で到着できる。それでも現実世界の場合、関東での50キロは法定速度に信号機、道路の混雑があるため1時間で到着できる距離ではないのだが、今度の場合は逆に異世界化したことで余計な混雑や道路のような制約は少なくなっている。その代わりに廃墟化したことで道自体がとさおり断絶していて迂回を必要とする事や、モンスターという別種の障害が問題になるため、一日に移動できる距離は制限されてしまう。

最優秀の軍隊の行軍速度(歩兵)が1日で25キロ。強行軍で35キロと言われる。人類の限界は100キロ辺りだと考えられるのだが、これらの計算は軍隊であれば食料など多くの荷物を運ばなけ

ればならないため、最低速度を基準に行軍する必要があった。数世紀前の軍隊では1日で10キロ移動できれば優秀だと言われることすらある。

全てを騎兵で移動できたモンゴル軍の場合でも1日で70〜100キロとされる。馬は2時間も全力疾走すれば体温が上昇して死んでしまう。このため長時間走らせるわけにはいかなかった。

江戸時代の健脚の人々であれば、江戸から鎌倉までの往復（約100キロ）を日帰りで旅した記録が複数残されている。日の出から日没まで12時間近くを悠々と移動し続けるのだろう。冒険者の体力はここに分類されるものだったが、鎧などを身につけている事に加え、モンスターの戦闘があるため、単純な移動距離ならば1日50キロ程度が目安であり、後はモンスターの出現頻度と強さに応じて1日30キロにも15キロにもなった。

アキバから30〜40キロまでの範囲はモンスターがさほど強くないため、馬を使っていけば戦闘になることは少ない。このため、頑張れば目的地の サファギンの洞窟 まで1日で十分に到達できる距離だと云える。しかし、それでは夜にクエストに挑むことになってしまう。このため初日は連携を確認する時間を作り、2日目にクエストをクリアして、帰還呪文でアキバに戻る段取りになっていた。

最低ノルマは馬で4時間分。アキバからの距離で言えば、ヨコハマより先にいけば良いことになる。そこから先は歩きで戦闘しながら夕方まで移動を続け、キャンプできる場所を探すことになった。カマクラやヨコスカに行けば 大地人 の宿があるのだが、クエストに出れば常に宿に泊まれるわけではない。野営することも今回のコースの一環としていた。先日の打ち合わせで女性陣もそれぞれに構わないということで同意は済んでいる。

(……場所が悪ければ、宿のある街まで戻ってもいいのだし)

実際のところ 冒険者 は死んでも大神殿に戻るだけなので、野営をしてもそこまで危険だとはいえない。今回のような旅で一番に警戒しなければならぬのはPKの集団^{プレイヤーキラー}だった。勿論、そんな可能性はほとんどない。それでも女性陣が狙われていないとまでは言い切れないのだし、アキバの外に出た女性プレイヤーが無差別に狙われる可能性はあった。零細ギルドの小パーティーなのだから、いくら気を付けても気の付け過ぎということにはならないだろう。

(その意味では、大手つてのは楽でいいかもしれない。)

シュウトは フルレイド のリーダーこそ経験していないが、率先して仕事を引き受けていたので段取りは把握していたし、何が問題になりそうなのかも分かっているつもりだった。

そうやってシュウト一人がピリピリしていたが、モンスターも出ないまま順調過ぎるほどで、10時過ぎにはあっさりとヨコハマを越えてしまっていた。石丸が妙にこの辺りの地理に詳しかったのも大きい。ヨコハマには立ち寄らず、そのまま街から30分ばかり進んで馬を降りることにした。この先は歩きで三浦半島の最南端へと向かうことになる。とりあえず2時間ぐらい歩いて、それから遅めの昼食を取るつもりでいた。 冒険者 の身体は頑丈なので女子でも歩きが全く苦にならない。(疲れたと騒ぎ始める子は当然いるが、もちろん体力的な意味ではない)むしろ乗り慣れない馬を飛ばすとオシリの方が気になるぐらいだった。

戦闘に関しては前衛がジンとレイシン。後衛が残りの4人になり、魔法を使うユフィリアと石丸の両名を守る形にしてある。背後からの不意打ちを警戒するかどうかで中衛に入れる形にしたり、前・後衛のみにしたりする。施療神官は鎧まで装備できるし、そもそもモンスター相手にはあまり狙われないから心配しなくていい。石丸は妖術師なので装甲こそ紙だが、種族がドワーフなので意外に耐久力がある。ベテランプレイヤーなので細心の注意を払ってしまつと逆に動きにくくさせてしまうだろう。つまり、このパーティーは手が掛かりそうな部分が見当たらなかった。後は戦ってみてどうかを確かめればいい。

出発前にジンが言つてた基本方針は、敵が弱い間はとりあえず各個人で自由に戦つてみて、それから連携を調整しようということだけだ。

シュウトはまだジンやレイシンと一緒に戦つたことがない。今度が始めてになるので、内心ではかなり楽しみにしていた。2人ともソロプレイでも手練なのだ。きつと面白いことになるだろう。

(そう思つてたのに……………)

最初の戦闘でジンは襲いくる3体のオークの内、2体を軽くスルーしてしまつていた。レイシンの方を援護しようと思つてつけたシュウトはギクリとし、石丸も驚いて慌てていた。ニキータだけが鋭く反応して攻撃を加え、素早く1体を仕留める。シュウトが慌てて矢を打ち込み戦闘は無事に終了したものの、うっかりでは済まないミスだった。

しかし、シュウトはここでは何も言わなかった。ほどなくして、

もう一度戦闘になる。

ジンとレイシンの連携は上手く機能していて、彼らはたびたびス
イツチしながら戦っていた。

レイシンはワイヴァーン・キックという 武闘家 の基本となる
特技を上手く使い、相手する敵をジンと交換しつつ同時に攻撃を加
えていく。シュウトの目から見ても申し分の無い一流の 武闘家^{モンク}
の戦いっぷりだった。

一方ジンは攻撃をする時にあまりその場に留まることをしない。
左右に斬っては抜け、斬っては抜けという独特な動き方、緩急の付
け方をしていた。そして時たま1体か2体をスルーさせてしまっ
たのだ。

これにシュウトは困ってしまった。最初は慌てていたが、段々と
怒りが込み上げて来る。ジンの動きが分からないのだ。1回だけ攻
撃をしてスルーするのか、2回攻撃してスルーするのか、スルーし
ないで倒してしまうのか、もしくはまったく攻撃しないで敵をスル
ーするのか。その間、シュウトは待つていなければならなかった。
肝心な時に矢が準備できていなかったりすると、フォローができな
いからだ。

弓を使って一定時間に10発射ることが出来るとしたら、ジンの
行動を見てから判断しなければならなかったため、この頻度が半分近く
の5発か6発ぐらいまで下がってしまった。シュウトの攻撃回
数の低下は当然ながらパーティ全体の攻撃力の低下に繋がる。今は
まだ敵が弱いから問題にならないが、こんな状態ではまともに戦う
ことなど出来そうもない。

シュウトから見ると、ジンはフラフラと動き過ぎにしか見えない。

ちょっとしたダメージを気にして避けようとしているようでは 守護戦士 としては頼りないだろう。がっしりとした壁役としてパーティの精神的支柱であるべきで、そんな風にチヨコチヨコとポジションを変えているから敵をスルーしてしまうのだ。せめて特技を使ったりして後衛のことも気にして貰わなければならない。

しかし、一応であつてもコーラー（リーダー）の役目を任せられたのだと思い、言うだけ言ってみることもした。

「ジンさん、その戦い方ってソロプレイのまんまじゃないですか」

「んー、そうか？」

「ちゃんとやってくださいよ。これじゃ連携が上手く行きません。

……お願いしますね」

「ああ、悪いな、フォロー頼むよ、コーラー」

その後でもう一戦闘あつたが、やはりというか、結果は変わらなかった。

そのまま昼食を取る事にし、シュウトはイライラしながら齧っているパンでうさ晴らしをしていたのだった。

ジンが戦域哨戒フィールドモニターの役割を引き受けると言つたため、今は周囲の偵察をしに行っている。鎧を着ている 守護戦士 がフィールドモニターをするのはあまり似合つてはいない気がしたが、なんらかの特技かマジックアイテムを持っているのだろうと解釈し、問い直すようなことはしなかった。今は苛立っているのでそれどころではない。

今はレイシンや石丸も一緒に偵察に出たのが行動を別にしたため、シュウトとニキータ、ユフィリアの3人で先に食事をし、後で交代することになっていた。

「でもね、まだ敵が弱いんだから、今はこつちに回してるだけかもしれないでしょ」

ニキータの言い方に、お姉さんがダダをこねる弟を諭す風のニユアンスを感じる。まるで間違っているのがシュウトの側みたいに感じてしまう。

「それこそ強い敵が出てからじゃ遅い。……言うだけ言ったけど、やり方を変えようとしてないし。」

「相手にもきつと言いつがあるんだから、そんな風に決め付けるのは良くないやり方だよ？」

「壁役が壁をやらないんだぞ、間違ってるのは向こうじゃないか！」
反論している間に、段々とシュウトの意見が強固なものになりつつある。心の内では、ジンはソロ戦闘ばかりやっていたため連携のやり方を忘れてるんじゃないのか？といった疑惑が育ちつつあった。

「シュウト、感じ悪いよ。間違つてるとかどうでもいい事ですよ！怒らないですよ！」

ユフィリアが立ち上がり、苛立って声を荒げる。

「間違つてるから怒ってるんだろ！」

シュウトもまた立ち上がり、女性の言い分の意味の分からない部分にどうしようもなく腹をたて、ユフィリアを怒鳴りつけていた。

「怒ってるから、怒ってるんでしょ！」

怒鳴られても、ユフィリアは負けていなかった。怯むことなく怒鳴り返す。しかし、シュウトには怒っているから更に意味の分からないことを言っているだけにしか聞えない。

「はいはい、ユフィまで怒っちゃダメでしょ。」

ニキータが仲裁に入り、ユフィリアを後ろから抱きしめて止めた。まだ唸り続けているユフィリアをしばらくあやすのを聞き流し、シユウトはふくれたまま座りなおしていた。この気まずい時間も全てジンが原因なのだ。

「うーん、でもそうか。……………ユフィの言いたいこと、私にも全部は分からないけど、なんていうか、原因はともかくとして、怒るのは良くないかもね。今のシユウトはリーダーなんだし、リーダーが怒ってたら解決する人がいなくなっちゃうんじゃない?」

ユフィリアの頭を撫でて落ち着けながら、ニキータはユフィリアの言いたいことをなんとか言葉に直そうとしていた。

(解決?……………そんなあの人が勝手に折れて、ちゃんと壁役をやればいい。それで済む話じゃないか)

そこまで考えて、自分の間違っている部分に気が付いてしまった。

(……………「僕が」ジンさんと交渉とかして、ちゃんと折れて貰わなきゃいけないってこと、なのか?)

しかし、まだ釈然とはしない。感情の暴走は幾らか収まっていたが、何かが間違っていると心が叫んでいる。

「ごめん、ちょっと考えさせてほしい……………」

シユウトは頭を冷やして考えなければならぬと思い始める。今は他人を相手にする余裕は無い。

「うん、いいよ」

ニキータはむくれるユフィリアを連れてその場を後にした。

一人になるや、シュウトは頭を抱えて思考を整理しようとするが上手く纏まらない。

(今、僕がやっていたことはなんだ？ たんだろう？ 怒って、不満だつてアピールして、相手に気付いて貰おうとしたのか？ 僕は怒っているぞ！ つて脅していることに気付いて欲しかったのか。 僕が怒ることは脅しになったのか？ いや、僕は何故、怒っていたのだろう。怒ることで、ジンさんに解決して貰おうとしていた。それって「僕が」責任者なのに、ジンさんに解決を委ねてたつてことになるのか……)

内臓が冷たくなるような、恐怖に似た感覚に落ちていく。

(リーダーの仕事ぐらいできるって思っていたけど、基本的に一番肝心なことが、もしかして分かってなかったつてことなんじゃないのか？)

その想像にゾっとする。一体、「いつ」からなのだろう……見当もつかない。

シュウトにしても怒って喚き散らしているばかりのリーダーは高く評価しない。 いないわけではないが、そういうタイプは所詮は二流以下だと思つている。 まさか自分がそういうタイプになっていたのかと思つと、身が縮む思いがする。

しかし、まだ納得の出来ないものが心に残つている。

(……自分がバカなのはいい。 とりあえず認めよう。 それでもジンさんは僕をリーダーとして成長させるためにこんなことをしたんだ

ろつか？……わざわざ壁役をやらないことで？いくらなんでもそこまで掌の上で操っていたわけがないんじゃないか？)

自己正当化したい感情と罪悪感に似た思考、加えて謎らしきもので頭が一杯になる。

「だとしたら、一体、何が目的なんだろう………」
声に出して呟いた疑問は、風に乗り損ねたのか、誰にも届くことはない。

「うん、いいよ」

ニキータは自分でもかなり優しいと思う声を出していた。自分の心の動きに少し戸惑うが、シュウトはそれどころではない状態だ。変な誤解をさせることはないだろう。

シュウトは頭を抱えるようにして何かを考え始めている。彼の方はとりあえずは大丈夫だろう。

ユフィリアを連れてその場を離れるのだが、一緒になって怒っていた彼女は本格的にむっつりとしていた。ユフィリアは怒ると貝が口をつくむみたいに誰とも話さなくなる。付き合いが長いので、下手に慰めるよりも時間が経つのを待った方がいいと分かっていた。ユフィリアを心配していると2人で落ち込むみたいになってしまうのだ。ニキータが普段通りに振舞っていれば、その内に何かの切っ掛けでユフィリアは元気になるのだった。

原因はジンにあるのだから、彼の所に連れて行って面倒をみさせ

ようか、なんて考えてみたりもする。それは自分にとってあまり良くない思考だった。

(何がしたいのかももう少し説明してくれば、悩むことだって無いかもしれないのに……)

ニキータは説明してくれる方が分かり易くていいと思う方なのだが、口で説明したら分からなくなることが世の中にたくさんある事ぐらいはちゃんと分かっていた。決して長くはない社会人経験だったが、「そういうこと」は数限りなく起こる。多くの人間が口で教えられたことを心には刻まない。残念だが自分も例外ではないとニキータは知っていた。

考えてみれば、シユウトは説明不足を怒ってはいなかった。シユウトが怒っていたのは、たぶん「自分の常識が通じなかったこと」だろう。その事はニキータにも分かる気がするのだ。

誰であれ、自分の常識が正しいと信じたものだ。譲れる部分は幾らでも譲ることが出来るが、時に譲れない部分に触れられてしまうと、全く譲れなくなってしまう。特に「正しい事」は危険だ。簡単に譲れる部分だったはずが、正しいとなれば、いつしか譲れなくなっていたりする。今回のケースも戦闘で効率よく闘うことが大切で、そのための連携だったはずなのに、いつの間にか「連携を遵守すること」が最上の価値にすり替わってしまったている。

他者との出会いは、自分の常識が変わってしまうかもしれないという危険を孕んでいる。良い方向にも、悪い方向にも。そうして影響を与え合い、時に恋をし、友情を育み、喧嘩し、憎みあうこともある。

年上の人達はそうした感情をぶつけ合うことを面倒がることがあ

った。彼らは彼らで自分達の常識で生きているからだろう。……
…シユウトはこの先も独りで空回りし続けるのかもしれない。

(そう思うとちよっぴり可哀想かな……)

ユフィリアが顔を背けたので、何かと周囲を見渡せば、ジンがこちらに歩いて来ている。ユフィリアは近付いてくるジンに先気が付いたのだろう。次第に鎧の響きが大きくなる。真っ直ぐこちらに近づくコースなので、立ち止まって待つことにした。

「よっ」

「お疲れ様です」

言ってしまうってから、この世界だと変な挨拶だなと思う。

「もうメシは食った？」

「ハイ、さっき済ませました」

この際だからさっきの計画通りに、不機嫌なユフィリアを任せてしまおうか？と悪魔の囁きが脳裏をよぎる。しかし、どうするかを決める前にジンの方からニヤニヤしながらユフィリアをからかい始めた。これは自分のせいじゃないとニキータは目を逸らすのみだった。

「お、リスがいるな？」

機嫌が悪くて目を合わせないユフィリアのほっぺを指でつつく。触られた頬をガードしながらギラッと睨み返すユフィリア。

「まだ口の中にご飯いっぱい詰め込んでモグモグしてんだろ？食意地張ってるな」

「……何も食べてないですから」

ボソボソとした小さな声で反応する。話始めた。これでもう大丈夫だろう。

「なに、なんか怒ってんの？」

「……別に怒ってないです」

「なんだよ、じゃあリスってダメか？リス、可愛いだろ？」

「私、あんな出っ歯じゃないし」

一度声を出したら弾みがついたのか、段々と普通の声で話し始めていた。

「リスはダメか。じゃあウサギは？」

「ウサちゃんは……好き」

(いやいや、ウサギも出っ歯だから……)

意味不明の げっ歯類トーク(ウサギは草食哺乳類)でユフィリアは機嫌が良くなっていった。ジンに対して怒っていたわけではないので簡単に復活したのだろう。本気で怒った女の子はこんなものは済まないけどね、とニキータは思う。それでもユフィリアに笑顔が戻ってきたのは嬉しかった。

「な、アイツ、どうした？」

ユフィリアの方がひと段落すると、ジンがニキータにさりげない風に問いかける。やはりいくらからは気にしているらしい。

「なんとか大丈夫みたいですよ？……少し時間は掛かるかもしれませんが」

「そっか、サンキュ」

そういう距離感の取り方をみて、どこか微笑ましい気持ちになる。

レイシンと合流して昼飯にするが、そっちはどうするかと尋ねられたが、ユフィリアと2人でまだ散歩すると答えておいた。食事の後なので細々した用事を済ませておきたい。

ジンは念話で連絡を取っている。パーティを組んでいれば同じゾーンにいる味方の方向は分かるため合流するのは難しくない。「じゃあ後でな」と声を掛けて立ち去ってしまった。シュウトをあまり長い時間独りにさせておくとモンスターに襲われるかもしれないが、そのぐらいの配慮はしてくれるだろう。

「大丈夫そうだね」

ユフィリアに声を掛けたのだが、彼女は口を尖らせると「なんか、ずるい」と呟いた。

昼休憩が終わり、シュウトは大人しくはなったが、戦闘では特に進展が見られなかった。どうやら彼は観察しては考え続けているらしい。それでも自分がどう行動すべきかはまだ分かっていないようで、あまり口を聞こうとしない。気を利かせたのか、今はレイシンがパーティの音頭を取っていた。

「どんな調子？」

シュウトを構い過ぎている気がしたが、そろそろニキータの方でも答えが知りたくなって来ている。少しぐらいならいいだろう。

「わからなくて、煮詰まってる」

今度は逆に考え過ぎているようだ。微笑ましくて口元に表情が出てしまう。一生懸命な部分には好感が持てるが、男の子に対して可

愛いと思つのはちょっと失礼なことかもしれない。

「そういう時は行動しながら何かヒントを見つけないよ。もっと、自由に動いてみたら？」

「自由に？」

シュウトは顔を上げてこちらを見る。

「ジンさんだつて好きにやってるんだから、シュウトも、もっと自由によつてみたらいいじゃない」

これが切っ掛けになったのか、次の戦闘の時に「それ」は起こつた。

シュウトは弦を引き絞ると、ジンさんの背中に向けてそのまま矢を放っていた。

自分の間違いに気が付いたことで、シュウトは怒っていた状態から一転して卑屈な精神状態に陥っていた。ジンの気に入りそうな答えを見付けようとするのだが、それが何かは分からない。そんな状態でニキータに「自由にやってみろ」と言われ、少々やっつけばちな気分になっていた。

ホブゴブリンの集団と戦闘になる。戦闘タイプらしき背の高いものも混じっていた。ジンが攻撃しに行くが、敵のHPはそこそこ高く、一撃では仕留め切れないと思われた。

次は左に切り抜ける。

何度か繰り返された光景が脳裏のイメージと重なる。使うのをすっかり忘れていた「受動離れ」の撃ち方で、ジンの攻撃直後に合わせて追撃する。

(はいはい、どうせそこで左に抜けるんでしょ。……ここだ)

深く考えることなく味方の背中に向けて矢を放つ。シュウトの予想通りにジンは左に抜けながら斬撃を加えた。直後のタイミングで怪物に矢が突き刺さる。重なるように連続する攻撃音。それは相手を倒すのに十分なダメージを生み出していた。

これを見ていた後衛のメンバーは、シュウトが怒った末にジンの背中に矢を射たものと勘違いして慌てた。だが、当事者のジンはそのまま次の敵に向かっていくのみだ。シュウトの危険な行為に対して何も反応しない。

「アレはちょっと危ないよ？」

戦闘が終わってニキータが声を掛けて来る。

シュウトは自分が何を言われているのかを理解していなかった。

あのタイミングならジンには当たらないと知っていた。むしろフアインプレイだと思っている。

昼から数回の戦闘をこなしたため、ここいらで小休憩を挟むことになった。ジンとレイシンはユフィリアの回復を受けるとさっさと警戒に出ってしまった。これはシュウト達に会話する時間を与える目的もあるのだろうと今更ながらに気付く。戦闘が終わっても、やはりジンは何も言おうとしない。レイシンもにっこりと笑って「ちょっと行って来るから」と言ったきりだ。実害がないので問題視しなければ問題にはならないのだが、見方によれば謝罪を許さないという解釈もできるため、どうしてもニキータは気になってしまう。

「どうしたんスか？」

石丸が会話に参加しようと近付いてくる。

「さっきの、当たりそうだった矢の話」

少し急ぎめの口調でニキータが話しかける。今は石丸が会話に加わるのは歓迎すべきことだった。シュウトとユフィリアは喧嘩した後の「微妙な距離感」のままだ。石丸が加わればユフィリアが話す機会が作れる。しかし、今の段階でシュウトのミスユフィリアの口から説明させたくはない。そんなことをすれば元の木阿弥になりかねない。

「アレっスか。ちょっと驚いたんスが、考えたらアレで正しいんじゃないスか？……ジンさんは敵の正面にあまり立たないようにして

るっス。だから背の低い敵にでも矢とか魔法を当てにいけるっス。」
石丸は「あのタイミングはギリギリだったっスが」と付け加えるのを忘れない。

「石丸さん、ジンさん達の関係ってどう思います？」

追加の文言は耳に入らなかつたのか、味方が増えたことに我が意を得たりとシュウトは懸案事項についても意見を求めてみた。少し事情を補足して説明すると、石丸はひとつ頷いて話し始める。

「ジンさん達がやっているのはたぶん遊動型の関係っスね。守護戦士のいないパーティだとたまにやっているとところもあるみたいっス」

石丸の解説によれば、フォーメーション 戦闘陣形には固定型・遊動型・移動型があると云う。

固定型は普通に戦っていればそうなるものだ。ゲームシステム自体が固定型を想定していたためだろう。盾役が前線を構築して敵を固定する。敵を固定するために味方の前衛も固定される。前線が固定されることで後衛も固定されることになる。こうしてフォーメーション 戦闘陣形は固定型の中で様々なバリエーションを生み出すことになった。

遊動型とはソロ戦闘の方式を取り入れたもので、6人パーティの戦闘で稀に使われていた。遊動型はかなり複雑な動きが個々人に要求されるため、フルレイド や レギオンレイド では使えない。どこのギルドも レイド 大規模戦闘 を成立させることを第一に優先せざるを得ず、そのため余計な複雑さは排除されているのだ。大規模レイド 戦闘 の最中にパーティ単位でなら遊動型に似た複雑な陣形操作をこなすギルドはあるのだが、それぞれのパーティは固定型での戦闘を行っているものだ。

ハイエンドのクエストが レイド 大規模戦闘 になっている昨今、遊動型の連係はどうしてもメインストリームにはなれない。それでも息

のあったメンバーと一緒になら遊動型の連係は少ない戦力を活かすことのできる優れた戦闘陣形フォーメーションに成り得るものだった。

更に魔法使いのいない戦士団の場合に移動型の戦闘陣形も存在したようだが、それは流石に有効性に疑問が残ったのか廃れてしまっていた。もしかしたら大規模ギルドで戦士職だけを大量に投入できる環境でなら復活させることが出来るかもしれないが、それがどのような動き方になるのか石丸にも説明できない。

「それで、その遊動型ってのはどうやればいいのか？」

「いや、流石にそこまではちょっと分からないんす。メンバーの組合せによっても変化するらしいんでどう答えたらいいのか自分にも見当がつかないっす」

ユフィリアの疑問はもつともなものだが、石丸にも正しい方法などは分からない。組合せで正解が変わるのならば、それも仕方が無いのだろう。

「ソロ戦闘っぽく戦って、プラス連係すればいいってことよね？」
ニキータは慎重に発言していたが、やはりイメージが付いてこない。

「私も前で戦えばいいの？」

「いや、それは違うと思うっす」

ユフィリアは半ばお飾りとなっている魔法効果のありそうなライトメイスをぶんぶん振りまわしてみせた。しかし、無茶はさせられないので石丸も否定するしかない。

「シュウト？」

ニキータが黙ったままのシュウトに気が付いて声をかける。

「ああ、お陰でかなり分かった気がする。でも、とりあえずは今まで通りでいこう」

シュウト自身もまだ掴み掛けただけの感覚で言葉になどできそうもない。ただ予感だけがあった。早く次の戦闘で試したくて堪らなくなっている。

話が終わるのを見計らったかのようにジンとレイシンが戻り、場が流れる。

「なあ、半妖精」

シュウトは意を決すると、出発前にやり残したことを済ませてしまおうと声を掛けた。

「なに？」

半眼でシュウトを見やるユフィリア。

「ごめん。さっきの態度は、良くなかった」

一気に言い切ってしまった、軽く頭を下げる。グズグズとするよりも楽だろう。

伏せた頭を上げた時、半眼だった目は開かれていた。視線が横に泳ぎ、上を回って一周してくるのをシュウトはそのまま見ていた。口角が持ち上がり、どこかで見たような笑みを作る。

「ふう〜ん、そっかー。でもどうしよっかな」

イタズラをたくらむ悪い顔付きになる。何が出てくるのかと少し身構えてしまう。

「……まっ、いっか。しょうがないなア、じゃあ怪我したら回復し

「てあげるよ」

あつさりとお救しが出たらしい。ほんの少し残念な気もする。

「なんだよそれ、ひっでーなあ。回復もしない気だったのか」

「当たり前じゃん。次にオネーサンを怒らせたらそうなるから」

「どうやら仲たがいは解消できた様だ。レイシンが「行くよー！」と言つので小走りで追い掛け、意識を戦闘へと切り替える。」

そろそろいい時間になりつつある。もうしばらくで夕方になってしまうだろう。夕飯やキャンプする場所を探すことも考えなければならぬ。西の空に太陽を探すと、なんだか雲が出て来ている。これでもし雨にでもなれば、早め上がりにはせざるを得ない。暗くなる前に戦闘でも結果を出さなければとシュウトは少し焦りを感じていた。

ヤキモキとしながら戦闘になるのを待つが、出て欲しい時に限ってモンスターは現れない。

レイシンは何か一品作りたいねと話し、シュウトにちょうどいい獲物がいたら狩りを手伝って欲しいと頼む。「わかりました」とは応えたものの、多少、上の空になっていた。

「少し寄り道するか」

前を歩いてたジンはそれだけ言うつと進行方向を少し左へと修正した。しばらく歩き、木立の影で全員をしゃがませると待ち伏せを指示する。シュウト達は訳が分からないまま武器を準備した。すると1分と待たずにトロウルを含むホブゴブリンの小集団が現れた。先

制攻撃の絶好のチャンスである。もちろん十分に引き付ける必要があるから、そこから2分ほど飛び出すのを我慢しなければならない。

くしゃみをするような初歩的なミスもなく、側背面から初撃を加える。

シュウトの計画はジンの攻撃直後にまたもや矢を的中させることだった。とりあえず同じことをしてみれば何かが分かるのではないかと期待してのことだ。すると脳裏に邪魔な声が浮かび上がる。

（そういえば、「感覚の再現はタブー」だって言っただったっけ？）

よりもよって戦闘が始まる直前に思い出すか？と自分をなじる。慌てて「この場合の自己ベストってなんだ？」と自問するが、時間が無い。ワケもわからない。そのままとりあえず矢を番え、ホブゴブリンよりも大きいトロウルに狙いをつける。

（待てよ、“盾”を残してみるか……）

トロウルの近くにいたホブゴブリンに狙いを変え、命中させる。

ある程度以上の知能が敵にある場合、同士討ちを避けるためにモンスター同士もお互いに少し距離をあける。特に集団戦ではその性質が原因で散開しがちであり、範囲攻撃呪文に捉えられる敵の数が少なくなる効果があった。

大型のモンスターになれば身体のサイズに合わせてその縄張りに似た空間も大きくなる。よってその後ろにいる敵はその分だけ大きく迂回することになった。ジンとレイシンはソコ戦闘の戦い方を応用しているため、状況に応じて大型の敵を残して盾代わりのようにしている。スイッチしながら戦うこともあって、何度か敵の同士討

ちをさせることにも成功していた。大型サイズの敵が暴れると同士討ちし易くなるのだ。ちなみにこの同士討ちを狙うのはジンよりもレイシンの方が上手い。

パーティバトルにおけるダメージコントロールはダメージ量を基準にする。毒や石化などの特殊攻撃といった例外はあるが、基本的に大型の敵から受ける攻撃はその分だけダメージ値が大きい。それはヒーラーによる回復量を大きくすることに繋がる。よって逆に被弾するダメージ値を低く抑えれば、それだけヒーラーのMPを節約することに繋がる。言い方を変えれば、1戦闘でのパーティの総HPは基本値とヒーラーが回復できるHPとの合計という風にも考えられるのだ。

大まかにはそれがシュウトの常識でもある。ましてや不意打ちによる先制攻撃なのだし、一番強い敵にダメージを与えてダメージ量を下げるのがセオリーだろう。

しかし、ソロ戦闘では攻撃される回数を基準にモノを考えるらしい事にシュウトは気付き始めている。ただ、それで攻撃される回数が少なくなつたとしても、その全てが大ダメージならば総ダメージ値は大きくなるはずだった。例えば、逆に蚊に刺されるようなダメージを何度か受けたところで総ダメージはそう大きくはならないだろう。それこそ大ダメージ1発分で済むかもしれない。

(じゃあ、どうすればいいんだろう?)

側面に移動したレイシンの大型と自分の間に小型のモンスターを挟んでいるのが見えた。やはり巧い。

(やっぱり小型を先に仕留めるのは間違いなのか?)

そう考えて先程は攻撃しなかったトロウルに矢を射掛ける。ヘイト値が上昇したのか、トロウルはシュウトをターゲットに変えた。しかし、一步目を踏み出した所でその歩みが鈍る。ジンに狙いを付けていたホブゴブリンに邪魔をされていた。どうやらレイシンと同じように小型の敵が盾になっただけらしい。それを見て、ごく最近に自分も似たものを経験した気がするのだが？と考える。

(……違う。タイムラグを作ってるのか)

ジンの戦法についていけず、シュウト自身が攻撃回数を減らされていた事に思い至る。そこに気付くことで連鎖的に昼間、自分が怒っていた原因が「戦闘で活躍できなかったこと」にあったのだと悟る。それはあまりにも苦い認識だった。幼稚な自分に思わず唇を噛んで血を出そうとしたが、それもくだらないと吐き捨てて止める。

今のシュウトはタイムラグも攻撃回数の低下も感じてはいない。これまで息苦しかったのに、思い切り呼吸ができる風に感じている。どうやら何かのコツをつかみかけていた。

全体を見渡し、ちょうどジンの邪魔になりそうな敵をみつけて矢を射る。的中したホブゴブリンにジンが攻撃を加えてトドメを刺してしまう。今のシュウトはかなり自由に行動している。固定型の連係や戦術で選択できる行動では、より厳密な正解が存在することもしばしばだった。しかし遊動型ではそれらの厳密な正解は存在しにくくなる。そうして自分が従うべきルールの違いに気が付くことで、シュウトは一線級の冒険者として本来持っていた柔軟な対応力を発揮することができるようになっていた。

十分な余力を残してモンスターを片付け、流れ作業でドロップアイテムの獲得などの後処理を始める。今回、シュウトはかなり満足

していた。ニキータとユフィリアが駆け寄ってくる。

「今までと、かなり違ってみたいね」

「まあ、そうかな。なんとなく分かってきたと思う」

「で、どうやればいいの？ゆーどー型の連係のコト、分かったんでしょ？」

待ちきれずに質問をかぶせてくるユフィリアに苦笑しつつも、説明しようと口を開く。ところが、

(アレ？……………んーっと、)

言葉にして説明することが出来ないのに今更ながらにして気付く。後から考えれば、弓で敵を狙って、射ただけなのだ。客観的な視点で見れば普段の戦闘でやっている事とほとんど変わるところがない。細かいテクニクや発見にしても、説明したところで「ああ、そう」と言われてしまうようなものばかり。ましてや、ヒーラーのユフィリアがどう行動すべきかの指針についてはさっぱりわからない。

「ソロっぱく、でも自由に行動するって感じなんだけど……………」

なんとか言葉をひねり出したが、2人とも悪い冗談を聞かされた時の顔をしている。それもそうだろう、シュウト自身も振り出しに戻ったか、今までよりも状況が悪化したかもしれないと思っている。本当にどうしたものだろう。自分のことは何とかかなりそうなだけに、余計に困ってしまう。

「もういいよね。答えを訊いてくる！」

決然とジンの方に歩いてゆくユフィリア。分からないことを質問するのはもちろん悪いことではないのだが、ニキータは「あっちゃ」という顔に、シュウトは仕方が無いかと溜息をついた。

「ジンさん！」

「あ？……どした？」

「あの、ゆーどー型の連係ってどうやればいいんですか？」

「ゆーどー型？……なにそれ？」

「！？」

(うわぁー、台無しだ……………)

身振り手振りを交えて本人なりに一生懸命説明していたが、ジンは本気で意味がわからないらしい。ユフィリアの説明で逆に分からなくさせた部分もあるかもしれない。失意のユフィリアがトボトボと帰還する。突撃兵が爆死したので打つ手が無くなってしまった。石丸が慰めの言葉を掛けている。

ニキータが空に向かって独り言を始めたのでそちらをみると、どうやら誰かと念話をしているらしい。

「……………ニナ、誰だったの？」

「葵さん。連係の話なんだけど、「とりあえず走れ」って。明日のためとかが、どうとか？」

(そこ、「打つべし」じゃないんだ……………)

ジンとユフィリアの会話を聞いていたレイシンが、ニキータにアドバイスをして居残りの葵に念話をかけさせていた。

遊動型の連係では前衛がソコの動きをするため、後衛をあまり守らない。このため、後衛は前衛の後を追いかけて移動して、無理矢理にでも守らせるという意味で「走れ」という。それもこれも、元々は前衛が後衛を守りたくても守れない状況で生まれた戦術機動が始まりだった。その場合、前衛を囮にして後衛が身の安全を図る必

要があり、その場合は逆方向一（？）に走れば良いということになる。回復役ヒーラーが生き残るのは戦闘の鉄則であり第一優先課題なのだから、真つ当な意見だった。

一行は出発し、続きは歩きながら話すことになる。後衛の4人で自然と固まって会話する。

「それじゃあ、狭いダンジョンじゃ使えないってことかも……」
話を聞いていたメンバーにシュウトはそう言いつつ、ジンの背中をチラ見する。その場になるまで分からないんだろうな、という不安めいた感覚を覚える。期待感があると言ってしまうには、ちょっと信用ならない相手だった。

石丸に向かってダメージコントロールとタイムラグの関係について分かったことを話しておく。魔法攻撃職には移動妨害の呪文があるので話しておいた方がいいからだ。シュウトの記憶ではソーサラー妖術師のそれは、魔法の鎖で相手を捕縛するものだったと思う。

「なるほど、敵の時間を攻撃するわけっスね。確かにジンさん達の連係とは相性が良さそうっス」

石丸は直ぐに理解を示した。敵の移動を阻害すること自体は一般的な戦術でもあるからだろう。しかし、ここでの問題は根本的なレベルで戦術的な優先度にまで高めて運用することにある。相手のタイムラグやタイムロスを狙うこと自体を目的にすることがこれまで無かっただけなのだ。言われてみればナルホドと思う程度の、ちょっとした視点の変更でしかないのだが、これまで移動を阻害するのは、もっぱら前線を構築するためだった。ソロの魔法使いにとつては直接攻撃を防ぐための手段でもある。それらの目的は「相手との距離をとる」ためであって、「時間を作る」ためにはあまり使って

いない。しかも、そのワン・アイデアを一過性の行動としてではなく、パーティの戦術レベルで目的化しようとしている。

（ソーサラー 妖術師 の攻撃力を活かした連係も考えなきゃ……）

シユウトは石丸の表情をみながら、そう考えていた。弓による攻撃は意味合いが魔法攻撃に良く似ている。後衛からの単発攻撃が弓によるものか、魔法によるものか？と考えれば、やはり大きな違いはない。魔法攻撃職は敵の集団を一度に攻撃しなければ、弓との差別化が図れないのだ。シユウトが弓を使うことで、石丸のMPを節約することができるのは利点ではあるが、石丸の存在意義を少なからず削っている自覚があった。加えてジン達が移動しながら戦っていることで、集団を一度に攻撃する魔法は使いにくい側面もある。これで移動障害の呪文を要求しては小技のオンパレードになってしまうだろう。エンチャンター 付与魔術師 向きの戦術方針かもしれないのだが、ソーサラー 妖術師 の利点を活かせないのであれば、それは連係として完全なものとは言い難い。

「とりあえず走ればいいんだよね？」

ユフィリアはやるべきことが分かって元気を取り戻していたが、今の話は難しそうだったのか聞く前から理解することを諦めていた。口で説明したり頭で理解するよりも、実際に戦いの中でやってみて覚える方が向いているのだろう。そんな態度のユフィリアに、「決して馬鹿ではないのだから勿体無い」とシユウトは思う。それでも口に出しては何も言わないでおいた。

「そろそろ、夜営の準備をしようか？」

レイシンが振り向いてシユウトに声をかけてくる。西の空を見ながら、確かに頃合だろうと考える。敵の弱そうなゾーンを探して、食事やテントの準備などをしている内に暗くなってくるだろう。

「そうですね。場所を探したりしましょう。」
どことなく全員がホツとした雰囲気になる。新しいパーティでの初日はどこかしら緊張するものだ。傭兵が多いためにシュウトは顔見知りばかりだったが、それとは関係なく濃密な一日だった。

(いや、まだ今日は終わっていない……)

午後の移動距離はたぶん15キロ程度で、1日で全体の4/5の距離を消化していた。この分ならば明日の正午には楽に目的地に到着しているだろう。

「あれってウサギじゃね？」

ジンが指差す方向に野ウサギらしき影が見える。

「シチューに入れようか？」

「それなら捕まえます」

レイシンが料理の話をしているのでシュウトは弓を構える。小さな目標だが、命中系の特技を使えばそうそう外さないだろう。

「やーっ！ ウサギ禁止！」

ユフィリアが謎の抵抗を始める。ニキータは笑いを堪えられず吹き出していた。

「どーした？ウサギの肉が入った方がシチューだって美味くなるぞ？」

ジンが真面目な顔でユフィリアをからかう。

「急がないと逃げられちゃうんだけど？」

もはや捕まえる気はないのだが、シユウトもからかうためにわざわざ弦を引いてみせたりする。

学校で飼育係でもやっていたらウサギの肉を食べようとは思わな
いだろう。まだ生きているのならば尚の事だ。

必死で抵抗するユフィリアに腹の底から笑いながら、怒ったり泣
いたりする前に負けておくことを忘れない。

こうして「ウサギ肉禁止」がこのパーティのルールになった。

07 雨の森

「地面の状態がいつスね」

「じゃあ、テントはここで」

シュウト達はキャンプ地点を決めようとして、森というには木がまばらな、木立の中に入った。思っていたよりもずっと場所が良かったので嬉しくなる。

「だいたい「雨が降りそうだから木の下にテントを張りたい」といった心理はミスの原因になりがちだった。テントを使う時は水捌けの良い場所を選ぶ必要があるのだが、森に入れば雨が防げると勘違いして地面のことを忘れてしまい易い。周囲よりも低いなど場所が悪ければテントの中にまで水が入ってきて散々な目に遭うのだ。枯葉が集まって腐葉土を作っている場所は表面的に乾いていても、その下の土は湿っていることもあるし、もっとダイレクトに寝ている間に水たまりが出来てテントが沈んでしまうこともある。」

それなら森を避ければどうかというと、見晴らしの良い場所で火を使ったりすれば、それはやはりゴブリンなどの亜人間に見付かり易くなる。夜は眠りたいので夜襲は避けたいのが人情というものだろう。加えて木の近くであれば強風を避け易い。強風で木が揺れればザワザワとうるさいが、それでもテントが風で一晩中バタつくよりはいい。固定が弱ければ吹き飛ばされることもある。

ちなみに川の近くは蚊が多かったりもする。この手の贅沢を言い始めればキリがないので、目に付いた場所でさっさと決めてしまうことも大事なことはあるのだが。

「確かにモンスターはいなかったんだが……………ちよっと静か過ぎ

ないか？」

哨戒から戻ってきたジンが不安を口にしているが、気のせいだろうと思う。

「モンスターはいないんですね？」

「ああ、それは間違いない」

「だったら問題ありませんよ。心配なら結界用の道具も使いますけど？」

「……いや、そこまではしなくていい」

結界用の道具とは、魔法を使えない クラス 職業 がキャンプするためのものだ。一口に結界と言っても、単に警報を出すもの、敵に気付かれないくするもの、弱い敵ならそのまま追い返すものなどバリエーションは様々だ。魔法攻撃職か回復職がいれば設置系の魔法を習得するので、それらはあまり必要ない。

「じゃあ料理の準備をしてくるから」

風向きを確認してからレイシンとユフィリアは移動した。

料理する場所はテントから風下側に50〜60m離れるのがセオリーになっている。外で火を使えば煙が出ることが多いのだが、風上で煙を出すとテントの中に煙が充満することがあって、寝る段階になって煙たくて仕方が無いということになりがちだ。シュウトもシルバーソード 時代に仲間達とこれで痛い目を見ていた。その時は我慢できずに サモナー 召喚術師 に頼んで風の精霊で換気してもらった。ハメになった。

また、食べ物の臭いに誘われて狼などの動物系の敵が襲ってくることもある。この時にテントの近くで戦闘をするとテントを破壊するなどの二次被害を引き起こす原因になってしまう。

これらは現実でのキャンプ場でのマナーや初歩的なテクニクな

のだが、それが自分の安全と直結している事を身を持って知ることになった。料理で出た生ゴミの処理も同様で、後片付けをちゃんとしなければ動物を警戒していることになどならないし、例えば火の始末をしつかりしなければ山火事の原因を作ってしまうだろう。小さな知識を積み重ねること、そして失敗を糧に知識を実践することが大切だった。

「自分のテントを出すっス」

そう言いながら石丸がマジックバッグから出してきたのは6人用一（？）のかなり大型のテントだった。寝るだけなら10人でも収容できる代物で、このサイズになると独力で組み立てるのは困難なはずなのに、馴れた手つきでテキパキと作業していく。慌てて手伝うのだが、シュウトを含めて3人いても天幕を持つているぐらいの役にしか立たない。ペグを地面に打ち込んで固定する作業も下手に手を出すとテントが引きつれたり、緩くて固定できてなかったりする。石丸にやり直して貰うと二度手間になってしまったため、今回はじっくり観察して、手伝える日が来ることを祈ることに留めておく。その後、一応は女子のテントを別に出したいというので、ニキータの持つてきていた3人用のテントの設営も石丸が引き受け、これをさっさと済ませてしまった。テントの入り口を風下側にする事で雨風を防ぐのも忘れない。この辺りは基本だろう。

イジメまがいの雑用係を押し付けられているせいかもしれないが、いくらかは石丸のサブ職 交易商人 のスキルによる部分もあるのかもしれない。 交易商人 は交渉能力以外にも交易で旅する時に使える特技を幾つも会得できる。レイシンのサブ職 料理人 もそうだが、より日常的な場面では非戦闘系のサブ職は強かった。

テントの設営を終えてレイシンの様子を見に行くことにした。雨

はまだ降っていないが、手元がよく見えるようにユフィリアが魔法の明かりを出していた。予想の通りに料理の手伝いはしていない。特技も使えないのに下手に手を出すとマンガのような大失敗になるのだから仕方が無いだろう。

石丸が火の管理を手伝い始める。「家での料理」と「キャンプでの料理」は完全に別物で、特に火の扱いが違う。サブ職としての料理人はそのどちらにも柔軟に対応するものだったが、火力の調整を引き受けて貰えれば遥かにはかどる。石丸は念を入れて料理に手を触れようとはしなかった。

「ここは引き受けるっす。ユフィさんは着替えてきたらどうっすか？」

「ありがと。そうするね」

ユフィリアは装備したままの鎧を脱ぐためにテントに向かって歩き始める。すると、彼女の出した「魔法の明かり」も一緒に動き出した。それを見て、シュウトもなんとなくその後についていく。

「ご飯、楽しみ……シュウト、見た？」

「何を？」

「飯ごうでおコメ炊いてるんだよ。久しぶりだなあ、アレって美味しいよね。オコゲの部分も食べたいな」

「レイシンさんの料理はかなりのものだよ」

「そうでしょー、なんか手つきが違うもんね」

「手つきって……料理なんてやらないだろ？」

「失礼だなあ。電気釜ならご飯ぐらい普通に炊くし、カレーとか野菜炒めぐらい誰にでも作れるでしょ。この世界だと料理人のサブ職がないから意味無いけど」

「へえー、意外だな。じゃあ得意料理は？」

「えー……………ゴーヤチャンプル」

「うわっ、あのニガいのは苦手だ」

「分かってないなあ、あのニガさが堪らないんじゃないんじゃん」

軽く手を振るとユフィリアは小さい方のテントに入っていった。

「そこの、風上側に座れよ」

フード付きのマントを身につけて現れたニキータ・ユフィリアにジーンが声を掛け、石丸とシユウトが座る場所を作る。

食事が出来たので念話を送って女性陣を呼び、火を囲んだ。石丸とユフィリアの魔法の明かりが揃い、場がいつそう明るくなった。すっかり日は落ちて、夜はそのとばりを下ろしている。雨が降るのであればすぐにタープを組み立てるつもりでいたのだが、幸い、まだ雨は遠慮してくれている。どうせならこのまま遠慮して欲しいものだった。

ユフィリアがどことなくソワソワしながら座り、期待に満ちた眼差しで飯ごうの方を見ていた。その甲斐あってか、差し出された器にはオコゲの部分もちゃんと盛られている。ユフィリアの瞳が輝くのを見て男性陣は満たされた。みんなにも振舞われたオコゲは口に入れると確かに香ばしい。炊かれたお米は7分づきぐらいの僅かに黄色いものだったが、みな気付かずに食べていた。少し硬めの炊き上がりが口の中で噛み応えを作っている。シユウトは久しぶりのご飯が嬉しかった。

キャンプで飯ごうならばカレーと行きたい所だったが、カレーのようなものはこの世界では普及していない。数種類の香辛料を

安定して手に入れるのも難しいかもしれないが、その内にアキバで手に入るようになるのかもしれない。

カレーの代わりに野菜がたっぷり入ったシチューが振舞われ、しっかりと火の通った野菜の味を堪能する。肉と野菜で濃厚なスープが出ており、塩味で整えられた味に十二分に満足していたのだが、胡椒が足りず、どうしても一味足りないとレイシンから謝られてしまった。

ジンはご飯にシチューをかけて大雑把にかきこんで食べ始めてしまい、「食事」の雰囲気が一気に「メシ」になってしまった。美味そうに食べているのでシユウトが真似をすると、大胆にもユフィリアまでそれに倣った。ご飯が硬めに炊かれていることもあって、スープと絡まった米粒が口の中で踊る感触が堪らない。現実世界で食べたお茶漬けを懐かしく思いながら、飯ごうで炊きたてのご飯を使った「シチューかけご飯」をやってしまった贅沢は美味しい上に、楽しかった。

2つの飯ごうで8合の米を炊いたのだが、6人で食べればキツチりなくなってしまう。シチューの残りは明日にもう一度食べることになるだろう。

食後にと、紅茶の香りのするお茶が出される。茶葉の種類による向き不向きはあれど、緑茶も紅茶もウーロン茶ですら同じお茶の葉から作ることができるため、アキバでも早い段階から数種類のお茶を手に入れることができた。

腹が満たされ、身体は心地好く温かくなった。夜の肌寒さと手に持ったお茶の熱さとが対比され、まったりとした雰囲気醸し出す。会話するのが惜しいような夜だった。パチパチと火のはぜる音が遠くまで聞こえてしまう気がした。

「あふう、一日五回ぐらい昼寝したいなあ」

先程から言葉少なげだったジンが立ち上がり、「ワリーけど先に休むわ、夜警やるならテキストに起こして」と言ってテントに戻ってしまった。まだ19時になったばかりだ。

「夜警ってどうしますか？」

「どうしょっか」

シュウトが尋ねるのだが、レイシンも決めかねている。

夜警は各ギルドで流儀が異なるため、やらないところは全くやらないらしい。それもこれもエルダー・テイルがゲームだった時代は1時間ごとに昼と夜が入れ替わっていたためで、当然、「夜は寝る」なんてことは無く、戦闘終了後にMPを回復させるのが休憩の目的だった。

大災害 後は2交代も3交代もあったのだが、有名な「ガリア戦記」を参考にすると、18時の日没から日の出までの12時間を4つに区分し、第一夜警時から第四夜警時として3時間づつに分割している。太陽を基準にしていることからこれには一定の使い易さがあった。例えば、大規模戦闘^{レイド}が4の倍数を採用していることで夜警時の割り振りに向いていたりする。

確かに現代つ子には第一夜警時（18時〜21時）は無意味な分類に思われるので、6人パーティの場合は第二夜警時（21時〜24時）からの3区分を2人ペアが交代で担当する方法が合理的だと思われた。

「この辺りだったらやらなくてもいいんですけどね。敵が出たってそんなに強くもないだろうし。」

女性陣がホツとする雰囲気伝わって来て、発言したシュウトは苦笑してしまう。

「雨も降るだろうしね。うーん、でもなんか油断チツクで嫌だなあ。やっぱりやるうか」

レイシンの言葉に気を引き締める。雨だと夜警は正直、やりたくない。ご飯が美味しかったのでどうしても気が弛んでしまう部分もあった。シュウトはジンが寝に行ったテントのことを考えて、ちょっと失敗したかな？と思う。夜警をする場合は担当のペア毎にテントがある方が、別の組を起こさないで済むので便利なのだ。雨の場合は終了時に着替えたりすることになるので、同じテントだと起こしてしまい易い。

連続して寝られない第三夜警時（0時～3時）が嫌がれるものだったが、これは早目に寝に行ったジンに任せることになった。勝手に決めていいのか？とレイシンに尋ねると、「そのためでもあるから」と言われる。女性陣を第二夜警時にして、レイシンが第四夜警時（3時～6時）をやると言うので、シュウトは第三に入ることにする。これは石丸に第四夜警時を譲るつもりだった。

「雨だ……」

ユフィリアが夜空を見上げ、掌で雨を感じようとしている。

「後片付けしちやおうか」

レイシンが動き始め、石丸も立ち上がった。ニキータに「シュウトは休んできなよ」と言われたので、シュウトは甘えてしまうことにする。暗い中をテントの方に歩いていくと、光源から遠ざかるほどに闇に包まれて行く。流石に50m程度の距離で迷うことはないはずだ。テントに近づくに連れて雨の勢いは増し、既に小雨になっている。気になって振り返れば、慌てた風に動いている4人の姿が見えた。悪いことをしたかも、と違ってしまふ。

いつの間にもやらテントの内側でランプらしき明かりが灯り、光が

外に漏れていた。暗いと眠れない性質タチなのだろうか？といぶかしく思うのだが、次の瞬間にはジンが剣と盾を構えてテントから飛び出して来た。

「敵だ」

ぐるりと周囲を見回すジン。それに釣られてシュウトも周囲に敵の影を探してしまう。

「いいから、武器を出せ」

「は、はい。」

マジックバッグから弓を取り出し、矢筒を背負う。同時にジンはレイシンに念話で敵に囲まれていることを伝えている。

「用意、できました。合流しましょ……」

「やばい、ヤバイ！」

ジンに押されながらその場所から退くど。歪な形をした大きな「何か」が回転しながら飛んで来たが、辛うじて避けることが出来た。それは地面でバウンドしたことでコースが大きく変わり、後ろにあったテントも被害を免れた。

「岩……ですか？」

「デカイ石っぽかったな。」

テントを巻き込まないために場所を移動する。

(亜人間じゃない……巨人種か?)

雨が強くなつて来ている。手の甲で顔をぬぐいながら 暗視 を使つて敵の姿を探す。確かに何かが動いている気配がする。段々と地響きに似た音がそちこちで聞こえ始める。それはまるで……

(まるで、大木が地面から引き抜かれているみたいな……)

「チツ……………トレントか」

今や、付近の樹木が次々と大地の呪縛から解き放たれようとしていた。仲間と合流しようとする自分達の行動を知っているかのよう に、行く手を塞いでくる。

「レイニー・トレント? ……まさか、“雨の森”! ?」

レイニー・トレント。

雨の時だけ魔物となつて動き出す特殊なトレントで、通常は1〜3体といった少数で現れて冒険者に不意打ちをしかける高レベルモンスターだった。乾いている時は完全にただの樹木であり、魔法での探知にも反応しないし、切つても燃やしても身を守ろうともせず、ゆえに経験点も入ることがない。しかも樹木のモンスターなのだが、雨に濡れていることで水の属性を持ち、火が致命的な弱点ではなく なっている。

そもそも遭遇確率の低いモンスターだったが、ごく稀に集団で冒険者を襲うことがあった。その場合の通称が「雨の森」。不意を衝かれればパーティが簡単に全滅しかねないほど危険なモンスターだ

った。

(どつする？……………何気に、かなりヤバいんだけど)

石丸の炎の魔法が炸裂し、轟音が上がる。しかし敵はまだ動き続けていた。

ジンからの念話で初撃の不意打ちこそ避けられたものの、合流するどころかジリジリと後退させられている。相手のモンスターにどこまでの知能があるものか、これが分断作戦だとしたら完璧に近い。こちらはレイシン、ニキータの他に、石丸、ユフィリアがいるので後衛の支援は充実していたが、レイシンが独力で前線を構築するのは難しい。戦闘継続力こそあるが、こちらから合流しようとするれば後衛が弱点になる。どうしても後退しながら戦う形になっていた。こうなればシュウト達が移動して合流する形しかなかったが、敵に阻まれて突破できないと言っ。

(難しいところだけど……………)

レイシン単独でなら 武闘家^{モンク} の機動力や回避力を活かして敵中を突破できるかもしれない。後衛は、ハッキリ言えばお荷物だろう。となると、このまま後退してゾーンを一度出してしまうって、後衛を安全な位置に待機させ、レイシンが一人で戻るといった流れがセオリーだ。

(もしかしたら今にもシュウト達が突破してくるかもしれない……………)

もしも突破して来た時に自分達が待っていないなかったら、それはやはり薄情な気もする。それがただの感傷だとしても、パーティの信頼関係だなんて、些細なところで決まってしまうものではなかったか。例えばジリ貧であってもこのまま待っていたいという淡い欲求をニキータは自覚せずにはいられなかった。

「後退して、一度ゾーンから出て態勢を立て直そう」

やがてレイシンが決断した。その横顔を見て、やはり単独で突破するつもりらしい事を知る。向こうのHPを考えればそれ程時間はない。もしかしたらレイシンが行っても間に合わないかもしれない。

「それしかなさそうっスね」

石丸が同意する。これでニキータも頷くしかない。雨の勢いが増し、足元が柔らかくなり始めていた。後退するのであっても素早く行わなければならない。

「ダメ。」

「ユフィ……………」

思わず振り向いてユフィリアを見る。しかし、その瞳に感傷の色は無かった。燃えているかのような、真っ直ぐな瞳だけがあった。

「シユウトのHPが5割切ってるの。今から後退してたら絶対に間に合わない。」

「それは……………」

「一か八かなら、……………走ろう」

その言葉が仲間の弱気を打ち砕いたのかもしれない。心に勇気の

火が灯る。

ニキータは黙って永続式の援護歌を「回避力の強化」と「移動速度強化」に変更する。石丸は素早く作戦を立案してみせた。

「今から炎の壁を作って敵を分断するっす。それに向こうとお互いに走れば少しは距離が短くなるっす。」

「……みんな、ありがとう。」

レイシンの礼は葛藤による心苦しさを表していた。

炎の壁の呪文が進行方向に向かって真っ直ぐに伸びる。奥伝にまで鍛えられた呪文は、4 mほどの高さまで炎が吹き上がり、その長さは15 mほどもあった。魔法の持続時間中にこの区間を走り抜けたとしても、その先にまだ50 m近い距離が残っている。

「よし、急ごう！」

レイシンの号令と共に全員で、暗闇に輝く炎の道へと駆け出した。飛んで来た岩を危ないところで走り抜けて回避する。左から炎の壁に焦がされながらも延ばして来た枝をニキータはサーベルで切り飛ばした。ぐんぐんと加速し、直ぐに側面の炎の守りが無くなる。ここからはレイシンを先頭に、一列で走るのは止めて後衛の3人は並んで走る。

前方に薄明かりを頼りに戦っているシューウト達が見えた気がした。

「無茶するなあ、あいつ等」

かなり離れた場所で立ち上がった炎の壁はシュウト達からも見え
ていた。光源を伴って走ってくる4人の姿もだ。ジンは動き続けな
がら、振り回された枝を斬り捨てる。何かの特技を使ったらしく、
雨でぬかるむ足元もなんのその、滑らかな足捌き・体捌きをしてい
た。まるで足元が軽く浮かんでいるかの錯覚を覚える。

そのジンも今はシュウトのフォーローに追われていた。辛うじて投
げつけられる岩は回避できていたが、矢を番えて狙いをつけようと
立ち止まる度にダメージを受けてしまう。ジンもアンカーハウルを
使って敵を引き付けてはいたが、囲まれているのでさほど効果が上
がらない。

しばらく戦っている間に、レイニー・トレントに樹木を操る能力
があることが分かってきた。その操られた樹木は本体に比べて弱く
倒し易いのだが、それを倒してもレイニー・トレント本体を倒さな
い限り、周囲のまだ動いていない樹木が間もなく動き始めるため切
りがない。視界も悪く、現状では本体を見分ける術がない。

シュウトは火に耐性があることを逆手にとつて火矢を射掛けるこ
とを思いついてはいたが、火矢はあっても肝心の火がない。早い段
階でたいまつでも出せば少しは違ったかもしれないのだが、状況
的に火を付けられるような悠長なタイミングなど無かった。

「こつちも行くぞ！」

一瞬の隙を付いて突破する。まるで今までの戦闘はこのタイミン
グを作るためであったかのようだった。

レイシン達は横に並んで走っている。もう少しの距離だった。合
流とはつまり魔法の効果範囲に入ることの意味する。この場合、ユ
フィリアの回復魔法が届く距離に入れば合流したことになるのだ。

その後は後衛の防衛をしなければならぬが、ともかくこの6人が揃えば何とかなるのではないかと思った。

レイシンが敵を引き付け、先に行かせる。そのまま走り続ける3人。しかし行く手にはトレントが立ちふさがってしまふ。同時にシユウト達もその行く手を塞ぐように2体のトレントが邪魔をする。

石丸が殴り飛ばされ、ユフィリア達の足が止まった。

(ダメなのか？ あと一歩なのに……っ！)

「オオオツ!!」

ジンが突進し、片側のトレントに体当たりするかのように一撃を見舞う。

その瞬間、青い輝きが迸った

レイシンが敵を引き付けている間にその脇をパスする。更に10mほど距離を稼いだが、トレントに行く手を塞がれてしまった。石丸が立ち止まり、呪文の詠唱を始めたが強かに打ち据えられ、頭から地面に突っ伏してしまふ。

「いしくん!？」

「まだ、大丈夫っス」

ユフィリアと共に立ち止まり安否を確認する。直ぐに返事が返って来た。ぬかるんだ地面に突っ込んで石丸は泥だらけになっている。ユフィリアを守るべく前に立つ。トレントが相手ではニキータの

持つサーベルの細さが実に頼りない。ユフィリアもライトメイスを構えているが、打撃攻撃ではトレントへの効果は薄いだらう。レイシンはまだ後ろの敵に手こずっていた。シュウト達もトレントに捕まった。そして包囲が縮まって来ている。

(もう一步、なのに……………っ)

その瞬間、目の端に青い光が見えた。

轟音と共に、折れた樹が倒れる。…………地面に倒れた樹の枝や葉を突き破るようにして、駆け寄る影が二つ。

「アンカーハウルっ!!」

ニキータ達の前に立ち塞がるトレントは、背後から強制的にターゲットの変更を迫られる。特技の使用に立ち止まったガーディアン守護戦士の脇をアサシン暗殺者の弓使いが駆け抜ける。走りながら矢を番えりと、ジャンプしながら石丸を背後から狙う一体に向けて矢を放つ。命中。

「みんな、大丈夫か？」

現れたシュウトは颯爽としているどころか、泥に汚れ、傷だらけの姿だった。ユフィリアは何も言わずに回復呪文を唱え始める。

「お待たせ」

レイシンが敵を振り払って再合流する。

「…………じゃあ、片付けちまおうか。食後の運動といこうや。」

ジンが勝利を宣言する。まだ6人が揃っただけだったが、それだけでも勝てる気になっていた。

ここからが大仕事だった。

石丸がもう一度「炎の壁」を作り、シュウトは火の点けられていない火矢をその壁越しに射る。レイニー・トレントには通じないが、操られただけの樹木には効果があった。また石丸は「炎の剣」の呪文をニキータのサーベルに付与し、「火の矢」の呪文、「火の球」の呪文を駆使してレイニー・トレントを区別して行く。

レイシンは素手だったのが、いつの間にか朱塗りの爪系武器に切り替えて戦っていた。ジンとのコンビネーションが機能し始めると後衛を守りながら連係を構築してゆく。

ユフィリアは一生懸命に走っていた。途中2回ほど転んで尻餅を付いていたが、それでもジンやレイシンから離れないように付いていく。それだけで外から投げつけられた大きな石は狙いを外す効果があった。また自身に掛けていた反応起動型回復呪文を使って呪文を詠唱する石丸のガードに入り始める。鎧を着けていないので無茶はさせられなかったのだが、ユフィリアが動くことでパーティ全体にリズムの様なものが出てきていた。次第に連携が噛み合うことが増えていく。

最後に残ったレイニー・トレントをジンが叩き伏せると、操られていた樹木がその場に根を下ろした。

雨の中、周囲には倒れた樹の残骸が散らばっている。周囲の樹が

なくなったことで空が剥き出しになっていた。早くも雨はその勢いを減じている。ずぶ濡れになってしまったが、今は小雨が気持ちよい。

「つつかれたー！」

ユフィリアが倒したトレントに腰を下ろす。途中で何度か尻餅を付いていたため、座ってもこれ以上は汚れようがないくらいだった。

シウトも何度か死に掛けたためドロドロになっている。一度は投げつけられた岩の直撃を受け、そのまま下敷きになるところだった。痛みはそこまで酷くはないが、映像的に心臓に良くないシーンだった。

ドロップアイテムを集めてテントの方に戻ってみると、大型のものも奇跡的に無事だった。女性陣の小型テントは潰れて中まで雨に濡れてぐちゃぐちゃだ。幸い特に荷物は無い。

「今晚、どうする？」

ジンが誰にともなく尋ねる。モンスターの出た場所で寝るのはどうかと思わずにいられないが、別の場所にテントを立て直したりする作業を雨の中でやるのはいかにも面倒だ。女性用のテントもどうにかしなければならぬ。

「もう、一緒に寝ちゃえばいいんじゃない？」

ユフィリアがあっけらかんと言った。

「そうね、着替えたり身体を拭いたりだけ先にさせて貰えば……」
ニキータも同意する。精神的な疲労によるものだと思うが、困難を共に乗り越えたことでチームとしての一体感が出来つつあるのかもしれない。

「それじゃあ、お湯を沸かすつス」
「助かるう〜」

なんとなくドキドキするものがありながら後始末を始めた。

雨避けのタープを組み立て、湯を沸かし、女性用のテントを片付ける。食事をした場所に戻って穴を掘り、生ゴミの始末も忘れずに行った。女性陣が着替え終わると、男性陣が交代した。乾いた衣服に着替えるだけで体がずいぶんと温まる。簡単に後始末するつもりだったが、結局かなりの作業量になってしまった。

夜警を立てるのを止め、結界用の呪文を石丸が設置する。そうしてやっとテントの中に落ち着くことが出来た。火の始末をしてしまいう前に沸かしてあった温かいお茶が配られる。これで今日の仕事は終わりだろう。

ランプをテントの天井部分から吊り下げ、柔らかい明かりだけにする。内側に仕切りでもしようかと提案されたが、別に要らないとユフィリアが断った。すぐにでも眠りたかったのだが、何だか眠れない。くたびれてはいるのだが、厳しかった戦闘の余韻か、女性陣が一緒だからか、心はまだ少し興奮していた。

「なんか、修学旅行みたい」
ユフィリアが足をパタパタさせている。

「おいおい、修学旅行なのに、男と一緒に部屋で寝たのか？」
「問題発言っスね？」
「ちがつ、男子がなんか遊びに来たりするでしょ？イヤらしい想像しないで！」

「いや、別にイヤらしい想像なんてしてないけど？」

「そつだよね」

「あれー？何を想像しちゃったのかな？」

「サイテー！」

ユフィリアが顔を真つ赤にしながら「中学の話だもん！」と弁明し、ニキータは援護もしないで腹を抱えて笑っていた。騒ぎが収まったところでレイシンがユフィリアの決断があったから切り抜かれたのだと持ち上げる。落したり持ち上げたり忙しい。ユフィリアは照れつつも上機嫌だった。

シュウトは青い光のことを考えていた。ジンはあのトレントを一撃で倒してしまった。もしかしたら暗殺者の使う アサシネイト以上の攻撃力ということになるのではないか？いや、乱戦だったから既にダメージが蓄積していたのかもしれないだろう。そつでなければ説明が付かない。

「ジンさんって……」

「あ？」

「いえ、いや………サブ職って何なんですか？」

「ん？ 竜殺し だけど」

「ブツ、それガツカリ職じゃないですか！」

「ブルータス、お前もか……」

なんとなく訊きそびれてサブ職のことを聞いてしまったが、こつちはこつちで地雷だった。

「いや、もつといいサブ職に変えましょうよ！いくらでもあるじゃないですか！」

「イヤだよ、今から変えるのめんどくさいじゃん」

「手間を惜しんじゃダメですって！」

「あーもう、ウルサイなあ。それよりドラゴン倒しに行こうぜ？もうちよい（サブ職の）レベル上げたいんだよなあ」

「ドラゴンって……」

「いや、ホラ、弱いヤツでいいんだって。あんまり飛ばないヤツとか。」

「だから、サブ職を変えればいいじゃないですか！」

「……ドラゴンかあ〜」

終いにはユフィリアまで目を輝かせる。話を打ち切るべく、シユウトはランプの明かりを消してしまった。ドラゴンなんて冗談ではない。それでもしばらくは暗闇の中で話たり、クスクス笑う声が止まらなかった。

微かな音を感じてシユウトは目を覚ました。それは音というよりも「外の気配」とでもいうべきものだったかもしれない。肩まで掛かっていた毛布を除けて明るい方に目をやると、天幕の一部が開け放たれたままになっていた。これは「さっさと起きろ」というメッセージなのか？と寝ぼけた頭で考えてみる。いや、きつと寝ている間にジンさんがオナラしたとかで空気を入れ替えているに違いない、と思うことにしておいた。今は二度寝の誘惑に抗し難い魅力を感じている。その前にチラリと周囲の状況を確かめるのは、自分だけ寝過ごすような失態を避けたいと思うからだ。

（まだ寝ているのは……いや、起きてるのはレイシンさんと二ナだけか）

これならまだ寝ていても平気そうだったが、ユフィリアが寝ているのにニキータがこの場を離れているのはいかにもな無用心に思え、ちよつとしたイタズラ心が刺激される。

モゾモゾと少し移動してユフィリアの寝顔を見してみる。女の子の寝顔を見ることに罪悪感があるためかもしれないが「これが天然ものの威力か」と、天を畏れる気持ちになつてしまった。愛玩動物的可愛さでムニヤムニヤと寝ている姿は、びっくりするほどに愛らしい。正直に言つて、起きて動いてくっちゃべつていいる時よりもずっと可愛い気がする。第一、油断している時はもうちよつと雑なものじゃないのだろうか？ウチの妹的なヤツなどは………と云う風につらつらしみじみと哲学的思考（？）が走り始めてしまう。

それからハツと自分の醜態に気が付き、誰かに見られていなかっ

たかをおそるおそる確かめる。誰かに見付かると後々まで痛い目を見ることになってしまふ。ニキータに見付かったらせつかく生まれつつある信頼関係に致命的なダメージを負いかねないし、それで距離をとられてしまえば全てシュウトの責任ということになる。ジンに見付かれれば後々までからかわれるネタにされかねない。どちらかと言えば後者の方がずっと嫌なのだが、どうやら無事にやり過ごせたようだ。

ジンの方は、もっと豪快に寝ているかと思っただが、イビキもなく、うつ伏せでじつと寝ている。次の瞬間に飛び起きて自分を笑ったりしないものだろうか？と疑り深くなるのだが、どうやら本当に寝ているようだ。たぶん大丈夫だろうと胸を撫で下ろし、気分を変えるために外に出てみることにする。なんだか、このままテントの中にいるのは危険な気がしてならない。

先に起きた2人もこんな感じで居た堪れなかったのだろうか？

外に出ると曇り空に特有の柔らかさがあった。雨は既に止んでいる。光もそうだが、夜に雨が降ると翌朝は少し暖かい気がするものだ。地上の熱が雲に阻まれて逃げられないからだろうか。そうして空を見ていたら、昨夜の激しかった戦いのことを自然と考えていた。空が良く見えるのはトレントを倒してしまったからで、周囲の景色はがらんとしたものになっていた。

高レベルのレイニー・トレントが7体。その操る樹木が1体につき約2本づつ。しかし倒した敵は20体では利かなかった。操った樹木を前面に押し立て、それが倒されてもまた近くの樹木を操るという作戦を繰り返したためで、40体近くの敵を倒すことになった。人間の思考からすれば当たり前前の作戦行動かもしれない。けれど、モンスターが戦術かそれに似たものを駆使してくると、それが何故かシュウトをイライラさせた。嫌な予感にも近い。

シュウトの苛立ちの原因は、今までのようにモンスターを単純に倒していいのかどうかに対する不安にあった。例えば 大地人 にしても単なるゲームの登場人物ではなく、ほぼ普通の人間といってよい。ならば、ある段階を越えて知性のある「敵」が現れたとしたら、それはモンスターだからという理由で倒してよいものなのだろうか。

しかしコレとて人間の知性レベルを基準とした傲慢な思考に過ぎない。人間の知的水準に満たないものはモンスターだからと倒してもよいと考えるのであれば、逆に人間を圧倒する知的存在によって人間が虐殺されても文句は言えないことになるだろう。 冒険者 達がある程度の文化をもっているゴブリンを虐殺しているように、だ。

しかも外見からの判断は更なる問題を引き起こすだろう。外見が醜いから敵などと決め付けたとしても、話してみれば知的で穏やかな種族かもしれない。外見が美しいから知的だと思っても、攻撃的で邪悪であるかもしれない。

加えて個体差の問題にまで踏み込んだらどうなるのだろうか。人間にだって善人や悪人がいる。より正確を期するのであれば、「状況に応じて」善にも悪にでもなるといふべきかもしれない。それなのに、否、それだからこそ、たまたま邪悪な個体との出会いがその種族全体を悪と決め付ける理由になりはしないのだろうか。もっと言えば、邪悪だと見做された種族の中に善人のような個体は全く存在しないのだろうか……。

(その意味ではゲームって楽でいいんだけどなあ)

雨上がりの空気を胸に吸い込み、ため息のように大きく吐き出す。

身体からだの目覚めとともに新しい活力が湧き上がってくるのを感じる。1度の冒険としては既に十分戦ったつもりでいたのだが、あらためてサファギン退治へ向かおうという気分になって来た。自分でもやるべきことをやるうと云う思いが強くなる。

「オハヨ」

「ああ、おはよう」

声を掛けてきたニキータは昨夜から女性らしい姿をしたままでいた。今朝は「隙の無さ」が失われているようで、どこか色っぽく感じる。女性陣は2人ともやはり美形なのだとこのことを強く再認識させられた。

「早起きだな。どうかした？」

「ん、レイシンさんとちょっと近くの川にね。髪の毛をちゃんと洗ったりしたかったんだけど、昨日の雨で川が濁っててダメそう。それに食器の洗い物で水を使ったりした分を少し補充したかったから」
レイシンと一緒にというのは単独行動を避けたのだろう。水の方は汲んできてはいるようで水筒を軽く掲げてみせた。多少濁っていても後で水を清める魔法を使えばいいからだろう。

「それで、レイシンさんは？」

「向こうで朝食の準備をしてる。テントの中で食べようって」
「分かった」

ニキータはユフィリアの様子を見にテントに入っていく。

朝食のメニューは簡単そうなのに何故か美味しそうなサンドイッ

チと、昨晚の残りシチューを、アキバでもまだ貴重品の牛乳を使ってホワイトシチュー風に味付けを変えたものだった。朝からごつい食事の気もするが、昼は火を使わないように保存の利く物で簡単に済ませることになるので、美味しい食事でありつけるチャンスを逃すわけにはいかない。冒険者の体は一説によれば太らないと言われているので、女性陣も旺盛な食欲を示すのが割りと普通だった。

「おいひい〜。もう今日はこの後一日ゴロゴロしていたい気分」

毛布を巻きつけたままのユフィリアがやる気のないことを言い始める。ちよつと同意する部分はあるが、初志貫徹でやり遂げてしまわなければならない。そう口を挟もうとしたところで、

「そういえば、おかげさまでレベル79になりました！」

と話題がアクロバットした。

「そうか、じゃあ“レベルアップおめでとうソング”でも歌うか」

「……なんですか、それ？」

「あれ、ネタが古すぎるか？」

段々とジンが変なことをするのを阻止するのがシュウトの役目になりつつある。

「もうすぐ80かぁ。これまでは本当に早かったけれど、ここからは大変よね。」

ユフィリアの頭をなでながら、ニキータがしみじみとした声で言った。

ユフィリアは速成もいい所で、周りにいた90レベルのプレイヤー達に連れまわされる形でガンガンレベル上げをして来ていた。口々に「さつさと90レベルになっとけよ」と言われ続けていたことも大きい。速成には問題も多いのでみんな本心からそう言っているわけではないのだが、実際には女性慣れしていないプレイヤーが話

題にできるのはゲームのことが中心になりがちで、初心者を相手に上級者が言える「あまり意味のない挨拶」みたいなセリフとして「さっさと90レベルに〜」と言われているだけだった。それでも微妙な憐れみのニュアンスがユフィリアを傷つけている部分があり、彼女はともかく一人前になりたくて90レベルになることを目標にしていた。

大災害 後もあちこちのギルドで実戦形式の戦闘訓練に混ぜられていたのだが、大半のメンバーが90レベルの戦闘ギルドでは当時65レベルになったばかりのユフィリアには丁度いいレベルのモンスターを相手にした訓練となり、結果的にこの一ヶ月も順調に成長を続けることが出来ていた。

この間にも様々なプレイヤーからアドバイスをされたのだが、大まかに纏めると、(1)絶対に死なないこと、(2)回復しすぎないこと、の2点を守っていれば恐ろしいことにヒーラーはなんとかなるのだという。それ以外の細かい部分は詳しいプレイヤーが気をつけて配慮してくれていたそうだ。

ユフィリアのプレイヤーとしての熟練はこれからの重要な課題でもあるだろうし、そもそも 大災害 後の世界では80レベル以上のモンスターと戦う機会そのものが激減していた。レベル90に到達するには時間を掛けて同レベル帯の敵モンスターを倒して経験をつまなければならぬ難しい時期になるのかもしれない。

この時期は既に 黒剣騎士団 や シルバーソード といった一部のギルドがレベル91を目指して活動を開始してはいたが、思ったような成果は上がっていなかった。

「ジンさんも一緒に90レベルになっちゃおうよ」

「それも悪くないな。じゃあ、一緒にドラゴン倒しに行くか？」

「行く！」

「だーかーらー、なんでドラゴンなんですか!?!」

「……シュウト、もしかしてドラゴンが怖いのか?」

それを聞いて意外と笑い上戸らしきニキータが吹き出し、その後もしばらく笑い声をかみ殺すのに苦労していた。

「おまえなあ、ドラゴンと戦ったことも無い癖に」

「戦ったことはないけど、きっと大丈夫だよ。だって私、ジンさんと1つしかレベル違わないし」

「そうそう、大丈夫だぞう?」

小型〜中型のドラゴンはレベル80付近のものが多くいるし、群れやすいワイヴァーンはともかく、ドラゴンは単体で出現することが殆どだ。HPはかなりあることと、対物理・対魔法抵抗をもってあるのでダメージが通りにくく、自然と長期戦になるためユフィリアのプレイヤーとしての成長という観点からすれば最適の相手と言えないこともない。

問題は経験を積む相手としては効率が悪すぎるということだった。ドラゴンと言えばどこかの洞窟にたんまりとお宝を溜め込んでいるイメージがあるかもしれないが、それらは上位竜もしくは成竜と呼ばれる個体で、その強さは小型〜中型サイズとは段違いなのだ。現在問題になっている小型サイズの大半は上位竜に比べれば、エサを探しているところで遭遇するただのハラペコモンスターに過ぎない。お宝などはほぼドロップアイテムに限定されてしまうし、6人パーティで挑むのでは勝てたとしてもかなりギリギリの戦いになるだろう。安定して倒すにはフルレイド以上の戦力で挑みたい相手だ。結局は時間当たりの労力に対しての実りが少な過ぎるのだ。しかもこれはゲーム時代の話でしかなく、実際のドラゴンを前にして恐怖せずに戦えるかどうかはまた別の問題だろう。そこまで考えれば、レベル80付近でドラゴンよりも弱い敵なぞは幾らでもいる。それこそ昨晚のレイニー・トレントだって、危うく全滅しそうになった

とはいえ、ドラゴンよりも遙かに組し易い相手には違いない。

ちなみにレイニー・トレントはランダム性の強いモンスターなので別の日に同じ場所に来ても再出現するわけではないらしい。加えて水をかけても変化するわけではないらしいので、出現するかどうかを確認するには雨を待たなければならぬが、もうすぐ梅雨も終わるだろう。

「それに、第一、……………」

「？」

言い難そうにニキータの方に視線を向ける。ニキータは知ってか知らずか、シュウトのその視線の意味に気付いた様子は無かった。

(それに第一、このパーティがこの先も継続するかどうかは分からないじゃないか……………)

朝食が終わり、しばらくしてから出発となった。

目的地のサファギンの洞窟に行く前に、念のために 大地人の集落でクエスト登録をしておきたいと石丸が言う。サファギン退治の場所から2キロ程度の距離らしいので、その程度の回り道をしても特に大きな変更とはならない。

なんとなく、全員の口数が少なかった気がする。数回の戦闘をこなしつつ、ゆっくりと移動していた気がしたのだが、それでも昼前には三浦半島の南端に位置する 大地人の集落に到着していた。

その集落は50戸もあるかどうかといった場所で、昼飯時でちょうど良いのでここで食事をしていこうとユフィリアが言ったのが運の尽きだった。そもそも宿や食べ物屋があるわけではないし、よく聞いてみると、ここはまだ新しい料理法が伝わっていなかった。

ジンと石丸が村長の方でクエストを受ける手続きをしに行き、レイシンを中心とした残りのメンバーで食材を仕入れ、炊き出しみたいな真似をすることになってしまった。料理はシンプルに豚汁にしたいところだが、基本的に味噌がない。そのため今度もスープになる。

当然のことながら、最初は誰も寄ってなどこない。基本的に大地人は冒険者に好意的というわけではない。クエストの発布が盛んであったり、プレイヤータウンが近い場所なら商売人は金目当てに気さくにもなるものだろうが、一般の大地人では物珍しさ、噂に伝え聞く恐怖とが半々と云った感じになる。

結局はユフィリアとニキータが好奇心の旺盛な子供達を巧みに誘惑した。一度火が点いてしまえば、後はなし崩しに話が広がり、手隙の村人から順に、集落に住まう大半の大地人が集まって来ることになった。

「ナルホド、埒^{ラチ}があかないから子供を拉致^{ラチ}したわけか」

「いや、そんなドヤ顔とかされても……」

スープのお碗を片手に焼き魚を食べつつ、意外と大事になっていて驚いたジン達に、大まかな流れを説明する。レイシンは料理法の解説のお礼として半ば押し付けられた数々の食材を受け取って上機嫌になっていた。

「そつちはどうだったんですか？」

ジンが焼き魚を限界近くまではお張り、咀嚼していたので石丸が代わりに答えた。

「どうやら今日がクエスト期限の最終日ということらしいっす。」

「じゃあラッキーだったね、私達、間に合ったわけでしょ？」

とユフィリアが言う。朝は「一日ゴロゴロしていたい」とか言うてたような？

「そうなんすが、止めておいた方がいいと釘を刺されたっす。例年に比べても今年は異常だとかで、とてもクエストに見合った報酬は出せないとか言ってたっす」

「数が多いのかしらね？」

「そうらしいっす」

「それで、どうしたんですか？」

「そりゃ勿論、受けてきたサ。村から貰う報酬なんて別にどっちでもいいしな」

口の中のものを飲み込んだジンがそう付け加える。

その後もなんだかんだと時間をとられ、気が付けば既に14時を回っていた。遅くとも15時前には仕事に取り掛かりたいところだった。

「それじゃあ、出発しますか」

「そうね」

村人達に挨拶したりは面倒なので裏手に回り、そつと居なくなることを選んだ。既にお礼は十分に受け取っている。感謝して欲しくてしたことではない。善行を施せば自分が歡ぶものなのだ。満更でもない気分になれる。ついでに村人にとっても脅威であろうサファ

ギンの数も減らしてしまうことになるのかもしれないが、それはやはり「ついで」に過ぎない。

冒険者 は、飽く迄も自分達の目的や利益に従うのみ、である。

「なんだ、この数……………」

戦端を開く前にと遠くから偵察したのだが、現実で毘沙門湾と呼ばれていた場所一杯にサファギンがウジャウジャと沸いていた。

「そついえばジンさん、フィールドモニター戦域哨戒やるって言っていましたよね？」

「えつと、1、2の3、……………いつぱい」

冷たいジト目で見やる。無言のツツコミに耐え切れなくなったか、

「冗談だろ、ちよつと待てつて。えつと、1、2、3……………89、90、91つと。ざつと1/4数えて91。全体でえつと、364体。海だから見えてないのもいるとして、400体ぐらいか？」

つまり少なくとも60倍以上の戦力比ということになる。

90レベルのパーティの場合、サファギン相手なら10倍の60体は楽に倒せる。連係が上手く機能しているパーティなら120体でも大丈夫だろう。問題は連続戦闘になった時のMPの消耗度だ。

バード吟遊詩人 が仲間にいる場合、永続式の援護歌を使いつつ、呪文を節約しながら戦えば180〜200体ぐらいまでは行けるかもしれない。しかし、それはいわゆる理論値というヤツであって、普通

に考えても限界の2〜3倍の敵がいる計算になる。途中でMPがなくなるのは間違いないだろう。MPがなくなつたからといってもすぐにやられて全滅とはならないが、窒息したみたいにジリジリと追い込まれていくことになる。

「もしかして フルレイド で挑むクエストだったとか？」

ニキータが石丸に問いかけていた。確かに フルレイド なら4パーティ分なので、1パーティ100体分が担当になる。歯ごたえはあるが、熟練した戦闘ギルドになら楽しめる難易度になるだろう。

「そんなはずは………いや、そうだったかもしれないっす」

石丸は頭をかいていた。まだ納得いかない風だが、現実にこの数は6人パーティには無理があつた。

「それにしても、数が多過ぎる気がするっす。この数じゃ フルレイド でも高めの難易度になってしまっつす。」

「それって新しい拡張パックのせいかな？ だったら、凄いアイテムが出るかもしれないよね？」

ユフィリアが都合の良いこと言う。勝てるかどうかが問題なのだ。クリアできなければお宝だつて手に入らない。

「じゃあ、そろそろ作戦を決めようか」

ジンがあつさりとした調子で口を開く。

「「えっ？」」

シュウト達は綺麗に唱和していた。レイシンは苦笑いしている。ジンが無茶を言うのも予想していたのだろう。

「ど、どうするんですか？」

シュウトはおそろおそろ質問してみる。

「そりゃあ、4〜5回も休憩すりゃ400体いてもどつてことないんだし、オヤツ食って突撃すりゃ何とかなるだろ」
それを聞いても誰も何も言わない。

「あの……この戦いは連続戦闘になるはずっス。一端戦い始めたら最後まで戦い切るしかないはずっス」

石丸が状況の補足をしているが、ますます無理なように聞えてきた。

「じゃあ、魔法使える人だけMP回復しに休憩するってこと？」

ユフィリアの余計な一言に愕然とする。シュウトは思わず睨みつけていた。

「基本方針はそれでいいか。ユフィと石丸はMPが尽きる前に休憩しに行くこと。特にユフィは仲間のHPを回復したりの準備をしてから休憩に行くんだぞ。ニナも援護して一緒に休憩に行けば戻りも早くなるだろ。……俺達3人は仲良く地獄行きだから、そのつもりで」

どうやらシュウトと一緒に地獄行きになったらしい。これは久しぶりに大神殿行きかもしれないなあと思う。ユフィリアの休憩中に死ねば復活されることもなくストレートに大神殿行きだ。しかもジンもレイシンも生き残って、自分だけって結果になりそうな気がして仕方が無い。

「まあ、俺とレイで300までは行けるだろうから、後はなんとかしろよ？」

300体倒すなどとは完全な気休めにしか聞えない。そういう気休めを言うのも大人の務めってヤツなのだろうか。

その後、しばらく質問や相談しながら作戦や連係の細かい部分を打ち合わせる。ジンがあまりにも大丈夫そうに言うものだから、なんとなく大丈夫な気がして来たというべきか。ユフィリアなんかはすっかり勝つつもりになってしまっている。それ、騙されてるだけだぞ、と心の中でツツコミを入れる。

一人で辛気臭い気分になりながらも、矢をすぐに取り出せるように準備しておく。軽く100本以上は使うことになるだろう。魔法のカバンの中には特殊な矢も含めて400本近く入れてあるから、矢数自体は大丈夫だ。100本まで取り出せる魔法の矢筒には通常の矢を入れておく。特殊な矢を30本ばかり入れた矢筒も用意して2つ背負っておけばいいだろう。その他にもカバンの中に予備の矢筒を2つ用意し、取り出し易い場所に入れておく。

見れば、レイシンが異様な武器を装備していた。普段は黒い棍やスパイクチェイン、朱塗りの爪などを使っているのだが、今回はメイン武器を使うそうだ。

「珍しい武器ですね」

好奇心の疼きを押さえられずに声をかけていた。他のメンバーも耳を^{そはだ}敬^{そはだ}てている。

「ベースはファキールズ・ホーンズなんだけど、これはドラゴンの角で作られてる。ドラゴン・ホーンズだよ。悪目立ちするから普段は使わないんだけどね。」

ファキールズ・ホーンズとはインド辺りの^{ファキール}托鉢僧の使う武器で、山羊の角で作ったものだ。

レイシンの持つものは、互い違いに合わされた小型ドラゴンの角で作られていた。中央には龍頭を模した飾りがあり、それがまるで

盾のようだ。ファンタズマル級でもおかしくない凝った造形なのが、アーティファクト級の装備だという。普段から棍のような両手両刃武器を使っている理由がコレだった。

シユウトは気になってチラチラと見ていたが、ジンは特に装備を変える様子がない。普段通りにブロードバスターソードとナイトプレート、ラウンドシールドのままだ。荷物をごっそそをやっているのは例のオヤツの準備だった。

「いつとけ」

差し出された料理は見た目は美味しそうなものだったが、

「美味しくなーい！これ、昔の料理!？」

ユフィリアの言うように、メニユーから作る“湿ったせんべい”だった。今ではかなりの高級品でも値崩れが止まらず、タダ同然の値段で取引されるようになっていいる。

「なんで今更こんなものを？」

シユウトも食べながら質問する。美味しくはないが、食べられないと駄々をこねるほどのものでもない。

「戦闘前のスタミナ食だな。……旨い料理がこの身体にとって良い物とは限らないだろ？」

ジンがニツコリと笑いながら言うのを見て、口をへの字にして抵抗していたユフィリアも食べることにしたらしい。一生懸命に噛んで、一気に飲み込んでしまおうとしている。案外、聞き分けがよい部分があるというか。ニキータがタイミングよく用意した飲み物で飲み下し、食べ切っていた。

「大手のギルドは“栄養バー”と呼んでるところもあるんスよね」

石丸もなんなく食べ切っている。

ジンは全員が食べ切ったところでその時が来たことを告げた。

「じゃあ、行こうか」

09 サファギンとの戦い

「よしっ、次！」

オープニングから既に50体を超えるとところまで来ていた。

シュウト達は今までのところ、オーソドックスな連係で戦っていた。新しい連係が機能することは分かっていたが、まだ慣れていないため、どこかでリズムを崩せば穴が出来てしまう。乱戦の呼吸を掴むまでは控えておくことにしていたのだ。戦いは激しいものだったが、十分に対応できている。MPの消費は抑えつつ、殲滅速度もそれなりにあった。しかし、それでも一向に数が減る気配はしない。

サファギン達は近くまで泳いで来ると、低い姿勢で立ち上がり、かなりのスピードで次々と突っ込んで来る。まだ倒していない敵自体が邪魔になれば良いのだが、そのまま前衛の2人に対する突進攻撃^ジにならないようにシュウトが最優先でチェックしている。シュウトは昨日のたった1日の経験で戦術的な視野までもが広がりつつあるようだった。

レイシンは特技の使用を控えめにしていたが、ドラゴン・ホーンズの威力とその秘められていたディフェンス能力を活かして奮戦していた。これまでは 武闘家 が本来使えない盾の機能はディフェンスに対するボーナス値として処理されていたのだが、 大災害 以後は本来のデザイン通りに盾のようにして使うことが出来るらしい。

ジンは、かなり真つ当な 守護戦士 の戦い方をしていた。アーカーハウル を使って敵を自分の方に誘き寄せ、ダメージを受けながら敵を薙ぎ払ってゆく。その姿は本当のところちょっと、いや、

かなり物足りない。

石丸は集団攻撃用の呪文をポイントになる部分で使いながら、M消費コストの良い魔法を駆使して戦っている。サファギン達の上陸はまばらなため、範囲攻撃系の呪文で集団を一気に殲滅することができない。纏めて始末できないのはもどかしいのだが、まだしばらくは戦線に残れるだろう。

ユフィリアは情報監視者オペレーターをしているはずだが、ニキータと組んで装甲を活かした囷役もこなしている。

ニキータは永続の援護歌に「剣速のエチュード」と「瞑想のノクターン」を選び、自身も攻撃へ参加して特に弱った敵に止めを刺していた。

80体を過ぎた頃、何が切っ掛けとなったのか、サファギン達が5体、6体と次々と押し寄せて来た。その光景はまるで津波のようだ。戦況は悪化しつつある。しばらくしたら石丸とユフィリアはMPを回復させるために休憩しにいく予定だったが、今の勢いではサファギンに押し切られてしまいそうだ。

「ちよっと、激しくなつて来たわね！」

それでもニキータは笑っていた。苦しくても、苦しいからこそ笑える部分は彼女を魅力的にしていた。

「まだ行けるさ！」

シュウトも負けじと強がると、前に立つジンに向かって叫んだ。

「ジンさん！ 少し、押し返しましょう！」

「よし、ギアを上げるぞ！」

敵を見据えながら、その言葉を返してくる。その表情は見えなかったが、不敵に笑ったに違いない。

シユウトは別の意味で緊張する。自分達の新しい連係は各人の想像力が足りなければ効果的に機能しないからだ。敵よりも恐ろしいのは味方であり、更には自分自身を信頼することなのだった。

本気のジンに対して身構えていたのだが、しかし、自分の安っぽいイメージはたやすく覆されてしまう。

荒ぶる戦神。

ジンの戦闘スタイルはその場に居つくことなく動きながら戦うもので、相当に上手いプレイヤーという印象だったが、今にして思えば、力強さには欠けていた。ギアを上げて“そうなる”と思っていたが、本当にギアを上げたらしい。カづくでまとめて数体を吹き飛ばしながら戦い始めている。受けるものは受け、捌くものはきつちり捌く。しかし基本のスタイルは変わらないようで、斬り抜けながらポジションを次々と変えていく姿に戻っていた。いままでのように丁寧過ぎず、かといって雑でもない。それはシンプルに洗練された姿だった。

「ドラゴンと戦ってるみたい……」

ユフィリアが呟き、その意味するところに反応したシユウトは鳥肌を立てていた。

相手はもちろんだかがサファギンだ。それでも「ドラゴンと闘うかのように」戦う姿こそが、ジンのスタイルなのだろう。

(ジンさんのサブ職は、 竜殺し じゃないか……！)

閃くものがあって、何かの答えに辿りつきそうだった。しかし、現実の、目の前のサファギン共がシュウトの小さな想像を彼方へと押し流してしまった。掴み掛けた答えを惜しみながら心に刻む。いつかもう一度、この瞬間に感じた「答え」へと必ず辿りつくことを。

腹いせとばかりに、自作した「高威力・高精度の矢」を番える。遠間の敵を射ると、狙い違わず顔面のド真ん中を貫いていた。試作品の仕上がりは実戦でも申し分ない。

敵の増える数と、減る数とが徐々に均衡し、そしてゆっくりと逆転を始めていた。明らかに殲滅速度が上がっている。しかし、ここでまたもや状況が変化を始めていた。

「ニナさん！ここで出し切るっス！」

石丸が叫んでいる。MPの限界が近いのだろう。休憩前に魔法を出しつくすという合図だ。

「OK！ 輪唱 する」

攻撃魔法の効果を最大にするべく、吟遊詩人であるニキータが 輪唱 の援護歌を使うという意味だ。

ユフィリアは別に回復魔法を唱え始めていた。休憩に入る前の準備として、最大に回復したところに個人用の反応起動型回復呪文まで乗せるのだ。そこまですれば休憩に入ってもしばらくなら耐えられるかもしれない。

石丸とニキータのデュエットは後方の敵戦列を突き崩し、空白を

生み出していった。このタイミングが最善だが、ここでシュウトが言ったのでは締まらない。

「今だ！」

ジンが了承を与える。

「下がります！」

そう言い残してユフィリア、ニキータ、石丸の3名が素早く休息に入った。彼女らはこんな所でグズグズしたりはしない。一秒でも早く戻るためには、一秒でも早く休息に入らなければならぬ。理解に支えられた理知的な関係。これこそがシュウトの求めていたエルダー・テイルの醍醐味みたいなものだったが、そこに信頼を感じた気がして、妙に惜しい気分になってしまう。

「なかなか、悪くないじゃん」

レイシンの言ったセリフがシュウト達の気持ちを代弁していた。

「そうですね」

「……だな」

ジンが場に残った最後のサファギンを倒し、シュウト達は一息つく時間を得ていた。しかし、海から上がってこようとしているサファギンが既に見えている。彼らが生み出したこの休憩も何秒かしか持たないだろう。

ジンとレイシンは地面に武器を突き刺すと水筒から一口、二口と水を飲んでいる。

シュウトは素早く矢の準備を済ませてしまう。ここからが本番だ。これまでに倒したのが150体程度。いや150には少し足りないぐらいだろうか。まだ全体の半分にも届いていない。たかがサファ

ギン、されどサファギンだ。

上陸したサファギンが1体、また1体と突進を再開している。

「さあ、地獄の始まりだ」

楽しそうに嗤う 守護戦士 の声を聞きながら、プレッシャーに武者震いする。これからしばらくこの3人で戦線を支えきらなければならぬ。シュウトは一人場違いな状況に立たされている気がしていたのだが、同時に意外となんとかなくなってしまつような気もするのだった。

ニキータ達はサファギンの見えなくなる所まで退避し、無事に休息に入ることが出来た。事前に下見しておいた休息場所で問題なかったようだ。戦線から抜けるのはもどかしかったが、一秒でも早く魔法使いの2人を戦列に戻すためにニキータ自身も一緒に下がり、永続式の援護歌でMP回復の支援を使うという計画通りの行動だった。

正直なところ、彼女は休息できてホッとしていた。回復役なしで前線を維持するプレッシャーは大きい。しかも今は彼女の援護歌の効果範囲外にいるから、残った3人は更に厳しい状況で戦っていることだろう。

ユフィリアは真剣な表情で黙っている。たぶん自分のステータスを見ながら、早く回復しないかと考えているのだろう。彼女は一つの事にのめり込むところがあるので、あまり他のことを色々とは考

えなかった。戦うことへの恐怖や、勝つか負けるかも気にしない。早く戻って、回復する。ただそれだけの単純な思考が危なっかしくもあり、こんな状況においては強みにもなった。

石丸は荷物から何かを探していた。彼はどこか感覚的にズレているところがあつて、読みにくい性格をしている。基本的に善人なのだが、女性に対する興味を感じないため「安心な存在」というイメージだけがあり、こちらとしても深く考えたくない相手だった。…今は飲み物を取り出していたようだ。

「お茶でもどうつスカ？」

「あ、ありがとう、いしくん。……二ナ、先に飲んで？」

放心していたユフィの意識が戻る。気が回らなかつた自分を恥じたのか、少し慌ててニキータに先を譲る。

ニキータは援護歌が途切れるのを心配して躊躇ったが、戦闘中にポーションを飲むこともあると考えて貰うことにした。ここはユフィリアのためにも率先して飲むべきだろう。

「ありがとう。……石丸くん、いただくわね？」

永続式の援護歌は厳密には声ではなく、音自体を操作することに近い何からしい。単発の援護歌を同時に使うことが出来るのはこのためなのだろう。……ゲームだった時にはこんなことを考えたこともなかった。ただ回復ポーションを使いたくなれば使っていただけだった。

「でも、やっぱリアレスね。最初から勝ち目があつたんスね」
「……どういうこと？」

ニキータが問い返した。ユフィリアはニキータが飲み始めたのを

見て満足し「自分も！」と専用カップを取り出して飲み物に口をつけている。

「ジンさんっスよ。異常な強さっス。」

「うん！凄いよね」

「いや、そういうことじゃないっス」

自分が褒められたかのようにユフィリアの瞳が輝く。それを見て石丸は決まり悪そうに否定の言葉を重ねた。

ニキータにも石丸の言いたいことがなんとなく分かるような気がした。彼女達もあちこちのギルドに参加しているので色々なプレイヤーを見て来ている。戦力を発揮できない戦士はいくらでもいるのだが、彼の強さには少し違和感を感じていた。どこか数値以上の力で戦っている気がしてならない。

「言いたいことは分かるけど、大手の戦闘ギルドなら彼ぐらいのプレイヤーはいるでしょ？」

それでもニキータは反論しておく。石丸にどう見えているのかを確かめておきたかったのかもしれない。

「一緒に戦っているレイシンさんも上手なんスけど、ジンさんに比べたら普通のプレイヤーなんスよ。ダメージもちゃんと受けてるっス」

「だってそれは、………ガーディアン 守護戦士の方が防御力も高いし、防御用の特技も揃ってるからじゃないの？」

モンク 武闘家 は全身鎧が着られないが、その分だけ回避特技が充実している。現にレイシンもかなりの攻撃を回避していた。ジンもかなり回避していたように思うが、それは何かの回避特技を会得していれば説明が付くことだったし、エルダー・テイル がゲーム

だった時からタイミングさえ合えば、移動するだけで相手の攻撃や魔法を回避することが出来ていた。今は逆に魔法攻撃が当てにくいものになったとニキータは友人から聞いていた。

「でも、上限レベルでファンタズマル級の防具を揃えてるのならともかく、レベルは80だし、防具もそこその物なんすよ。いくらサファギンが相手だって、殆どダメージが無いのはおかしいんすよ。」

「それは……考え過ぎじゃない？」

これ以上は怪しい話になりそうだったので話題を切り上げようかと思う。石丸の感覚のズレが悪い方向に出ているのかもしれない。

「うーん、強いならいいんじゃない？」

ユフィは難しいことは分からないという顔で言った。

「回復役のユフィさんが一番分かってるんじゃないんすか？昨日・今日とジンさんのHPをモニターしてたっす。とつくに気付いてるはずっす。攻撃力ならまだ分かるんす。だって、あの人はたぶん……」

石丸はニキータ達が思っているよりもずっと昔からのプレイヤーで、過去にあった何かを知っているのかもしれない。だからなのか、この件に強いこだわりを見せているように思えた。

「それだから、どうなの？……一緒に戦いたくないの？」

凜とした声で、ユフィリアは石丸を見つめていた。大事なことはひとつだ、と言わんばかりの表情をしている。

「いや、違うんす。逆っす」

慌てたように開いた手を胸の前で左右に振りながら誤解を解こうとしていた。

「自分は、幸運っす。その、今は 大災害 があつて、こんな状況ですけど、いつかこんな日が来るんじゃないかと思つてたぐらいで……」

「……ごめん、そろそろだよ？」

「あ………そうっすね」

申し訳ないとは思つたのだが、ステータスを確認していたニキータは半ば意図的に彼の話を途中で遮つていた。そろそろMPが全快になる。今から戦場に戻る間に十分に回復するだろう。

「さ、いじー」

ユフィリアが元気に立ち上がる。3人は頷き、休息地点を飛びだして一緒に走り始めていた。

(それに、………まだ結論を出すわけにはいかない。)

ジャンプしている間に矢を射る。命中。

特技 機動射撃 の命中率を上げる基本テクニック「浮身撃ち」だ。これはジャンプしている間に矢を射れば姿勢が安定するという

だけのものだった。昔の映画でも使われていた気もするのだが、記憶は曖昧だ。ジンによれば「沈身撃ち」というものもあるらしい。そちらはまだ試していない。その場で崩れながら自由落下中に撃つものなので、地面に倒れてしまう。

戦いの構図はシンプルだった。

ジンが囷になって、レイシンが倒す。ジンはレイシンとスイッチを繰り返しながら、守護戦士のタウンテイング特技アンカーハウルを使って敵を集める。これでレイシンを狙っていたサファギンもターゲットから外れる。ジンは囷まれそうになるたびに回転系攻撃を加えて周囲の敵を蹴散らし、脱出する。アンカーハウルでフリーになるレイシンは敵の数を減らすことに集中することができる。シューウトは完全に遊撃として放置されているため、敵から逃げ回りながらレイシンを狙う敵にフォローを入れていた。

シューウトも近接武器に持ち替えた方が攻撃速度（回数）からすれば効率がいいのだが、前線に出ればHPも減るため、回復役がいないう状況ではダメージコントロールが追いつかないという理由で却下される。簡単にメイン武器を変えるなどということでもあるのだろう。

こうして前衛が2人ともソロプレイの戦い方になるのだが、ソロに連係の要素を組み込むことで効率を上げているのが良く分かる。シューウトも「弓を使っている」という要素を上手く活かすことを考えなければならなかった。遠距離に対しての攻撃武器のだが、それだけでは弓である必要がない。

戦っている内に気付いたのだが、弓は移動せずに味方の援護が出る点にメリットがあった。ジンもレイシンもあちこちに動き回っている。それを近接武器で援護しようと思えば、2人を追いかけて

走り回らなければならぬし、実際にやろうとすれば何度も敵に阻まれることだろう。弓なら矢が飛んでいくから（敵密には角度や遮蔽の問題はあるのだが、）ほとんど移動しないでその場から援護することができる。

思いつく限りのことは何でもやった。

クールタイムが終わって回転切りをする直前は周囲の敵を攻撃しないこと。

アンカーハウルの範囲から外れた敵をチェックしておいて、優先的に攻撃すること。

敵との間にジンやレイシンを挟むように動き、サファギンを誘導すること。

こちらに向かって来た敵から走って逃げつつ、アンカーハウルの範囲に誘導すること。

2人とも動きながら戦っているの、弓を使っているさえ、シュウトも頻繁に移動しなければならない。視野を確保し、敵を誘導し、安全位置に飛び込み、と動き続けていた。基本的に矢を射るには足を止めなければならぬ。だから 機動射撃 の使い所については思考の優先順位が高くなった。

同時に「受動離れ」の射撃法の利点が分かって来ていた。ターゲットが動いていても自然と狙い続けることができるらしい。弓での攻撃は基本的に前方から左側に向けて攻撃することになる。流鏑馬のような騎乗射撃にしても、進行方向に対して左側に矢を射ることになる。これは左手に弓を持っている場合の構造的な問題だった。左側へは体を捻るだけで矢を射ることが出来る。しかし右側へは体自体を回転させなければならぬ。

大災害 からシュウトが使っていた「能動離れ」の場合、(1)

狙いをつけて、(2) 離す、という2動作になり易かった。矢を離すまでの僅かな時間は狙いを微調整し続けてはいないため、カクカクした動きになり易かったのだ。左側への射撃はともかく、右側への射撃ではこの傾向が顕著に現れてしまう。左足を軸足にし、右脚を右腰を引きながら狙いを付けるのだが、「右脚を引く」という動作が加わって3動作になってしまうのだ。これでは命中させにくいのは言うまでも無い。

ちなみに戦士達が矢を回避する場合は、銃を回避するのと同じく左手側へ飛ぶのがセオリーになる。

一方で「受動離れ」の場合は、離す部分への能動意識が弱いことで、狙い続けながら半ば勝手に飛んでいくという形になる。矢が何時飛んでいくのかシユウト自身にも曖昧な部分があるので狙い続けなければならぬのだ。このことで「狙う」、「離す」の2動作が「狙いながら離す」の1動作に自然と纏まっていた。難易度の高い技術だったが、戦いが激しくなってくると、こんなちょっとしたところで命中率や命中精度に違いが生まれていた。

海岸の砂浜のように足をとられる場所であっても、冒険者の体は無尽蔵の体力を発揮して戦い続けてくれる。ジンは舞うかのようになり、浮き上がるかのように滑らかに戦っているし、レイシンはたまたまに残像を残して別の場所に移動していることがあった。どちらも回避特技によるものだろう。

頭の片隅で数えていた撃墜数が追いつかなくなって来ている。150近くまで数を追いかけられたのも 冒険者の頭の働きの拠るものだろう。元の身体よりも頭脳は遙かに出来が良いらしい。普段は数なんて50も数えたらこんがらがってしまう。今のペースから考えれば、30体か40体は倒しているはずなのだが、時間がゆっ

くりと進んでいるかのように感じ、頭は疲労で熱を帯びてきていた。まだまだ身体は元気で戦えるが、疲労の蓄積はプレイヤーであるシュウトの心から溶かし始めているのかもしれない。

レイシンのHPが残り3000を切っている。ダメージを受けないうようにかなり気をつけていたが、ここいらが限界だろう。一度、回復ポーションを使う時間を作らなければならない。

ジンも理解している様子で動きに慌ただしさが混じっていたが、簡単には手が離せそうもない。ジンに掛かる負担はレイシンの倍以上だ。シュウトとは比較することも出来ない。

(……近接武器に持ち換えるべきか?)

無意識に行っていた矢を番える動作が、鋭くなっている。

一瞬遅れて戦場に「音」が戻ってきたのを感じた。レイシンの近くに魔法による光が弾け、敵を倒していた。

休息を終え、援軍が戻って来ていた。

「レイシンさん！回復します！」

「助かる！」

ユフィリアの魔法でレイシンは危機を脱する。最高のタイミングだった。

ニキータの「剣速のエチュード」によって攻撃速度が高まっている。少なくなってきたMPの回復もゆっくりとだが始まっていた。

「シュウトも回復する？」

リフレツシュしたような明るい声でユフィリアが尋ねてくる。

「いや、まだいい。ジンさんを先に頼む」

その声に元気をもらった。それでも自分の顔が煤けて汚れている錯覚を覚える。顔を洗ってさっぱりとしたい。

「わかった。じゃあ後でね！」

長い茶髪を揺らし鎧をガシャガシャと鳴らしながらユフィリアはジンの方へ駆けて行く。魔法の効果範囲で彼女が立ち止まるのを見ながら、自分も敵に向けて弓を引き絞り、ユフィリアに近付こうとした敵を射抜く。

「おまたせ」

ニキータが横に並ぶ。風上に立ったのか、かすかに感じた彼女の香りが鼻孔をくすぐる。それだけで戦意が奮い立つ気がした。

休息したメンバーの復帰で陣容が整ってゆく。魔法による援護であっという間に10体近い敵を倒してしまっていた。

しかし、これはまだ後半戦の始まりに過ぎなかった。

「えい、えい！」

可愛らしい掛け声の気もするが、クレリック 施療神官 が80レベル近くにもなっていれば、30レベルぐらいの戦士職を遙かに上回る打撃力を誇る。それはつまり、現実の武術家を遙かに上回ることをも意味している。一撃ごとにただならぬ威力で巨大蟹アスコットクラブ

の爪や甲羅を砕いていく。

「シュウト！」

ジンが視線と首だけでユフィリアの援護をシュウトに命じる。見れば彼女のところにアスコットクラブが4体、5体と集まり始めていた。

「何やってんだ？」

ユフィリアの元に駆け寄り、巨大蟹の一体を思いつき蹴り飛ばしながら尋ねる。予想よりも衝撃があり、脛当てが無かったら足を痛めていたかもしれないとちょっとだけ思う。

「カニが出てきたから倒してたんだけど」

モグラ叩きでもないだろうに、ユフィリアは楽しそうにポコポコと殴り続けていた。アスコットクラブは10レベルにも満たないモンスターなのでシュウトにしても危険は無いと思い、目には入っていたが放置していた。

「ゴメン、変わるから」

レイシンのフォローをしていたニキータが慌ててやって来て、ユフィリアにまわり付き付く巨大蟹を次々と倒してゆく。

(アスコットクラブ……………なんで今頃?)

面倒なので無視していたのだが、ハッキリと意識してみると違和感を確かに感じる。

「石丸さん！」

声を掛けてシュウトは小走りで駆け寄ろうとすると、石丸が手で

それを制し、自分からトコトコという感じで走って来た。シュウトは忙しなく視線を周囲に走らせながら、弓での援護を次々と繰り出していく。

「いしくん、カニがいつぱい出てきたんだけど！」

「もしかして、戦況が変わる徴候ですかね？」

「そうなの？」

「自分の知ってるクエストとはほとんど別物っすけど、確かに後半は敵がサファギンだけじゃなくなったと思うんす」

「それって、どうなっちゃうの？」

「……………不味いかもな」

ゴブリンも 魔狂狼 ダイア・ウルフを連れていることがあるのを思い出す。海ならさしずめダイア・シャーク辺りだろうか。サファギンも一般兵よりも上位の個体が出てくる可能性が出て来た。それを言うのなら最初からサファギン豪族を退治するクエストなのだ、精鋭兵が出てきても全然おかしくない。

それよりも問題なのは増援の可能性だろう。400体で計算して無茶な突撃を行っているので、今頃になって「敵が増えます」とか言われた所で、交代要員すらいらない状況ではとれる対策などは何も無い。

「シュウト、あれ！」

湾の入り口辺りに、巨大な背ビレが見える。早速ダイア・シャークの御出ましのようだ。

「いや、あの鯨は浜までは上がって来れない。平気だ」

気休めを口にしながら戦列に復帰する。それを見て他のメンバーも戦いに集中し始めた。

(撤退するべきか、どうなんだ……………)

シュウトの選べる道は少ない。

一つは負けを認めて潔く撤退すること。しかし、クエスト期限は今日までだと云う。ここで撤退したら再チャレンジは出来ない。

もう一つは敵が弱い今の内に後衛にもう一度休憩に入らせ、万全の状態で予想される増援に対処すること。ユフィリア達のMPはまだ半分ほども残っているのだが、それぐらいしか出来ることはない。

問題なのは前衛の2人だった。シュウトはまだいいが、レイシンのMPが限界に近い。ニキータが戻って来てからのジンは、特技の使用を控えて少しづつ回復させていたが、それでも残り3割ほどしかない。もし仮に壁が3枚あれば、1枚抜けさせて休息させられたかもしれない。シュウトが前衛をやれば、レイシンを回復させられるだろうか?…………たえそれが可能だったとしても、それでもジンを休息させることは出来そうも無い。ジンに代わりは利かないのだと、この時シュウトは既に知っていた。

今のシュウトには一秒一秒が重い。決断を急がなければならない。西に傾いた日はいつの間にか空の色を変えつつあった。日没まであと30分程だろうか。それで今度は夕日にまで追い立てられている気分になるのだから堪ったものじゃない。

南の海では異変が起こり始めている。

シュウト自身もグズグズしていたかった訳ではない。決断とはつまり、撤退を選ぶことだった。どう考えてもそれ以外に方法はない。それでも自分の中の何かが拒絶していた。

(どうやら自分に嘘は付けそうにない。僕は、まだ………戦っていたい)

負けて終わりたくない。この先に存在するハズのものを、どうしても、知りたい。

(どうすれば……どうすればいい……?)

レイシンのフォロに立て続けに矢を射てゆく。特技を使わずに戦う事ができれば、ニキータの永続式の援護歌によって少しずつではあってもレイシンのMPを回復させることができる。しかしそれも今更の感が強い。もっと根本的な解決策を考え続けてはいるのだが、シュウトの思考はグルグルと空転ばかりしてしまい、すぐに反省や自罰的な考えに囚われてしまう。

(どんな策士であつても「この状態」からでは手を打つ事など出来ないだろう。言い換えればこうなるまで何も手を打たなかったことが失策だった。いや、もっと前段階から、戦いが始まる前に勝ち筋を見付けてから手を付けるべきだったんだ。今から思えば僕は絶対に勝てないと思つていた。行ける所まで行ければそれでいいとしか考えられなかった。その責任感の無さが情けない。戦い始めてからは自分がちゃんと役に立てていれば良かっただけだし、そのでいて全体の把握は自分がやっているつもりになっていた。勝つつもりもなかった癖に、だ。……それで今頃になって惜しくなつて「負けたくない」とか言い出すんだから、馬鹿でしかない。)

……万事この調子で自身をなじっている。しかし、実際には自分を責めることすら解決策の模索から目を逸らすための現実逃避に過ぎなかった。

ニキータがレイシンの左側の敵に対してさつきからずっとフォロ

ーを入れているのが、少し気になっていた。シュウトは単なる援護だとはかり思っていたのだが、……………それも違っていた。

それは両手両刃武器の特性による問題だった。

そもそもレイシンの使っている両手両刃武器（サムライ双頭武器）とは一つの武器で2度の攻撃を行うことができる。スワッシュバックラー武士 や 盗剣士 のように両手に武器を装備するのに近い。しかし利き手とは反対の腕での追加攻撃にはペナルティがあり、少々だが与えるダメージが減少してしまうのだった。

その原因は、殆どの両手両刃武器は槍や大剣の様に「両手で持つ武器」としても使うことが可能だからだ。結果、状況に応じて使用法や特技を使い分けることが可能な汎用性に富む武器になっている。強力な一撃も、多段の攻撃も、状況に応じて使い分けることが出来るのだ。

見方によってはズルい武器と思うかもしれない。しかし一撃の威力では専用の両手持ち武器に劣り、多段の攻撃ではその利き手ではない側に与えられたペナルティがあることで、両手に剣を装備することに比べて性能で劣ることになる。どちらにも対応できるのだが、その分、どちらも中途半端になるのだ。

見た目の便利さとは裏腹な使いこなすことの難しさによって真の使い手を選ぶ武器…………それが両手両刃武器だった。

つまり、レイシンは左手側のダメージが少しづつ足りずに取りこぼしてしまうサファギンがいて、それをニキータがフォローしているのだった。彼女は知識によってではなく、観察によってレイシンが左手側の敵を取りこぼし易いことに気が付き、率先してフォローに入っていた。

（全体の状況を把握しているつもりでも、個別に見れば穴だらけだった。ユフィリアの巨大蟹にしても、レイシンのMPにしても、ニ

キータのフォローにしても……………。)

そうしている間に、後衛を休息させるタイミングまでも逃すことになってしまった。

「何だ、あいつ等？」

砂浜に残った10体ほどを片付けてしまったのだが、敵の突撃に間が空いていた。サファギン達は襲いかかるタイミングを計っていたらしい。波間から頭にかぶる兜らしきものが見える。頭頂部には明らかに威嚇用と思われる飾りがつけてあった。今まで戦っていたサファギンとは少し様子が違っている。

「たぶんサファギンの精鋭部隊っス。名前はサファギン・ウオリアーだったかソルジャーのどちらかで、レベルはこれまでの倍ぐらいっス」

「60以上ってことか」

鎧を身に着けた濃紺のサファギン・ウオリアーが一斉に砂浜に立ちあがるや、銛や鉾を構え、端から順に投げつけて来るのだった。

「くっそ、面倒、くせえ、いつぺんに投げろ、いつぺんに！」

避けたり叩き落したりするのだが、次々に投げつけられる銛や鉾の数が多く、ジンのラウンドシールドに2本ばかり突き刺さったままになってしまった。

サファギン・ウオリアーは武器を投げた者から順に抜刀し、整然と襲い掛かって来る。ジンは地面に剣を突き刺すと、盾から銛を引き抜き、襲い来る先頭のサファギンの足元にブン投げた。それは敵

の足を貫通して地面に縫い付けようとするのだが、走って来たサファギンは勢いが付いていたために転倒するしかない。砂浜に刺さった鉾はその拍子に抜けていたのだが、立ち上がる気配を見せる前にシユウトが慈悲を与えていた。

ジンはそのままもう一本の鉾を抜き取ると、目前にまで来ていたサファギンの胸に深々と突き刺した。鉾から手を離し、素早く自分の得物を取るとたちまち敵の渦中へと飛び込んで往く。勇気がどうのというよりも敵の懐ふところにいた方がまるで安全だと云わんばかりの態度だ。

次々と現れるサファギン・ウオリアーとの戦いはこれまで以上に熾烈なものになった。シユウト達に比べればまだまだレベル自体が低いため、1体1体を倒すことは問題にはならない。それでも取り回しの良い短めの武器を使い、連携を駆使する敵は厄介極まりない。それにレベルが高いことで1体を倒すまでに掛かる時間がどうしようもなくかさんでしまう。

そうして遂にレイシンのMPが尽きる。この時にリズムが崩れ、一度は敗北の窮地に立たされることになってしまった。MPが尽きて精彩を欠いたレイシンにダメージが蓄積し始め、ユフィリアによる回復が数度に及ぶと、今度はヒーラーである彼女にターゲットが変更されてしまったのだ。回復によってヘイト値が大きく上昇する敵と、しない敵とがいるが、敵の知的水準が上がる程にヒーラーに鋭く反応を示す傾向のようなものがあつた。

その時、ユフィリアは走って逃げた。それが結果的に自分を囮として敵を誘き寄せ、数体ではあつたものの、敵戦列を引き伸ばすことになった。これは恐怖からではなく、なんとなくの思い付きによるものだ。少し走ってから振り返ると、アスコットクラブとの戦闘で自信をつけたつもりなのか、戦う気になつてしまつていた。結局

は石丸とシュウトが殆どの敵を倒し、取りこぼしをユフィリアが撃退する形で落ち着くことになった。

離れた位置にいるジンが戦線を立て直すまでに10秒近く掛かると見てとったシュウトは、自作の矢を全て出し切る勢いで攻め立てた。ユフィリアを狙うものを中心に次々とサファギンを射落とし、7秒ほどの時間を生み出すことに成功する。これは値千金と言ってよい。ジンはきっちり7秒で戦況を押さえ、そこからは相手を一方的に叩き潰してしまった。

概算で300体に到達していた。

しかし、先程の活躍でシュウト自身もMPをほとんど失っている。レイシンもほぼゼロ、石丸も残り2割弱、ジンはまだ3割をキープしていたが、MPに多少の余力が残っているのはニキータ・ユフィリアの女性2名のみ。しかしそれも似たり寄つたりの状況でしかない。既にMPの問題だけではなく、心身に加えて武器や防具までポロポロの状態だった。休憩なしの連戦はやはり相当に厳しい。このまま戦闘を継続するのは実質的に無理なところまで追い込まれていた。

ノーマルタイプのサファギンはまだ軽く50体以上が見えているのに、何かに遠慮して砂浜に上がってこない。シュウト達の強さに恐れをなしたのでなければ、これから現れる敵がかなり強いのが容易に想像できてしまう。

普段から上げっぱなしのフェイスガードを押しやって、ジンはヘルムを背中側に落とした。

「シュウト、さっきのは良かった。窮地を救ったな」

「……………」

シュウトは下を向き、強く歯を噛み締めた。ここに来て掛けられた優しい言葉にダメだと分かっているのに、どうしても嬉しくなってしまうのだ。それすらも情けなかった。気が弛んでしまったらもう続けられなくなってしまふ。自分からは諦めることはしたくない。今ならば殺されて大神殿で復活する方がマシだった。それなのに、ジンは優しい言葉をシュウトにかけて、ここで終わりだと促しているのだ。終わらせるという決断から逃げるなど暗に知らせようとしている。シュウトには何も言えなかった。

「シュウト……………」

無言でいるシュウトにニキータが声を掛けようとするが、掛ける言葉が出てこない。それは当然で、そんな都合のいい言葉なんて最初からありはしないのだ。

「どうした、時間ねーぞ？……………ホレ、なんかつよそーのが来るっ
ての」

「シャークライダー……………アレはサファギンのエリート部隊っス。」

ダイア・シャークの背にそれぞれ乗ったサファギンが6体現れた。このためにサファギンのノーマルタイプは場を譲っていたらしい。分かり易く立場や格式が違うといったところだろうか。

「撤退でいいのか、どうなんだ？」

「……………」

全滅するまで戦い抜こう、と言えればよかったのかもしれないが、

それも出来ない。

「え？……撤退なの？ ちょっと待って、まだ戦えるでしょ？……
だって、もうちよっとなのに」

ジンとシュウトの無言のやり取りが良く分かっていなかったのはユフィリアだけだった。他のメンバーはしばらく前からもうダメだろうと何度も思っていたのだ。だから、ジンがシュウトに声を掛けたのが終わりの合図だろうとすぐに理解できていた。これはユフィリアが空気を読めない子なのではない。彼女だけが本気でまだ勝てるつもりでいた。だからこそ頑張ったシュウトを褒めただけだと思っただけだ、

「……ユフィ、きつと次があるから」
「そんなの、だって、次なんて……」

驚きで目を丸くしているユフィリアの瞳は、当然にまだ力を失ってはいない。そして顔を上げたシュウトもまた、心の折れた顔はしていなかった。悔しくて、情けなくて、でも、どうにもならなくて……。

シャークライダー達が鮫の背から降り、静かに海に潜る。潜水して砂浜に上陸するまで、さほど時間がない。

「決められないのか？……だったら、」
「ジンさん！……お願いです、勝たせてください。」

撤退と言おうとしたジンに、ユフィリアは言葉を被せていた。強

言葉だった。

「勝たせて」

ユフィリアは言葉を重ねた。無理だろうと、無茶だろうと、わがままだろうと、自分の感覚を信じた。何がどうあれ、まだ勝てるのだ、と。

ジンは一瞬、目を逸らし、直ぐに内側から滲み出した何かが零れ出すように、笑った。

「じゃー、あれだ。チューしてくれたら、カッチョイーお兄さんが本気出してもいいけど、……どうする？」

言っていることはかなり最低だったが、ユフィリアは迷うことなくそつと踏み出し、唇を重ねた。かに見えたが、ジンは寸前でホッペチューに切り替えさせるだけの理性を動員させることに成功していた。

「アハハハ、はっはっは」

キスする前よりも、した後の方が緊迫した空気だったが、ジンがひとしきり笑うことで吹き飛ばしてしまった。誤魔化したのかもしれない。

「じゃあない。もうひとがんばりしてやんよ」

「本当に、いいの？」

レイシンの問いに口の端だけで笑顔を作っただけで応えていた。

「ホレ、さっさと休憩に行ってこい。レイのMPが全快するまでは絶対戻ってくんないよ！」

ジンはヘルムをかぶり直し、初めてフェイスガードまで下げ、さっさと背中を向けてしまった。その背中はあらゆるものを拒絶しているように見えた。

（本当はホッペチューでニヤけてるのがバレると困るからなのだが、シュウト達からはそんなことは分からない。）

シュウトは立ち去りがたい気持ちでいた。本当に隠された力があるのか、それとも、ただの自己犠牲なのか。ユフィリアに腕を掴まれ、ニキータに背中を押され、仕方なく走り始めたものの、しかしどうしても振り返ってはジンの姿を一目見ようとしてしまう。

「シュウト、今は！」

「心配じゃないのかよ！」

「大丈夫。絶対大丈夫！………だって、ちゅーしたもん。だから絶対大丈夫なの！」

耳まで真っ赤にしてユフィリアが根拠の無いことを言った。ダイタンなことしたクセに、テレてんなよ……、と心の中でツッコミを入れ、その事で少しばかり冷静になっていた。

背後で大きな爆発音が轟き、3人は思わず振り返ってしまう。どうやらシャークライダーに高位の魔法を使う個体が混じっていたらしい。

「あ………」

「凄い………」

シャークライダー前衛4体の波状攻撃をもとめせず、みる間に1体を仕留めてしまっていた。後衛2体に圧力を掛けることで、前衛の動きを牽制していく。そのまま前衛の2体目も難なく潰してし

まう。ここで最初に倒した1体が後衛の蘇生魔法で復活したものの、直後にヒーラーの首を飛ばしていた。ここまで見ても圧倒的だった。

一緒に見入ってしまった二キータが我に返り、食い入るようにして見ている2人を引きずる様にして休息場所へと急がせた。

「MPもないし、ちょいマジで行きますかね」

シュウト達が戦場からは見えなくなる。既にその時にはシャークライダーの6体は全て倒され、砂浜に死骸が転がっていた。

休憩地点でも異なる戦いが始まるうとしていた。

少し遅れてシュウト達3人が追いつくと、レイシンと石丸は既に腰を下ろしている。目にしたジンの強さに浮かれているのはユフィリアだけであり、シュウトも二キータもそれぞれ別のことを考えていた。

2人の出発点は同じで、この休憩はジンの居ないところでの欠席裁判になりうるという直感から始まっていた。

二キータはどうなってしまうのかを考えていた。ジンの強さは世界のルールを無視している。その不公平さは大勢の敵を作る類いのものだと感じていた。この感覚は速成によって一足飛びに成長してきたユフィリアには分からないものかも知れない。現実であるならば実力に差があるのが当然なのだ。

しかし、この世界では上限レベルに到達してからの長い停滞の時

間があり、そのことがプレイヤー同士の平等さや対等な関係の基礎になっていた。ジンが一人で不条理な強さを持つことは、それが例え努力で手に入れたものであったとしても、強い不公平感を刺激してしまうだろう。嫉妬や憎しみを煽るのに違いない。

確かに、平等な世界はありえないとニキータは分かっている。せつかくの平等なる世界でありながらも、結局はやれ誰が美形だの、性格が良いだの悪いだの、強いだの弱いだのと、人々は（もちろん自分も含めて）あらゆる機会を捉えては「違い」を見出さずにはいられなかったからだ。

それでも人が寛容で居られるのは自分が風上に立っている時だけなのだ。強さなどは、特に女性からみれば所詮は人間の一面面に過ぎない。にしても、ジンの強さはほぼ全ての人間を風下に立たせてしまう種類のものだった。それは秘密として守るべき種類のものだろう。彼が大勢のプレイヤー達から攻撃対象となることだけではなく、他者の心の安寧をこそ守らなければならないという気持ちがニキータには強かったからだ。他者の強い感情にさらされるのがイヤなのだ。

ただニキータが気が付いていなかったのは、これこそが彼女の求めていた「仕方の無い理由」なのだという事である。そのため「どうなってしまうのか」と「どうすればいいのか」が彼女の中で結びつかないままだった。

一方のシュウトはこの休憩場所が高度に政治的な場になり得ると気が付き、そこから自分がどうすべきかを必死に考えていた。レイシンは前もってジンの事情を知っていたのに違いない。ユフィリアも無視していい。態度が分からないのは石丸と、特にニキータだ。そして、自分はどうなのだろう？と考えていたが、やはり嫌な気分

などしない、むしろ大賛成だった。

だからこそ、自分が悪役を、最大の抵抗派として振舞おうと考えていた。そうして自分が一番槍として先に攻撃を加えて毒気を抜いてしまい、後から態度を変えればいいと決めてしまっていた。

しかし実際には石丸も賛成派であったため、会話が始まる前から実は全員がジンを受け入れることで一致しているのだった。

「やっぱり最後まで持たなかったよ。ごめんね」
口火を切ったのはレイシンからだだったが、いつものように口調はノンビリしたものだった。

「レイシンさんは……」

「うん？」

「知ってたんですね、ジンのこと」

「まあ、ね」

「あの、葵さんはご存知なんですか？」

シュウトの勢いが強いを見て取り、ニキータが矛先を逸らすように質問を加えた。

「いや、知らないはずだよ。まだ言ってないけど、なんとなく察してはいるかもね」

「そうですね。ところで、ジンはその、……最初からああなんですか？」

「そんなことないよ。最初は普通だった。」

「レイシンさんはいいんですか？ジンはさんばかり強い状態でも」
シュウトはわざと語気を荒げていたが、ちよつと本気になりつつ

ある。

「いいもなにも、何かダメかな？……というか、強くなるやり方は教えてくれてるんだけど、ムズかしくてダメだったんだよねえ。サブ職も変えたくないし。」

「……それで、平気なんですか？」

「平気？……うーん、それは良く分からないけど」

強くなるやり方と聞いて、シュウトの心は揺らいだ。下手なイチヤモンはもう止めたいのだが、もう少し追求しなければならぬ。

「サブ職がどう関係あるのか良く分かりませんが、ジンさんだけ強いなんて不公平でしょ？だったら、」

「でもほら、この世界って、……料理人が最強でしょ。」

「「確かに」」

これには思わず頷いてしまっていた。本当はジンが言っていた台詞をレイシンが使っただけだったりする。ジンがどれほど戦闘で強かったとしても、料理人がいなければ美味しい食事がありつくことは出来ないのだ。ならば、その他の部分でも同じことが言えるだろう。^{ガーディアン}守護戦士は回復魔法を使えない、攻撃魔法を使えない、エトセトラ、etc。

シュウト達から見てレイシンは気負うところも、無理しているところもない。演技のつもりだったシュウトも毒気を抜かれてしまっていた。ジンに対する好き嫌いは好みの別れるところだが、レイシンを嫌う人間はそう多くないように思えた。

「見て！でっかい頭！」

「ジャイアントっスね」

「10mクラスかな？」

「……ですね。」

シュウト達の休憩地点からは海岸での戦闘は見えなかったが、巨人の頭だけは確認することが出来た。冷静な男性陣にユフィリアが慌てる。

「あんな大っきいのに、援護とかしなくていいの？」

「そんなの今更だろ。今のジンさんは10mクラスなんてどうってことない。……巨人を見たことないのか？」

「ゲームでならあるけど、ホンモノは見えてない」

「そっか。じゃあ言っとくけど、小型のドラゴンでもアレの倍は強いぞ？」

「そ、そうなの？」

シュウトは今朝の会話(08)でドラゴンが怖いだのと馬鹿にされた恨みをここで返すことにしたらしい。

巨人もまた、最強の幻獣と言われるドラゴンに匹敵する強さを誇る種族だったが、ジャイアント達は実質的に20mクラスからが本番だった。18m以上になった途端に、転ばせても主要器官になかなか武器が届かなくなってしまうのだ。当然にHPも跳ね上がった。

シー・ジャイアント。

これは日本の妖怪「海坊主」の解釈の一つとして登場するモンスターだ。他にもいくつか海坊主に当たるものがあるのだが、船で沖に出なければ遭遇しないためにどれも比較的珍しいモンスターで、知名度は低かった。

ジンは長いことかかって砂浜まで上がって来た巨人の足を一発で破壊してしまい、ほぼ狙った位置に尻餅を付かせることに成功していた。当然、サファギンを巻き込む形で転倒させるのが狙いである。そのまま跳躍して水しぶきを回避しながら、足の付け根あたりに降り立った。そうして尻餅の衝撃から立ち直って暴れだす前に、青く輝く剣で胸を貫き通していた。狙いは心臓ではなく、その先の脊椎だ。

大型モンスターの場合、心臓を破壊しても数秒は動き続けることが普通にあるが、脊椎を破壊すればその瞬間に動けなくすることが可能だった。断末魔の痙攣を残し、巨人が倒れ、再び大きな水しぶきを作っていた。背中や腕の下敷きになったサファギンもいた。

胸の上に立ったジンは、マジックバグから以前に使っていた魔法のバスタードソードを取り出すと、巨人の腕を伝って砂浜に駆け戻っていった。そのまま敵集団の中央に向かってシールドを使っての突進攻撃を加える。その光景はほとんど交通事故のそれだった。数体のサファギンを弾き飛ばして止まると、そこは敵のド真ん中だ。敵が態勢を整える前に更に4体、5体と一気に倒れてしまう。実際には敵が弱いため威力は必要がなく、巨人を2発で倒したことに比べたら、もはや手抜きに近い。緩急をつけつつ、小走りに次々と敵を倒しながら進み、また方向を変えては突撃を繰り返していく。

「あの敵を探知するのはどうやってるんですか？」

「ああ、アレね。ミニマップを回復させたって言ってたよ」

「ミニマップ？」

ミニマップとは、ゲーム時代にモニターに表示されていた、一定範囲内に存在するキャラクターを全て表示するという機能のことだった。大災害の後では当然モニターが無いため、その機能は失われたと思われていた。

「……そんなの、どうやって？」

「気配で分かるような仕組みがあるんだって。世界が翻訳されたのがどうのとか言ってたよ」

冒険者 が気配で察知しているものを分かり易く視覚情報として表示したものがミニマップだとジンは考えていた。この機能が実は生きていて、単に視覚情報としては受け取れないだけだろうと思っただけだ。数日前にシュウトが矢の試し撃ちをした時、居場所だけじゃなく一人でいたことまで分かったのもこれならば当然だった。

「……圧倒的っスね」

「本当に……」

「え？……ああ、了解。………ゴメン、なんか、外の戦いが終わってたって」

レイシンが念話でジンと話したらしい。レイシンのMPはやっと8割ほど回復したところだった。

砂浜に出てみると、そこは想像したようなものは何も残っていないかった。サファギンがいなくなった海だけが静かに波を寄せては返している。周囲は既に暗く、月が出ていた。探してみると、少し離れた場所にぽつんと座っている人影が見付かった。

「よっ」

鎧を着たままなので、ジンは足を投げ出して座っていた。特に何かがあった風には見えない。シュウトは戦いの痕跡を探したが、武器が違うものになっているぐらいしか分からなかった。

「全部倒しちゃったの？」

「ああ、あれからちよっとしか出てこなかったからさ、つい全部倒しちゃったよ」

「そっかあ、ちよっとは残しといて欲しかったのに」
「悪い悪い」

ユフィリアとの何気ない会話をぼんやりと聞いていた。シュウトが見たかったものは、どうやら見られなかったらしい。

「シュウト」

「ん？」

ニキータが指差したものは、モンスターの死骸が霧散した後の、ただの砂浜だった。モンスターや死骸ばかりを探してしまっていたが、実は砂浜だけが激しかったのである。戦いの痕跡を伝えるものだったのだ。シュウト達が戦っていた場所は、大波でもあったみたい。に広い範囲で湿っている。その他にもあちらこちらで争った痕跡がまだ残っていた。

これでは「ちよっ」としか敵が出てこなかった」だなんて話が信じ

られるものではない。残りの全てをあっという間に叩き潰し、敵の死骸が消えてしまうまでボーっとしていたのに違いない。

シユウトは笑った。笑うしかなかった。

自分が幾ら失敗しても、フォローできるぐらいの余力があったことが分かったのだ。上限レベルのプレイヤーとして自分の方が多少は上の部分があると思っていた。それが思い上がりだったことを理解したのだった。

(本当に、一から始めなきゃダメだったのか……………)

しかし、憑き物が落ちたみたいにサツパリとした気分だった。

戦いのあった砂浜から続く絶壁の岩肌にポカリと開いた穴が「サファギンの洞窟」だった。これぞ海辺の洞窟！という趣きこそあるものの、その中はゲーム用にアレンジされた空間になっている。

敵を倒しながら先に進むと、海と繋がる地底湖の広がる大空洞に出た。そこではサファギンの首領たちが50体程度の部下に囲まれ、儀式めいたことをしていた。

纏まった集団でいれば石丸の範囲攻撃呪文の餌食になる。それに加えてMPの回復したジンとレイシンが猛然と突撃していく。シユウトも素早く敵に矢を送った。

ジンは少しばかり力を解放していた。石丸の攻撃呪文で後衛に敵が引き付けられるのだが、ジンが攻撃すると再びターゲットを変更するだけの力があったのだ。

これは簡単な話のようで、実際にはゲームの根幹を成すバランス自体が無効化されることを意味している。 ガーディアン 守護戦士の攻撃力は元々その腕力と比較してもかなり低く抑えられていた。アンカーハウルといったタウンテイング特技が必要な理由も、戦闘というゲーム自体が「後衛をいかにして守るか？」という点にあったことが明白なのだ。

そして後衛の戦いの要諦は、敵のターゲットを集めるかどうかの綱渡りをしながら、戦況を考えて魔法を使うことにある。……もしも前衛の脅威度が一番高いままだとしたらどうなるのか。単純に後衛はやりたい放題になってしまうだろう。

いまやジンが存在することで、戦闘は全く別のゲームになってしまっているのだ。

半ば当然ではあったが、気味が悪いぐらいにあっさりとクエストは終了していた。

「へえ、結構ボリュームがあるのな？」

「砂浜で倒した分もこっちに集まることになってるんす」

報酬は6人で分けてもかなりの額になりそうだった。豪族サファギンが手下に付け届けをさせているためらしい。

もともとサファギンはもつと南の地域に生息する亜人間だった。今回ジン達が倒したのは辺境であろう関東地域を支配する豪族に過

ぎない。今回の戦いは彼らの支配領域からすれば僅かな被害に止まるのだろう。

「それで、これからどうするんだ、コーラー？」

「え？……じゃあ、帰還しましょうか」

「一度、村に寄って行きたいんすけど」

「あ、終了の報告でしたね」

「そついや、そつだったな」

村へ向かって歩きながら、色々と話をした。

「そついえば、今回って何が一番印象に残った？」

「雨の森とかもかなりヤバかったですよね」

「炊き出しかな」

「私も」

「アレは面白かったわね」

「つて、炊き出し？あんなオマケっぽいイベント……」

「またああいう村とか見つけたらやりたいよね！」

「それもいいな。しかしドラゴンも捨てがたい」

「またそれですか……。もう良いですよ、実は余裕なんでしょ？」

「まあ、“俺は”な」

「ドラゴン戦はかなり大変だよー」

「レイシンさんも大変ですよね」

「これから仲良く頑張れるからいいじゃん」

「あんまり死にたくないんですけど」

そつしてしばらくすると村の明かりが見えてきた。どこか人里の持つ不思議な力がホッとさせるものがある。

「そういえば村で貰った食材があるから、後で」馳走するよ」

「なんだかお腹が減って来たかも」

「場所はシブヤだけだな」

「あ、そっか。じゃあ、引越しちやおっか？」

「それも……悪くないかもね」

11 新しい日々

結論から先に言えば、僕らが行なおこったミナミへの遠征は失敗に終わった。

サファギン退治を終えて帰還呪文でアキバへ、そのままシブヤの奥まった場所にある カトレヤ まで戻って来た時には、既に21時も過ぎていた。二日振りではないはずなのに、もう1週間も経ったような気になってしまふ。

「ただいま〜」

レイシンがドアを開け、声を掛けたのだが、中からは返事の代わりにドシンボタンと云った物音が聞こえた。久しぶりの出番に葵が緊張し、慌てたために盛大にコケたのだろうか？などとシユウトは考える様になってしまっていたが、戻る前に念話で一報は入れているだろうことを思えば、別にまだ慌てるような時間じゃないはずだった。

奥まで入ってみると、光の精霊で照らされた室内で、一番目立つあたりの床に葵がうつ伏せに倒れたまま動かずにいた。どうやら死んだ振りをしているらしい。召喚術が起動したままという杜撰さはどうにもならないし、一方で床にはご丁寧にも赤い液体までもが広がり……………というか、アレは一体、誰が掃除することになるのだろうか？と気になってしまふ。

無言のまま、ジンがレイシんに（お前が行けよ、）（無理、無理）
（夫婦だろうがよ！）と何やらやり取りをしている。結局はジンが
どうにも仕方がない風に、

「血だ……クソツ！ 犯人はまだこの建物の中に居るに違いない！」
と某海外ドラマの主人公風に吐き捨て、奥へ向かってズンズンと
進んでいった。そうして葵の遺体（？）を跨ごうともせず、そのま
ま踏みつける。

「ぐえーっ。そうきやがった、か……がくり」

間違っても「踏み潰される蛙の声」なんて聞いたことはないのだ
が、ともかく、葵はそんな感じの声を出した。

「で、この赤い液体は何なんです？」

「かほりで分からないかなあ？赤ワインに決まってんじゃ〜ん」

カウンターの定位置にて普段着用のローブをワインで汚したまま
の葵が偉そうに発言した。メニュー作成による安物ワインにロクな
香りなどあるはずも無く、（そんなんわかるか！）とシユウトはや
さぐれ気分全開だった。予想通りにモップで床の後片付けをさせら
れている。

「そんで？そんで？……今週のオマケメカは？ポチっとな？」

「日本語で喋れ。……お宝の話だったら、もうちょっと待ってるよ。」

デカイオマケがあるからな」

「むむつ、ダーリンが作ってる料理に何やら秘密の気配が？」

そう言っつて首を伸ばし、厨房の作業を覗き見ようとするのだが、奥の部屋なのでカウンターからは見えない。見えないのはたぶん本人が一番分かっているはずなのだが、

「くっそー、てめーら、タバカリやがったな！」

「……………お前は一体、何なんだ」

「もち、天才美少女っス」

「よし、分かった……………シュウト、代わってくれ」

「掃除で忙しいので、すいません」

「そーっしょ、そーっしょ？シュウ君はアタシの味方だもんねー？」

「やれやれ……………おっと、来たな」

一人で暇だったせいにかエネルギー全開で喋りまくる葵に、相手する側が疲れつつある。ジンの言うように、ここでドアの方から人の気配がし、

「どうも、お邪魔させて頂きますっス」

「おう、その声は石丸くんっスね！入れ、入れ！」

カモを手薬煉てくすねを引いて呼び込む野獣（狐尾族、召喚術師、女、Lv23、ロリ）の姿に恐れおののくシュウトを余所に、平気そうにヒョコヒョコと石丸が入って来てしまった。

石丸は挨拶もそこそこにして妙に背後を気にしており、サツと場所をあげると、タイミングよく飛び込んでくる人影がひとつ。

「来ちゃった……………私、アナタのことがどうしても忘れられなくて……………だつてこのお腹には……………」

(な、何やってんだ、コイツ?!)

ユフィリアだ。芝居っ気ギンギンにハンカチを握りしめ、いつの時代のメロドラマかと思うような台詞を演じている。「貴方なしじや生きていけない」などと言い、壁にもたれたままズルズルと崩れ落ちて、嘔泣きしながら哀愁を表現していた。恐るべきノリの良さである。

「おっ、おっ、女の子たー！！！！」(非濁音)

椅子の上に立ち上がった葵が感涙に咽び、泣かずに叫んだ。ジンは爆笑し、腹をよじらせて笑っていた。

「改めまして！ ユフィリアですっ」

「……………ニキータです」

「……………石丸っス！」

「3人ともども！」

「よろしくお願いしまーす(っス)！！」

葵が一生懸命に拍手していたが、人数が少ないのでまばらなパチパチ音にしかならなかった。

そのまま葵はユフィリア達に抱き付くべく飛び出し、「キヤー」とか「久しぶりー」とか言っていたが、その服がワインで汚れたままなのがシュウト的にはどうにも気になって仕方がない。

「じゃあ？じゃあ？」

「これからしばらくお世話になります！」

「アキバとの二重生活っぽくなっちゃうかもですけど」

「ぜんぜんかめへんよー！」

ナマ女の子に餓えていたらしき葵が、ユフィリアともなく、ニキータともなく抱きつき、頬を胸元に擦り付けている。

(だから、その汚れた服を脱いでから……)

そしておもむろに振り向き、

「諸君、本当にご苦労だった。これで我がジンは、あと10年戦える……っ！」

と決め台詞を放つ。連邦派らしきジンが何やら文句を言っていたが、シュウトは諦めて適当に聞き流すことにした。

「それにしても素晴らしい女優っぷりだったわ。私の『紅の仮面』を継ぐことが出来るのは貴方しかない」

「先生、ありがとうございます！」

「むふうー、これなら良いドラマが撮れそう。……ね、監督？」

「誰が監督だ」

監督と呼ばれたジンがその立場を否定した。このノリはいつまで続くのかとシュウトは本気で心配になっていた。実のところレイシンの(の食事)だけが頼みの綱だ。早く完成してくれないものだろうかと途方に暮れてしまう。

「一言よろしいでしょうか？……ウチのユフィリアはキスシーンなどはNGなので、その所、よろしく願いますね、カ・ン・ト・ク？」

ニキータが威圧感のある笑顔で凄むと、ジンは口元をニヤけさせ

つつ目を逸らした。葵が「何？何！？」と瞳を更に輝かせる。ジンは「何でもねーよ！」と言い返していたが、

「監督……私、必然性があればやりますっ！」

と、とんでもない所から、つまりユフィリア本人が話を混ぜ返した。一瞬、惑星規模で時間までもが止まりかけたが、

「いや、むしろ必然性しかないな。さっそく演技指導を……」

「良く言ったわ、それでこそ女優よ！」

「葵さんまで煽らないで！」

欲まみれにジンが力説すると、葵までが往年の名女優風になってしまった。これでもはやニキータの叫びは虚しく響くのみである。

「楽しそうなトコ悪いけど、料理ができたから運ぶの手伝ってね」
この時ばかりは、はぁーい、と素直な声が唱和する。

(これぞ正に天の声……………)

しかし、シュウトの願いは日常と呼ばれる概念の前に虚しく散る運命であったと云う。

遅い夜食ということを手抜き料理になり、その代表格でもある鍋料理になっていた。レイシンが手早くこしらえたものは野菜をメインにした塩味ベースの、肉と魚もたっぷり入っているもので風味が豊かだった。今は卵を落としての「おじゃ」タイムになっている。

「じゃあ結局、ジンプーのスーパーパワーとやらでどうにかしたわけだ……………うは、だっさー」

食事しながら色々と話をしていたのだが、葵にツッコミを入れられている内について正直に話してしまった。

「連続戦闘だったって、サファギン相手に300でギブって、アンタかなり鈍^{ナマ}ってんじゃない」

「バーロー、俯瞰視のゲームと主観視のリアル戦闘を一緒にすんなっつもの」

葵はいつもの様に軽い調子なのだが、しかしその内容にはまるで容赦なく、遠慮なしにジンにツッコミを入れていた。シュウトは自分の責任を感じてひとつひとつが心にグサグサと突き刺さりまくりだったりする。

「んで、実際のとこチミはドンくらいの強さなワケ？」

「わからん。…………測りようがないから説明できないっつーか」

(ああ、それでドラゴンドラゴン言ってるのかな?)

仮に出会う敵を全てを一撃で倒せたとする。出会った敵の最大HPが99999だったとしたら、その一撃のダメージが1万なのか、10万なのか、はたまた100万なのかを知ることが出来ない、といった意味だろう。

「じゃあ、どうやってやってんの？原理とかは？」

「原理って、そんなムツカシイこと急に言われてもなあ……………“現実”の仕組みを“この世界”に当てはめて運用効率をアップさせてっから、火事場の馬鹿力みたいなもんかな？ うん、今から思え

ば、新しい料理法の発見だって非メニュー操作なわけだし、その戦闘バージョンって感じだろうな」

「そんな事やっついて、なぜ料理のことを思いつかないのかにや？」
「ちよつと待て、流石にそりゃヒデーだろ？ 確証なき実験と検証の世界なのに、んな余裕あるかよ」

「まあいいや。……そんで対価は？ 何とのトレードオフ？ 何か犠牲になってるものがあるんじゃないの？」

この質問には全員が息を呑んだ気がした。

「………まだ大きなものは見当たらないな。目一杯までカラダを使ってるってことだから、そのうち腰痛とかになりそうだけど、今のトコは、しこたま眠いぐらいだな。」

これを聞いてシュウトは色々な意味でホツとしていた。

「じゃあ、取り敢えず衛兵よりは強いってことぐらいしか分かってないんだ？」

「……………」

葵の狙い澄ました不意打ちを受け、ジンの目がギコチなく泳いでいた。

「はあ〜（溜息）、やっぱりアンタか。それでどうなったの？ 話さないよ」

こればかりは他のメンバーも驚きを隠せない。

「いや、ホラ、円卓会議の告知で大地人の人権だとかの話

があつただろ？人間として意思があるんなら交渉の余地がありそうだし、ちよつと頼んで相手して貰っちゃおうかなつて。偶然にも金に困つてるヤツがいたから、そいつと戦つただけだよ」

「どうなつたの？」

「腕を斬つて10秒ぐらいで終わったな」

「もつと詳しく。勝つたんでしょ？」

「勝つたつて、大地人は殺しちまうと復活できないからなあ。それで最初は避けたり受けたりで、十分に対応できるのが分かつたから、後は腕だけ斬り飛ばして終わりにしたんだよ。10秒で金貨1万5千渡したから金欠だつつの」

衛兵という仕事のモラルの高さから、普通はこんな申し出に応じることなど有り得ないのだろう。ジンは地味に話しかけて仲良くなるうとするところから始めるつもりでいたのだが、そこで偶然にも金に困っている衛兵が見付かった。渡りに舟と思ひ、金額を吊り上げてOKさせ、上司にバレたくない等の要望からタイミングを選び、幸いにも人の少なくなつていたシブヤで決行した。万一に備えて友人だという回復役も連れて来させ、戦う相手本人に金貨1万枚、ヒーラーに5千枚を支払う約束にした。

しかし親切にも“負けてくれようとした”ので、ちよつと本気を出させるように仕向けて何合かやり合い、フルパワーなを感じた所で腕を斬り落とした。流石にその衛兵も痛みよりも驚愕が上回つたような顔をしていたらしい。

そうしてヒーラーが腕をくっ付けた所で金を払つて、すべてを「無かつた事」にした。この時も最初にミニマップを応用した「気配による探知」を使つての周辺のチェックはしておいたのだが、どこからか誰かに見られていて噂になつてしまつたようだった。

「それ、普通に襲えばタダじゃん」

「アホか、それでもし勝つたら大事になるだろ。衛兵でも倒せないだなんて、物凄く危険な犯罪者じゃねーか。街に住めなくなったり、銀行や貸し金庫なんかを止められたらどうすんだ。」

衛兵のシステムを管理しているのは、供贄くねえ一族だったが、彼らは銀行の業務も行っていた。

「じゃあ、5人相手はどう？10人なら？」

「は？……んー、同時攻撃できる人数は限られるから、10人でも20人でも一緒だろうな。殺していいんだつたら、たぶん問題ない。……けど、やっぱり殺せないから勝ちようがないぞ。あつちは好きに攻撃できて、回復し放題。でも、こつちは殺さないように手加減しなきゃならん。どのみち決め手に欠けるんだよなあ。パーティ組んでたら仲間を守るのもちよつと無理だろうし、やっぱり勝負にならねーよ。」

「ふむふむ、そっかそっか」

「……てゆーか、お前、なに企んでんだよ？」

「えへっ、まだひみちゅー」

「てんめえー、人には散々しゃべらせといて、それが！」

「にやははは、もうちょい形になつたらねー……最後にもうひとついい？」

「んだよ」

「仮に、今からシユウ君に教え込んだとして、何日でモノになりそう？」

「……正直に言って、わからん。レイが使えないなら、大半の人間には無理かもな。算数的な確率論でやる“五分”ファイフティ・ファイフティつてヤツだろ」

「ああ、あの1%対99%であっても、何故だか50ファイフティ・ファイフティ対50つてヤツ？」

「そう、それ。……まあ、部分的に使えるようになる可能性はあるんじゃないの？才能はありそうだし」

「そもそも、なんで一般プレイヤーはダメなの？」

「二つ目だぞ……………たぶん“自分化”してるのが原因」

「自分化？」

「最強の肉体を操縦する素人パイロットの悲劇だよ。街に出れば分かるが、みんな元の自分になろうとしている」

「……………」

興味深いトップ会談が終わり、クエスト報酬の件に移った。これは最初にジンが話すところから始まっていた。

「報酬なんだが、大雑把に7等分にさせて貰いたい」

「え？あたしにもお小遣いくれんの？ヤバ、何を買おう……………」

「んなワケねーだろ。…………ギルドスペースの維持費もあるが、大半の用途は食費だと思っほしい。余りはパーティの共同資金にする。それでも使い切れない様子なら、分けて返却すればいいだろう。」

一瞬だけ期待した葵が拗ねている。

「共同資金って、どんなものを考えているんですか？」

ニキータが真面目そうに質問する。

「経費で落とす、みたいにしたんだ。全員で使うものならなんでもいい。例えばテントだとか、持ってないなら馬を買うのもいい。」

消耗品だと回復や毒消しのポーションなんてのもあるしな。回復役ユウバイアがいるからってポーション類の購入を個人の財布で勝手にやらせると、準備の良い人間と悪い人間とで性能にバラ付きが出るからあるからな。大規模戦闘レイドなら人数の効果で均せるかもしれないが、小パーティにそんな余力はない。最初から準備をやり易い形に整えておく方がいいだろう」

「なるほど……………」
シュウトが納得して頷いた。

「重複ちよつぷくして物を買ったりしてもしょうがないから、細かい管理はシュウトに一任したいと思ってる。…………大変かもしれないけど、頼んでいいか？」

「わかりました。」

「ふう〜ん？」

ジンの意図が分かったらしく、葵がニヤニヤしていた。それを見てもシュウトにはさっぱり意味が分からない。

強力な中心人物の存在は難しいもので、大きな組織になれば求心力として人々を纏める力を発揮するかもしれないが、ジン達のような小さな組織では、一人の中心人物がいると、それ以外の人間は責任感を失うことになり易い。

責任感がなければ本当には人間など動くものではない。怒られるのが怖いから動く人間たちは、怒られないギリギリの範囲までしか動かなくなり、それが普通になれば、慣習として既得権益に似た物になっていく。

ジンが普段から仕事や意思決定を投げっぱなしにするのも、自分が楽したいからではなく、自由にやらせたりだとか仕事を任せることで責任を持たせたいという狙いが大きいのだが、…………しかし、現

実はそれだけでは足りない。責任だけではなく、権限も与えなければならぬのだ。そうして職責を得て役割を分担することで各人に能力を発揮してもらうわけのだが、すると今度は職責の範囲を逸脱するのがタブー化するのが人の常だった。自分の職責の範囲を越えて仲間を助けようとしなくなるわけだ。

責任とは、元来、それは勝ち取るべきものであった。それが今日では自分の番になるまで待ち、仕方なく引き受ける様な「出来ればいらぬもの」になってしまっている。

これからはジンがその特殊な能力から「強い中心」として機能していても・いなくても、責任感を失わない仲間が必要なのだ。その為に最低限必要なことをしようとしているのだった。

「じゃあさ、100万ぐらい貯金して、アキバでデカイビルでも買うとか、どう?」

「面白そう!」

葵の提案はかなり壮大なものだった。元飲食店を改築し、各種設備スペースに加え、たとえ狭くとも個室が10もある カトレヤだと頭金が8万、月の維持費が金貨160枚で済むのだ。100万もあつたらギルドタワーか小型のギルドキャッスルが買えてしまふような話であり、6人パーティには大き過ぎるものでしかない。つまりこれはギルドの規模をこれから大きくしていくという方向付けや意思表示にもなっていた。

「100万は行き過ぎかもしれないが、50万ぐらいの予算でやるのはいいかも知れないな。予算内で内装に凝ったりとかするのも大事だろうし」

「パンやピザを焼くのに専用のオーブンが欲しいんだよね」

「私、今すぐ思い付くのは大っきな鏡ぐらいかな……二ナは？」

「……………お、お風呂とか」

「そういえば、西風の旅団がギルドに大浴場を作るとかって話っスね」

「アハハ、夢が広がるよねえ。悪いけど、しばらくはウチのゴエモン風呂で我慢しててよ」

「「えっ？」」

葵の台詞にユフィリアとニキータが固まった。

「……………もしかして、お風呂あるんスか？」

石丸もちよっと驚いていた。

「な、何なん？フツー、お風呂ぐらいあるっしょ？」

「……………いえ、冒険者の宿にはお風呂の機能が無いので、木桶に湯を張って、それぞれの部屋で体を流すのが基本スタイルなんです」

「そ、そうだったの……………？」

シユウトの説明に『お風呂格差社会』の哀愁が漂う。シユウトも先日、葵の見えていないところでお風呂に感動し、ジンに向かって自分がいかに興奮しているかを伝えようとして、呆れられていた。

カトレヤ ではサブ職 大工 持ちがいないため、大災害

後のかなり早い段階にジンが大きな樽を買って来て風呂の代用にしていた。底を鉄製にするなどの変更が利かなかったため、直火で湯を沸かす機能は無く、水に熱湯を継ぎ足して温度調整するしかなかったが、そこら辺であまり贅沢を言えるものではなかった。

「……………それなら今からちよっと、お風呂入れようか？」

「いいんですか？」

「そりゃ、少しは面倒だけど、別にいつものことだし」

「よし、やるか」

レイシンの言葉にジンも頷いた。水を運ぶのは力仕事だからだろう。普段から落ち着いた雰囲気のあるニキータはこの件に関しては何か強い興味・関心があるようで、お風呂の予感に早くも震えていた。

簡易風呂の仕組み上、お湯を温め直すのに熱湯を注がなければならぬため、段々と湯の量が増えていくことになる。従って、一番風呂は常にロリ体形の葵と決まっていた。ユフィリアが遠慮したためニキータは二番手をゲットし、早くもソワソワしている。今はパスタを茹でるような寸胴の大鍋に水をタップリと入れ、葵の呼び出した火の精霊で熱している。グラグラと沸き立つまでしばらく掛かるだろう。

「ところで、ご相談があるんすが……」

「どうした？」

「レイニー・トレントのドロップアイテムのことっす。……アレを売らずにしばらく取って置きたいんすが」

「別に構わんけど、そりゃまた、どうして？」

「値段が上がるかもしれないからっす」

「……ほほう〜？ 詳しく話してごらんなさいよ」

石丸の話をジンが聞いていたのだが、葵も面白そうなので興味を示した。

「生産ギルドが合同で作っている新しい道具の話はご存知っすか？」
「多少はね。蒸気機関を応用するらしいじゃない？ ……工場で動力みたいにするのかもしれないけど、まずは乗り物が王道っしょ。」

機関車は線路だとか色々と手間だから、まず船を作るんじゃないかしら」

「話が早いっスね。……精霊船だそうっス。」

「石丸くんも中々の事情通じゃないの〜」

「自分もこれで長いっスから」

「……それと、どういう関係があんだ？」

話の主筋がズレないようにジンが先を促した。葵に全て任せてしまつと回り道をしまくつて先に進まなくなる危険があるのだから。

「えっと、レイニー・トレントの木材は、水の属性を持っているっス。なので船の材料に使うのが最適じゃないっスか？それで7体分もの素材があれば、かなり役に立つと思うんス」

トレントは火が弱点であるため、レイニー・トレントの「火で燃えない」という点が強調されている。例えば燃えにくい木材と云えば桐きりダンスの桐などが有名だ。しかし元々が水の属性であることを思えば、水にも、むしろ水にこそ強いという面を備えているのかもしれない。加えて高レベルモンスターの素材であることもポイントが高い。それだけでかなり丈夫だと保証されているような物だろう。仮に薄くしても強度が残るなら、軽量化にも使えることになる。

問題があるとすれば、この世界には様々な素材で満ち溢れているため、船に向いた素材が他にもあるかもしれないという点ぐらいだろう。

「すぐ売らないのは何故？今すぐ 海洋機構 あたりに持ち込んで高く買ってもらう方がいいんじゃないの？」

「そこなんス。最初の精霊船が成功した後に量産が始まつたり、本格的な船や戦艦を作る時に売るのがベストじゃないかと思うんス」
「なるほど、その頃なら高級素材は枯渇しているかもしれないな。」

量を持っていると買い叩かれ易いが、海洋機構 じゃなくて、そのライバルと交渉したりするのも面白いな」

「そうなんス。それに……」

「？」

「自分達で船を持ちたくなるかもしれないじゃないっスか」

「おいおい、流石にそれは……」

自分達で船を持つのはかなりの難易度だろう。大工だけじゃなく、水夫が何人も必要になる。

「おっけ。じゃあ、倉庫も空き部屋もあるから好きに使っちゃって。せつかくの素材だから傷めないようにだけお願いね」

「了解っス」

そして湯が煮立ち、籠手かと思うような厚手のミトンに、これまで分厚いエプロンまで装着したジーンが、えっちらおっちらと大鍋を抱えて風呂場へ向かった。これから何度もこの往復をすることになるのだろう。

一番手の葵がレイシンに手伝って貰い、ようやくと赤ワインで汚れたローブを脱いでから風呂場に向かった。葵が揚がってくると、またジーンが鍋を抱えて温度調整 + 湯量の追加に向かう。二番手であるニキータの類は期待に紅潮している。彼女は服を着たまま呼ばれて一緒に付いて行った。好みの温度にするためだ。後はこの繰り返しである。

「お風呂、お先に頂きました……」

(うおっ、色っペー！)

男性陣の心の声が、聞こえるはずがないのに、揃った気がした。旅装を解いて美人おねいさんに戻ったニキータの湯上りほっかり姿は凶悪な破壊力を秘めていた。身体がほぐれたことで心もほぐれたのだろう。穏やかな微笑みは幸せのオーラをこれでもかと発していた。

(そこまでお風呂が好きだったのか……)

(次の冒険先はこれで半ば決まったな)

(?)

(まあ、詳しくは後でな)

最後にジンが風呂に入っている。温めのお湯が好きだとか色々あるらしい。途中でユフィリアがお湯をきれいにすることを思いつき、呪文を使ったりした。

「7人もいると、やっぱり時間が掛かるわねえ」

「んだな、デカイ湯船が欲しくなる」

「がんばって稼いできてちょーだい？」

「うっわ、超ねむてー」

「葵さん！」

「何々、どつたの？」

ユフィリアが葵に何やら相談している。一方でニキータが吟遊詩人らしく楽器を出して来ていた。

「……………いいね！ やろやる！」

「そうこなきや！……………え？ ジンさん、もう寝ちゃったの？」

「ああ、先に休むよ。みんな楽しんでいい。(……………)」
最後になんと言われたものか、ユフィリアは口元をくにやくにやにしてニヤけていた。ニキータが見ても珍しい表情だなと思う。

なんとなく危機を察知したシュウトが「自分もそろそろ……………」と立ち去ろうとしたところ、後ろから肩をつかまれた。白くて細い指が皮膚に食い込むような力を出して(これは魔女の手だ!)と思わずにいられない。

「どこいくの、シュウト?」

「いや、そろそろ夜も更けたから自分の部屋に……………」

さつきまでニヤけていたはずのユフィリアは物凄く冷たい声を出していた。しかし、すぐさまシュウトの背中に身を預けるようにしながら猫ナデ声で、

「ねえ、聞いて? さつきね、私、裏切られたばかりなんだよ?

あの休憩地点で、レイシンさんに凄い剣幕で突っかって行った人がいたよね? その人、ジンさんの味方だって、私、信じてたの……………」

……………酷いと思わない?」

「いや、それは、だから違っつて……………」

ユフィリアはシュウトの身体を掴み、自分の方へ向き直らせると、無表情で、ビー玉みたいな眼がシュウトを貫きそのずっと後ろを見ている。半妖精どころか氷の女王になってしまった。

「まさか、また裏切るなんて言わないよね?」

「……………はい」

「そう、よかった」

一瞬にして季節は冬から春に戻り、輝く笑顔が帰ってきた。シュウトは「大魔王からは逃げられない」ことを思い知ったのだった。

「これは何かな？」

「赤じゃない？」

「行く？」

「行っちゃう？」

「……女の子は？」

「恋に酔っても、」

「お酒じゃ酔わない！ イエーイ！！」

深夜に女の子達と一緒に騒いでいた。シュウトは正に「リア充」の現場にいた。ニキータが演奏し、ユフィリアが振り付きで歌い、踊る。ニキータも葵も舞台に乱入して踊ったり叫んだりしていた。シュウトも歌えと命令されて嫌なのに無理矢理に歌わされる。抵抗は無駄だった。歌詞も分からないのに無難な曲をしどろもどろになりながら歌わされる。テンションが上がりすぎているのか、何があっても女性陣は笑いまくっていた。

シュウトはリア充が嫌いな理由を思い出していた。冒険している時は大人しいし、むしろやり易いぐらいだったのだが、彼女らの「本領」にはやはり付いていけそうにない。しかし既に時は失われてしまっていた。

レイシンがいつの間にか居なくなり（たぶん特技を使った）、石丸もいつしか寝ている。シュウトだけ逃がして貰えず、オモチャにされる。狂った夜はいつまでも続いた。

明け方、ジンが飲み物を口にしようと自室から降りてきて、クーラーボックスから冷えた水を取り出していた。一口、二口と飲みながら散らかった部屋の惨状に、だいたい何があったのかわかる。(うつわー、大変だったろうなー)とシュウトに同情し、……………机に当の本人がうずくまっっているのを見つけて、恐る恐る声を掛けた。

「シュウト?……………おい、まだ起きてたのか?もう部屋で寝たらどうだ?……………ブツ」

顔を上げたシュウトを一目見て、飲んでいた水を吹き零してしまった。

「う、あ、……………とりあえず顔を洗ってこいよ、な?」

「……………はい」

リア充になり損ねたシュウトは、心の大事な部分を汚されてしまい、机で袖を濡らしていた。

ジンに声を掛けられて顔を上げたシュウトは女の子の化粧をさせられ、化粧による「黒い涙」が幾筋も頬を伝って流れた後があった。

女性陣は乱痴気騒ぎに満足して部屋で爆睡している。

お昼過ぎに起きて来た時、ジンが葵の頭にキツイゲンコツを見舞う。

「あだっつ」

「一緒になってノリノリか? ああ!?! やり過ぎんなっつってんだろ!」

「うぐっ、ちょい飲み過ぎまして……………て入っ?」

その日、シュウトは夕方まで昏々^{こんこん}と眠り続けた。心の傷を少しで
も夢の世界に置き忘れてくることを願うばかりであった。

朝にレイシンが自室から降りてくると、既にジンは起きていて、ちょうど部屋の後片付けを終えた所だった。

「おはよ、早いじゃん」

「ああ、先に寝かせてもらったからな。……この分だと昨晚は凄かったらしいな？」

「そうだねえ。かなり激しかったかも」

昨晚の女性陣の暴れっぷりを思い出すと、どうしても苦笑いしてしまう。

「それよっか、夜明けに目を醒まして降りてきたらシュウトがボロボロになっててさ……」

「マジで？」

「参ったよ。そろそろ寝た頃だとは思っが……」

レイシンも途中で部屋に引き上げて寝てしまっているので、暴走を抑える役がいなかったのだろう。

「大丈夫そうなの？」

「厳しいかもだな。終わった事はいいとして、いや釘は刺すけど、善後策を考えねーと」

「そっか。まあ、そっちは任せるよ」

「いやいや、任されても……」

「そっこの得意でしょ？こっちはホラ、料理でがんばるから」
「きったねー」

「わっはっは……少し凝ったの作るつもりだけど、何か食べた
いのある?」

「んー、まだ何が作れるのか分からん」

「日本食は無理。中華か、イタリアン」

「じゃ、両方」

「だよな」

「おはようございますっス」

「よっ」

「おはよ」

石丸が起きて来たのでジンは早速相談を持ちかけている。地理に
詳しいのは石丸の強みだ。

レイシンの方は料理の下拵えをするべく食材のチェックに取り掛
かった。彼にとって料理をしていると良い事ばかりである。苦手な
ことなど大抵は免除されたし、たまになら強権を発動することもで
きた。そもそも料理に没頭している時間が好きなので作業は苦にな
らないし、食材の買い出しでお金を使うのも楽しい。人に料理を出
して凄いと驚かれるのも、美味しいと喜ばれるのも良い気分だった。
料理の話題で喋るネタも増えていて、人付き合いにもプラスになっ
ている。大災害は流石に予想外だったが、友人とも一緒だった
し、意外となんとかなるものだと思いはじめている。

「なあ、明日出発でもいいか?」

「急だね?……今度は何日ぐらい?」

「3日、かな」

「それぐらいならいいんじゃない?」

「悪いな」

ジんがこうして尋ねているのは、留守中の葵の食料についてのこ

とが念頭にある。

実際問題、彼女は这个世界だと料理を温め直すことも出来ない。保存の利くものを作り置きをしたとしても美味しく食べられる訳ではないのだ。もし料理屋がシブヤから無くなってしまったら、留守中に食べるものが無くなってしまっだろう。この分だとそう遠くない日に、出かける時はアキバの宿にでも泊まって貰うことになりそうだった。

レイシンにしてもなるべく冷たくても美味しいものを、とは考えているのだが、材料不足やレシピを知らないものなどが色々あるため、冷たいもの限定ではどうしてもレパートリーが足りない。

レイシンは日頃から料理のことばかり考えるようになっていた。現在の課題は（言葉にするならば）トータルのバランスをどうするかである。料理は毎日食べるものなので、たまに豪華にするとしても、普段は少しずつ変化があればいい。しかし、冒険に出ている間は時間も道具も食材も揃わないので調理の簡単なものが中心になってしまう。ワンパターンにしたくはないが、基本的なものが幾つも足りていないのが悩みの種だった。後はジン達と一緒に旅に出ながら、使える食材を発掘していくしかないだろう。

お昼の時間を考えて仕込みを始める。昼はイタリア料理風にして、夜は中華料理風だ。ちよつと本格的な中華風にするために、トリガラでスープを出すつもりでいる。この手のスープは、フランス料理ではブイヨン、イタリア料理ではブロードと呼ばれており、料理の基本的な味を作る出汁ダシに相当する。レイシンは出かける前にこれらを作っておき、冒険先に持って行ってシチューの味を整えるのに使っていた。旅先での食事は準備や工夫しだいで完成度に大きな差が出てしまう。

中華スープやブロードを作るのには数時間は煮込むことになるし、

それが毎回ともなれば流石に燃料費が馬鹿にならない。葵が起きている時に召喚術を使ってもらうことにしようと思っっているのだが、今日は昼近くまで起きてこないだろう。そんなことで昼をイタリア風にする。

こねたパスタを寝かせ、次にトマトの処理に取り掛かる。このトマトは初期から素材のままでも味のあるアイテムだった。

大災害 後の世界では、メニューから作られる料理には味が無かったが、現在では新しい料理法の発見により、料理人のサブ職を持つ者だけが味のある料理を作れることが分かっている。

素材のままであれば、それなりの味が残っているもの（果物など）も以前からあったようだ。ということは、（料理では大半が加熱する工程を経るため）結果的に生で食べられないもの、食べても美味しくないものは食料に出来なくなることの意味する。生米は美味しくない。

この世界にはメニュー作成できる料理はかなりの数のレシピがある。逆に言えば、レシピに記載されている『必要な食材』はこの世界に全て存在が保証される事になるだろう。料理のレシピ素材だけでなく、調剤に使われる医薬品の素材にも、食用に転用できるものが多く含まれていた。更に海外サーバの開発状況まで考えれば、これら素材の数は膨大なものになる。つまり生のまま食べられるものも膨大な数になるはずだった。

しかし一部の素材には既に味が無かったのだ。例えば、飲み物は全てが水になってしまっていた。

葵は、「お茶もお酒もないならば、牛乳を飲めばいいじゃない？」と言って素材名 ミルク を買って来たのだが、それはやはり白いだけで水のままである。それだけならば意味は通じるのだが、大

地人 はその白い水からバターやチーズを作っていたことになるではないか。同様にアルコール飲料でも味はしないのに（昨晚の葵たちの様に）、酩酊することが可能だった。

ともかく、料理人が新しい料理法によって調理すれば味のする料理を作ることが出来る。味のしない食材からでも味のある料理が作れるため、レイシンはこれを「味返り^{あじがえり}」と呼んでいた。メニュー作成した料理では、新しい料理法であっても別の料理の素材には出来なかつたが、それ以外は自分で切ったり炒めたりすれば味のある料理にすることが可能らしい。

ジンは味覚ブロック説（メニュー操作により食材になんらかの口ツクが掛かり、その信号によって食べても味が分からなくなる）や、デジタルライズによる味の均一化（メニュー操作による加工・調理を行うと素材が物質的に完全な均一状態になり、「0」か「1」の味しかしなくなる）を謳っていたが、レイシンは「味が返ってくるんだからそれでいいじゃないか」と考えていた。そもそも料理人にか料理が作れないことがおかしいのだ。ならば、美味しくない食材からでも美味しくする能力のようなものが料理人には備わっていて、味の無い食材からでも料理が可能だと考えればいいんじゃないかと思っている。

現在は収穫する段階からメニュー操作を使わなければ、素材を元の味のままに出来ることが分かっている。今は過渡期なのだ。しばらくすれば、味の無い食材をそれと知らずに料理に使うことも無くなっているだろう。

ホールトマトの作成に取り掛かる。

ホールトマト（トマトの水煮）を作って保存しておけば、トマト

ソースを作るのが簡単になるのだ。湯剥きしたトマトを薄い塩水で煮ていく。それが済んだら今度は土鍋を出して、更に大量のトマトを火にかけ、トマトピューレを作る。完成したらどちらも容器を煮沸消毒して、保存する予定だ。すぐ夏が来るが、それでも1ヶ月程度なら味に問題はないだろう。

「なんか食うもんねーか？」

「ちよつと待つて」

ジンは何やら屋上で作業をして来たらしい。洗濯か何かだろう。肉を鉄串に刺し、塩をふってから軽く火で炙る。

「こんな大量のトマト、どうするんだ？」

「トマトピューレ作ると、こんだけあってもちよつとしか出来ないんだよ。……はい」

「サンキュ………うまつ。牛肉？」

「そ、あの村でね。」

石丸のためにもう一本焼いてジんに渡しておいた。こんなつまみ食い（正式名称 味見）も料理人の特権だった。

「あだつっ」

「一緒になってノリノリか？ ああ！？ やり過ぎんなつっつてんだろ！」

昼に女性陣が起きてきたところで、ジンが葵にガミガミと釘を刺している。それを合図にレイシンは料理の仕上げに取り掛かった。ジンには悪いが叱る役を押し付けてしまっていた。実のところ、こ

の後でレイシンが慰めて丸く収めればいいと思っている。これも適材適所だ。

3人とも10年来の友人であり、ジンとは幼馴染でこそないが、中学に上がる前からの20年以上の付き合いだった。葵とはエルダー・テイルでパーティーを組んだのが始まりである。

葵は当初、ジンに惹かれていた。2人は友人として仲が良すぎて上手く行かないと云う、よくありそうな話である。

レイシンは人からよく優しいと言われるが、ジンは優しいと云うよりも善良な人間で、彼の目の届くところで嫌な気分になることはあまり起こらなかった。葵もそこに惹かれたのだと思われたが、彼女は『同じ』には成れなかった。葵には息抜きが必要だったし、別の側面を見せられなくなり、次第にそれに耐えられなくなっていた。

その後の幾つかの事件が重なって仲間達はバラバラとなり、ジンもアカウントは残しつつゲームからは離れていった。それでも気にはなっていた様で、思い出したみたいに時々ログインしてはレベル上げをすることがあった。

レイシンと葵は、それぞれ複雑な想いもあって、エルダー・^{この}テイル^のを続けていた。未練も残っていたのだろうし、このゲームで知り合った友人との繋がりがなくなってしまうと云う事情もあった。

その後、レイシンと葵は自然と一緒にいる時間が長くなっていく。正確には葵がレイシンと居て楽だと気が付いたのだろう。リアルでも会うようになるのと散々ワガママを言い始め、それでも大丈夫だと分かって安心したのか、付き合いようになり、やがて結婚した。このワガママ時代にレイシンはリアルで料理を覚えることになる。葵がイタリアンを要求し、ついでに自分の好きな中華料理を学んでレパートリーを増やしていった。何が吉と出るかは分からないもので、彼女のワガママに応えるべく、美味しく作ろうとかなり根本的など

ころから勉強したのが今になってプラスに働いていた。

結婚後、葵はキャラをリメイクする。ロリキャラなのは照れ隠しでもあり、周囲に（つまりジンに）夫婦生活を感じさせないための配慮なのだった。そしてレベル上限が解放される話を聞き、ジンが戻ってくることになった。辞めるのなら区切りのいいレベル100になってからにしようとバージョンアップ解禁の前日からログインして、3人は一緒に大災害に巻き込まれることになる。

葵が怒られているのを見て、ニキータは自分の失態に頭を抱えていた。

（昨夜のは……………でも、楽しかったからなあ）

久々に熱いお風呂にたつぷりと浸かって幸せ満タンの状態。実際には後の人のことを考えてカラスの行水ではあったのだが、そんなことはあの幸せとは何も関係がない。そして歌って騒いで、アルコールが入ってからはワケが分からなくなり、ずっと笑っていた気がする。シュウトは……………犠牲となったのだ。

正直なところ、葵と一緒に怒られた方がまだ気が楽なのだが、当然でも云うかのようにニキータとユフィリアはお咎めなしだった。最初の日からこんな調子かと思うと、恥ずかしく、情けなくなってくる。お客様扱いされている内に態勢を立て直さなければならぬ。

「お昼だから控えめだよ」
「すっ、すごーい！」

赤が鮮やかなトマトソースの Pasta だけでも感動ものだった。手打ちされたばかりの生 Pasta に、作りたてのトマトソース。イタリアンバジルが散らされ見た目も良く、僅かな辛味がいいアクセントで大好きな味だった。寝たままのシュウトが可哀想になってしまう。パエリアはみんなで取り分けたこともあり、もうちょっと食べたいと思ってしまう。絶妙な仕上がり具合である。炭水化物ばかりにならないようにという配慮なのだが、男性陣は完全に物足りないだろう。中心にくるのは魚料理で、新鮮な素材の味を活かして皮までパリッと焼かれていた。オリーブオイルで楽しむように作られているが、香り付けにひと工夫されている。付け合せには一口サイズの牛肉ステーキも。これで文句などあるはずもない。

少し物足りないであろう男性陣には既製品のパンを温め直したものを出してあった。ニキータも一切れ貰ったが、もしもここがアキバなら焼きたてパンだったかもしれない。その惜しさまで含めてかなりの満足感だった。

(これ、気を付けないと物凄くダメになりそうな気がする……………)

この昼食はダメ押しだった。自分がまだ何も仕事をしていない事でチクチクする。お手伝いさんやお母さんが居るわけじゃないのだから、パーティのメンバーがいちいち仕事をしているのだ。改めて役に立たなければならぬと焦ってくる。「若い女の子だから居るだけでいい」といった発想をニキータは自分に許すつもりがない。それは「性欲の対象として見て下さい。自分にはそれぐらいの価値

しかありません」と言ってるようなものだと思いきや、信じていたためだ。ただ古風なのではない。リア充にはリア充の苦労があり苦悩がある。その立場が「安っぽい女」で居ることを許さない。それに加えて、ユフィリアがマスコット化してもいい様に、ニキータがそれなりに役に立たなければならぬと思っていた。ギルドに入ることにして楽になったのに、楽になったことで苦労しているのが不思議だった。

まだ勝手が分からない事もあり、ジーンに仕事がないか尋ねることにする。彼はソファで眠そうにウトウトしていた。例の能力のためシエスタ（午睡）にするのだろう。

「あの、……………すみません」

「ん？……………いや平気。どうした？」

「何か、その、仕事とかありませんか？」

「んー、それは無いな」

確かに、仕事があるなら寝てない気もする。

「……………待てよ、水着持ってるか？」

「水着、ですか？……………下着の、いえ、持ってません」

「私もってるよ。こっちじゃまだ着てないけど、可愛くて買ったままがある」

「じゃ、ニキータは買ったいてくれ。明日出発すつから」

「……………じゃあ、今度も海ですか？」

「いや、山。……………ふわぁ〜（欠伸）、ちょっとしたレクレーション、ん？れくりえーション？をやるから」

「はあ……………」

（川か湖で泳ぐのかしら？）

チラつと脳裏にシユウトが大型魚類モンスターのエサにされるイメージが浮かぶ。

見れば既にジンは眠っていた。もしシブヤで手に入らなかったらアキバに探しに行かなければならないのだが、起こしてしまつてよいものなのだろうか？と一抹の不安を覚える。レイシンは午後もかなりキツイ臭いをさせながら料理している最中であり、シユウトは昼も食わずに寝たままだ。石丸は魔術師なので後衛だし…… といふところまで考え、とりあえず思考を打ち切り、シブヤで探してやることにした。後のことは後で考えればいい。

ユフィリアがイタズラする時の真面目な顔になってジンの隣に座り、肩に首を乗せたりしながら、一番いい角度を探していた。

「ユフィ、ちよつとシブヤで探してくるからね？」

「うん、分かった」

スツと姿勢を戻し、何事も無かつたように答える。たしなめたつもりだったが、堪えない性格だった。

軽く髪を束ね、玄関から出る時に振り向くと、ジンの肩に頭を預けて彼女も寝息を立てている。つい先程まで寝ていたのに良く眠れるものだと呆れつつ、歳の離れた恋人と云うよりも、父と娘が一緒に寝ている図にみえて可笑しかった。

(ビキニなら、ある。ビキニしか、ない……………。)

シブヤの店で水着を発見した。

色は単色の赤もしくは黒。安めのアイテムなのでデザインもごく普通。「下着に使うにはちょい派手めの色が残りました」アロマ的な香り

が漂っている。実の所、これらが紫やシヨッキングピンク、ゴールド等にならないのは色で作成難易度が高くなるからであった。結果的にニキータは本人の知らない所で救われた形だったが、どちらにしても着てしまえばそれなりに似合うので大勢に影響はない。本人はそう考えられるほど大らかでも大雑把でもなかっただけの話だ。

（髪の毛（赤色）に合わせた方がいいかな。でも、黒の方が少し布が大きい目のような？ ……あ、しまった、ユフィが何色か訊くのを忘れてた。寝ているのを念話で起こすのも悪いし、可愛いって言ってたから、たぶん黒はないだろうなあ …… やっぱりこは黒よね？）

布面積で黒の一択であった。

「シュウト、とつとと起きろ、晩飯にすんぞ」

「はい、すみませ、ん …… zzz」

「起きないと、エルボー落とすぞ？（ぼそっ）」

「起きました。今、起きました！」

「うむっ」

シュウトが起きた時、何故かHPは半分になっていた。朝から夕方まで寝たのに半分ってなんだろうかと首を捻る。首を動かすと引きつれる感じがし、後頭部にダメージがあったらしいことが分かったが、まるで記憶に無い。

「ジンさん」

「なんだ」

「あの、寝てる間に誰かに殴られたのか、死にかけてた気がするんですけど」

「ふーん、じゃあユフィリアに回復してもらっとけよ」

「はぁ……」

フロアに降りて行くと、夕飯への期待からか、どこか殺気のようなものを感じる。葵がハイエナのようにウロウロ歩き回っていた。とりあえず近くにいたユフィリアに声を掛ける。

「ユフィリア、悪いんだけど回復してくれないか？起きたらHP減ってたんだ」

「……おっけ」

（ん、今の間は……？）

「お、シユウ君、お目覚め？大王出勤とはやるじゃん……あや、そのダメージどったの？」

遅刻した時の出勤が重役出勤ならば、夕飯に合わせたの登場は大王出勤らしい。ユフィリアによる回復魔法を見て、葵もシユウトのダメージに気が付いた。

「起きたらHP減ってたんですけど、これやったのって葵さんじゃないんですか？」

「なに言ってるの、寝てる時に殴ったって面白くないじゃん。常識っしょ」

「面白ければ攻撃するんですか……、てゆーか、ギルドの室内を戦闘禁止に指定してくださいよ」

「ダメダメ。そげなことしたら愛のツッコミ・シャイニング ウィ

ザードが使えなくなるじゃん」

「ツツコミにそんな技、使わないでください……」

（あれ？ 何か、みんなに見られている気がする。一体、なんだろう？……一日寝てて仕事してないから怒られるのかな？）

昨晚の乱痴気騒ぎによる心的外傷の具合をみんなで観察しているのだが、何故かシュウトの記憶からはその辺りがスツポリと抜け落ちていた。ダメージの方は朝方、ジンが「記憶をうしなえ〜い！」と叫びながら後頭部に打撃を加え、シュウトを九割殺しにしていた事による。もしかすると意外と効果があるのかもしれない。（良い子は真似してはいけないゾ）

夕飯の準備が整うと、俄然、食欲が、唾液が、胃液までもが湧き上がってくる。（注：胃液が湧き上がったらダメです）見た目もいいが、香りでガツチリ心を鷲掴みにされていた。

ワンタンスープならぬ餃子スープが出されたのだが、肉がたつぷり入った手作り餃子が器にこれでもかと詰め込まれ、スープで無理矢理に沈めてある。スープも美味しい、餃子も堪らない。炒め物も出されたが、テーブルが回らないのでみんなで回して取り分ける。野菜よりも牛肉が多くて、こんなに食べてもいいの？と誰かに許可を求めたくなった。どれも美味しいのはあるが、目を惹くのはやはり大皿にまとめて天まで届けと盛られた炒飯チャーハンだろう。……お米が嫌いな日本人がいて？

「うわあ〜、これもすごく美味し〜！」

「ん……？」

「え？」

「似てるけど、違うね……だーりん、つまり、どういうことだ

つてばよ?」

「……ねえ、みんなで何の話してるの?」

「つまり、醤油っぽい味がするんす」

「あー、あー、あー、言われてみればそうかも」

「……………魚醬か?」

「正解!流石じゃん」

「裏技使って脳を最大まで活性化しちったぜ」

「え?え?ぎよしょーって、何?」

レイシンがミウラの村で見付けたお宝。それは、イワシで作られた魚醬に黄金のサバを干したものを漬け込んだ『御供え物』だった。黄金のサバ(松輪サバ)が獲れると、御供え物をする風習として手作りの魚醬が残った形だった。

「簡単に言くと、食べ物だと思われてなかったんだよね」

「確かに、味がしても醤油そのままじゃ飲み物とかにはなりませんしね」

「ガラムは生ぐさいところがあるからねえ。一度加熱するとあまり気にならなくなるんだけど」

「……もしかしてあの辺って、マグロで有名な三崎漁港なのか?」

「そうっすね。マグロは遠洋漁業っすから、裏でいろいろあったのかもしれないっすね」

「あの、魚醬からは醤油って作れないものなんでしょう?」

「発酵させてるのは同じだけど、どうかなあ。菌のところまではちよつと分らないから」

「麹は難しいだろうな。しかし、同じパターンで料理だと思われていないものが 大地人 の街から出てくる可能性なら、あるかもしれないぞ」

「……日本語の家名を持っている西日本の貴族なんかが怪しいっすね?」

「その発言、ヤバくね？」

この魚醬は明日アキバに行った時にしかるべき場所に分けてこようという話で纏まった。神田の方に日本食の店を始めたところがあったので、その方面に興味のある人間が集まるだろうと予想しての事だ。

「明日からなんだが、戦闘訓練を行おうと思う。場所は東アルプス、奥秩父山塊、強行軍の旅っ！三日間の予定だ。最終日は『ドキッ、レクリエーションもあるよ？』なので、各自水着を持参のこと。下着に使ってるのでいいやゝとかはマナー的にもNGだからな」
「えっと、その条件だと水着持っていないんですけど？」

「じゃあシュウトだけフルンだな」

「やだゝ」

「サイテー」

「ちよっ、僕が悪いんですか!？」

「朝一で出発、アキバで準備して昼には立つからその積もりで。アキバでの装備品の購入はシュウトの仕事だぞ、分かってるな？」

「は、はい」

「必要なものリストぐらい作つとけよ？ 各自必要なものを考えておくこと。シュウトに協力してくれな」

「あの、そういうの手伝います」

「んー、じゃあニキータもシュウトの仕事をフォローしてくれ」

「わかりました」

「ギルドの共用貸金庫の話は当然分かってるよな？ギルドに入るかどうかは強制せんが……」

「大丈夫です。この機に僕が入るとききます」

「じゃあ、レイと一緒に手続きしてこい。……驚くなよ？」

「？」

「ニキータ隊員、耳を貸せ」

「……はい？」

何やらジンが耳打ちする。何秒かボーツとしていたかと思ったら、ニキータの背景に、にわかには暗雲が立ち込め、ガカア！と黄色い稲光が奔った。これは心象風景か何かだろうか。いや、それが見えてしまつて良いのだろうか？とシュウトは悩んだ。

「皆さん、がんばりましょう！最終日のその日まで、誰一人として欠ける事は許されません！！」

(嗚呼、ニキータが燃えている……)

半日寝ていただけで致命的な出遅れになってしまつている。

ニキータが手伝ってくれるので欲しいものリストの作成は順調だったが、シュウトの方はそれ以外にも押し付けられた仕事がいくつか残っていた。それに自分の矢を自作しなければならぬ。

(前は、サファギン相手の低級クエストだと思つて油断したけど、もうそつという事はしない……)

弓矢使いは矢に金を掛けた分だけ強くなれるものだが、弱い敵にまで一番強い矢を使う意味は無い。収入と支出のバランスで赤字にならないように気を付ける必要があるのだ。カトレヤでの収入を見ながらバランスを決めていくべきなのだが、自分に対する「自分からの期待」を裏切らないためには金に糸目などつけてはられない。それでも金に頼り切りの金満生活などは結局のところ長続き

しないのも事実。……となれば、時間をかけた自作矢をメインでし
のいでいくのがベストの選択だろう。

現状の手持ち素材で作れる最も強力な魔法の矢を作るには、作業
に炉が必要になるので後回しにした。これは何本か持っておいて、
戦況を好転させるために使うタイミングを逃さないようにしなければ
ならないのだ。

「さ、忙しくなるぞ！」

13 ガールズトーク

「おい、ユフィリア！」

「……………丸つち？久しぶりだね。」

「元気そうだな？逢えなくて寂しかったぜ。…………お前もだろ？」

「ふーん、私は楽しくやってたから、ゼーんぜん寂しくなかったけど？」

「相変わらずキツいな。でもそれってホントは俺に惚れてるからだろ？心が開いてるから、俺には何だって言える」

「相変わらず面白い人だよな」

「だろ？…………なあ、何度でも言っぜ。俺の女になれよ。今よりずっと楽しくなる」

「それ、丸つちは楽しくても、私は楽しくないんでしょ？」

「バカだな、一緒に楽しむに決まってるだろ、ユフィ」

「……………丸つちじゃ無理だよ」

「ナンだと？」

「私、これでもそれなりにモテるんだよね。強引に誰かさんの女にしようとしたら、周りが敵だらけになっちゃっつよ？」

「……………」

「じゃあね。もう声かけなくていいから」

「……………ところでよお、お前の“王子様”は最近どうしてんだ？」

「……………」

「お前が相手してくれないんじゃあ、寂しくって死んじやいそーだし、ニキータちゃんに構って貰っちゃおうかなあ〜」

「……………二ナに、」

「は？」

「二ナに手を出したら、絶対に許さない……………っ！」

「おゝ、コエー……………仰せの通りに、半妖精さま？　クハハハハ」

アキバに着くなりジンはさっさといなくなり、流れで他のメンバーと一緒にギルド会館へ向かう。結局は石丸、ニキータ、ユフィリアの3人もシュウトと一緒にギルド　カトレヤ　のメンバーとして登録することになった。無所属のままなのはこれでジンだけ。万一を考えて、客分のままにいるつもりなのだろう。

「これ全部がEXPポット？」

「私も使っていないのが5個ぐらいあるけど」

「そうだね、5個ぐらいずつ持っていくといいよ。強い敵と戦う前に飲めば効率がいいからね」

150個以上のEXPポットが置いてあったが、これでもまだ全部ではないとレイシンは言う。加えて金貨18万枚。リメイク前の葵の資産全部と、これまでのレイシンの稼ぎがコツコツと蓄えられたものだ。これがギルドメンバーに共有されるのかと思うと、信賴しすぎなんじゃないかと思ってしまう。もしも現実リアルだとしたら、どちらも持ち逃げされかねない。しかし、この世界でそこまでして欲しいものはあるか？と訊かれるとシュウトは思いつかなかつたりする。

ここからは個人行動の時間になる。

リストを作成した買い物はニキータと石丸が率先して引き受けてくれた。特に石丸がオズの魔法使いをイメージさせる「緑色の丸眼鏡」を手にしていた。始めは何事かと思ったのだが、緑の眼鏡を掛けるとつぶらな瞳が隠され、怪しい商人ドワーフっぽくなるではないか。なるほど本人も目を隠すと交渉で有利になるのだと言う。

この間にシュウトは水着を探しに行き、矢とその材料を仕入れに行かなければならない。

無難な色の男性用水着を見つけて安堵し、続いて矢を買い求める。その後で炉を使って矢の作成もしなければならぬ。作業自体はメニユー作成なので全てあわせても2分もあれば終わるはずだった。時間が残っていたら、自作矢を更に増やしてもいい。時間、時間、時間、とシュウトは追い立てられていた。ニキータが仕事を部分的に引き受けてくれなかったらとてもじゃないが間に合わなかっただろう。昼夜が逆転したせいでシュウトは寝不足気味でもあった。

昼飯を兼ねて『カンダ用水』の近くにある『一膳屋』という食堂で集合になっている。ここが例の場所で、レイシンが個人行動中に訪れて魚醤を渡し、情報交換をしていた。今のメインは焼き魚定食だったが、レイシンとも違う和風のテイストがなんとも美味しい。

ジンは海で失くしたブロードバスタードソードを買い直し、盾や鎧の修復を済ませ、またもや金欠だと嘆いていた。どうやら金巡りが悪いのがこの人の弱点らしいぞとシュウトは心のメモ帳に書き加えておく。

なにやらジンがユフィリアに声を掛けていた。言われてみれば、いつもやかましいぐらいの彼女が大人しいのはおかしい気もする。シュウトからするとジンは周りが見えているのか、ユフィリアだけみているのか微妙なので、深く考えてはいなかった。

アキバを出てからは強行軍になった。

馬は使わずに歩きで西進し、1時間に10分づつの休憩を挟んだ。最初は楽過ぎると思っていたのだが、やはりというべきか、甘かった。今回の強行軍はモンスターが出ようが何をしようが10分休憩を貰き、夜の10時頃までこれが続けられた。簡単な晩飯をすませてやっと今日は終わりかと思ったら、更に進軍するという。夜が明けようかと云う頃に4時間程度の睡眠を許され、泥のように眠った。

多摩川沿いに青梅付近まで移動し、そこからは段々と本格的な山歩きの態ていになってくる。山を登ったり降りたりしている内に、シュウトは今が何処なのかを考える気力もなくなっていた。本当に目的地に向かっているとは思えなかったのもある。しかし、今回一番辛そうなのはユフィリアだった。シュウトからみればたった10レベル程度の違いでしかないが、そのレベルによる僅かな能力差が彼女を疲労に追い込んでいった。ジンは仕方なく馬を呼び出し、2時間ほど背に乗せることもした。ユフィリアは馬の背でうたた寝していた。

一方でジンはというと、山だと眠くもならず元気らしい。精霊力が強い場所だと身体が楽だと言う。「現実リアルだと出不精なんだけど、こっちじゃアウトドア派かな」と笑った。シュウトからすれば単に迷惑な話だった。

「ダメだなあ、ドラゴン見付からないなあ」

精神的な疲労で突っ込む気にならないため会話が続かない。

「むむつ、生命体反応が3、いや4かな。シュウト、あそこら辺を見てください！」

「えつと、たぶん戦闘イノシシです」

「よし！最優先目標『とんかつ』を確認つ、いくぞ！」

そういつて一人で飛び出して行った。追い付いたときには1体を仕留めており、残りは追い散らした後だった。巨体なので全部は食べきれないからだと言う。空かさずレイシンが剥ぎ取りに掛かる。

「やっぱりさ、豚肉のハンバーグが一番美味しいと思うんだよ」

「はあ、そうですか」

「醤油で頂くのがマイベスト……って、へたばってんなあ」

「……ジンさんが元気すぎるのでは？」

1時間の食事休憩のたびにみんなで横になって少しでも睡眠をとろうとする。元気なのはジン、レイシン、石丸のベテラン組ばかりだった。

戦士職はもともと体力が並外れている。石丸は装備品が軽いことと、ドワーフの頑健さによるものかもしれない。山歩きは慣れの問題が大きいのだと言っていた。

戦闘訓練だと言っていたのでシュウトとしては期するものがあったのだが、特にそれらしい素振りもない。唯一、ユフィリアにだけ課題が出されていた。

「回復呪文を使う場合、距離感が問題なんだ」

「距離？」

「そうだ。良いヒーラーは、常に味方を呪文の届く範囲に入れておく。もっと良いヒーラーは呪文投射距離ギリギリを使って回復する。」

(なるほど、時間の次は距離ですか……………)

「最良のヒーラーは、呪文投射距離の外から回復する」

「え!?!」

「まあ、お遊びの一種なんだけどな。呪文詠唱前は魔法の範囲外にいて、詠唱中に回復されるヤツがその範囲に入ればいいわけだ。それが連携つてもんだろ?……………言うのは簡単だけど、実際の戦闘中に毎回成功させるのは至難だろうな。敵・味方の行動予測が5秒前後で必要になってくるかもしれない」

「そんなこと可能なんですか?」

思わずシュウトが口を挟んでいた。

「可能なんじゃねーの?……………葵は普通にやってたからなあ」

「無理矢理やらせたんじゃないかなかったっけ?」

「そうだったか……………?」

レイシンのツッコミを見る限りでは事実の様だ。なんとなく葵も大変だったのかもしれないなあ、とシュウトはその苦労を想った。

シュウトは真面目に戦闘がどう変化するかを考えてみた。大規模戦闘の場合に、リーダーが回復職だったりすると、自分が動いて前線メンバーの回復をすることはある。冷静になってそういう風に考えれば無茶な事は言っていない。ヒーラー自身が範囲内まで移動することは意外と良くあることになる。

ここで無茶に聞えたのは、ヒーラーが動くのではなくて、回復さ

れる側が移動するからだろう。これは遊動型の連携を使うジン達ならなんの問題もなくなる。移動しながら戦うのが常だからだ。

ヒーラーが呪文投射距離の外にいることにどんなメリットがあるだろうか。

シュウトはしばらくこの問いを考え続けた。結論は、敵の呪文投射距離などの攻撃範囲の外にいられる、となる。それは飛躍的に安全度が高まることを意味していた。エルダー・テイルの戦闘がゲームとしてデザインされたという点からすれば、呪文投射距離などの「枠組み」には一定の意味がある。その「枠組み」を外すのだから、何がしかの要素が無制限になることを意味するのだろう。

ではデメリットはどうか？一つには回復呪文が間に合わなくなる危険がある。もう一つは戦列が間延びすることだろうか。そこでもう一つのアイデアが予測できたのだが、シュウトはまだ胸にしまっておくことにした。

少なくとも呪文投射距離ギリギリで回復することを覚えれば、ユフィリアの回復職としての技術が高まるのは間違いないように思える。王道的な成長路線だった。

そんなこともありつつ2日目も終了した。目的地が近いらしく、6時間ほどの睡眠時間を与えられ、翌朝にはかなり元気になっていた。た。

3日目になってもジンの態度は特に変わることがない。ヤキモキしていたシュウトは思い切って尋ねてみることにした。

「ジンさん、あの、そろそろ教えて欲しいんですが？」

「ん？……何を？」

「その、強くなる方法ってヤツです」

「……………ああ、強くなりたいんか？」

「そりゃ、まあ」

シュウト以外のメンバーも興味のある話だった。

「えつと、じゃあ、どうしよつか？」

「えつ、何も考えてないんですか!？」

「……………んー、シュウトがこんなに元気だとは予想して無かったからなあ」

「はい？」

それを聞いて何人かがシュウトから目を逸らした。シュウト自身は何が問題だったのか身に覚えがない。

「まあ、いいや。それじゃあ、とりあえず気を高めてみせてくれ」

「キ？」

「気だよ。よくあるだろ、ドラ ンボールとか、聖闘士 矢とか北の拳とかで」

「かなり古めのチョイスっスね」

「さ、オラにオメエの気の力をみせてくれ!」

「あんまり似てないです。……………じゃなくって、どつやればいいんですか、それ？」

「え？」

「え？」

「……………」

「……………」

「どつしよつ、今時の若者って気の高め方も知らないみたいなんだけどっ」

「こつちに泣き付かれても、ねえ？」

レイシンは軽くスルーしてのけた。

「じゃあ、石丸」

「うっす」

「魔力を高めてみせてやってくれ」

「りよ、了解っす」

そのまましばらく「うむむ」と唸っていたのだが、「呪文使いたいな感じでやればいいんだよ」とジンがアドバイスしていた。

「そうそう、そんな感じ」

確かに呪文などの特技使用直前の力の流れを感じることが出来る。

「フリジット・ウインドウ」

石丸の範囲攻撃呪文が吹き荒れた。

「……………」

「……………あの、冷たいんですけど？」

「申し訳ないっす、つい……………」

「まあ、今みたいな感じだな」

氷の彫像と化したのはシュウトとレイシンだけだった。ジンはちやっかり発動直前に回避している。

「さ、やってみる。ハ ター×ハ ターとか、魔法先生ネ ま！み

たいな感じでな！」

「少し新しくなったっすね」

「……………」

「ん？どした？ 『はあああああ！』とか『おおおお！』とか声に出してもいいぞ？」

「……………」

「なんなんだよ？やってみろってば」

「あの……………これ、けっこう恥ずかしくないですか？」

「はあ？」

石丸の フリジット・ウィンドウ に倍する冷たい風がビュービューと吹き荒れる。夏でもこの辺りは氷点下を下回ることが珍しくないというからそのせい……………なわけがない。

「ゆとり小僧…………… テメエ、根本的なところで異世界ナメてんだろ？」

低く抑えられた怒声に、冗談半分の空気が一瞬で消し飛んだ。シユウトは血が下がって内臓まで冷たくなるのを感じていた。

「魔獣だの巨人だのがうつろいついてる本物の異世界なんだぞ？今まで散々魔法だの恩恵に与^{あずか}っておいて、たかが気を高めるのが恥ずかしいだと？冗談も大概にしろや」

「……………すみません」

「どうせ、何で怒られてるのかも分からないんだろ？…………お前のその『恥ずかしさ』や『照れ』が周囲の人間に感染するんだよ。お前だけ強くなれないんならそれでもいいが、周りの人間まで恥ずかしくなっちまったら、練習する前からダメになるだろうが」

「……………」

「お前はまだ自分のことしか考えてない。だがな、お前の言葉や態度はお前の内と外でこの世界を創り出してるんだ。決して、お前だけのものじゃない。お前の認識は、お前の世界を作る。それは他者にも影響するんだ。」

「よく見とけ」

そう言ってからジンは力を解放した。瞬間的に石丸の フリジット・ウィンドウ の時の数十倍、100倍以上の力の爆流が叩き付

けられ、思わずシュウトは尻餅をついてしまう。ジンの見せた力はシュウトの作り出した他者への影響を軽く上書きするだけのパワーがあった。

「まあ、ゆっくりでもいい。よく考えとけよ？……………よし、出発しよう！」

ジンは怒りの矛先を収め、軽く笑いかけると、シュウトを許すようにその声を掛けたのだった。

しばらくシュウトは落ち込んでいたが、ジンが変わらぬ調子でこき使うため、なんとなく心のバランスが取れたらしかった。今回の旅は特に強い敵と遭遇しなかったな」と話していたところで、氷雪悪鬼の集団と出くわして戦闘になる。敵のレベルは70付近、数は50を上回る。6人パーティだとちょっと厳しい辺りだが、ここでジンの力に頼るのもどうかというところだった。

名誉を挽回したいシュウトがここで活躍すべく、自作矢を用いて一体、また一体と次々に敵を射落としてゆく。そのため敵に優先的に狙われるのだが、慌てずに自身が移動し、敵が直列するように誘導していった。タイミングよく石丸が貫通型の雷撃魔法を使い、まとめて十数体に痛撃を浴びせると、後は一方的な展開になっていった。それなりに時間は掛かったものの、敵のレベル帯を考えれば比較的楽に勝利することが出来た。

「……………で、どうして温泉なわけですか？」

「だから、レクリエーションだって」

「じゃあどうして温泉がレクリエーションなんですか？」

「いいだろ、別に？……おい、ニキータ！ シュウトが温泉じゃレクリエーションにならないってよ？」

笑顔のニキータのこめかみに青筋がビキビキッと浮き上がる。

「……………すみません、僕が一方的に間違っていました」

「だよな」

シュウトからすれば、水着で混浴というあからさまに浅ましいプランに頭痛がするものの、喜んでいる人（主にニキータ）がいるからいいか、と自分を納得させることにした。（殺気も尋常じゃないし……）

男性陣が先に入り、女性陣の入場をどきどき・わくわくの心境にて待つことしばし、奇跡の混浴タイムが始まった。

まず元気そうに入って来たのは、エメラルドグリーンのビキニを着たユフィリアだった。胸元はリボンがあしらわれ、デザイン的にも可愛らしいと言って良い。全体的にほっそりしたシルエツトのだが、背中から足に続くラインが完璧な美しさを表現していた。胸は小振りだが形の良さが伺える（実際、このサイズを好む男性は意外と多い）。伊達や酔狂で“半妖精”と呼ばれているわけではなかった。

続いてニキータが恥ずかしそうに胸元を隠しながら入って来ると、男性陣に戦慄が疾走^{はし}った。

（ま、まさか……………隠れ巨乳か！？）

黒のビキニに収まっているような、いないような。その豊満なバストにどうしても目が釘付けになってしまう。戦闘コスチュームによる男装化が解かれ、元々の美人おねいさんっぷりを隠すものが無いところなるらしい。流れる赤い髪、扇情的な黒の水着、高く持ち上がったヒップ、大きく盛り上がった胸、なによりも恥じらいという最高の調味料によって極上の仕上がりであった。

「おーい、こっちこっち！」

ジンがまるで平気そうな声で女性2人を呼び寄せる。シユウトはちよっと待ってくれ！と叫びそうになるのをなんとかこらえ切った。

ニキータがどきどきしながらゆっくりと湯に浸かる。そして、ほう、と溜息をひとつ、

「ああ、しあわせ……」

と言った。

みんなで幸せだった。

「ニキー！ 来てくれてありがとう。お元気？」

「はい。ナオミ姉さんも？ 今日はお招きありがとうございます」

「……あら、ギルドに入ったのかしら？」

「ええ、色々あります。小さいところなんです」

「……でも カトレヤ って、“あの”？」

「ご存知なんですか、シブヤの小さなギルドですよ？」

「そう……では、葵お姉様にお伝えしてくださる？ 菜穂美は

まだ忘れておりません、と」

「？……わかり、ました」

「お願いね？……じゃあ、楽しんでいつて？」

温泉から帰還した翌日、ニキータとユフィリアは再びアキバを訪れていた。目的はマダム・菜穂美^{ナオミ}が主催する飲み会に出席するためである。

“マダム” 菜穂美^{ナオミ}。

戦闘ギルド ホネステイ の名物召喚術師で、年齢的にはニキータとそれほど離れているわけでもないのだが、もともと女性としてはかなりの低音だったため、そのオネエ口調と合わせてゲーム時代から既に「マダム」と呼ばれていた。帰国子女という話で、英語を話す時は更に低音で話すのだという。酒焼けも少し入っているかもしれない。

数年前から菜穂美が主催する飲み会が大手ギルドに在籍する女性達の横の繋がりのひとつとして機能するようになっていた。菜穂美本人は単に飲み会だと言っているが、開催を告知する念話で誰かがマダム・s・サロン と名付け、それが半ば正式名称だった。毎月2回行われ、大災害 直後の混乱で一度は中止になったものの、異世界となってもめげずに復活し、今回が（大災害 後では）4度目の開催になる。

男達の戦場を鮮やかに彩る華たちにとっては、今夜こそが「女達の主戦場^{イ・ナイト}」であった。

とはいえ、ニキータにしてもこの様な場がそれほど得意という訳でもない。いつも普通にこなして終わればホツとする口だった。要するに恋バナなどのガールズトークをするための女性達の集まりだったし、あること無いことが噂として話題になるのだ。自分の立場を高めるために他の女の子の悪い噂を流すことなどは日常茶飯事でもあったから、イヤだからといって来ないだけでは不利になっていくばかりだった。男性のやり口とは違い、周到で回りくどく、陰惨でもある。

それでも娯楽が少ないこの世界では、ガス抜きのための必要悪なのだ。参加者個々人が上手に利用できるかどうかという問題なのだろう。

大災害 の後は誰がどんな顔をしているのか？といった格付けに関わる問題や、そもそも周囲のログイン状況による人間関係の唐突にして大規模な変化とがあり、どうしても足場固めに時間が必要だった。今では牽制し合うだけの時間は終わり、現在のトレンドとして「異世界での恋愛」が早くもメインになっていた。

つまり、最初にこちらで異性と付き合った子は英雄ヒロインになったのだ。みんなが集まって来て話を聞いたがった。それを羨ましいと思う子も沢山いた。それまでに異性のパートナーが現実リアルでいたのではインパクトにはならない。あくまでもこちらで新しいパートナーと『そういう関係』になった子が話題ヒトクマの中心だった。話題が旬である内にと、さっそく後に続くものが現れる。2週間もあれば女の子が恋をするのには十分なのだ。

そして現在では「どんな人と付き合うか？」という事が話の中心になって来ている。……それは丸つきり現実と変わりがなかった。

アキバという世界は狭い。誰も彼もが美形になっていることもあって、目立つ男性を探すのは難しいことだった。大手のギルドマス

ター級で言えば、D・D・Dのクラスティヤ、西風の旅団のソウジロウ等に人気が集まっている。円卓会議が立ち上げられたことで今やクラスティヤは王の立場にいる。厳密には王ではないのだが、この場所では厳密な理解などは遠ざけられてしまう。本人は白皙の美青年でもあることだし、戦闘時とのギャップを畏れる子が居ると同時に、そのギャップに強く惹かれる子も多かった。暴力がセックスを連想させるためだろう。

一方で剣聖ソウジロウはアイドル的な人物でもあり、気軽に愛することの出来る対象だった。彼は誰かの独占物には成りにくい。それを自分が独占したらどうなるか？といった妄想を加速させる存在だった。恋に恋する女の子を無制限に引き付ける「灯り」なのだ。彼に近づくほどに本気になってしまう女の子も多かったが、親衛隊のような自治が形成されつつある。それで状況が改善しているとは誰も思っていないのではあるが。

そもそも普通の立場でもいいから隠れた美少年を、と望む声があり、それらを発掘する話の流れで最初の方に名前が挙がる一人に「銀剣のシュウト」が含まれているのだった。

「聞いたよニキ姉、汚いよお」

「どうして？」

「シュウトくと組んだんでしょ？」

黒剣騎士団の体育会系女子うらは耳が早かった。面白そうな話題だと思ったのか、さっそく周囲の何人かが集まって来る。

「もっ、違っから」

「でもシュウトくと同じギルドでしょ？」

「まあ、それはそうだけど」

「え？姉さんシルバーソードに入るの？」

「違つつて、シュウトくんのチームでしょ」

「やっぱシュウト君に誘われてOKしたんじゃない」

「スゴイ」

「ちよつと色々あつてね。だけどそういうんじゃないよ」

「じゃあ、まさかユフィリアがシュウト狙い？」

「ギャー」

「終わった」

久しぶりの甘いものを見付けてマイペースにモグモグやっていたユフィリアに視線が集まる。

「ん？」

彼女は実の所、この場においては場違いなほどの脅威だった。

「ユフィリアってシュウトのコトどう思ってるの？」

第8商店街の亜矢がユフィリアに突っ掛かっていく。彼女はこここの常連メンバーで、仕切っているつもりになっている処があった。自身も勝気な美人なのだが、どこか他者に勝とうとし過ぎるきらいがあり、コンプレックスが見え隠れしていた。どうにもユフィリアが気になって仕方がないらしい。

他の女の子達も遠巻きに聞き耳を立てている。やはり気になって仕方が無いのだろう。

「どつつて？」

「だから、どう思ってるかよー！」

「んー、べつに〜い。わたし、他に気になってる人がいるし」

ユフィリアの「気になってる人」はニキータもこれまでに2〜3人聞いているが、告白させるだけさせて付き合ってはいない。彼女からアプローチすることはまず無く、男性が勝手に寄ってくるのだ。こういう質問をされた時の方便なのかもしれない。

「そ、そう、じゃあその気になってる人ってのはどんなヤツなの？」「えへへ〜、超つよい人だよ？」

ニキータは頭が痛くなりつつあった。せめて余計なことは喋らな
いで欲しいと願った。

「じゃあ、クラステイ？アイザック？もしかしてソウジロウなの？」「ううん、もっと強いひと〜」

更に頭が痛くなって来た。

この世界での強さを表現するものは、主に幻想級アイテムの所持数によって決められている。従って、ほぼ何処かのギルドマスターとイコールで考えて良かった。ついでに大手のギルドマスターよりも強い人物は彼女達の世界観では存在していない。

「はあ？あんだ馬鹿じゃないの？ 他所の街の男？ まさか衛兵とか 古来種 だなんて言わないわよね？ そんなヤツどこに居るのよ？？」

「違うもん、ジ……むう」

ニキータがNGを出したのでユフィリアはとりあえず黙った。

彼女達は大抵、ユフィリアが エルダー・テイル のことを良く分かっていないと思い、勝った気分になれば去っていった。そこし

か勝てる部分が無いのだ。ひとつ勝てればさつさと勝ち逃げする。

男性は胸の大きさや髪の長さ等で女性を判断しがちだが、女性の目から見るとユフィリアは完全に別格の存在だった。美的な観点において、完成度や到達点の次元が違う。それは混乱していた。大災害から僅か1ヶ月、実際には2週間程で“半妖精”という二つ名で呼ばれるに至っていることから分かる。目には見えない何かが違うのだった。

そう、彼女はゲーム時代にはその渾名あだなで呼ばれることはなかった。

ユフィリアが D・D・D のユミカを捕まえて話を始めていた。ユミカはユフィリアのお気に入りなのだ。モンスター娘と言われている、モンスターが大好きで、その話をネタに男の子と話をするタイプだった。がんばり屋さんで、黒髪のボブカットが奥手で清纯そうなタイプに見えて、どうして大胆なところもある。先日こちらの世界で付き合った彼氏と別れたばかりだと言っていた。たぶん彼氏が乱暴に扱ったのだろう。

ユフィリアは天才的なまでに話題の中心になるのが上手かった。話を聞いてくれる人をいち早く見つけると、感情をたっぷりと込めて、その独特な話術で「自分がその時にどう思ったのか」を話していった。彼女が話すと、些細な冒険でも新鮮な感動がある。そして時々専門的なことをニキータになんたっけ？と尋ねるのだ。例えば、「この間戦った木のお化けってなんだっけ？」と尋ねると、ニキータが「レイニー・トレントでしょ」と答える。このやり取りが加わることで、ユフィリアの話には上手い具合に客観性や信憑性が加えられていった。演出としてニキータが音を付け加えることもある。

「それじゃあ、雨の森と戦ったんですね！ユフィリアさん達って凄いです！」

そうやって面白そうな話をしていく内に、彼女の周りには人が集まっていくのだった。……しかし、それが許せない子がどうしても何人かは現れてしまう。

そもそも、この手の女子の会合が馬鹿らしくて逃げてしまう女子だって少なくはないのだ。ゲームをする女子の全てがそうだとは言わないが、ここに来ている大半が「にわかりア充」だと思って良い。ある意味ではリベンジの場なのだ。せつかく綺麗な姿になれたのに、現実リアルのくだらない上下関係を持ち込まれるのが気に入らないのは当然の話だろう。

二キータにしてもある程度まで気持ちは一緒だった。本当の勝ち組とは、本当に好きになれる相手と結ばれて一生を穏やかに生きていくことだと思っている。それなのに恋バナの話題作りのためにどうでもいい相手ととりあえず付き合うのは違うと思っていた。

女性は弱い部分のある生き物で、自分の人生を豊かにするかどうかをパートナーとなる男性に委ねてしまい易い。彼氏がいなければ、毎日平凡で退屈な日常の繰り返しになると知っている。旅行に行ったり、高い服やカバンを身に付けたり、頻繁に髪型を変えたりするのは、その行為の大半が「自分が話題の中心になりたいから」である。男性のパートナーがいなければ話題を失ってしまうのだ。女性同士の会話でどうしても低く見られてしまう。可哀想だと思われるてしまう。自分でも卑屈になってしまう。だから、彼氏と付き合う恋が必要なのだ。

さつきも亜矢が ロデリック商会 の花乃音カノネに向かって、丸王という男子に情熱的に口説かれたことを迷惑そうに話しながら、自慢

していた。自分では付き合いたくはないが、口説かれるのは嬉しかったというあたりだろう。そして近くにいたユミカに向かつて「付き合ってみたら？ 貴方なら合うかもしれないわよ？」などと無責任なことを言うのだった。これを真に受けたら「冗談だった、真に受ける方が悪いのよ」と言うのに決まっている。

マルオウ
丸王とはここでしばしば話題になる猿顔の美形 アサシン 暗殺者 で、

小さなギルドのマスターをやっていた。昔の言い方で云う『肉食系男子』のタイプで、このゲームエルダー・テイル をナンパの場所か何かと勘違いしていた。実際には 大災害 の後で上限レベルの自分の強さに勘違いした小心者である。

ニキータ達も 大災害 の後で一度だけ一緒に冒険に出たのだが、あまりにしつこいため、途中で帰還したことがあった。

ユフィリアは先日の温泉の話をしている。天然の露天風呂だとか、景色がとても綺麗だったとか、外が肌寒いとか、お湯が熱くて気持ちよかったとか、水着で男子と混浴したとか、男子がニキータの胸ばっかり見て不潔だったとかの話だ。聞いていた何人かの女子が「いいな〜」と声を上げた。

ニキータはユフィリアとペアバディを組んでいる。これは基本的なスタイルの一つだろう。戦闘服で男装を意図しているのも、元々はただの趣味だったが、今では別の意味が与えられていた。ユフィリアを守るためであり、自分を守るためだったのだ。これをケイトリンに言わせると、ユフィリアが誰かと付き合わないのは、ニキータよりも上の男がいなかったということになる。このケイトリンは少しニキータに気があるらしく、ニキータ達の利益になる発言をするところがあった。それを感謝していると伝えると、少し調子に乗って迫ってきたので放っておくことにしていた。

ユフィリアがユミカに向かって「今度シュウトを紹介してあげよ！」と請け負っていた。

確か彼女はシュウトが気になっていると言っていたっけ？と思いつつ、ニキータは苦笑いする。

パーティの夜は更ふけて行く。彼女達の熱狂はアキバの夜を彩る華やかな光を放ち続けていた。

シブヤから幾つかのゾーンを通り、もうすぐアキバというところまで2人は歩いて来ていた。大地を踏みしめるリズムが心地好く揃っている。自分が吟遊詩人^{bard}だからなのか、そういう部分にニキータはささやかな喜びを感じていた。最初の内は特に会話も無かったのだが、ニキータはそんな風だったので、あまり気にしていなかった。自然の中にいて、耳をすませば、そこには音楽があった。

話題に困ったのだろう、シュウトは先日ジンに怒られたことを少し話し始めたのだが、自分が愚痴っていたのに気が付いて気まずそうに謝った。ニキータはくつくつと笑う。

「ジンさんってフザケ半分だったり、マジメだったりコロコロ変わるものね？」

「……ずっとマジメでいてくれればいいのに」

「それは……息が詰まっちゃうでしょ」

「じゃあ、フザケっぱなしでいる方がいいのか？」

「大事なところでちゃんとしてればいいんじゃない？」

「うーん……それは、そうかもしれないけど」

腕組みして唸っていたのだが、ジンに「腕組みはするな」と言われていたのを思い出したらしく、組んでいた腕を腰にあてがう。そういう律儀な部分はこの青年を好ましいものにしていた。

唐突に、

「ああいうのも“自分化”してるってことなんだろうか？」

「そうかもね……」

自分が怒られた原因をそんな風に表現してみたのだろう。

では、自分化の反対とはなんなのだろう？

物語などでよく引用される、とある哲学者の有名な一文を彼女は思い出していた。細部の記憶は定かではないが、自分も化物にならないように気をつける、といった内容のはずだ。ジンならば、なんと答えるのか……？

「参ったなあ。また教えてくださいとかって凄く言いにくい」

「そんなに怒ってはないみたいだし、さっさと謝っちゃえばいいのよ」

「そう言われても……」

「グジグジしない。そういう時は、気分転換しなさい」

同じ行動をしても上手く行く時と、行かない時がある。男性はすぐに『解決策を求めろ』とっては今までの方法を変えたがるものだが、女性は解決策の模索に汲々することが少なく、成功するかどうかはその日の運やコンディション、もっと言えば『気分の違い』に影響されていることを知っている。焦って方法を変えなくても、気分が変われば、やり方が自然に変化して上手く行くものなのだ。

「ユフィは『ジンさんはいつも正しい、シュウトはいつも間違ってる』って言うわね」

「なんだそれ、鼻屑の引き倒しかよ……」

「続きがあって、『だから気にしなくてもいいでしょ』、だって「相変わらず意味がわからない」

「ウフフ、羨ましいのよ。なんて言えばいいのかな、自分が一番正しいのに人に教わる人はいないんじゃない？みんな、知らなかったり、間違ってるから人から学ぶのでしょ？」

「まあ、既に正しいことを知っていたら教わる必要はなくなるわけだし」

「今はまだ知らないことがあるんだから、間違っのだったって当然だし、気にしても仕方ないんじゃない？」

「やっぱりヘンな理屈だな」

迷惑そうに聞いていたけれど、少し元気になっている印象を受けた。今はこれでいいだろう。

「今の、ユフィリアって何が羨ましいのかな？ 実際、怒られてばかりなんだけど……」

「え？ あー……………」

言ってしまったって良いのかどうかと考えて言いよどむ。ユフィリアにだって人一倍誇り高い部分がある。普段そのポイントに引っ掛からないだけなのだ。シュウトに見せていない表情を、伝聞とは云え教えてしまって良いものなのだろうか？……………しかし、こんな風にニキータが悩める事自体が「問題」なのであって、友人を裏切る気など欠片も、毛頭も、芥子粒ほども無いのだ。

つまりシュウトをそれとなく励ます役をニキータに回して来たという感触が前提にあった。後はニキータの匙加減で決まる。

「そうね、怒られたい女の子もそれなりに多いみたいなのもあるから。……女の子って出来て当たり前とか言われるでしょ？」

「そういうものかな…………？」

自分の妹のことを考え、何でも出来なくて当たり前だったような

?と思っていた。

「私だって勉強できて当然ぐらいに言われてたし、ユフィぐらい可愛いと余計に大変だったと思う」

「そういえば、料理も普通にできるって言ってたか」

「かなり良い女子大にも通ってるしね」

「へえ、でもどっちかといえば、ニキータの方が何でも出来そうな感じがする」

「ありがと」

彼女としては「そんなことはない」といった否定で話の流れ切るのはあまり好きじゃなかった。

「ともかく、シュウトは目を掛けられてるんだから、がんばらなきゃ」

「そんなに怒られたいんだったら変わるって言うといてよ」

「自分じゃ言えない？」

「それは、勘弁してほしいかな」

「ボヤボヤしていると、ユフィに追い抜かれるよ?……この世界だと、男女に性能の差なんてないんだから」

蒙が啓かれたという顔をしたシュウトは、真剣な様子で頷いた。

現実であれば、やはり男女には肉体的に差がある。格闘技などと同程度の鍛錬をした場合、女性に勝ち目は殆ど無いだろう。戦うことに関してはやはり単純に不利であり、劣っているのだ。それを『性差』といったキレイな言葉で誤魔化してしまうのは、結局のところ性差別の助長に繋がってしまう。

しかし、この異世界にその様な違いは存在していない。クラス

との特徴の違いはあっても、レベルが等しければ数値上は平等だ。
……それならば、ジンがシュウトを重点的に鍛えている理由はどうなるのだろうか？……仮に「男性だから」だとしたら、そこに根拠などないことになる。単にユフィリア達よりも数日早くギルドに加わったことが理由になっているのかもしれないが、その場合は今のシュウトは特権的な立場にあぐらを掻き、不満を垂れ流しているのに過ぎなくなる。もしも他に立候補者が現れたとしたら、自分が重点的に鍛えられているという“その資格”があることを示し、常に示し続けなければならなくなるだろう。……愚痴ることができるのは、甘く、幸せなことなのだ。

彼は意外と「心に刻めるタイプ」なのかもしれないな、とニキータは思う。

そうしている間にアキバに到着した。街中まで入り、礼を言つて別れる。ニキータの中では随分と会話を楽しんでいた自分がいたのだが、活気のある街をゆくうちに気付かずに済ませてしまっていた。

カーテン代わりの布が風を受け止めきれずに波打ち、たびたび生まれる隙間から初夏の日差しが我先にと差し込む。様々な雑音が遠くから聞こえ、その音の意味の無さが心地好い静寂を感じさせた。床や家具に使われている木材の香気と生活の雑多な臭い、安物ソファのくたびれた感触、そこにもうひとつ嗅ぎ慣れない甘やかな香りが……

カトレヤのソファでジンが昼寝から目覚めると、ユフィリアが肩にもたれ掛かって寝ていた。

「……………またか。おい、ユフィリア？ ユフィ？」

「（すうー、すうー）」

「……………どうすんだよ、これ？動けねえんだけど？」

「……………」

「……………」

「そこ、寝ている女の子にイタズラしないっ」

そーっと手を伸ばしたジーンに警告を飛ばしたのは葵だった。

「……………人聞きの悪いこというんじゃないよ。寝てる女の子にするイタズラするのは、揉んだり吸ったり舐めたり的事だと法律で決められてんだぞ。俺のはちよつと頭ナデしようとしただけじゃねーか」

「どこの法律よ。じゃあ、ナデるのは何なわけ？」

「そりゃあ……………可愛がり、とか？」

「なるっ、イジメでしたか」

「スモ 部屋かよっ……………なんかちよつと、その、ウチの猫どうしてつかないと思っつてさ」

「ああ、猫肌が恋しくなつたわけだ？」

「猫……………肌？……………まあ、そういうことになるか」

「……………で、人肌に癒しを求めてみた、と」

「性格悪いぞ、お前……………昔からだけど」

「……………ひとのこと言えんの？」

「もちろん、言えない」

「それにしても可愛い子だよねえ」

「そうだな」

「こんな子に懐かれちゃって、ジンプーにも遅咲きの春が来たんじゃない？」

「馬鹿言え、どうせ父親が恋しいとかのオチだろ」
「そんなのわかんないじゃん」
「フツ、だいたいな、若い女の子ってのはなんかしらんけど、人をペタペタ触るのが好きなんだよ。そんなんでイチイチ誤解してられるかっつの」

愛され慣れてる人間のセリフに葵がゲンナリする。

「（まあ、たしかにアンタは『好かれる』けど『モテない』んだよねえ。）」

「……あん？」

「だけど、ここまで可愛い子は中々いないよ。……昔のあたしぐらいのレベルだあね」

「持ち上げてるのか下げてるのかよくわからんね」

「逃すとトンでもなくデカいぞお？」

「まあ、逃げる前からデカいだろうなあ」

（えへへ）

「あれだよね、あたしを逃がした時もトンでもなくデカかったっしょ？」

「……あー、まあ、そうだな。とんでもなくデカかったよ。これ以上ないぐらいの大物だった。いやあ、失敗したー！」

（……………）

「そうだろ、そうだろ。ウムウム。ふあっはっはっは！」

「ハア、しょうがないなあー。……何が食べたいの？」

（あ、レイシンさん？）

「そっお？なんか悪いなあ、じゃあ豚肉ハンバーグとかお願いしちやあっかな？」

（うんうん。簡単だよな、ハンバーグって）

「シシ肉は豚とはちょっと違うみたいだけど、なんとかやってみるよ。明日の夜ね？」

「そういえばさあ、シユウトくんはどうなのよ？」

「アイツかあ、頭は悪くなさそーなんだけどなあ」

「やっぱり無理なの？」

「ふみ？なんかあつたん？」

「いや、思ったより早く性格のバカさが露呈したっつーか」

「へえ〜」「はっはっは」

「まあ、諦めるのは一番最後でいいんだし、もうちょい様子見かな」

「そういうところ、教えたりすんのに向いてるよね」

「ジンぷーがあ？ えーっ？ 無い無い」

「うっせ。……性格が硬いのが早く出てきてるわけだし、そこが壊

れたら、案外、中はデレっつと柔らかいかもしれん」

「なにそれ？ ツンデレ？」

「じゃあ、その硬いところが壊れて、そのまま壊れたらどうするの

？」

「……………」

「……………」

「……………」

「起きてんだろ、ユフィリア？……さあ、さっさと起きて、群れへ
おかえり」

目をぱちりと開けると、悪びれる様子も無く、マイペースに身体
をほぐしにかかる。

「にゅーん！（伸びっ）、よく寝たあ〜。……………んーと、二ナは
？」

「さっきアキバ行くなって言ってたけど」

「それって1人ですか？」

「まつさつか。行きはシュウト君付けといたよん」

「じゃあ向こうですつと一緒？」

「いやいやデートじゃないから。何かアキバで人と会うから遅くなるって言った様な？ シュウト君は先に帰ってくると思うけど、

……どうかしたの？」

「……もしかして、どうかしちゃうかも」

ニキータは大手ギルドに在籍している友人と久しぶりに会えるというのでうきうきとした気分でした。相手は大災害の後は忙しくなってしまった様子で、先日の飲み会にも顔を出してはいなかった。今は待ち合わせの時間までアキバの街を觀て回ることにしていました。急な話だったので寝ているユフィリアには何も言ってお来られなかった。おわびでもないが、お土産を見繕うぐらいのことをしてもいいだろう、と云うところで出遭ってしまったのだった。

「よーう、ニキータ」

「マルオウ丸王……………」

浮かれていた気分が反転する。最悪だった。嫌悪感を隠さずに表情に出す。そういうことには鋭い男だったが、平気そうに近付き、そのまま不快な距離にまで入ってきた。これがコイツの手なのだ。弱気を見せれば付け上がるタイプなので自分から下がることは出来ない。獣のケモノ、……………脂の臭いが、した。

丸王は自分の名前に『王』などと付けてしまえるように、尊大な

態度の勘違い男なのだが、実際には小心者のサドだった。そんな相手を王などとは呼びたくないから、周囲の人間は「マルオ」（もう少しバカにする場合は「サルオ」と呼ぶことが多い。偶然ではあったが、名前を覚えてしまい易かった。外見的には猿顔の魅力的な顔立ちをしており、精気（性欲）を発しているので人混みにいても目立つようなところがある。

このタイプは小心者ゆえに人の顔色を窺うのが巧く、弱みに付け込むのが趣味みたいになっている。被害者を見つけては、自分の想いを果たすという厄介な相手だった。弱い人間は自分よりも弱い者に容赦しないことがしばしばある。彼の欲求の強さは不満が理由であり、不満はその生来的な弱さが理由になっている。その性格から立場が大きく向上することはなく、結果、不満も尽きないのだから欲求だけが溜まってゆくことになる。

「今日はユフィリアはどうしたんだ？」

「なんだ、聞いてないのか？ククク、そうか、そうか」

「お前にも教えてないことがあるんだな？」

言葉を散らしながら、ニキータの弱みになるようなキーワードを探してゆく。時には意味の無いことで不安を煽ることもした。他人を操る快感を覚えた人間は、自分のことを賢いと錯覚するのだが、元が愚鈍な人間はやはり愚鈍でしかない。それでもどこか愚鈍だから人が嫌がることであつても同じことをしつこく続けることができた。

「おい、一緒にこいよ？ 向こうで話そうぜ？」

「お断りよ。アンタとする話はない。」

それでもニキータは上手くやっていた。対等以上に渡り合っていた。街中なこともあつて、相手はそう強気に出られない。衛兵がい

るから暴力沙汰にもならないはずだった。いざとなれば大声でも出して人の目を集めてやればいい。しかし、ニキータとしてはなるべく穏便にコトを済ませたかった。……………それが裏目に出てしまうことになる。

「何だ、その態度は？……………ユフィリアがどうなってもいいのかわ？」
その台詞は丸王としても切り札に近い。ニキータが揺るがなかったので使わなければならない所まで来ていたのだ。しかし……………

「アンタには無理よ、出来っこないわ」

男は女の微妙な変化を見逃さなかった。言葉とは裏腹に、ニキータは……………揺らいだ。

大丈夫、今はジンがいるのだ。手出しできるはずがない。

あの砂浜で一瞬だけ見た圧倒的な戦闘力、そして先日の強行軍で見せた爆発的な気の奔流……………

(もう、ユフィリアを守らなくて、済む……………?)

それはダメだった。絶対にダメな部分が含まれていた。

ユフィリアは彼女の支えだ。ニキータは彼女を守らなければならない。本当は2人はお互いを「守って」いた。しかし、ニキータはユフィリアが「支え」だとは認めていても、自分が一方的に彼女を守っているものだと思っていた。ユフィリアを守るという一念が、彼女に心の鎧を纏わせていたのだが、守らなくていいとなると、それが崩れてしまう。

武器は装備して来ているが、今日は戦闘装束ではなかった。友人

に会うためにリラックスできる普段着なのだ。急にそのことが気になってくる。初夏なのになぜか寒く感じる。

「どうした、なんだか震えてるじゃないか？」

左手を掴まれる。反射的に引き抜こうとしたが、ヤツは離さなかった。肌の触れられた部分におぞ気が震う。丸王に汚い笑みが浮かぶ。まるで野獣のようだ。それはニキータにとって異世界の象徴でもある。

「異世界をナメるな」とジンは言った。彼女はそこには真剣に同意している。

ニキータは、恐ろしかった。この異世界がどうしようもなく怖かった。泣いても誰も守ってくれないから、男の格好をして戦うしかなかった。無理をするしかなかった。平気だと自分で信じるのは無理だった。こわい。守って欲しい。怖い。助けてほしい。恐い。もう嫌だ。コワイ。……もしかしてあの人なら自分を守ってくれないものだろうか？

この異世界に来て最初の頃の戦闘を思い出す。キャラ性能からサポートがメインだったが、みなガリアルな戦闘に不慣れなこともあって、後衛のニキータも敵から攻撃されることがよくあった。一度は灰色狼に腕を噛まれた。これまで生きてきて一度も聞いた事がない様な、動物が本気になって襲ってくる時の唸り声を至近距離で聞いた。狙われた喉の代わりに左腕を差し出して噛ませる。牙を立てられ、皮膚が裂け、唾液に混じって血が流れ出した。痛みもさほどではないし、HPも殆ど減らない。これでは死ぬことはないから大丈夫……だなどと思えなかった。簡単に死ねないのならば、この苦しみは死ぬまでの間、ゆっくりと、いつまでも続くのだと理解する。否、死ぬことすら拒絶された。みな軽く笑いながら「やっち

やった」「失敗した」と笑顔で大神殿から戻ってくるではないか。灰色狼のおなかに何度も武器を突き立てて、殺した。思い切り熱い血を浴び、それがすぐに冷めていく……現実で犬や猫に同じ事が出来る人がいたら、間違いなく気が狂っているだろう。どう考えても、この世界はニキータを狂わせようとしている。どんなに強がっても、自分はただの女でしかないことを思い知らされるのだ。

むき出しのセカイが襲ってくるキョウフ。耳を塞いでも聴こえ続ける音のように、身体の隅々にまで黒い音が沁みこんでいく。

突然、頭の中で鈴の音がした。念話のコールだった。約束の相手であれば立ち去る口実に使えると期待した。迎えに来てもらうのもいい。安堵とともに相手の名前を確認すると、それは間の悪いことにユフィリアからだった。この男の前で念話に出るわけにはいかない。そのまま放置してコールが切れるのを待つ。余程の急用なのか、ユフィリアからの呼び出しは止まらなかった。いつまでも止まらない鈴の音が不吉の知らせになっていく。

「お前、ユフィリアと一緒にいて迷惑してるんじゃないのか？アイツが邪魔なんじゃないのか？」
「そんなワケないでしょ！」

丸王は探していた強い反応を引き出すワードを見つけて舌なめずりをする。次はどういう理由で邪魔なのかだ。女が2人いて、完全に仲良しなんてことは在り得ない。どちらかが何かの不満を抱えているものだ。大抵は恋愛絡みだろうと見当をつけてゆく。

ユフィリアが迷惑？そんなワケが無い。

ニキータが戦闘で傷付くと彼女は笑顔で癒してくれた。自分は傷

付かない妖精の笑顔で。それはニキータ自身が望んでしていることなのだ。絶対に負担であってはならない。もしも負担だというのならジンに押し付けてしまえばいい。いや、それはダメだ、絶対に念話の呼び出しが続いている。少しイライラさせられる。

ユフィリアが邪魔？そんなワケが無い。

ジンと一緒にソファで寝ている姿が浮かぶ。違う。わたしはジンのことが好きなのではない。ただ、このセカイが怖いだけなのだ。もしかしたら、この身を捧げれば守って貰えるかもしれないでしょう？でもダメ。ユフィリアがいる。彼女はジンが気になっていてと言っていた。誰よりも大事なユフィリア。だけど、そうしたら誰がわたしを守ってくれるのだろう。この狂気に染められた美しくも卑しい世界から……？

恫喝する丸王の姿が、怒声を放つジンの姿と重なる。丸王までも強い存在だと錯覚する。

ニキータは怒鳴られるのが苦手だ。怖いのだ。ユフィリアみたいに怒られることなんて望んでいない。

「お前が俺のところにくれば、ユフィリアは見逃してやる、それでどうだ？」

そんなのは嫌に決まっている。でもユフィリアが狙われてしまう。誰も見ていないところで襲われるかもしれない。ユフィリアはどうしても守らなければならぬ。私が居なくなってもユフィリアはジンが守ってくれる。でもダメだ、ユフィリアは私が守らなければ。（まだ念話が続いている）私の責任だもの。彼女は負担なんかではない。（念話がうるさい）彼女を守らなければ。でも、私には何の力もない（念話がしつこい）私が犠牲になれば、ユフィリアには手

を出さないといっている。それなら弱い私でもユフィリアの役に立つことができるのかもしれない。ユフィリアを守ることができるのかもしれない。

そうすれば、自分の存在にも少しは意味が……………

「……………ウチのメンバーになんの御用でしょうか？」

「なんなんだ、テメエは？」

いつの間にか、そこにシュウトが立っていた。

新しい自作矢（ver.2）を模索するための素材を購入し、ちよつとした買い食いを楽しんでからアキバを出たところで、ジンから念話が掛かってきた。ニキータを探して守れと言う。そんな無茶な！と思いつながらかなりの速度で街中を走った。念話にも出ないというので本当に危険が迫っているのかもしれない。しかし、1人で1人を探そうとしたらアキバはそんなに狭い街ではない。

道を曲がろうとして 猫人族 の軽戦士と ドレイド 森呪遣い のカップルを避けるために偶然にも飛び込んだ路地の先でニキータを見つめることが出来た。男に絡まれているようで、腕を掴まれている。毅然とした態度に見えたが、助勢しておくべきだろう。こういう役目は苦手だと自覚しつつも、何て言おうかと台詞を考える。そうしてから間に身体を割り込ませるようにした。相手の方が少し背が高い。

下から睨む形になった。

「とりあえず、その手は離してくれ」

「ナイト気取りか？ ああ？」

睨み返してくる相手と気合の綱引きになる。

シュウトはジンの真似をして気を高めてみせた。あの後から少しづつ隠れて練習していたのだ。爆流のようだったジンと比べたらまだ小川のせせらぎみたいなものだったが、今は少しでも威圧する必要がある。たとえこれが威嚇にはならなくても、特技発動を狙っているとは勘違いしてくれたらありがたい。

「この野郎……ッ」

シュウトの思惑通りに鋭く反応し、パツと2、3歩下がっていた。

ニキータはへたり込みそうになった。もう大丈夫だ、シュウトが来てくれた。……しかしどこか弱々しい援軍である。シュウトはモンスターとの戦闘では平均を大きく上回る有能な戦士になれたが、通常の間人関係では引っ込み思案のゲーム族男子に過ぎない。ニキータは内股にギュツと力を入れた。ニキータからみたシュウトは自分と同じ『怒られる側』の間人なのだった。たったそれだけのことがニキータに力を与えていた。自分が彼を守らなければならないという思いが彼女を奮い立たせる。

ニキータの瞳に力が戻ったのを見て取り、丸王は失敗を悟った。

全てはこの空気を読めない生つちろい小僧のせいだと怒りが荒れ狂う。顔をよく見れば、シルバーソードでそこそこ有名なプレイヤーだった、今は聞いたこともないギルドタグになっている。ギ

ルドからあぶれたか何かだろう。それならば恐ろしくはないと踏んだ。

しかし面白そうな展開に遠巻きにするギャラリーが増え始めている。2人では恋人同士の痴話喧嘩かもしれないが、3人の男女となれば祭りになる。これでは丸王も分が悪いと判断するしかない。

「カトレヤのシュウトね、覚えてぜ？」

「……………」

「じゃあな、ニキータ。いつでもお前が来るのを待ってる」

「……………」

丸王は素早く雑踏の中に消えていった。

シュウトはかなりホツとしていた。暴力沙汰になれば衛兵が来てくれるのだが、チンピラのような連中は街中の暴力に慣れている。何をしてくるのか予想できないという危ない雰囲気を感じていた。街の外でなら同じ暗殺者であるから、そうそう負けるつもりは無かったのではあるが。

「ちょっと待ってて？」

そういうとニキータは念話を始めてしまった。すぐ終わると思っただろう。しかし、連絡がとれなくて心配したユフィリアが長話を切り上げないらしい。ニキータも苦笑いしながら片手を顔の前に立てて「ゴメンネ」のポーズをシュウトにしてきた。女性のピンチを救うという白馬の王子的な活躍をした気がするのに、締まらないことになっていた。何かを期待していた訳ではないが、やっぱり現実にはこんなものか、と思う。

念話が終わるまでたっぷり5分ほども待たされ、所在なく周囲を

警戒してみたりする。ニキータを守れと言われてるし、実際に事があつたのだから油断して立ち去る訳にもいかない。

「ゴメン、おまたせ。……………さっきのは、その、来てくれて、アリガト」

「ああ……………うん」

念話が終わってから「ありがとう」と言われても、とっくにタイミングを逃してしまっている。言う方も言われる方も、どうにも気恥ずかしいやり取りになってしまった。

シュウト達は日本最大規模の街の商業地区にやって来ていた。美しい白亜の宮殿をその象徴とする街、マイハマ。大手の戦闘ギルドが行う戦闘訓練の関係もあり、シュウトもユフィリア達も既に幾度か訪れたことがあつたので、感想などは特に持たなかった。物珍しそうにキョロキョロしていたのはジンの方だったりする。

戦闘訓練といってフィールドゾーンを旅しても出現するモンスターにめぼしいものが出現しなかったこともあり、今回からはゲームと同じようにクエストをこなして行くことになった。まずはイベントの種類も豊富なマイハマでクエスト探しである。慣れてきたら段々と難易度を高めていく方針だった。

しかし、初手から躓いた。

「うーん、こいつは不味いな」

「たくさん仕事が残ってること？」

「それもあるけどな。……シユウト、他に何か気付くことは？」

「えっと……」

「アキバやこのマイハマ近辺のは終わってるものが多いっすね」

「おっ、いいねえ」

「そうか、傾向があるんですね？」

クエストはストーリー開始の起点になるものなので、ある意味ではあらゆる場所から始まることになる。クエストの案内所や窓口のような場所に一括で集められ、そこで選べれば確かに便利ではあるのだが、ゲームに「お遣い」と呼ばれるルーティンな作業に近いものになり易い。伝説級の長編クエストなどでは開始ポイントすら秘密であることがしばしばで、ネットの攻略情報にも載らないことが珍しくない。

ではどうしているのかといえば、現在の 大地人 がゲームの計算通りに動くわけではないのだと思われるのだが、それでも旅なれた 冒険者 であればそのパターンからクエストの開始ポイントがなんとなく分かることがあった。

シユウト達はとりあえず酒場でも受けられる『お遣い』に近いクエストを確認したところ、現状ではその殆どが未達成であり、そもそも手付かずの状態が残っていた。より正確に言えば、面倒そうなものばかりが残されていた、というべきだろうか。大手ギルドは高レベル帯のクエストや欲しい素材などの「自らの事情」で優先的にクエストを選び、それ以外の中小ギルドなどパーティプレイヤー達がマイハマまで足を延ばす理由は、短期間で稼げるクエストなどを優先的に行うためだろう。結果的に場所が少し遠かったり、あまり報酬が期待できないもの、6人パーティではシンドイ作業などが軒並み口をそろえてお待ちかねの状態で放置されしまっている。

半月前の 円卓会議 の結成により、アキバの街は活気付き始めたばかりなのだ。改めてこの異世界での戦闘訓練を始めた小規模ギルドも多いと聞いている。現在は過渡期であり、今もその混乱を目の当たりにしているのに過ぎない。自分達にしろ、ここに来るまで状況を知らないでいたのだ。偉そうに非難できる謂れなどありはない。

「シュウト、後で時間を見付けて 円卓会議 に報告しておいてくれ」

「え……それって……」

「おてまみ書けつての。面倒でも、やれ。何事も経験っ」

「……………了解、です」

(すぐそうやって雑用押し付けるんだもんなあ)

「しかし、大手ギルドに仕事の割り振りだのを取り付けるのが直ぐできるわけじゃないだろう。その間、俺達は俺達の出来ることをする」

そういつてジンは貼り付けてあったクエストのメモを何枚か引っぱがした。ここのは登録するのに名前を書き込むタイプなので基本的にマナー違反だったが、誰もやらないのが分かっているから問題はないのだろう。

「さ、これをやるぞ」

そう言いながら数枚のクエスト書をシュウトにみせる。

「えと、今日はどれをやるんですか？」

「だから、これ」

(このパターンは……………)

「つまり、全部やりたいんですね？」

「おっ、だいぶ分かって来たみたいだな。木っ端クエストなんだ、1日に3つ、4つこなさなきゃ話にならないだろ？」

そうして6人が座れるテーブルを掲示板の近くに移動させ、石丸に地図を開かせる。ニキータに軽食と飲み物、チップの支払いを指示し、

「さ、計画を練れ」

とシュウトにいつもの無茶振りをした。

「いや、計画とか言われても……………」

「お前ならどうやる？」

「えっと……………順番とかルートを決めればいいんですね？」

「そうそう、その調子」

そうやってシュウトはしばらくああでもないこうでもないと言葉と議論を始めた。20分ほどで何も決まらず、うつらうつらしていたジンが重い腰を上げた。

「お前、何日連続でクエストするつもりなんだよ？」

「え、いや、そうですけど……………」

「毎日ギルドに帰還で終了にしるよ。そうしたら1日3〜4件になるだろ。移動手段に帰還呪文を組み込むのを忘れるな。それと馬の連続召喚時間も。俺達のは8時間可能だが、ランクが違えば何時間だとかあるだろ？」

「ま、待って下さい、メモします」

「それから、クエストがどのよりも 大地人の命が優先で行く」

「！……………分かりました」

そうしてシユウト達が作業を再開した頃に、本日分の仕事を終えて早々と戻ってきたギルドが現れ始めた。終了報告を兼ねてここで昼飯にするのかもしれない。すると、何やら机で作業しているシユウト達を横目で見て、

「お、ユフィリアじゃん」

「えっ、半妖精が来てるの？」

と言つては、話し掛けたそうに近付いてきたりしていた。

「ユフィリア？」

「あれっ、久しぶりだねー！」

「何やってんの？」

「えー？クエスト地点までのルート決めとか？」

「へーえ……………あ、」

「なにになに？」

「そのこのゾーンなんだけど……………」

始まりはユフィリアだった。

彼女にちよつと良い所を見せたいと思った1人が起点となった。

次第に数名が会話に参加しはじめ、ジンの態度に倣って「シユウトにコレコレを教える」という形で盛り上がっていった。ユフィリアは気を利かせて遠くで羨ましそうにしている者たちにも参加するように促した。最終的に数人がテーブルに身を寄せ合つて地図とクエストを交互に睨む様にしながら、あつちでもない、こつちでもない議論に熱が加わっていく。彼らのパーティのメンバーまで合わせれば、酒場にいる人数は30人ほどにも増えていた。

みんな気の良い連中で、知ってることは何でも話したし、面白いアイデアがあれば検証しようということになった。冒険が好きで、この世界が好きで、それぞれがそれぞれの形で善良だった。彼らは確かにこの世界を共に生きる仲間たちなのだった。

ジンがレイシンに頼むと、彼は近くにいた召喚術師に声をかけ、酒場の厨房を借りに行き、手早く料理を一品こしらえて戻ってきた。それに合わせてニキータが全員分の飲み物を手配していく。ギルドの共用資金はこういうことのために使っていていいのだと言われていた。レイシンが作って来た料理は、揚げ物だった。それは非常にトンカツに酷似していた。

「トンカツか、うめえ！」

「今日はラッキーだったな」

我先にお代わりを取って行き、あっという間に全てなくなってしまった。

「なあ……これって何の肉？」

「そりゃあ、この間のイノシシの肉だけど？」

「それって、今日の俺のハンバーグになるはずじゃなかったっけ？
残してあるんだよな？ な？」

「……まあ、また獲りに行けばいいじゃん」

「マジかよ………神は死んだ」

「はっはっは」

ジン達は数日分のプランを立て終え、出立になった。今日はこれから二箇所回ってこなければならない。幾つかのパーティがジン達を見ていて、自分達ももうひとつぐらいクエストをやっていこうと

いい始めていた。見栄か、矜持か、それはなんでもよかった。

「みんな、ありがとう。出発する！」

酒場から出るとき、フロアに居た全員がこちらを見ていた。それぞれの形で激励してくれた。半分ぐらいはユフィリアに何か言っていたけど、それでもシュウトは何か凄い日になったなと思っていた。

いつも楽しそうにしているユフィリアが、今日は嬉しそうにしていた。大切な何かをそっと閉じ込めようとしているみたいに。本当に美しい瞬間を見たのだとシュウトは思った。人の姿をした妖精はシュウトの手の届かないところをすり抜けてジンの腕に抱きつき、

「おい、歩きにくいつて。まさか、人気者様が俺に敵をプレゼントしようって魂胆か？」

……………邪険に扱われていた。

すつきりと気分良く目覚めて二キータは機嫌が良かった。数日ぶりの心からの笑顔である。生活の安定が自然と心を穏やかにしていた。毎日違うことをやっているのだが、毎朝ギルドハウスから出発し、毎日きちんと戻ってくる。その生活のリズムが二キータに安心感をもたらしていた。

あの日、変な事を考えてしまったこともあって、ジンと2人きりになるとちよつと緊張していた。普段は2人きりで話すことはほぼないのだが、温泉以来、ジンが自分の胸を見ていることがあるのは気が付いていたため、一度意識すると気になってしまう。

フロアに出ると、ちょうどそこにジンがいて、ドキッとす。頭を上下動させずにすーっと奇妙な姿で歩いていくではないか。ジンは気配に敏感なはずなのに、自分に気付かなかったのかなと思うのだが、やはり気付いているかもしれないと思い、背中に向けて朝の挨拶しておく。

「あの、おはようございます……」

ジンは立ち止まって声のした方に振り返ると、物凄く眠たそうに目をしょぼしょぼさせ、辛うじて数ミリ目を抉じ開けて「よっ」と挨拶を返すと、またすーっと歩いて行った。しかも出発間際なのにソファでうたた寝しようとしているではないか。

「……………やっぱり無いわね」

実際にジンの前に立ってみると、コトに至りうる気配のようなものが微塵も感じられない。

溜息をひとつ付き、ニキータはジンの二度寝を阻止することにした。放っておくとユフィリアも一緒に二度寝してしまうのだから、と。

こうしてジンは知らず甘ずっぱい予感を打ち砕いていた。

今日も カトレヤ は平和であった。

シュウトの見るところ、カトレヤのギルドハウスの中に居る間、ジンはいつも眠たそうにしている。朝起き、目をしょぼしょぼさせながら、ヌメーッと歩いてるところを見ると、カリスマ性を全く感じないリーダーだなあ、などと思う。

それでも建物から一步シブヤの街へ出ればかなりしゃんとするし、更に街から出てフィールドゾーンに立てば、途端に歴戦の戦士の気配を纏うのが不思議だった。その背中を憧れとも畏怖ともつかない気持ちで見ているのが、どうやらシュウトは気に入っているようだった。

その日はふと思いついたことを尋ねてみたくなった。

「ジンさんって、もしかして街の外だといつも戦闘モードでいるんですか？」

「ああ、そんな感じだ。よく分かったな」

「……それって、何か意味があるんですか？」

「意味無きややるかよ。……………ミニマップ範囲の気配を感じ取ったり、不意打ちへの自動回避なんかを機能させるには、まず無心でいなきやならないハズなんだ。まだ不意打ちされたことが無いからそっちは確証がないけどな」

「そっくだつたんですか……………」

「仕組み的には、ゲーム時代の 冒険者 は魂とか意識がないから、全員が常に無心のハズだろ？ プレイヤーはモニター見て操作してたわけで」

「……………じゃあ、ずっと戦闘モードで居られればミニマップを使えるってことですか？」

「……………可能性はあるが、シユウトには無理かもな」

「（ムツ）……………ちなみに、それは何故ですか？」

「雑念だらけだから」

「そんな……………」

「今のは半分冗談だけど、本音を言えばこれほど『言うは易し、行うは難し』なもんもないぞ？ 1分、2分はなんでもないが、丸1日となるとかなり疲れる。最初の頃は全く喋れなかつたしなあ。しかも、お前らにやミニマップ扱いされてるし、ミニマップだけなら休み休みでいいのかもしれないが、不意打ちに備えるにはそうも行かない。延々と無心で居続けるのとかは流石に地獄かと思うわな。眠いはツライはシンドイは、ろくなことねえっての」

「はあ……………ならやらなきゃいいのでは？」

「シユウト先生、物事には理由というものがあつてですね？……………」

「まあ、いいや。使いたきゃ練習してみ？ 敵がいない場合、5分ぐらいが限界だから。俺以外だとできそうなのはユフィリアぐらい、かな？」

「それって『何も考えてない』ってことじゃ……………」

「失礼だなあー！ 私もいろいろ考えてるよ！」

「そっただぞ、俺は感受性の問題だつて言おうとしたのに……………」

「絶対に嘘ですよー！」

それから暫く試してみたが、ジンの言う通りに5分も持たなかった。

この時期、カトレヤの一行は低く中級クエストを数多くこなす旅を始めていた。初日の戻りは23時を過ぎてしまったが、それでも翌日は朝の6時に起きて出発する。基本的に稼ぎは大したことがなく、経験値も入ることはない。クエストと云っても一日の大半は移動時間だった。それでも、それはとても………充実した日々になった。

クエストの種類が豊富なため、いつも違う場所へ行き、違うクエストを行うことになり、ルーティンな作業とはならない。難易度が低いため、血生臭い戦闘は多くとも、一つ一つの負担は小さくて済む。始めたばかりの内は『ともかく早く帰る』ことが目標になり、短時間でクエストをクリアすることに知恵を絞り、様々なことを実地で経験していった。

ゴブリンを100匹退治せよ といったクエストではジンのミニマップ機能がとても便利だ。大災害の後では一般の冒険者たちはミニマップが使えなくなっているため、この種類のクエストはモンスターを探すこと自体にかなりの手間や労力がかかってしまう。段々と哨戒など広域の情報収集が重視されるようになり、視力強化のアイテムを用いる 冒険者 が増えていた。

「戦うのは問題にもならないし、ジンさんが居れば居場所探しも大

丈夫となれば、楽勝ですね」

「あんまり楽すると後で良くないんだがなあ。それはともかく……」

「なんですか？」

「200体を超えそうな感じだ……」

「……やっぱり、全部倒しますよね？」

「当然だろ。急ぐぞ」

また、通常のクエストでも高度なクリアが狙える様になっている。たとえば低級クエストでは倒さずに済ませていたモンスターでも、今のレベルなら楽に倒すことが可能だった。

「なあ、マンティコアの棘ってどうやって見付けるんだ？」

「この辺りの沼地を虱潰しにするしかないかもしれないかもしれませんね……」

「え！？ このグチャグチャをずっと歩き回るの？」

「たしか、マンティコアをそのまま倒しても手に入るはずっス」

「そうか。じゃあちよっくら探して倒してくるわ……」

「……あーあ、行っちゃった」

「しかたない、こっちは棘を頑張って探そう。」

「うーん、みつからないね」

「ねえ、アレってもしかして、マンティコアじゃない？」

「え？」「ホントだ」「っスね」

「ジンさん……間、悪すぎるよなあ」

「そんなことより念話っ、念話っ………もーしもーし！」

「間に合わないね。5人で戦うよ？」

クエスト 巨大アリの洞窟 では、洞窟に住み着いたジャイアント・アントを一掃することになる。大型犬ほどもある巨大なアリ達

は不気味だった。蟻系モンスターは数が出てくることになり易いために注意が必要で、小分けにして倒すのがポイントになっている。

「時間無いから、ドンドン行くぞ〜」

「幾ら敵が弱いつて言ってもダンジョンなんですよけど？」

「大丈夫だ、任せておけて」

「だけど、ダンジョンだとミニマップって殆ど役に立ちませんよね？」

「そうだな。ダンジョンの場合、ゲームの都合でミニマップの範囲がかなり縮小されてたからな。こつちの世界だと精霊力とかの磁場的なものが混乱してて気配が分かり難くなるんだが、まあ、俺はそういうの影響は受けにくいから平気だ」

「あの、もう敵が来てるっす。向こうに気付かれてるんすが？」

「えっ？」

「あつれ？ホントだ……おっかしーな??？」

「全然ダメじゃないですか！」

短距離での通信手段として、ハンドサインの練習もした。

ゲームとは違い、自分達の話し声で敵に気付かれることがあるためだ。ゲーム時代のボイスチャットはモンスターに聞こえていないといった前提が崩れているため、短距離では簡単なハンドサインを決めておく方が都合の良い場面も出てくるだろう。

「チョップが『GO!』ですよね。」

「えっと、指差してクルクルするのは？」

「そっちに敵が居る、かな？」

「ダンジョンなんかでの先行偵察は軽戦士……俺達だとシユウトと二キータの役割だな。アクセントに備えて2人で動くのが基本になる。……二キータ」

「は、はい」

「ちよつとやってみる。『あそこに敵が4人見える。自分とお前で突入』だ。ほい」

「えつと……………」

「なんか、カツコイイ！映画みたい！」

数日に一度は終了の報告と新しいクエストを引き受けるためにマイハマに立ち寄ることになる。見た顔の 冒険者 も来ていたし、だんだんと新顔も増えていた。情報交換をしながらクエストを決めていく。

「ねえ、この地下用水の魔物退治って街から結構近いのに誰もやってないよ？ 何でだろ？」

「……………下水だからじゃないか？」

「ワニがいるな」

「ワニっスね」

頷くジンと石丸。それはアルビノ・アリゲーターという48〜54レベルのモンスターが出てくるクエストだった。アメリカの都市伝説にペットのワニが下水で繁殖しているというものがあり、このクエストの元ネタになっていた。

ジンの指示でその日は2件だけで終了の予定にしてあった。現場に到着すると案の定、ユフィリアとニキータの顔色が曇る。ここは化学薬品の無い世界なのだが、そうになると今度は逆に、鮮烈な匂いがキツくなり、目や鼻に沁みることになる。

「くっさーい！」

「流石に、これは……………」

「分かってる。このクエストで今日は終わりにするから。さっさと帰って風呂にしよう」

「それなら、まあ……」

満更でもなさそうなニキータが笑みを噛み殺しているのを見てホッと一安心である。アルビノ・アリゲーターから剥ぎ取った 白の鱈皮 はかなりいい値段で売れた。

「ちょっと待った！その採集系のクエストは時間が掛かるから引き受けるなって」

と、ここでまっつんという男が口を挟んできた。

「だけど、そこってアンデッドが出まくるんだよねえ」

「そうなんですか？」

「そっそ、ボクの知り合いがそこでゾンビとかに囲まれちゃったらしくてさあ。ハハッ」

「……うーん、薬草摘みのポイントだと安全にしておきたいな」

「でも薬草探しだけで3〜4時間みないとダメっスね」

「じゃさ、じゃさ、いつそユフィちゃんと逢えるところとかってイベントにしちゃったらどう？ ボクの知り合いとか呼ぼうか？呼んじゃおつか？」

「えっと、頼めるなら……」

「ちよつと、ねえ、何いつてるの?!」

「じゃあ明後日の10時で……まかして、ダイジョブ、ダイジョブだから」

(あいつ、妙にキャラ濃いな?)
(そうですね……)

「手配人」まっつん。

地理に詳しく、広い人脈から人数手配をしてくれる謎の男で、ノリに反して仕事は有能な男だった。

当日、ジン達が到着すると30人近い 冒険者 が既に集まっていた。握手会的なものだと聞かされていたユフィリアは知らない顔ばかりなので不安そうにしている。近くにいたグループにジンが挨拶に行くと、彼らの目的はユフィリアとは関係が無いという。

「いえ、まっつんさんからココでアンデッドを相手にした低級のフルレイド・コンテンツがあるって言われて……」

「え?……フルレイド?」

クエストと言わずにコンテンツと言った理由も謎だが、そもそも彼らは何故か戦う目的で集められていた。状況は直ぐに判明する。この時から既に500体を軽く超えるゾンビ、スケルトン、グールらに囲まれていたのだった。

ジン達はまるつきり採集系のクエストだと思っていたので、薬のツテで薬草類に詳しいプレイヤーを2人呼んで連れて来ているだけだった。どちらにせよ状況的に見れば、戦うか逃げるかしかない。そこに遅れてまっつんが現れたのでシュウトが質問しに行くと、

「どう?みんな集まってるでしょ?」

「すみません、これ、どういうことですか?」

「いや、だからもう囲まれちゃってるでしょ?って。後はホラ、みんなで戦っちゃってよ?」

「は、はあ……」

そしてジン達も含めた6パーティによる即席フルレイド戦闘になった。初撃からしばらくしたところで、何故かまつつんが指揮を執りはじめ、2パーティを交代要員として下からせる。常に4パーティが戦っていられるように適度に交替と休憩を繰り返し替えさせていく。途中で「あー、あー、あー、ごめんごめん、炎の呪文禁止だから、薬草とか燃えちゃうでしょ？」などと言われて焦ったりもしたが、結局は2時間ばかり戦い続けて殲滅を完了してしまっていた。

終わってみれば1000体弱のアンデッド集団との大戦闘である。ジン達は200体以上を倒していたが、交代要員まで揃っていたため、比較的楽な戦いだった。その後、まつつんは「じゃあ、ボクは帰るから」といって帰還呪文でさっさと消えてしまった。

フルレイドでの戦闘だったのにドロップアイテムぐらいしか報酬が無いといった異常事態には参ってしまったのだが、こういう時は定番である「ご飯で手打ち大作戦」で誤魔化すことになった。昼飯時なので各パーティの料理担当が集まって仕度をしている間に、クエスト本来の目的である薬草類の採集をやってしまうことになる。そうして採集が専門分野という2人をメインにあちこちを探し回り、30分ほどでクエスト目的を達成し、その後は食事をして解散となった。この時のカレーはかなり美味しかったという。同時にレイシンはカレーのレシピを手に入れていた。

低級の採集クエストがなぜフルレイド戦闘になったのか？という疑問は残ったものの、謎の男まつつんの手配がなければ大変なことになっていたのは間違いない。実は彼が報酬だけを先に持ち帰ったという可能性もあるが、シュウト達は気にしないことにしていた。

アキバの街にはまだまだ奇天烈な人材が隠れているようだ。これ

もあの街の闇の深さが生んだ出来事かもしれない。

シュウトはそんな風に思うのであった。

クエスト 黄色のハンカチ探し では、恋人達の仲直りに必要な黄色のハンカチを探すことになる。失くした場所はランダムに数箇所のポイントが選ばれるが、その全てを石丸が覚えていたため、ざっと回って井戸の中なのが分かった。本来は水を汲み上げると低確率でハンカチが手に入る仕組みになっているらしい。

「なあ、一般論として、自分で降りると、突き落とされるのだと、どっちがいいものかな？」

「……………行ってきます。」

ロープを伝ってシュウトが降りていく。「おっと手が滑った！」といった古典的なネタで2メートルほど落下させたものの、「冗談はそこまでにし、慎重に降ろしてハンカチを無事にゲットした。」

クエスト 家畜小屋の幽霊 の場合であれば、家畜小屋の中でイタズラする浮遊霊を倒す依頼になる。いやらしい事にこの幽霊は非実体のため、魔法攻撃ぐらいしか効果がない。動物達をそのままに魔法攻撃を行うことは禁止されていたため、クリアするには動物達を外に出さなければならなかった。

ところが、ここは無駄に広い放牧地があり、家畜を外に出すと再び小屋の中に入らなければならないのだが、慣れてなければ2〜3

時間は掛かる仕組みになっていた。底意地の悪い依頼主は牧羊犬の貸し出しをクエスト報酬の8割と設定している。犬を借りれば30分程度で家畜を小屋の中に戻すことはできるのだが、実質的に8割の値引きだ。それもどこか苛立たしい。

「ちょっと待っていてくれ」

ジンが中に入って扉を閉める。何をするつもりなのかと待っていると、どうやったものか、3分ほどで幽霊を倒してしまっていた。中を歩いたためだろう、ちょっとだけ家畜の糞フのニオイがした。

クエスト 赤い水 では、村に赤水（鉄分を大量に含んだ赤色の水）が出ており、呪いであるとか不吉の前触れだと騒いでいたため、水源に大量発生した 錆喰らい というモンスターを退治することになった。 錆喰らい は製作級以下の金属製装備の耐久力を奪い、ゼロにして食べてしまうという（装備・金銭的な意味で）危険なモンスターだった。金欠のジンが猛烈に嫌がるため、レイシン、シユウト、石丸の非金属製装備メインのメンツだけで退治しに行くことになった。

川の上流に巨大な鉄鉱石（？）の塊があり、 錆喰らい はそれを錆びさせて食料にしていたのだが、その過程で作られる錆びや鉄分によって赤水が出てしまっているのだ。モンスターは40体ほどだが、弱いので問題なく倒してしまった。

ゲーム時代はこの鉄の塊を「採掘」すれば金属素材を入手することができた。 大災害 以降では、やろうと思えば数トンの塊を全て持っていくことが可能かもしれない。マジックバッグに入る大きさでも重量でもないのでジン達は諦めるしかなかったが、大手の生産ギルドならば人手を大量に投入して持ち帰ることも考えられる。

それは、3つの素材を集めるクエストのために寄り道をすべく、徒歩で移動している時のことだった。

「ん、なんだ……？」

「……！？」

ジンが呟いたかと思うと、次の瞬間、シュウトはつんのめって転びそうになっていた。危うく転ぶ所で体勢を立て直し、足を引っかけたジンに文句を言おうとしたところ、頭上スレスレを何かが通過した。そのまま近くの地面に突き刺さったものは、狙撃用の矢である。つまり、遠距離からの不意打ち攻撃ということだ。

「どこからですか？」

シュウトはそれ以外の余計なことは訊かなかった。偶然にもコケた風を装って回避させたのだろう。相手は人型、それも 冒険者だ。直ぐにも戦闘になるかもしれない。

「なかなか面白いぞ。ミニマップの範囲外からだ」

「……まさか、ジンさんの能力を知ってるんじゃない？」

「いや、どうか。正統派狙撃手からの挨拶ってあたりかもしれない
い」

初期の多人数参加型RPGはプレイヤー同士の殺し合いの歴史でもあった。なんらかの方法で他者への攻撃が可能であれば、必ずと言って良いほどにプレイヤーキラー（PK）は存在した。ゲーム開

発においても扱いが難しく、「ほどほどに競争はして欲しいのだが、やり過ぎは困る」という具合にどこか魅力と表裏一体でもあって、各社で様々な対策が取られていた。

ゲーム時代の エルダー・テイル はプレイヤー全員にミニマップが標準で搭載されていたため、接近しての不意打ちを狙っても位置が分かるため、戦いの準備をされてしまう。そんな事情もあって一部の弓使いはミニマップの範囲外からの超長距離狙撃を行うことがあった。不意打ちによるダメージ増加も見込めるため、狙撃タイプの弓兵を運用した様々な戦術が考案されている。実際に敵モンスターへの狙撃を利用しての戦術は、半ばPK技術からの逆輸入といった具合で洗練されていた。

この超長距離からの不意打ちも 冒険者 の高レベル化に伴い、各個のスキル構成に応じた自動回避が備わっていたため、成功率はそれほど高くなっていた。しかし、大災害 以降はミニマップも自動回避も機能しておらず、これら不意打ちへの対処は難しくなってしまうていた。

「周囲に伏兵もないし、追撃もこない。なら問題は……」
「誰がやったか、ですね？」

シユウトの脳裏に猿顔の男が浮かぶ。ニキータが一瞬、肩をギュッと縮込ませていた。

「たぶん丸王とかいうヤツか、その仲間なんだろうな。……しかし、案外、お前の昔の知り合いだったりしてな？ なんだっけ、シルバースード のギルドマスター……」

「ウィリアムですか？ そんな、まさか！」

「わっかんねーぞお〜？ もしかして嫌われてたのかもしれないだろ

「? テキトーな理由でギルド抜けちまったんだろ?」

地面に刺さっていた矢を調べてウィリアムの使っているものではないことを力説し、擁護したり、そこまで嫌われてないと主張したのだが、しばらく後になってニキータを思いやっつての軽口だったことに思い至り、恥ずかしい気持ちになっていた。

十日が経過し、シュウト達は目標にしていた30クエストをギリギリで達成することに成功していた。何かの噂でも聞き付けたのか、自主的なものなのか、マイハマでクエストを受ける中小ギルドが増えて来ており、酒場で受けられる仕事は急激に減り始めていた。そうなると記憶を頼りに街中などから始まるクエストを拾っていくことになる。

この頃になると、シュウトはジンに怒られる回数がだいぶ少なくなっていた。そもそもユフィリアに言わせればジンは怒ってはいないため、シュウトが勝手に怒られてると思ってるだけなのだという。それもどうかとは思うのだが、言われてみれば確かにあまり怒ってはいないのかもしれない。注意や指摘で怒られている気分になるのは迫力の問題だったのかもしれない。

先読みしろと何度も繰り返し言われ、シュウトはやり方を変えていった。

もともとゲームではそれなりの数のクエストをこなしていたので、異世界に来たことによる影響や変化に対応できていない部分、小パターテイの運営の細部などで引っ掛かっていた。それらも数をこなす

事で次第に慣れてくる。

「シュウト、明日のアレどうなった？」

「はい、出来てます」

「よし、作業の先読みはだいぶ出来るようになってきてんな。……

……んー、でも、そのやり方をしてると人間関係がギクシャクすることになるんだよ。だから、もう一步先回りして、俺が『アレどうなった？』とか聞かなくてもいい風にしてくれ。先回りして説明したり、分からない部分は俺に質問して、その問題を俺が一から考えなくても良い様にするんだ」

「……………それ、言ってることが滅茶苦茶ワガママじゃありませんか？」

「そうか？ 結構、普通のことだけだなあ。こっちはお前の判断力とか判断の仕方を知りたいんだよ。任せていいと信用できるなら、手を引いて別の仕事に労力を振り向けたいんだしさ」

「……………はあ」

絶対に騙されてると思ったのだが、実際に先回りすることで注意される回数は少なくなり、間違えてからやり直す作業もなくなりだした。感情的な負担が減ると心にも余裕が生まれる。それが更に好ましい循環を作り出していった。

シュウトと石丸の持っている地図は様々な書き込みがなされ、アキバ周辺の地理にも詳しくなり始めている。異世界の不安と混乱に立ち向かう術をゆっくりとだが身に付けつつあり、地に足をつける感覚を知らず感じ始めていた。

フィールドゾーンの暗闇の中、周囲より一段高い場所に出ると、ランタンの明かりが遠くに見えた。そのまま近付いてゆくと、その柔らかい光の中に、どこか周囲から浮かび上がるジンの姿を見つけた。大声を出さずに済む距離まで歩いていく。

「寝不足の原因ですか？」

「……まあな、毎日やらんと鈍るからな」

早く戻ってお風呂に入った日、シュウトはジンがカトレヤのギルドハウスに居ないことに気が付き、もしかしたらと思って外に捜しに出た。最初にジンと会った日に試し撃ちをしに行ったあの場所に真っ直ぐに向かうと、やはりというべきかジンが1人で何かの練習をしていた。

「今日は櫛で素振りじゃないんですか？」

「アレもやってるけど、今は『八寸の延金』のへがねだな。知ってっか？」

「全然です」

「だよなあ。……武器を伸ばすとかって意味なんだが、意識の剣を果てしなく伸ばして、遠くの月とか太陽を斬れ！って感じの鍛錬だな。何人かの剣士が極意として使ってたみたいだけど、有名なのは白井亨という人で、剣の先から輪が飛び出たらしい。……輪って何だよなあ？」

そういつて笑うと、離れた位置にいるシュウトをジンはゆっくりと切る真似をしてみせた。

「どうだ？」

「………何か、ちょっとキモチイイかも、ですな」

斬るといふよりは身体をなぞられたような感覚で、どんな理屈なのか、身体がスッキリする気がした。

「で、今日はどうした、新作の試し撃ちか？」

「あの、見て貰ってもいいですか？」

そう言つと多少緊張しながらもシユウトは『気』を高めて見せた。まだまだ頼りないが、自分でもサマになって来ていると思つてゐる。

「そうか、独力で練習してたのか。………だけとお前、それつて動いたり戦つたりしながら出来るんだらうな？」

「え？」

「ホレ行くぞ、ほい、ほい、ほい、ほい」

「わわっ、わっ、」

当たつても痛くないゆつくりのパンチを交互に出され、それに気を取られると気の集中は完全に途切れてしまつていた。

「表層の意識でやつちゃダメなんだよ。レイもそこが無理だつて言つてたんだが、注意してやれなかつたな」

「すみません……」

「ふむ、しょうがねえよな。どっちにしろ少し説明しとかないと同じだらうし。じゃ、戻るぞ？」

カトレヤ に戻つて広間に仲間を集めると、ジンは少し長い話を始めた。

「じゃあ、ちよこつと例の裏技の話をしようと思つ。レイは葵の口

を塞いでくれ。先に進まなくなるからな」

「ふぐ、モガー！」

「ざーとらしいな……まあいい。」

「俺の考え方なのでこれが正解とは言わないが、参考にはなるだろう。まず、大雑把にはブースト系とクリエイト系に大別される。ブーストは既存概念の強化・増幅を行うものだ。クリエイトは元の世界の知識を利用して、この世界にない新しい概念を生み出したり、引っぱり込むことを言う。」

「アイテムで説明すると、レシピのある料理を『新しい料理法』で美味しく作るのはブーストに近くなる。で、サブマシンガンみたいなこつちの世界に丸つきり無いものを作ればクリエイトってことになるわけだ」

「さて、この2系統で高められる能力として考えられるのは、能力値、特技、アイテムがメインになるだろう。生産のサブ職を持っている場合、アイテムのブーストやクリエイトを行えばいい。俺みたいなタイプはアイテムは作れないから、能力値や特技をブーストさせることになるな」

「ここで問題になるのは、レア度と代用の関係、リソースの問題、スタイルと、えーっと、後はなんだったつけ？まあ、後でいいな」

「レアリティ、いわゆるレア度の問題は、言い換えると代用が利かないことを意味している。基本的にブースト系は既存概念の強化であるため、代用が利くからレアリティは低くなるんだ。しかし、あんまりレアなことをやろうとしても上手くいかない……というか、アプローチの方法が見付からない危険がある。そうだな………例えば、冒険者を殺す方法だとか、逆に大地人を復活させる

方法なんかはレア度が高くなるんじゃないかな。しかし、やり方を
思いつくか？と言われると、ちょっと困ってしまうわけだ。」

「この時、自分に出来そうなことを延長していく『今の自分』を基
準とした思考方法と、欲する能力からアプローチ法を考えていく『
未来の自分』の姿を基準とした思考方法とがある。どっちも疎かに
ならない方がよさげ、だろうな」

「次にリソースの問題。あんまり色々強化しようとする、一つ
一つの能力が強くない。これはリソースを分割してしまうから
だと考えられる。まあ、これの原因はよくわからん。仮説なんだが、
元々 冒険者 の肉体ってのは全員が同じものを使っていて、職業
によって成長・発達する方向が決まっていると考えられる。俺は戦
士だが、この肉体は魔法使いの能力も実は使っていないだけで持っ
ているハズなんだ」

「そこで例えば、何かの裏技で魔法使いの職業クラスを得ることが出来た
とする。戦士と魔法使いの両方の職業を得られたとしたら、どっち
つかずの結果になり、元の戦士の力も小さくなると俺は考えている。
リソースが分割されるからだな。これを避けるためには、最初から
魔法戦士のような職業クラスでなきゃならないと思うわけだ。」

「ここがややこしいんだが、横方向への応用はそれなりにやり易い
ものだと思う。暗殺者アサシン の攻撃力や 盗剣士スロッシュバックラー のスピードなんか
を戦士職の俺が利用するのは、たぶん可能だ。肉体は最初からそれ
らの素養を持っているハズだからな。また特技のブーストに魔法使
いの魔力操作能力を利用したりすることが出来ればかなりの幅が広
がるだろう。理想は12職業の特徴となる側面を全て継ぎ接ぎして
使うことだが、あまり色々な能力を高めようとすると、職業クラスが2つ
になると同じ結果になり、結局は弱くなってしまうと考えられる。」

「次がスタイルの話なんだが、……………めんどつちいので答えを先に言ってしまうと、シュウトに必要なのはスタイルだと思う。」
「えっ？」

いきなり名指しされて困惑する。ジンの話はそのまま続いた。

「例えば能力を無理して高めなくても、攻撃力に関しては武器が強ければ『代用』できる。弓使いなら強い矢を使えばいいわけだが、……………それじゃダメなのか？」
「えっと……………」

イキナリなので考えが纏まらないが、なんとなくそれでは意味が薄いように感じる。

「だけどさあゝ、能力を上げて、武器も強くなれば、倍率ドン！更に倍！はらいらさんに3000点っしょ？」

葵が横からツツコミを入れる。シュウトは助け舟に感じてそのまま頷いた。

「そこがこの問題のポイントだ。これはそもそも代用が利く能力なんだから、武器が更に2倍、4倍と強くなればそれで済むんだ。もしくは人間の数を増やせばいい。ニキータにも弓を使わせて、シュウトが矢を供給すれば弓兵が2人になる。生半可なパワーアップより断然強くなるだろうな。さらに言えば、俺を倒したきゃレギオン連れてくればいい。群れればいいんだ」

レギオン（96人）とは大きく出たなあ、と思いつつも、続きを待つ。

「だから、だ。シュウトが感じるであろう違和感は、力ではなく、その使い方、運用、戦法、スタイルを求めていることになる。力の大小よりも、その使い方の問題が大きくなっていくんだ。」

「スタイル……………」

シュウトはあの砂浜のことを思い出していた。あの時に一瞬だけ感じた『答え』に、今、再び近付いているのかもしれない。

「でも、何というか、みんな同じように戦えるはずじゃありませんか？」

ニキータが手を上げて質問する。質問はまだ形に成っていないかったが、ジンは理解することが出来たらしい。

「無心に似た状態による自動戦闘だな。確かにこれは『この異世界』に於ける目玉商品とっていいものだ。これのお陰で、現実には野生動物どころかペットの猫にも勝てない様な俺達でも、この異世界での戦闘を行うことが出来ている。」

「料理との比較で言えば、メニューの湿気ったせんべいと比べて、コンビニ弁当やファーストフード、弁当チェーンぐらいの味があるんだろう。」

「十分に美味しいっすね」

「ああ、みんな満足する程度に美味しい。」

「この自動戦闘方式は、方向付けが必要なんだ。使い手が選択に迷えば、その迷いが反映される。やる事が決まっていれば、ひたすらそれを繰り返してくれる。だから、スタイルというのは自動戦闘に与える方向のことだともいえる」

「スタイルは包括的なもので、捉える Spann が問題になるんだ。—

瞬の判断を導き出す戦術方針だとか、成長の方向性、そもそも生き方まで含めて、その全てがスタイルを作っていく。」

「流石にスタイルまでは俺が教えることは出来ない。自分で決めるしかないだろうし、周りとの関係の中で自然と定義されてしまうのかもしれない。ちょっとだけ一緒に考えてみるとすると、普通に考えればシュートは弓使いなんだから、砲台ってことになるだろう。」

狙撃手みたいな超長距離に特化するパターンと、連射を主体とした中距離での支援や制圧を行っている今のパターンとが考えられる。もしくは弓を捨てて完全にファイターになってもいいわけだ。アサシナイトを活かすトリッキーな軽戦士パターンとかだな。それが、生産職を活かして全く別の何かを目指しても良い。」

「そんな感じで『自分の強み』を活かすことを考えるものなんだが、ま、これからどういう方向に進みたいか？どう生きて行くかって話でもあるから、じっくり決めればいいさ」

「でも、ある程度は強くなりたいので、攻撃力は高い方が嬉しいですよね」

「んー、実際アイテムブーストを考えれば、弓使いは矢を強化すればいい。最も強くなり易い武器のひとつとも言える。シュート自身のサブ職が 矢師 なのも良い具合だよな」

「おおっ」

「一方で能力を高めるのは難しくなる。矢を飛ばすのは筋力じゃなくって弓だから、力を上げてあまり意味が無い。」

「あー」

「とりあえず、矢に気乗っける方法を見付けろ。今のままだと気を高めても、ただ普通に矢を射るだけになっちまう。高めた気を矢

に乗せる技術を探すんだ。それが出来れば、特技のブーストにも応用ができる可能性は高い」

「気を高めるだけじゃ全然ダメなんですね……」

「だが、弓矢なら立ち止まって気を高められるかもしれないし、案外やり易いかもしれないぞ？」

「自分のスタイルを見付けろ。それと突破口を探せ。………もうひとつアドバイスすると、戦闘は敵がいるから成立するものでもある。だから、敵の強さを利用できる方が好ましい。」

「スタイル、突破口、敵の力を利用……」

「盛りだくさんっスね」

「この程度で？ 冗談だろ？」

「………」

「………」

「もういいか？ では、今日の講義はこのへ……」

「チヨ〜つと、まったあ〜っ！」

「なんだよ、うるさいなあ」

葵が颯爽と登場するや、「夜はまだ始まったばかりですよ。上げてごうぜい！」と叫ぶ。

ジンが心の底から嫌そうな顔をし、「俺達は明日もあるんだぞ」と抵抗してはみるのだが、やはりと言うべきか、虚しい試みであった。

「だっ、けっ、どっ、さ〜あ？ 葵、まだ大事な話が済んでいないと思うのぉ〜」

「僕も、その、もう少しヒントが欲しいといえますか。それに僕の話ばかりじゃアレですし、みんなにも参考になるような話をして貰えたらいいと思っただんですが」

「あー、もう、それじゃコイツの思っただろうに」

葵がにっしつしと歯をみせて笑う。ジンは少し悩む風に天井を眺めてから、

「そうだなあ、もしも神様がなんかの能力を2倍にしてくれるとしたら、どれにする？」

と、宝くじの賞金の使い道を話題にしているような口ぶりで問いかけた。

「えっと……筋力がダメなら素早さですよ。攻撃にも防御にも活かせそうですし」

「いい考え方だな。そんな感じで自分の好みを考えていくのが大事だと思う。自分がどういう風に勝ちたいかとかの話だから。……じゃあ、レイは？」

「うーん、反射神経とか？」

「それを上げるのは結構むずかしいと思うぞ。自動戦闘で反射速度そのものは最速ぐらいまで高まっているだろうしなあ。本気でやるなら時間の領域に踏み込むとかになるのかな。アレは重てえぞお」

「そっか。大変ならいいや」

「諦めるの早っ!？」

「……それ、ジンプーはどうしてんの？」

「うーむ、拙者も修行中の身ゆえ、まだまだといったところでござる」

「いきなり武士になってるし」

「あー、見てから判断するのじゃ間に合わないから、殺気とかで判断してるけど、理想的な状態には遠いな。」

「理想的な状態って？」

「んー、考えてたら遅いんだよ、たぶん。」

「次、ユフィリアはどの能力を上げたい？」

「……MP、かな」

「ああ、HPやMPは上がらないな。厳密には他の数値も上がらないんだけど。ステータスによる筋力は固定されて、『攻撃力』や『筋出力』といった形で結果的に上昇している風になるだけなんだ。だから、敏捷性も結果的に移動距離が伸びたりすれば、敏捷になった感じになるっただけだな。もしくは移動距離自体は実は変わって

「ないけど、どうみても敏捷になつてゐる感じになる、とかだな」

「で、MPの場合だと回復力が高まるなどで擬似的に達成するしかない。効果の小さな回復呪文で大きく回復したり、集団回復が広範囲に拡大されたりといった具合にMPの使用効率が良くなったら、それでMPが増えたのと同じ結果になるだろ？」

「回復量増加の特典付きアイテムとあまり変わりませんね」

「あ、それ私の武器のやつだ」

「これも代用つてことつスね？」

「そんな感じだな」

「ニキータは？」

「えと、思いつかないので……」

「そつか」

「ふふーん、読めた。ジンぷーの上げてゐる能力つて、『レベル』でしよ？」

「あ、自分もレベルを希望つス」

「まあ、……半分だけ正解といつておこつか」

「嘘つ、このアタシがハズした！？……えーつ、じゃあなんなの？
なんなの？なんなの！」

「うっせーなあ、人のネタバレに走るなよ！」

「いーじゃん、ケチツ。そんな秘密を持つ子に育てた覚えはないぞ
お！……こうなつたら徹底抗戦も止む無しだかねつ！ ストだつ
！ 牛歩だつ！ ロードローラーだツ！」

「どうせロードローラーが言いたかつただけだろ！」

「でも、本当にレベルが上げられるならそれが一番ですよね……」

葵が「おっしえろ！おっしえろ！」とひとりシユプレヒコールを始める。そしてユフィリアにキャバクラ的接待攻撃を指示し始めたところで、ジンが折れた。

「分かった。うるさい。黙れ。……確かに俺はレベルを上げようとした。でもそれは上手く行かなかったんだ。さっき話したリソースの問題が実はその話なんだよ。」

「ともかく、俺は体系立てて鍛えようと思ったわけだ。天才なら感覚だけでパツと強くなれるのかもしれないが、俺みたいなのが感覚だけで行けるところなんて高が知れてるし、もともと理屈っぽい方だからな。そこでより根本的な力を高めようとしたわけだ。一番良いのはレベルだが、レベルが上がった感じにするのはやはり難しい。そこで、段階を踏むことにした。リソースが足りないならリソースを増やせばいい。レベルを上げるのが難しいのであれば、レベルを上げるための別の能力を高めればいい。……そうやって試行錯誤した末にできたのは擬似的な特技だったよ。もともとはレベルブースト能力のつもりだったが、出来たのは『ブーストを可能にする特技』らしい。特技の『奥伝』や『秘伝』といった名称に倣って、極意 と命名した。」

「むう、汚いぞ！ それじゃ引つ掛け問題じゃんか！」

「別に問題とか出してないだろうが……」

「えっと……2倍にする『何か』じゃなくて、『2倍にする』の部分が高めたってことですよね」

「そんな感じかな」

「あの、それじゃあ 特技 って新たに作れるんスカ？」

「え？……いや、どうだろうな。MPそのものを使う場合は、どうもシステムチェックが何かに引つ掛かるらしくてさ。俺のやり方の場合MPを使ってるわけじゃなくて、あくまでも擬似的な『特技めいたもの』ってだけなんだ。むしろ正しく特技であって貰っては困るって事情もある。少しのMPが使えれば威力はかなり上が

るけど、その代わりに再使用規制や効果時間、技後硬直なんかが出来て付いてくるから。

だから逆に言えば、MPを使ったらイコールで『特技』を使用したこと』になるかもしれないから、その辺からの応用で新しい特技を作れたりするのも、しれない」

「そうっすか……………」

「最後に全体的な方針について触れておこうか。…………ゲーム時代と比較して、今の状態を考えると、その最大の違い・変化はこの異世界に俺たち人間が囚われている部分にあるだろう」

「最もシンプルに考えれば、これまで以上に 大規模戦闘^{レイド} がやり易くなっていると言える。プレイヤーの実生活といった都合は関係なくなってしまうっているわけだから、常にレギオンレイドでの戦闘を行うことも可能だな。この方向を推し進めるなら、レギオンを4つ集めたフル・レギオンなんかも当然、視野に入ってくるだろう」

「もうひとつは、この世界に召喚されたのが俺たち人間だったというこの意味だ。それが人間であるなら、必ずシステムの限界を突破する者たちが現れる。そこを踏まえれば、12職業で2パーティ程度の最精鋭を集めたスーパー・パーティなんか考えられる。ハイフレイドってヤツだな。」

ハイフレイドとは2パーティ共同で行う戦闘の俗称であった。

低レベル向けのレイドコンテンツであれば、2〜3パーティの協力があればクリアすることが一応は可能である。別の6人パーティを見繕い、報酬をざっくりと山分けにすることにしてクエストに挑むという、中小ギルドが行う変則の遊び方のことだ。大手の戦闘ギルドに所属していたシュウトに馴染みはない。

「ここから想像される敵の姿は、2つ。正確には3つだ。……ひとつは、数千を超えて、万単位の敵を相手にする超大規模戦闘。もはや戦争クラスとっていいものだろう。もうひとつは、単一の、しかしレギオン大隊では決して倒すことの出来ない何らかの固有戦闘力を持った敵との超絶戦闘。ボス戦とかだな。」

「最後の3つ目はやはり……」

「ああ、同じ人間同士、プレイヤー同士の戦闘になるだろう。人間の敵は人間だって言われているからな。」

「……………」

「しかし、人間相手に戦うのはやはり虚しい。だから俺達は、対ドラゴン戦に特化したチーム編成を目指す。」

「やっぱり、そうなりますよね……」

こうした話の流れで説明されると、それほど突飛なこととは言っていないかったと分かるのだが、シユウトとしては、もっと気楽でもいいのではないか？と思わないでもない。別段ドラゴンと戦わなくても、この世界でやっていくのに困りはしないだろう。しかし、それをジンに向かって言うのはどこか憚られた。何故だが怒られそうな気がする。

どうして怒られそうなのだろうかと考えてみて、この異世界からの帰還を既に諦めている自分がいることに思い至った。他の誰かがなんとかしてくれるのを、ただ待っていればいいのではないか？という気分なのだ。

シルバーソードの仲間が現実から目を逸らしてゲームを続けようとしていることが気に入らなかったのに、大手の戦闘ギルドから抜けた途端に、無力な個人には何も出来ないと言い訳し、だから

何の責任もありはしないと思ってしまうものらしい。

（そうか、ジンさんはもっとずっと『真に受けてる』のかもしいい……）

シュウトは自分だけは決して「ゆとり」ではないと思っていた。ジンにゆとり小僧扱いされたのは密かにショックだったのだが、気が付けばこうして自分の情けなさにぶつかっている。まだ異世界を舐めているのだ。それにしても本当に些細な、気が付かなければ無視できる様な『ちょっとしたところ』で決まってしまう話なのかもしれない。

（ダメだな。もっと強くならなきゃダメだ。）

強くなりさえすれば、なんとかなる。問題は解決する。それすらも嘘だと気が付いてはいたが、その小さな嘘を信じるところから始めることしかできそうにない。

「ところでシュウトは明日からしばらく弓での戦闘は禁止だ」

「えっ？ ど、どうしてですか!？」

「戦闘中に自分の練習するつもりだろ？ どあめ。」

「うぐっ」

完全に見抜かれている。確かに仲間と一緒にの時間に自分の事情を優先するのは間違っている。全てに対して見込みが甘過ぎたかもしれない。

なんとか強くなるうとは思っただが、その道は遠く、険しいものになりそうな気がしていた。

リイン……

何気なく弾いた弓弦からは澄んだ音色が零れ落ち、ときめきを感じてしまう。

シュウトがしばらく前衛をすることになったので、この機会に二キータにも弓を持たせようと葵が言い出した。

ギルドの共用資金から購入代金を出すので好きな弓を選んでもいいと言われ、購入するべく朝からアキバに立ち寄っていた。

値段と威力からすれば、先ほどの店に置いてあった制作級アイテムの、水晶銀の複合弓コンボジットボウが妥当な辺りだったが、付き添いのシュウトがこの店も見えておく方がいいと言う。……ここに置かれていたものは武楽器と言われる装備だった。趣味的な要素が大きく、その分だけ値段も上乘せされるのだが、吟遊詩人バードとしては以前から気になっていた装備品でもある。手に取って見せて貰うことにした。

ハーブボウ 琴弓と言っても、豎琴の形状をしているわけではなかった。そこはちよつと期待外れだったが、矢を射る時に良い音がするとシュウトに説明されたため、軽く弦を弾いてみたのだ。精霊の琴弓の名の通りに、精霊たちが一瞬だけ姿を現し、そのまま消えていくかのような儂げな響きがあった。二キータは思わずもう一度弾いてみる。

(……………凄く、良い)

シユウトの使う弓も『気持ちの好い音』がするのは知っていたが、音に関してだけで言えば完全に別格だ。

「それ、気に入った？」

「うーん、さっきの店の方が値段的にもいいから、やっぱり、あっちにしようかな」

惜しい。本当は自分のものにしたいたい。

けれども、年齢的にも『欲しいから手に入れる』ということに少し躊躇いを感じてしまう。自分のお金では無いのだし、ただ戦闘に使うものなのだから必要な機能を満たしていればいいように思う。自分の趣味は二の次にしなければ、お金を出す人達に申し訳が立たない。

「悩んだら欲しそうにしてる方を買わせろってジンさんに言われてるんだけど？」

「だけど、向こうの方が威力がありそうだったし……」

「どっちも欲しそうにしてたら、高そうな方を買えって言われてる。

こっちの方が高いよね？」

「じゃ、じゃあ、差額を自分で出すから……」

「ごめん。差額を出すのを認めたら、僕が殴られることになってて

……」

「……」

頭にカツと血が昇る。自分の考えそうなことなどはとっくに想定済みということらしい。

ジンに対する反抗心だけで、意地でもこの琴弓を使わないと決意する。最善を選ばないことが彼に対しては罰になるのだ。それは抗し難い魅力を持っていた。ほんの少しの我慢をすれば、自分でも彼に一撃を見舞う事ができる。全てが自分の思い通りになると思っ

もらっては困る。これは私の問題なのだ。

「その、気に入ったものを使うのも大切なことなんじゃないかな？
……なんていうか、武器って辛い時に頼る相棒になるわけだし、道具との相性だなんて曖昧なものがあるか分からないけど、気に入ってるものの方が頑張れるかもしれない。だから、その……」

「……わかりました。それじゃあ、こっちにさせて貰います。」

シュウトが、自分の言葉で懸命に説得しようとしていたので、彼の顔を立てようと思ひ直す。彼にも立場があつて、命じられたことをこなさなければならぬのは分かっているが、今のことには不器用だが思い遣りを感じることができた。だからだろう、少し冷静になれた。彼らにとって、武器はただの道具ではないのかもしれない。

「良かった。じゃあ、矢の方はこっちのを半分渡すよ。……そうだ、矢筒も買わないと」

「うん。……ありがとう」

ジンにはその内にお返しをしなければと思いつつも、ニキータは買ったばかりの琴弓を弾いてみた。少し緊張してしまう。たとえ音そのものが変わらなくても、受け取る側の心情によって変わってしまうものはいくらでもある。一端けちがついてしまうとダメになってしまうかもしれない。

リン……

その怖れは杞憂で終わった。変わらぬ音色に胸を撫で下ろしてい

た。

アキバのすぐ外のPKが禁止されている低レベルゾーンで再集合となった。本日分のクエストに行く前にジンが話始める。

「というわけで、本日からニキータさんに中央でメインを張ってもらいます。拍手！」

「わー」 ぱちぱち。

「まあ、最初の内はたくさん失敗すると思うけど、全然だーいじょうぶ。全つ部、おにーさんがフォローしてあげるから、ネツ？」

「……………」

めらり、とニキータの心に炎が灯る。絶対に失敗してやるものかと心に誓った。何を、どう間違ったものか、いい感じに反発心が刺激されていた。

「冗談はともかく、遊動型の連携だのの話は俺も石丸から聞いた。ちよつとニキータ向けに事情を説明しておこうかと思う」

「戦闘教義ドクトリンつスね？」

「いやー、それならいつそ衛星砲を手にいれてエアランドまで行かないと面白くないよな？」

といきなり脱線してあらぬ方向に話が行ってしまった。空飛ぶ猫がどこのどこの……………」

「……………続けてください。早く。」

「おお？今日のニキータさんは怖いのですよ？……まあ、いい」

「えっと、現代の銃撃戦のセオリーだとかつてのの詳しいところまでは知らないけど、ともかく基本は火力を集中させることになるわけだ。簡単にいえば、2点や3点から、敵を集中攻撃したいわけだ。この形式を延長すると、敵を中心に包囲する円の形になる。敵を囲んでフルボッコにするわけだな。これを求心的という」

「逆に敵が広がっている場合、攻撃するポイントが2点、3点と拡散してしまう。これを離心的という。当然にこれを延長すれば自分達が包囲されて、360度敵だらけになってしまうわけだ。」

「どっちが円の内外か外かかってことですね」

「エルダーテイルの戦闘の場合、離心的な形に成り易い。……敵が多いと囲まれ易くなるし、前衛が前線を面で作っているのに、それを無視して勝手に動くわけにもいかないからだな。この戦術的な限定を覆す可能性は アサシン 暗殺者 にある。前面で敵の注意を引き付けている間に、側面や背面に回ってダメージを量産していくスタイルはみんな良く知ってると思う。」

「単身での突入となると、ちよつとミスるとすぐ死ぬんですけどね。」

「PK対策はまた別に考えなきゃならんのだが、ともかく俺達が目指すのは対ドラゴン戦だ。ドラゴンを半ば取り囲むようにしながら、求心的に攻撃を加えていくことになる。……で、こつからがニキータ向けの話。サッカーで言うMFをやって貰うことになるんだが…」

「…」

(やっぱり、そうか)

これはシュウトも実のところ予想していた。前衛と後衛を繋ぐ中間的なポジションが役割として必要になってくるのではないかと、という単純な予想だったが、てっきり自分が行うものだとばかり思っていたし、今までもそれに近いことをやって来ていたと思っっている。今は白兵戦武器で前衛に加わるのだが、その内に弓の使用禁止が解除されれば、再び自分がそのポジションになるのかもしれない。だから、この話はあまり他人事ではないと思っっていた。

「そこで、だ。ドラゴン相手に真つ当なMFをやったらどうなると思う？」

「え？」

「ドラゴンブレスの餌食になるんだ。だけど、これはドラゴンに限った話じゃない。わかるだろ？ 敵に魔法使いがいる場合、なるべく敵を多く巻き込もうとしたら、中心付近に向けて攻撃するのが当然だ」

「自分もそうするっス」

「これが基本の問題点。予兆を感じ取ったら素早く散開の指示を出したりする必要もあるし、何よりニキータが生き残らなければ話が始まらない。本来、敵に狙われるのは俺の仕事だからな。……それから次、レイはちょっと来てくれ」

そういうと、相撲の様にながと組んだ。

「今度は相撲をモデルに説明する。お互いの土台が固定されている場合、押すか押されるかは、力の強さによって決定される。」

そう言つと、前後に押したり、押されたりしてみせた。土台が固定されていることで、勝敗を決める要素がパワーだけになってしまう。この状態では投げを打つことも出来ない。

「相撲の場合、投げ技を行う時には、この土台を動かして、相手が転び易い位置にこちらの土台をあてがってやる必要があるんだ」

一瞬だけ強く押し、レイシンの反発して力を出した所で体を躲し、投げ技の始まりのところで動きを止めていた。レイシンの体勢は崩れていて、もう一歩で投げられて転がっていくであろうことが分かる。

これなどはジンとレイシンのそれぞれが敵と味方のパーティという比喻になっている。単純な力押しの次の段階を示唆したいのだろう。

「建物のような動かないもの、『静的な構造』の場合は、足場や基礎をキツチリ固めていく必要がある。まあ、地震には弱いだとかの話もあるみたいだけどな。……それはともかく、戦闘のような変化の激しい『動的な構造』の場合、足場を固めていくのは初心者向けの話にしかないんだ。固めたら、そこが弱点になる。」

勉強でも何でも『基礎を固める』といった話を散々聞かされて来ただけに、ちよつと意味深な内容かもしれない。

「先に言っておく。俺達にリズムキーパーは要らない。……とまあ、基本的なところはこれで大体おさえたかな？後は戦闘しながら試行錯誤してみてくれ」

「え？もつと具体的な指示とかはないんですか？」

思わずシュウトが口を挟んでいた。あまりにも抽象的に過ぎないだろうか？

「ん、そうか？……基礎理論だけあれば応用が利くようになるだろ？」

「それは流石に不親切ですよ」

「だけどモンスターだけで何百種類もいるんだから、どっちにしても『共通しうる正解』なんて無いんだ。だから俺たちも対ドラゴン戦で目的を区切ってるわけだし。そういう意味では、戦闘は即興演奏だからな。厳密には同じ戦闘なんてひとつもないんだ。全部を俺が考えて教えるわけにはいかないんだぞ？」

「後はアドバイスするなら、どっちつかずにはならないようにしろって辺りだな。攻めるなら攻める。守るなら守る。中途半端にしていると、強気の相手に付け込まれる。」

結局のところ、話が難し過ぎたのかもしれない。あまり質問も出ずに出発となった。続きは実地で戦闘しながらということになってしまった。

その日も何度か戦闘があった。久しぶりの白兵戦闘でどうなるかと思っていたシュウトだったが、取り立てて問題もなくこなすことが出来ていた。ニキータの方も無難にこなしており、失敗を願っていたわけでもないのだが、痛し痒しといった心境だったりする。

「ジンさん、明後日あしたのことなんですけど……」

「んあ？」

次第に仕事が少なくなっていた頃でもあり、予定がポツカリと開いていた。明日 大地人 の街を回れば急ぎの仕事があるかもしれないが、それも確実とは言えない。いや、たぶん見付からないだろう。

「じゃあ、休みにしようか？ 今ここのところ休み無しだったから、たまにはいいだろ」

「え、ほんと?!」

休みというワードに鋭く反応したユフィリアが大急ぎで外れの方に走って行き、誰かと念話を始めてしまった。

「こりゃ確定だな」

「あの、私達……………」

「ん?………… ああ、そろそろ例の日だっけか。急ぎの仕事もなさそうだし、まとめて休みにしまっつか?」

ニキータも先に休みたい日を申告していたので、急な変更がないように話を確認して通すのを忘れなかった。

「ジンさん、あの、お願いがあるんだけど……………」

念話から戻ってきたユフィリアがジンに詰め寄る。

「んー?なんだ、俺とデートしたいとか? それなら考えなくもないぞ?」

と、いい加減な受け答えをした。ユフィリアの表情が微妙に固まる。

「えっと、じゃあ、お願い増やしてもいい?」

「だめ。………… お願いってなんだよ、言ってみ?」

「むー、あのね、お休みの日に一日シュウト借りてもいい?」

今度はジンが固まった。

「なんだ、シュウトか。…………… わーった。煮るなり焼くなり好きに使っていいぞ」

(スネたっスね) (ガツカリだね) (意外と間が悪いのよね)

「ちよつと！ 僕にも休んだりする権利が……」

「ない。……そんなもの無くてよし。明後日シュウトはユフィリアの護衛。ハイ決定。」

「やった！」

「ヒドすぎる……」

というやり取りがあり、休み当日。

「ジンさんもだけど、シュウトも戦闘用の衣装が一番かつこよく見えるね？」

開幕からの大ダメージ攻撃に心の中で血を吐きつつ、アキバに向かって移動することになった。

「なあ、今日は何の用件なんだ？」

「それはアキバに着いてからのお楽しみ」

シュウトにしても、ユフィリアは綺麗だし、可愛いし、美人だし、魅力的なのだが、要所所で釘を刺されているせいかな、微妙に『そういう対象』ではないという感じであり、今回の話は全くの寝耳に水だった。せっかくの休みだっていうのに、どうせジンさんのためにプレゼントを買いたいとか、そういう理由で連れてこられたのに違いないのだ。どんなガツカリ攻撃が来ても負けないぞ！と弱々しく決意するしかない。

「なにコレ……………?」

何故か、目の前に黒髪の、可愛らしい女の子が座っている。

「D・D・Dのユミだよ。」

「ユミカです。初めまして……………」

(ハメられた……………っ！)

こうして嫌な緊張を味わう一日になる予感に戦慄するシュウトだったが、ユフィリアはユミカの紹介をしながらも、ここのとこの出来事を話して聞かせていた。30分ほどそんな調子でユフィリアがメインで話をしていたため、流石のシュウトも心に余裕が生まれつつあった。

連れてこられた酒場は昼過ぎなのでさほど混み合っていない。午後のお茶とおしゃべりが目的の客が殆どだろう。自分達もその一組だった。

ユミカはD・D・Dだから当然なのか、90レベルの^ク施療^{リック}神官^クだった。座っているから分かりにくい^クが、背は低そうだった。背が高めのユフィリアと比べると、150センチあるかどうかといった感じだろう。艶やかな黒髪は切り揃えられ、……………いや、デフォルトで選べる髪型の一つだったかもしれない。ボブカットというヤツだろうか？

(今日は、3人で一緒にいるつもりなのかな……………?)

それなら話は簡単だ。ただ話を聞いていればいい。時々頷いたり、質問に答えたりしながら、割りと会話を楽しめる心境に到達しつつあった。

「ちょっとトイレいつてくるね？」

……とユフィリアが席を立った。ユフィリア達はトイレの時はトイレと平気で言うのでギルドで一緒にいても気が楽だった。逆に「ちょっとお花摘み」とか言うのは葵だけだったりする。

5分経過。

内心焦りを感じながらも、軽く笑いかけたりする。

10分経過。

まさかとは思うが、まさか、まさかなのか？と意味になっていないことを思う。

ちょうどこのタイミングでユミカの方に念話が掛かって来た。相手はまさかのユフィリアで、急用が出来たのだという。これで本格的に目の前の事態に自分で対処しなければならなくなってしまった。やばい。早く帰りたい。心の中でその連呼が止まらない。

比べるのは失礼な話かもしれないのだが、ユフィリアにしる、ニキータにしる、基本的に話し易いのだ。気さくで自分から話かけて来るし、別に無言で居てもプレッシャーを感じない。身近にいる女性といえは葵も同じだが、葵に至っては一方的に喋るただけに存在しているような具合だ。ここ暫く、会話に困るってことを忘れていた。

うつむき加減にテーブルを見ているユミカを見ながら、真面目そうな女の子だなと思う。普通の女の子って、こんな感じなのかもしれない。何か話題を考えなければ……………

「あの、シユウトさん」

「なに、かな？」

「その……………も、モンスターはお好きですか？」

「……………はい？」

「どうですか？」

「うん、冷たくて美味しいよ」

近頃登場したというクラッシュ・シャーベットという蜂蜜レモン風の氷菓を食べる。

意外なことに、あの後シユウトは意外にも楽しんでた。モンスターが好きだというユミカに半ばせがまれる様にモンスターの話をする。ゲーム男子の例に漏れず『そういう話』ならば得意な方だった。シルバースード 時代から様々な場所で冒険し、大災害後もあちらこちらの敵と戦っていた。ゲームでは良く見かける相手でも実際に戦ってみると感触が違えばそれは話題に出来ることだった。何よりもユミカが一生懸命に頷いたり質問してくるのでシユウトも引き込まれるように真剣に話さざるを得ない。彼女は良い聞き手だった。

喉が渴くほど話たので、ユミカに誘われて甘いものを食べに出て来たのだった。

並んで歩いていると、やはりかなり背が低い。可愛い女の子だと思う。今は並んで座っているのだが、少し視線を下げると、ど

うしても胸に目が行ってしまふ。かなりの大きさで、内側から服を押し上げていた。誤魔化すためにもつと下を見ようとすると、むっちりとしたフトモモが目飛び込んでくる。どちらも異様な圧力をもってシュウトに迫ってくるものだった。

マーケットの入っている廃ビルで掘り出し物を探して歩き、最後に誰でも出入りできる屋上に引つ張って行かれた。そこがユミカのお気に入りの場所なのだという。夕暮れのオレンジの光が少し眩しかった。

僅かに身を寄せてくるユミカ。ビルの隙間に日が暮れてゆくのを2人はただ無言で見ていた。

シュウトは、「ああ、自分の人生にもこういうことが起こるのかもしれないな」といった漠然としたことを考えていた。

ユミカの手がシュウトの肩に触れ、見上げてくる瞳と出逢う。くちびるが少し紅い気がした。ごく自然な動作で、キスをしようと身を屈める。

脳裏に浮かんだのはあの暗い砂浜の景色だった。

戦闘の痕跡だけが残る砂浜の景色。それを指し示す白い指先と、

赤い、赤い……………？

ハッと気が付くと、ユミカが目を開いてシュウトを覗いていた。そして「今日は楽しかったです」とだけ言った。

「ねえ、古来種 ってどう思う？」

第8商店街 の亜矢はしきりに 古来種 のことを話題にしていた。『古来種 との恋』という自分のアイデアを自慢したいらしい。彼女をよく見ていると強気なようで臆病なことがわかってくる。わざわざ周囲に話しているのは、自信のなさの現われなのだ。

それでも厄介な性格をしているから、誰かが自分よりも先に 古来種 と付き合ったりしたら、手柄を先に取られたように顔をしかめるのに違いなく、本気で怒ってみせるぐらいのことはするだろうと思われた。

ニキータとユフィリアは今夜もマダムのレストランにやって来ていた。この日は エターナルアイスの古宮廷 で来月に行われる舞踏会 のことで持ちきりだった。大地人 の貴族たちに招待を受け、アキバの円卓会議は代表団を送ることに決まったと聞く。一部の人間のみが知ることのできる情報であっても、この場所では半ば筒抜け になってしまう。

もしも舞踏会に参加することになれば、宮殿で 大地人 の貴族を相手に格好良いところを見せなければならぬ。それは半ば恐ろしくもあり、半ばうつとりするような素敵なイベントになるだろうと女子の想像をかき立てていた。また生産ギルドではイブニングドレスを作ったりと準備で慌ただしく動いているようだ。

ニキータは本来の政治的な影響を先に考えてしまい、参加したって緊張しそうでイヤだと思っているのだが、ユフィリアは美味しいものが食べられるのかな？といったことや、現代日本ではなかなか

参加する機会のない華やかな舞踏会に少なからず興味がありそうな顔をしていた。

ロデリック商会 の花乃音^{カノネ}がユフィリアのところによつて来て、ドレスのことなどでなにやら相談をしている。何点かのデザインを急いで提出することになって困っていた。着る人のことを考えれば地味にはできないし、かといって派手過ぎるのもうまくない。それでいて技術力の高さはアピールしなければならぬといった思惑があるように、頭がぐちゃぐちゃになっている。しばらく話込んでいたが、何かのヒントを得たらしく、気が付けば帰ってしまった。

海洋機構 のトモコが、今日が初参加という グランデールのルカを連れて来ていた。初回ということで遠慮がちに振舞ってはいたが、瞳が強い印象で、覇気がありそうな子だった。亜矢とはぶつかるかもしれない。

場の流れからか、ユミカが男の子とデートしていたことをトモコが暴露した様子で人の輪が出来ていた。しかもその相手はシュウトだったらしい。ユフィリアに向かって「ユミカを鼻屑してずるい！」という声が上がったが、笑いながらうまく逃げていた。

「ホントに、どうすればいいんだ……？」

一方でシュウトといえば、自分の休みを練習に充てていた。場所はいつもの隠れ家的練習ポイントである。珍しく昆虫系のモンスターが数匹現れたのだが、レベル差があるのでソロでも問題なく倒していた。その後、矢に『気』をのせることを目的に何十本と矢を

射てみるのだが、一度として上手くいかない。

(これだけ試してみて上手く行かないのだとすると、確率的にも狙って出せそうにないなあ)

実のところ、シュウトは既に答えに目星を付けていた。初めて試し撃ちをしに行った日、ジンに向けて放った矢で一度だけ感じた『虚脱感』こそが求めているものだろうと予想していた。ジンがまともにも反応できなかったのも『気がのった』からだと考えれば辻褄が合う。

しかし、あれ以来一度も虚脱感を感じたことはない。

(んー、やっぱり「感覚の再現はタブー」ってのが原因なのかなあ……………)

シュウトとしては虚脱感という感覚を再現したいのだが、ジンは感覚の再現はタブーだと言う。もしかすると、この矛盾が解決しない限りは上手くいかないのかもしれない。

それでもめげずに「もう一度！」と矢をつがえる。

弓弦を引き絞るのに合わせて気を高めていく。ここまで出来るようになるだけでもそれなりの時間が掛かっていて、マトが動かなければ何とか戦闘でも使えそうな感じになって来ている。これはかなり順調だった。問題はとっかかりすら掴めていない虚脱感の方だけである。

戦闘モードに入り、能動意識から体を解放する。気を高めながら限界まで引き絞り、更に引き続ける。するり、と矢は離れ、弓の鳴る高い音と共に狙い通りの場所に命中する。…………だが、やはり虚脱感だけは感じられないままであった。

深く吐き出した息が、どうもため息に近くなってしまふ。
かすかな金属鎧の音に気が付き、そちらに目をやるとジンが歩いて近付いてくるのが見えた。

ジンは女性2人をアキバまで送って行く役を引き受けていた。ニキータ達はそのまま宿に泊まることになっていたので、ちょうど帰って来たのだらう。荷物を見る限りでは戻ってきたその足でそのままこちらに寄ったのだと分かる。

「よっ、勤労青年。がんばってるじゃないか？」
「……ええ、まあ」

よっほど我慢しようかと思ったのだが、やはり教えを請うことにする。

「あの、ご相談が………」
「んー？」

一通りの事情を話し終えたところで、ジンが深々と頷いた。

「なるほどね。………問題はアレだな」
「何が問題なんでしょうか……？」
「うん。やっぱりさあー、リア充のくせに非モテの『怨念の力』まで手に入れようって魂胆が間違ってたんだよ。神に与えられた試練という名の罰だな。間違いない。」

「………へっ？」
「可愛かったじゃん、黒髪の子。俺もあのシャーベット食べてくれば良かったなあ」
「み、見てたん、ですか？」

「別に見ようと思ったわけじゃないんだがなあ。呼ばれてつたら、たまたま」

考えてみれば、ユフィリアが1人でアキバからシブヤに帰るのは安全上の配慮として禁止されているのだ。帰るためには誰かを呼ぶしかなくて、それがジンになるのはごく自然な展開だった。ユフィリアが消えた直後にジンに念話を入れたら、クラッシュ・シャーベツトを食べている頃にちょうどアキバに到着できる。

「いやあ、女の子のことを考えながら練習したって、あんまり巧くいくとは思えないなあ。」

「そんなこと考えてませんよ!」

ニヤニヤしながら追求するジンに抵抗するために頭を必死で回転させる。何とか誤魔化さなければならぬ。ユミカのことを全く考えていないと言えはさすがに嘘になる。昨日の出来事を思い出しながら練習していたのは事実だったりするのではあるが、そんなに人聞きの悪いことがあったわけではない。

(……………結果的には、何もなかったわけだし?)

「そ、そういうジンさんだって、ユフィリアといつも一緒じゃないですか!」

「んー、そうか?」

「もう付き合ってるんですか?」

「いやあ、別にそういう話にはなっていないけれども」

「え? 好みじゃないんですか? というか、口説かないんですか?」

「いやいや、可愛いとは思ってるんだけど。…………正直、アイツはなかなか完成度が高めなんだよ。美人で高嶺の花かといえば気さくで

可愛いし、人懐っこいから手が届きそうなんだけど、あとちょっとで届かなくて、それで高嶺の花としての価値が高まる。また始めに戻って高嶺の花だけど、つてのがグルグルと続いていく仕組みがあるっぽい」

「はあ……」

「つかみどころが無いっちゅうか、期待感だけはてんこ盛りっちゅうか？」

「なんかフラれるのよりも始末が悪いというか、余計にエゲツないような気が……」

実際のところ、ジンとユフィリアの間に通常理解が可能な甘い駆け引きの類いはほとんど行われていない。

これはジンの安全距離が異常なほどに深まっていることにも原因があった。例えば、ジンの首筋にユフィリアが刃物を押し当て、「あとは掻っ切るだけ」の状態にしてスタートしても、ジンは90%以上の確率でユフィリアの攻撃を防ぐことができる。のこりの10%もダメージは受けても致命傷ではないという状態だ。人間関係での最大の影響のひとつである『殺すこと』ができないことによって、ユフィリアからの影響の大半を『どちらでもよいもの』としてジンは選択的に無視できてしまえる。

一方のユフィリアはその異常なモテ強度の高さから、男性に対して影響を与え、フィードバックからエネルギーを得るところまでを組み込んで自己の意識構造を形成させている。まず周辺の男性に魅力のシャワーを浴びせ、ちょっとした反応を引き起こすようにする。現実で言えば、軽く目が合ったり、姿を見かけたり、近くを歩いたり、笑い声を聞いたりするといった程度のことなのだが、本人の自覚的な行動なしの半ば自動的な状態で男性の気を惹いてしまえる。その時に男性側は、驚きや照れ、ポーっとなる、嬉しくなる、感動するといった様々な『ちよっとした反応』を起こす。それらの

反応からエネルギーをかき集め、時には増幅させつつ、取り込んでユフィリア自身を輝かせるエネルギー源にしていた。

しかし、ジンを相手にした場合、ゼロ距離でも期待した程の反応やエネルギーが返ってこない。無意識に膨大なエネルギーを運用しているジンはとても良いカモであるはずだったので、その潜在的な損失は看過できないレベルにある。実際のところユフィリアの魅力のシャワーは相手がどんなに女性慣れしていようと、一定の水準を超えて影響を与えられるだけの威力はあるのだが、恐竜並の鈍感さにより、否、そもそも運用しているエネルギー量の桁が違うので歯牙にも掛かっていなかった。結果、物理的にこれ以上は接近のしようがないため、ユフィリアの潜在意識ははじめての異常事態を前に対処に追われているのであった。このことは本人の表層意識にも僅かに影響を与えており、『なんとなくジンとくっ付いているのは楽しい』といった風にユフィリア本人に感じさせていた。

314

「気分転換に俺の練習を手伝えよ」

「何をすればいいんですか？」

ひとしきりからかって満足したのか、ジンがそう切り出した。うまく追求からは逃れたが、念のためにもう少し話を合わせておくことにする。

「じゃあ、俺の体に触ったらシュウトの勝ちな。」

それだけ言うとジンはタオルを巻いて目隠しをしてしまった。

「さ、行ってみよう！」

「……って、ミニマップがあるから、こっちの位置は分かるんですよっ？」

「もちろん」

「つまり、特技でミニマップを誤魔化してジンさんに触ったらいいわけですね？」

「まあ、大まかに言えばそんな感じかな。……ああ、ダツシュはすんなよ？一瞬で5メートルやら10メートル詰めて『触りました！』とかやられても意味ないから」

「わかりました」

アサシン

暗殺者 やサブ職 追跡者 の習得する特技には、この課題に利用できそうなものが幾つかある。どうするかチラリと考えた後で、ハイドウォーク から順に試していくことにした。念のために背後からではなく真横から接近してみたのだが、残り3歩のところで剣をピタリと喉元に突きつけられてしまった。

「ふむ、分かりにくくはなるが、このぐらいなら何とかなりそうだな」

「ホントに見えてないんですね？」

「モチのロンですよ。つーか、この2ヶ月ばかりミニマップ関係で気配を察知する鍛錬はやってたからなあ。一日の長ぐらいはなきや困るっての」

「……………もう一回いいですか？」

「おっ、いいねえ。じゃあ何か賭けるか。そうだな、俺が負けたら……………」

「質問に答えてください」

「ん？ そんなんでいいのか？」

「それをお願いします」

「ふ〜ん。ま、いいけど……………あんま変なこと訊くなよ？」

やり始めてみると面白くなり、シュウトも本気で攻略しにかかる。しかし、数度のチャレンジの全てを撃退されてしまった。しかも段々とジンが上達している気配があり、最初よりも難易度が高くなっ

て来ている印象を受ける。今では慣れたためか何やら体をブラブラとさせ、たぶん別の練習をしながら、シューウトの相手をしていた。

「うーい、どうするうー？ もっぺんやっかー？」

「えっと、今日はギブアップで……」

「そっか、サンキューな？」

そう言いながら目隠しを外そうとして……外れず、もがいていた。

そのジンの様子を放心しながら見ていて、世界はかくも複雑で豊かなものだったか、と思い直していた。ゲームであれば、ミニマップと視覚を封じてしまえばあとは殆ど何も分からなくなるはずなのだ。それが今では殺気などの気配であったり、微かな匂い、体温、空気の流れなどの様々な要素が渾然一体となり、自分の存在を浮き彫りにしているのを感じる。皮肉なもので、気配を消そうと思えば思うほど、自分が確かにこの世界に存在していることが分かってくるのだ。自分が普段から使っていない感覚がどれだけ多いかが分かって、ちよつとがっかりしてしまう。

「んしょつ、と。ふいゝ。……あれだな、特技の使い方
は良かったよ。繋ぎ目もほとんど感じなかったし、さすがに大手で
揉まれてる優等生は違うな。作戦はまだ遠慮がちだったけど、それ
でもちゃんと勝ちに来てたしな。」

「……まあ、鍛えられてますから」

（特にここ最近、刺激が強いしね）と心の声で付け加える。

「あとは、もうちつと気を抜いたりしないとな。気を消したり、殺
したり、抜いたり、周囲と馴染ませたり。逆に強く印象付けておい
てから、一気に気を殺して移動するとかもいいんじゃないかな？」

「追跡者の隠行術スニークを持ってれば試してみたかったんですが

……」

「ま、無いものはしょうがないな。特技 や装備品に頼らないで、なるべく自分の腕を磨くこつた」

「そうか、何か装備を買ってこようかな。」

「おい、先に腕を磨けよ……」

「でもそれが『代用』ってことですよね?」

「それはそうなんだが、まあ、いいや。………っと、俺に質問するのは何だったんだ? 別に今でもいいけど」

「いえ、そっちはできれば再戦で」

「へえ、勝つ気マンマンかい」

「今朝は手抜きだよ」

とレイシンが軽い(?)朝食を並べる。温め直したパンに軽く火を通したハム、サラダ、オムレツ、ジャガイモのガレット。

「さ、食うべ、食うべ」

「日本人なら、朝はパンだね!」

「ツツコミ待ちはヤメろよ」

ジンや葵がゾロゾロと席に着く。石丸もやって来たので、レイシンは全員分のミルクティーを入れていた。これはコーヒーがなかなか手に入らないため、最近はや用品として『たんぽぽ麦茶』なるものが登場したのだが、これが中々の人気商品だった。ジン達もそのうちに試してみようと話をしていた。

「今日の予定なんです」

「このところジンが気を回す前に、シュウトから先に話を切り出すように心掛けていた。これは慣れてしまつと意外と具合がよかつた。」

「アキバに寄つて女性陣を回収した後で、マイハマまで足を延ばそうと思います。向こうへの連絡は出発する時にします。」

「おっけ」「了解っス」

自分の分のミルクティーを受け取つて、口をつける。その柔らかい香りにほっとする。

「しかし、あれだな……つて、これ美味しいな！」

ジンがジャガイモのガレットを食べながら口を開いたが、どうやら開ききらなかつた。

「ガレット？ 塩揉みして焼いただけだよ」

「ほら、ジンぷーは舌がやつすいから、手抜き料理がお好みなんですよ？」

「おっと、値段を聞くまで味が分からないヤツが偉そうだな、オイ？」

「なにさ？」

「なんだよ？」

いつもの光景なので軽く聞き流し、シュウトは黙々と食事を進めてゆく。オムレツも美味しかった。やはりここはまとめてサンドイツチ風にして食べるべきだろうと考え、具材をのせてから齧り付いてみる。正解だった。

そうしておいてから、何も無かつたようにジンに先を促した。

「それで、なんでしたっけ？」

「え？………あー、そうそう。そろそろ、もちつと強い敵と戦

「いたいなつて話だ。今のままで全然レベル上がらないし、金もアイテムもさつぱりだ。」

「もう少し高レベルのクエストをやるとなると、数が少ないから競争っぽい感じになりますね」

「そうなるだろうな。この手の“狩場”の数が少ないって問題にはひとつの原因があるわけだが、」

「妖精の輪　っスね？」

「そいつだ」

妖精の輪　とは、ゾーン間移動に使われる転移装置で『天然の魔法陣』といった姿をしているものだ。世界各所に存在し、それもかなりの数にのぼるため、場所やタイムテーブルの全てを把握しているプレイヤーはいない。大災害　以降はネットにあつたWikiなどの攻略サイトを確認することが出来なくなつてしまったため、必然的に使用が制限されることになつてしまつていた。

「自分達の狩場だけでも確保しなきゃなあ」

「周期を調べるのも一苦労だもんねえ。海外に飛ばされて、帰つてこれないかも?! きゃー!」

「嬉しそうにしてんじゃねーっつ。お前だつて最低でも半年ぐらい旦那のご飯は抜きになるんだぞ」

「ジンぷーだけ先に飛び込んで、行き先を調べればいいじゃん……
ダーリンは安全そうな時だけにしてね?」

「どこまで鬼なんだ、お前……」

「いいじゃん、“妖精の旅人”すれば。かつくいー!」

「アホか!」

妖精の輪　に飛び込んだ場合、転移先からもう一度転移して元の場所に戻ってくることは基本的にできない。これは　妖精の輪　にはそれぞれ別の転移先テーブルが決められているためだ。よつて

基本的に帰りは帰還呪文を使うことになる。

ところが稀にシブヤのように都市の中に 妖精の輪 が存在している場合もあった。世界の中へ大型の都市にその傾向がみられ、そういう場所に飛んでしまえば当然ながら帰還先の設定が書ききれなくなってしまふ。このため現在では安易な連続転移は控えなければならなかった。

ゲーム時代ならば適当にログアウトし、再ログインする時にアキバなどを選んで再スタートすればよかったのだが、そもそも『ログアウトができないこと』によってこの異世界に閉じ込められているのである。間違つて海外の都市に飛んでしまった場合は、歩いて戻ってくるなり 妖精の輪 で再び戻ってくるしかない。

『妖精の旅人』とは一種のスラングであり、迷子のように連続ジャンプし続けることを指している。これは長くプレイしていれば誰もが一度や二度は経験しているもので、実際には世界中を旅して回することは出来ずに、数箇所〜十数箇所の単位で 妖精の輪 の転移先の範囲内に閉じ込められてしまうことがしばしばだった。

転移先テーブルもゲーム時代は5分で変化していたのだが、現在は1時間かかるため、もし連続ジャンプをしていてループした場合には狙い通りの行き先に移動するのはより困難になってしまっている。

「じゃあ、いつてくるね？」

「いつてらー！」

「行ってきます」「よし、私も出るぞ！」「いつてくるっス」

「そうそう、帰ってきたらみんなにちよつとお話があるんだからね？」

「シユウト、……なんだか急に2、3日は戻つて来られない気分になつてきたな？」

「また、そういうことを……」

「おはよー!」「おはようございます」

「オハヨー」「チューッス」「ございますっス」

アキバの街に入ったすぐのところまでユフィリア達と合流する。帰還呪文による帰還先の設定を一致させておく事は、パーティで行動する際に意外と重要なポイントだった。まだ朝に分類される時刻ではあったが、アキバの街は活気づいていた。

「ジンさんも、おはよっ!」

「よっ。ずいぶんと顔がツヤツヤしてんじゃん。……昨晩はお楽しみでしたか?」

「うん。すっごい楽しかったよ!」

後ろでレイシンと石丸が笑っているが、意味が分からないメンバーはキョトンとしていた。

「なんか、言い方がイヤらしいのよね」

そのやり取りを冷め切った目でみていたニキータに、シユウトが話しかける。

「おはよう。今日はこれからマイハマに行くから」

「ん、わかりました」

「……?」

ニキータの態度に少しの違和感を覚えつつも、気のせいだろうと

結論する。

マイハマまでは通い慣れた道になりつつあった。しばらくは歩きながらユフィリアが楽しそうに話すのを聞いておく。意外とディープな話題に「侮れないな、女子会……」と唸る。

開けたゾーンに出たところで馬の人となった。このところの小クエストの踏破により、馬は日常を構成するものの一部になっていた。馬を走らせたときの振動にも慣れたため、風を心地よく楽しむことができる。自分専用の馬を使っているわけではないのだが、召喚の笛で呼びだした馬にもそれぞれ個性があるのが少し分かるようになって来ていた。

7月も下旬に入ろうとしている。今日も暑い一日になりそうだった。

「おっと……」

酒場から飛び出して来た男性を、ジンはぶつかるところで躲していた。相手はそのまま謝罪の言葉もなしに走りさってしまった。石丸がしばらくその男の背中を見続けていた。

酒場の中に入るなり、切り盛りしている店主が声をかけてきた。

「ああ、アンタ達か。ちょうど頼みたい仕事があるんだが」「っていうと？」

「たった今、キャンセルされた仕事があつてね。4、5日前に登録だけしてあつたみたいで、依頼主をかなり待たせちまつてるんだ」

「ふう〜ん。俺達は別に構わないよな？」

「ええ。僕らで引き受けましょうか」

それはごく単純な護衛の依頼だった。母と娘という組み合わせで、特に大きな荷物もない。冒険者に護衛を依頼してまで旅ができるということは、それなりに裕福なのだろう。大地人は冒険者とは違い、魔物を倒して財貨を得るということができるわけではない。貴族でないのなら、そこそこ裕福な商人の家族だろうとあたりをつける。

「どうやらお待たせしたようですね、申し訳ありません」
自分達の責任ではないが、それでもジンは軽い謝罪をする。

「いえ、急ぎの旅ではなかったので大丈夫です。どうぞ、よろしく
お願いいたします」

母親の丁寧な態度に、冒険者との付き合いに慣れた雰囲気を感じる。大地人の女性であれば、もう少しおつかなびっくりであることが大半だからだ。……となると、この護衛のクエストはゲームでも度々発生していたものかもしれない。大地人の寿命を考えると、現実世界の時間で2年（＝ゲーム時間で24年）もすれば娘は大きくなって母になり、また自分の子供を連れてこうした護衛のクエストを依頼することになるのかもしれない。

そうしたことを考えると、母親の影に隠れている小さなレディに別の感慨を覚えてしまう。

（いや、全て僕の勝手な妄想ではあるんだけど……）

ユフィリアが早速、その内気なレディに話し掛けていた。こういつた部分でカトレヤ女性班のあまりの頼もしさに湧き上がる感情を何と呼べばいいのか、シユウトは言葉にできなかった。

男性ばかりのグループの場合、子供、特に女の子は持て余しがちだ。元々は戦闘さえ強ければクエストをこなす事はできたのだが、

ゲームが現実化したことで、物事を円滑に進めるためにはちょっとした配慮を積み重ねることが必要になっていった。クエストに付与されたこれらソーシャルな側面に上手く対応できなければ、（ジンが考えているであろう意味において、）『ちゃんとこなす』ことはできない。

しかし女性だから小さな子の相手をするのが得意だなどと決め付けるわけにはいかない。むしろゲーム女子にはその手の行為が苦手なタイプも多いかもしれないのだ。無理をして繕って、子供が好きならふりをして貰いたいわけではない。それらは自然な感情であって欲しいし、シュウトも便利だからと女性陣に役割を押し付けてしまえばいいとは思わない。ただ『そういうこと』の得意な人が身近にいるのは、それだけで圧倒的に心強いものなのだ。

小さなレディがこちらを見ていて、目が合ってしまう。

シュウトは、にっこりと笑ってみた。それで女の子も安心したのか、笑ってくれた。……こうした小さな心の交流に和やかな気分であるのに、

「ロリコンの人がいる……」

「プツ……」

ジンがボソッとコメントしたのを耳にして、ニキータが身をよじって背を向け、ふるふると震えている。……これでは台無しではないか。

ちなみに母親はロリコンの意味が分からなかった様子で、そちらは事なきを得た。

（ジンさんに『ソーシャルな配慮』は期待できないな……！）

照れもあったが、やはり憤懣やるかたない。

シュウトが自分の外側にむけて一步を踏み出した努力を笑われた気がしてたまったものではなかったが、外からみたら小さな女の子を毒牙にかけようとしている風に見える可能性について、本人はまったく気が付いていなかった。

マイハマから護衛の目的地である魔法都市ツクバへと向かう小旅行を急ぎ足で行う。この区間は意外と距離があり、子供連れの大地人と一緒に歩いているのは、2日かけても目的地に辿りつかないかといつて馬車を用立てては足が出てしまう。現在は交渉の仕方次第でクエストのやり方に多少の融通が利くため、母親をニキータの、子供をユフィリアの馬の背に乗せて走らせていた。馬に休憩を与えることを考えたとしても、今のペースであれば日が落ちる頃にはギリギリで辿りつくことができるかもしれない。当然、帰りはアキバまで帰還呪文だ。

シュウト達は、ほとんど無意識に『近道だけれど少し危険なルート』を選択していた。確かに、遠回りだがより安全なルートもあったのだ。しかし、馬の疲労や、同乗する大地人親子の疲労、日没までの時間と途中で夜営したくないといった面倒を避けたがる気持などが重なり、『より安全なルート』を行くべきかどうか？といった選択肢を意識させなかった。

そして、万が一が起こった。

先頭を走らせていたジンが手を上げながら、馬の速度を落としていた。他のメンバーもそれにならって速度を落とす。と、同時に一

番つしるにいたシュウトの頭に念話を知らせるチャイムが鳴った。

『どうも囲まれつつあるな。動きが早いし、数も多い。』

『そのまま突っ切って逃げられませんか？』

『難しいな。俺達のは戦闘用の馬じゃない。逆に危ないだろう。』

『やるしかなさそうですね……………先に馬を逃がしましょう』

『そうだな』

戦いになった時にパニックになった馬が暴れると面倒事が増えてしまうのだ。鞍を外すように指示し、食べられてしまわないことを祈りつつ、囲みが完成していない方向へ逃がしてやる。これで馬達の無事は祈ってやるしかない。

「……………見えました。ダイアウルフの群れです」

アサシン

暗殺者 にして弓兵でもあるシュウトは、視力強化の特技やアイテムを保持している。ここは谷の底に近い地形をしていて、馬を走らせることは出来るが、周囲から魔物に襲われた時に身を隠す場所がない。相手からはこちらの姿が見えてしまいが、敵の姿は木々に遮られ、襲い掛かれるまで分からない。ちよつとした難所になっていた。

「デカ狼かよ……………面倒だな」

レベル差のあるモンスターなので、20〜30体程度に囲まれたところで、ただ倒すだけならば何も面倒ではない。ここで問題にしているのは、守るべき対象の身の安全についてだった。大型の狼は動きが素早い。一瞬の隙に噛みつかれてもすれば、小さな女の子などは一撃で死に到ってしまう。生きてさえいてくれれば回復させることもできるが、死んでしまつては蘇生の呪文も通じない。大地人は死んだら生き返ることはないのだ。

「じゃあねえか、ちよっくら本気を出すかね」

ジンはむしろ楽しげな様子で左右に首を鳴らした。

「それはダメっス」

ところが石丸が待ったを掛ける。

「ん？……どして？」

「たぶん、高確率で、これはMPKっス」

「なん……だと……？」

瞬間的に緊張感が増大する。血流が耳元で地鳴りのような音を奏でる。

シュウトは信じたくなかった。同意するに足る“予兆”がない。考え過ぎや心配のし過ぎではないのか？陰謀論が好きといった様な、ちよっとした思考の偏りみたいなものではないのだろうか？

MPKとは、モンスタープレイヤーキラーの略称で、いわゆるプレイヤー殺し（PK）の手法で、モンスターを利用するものだった。エルダー・テイルの場合、ハイレベルクエストのイベント中といったよほどの事情でもなければ、帰還するなりで回避できる。

しかし、今回の場合は自分達が助かったとしても 大地人 親子の命は失われることになるだろう。それは単なるクエストの失敗とは既に根本から意味が変わってしまっている。

「……シュウトは弓を準備。ニキータと先制して、なるべく数を」「ジンさん……」

「シュウト、いいか、MPKでも、例え違っても、俺達是对処する。どっちにしるそこは変わらない。」

「それは、そうですね……」

「だったら信じるよ、仲間だろ？」

その言葉に、瞳を輝かせたユフィリアが元気な声を出した。

「うん。私達はただ 護り切って勝てばいいんだよね！」
「そうだ」

(天然なのか、計算なのか、タイミングのいい同意だな)
パーティがバラバラになる前に、方向付けをしている。

弓を取り出しながら更にシュウトは考える。

結局は『仲間を信じるかどうか？』という事なのだろう。性格的なものに疑問を感じはするが、石丸の能力を疑っているわけではなかった。

(なら、僕が否定する根拠はなんだ？ …………… 無いな。感情だけか？)

ジンが本気を出せば確実に勝てる。本気を出さないのなら、五分と行ったところだろう。大地人 親子の生命を掛けてお遊びみたいな事をするのが気に入らないのか、単に楽しみたいだけなのかは、実のところ区別が付かない。

そうして、いつかと同じ感じを覚える。自分はやるだけやって、後はどうとでもなればいというあの感じだ。

だから、振り向いた。

シユウトの視線の先には、小さなレディが不安そうに母親にしがみ付いている。

（あんな重^くそう^くなもの^をこの先ずつと背負^っていくのは、僕には無理だ……）

情けないことだが、それが本音だ。今はその弱さでも十分に『使える』と判断する。

そうやって、絶対に勝つと決めた。

準備も打ち合わせの時間も殆ど残されていなかった。地の利を得たいが、その場から動くことも間々ならない。親子に速力を求めることはできなかった。何処か背後から襲われない場所を背にし、前線で壁を築くのが理想だったが、これが仮にMPKだとすると理想的なポイントには逆にトラップが仕掛けてあったり、伏兵に襲われ易くなる可能性もあった。

モンスターよりも同じ人間である 冒険者 に狙われることの方が遙かに気を使わなければならない。

勝利条件の厳しい戦いにおいては、オープニングからの数手で戦局全体の有利・不利が決まってしまう易い。防衛戦の難しさはゲームで幾度も経験していたが、戦いが始まる前は普段の何倍も緊張が高まるのだった。

ジン・レイシン・シュウトの3人で三角形の形に陣形を作り、内側にニキータ・ユフィリア・石丸を入れ、更にその内側に 大地人の親子を守る形を採る。

敵は 魔狂狼 ダイアウルフ。一体一体は敵ではないが、数が多いうえに、周囲をグルリと囲まれている。

射程圏内に入ったところで、立て続けに弓を射掛ける。二種類の弓鳴りが響いた。しかし敵に囲まれているため、どうしても火線が散らばってしまう。同じ方向ばかりに打ち続けるわけには行かないためだった。加えて前線を構築するため、シュウトは武器を持ち替えるタイミングを計りながらの射撃だった。

ダイアウルフの一体が雄叫びを上げる。……狩りの時間が始まった。

本来の狼の狩りは、周りを囲ってちよっかいをかけ、疲労したところで仕留めるといった形をとる。ダイアウルフは月やマナに狂っているために凶暴で、一斉に襲い掛かってくることも多いのだが、始まりはゆっくりとした形になった。

しかしシュウト達も相手のペースにさせるつもりはない。シュウトは白兵戦武器ショートソードに持ち替えたが、ニキータはまだ矢を射続けた。……と、石丸の呪文が完成し、狼の群れで爆発が起こる。

ニキータは永続式の援護歌に 臆病者のフーガ を選択し、後衛にターゲットを集めないようにしている。ジン達はちよっかいをかけにくる相手を追い払う形で戦っていた。……ここまでは順調だ。

やがて、ダイアウルフたちが狂った様に凶暴性を剥き出しに始める。ヘイト値の上昇から怒り状態への移行、そして一斉に襲い掛

かってくる。

第一波はなんとか凌ぎ切った。そちらこちらでユフィリアの掛けおいた反応起動回復の光が弾ける。同時にタイミングをズラしたジンのタウンテイング特技が決まり、深く入り込んでいたダイアウルフたちの大半を取り込んで、ターゲットを強制的に集めていた。そのままジンは敵を引き付けて離れ、味方を巻き込まないように位置取りをする。シュウトは間を空けずジンを襲う敵に背後からの攻撃をしかけ、一体、二体と仕留めていく。暗殺者 との攻撃力の差から追撃役を譲ったレイシンは、周囲を広くカバーする役割を引き受けている。ユフィリアは再使用規制の解けた反応起動回復呪文を掛けなおしていた。

第二波もなんとか防いだ。状況は芳しくなく、石丸は自分の体を敢えて噛み付かせることで、親子への被害を阻止していた。

密度の濃い詰め将棋のような戦いを行っている。それぞれが独自に考え、且つ、一つの生き物のように動いている姿をシュウトは幻視する。これまで過ごして来た時間が積み重ねたものが、答えとして、形としてここに現れていることを知った。

(なんだ、ちゃんとやれているじゃないか……！)

そう再認識した。規模こそ小さいが、内容的に大手の戦闘ギルドにも決して引けをとらない『本格的な戦闘ギルド』として、いつの間にか成立している。今こそ自分の、自分達のチームを誇らしく思った。ダイアウルフなぞに苦戦しながら、埃まみれの傷だらけであっても、それは変わらない。

石丸が炎の壁を作り出す。シュウトにもその意図が分かる。包囲の円を歪ませるためだ。ジンは微妙に自陣の位置を動かしながら、潮目の変化を見逃さないようにしていた。シュウトは包囲の歪みからタイムラグを引き出すべく、投擲用のナイフを準備しておく。

その時、意外なところから潮目の変化が起こった。

炎の壁を嫌ったダイアウルフが空けたスペースに向かって、少女が闇雲に走り出してしまったのだ。

ゾツと凍り付く時間。一瞬、動きが固まってしまふ仲間達。うろたえて足が纏れそうになる母親。ジンが何事かを叫び、いち早く弾けるようにユフィリアが飛び出した。なぜか直後に倍する声で怒鳴るジン。

その時シュウトが見たのは、ユフィリアに吸い込まれるように命中する『一本の矢』だった。

「狙撃だ！ 止めるッッ！！」

そうジンは怒鳴ったが、実際には何処から矢が飛んでくるのかも分からなかったのだろう。ユフィリアは咄嗟に女の子を庇うように抱きしめた。次の瞬間、飛来した矢が音もなく彼女の背中に突き刺さる。

「ッ……」

金属鎧を貫通した矢のダメージに耐えて声を殺していたが、次の瞬間……

「きゃグッ！？」

驚きに背を反らせて、声を上げたのがシュウトにも分かってしまった。背に刺さっていた矢は炭化して消え去っていた。

（あれは、遅延燃焼型……！）

敵は着弾後に追撃でダメージを与えるタイプの矢を選択していた。そのチョイスの意図が、同じ弓兵であるシュウトには分かってしまった。

着弾時に既に燃焼しているタイプの矢であれば突破力が向上し、総ダメージも高くなる。一方で着弾後に追撃するタイプの場合、総ダメージは小さくなるが鎧などの防御を抜けているため、追撃部分

は威力を減じられることなく全て通り易い。また二段攻撃になるため、相手の動きを一瞬だけ長く封じるような使い方もできる。

しかし、今回の場合はもつとサディスティックな狙いがあった。

冒険者 は痛覚がかなり緩和されている。痛みに強いのだ。ところが、ワントンポ遅れて燃焼効果に晒されると、痛覚ではなく温覚が刺激され、痛みが緩和されるまでに一瞬だが熱さを感じてしまう。それは 冒険者 に対してより苦痛を与えたい時に適したやり口だった。

ぞぐり

シュウトは自らの内に蠢くものを感じていた。

(本当に、MPKだったなんて……!)

ニキータは矢傷を負ったユフィリアの元に駆け寄りたかったのだが、動けずにいた。母親を守らなければならない。しかし、子供も守らなければならない。次にどうすればいいのかわからず、狼狽しそうになる。

「レイ、突破だ！ みんな走れ!!」

ジンが叫ぶが、その意図が掴めない。レイシンと石丸が動き始めたので自分も雰囲気走り始める。そのまま勢いが付き、ユフィリ

アの元に駆け寄るようにしながら、自分の行動が正しいのか確認するために振り向いた。すると、母親を横抱き（別名：お姫様抱っこ）にしたレイシンが走り出すところだった。その姿はニキータが見ても、とても『絵になる』ものだった。レイシンという人は普段が大人数しくても、ひとたび動けばサマになってしまうタイプなのだった。

「ニナさん、子供を！ そのまま距離を稼ぐっス！」
「了解！」

石丸の補足説明でやるべきことを把握する。脇ではユフィリアに襲い掛かるうとしていたダイアウルフをシュウトが切り捨てていた。その隙に子供を抱きかかえながら、声を掛ける。

「ユフィ、大丈夫？ 走れる？」
「うん、ありがと」

同時に 永続式の援護歌 を移動強化の効果がある 子鹿のマーチ に切り替える。一気に囲みを突破して、更に距離を稼いでゆく。後方ではジン達が敵をおさえに掛かっていた。

焦りにも似た『動き回りたい』という気持ちだった。その時、ユフィリアに素早く襲い掛かるダイアウルフが現れたため、シュウトは切り札として取っておいたアサシネイトを解き放った。苛立ちを叩き付けるべく使ったものだったが、アサシネイト 絶命の一閃 はあくまでも鋭く、力を叩き付けるよりも早く敵を切り裂いていた。それがシュウトを物足りない気持ちにさせる。

敵を嬲り殺しにしたい。

敵のサディステックな攻撃によって、シュウトが本来持っていたサド性が刺激されていた。そのまま振り返ったところで目に入ったジンの姿に、軽い失望を覚える。剣と盾をダラりと下げ、肩を落としたように力なく立ち尽くしていた。

（あの人は何をやってんだ？ こんな時に、まさか落ち込んでるっ
てのか！？）

それはほんの1秒ほどに過ぎなかったのだろう。よく考えれば異常な光景だった。激しい戦闘の最中、武器を下げて何もしないでいられるのだろうか。ジンの前には3体のダイアウルフがいるのに………？

もしもダイアウルフ達に野生の本能があったならば、この時ジンを襲わなかったかもしれない。しかし、ゲーム的な存在でもある彼らに本物の本能があるのかどうかは疑わしい。襲いかかるのを躊躇していたが、何が切っ掛けになったか、まるでパニックになった乗客が出口に殺到するかの様に、ジンに向かって同時に襲い掛かって行った。

『 青 』

輝く剣が振り抜かれ、端の一体が動かなくなる。同時に中央の敵を盾で押さえ付けていた。ダイアウルフは噛み付こうとして首をこじ入れようとするが、巧みに封じてしまう。そのまま右手は二度、三度、四度と剣を突き入れている。敵は逃げようにも背後にもう一

体のダイアウルフが居る為に逃げられない。何かが奇妙なバランスで成立していた。がんばれば逃げ出せそうなのに、ダイアウルフはそのままロクに抵抗できずに殺されてしまう。残る一体が襲い掛かろうとするのだが、一瞬早く盾で上から押さえつけられ、爪も出せずにいる。どうも膂力の問題ではないらしい。

もっと思っていたかったが、自分の方が忙しく、諦めなければならなかった。ジンは一体目だけは瞬間的に本気で攻撃したのだろう。続く二体目からは謎の技術を駆使しつつも、レベル相当の力で戦っているらしい。酷いダイコン役者だと苦笑する。
……と、シュウトの滅んでいた感覚はスツキリと消えてしまっていた。

その後は撤退戦のように後退しながら戦って行った。「両翼を展開させるな！」と指示を飛ばしつつ、ジンも敵を引き付けながら下がって行く。

こうしてシュウト達は敵に追いつかれ、襲われながらも、少しずつ数を減らし続けた。また、ダイアウルフが遮蔽になっているのか、敵の弓矢による追撃はこないままだった。

しばらくの後、残った2〜3頭も逃げ去っていった。……こうして、無事に勝利を収めることが出来たのであった。

「……………よし、追撃もなさそうだ。どうやら終わったな」

ジンが確認を終え、全員がホッと一息つく。ジンはそのまま 大地人 親子に話しかけていた。

「怪我はありませんか？ 怖い思いをなさったでしょう。申し訳ありませんでした。」

「お陰で助かりました。……あの、途中で娘がご迷惑を」
「いえ、こちらの不注意もありましたので、気になさらないでください。ともかく、ご無事でなによりです。」

頭を軽く下げて一礼してから、こんどはユフィリアの前に立った。複雑そうな顔をしている。

ユフィリアは心配させないためか、普段よりも明るい笑顔を作っていたのだが、ジンをみて、その顔が曇った。

「ユフィリア……」

「うっ……」

膝から崩れたのを、ジンが慌てて受け止める。

「なんだよ、大丈夫か？」

「平気……でも、ちょっと、だけ、」

「？」

苦しそうにしているので、ジンは支えながらユフィリアを地面に下ろすようにする。

「どうした、ステータス異常でも残ってんのか？」

「うっん、大丈夫……あの、ね？」

息も絶え絶えといった様子で言葉を懸命に紡いでゆく。

「ああ、なんだ？」

「わたし、ジンさん、ち、みんなと、いつ、しょ、に、いらね、て……」

「ユフィリア？」

「すっごく、ウウツ、うれし、かったよ？」

「おい、ユフィ？ う、嘘だろ？」

「あ、りが……………かくり。」

「ユ……………ユフィリアー……………！」

「って、死ぬわけないだろ……………」

「……………テヘツ」

「お前、しょうがねえヤツだなあ」

「えー？ がんばったんだから、もうちょっと褒めようよ？」

「よーしよーしゃしゃしゃしゃ」

「馬じゃない！」

「どーうどーう」

「もー！」

い、
ぷっくりとほっぺを膨らませてむくれたユフィリアにちよつと笑

「……………良くがんばったな。 お陰で、あの子が死なずに済んだ。 お
手柄だな。」

頭をポンポンと触りながら、ちゃんと褒めていた。彼女は褒めら
れて、くすぐったそうに喜んでいた。

シュウトは内心イライラしていた。 出発を促がすジンの横顔もや

はり険しい。身内の女の子を痛めつけられては、どうしたって平気でいられるわけがなかった。ユフィリアが小芝居までして雰囲気をもくしようとしても、ほとんど逆効果ではないかと思う。彼女に気を使わせてしまったことまで含めて、重かった。

その時、

「あれって、私の乗ってた子だ！」

召喚の笛で改めて呼びだした馬たちが、戦闘前と全く変わっていなかったことに驚き、無事を喜んだ。これのお陰で、ほんの少しだが気分が楽になった気がした。

馬を休ませる目的で休憩をとりながら軽い食事をとることにする。レイシンの料理が出来上がるまでの間に自然と会話になる。

「しかし、よくMPKって分かったな？」

「本当ですよね。……石丸さん、疑ってしまってすみませんでした」「いいんす、気にしてないっす。それに仕掛けられてから気付いても遅すぎるっす」

石丸は頬を弛ませていた。どこか自分の意見を言えただけで十分に満足という様子だった。

「でさ、どこで分かった？ 酒場のトコで俺がぶつかりそうになっ

た男が怪しいとかぐらいじゃなかったか？」

「あの男は無所属だったんす。マイハマでクエストをやっているのにギルドに所属していないのはちよつと怪しいっすね」

「まあ、俺も無所属だけどなー（笑）」

「それから今回のクエストのキャンセルのされ方が不自然っす。4、5日前に登録していたというのは、もしかすると自分達が昨日・一昨日と2日間休んだせいかもしれないっす」

「んー、ツクバまでの護衛を引き受けて、放置ってのは不自然か。まあ、そうか。」

「……でも、それだけじゃ決め手にはならないと思うんですが？」

「そうなんす。そのせいもあって後手に回ってしまったんす。相手の行動パターンを考えると、直接戦闘を挑んでくるのではなく、遠くから弓を射てくるような間接的な行動を好むことが言えるっす。となると、徐々に行動がエスカレートしていくことが予想できるっす」

「ちよつかいを出していく内に、段々と過激になっていくわけか。」

それでMPKね」

「なるべく自分の手を汚したくない、って感じですね……」

「それと、この辺りのクエストを失敗させてモンスターを暴走させられるというウワサを以前に聞いていたことがあったのも大きいっすね」

シユウトの感覚では、ここまで聞いてもまだ『高確率でMPK』だと判断するには根拠が足りなかった。相手の行動様式にまで踏み込んだの予測には舌を巻いても、見えているものの違いや、見ようとしている内容が自分とはズレて感じてしまう。参考にしたいが、自分の求めるスタイルとは合わない。

自分と考え方が『違う』ということはプラスにもマイナスにも働く。お互いがカバーできる範囲が広がればいいはずなので、石丸の

考え方や物事の捉え方が『自分よりも正しいかどうか』などは一概には言えないのかもしれない。

問題があるとすれば、最終的に意思決定をする際に、視点の違う意見を判断に組み込むべきかどうかが難しくなるという部分だろう。（この部分は後でジンさんに訊いてみよう……）と、心にメモをしておくと、石丸の手前、今ここで質問するわけにはいかない。

小休止での食事は主に保存食で済ませるのが通例であったが、厳しい戦闘の後でもあり、大地人親子にもリラックスしてもらおうとレイシンが料理をしていた。供されたのはトマトスープだった。これはカチカチに固まっているパンをひたし、ほぐしながら食べるためである。夏の昼下がりではあったが、野外はそこそこ風があるので温かいスープでもあまり気にならない。トマトの酸味が爽やかで食欲を引き出す。親子にもご満足いただけただけの様子で、女の子目をまあるくして一生懸命に食べていた。

「今回の戦いって、いつもよりずっと大変だったけど、あれはどうして？」

ユフィリアがジンの方に向かって質問する。

「ああ、いつもは囲まれないように動いてるからな……」

「今回はいわゆる『包囲殲滅』を受けていたわけっす。」

「へえー、あれが包囲殲滅なんだ？」

ジンの言葉の足りない部分を石丸が補う。シュウトとしても、包囲殲滅に関しては身を持って体験したものではなかった。

「完璧なやり方じゃないが、結構それに近い形で攻められてたな」

「そういう時はどうすればいいの？」

「いや、どうにもならないな。包囲殲滅するのは基本的に、降参が認められない限りは、食らっちまったら全滅だな」

「……ジンさんが居ても？」

「ああ、厳しい。たとえば数万の軍隊同士が戦って包囲に成功した場合、包囲された側はもちろん全滅するんだが、それよりも包囲する側の被害が100人ちよいだっただって記録が残ってるんだとさ。損耗率1%未満だな。彼我の損害でみたら300倍とかだ。……もともと、そういう風に一方的に勝つための方法論なんだよ」

「そこまで大差が付くと、流石に残虐非道な気がしますね」

「まあ、な。……しかし、勝つ側に立てば自分も仲間も死にくいから嬉しいってのもあるだろうしなあ」

「それは、確かに」

「やり方は包囲を縮めていく部分がポイントになっていて、巧く包囲を縮められれば、敵が何万人いようと内側は満員電車みたいにギーギー詰り詰りになるんだ。そうやって身動きが取れなくなった状態にすれば、もう抵抗できなくなるから、相手の人数が多くても一方的に勝てるわけだな」

「ふうん、サラリーマンは毎朝が包囲殲滅なんだね……」

シウトはユフィリアの呟きに思わず笑いそうになる。ジン達社会人経験者は苦笑いしていた。身に詰まされるものがあるのか、あまり笑えないようだ。

「逆に言えば、例え囲まれても包囲を縮めさせなければ抵抗することとは出来るんだ。今回の場合、例えばフルレイドだったら四方に壁を作れたハズだしな。」

「確かにフルレイドだったら、さっきの4倍の数に囲まれても、囲まれたままで勝てたでしょうね」

フルレイドの経験が豊富なシユウトがそう太鼓判を押した。

「囲まれないように対処するのが最重要っスが、囲まれてしまった場合はその囲みを突破するのがセオリーっスね。結果からすればさっきのジンさんの判断はセオリー通りってことになるっス」

「だけど、そんな簡単な話じゃないですよ。たぶん、ダイアウルフの数が減っていたから囲いを突破できたわけだし、突破した後には両翼を展開させないようにも出来たってだけで、何よりもあのタイミングが重要でしょう?」

「状況を利用しての瞬間的な判断っスよね。」

シユウトと石丸は 大地人 親子が近くにいるので言葉を濁し、ジンの方を見た。もともと親子の足が遅いから囲まれたわけで、同じ理由で包囲突破も出来ないハズだったのだ。女の子が走り出してしまった状況で、瞬間的にそれを利用して囲みも一緒に突破してしまったのだ。結果からすればセオリー通りでも、その時にその判断ができるかどうかというのは、そんなに簡単な話ではない。

「ん? ああ、アレはやるべきことを2つぐらい飛ばしてるからだ
よ」

「やるべきこと、ですか……?」

「本来は、まずユフィリアの心配をして、次に敵に対して怒って、それから怒りのパワーで状況を覆さないといけないんだよ」

「は、はあ……?」

シユウトとしては言ってることがメチャクチャな気がしてならない。関係ない話に思える。

「それでは突破するのに間に合わなくなるっス」

「まあ、そんなんだけど、実際問題としてこれをやらないのは致命的なミスに成りかねないっつーか、冷たい人になっちゃうんだよ。長期的に見ると失策なんだ。仲間からの信頼を失いかねないというかねー。心配したり、怒ったりは思考よりも早い反射的なものなんだ。そういうものを表現しないと納得されなかつたりするんだよ。……表現するかどうかはともかく、これが分かっていないとリーダーとしてはダメなんだ。覚えとけよ、シュウト？」

「え？……はい」

「ふうーん、そんなんだ？」

シュウトはまだ納得がいかなかったので生返事だった。当事者のユフィリアは他人事みたいに話を聞いていた。

「と、まあ、そういうわけだ。………ごめんな、ユフィリア」

「………ううん、心配してくれてありがとう」

2人はちょっとだけみつめ合って、それからぺかーっと笑い合っていた。

「……………」

話を聞いていて、ニキータは（もしかすると自分向けの話だったのかな？）と思っていた。ジンの判断が的確な程、非人間的に感じてしまい易い。石丸の言うように包囲の突破には間に合わなくなるのは分かるが、ジンの言うように心配する方が自然なのだ。確かにジンはあの瞬間に指示を出したことで、状況を立て直してみせた。しかしそれは、ユフィリアが攻撃されても全く動揺していなかった、という風に味方から判断されてしまい易いのだろう。

しかし、ジンがここで指摘したことで、逆にモヤモヤしたものが生まれてしまった気がする。

「思うんですけど、あの片言っばい指示出しは何かありませんか？」

「う、すみません。口ベタれして。」

ニキータはあまり深く考えず、ジンにチクリと嫌味を言うだけに留めておいた。

「それに、レイシンさんって何気に凄いですよね」

「え？ そう？」

「あの指示だけで次にすることがわかるものなんですか？」

「んー、なんとなく？ ほら、付き合いが長いから」

全て『付き合いが長い』ってことで誤魔化そうとしているように思える。普段は目立たないのに、いざという時にはちゃんと活躍しているのだ。意外に危ないのはこういうタイプの人なのかもしれない。

夏の高い空が腰を下ろし、夜目から灯りに変える前にツクバの街に辿りつくことが出来た。シュウト達は街の外で護衛を終えることにして挨拶した。母親から丁寧な礼を言われ、「貴方達と一緒にやなければ死んでいたかもしれません」とまで言われてくすぐったい気持ちになったが、自分達のトラブルに巻き込んでしまったのかもしれない、しかし証拠もないのでそうと告げるわけにもいかず、申し訳ない気持ちだった。追加の報酬を申し出てくれていたが、それは丁寧に断り、街に戻っていく姿を見送るに留めた。

小さな少女が手を振る姿をみて、シュウトは護り切れたことに安堵と達成感を感じていた。

「さ、帰ってゴハンにしよう!」

「アキバで何か買っていくか?」

「そうだね。今日は特別にお肉にしようかな」

帰還呪文でアキバに戻り、大きな肉の塊を買ってからシブヤへの帰路についた。

「問題はヤツラをどうシメるかだな」

「しかし、まだ証拠も何もないっス」

「客観的にみたら、戦闘中に矢が一本飛んで来ただけなんですよねえ」

イライラしている時にはお腹が一杯になるのがいい。そう言っただけなら分厚く切ったステーキばかりという。とてつもなく偏った食事を出した。バランスの悪い食事も、それはそれで楽しいもので、シュウトも張り切って3枚目までなんとか完食していた。ユフイリアはかなり無理をしつつ2枚半でギブアップし、4枚目も平らげていたジンがユフイリアの残した半分を食べてしまった。

思い切り肉を食べたせいか、ファイトが沸いてくる。その勢いで対策の議論が始まっていた。

「まずは敵の情報を把握するところからだな。なんだっけ、猿王だっけか?」

「丸王っス。ギルド名はたしか……」

「ブラックスワン 黒曜鳥 だよ。中堅ギルドだけど、大災害 後のメンバーは、

20人ぐらいだったかな」

「なんだ、詳しいなユフィリア？」

「一度だけ人数合わせで（傭兵として）呼ばれたことがあるから。途中で帰還しちやっただけだね。」

「そんな時は何かあったのか？」

「んつと、私が結構しつこく口説かれて、それで二ナが怒っちゃって」

「へへ、そうなんだー」

と言いつつ、ソファに座っていたジンは隣のユフィリアから少し遠ざかる。

「え、なに？どうしたの？」

……とユフィリアが距離を詰める。

「ナンデモナイヨ？」

「本当に？」

ジンが離れると、ユフィリアが追いかける。それを何度も繰り返していた。楽しそうなユフィリアは間違いなく分かちやっている。（バカツプルウゼエ、さっさとくっ付けばいいのに）とシュウトは心の中で祝福の呪いを唱えた。

ユフィリアに捕まったジンは観念しつつ、話を元に戻す。

「戦って倒してお終いなら楽でいいんだが、実際のところ、それってただの殺人なんだよなあ。この世界だと死なないからセーフって話ではあるが」

「なら、証拠を集めるなりして、悪事を暴いて 円卓会議 に通報するとかですか？」

「トラブルは当事者同士での解決が基本っすから、そこまでの介入はまだ先例がないかもっす」

「刑罰がないのかもしれないな。生命・身体刑が不可能だから、この先、自由刑とかが必要になるな」

「自由刑ってなんですか？」

「ああ、刑罰ってのは、自由・生命・身体・財産・名誉の五つがあつて、自由を奪うから自由刑。生命は死刑とか。身体は腕チョンパとか目をくり抜くやつ。財産は罰金とか財産の没収。名誉は市民権を剥奪して奴隷にしたり、焼きゴテで罪人の烙印を押ししたりする感じだな。」

「変なことに詳しいんですね……」

「雑学ってのは無駄な知識ばかりのコトなのだよ……」

「その中だと、財産刑や名誉刑の方が有効じゃありませんか？」

ニキータが意見する。ジンが頷いてコメントする。

「問題はそれをどうやって実現するか、だな。理想的には改心させられればそれが一番いい。次点は行動を自粛する程度に反省させられればいいんだが、そういうのがハナっから無理そうだから問題なんだろうな。アキバから居なくなってくるといいんだがなあ。アキバ所払いの刑的なの？」

「そしたらシブヤに来ちゃったりして？」

ここまで黙って話を聞いていた葵が混ぜっ返した。

「仕返しがしたいのは分かるけど、ちょっと冷静になって、しばらく相手にしないってのはどうかな？」

「おいおい、一番の過激派が珍しくマトモなことを言ってるやがる。」

「こりゃ大地震か雷神の槍が降るぞ！」

「そうやって良識派を貶めようとするから、悪しき歴史が繰り返さ

れることになるのよ！」

「いいから先を続けろよ」

「そもそも宇宙移民の歴史ってのはね……」

「なんでそっち行くんだよ」

「悲しみを怒りに変えて、立てよ！国民！」

「……………」

「優良種である我らこそ人類を救い得るのだ。ジーク・ジモガー！」

結局、葵の暴走は実力行使で止めることになった。歴史は繰り返す。何度でも。

「もう！ あとちょっとなんだから気分良く全部言わせなさいよ、つたく。」

「で、何が言いたいんだよ」

「えっと、ミナミに行つて来て欲しいなーって」

「はあ？ 何でいまさらミナミなんだよ？」

「いやあ、前々から企画してた話が纏まりつつあつてねえ」

「……………つーか、アイツの知り合いは居なかったんだろ？」

「そうなんだけどお、それとは別件でえ」

「ね、アイツって、誰？」

ユフィリアが（珍しく）質問を挟む。

「うん、昔の仲間。ラインっていつて サムライ 武士 やつてただけど……」

答えるジンは、懐かしそうに、楽しそうに笑った。

「やっぱりその人も、凄く上手なんですか？」

ジンが思い出しニヤニヤしているので、気になったシュウトも質問を重ねる。

「いや、ハハハ、そんなことないよ。大ダメージ狙いで溜め切りしても外しまくりだったし。……でも、アイツとゲームやってるのは楽しかったんだよ。すっごくね。」

見れば、葵もレイシンもニコニコと笑っていた。

「ヒドかったもん。ジンぷーが大わらわでフォローしたりで、それもまた見て面白かったなあ！」

葵も楽しそうだ。

「勝ち負けだけがゲームじゃないっていうのを地で行ってたよね」
レイシンまでラインの話をするのが嬉しい様子だった。

「その人は、その……」

「ああ、悪い悪い。ログインしてないんだ。関西に転勤になって、ゲームできる環境じゃなくなっちゃったんだ。その後、向こうで結婚しやがってさ。そのまんま子供生まれたりで忙しくなっちゃって」

ニキータの聴きにくそうな質問に答えて、ジンは追加で説明を加える。昔の仲間の話でジン達が楽しげにしているのは、ユフィリアもシュウトも少しばかり面白くない。その気分を察してジンは謝罪を入れていた。

「で、なんだっけ、どうしてミナミなんだ？」

「今、ミナミは凄いいことになってね。プラントなんか が統一しちゃったんだよ」

「は？ プラント？」

「ごめん、あたしには発音できなかった。綴りは聞いているんだけど」

そう言っつて葵が取り出した紙には『 Plant hwyade
n 』という文字が書かれていた。

「は、ひゃ？わ？ ヤーデン？ 誰か読めるか？」

ジンが確認するが、カトレヤ勢は全滅だった。誰も読めないし、意味も分からない。

「Plantだと、植物とか工場とかですよね？」

「でも、これっつて英語なのかな？」

「とりあえずアメリカンイングリッシュじゃないのかもしれないわね」

「西洋はラテン語をベースにした言語圏があるっすから、たまたま綴りが似ているだけで別の言葉かもしれないっす」

「その植物工場だかなんかは、認知操作的なネーミングなのかもな。良く分からない名前っつて、認識しにくいんだよ。イメージを持ちにくいとかがあるから、統治機構としてはあまり意識されたくないのかも」

「言語学的な話っすか？」

「そんな感じかなあ。例えばコンビニのスイーツとかって移り変わりが激しいけど、あれっつてバリエーションの範疇になってしまっているから、たまに美味しいのがあっても記憶にも残りにくいんだよ。ネーミングとかで差別化を図っつて、概念的に『別のモノ』にならないうと、世の中に残らないっつていうかね」

「甘いものが好きなんです……」

「にゃあ、名前なんてどうでもいいんだけどさー」
「だから、どうでも良くないっつー話をしたんだけどな、今」
「ジンぷーうるさい。ともかく、ミナミに行つてきて欲しいんだよ。私達の助けを求めている人がいるの！」
「えー？ めんどくせーじゃん」
「ミナミかあ、遠いですよね」
「ユフィは行つてみたい？ ミナミ」
「んー、ジンさんが行きたくないんだつたら、行かなくてもいいかな」
「おろろ、こりは甲斐甲斐しく尽くすタイプってこと！？ ひゅーひゅー！」
「べ、べつに行きたいわけじゃないんだからねっ！」
「思いのほか動揺してるっすね」
「まあ、行く・行かないは内容によるんじゃないの？」
「そりゃそうだ」

「ミナミの街に住む全ての 冒険者 は P l a n t h w y a d e n に所属するように」

P l a n t h w y a d e n 。

その告知がなされた時、大勢は既に決していた。その組織は 衛兵 を従え、大神殿を購入し、幾つもの大ギルドが参加を表明していた。『単一ギルドによる、ギルド間差別のない街』というお題目は確かに正しく、美しいものだった。事実、大ギルドが中小ギルドに行なう差別はなくなった。それは当然で、もはや単一ギルドになるのだから、大ギルドもなければ中小ギルドもなくなっていた。

機能的で厳しく統制された組織とは、上下という立場を明確にする。 P l a n t h w y a d e n として立場が上の人間が、下の人間に指示を出すという差別ではない形で差別が行われるようになっただけだった。大まかに言ってしまうえば、大ギルドが幹部に、その他の中小ギルドは雑用として働くことになったのだ。……しかし嫌だからと言って逆らうことも出来ない。大神殿を購入されているのだ。どんな 冒険者 であっても、流石に 衛兵 達には敵わない。戦えば確実な死が与えられる。その時、大神殿の立ち入りを禁じられてしまったらどうなるのか？ 復活することが出来なくなるはずだった。殺されたままになってしまっただろう。そんな脅しをしたままで、彼らは恐怖によってミナミを統治しているのだ。

「完全な圧政よ！」

だんっ！と机を叩き付け、葵が吠えた。

「本当にそうなのか？　なんか見てきた様なこと言ってるけど……」
ジンが冷めたツツコミをするが、完璧にスルーされる。

「それで、僕らは何をするって話なんですか？」
仕方がないのでシユウトが先を促がした。

「人手が足りないの。ミナミから脱出してナカスへ移動するための
護衛って話ね」

興奮覚めやらぬ葵は鼻息もあらく、椅子に身を投げ出すように座
ると腕組みして頷いた。

「護衛だったって、みんな　冒険者　だろ？　そんな俺らが出張る必
要があるのか？……って、ミナミどころかナカスまで行けって話し
やねーか」

「西日本横断旅行っスね」

「後々のことまで考えれば、アキバの　円卓会議　の息が掛かって
るギルドが手伝いに行ったりしたら、モメた時に政治的な禍根を残
すかもしれないでしょ？　無名で無関係なギルドで、且つ、小回り
が利くつてのが絶対条件なの」

「うさんくせえなあ………　だいたい俺達は今、バカども　黒曜鳥　とモメ
てるんだぞ？　シブヤにお前を残して、そんな長期の外出なんぞし
てられるワケねえだろうが。　今後はちよつとした買い物にも行か
せられないだろうに」

「……なに、そんなこと？　それならもうアキバの知り合いに匿っ

てもらうことで話が付いてるから」

「相談する前から決定事項みたいになつてんのかよ……」
「段取りが早いっしょ？」

そういつて、得意げに無い胸を逸らした。

「それに、本当は分かつてるんでしょ？ だって、そっちの話は戦つて倒してもケリが付く話じゃないじゃない。それとも反省するまで何十回も殺して回つてみる？ 相手の行動がエスカレートしてない今の内にちよつといなしちゃうのは絶対アリだよ。」

「だが、それじゃあ……」

ジンが発する怒気のようなものが場を圧しつつある。これを感じるのはシュウトだけではないだろう。

(そう、治まら^{おさ}ない。簡単に治めたらダメなんだ)

仲間のために『ちゃんと怒れない人』は好ましくない。それでは気持ちが萎えてしまう。……と、ここでさつきジンが話していた「ちゃんと心配できないリーダーは仲間からの信頼を失う」の件と頭の中で接続した。ボンヤリとしていたイメージにピントが合つて理解が生まれる。

同時にその難しさを思わずにはいられない。まず、ちゃんと怒れなければならない。その上で、感情に流されずに的確な判断をしなければ怒ること自体が単なるマイナスにしかない。(……自分にもできるだろうか?) シュウトはそう自問する。

「ねえ、もしかして私のこと？」

ユフィリアがジンの目を覗き込むようにした。

「もしそうなら、気にしなくていいよ？　だって戦闘中に怪我するのなんてよくあることでしょ？……こんなことで特別扱いされるのは、ちょっと寂しい、かも」

「こう言われてしまうと、シュウトは黙らざるをえない。　しかし、

「ふう〜ん、自意識過剰でいらつしやいますね？　俺がお前のために怒ってるんです？　まっさつか」
ジンは軽く鼻で笑ってみせる。

「あのなあ、お前のためじゃないんだよ。これは俺が怒ってるの。いいかい、お嬢ちゃん。たとえお前が切っ掛けだったとしても、そんなのを言い訳になんかしないんだよ。」

「そっか、ありがと」

「お前、全然分かってないな？」

「そうなの？」

「そうだよ」

「じゃあ、もうちょっと私のためにも怒ってくれろ？」

「だが断る」

「えー？」

一転して微妙な雰囲気になってしまふやり取りになんとも疲れてきた。

「じゃあ、おなかも一杯になつたし、今日はもう解散にしようか」とレイシンがまともに掛かる。その大雑把、且つ、短絡的な発言に葵が慌てた。

「ちょっとちょっと！ ミナミ行きの話は決定事項なんだから！ 有耶無耶にしちゃダメ！」

「ああ、まだその話してたんだ？」

ジンがさり気なく受け流しの体勢に入る。熟達したコンビネーションだった。

「明日、アキバに連れてって。その後でミナミに向けて出発だかねえ！」

「そんなっ、明日出発って、準備も何もまだなんですよ？」

これに一番慌てたのはシュウトだった。旅の計画もまだなのに、出発だけ決定されても困ってしまう。単に食料の問題だけ取り上げてみても、途中で補給できるかどうかに大きく左右されてしまう。事前にルートをキツチリと決めておかなければならない。更にナカスマで行くのであれば不測の事態に備えるきちんとした準備が欲しい。

「よし、分かった。じゃあ、とりあえず寝るか」

「ダメ。これは カトレヤ のギルマス命令なんだかね」

「そういえば、葵さんがギルマスでしたっけ」

「シュウ君！？ キミまでそんなことを……。くっそー、ジンプーに染まりおったな？」

「じゃあシュウト、後は任せた」

「ジンさん！？ ちょっと、そんないい加減なのは困るんですけど！」

「あれだ、頑張れば2〜3日は出発を引き伸ばせるから。んじゃ、アトヨロ」

「そんな……」

「でーじょぶだって、葵はアホだけどバカじゃねーよ。その程度の日にちは見積もりに入れてるって。つか、むしろ行かなくても平気、

みたいなの？」

「アンタ、本気でやりにくいヤツよね？」

「俺も、お前が相手だとやりにくいぞ？」

睨む葵、笑って受け流すジン。緊張感があるのか無いのか。

「……仕方ない。今回ばかりは私も引くわけにはいかないの。ここで切り札を使わせて貰うわ」

「切り札？ なにそれ？」

「ドロー！トランプカード発動！『出発するまで、お風呂禁止』ッ
！！」

「何っ！？」

みんなでニキータの顔を見る。特に顔色が変化していたりはしなかったが、それがポーカーフェイスかどうかの判断は付かなかった。

「既にお風呂場ゾーンへの侵入はロックしてあるわ。フハハ、これぞ権力！」

「何が権力だ。クソッ、きつたねーぞ、悪魔かお前は！？」

「何？ 何が？ たかがお風呂じゃない。何か文句でもあるのかしらっ？」

まさかそんな手があったのか、とシユウトは半ば感嘆の心境だった。ピンポイントでパーティの弱点を突き、最小の労力で最大の効果を上げている。ぐうの音も出ない。

「あの、別にお風呂くらい……」

おずおず、とニキータが申し出るのだが、どう聞いても無理を押ししているように（脳内補正されて）聞こえる。

「夏場だもんね。一ヶ月ぐらいなら、お風呂なしにしたって、水浴びだけでも行けるよね」

「おい、そんな具体的に実行可能っぽいプランを提示するなっ！」

「え……、あの……」

「でもホラ、アキバにも入浴施設が出来たらしいじゃない？ お風呂に入りたければアキバまで行けばいいわけだし、9月まで我慢しても別に平気なのかな？かな？」

「地味に一月半に延長させてるっスね」

「フザケんな、風呂上りに1時間以上も歩いて帰って来いつてか？」

「二ナ、大丈夫？」

「ちよつとだけ眩暈めまいが……」

「いやあ、今日も暑かったよねえ。戦闘も激しかったみたいだし、汗かいたりして大変だよねえ。でも、全部ジンプーが悪いんだからね？」

「てんめえ〜……」

「ジンさん、これはもう……」

「ああ。みんな、すまない。………今から、お風呂にしよつ。」

「いいいYesー！」

こうして僕らのミナミ行きは決定した。

「じゃねージンプーと石丸くんにヨロシクー！」

「送りがてら、向こうに挨拶もしてくるから」

葵とレイシンは手を繋いで歩いて行った。普段の葵はジンとばかりジャレあっているのだが、こういう所を見るとやはり夫婦なのだということが思い出される。

(お兄さんにしがみ付く小学生の図だけど……………)

あの後、「どうしよ？何を着ていこう？」と久方ぶりのお出かけを前に葵は散々喚き散らしていた。翌朝からシュウト達は葵をアキバまで護衛し、ついでに旅の準備をすることになった。保存の利くものを中心に1週間程度の準備とし、そこから先は現地調達を基本にすると決まった。

ジンが石丸とシブヤに残ると言い出したため、2人を除いた4人に葵を加えて出発する。別れ際のジンはアツサリしたもので、「おう、じゃな？」で終わりだ。そのため葵は「見送りにも来ないとは、どういう見か！」と散々ブーたれていたのだが、15分もするとすっかり忘れ去り、気分よく異世界を楽しんでいた。

しかし、葵が現在のレベル(23)を維持したいというので、経験点の入ってしまう18レベル以上の敵と戦わないようにするのが予想を超えて大変だった。上手く走れない葵を抱えて走って逃げたり、シュウトが単独で先行して誘き寄せたりするのだが、ミニマップが使えないとこれらの作業がどうしてもシビアになる。全員で周囲を警戒し、中でもユフィリアが何度かいち早く敵に気が付いたため、シュウト以外のメンバーはなんとか戦闘せずに切り抜けることが出来たのだった。

買出しで歩いている時、クラツシュ・シャーベットを手にしたプレイヤーとすれ違った。それが切っ掛けでユミカのことを思い出す。昨晚、ユミカから念話が掛かって来たとき、急にミナミへ行く事になったのは話しておいた。少しだけ出発前にアキバで逢えないかと期待もしたのだが、生憎と戦闘訓練で出かけてしまっていると言ふ。しばらく旅先の出来事を聞いたりしながら、シュウトはこの清い交際に満足感を得ていた。そのためか、アキバの街でユミカの影を探してしまっていた。時折、目につく神官服や背の低い冒険者が彼女ではないかと目で追ってしまう。

しばらくして合流したレイシンと食材の調達に向かう。6人×1週間分の用意となると、軽く冷蔵庫1つ分は買い込む必要が出て来る。青く熟れ切っていないトマトなどを加えながら、レイシンは次々と品物を選んでいく。ニキータはメモをとりながら、その後を付いて回っていた。

ギルドの金回りについては、いつの間にかニキータに一任されている。シュウトもこのところは彼女に相談するぐらいで済ませてしまっている。現状がどうなっているのか把握できていない。先日購入した 精霊の琴弓 の出費は大きかったと愚痴を零していたのだが、隠れて弦を弾いて幸せそうにしているのを目撃してしまうと、やはり高い方を買って正解だったように思う。

「ねえシュウト、これってもしかしてソースなのかな？」

「もしかしなくてもソースじゃないか？」

レイシンとニキータが廃墟ビルのフロア奥に目当ての品を探しに入ってしまった。シュウトはユフィリアの側で店先の商品を見るともなく立っていた。ユフィリアはこうしたタイミングで時々『不思議

少女』になることがあって、目を離すと何処かにふらりと居なくなつてしまいそうな危うさがある。そのため目を離すことができない。その折、彼女は店先の商品の一角に黒に近い茶色の液体の入ったビンを発見していた。

「コロツケ……」

「アジフライ……」

「お好み焼き……」

「とんかつ……」

「……そこはむしろキャベツの千切りじゃないか？」

意外と充実してしまった異世界での食生活に、2人ともかなり毒されてしまっていた。食欲を喚起する魅惑の調味料を発見し、何故か食べ物の名前を交互に口にする。その姿は傍からみたらバカのそれではない。

「もしかしてシュウトは目玉焼きにソースかける派の人？」

「それはない。……カレーに少しかけたりすることならあるかな。そっちは？」

「一度チャレンジしてみたけど……欲しいよね。美味しければ、だけど」

「味見させてくれないかな？ いや、今のタイミングでは買わないぞ。ミナミまでもつてく気か？」

「うー、帰ってくるまで我慢かぁ。……ジンさんに念話したら何て言うかな？」

「止めてくれ、きつとダメな方向の答えが……あつ」
「何？」

一番会いたくない輩がそこに立っていた。ブラックスワン 黒曜鳥 のギルドマスター、丸王だ。全身を黒で纏めたスタイルはシュウトも同じだが、

2人はどこか奇妙な対比があった。血と獣脂を連想させる雑多な出で立ちに、エネルギーにキラついた風貌の丸王。一方で几帳面なほどにござっぱりとし、整った甘いマスクに無関心の冷たさを湛えるシュウト。

「……………」

「丸っち、何か用？」

「随分と、楽しそうじゃないか」

「そうだよ。私、言わなかった？ 楽しくやってるって」

暗に『攻撃をしかけているのは俺達だぞ』と言って来ているのだろうが、ユフィリアは知ってか知らずかトボけた受け答えをしただけだった。意外なことに、彼女にヤツを恐れている様子はない。

「お前ら、山のように買い込んでるが、夜逃げでもするのか？ それとも、どこかに引き籠もるつもりか？ クハハハ」

（見られていたのか…………）

警戒していたつもりだったが、見られていることに気付けなかった。

「私達、仕事でミナミに行くんだよ。ううん、もしかしたらナカスマで行くことになるかも？」

「は？ バカ言え。タウンポータルが使えないのにどうやって行くんだ？ くだらないね、そこいらにコソコソ隠れるのが関の山だろ」

あっさりと行き先を喋ってしまったユフィリアに啞然としつつも、信じられない様子の丸王の言い分の方が一般的に見て正しい解釈だと思つ。

「違うよ。……本気になって行こうと思えば、たとえ歩いてだって行けるんだよ」

彼女が静かに丸王を圧倒したように見えた。

ゲームであれば、時間をかけて歩いて行かせることが出来るかもしれないが、現実世界で東京 大阪間を歩いて行こうとは中々考えられない。新幹線や飛行機を利用するのが当然の選択になるし、長時間の運転が苦痛でなければ車で行くのが精々いい所だろう。

今ではハーフガイアで距離が縮まったことも含め、冒険者には体力もある。多少モンスターが障害になろうと、ミナミまでの移動を馬や徒歩で行うのは決して無理なことではないだろう。しかし、だからと言って行こうとは思わないし、思えない。それは意思の問題であり、その中でも『本気の度合い』の話になってくるのかもしれない。

話は終わったとばかりにそっぽを向いてしまうユフィリア。この状況にどうしようもなく違和感を覚える。

「今日はあの戦士は一緒じゃないのか？」

「……………なあに？ まだ何か用があるの？」

先日、ニキータに絡んでいた時とはまるつきり様子が違っている。

(これでは、まるで……………)

まるで、女の子に相手にして貰えない男の子が、意地悪をしているみたいだった。いや、実際にもそういう話なのかもしれない。瞬間的に被害者と加害者の関係が転倒するような錯覚を覚えてしまう。

「おまたせ」

どこかのんびりとした響きを持つレイシンの声に振り向き、咄嗟に「しまった」と思う。このままではニキータが丸王と鉢合わせしてしまう。

と、振り向けば丸王の姿はそこに無かった。

分が悪くなる前に引いた。いや、最初から分なんて無かった。

街中で姿を見掛け、追跡しながら様子を窺っていたのだが、どうしようもなく近付いて話かけてしまった。

話し掛けずには居られなかったのだ。

しかし、あの女の前に立つたら言葉が出てこないではないか。こうして距離を取って始めて冷静さが戻って来ている。何か得体の知れない力があるのかもしれない。そう思わずにはいられなかった。

(前からああだったのか……?)

“半妖精”は仲間内でもかなり人気がある。ノリでオモチャにしてしまえばいいと思っていたが、見込みが甘かったかもしれない。

“半妖精”とはよく言ったものだ。半分は妖精かもしれないが、もう半分はそんな生易しいものではなさそうだ。仲間を引き込んだとしても内側からメチャクチャにされるだけだろう。奪い合いがそのまま殺し合いになるのが目に浮かんだ。

しかし、一度始めてしまえば戦利品を得るまでは何があっても止まることなどは出来ない。群れを束ねるものは強くなければならぬのだ。弱さを見せれば下の人間は妙な考えを起こす。愚鈍な人間は何かにつけて蛮勇を奮いたがる。あの生っちょろい騎士気取りの小僧のように、だ。

(やはり、ニキータの方に狙いを絞るか……)

少し内部で動かなければならないが、ミナミへ行くというのが本当ならば時間はあるだろう。奴らが出かけた後で、知らないフリでもして、行き先をつかめなかった手下を適当に叱り飛ばしておけば

……

「ただいま」 「戻りました」

シュウト達がカトレヤのギルドハウスに戻ると、半ば定位置のソファでジンはぐったりとしていて、手だけ挙げて挨拶の代わりとした。石丸の姿は見えない。

「ジンさんはどうして鎧を着てるの？」
歩み寄ったユフィリアが質問する。単に寝ていた訳ではなさそう
だ。

「それはね、モンスターから赤ユフィちゃんを守るためだよ」

「えー？ じゃあ、ジンさんはどうしてぐったりしているの？」

「ノリがいいな……というか、これのオチに持って行くのは色々な

意味でマズい」

「そうなの？」

「狼さんに食べられたいのかい？」（主に性的な意味で）

「でも猟師さんが助けてくれるんでしょ？」

「俺のハラをかつさばいて殺す気ですかい？……といっても、元になつたお話は食べられて終わるエンドだけだな」

「そんなにハラペコなら、お昼にしようか」

レイシンが合いの手を入れる。

「ああ。それなら赤ずきんちゃんを食べずに済みそうだ。」

「……というか、ハラペコでぐったりしてたんですか？」

「いんや、待ち草臥れてただけ」

「？」

ジンは「カツ丼が食べたい」とリクエストしていたが、ムリと素気無く却下されていた。レイシンは代わりに天プラにすると言っていた。こちらの世界では食用油は高価な代物なので、リッチな昼ご飯になりそうだった。ご飯を炊いたりするので1時間後に食べるという話になる。

「ジンさん」

「んー？」

「これからミナミに出発するんですよ？……なんか、ノンビリし過ぎじゃありませんか？」

「おいおい、バカ正直に馬で行くつもりか？」

「違うんですか？」

「そんなメンドクサイことしたくないだろ、常識で考えて」

「それは、そうですね………だったら、どうするんです？」

「だから今、石丸と2人でシブヤの 妖精の輪 の周期を調べてる」
「ほ、本気ですか？」

「当然だろ。『メンドクサイは正義。』これが全ての基本だな。大体、面倒臭がらないと『歩いてミナミまでいけばいいや』みたいな事になっちまうだろ？ 俺がそれをやったらタダの脳筋ゴリラじゃねーか」

「そうですね」

「なんだとう、テメー！ 俺が脳筋ゴリラだってか！？ ああん？」
「あ、いえ、そうじゃなくて……」

(しまった。考えずに相槌を打ってた……)

ユフィリアとの考え方の違いに気を取られて生返事をしてしまう。ジンが本気で怒っているわけではないのは流石に理解できるようになっているの、そこそこで受け流す。葵が居ないので代わりにされているだけだろう。色々と疑問はあるが、言葉になっていない。

「戻りましたっス」

「お疲れさん。収穫はあったかい？」

「いえ、人が減ってることもあって流石に駄目っスね」

「いいさ。上手い具合に考えりゃいい」

「いしくん、おかえり」

「ただいまっス。皆さんもお疲れ様っス」

「……………どうして」

ニキータがジンに向かって問いかける。

「どうして、みんなに内緒で調査していたんですか？」

「んー、直接的には葵に知られるとめんどつちいから、だな」

「誤解が無いように説明しておく、そんなに大きなリスクを背負ってるつもりは無いんだ。妖精の輪で怖いのは、海外のポータルタウンに飛んで『登録』されちまう時だけだ。シブヤの妖精の輪から飛んでいる場合、最悪の結果はかなり防ぎ易いと踏んだからなんだよ」

「どうして海外の都市に飛ばないって言えるんですか？」
これはシュウトからの問いだ。

「いや、そうじゃない。『海外の都市に飛ばない』のではなく、『飛んでも帰って来られる』と思っただよ。ポータルタウンから別のポータルタウンに移動してしまう場合、その逆も可能じゃないとおかしいだろ？」

「日本に直接は戻って来れないかもしれないが、別のポータルタウンに移動を何度か繰り返し返せば、そこから戻って来れる可能性は決して低くないと予想しての行動っス。」

「それと、俺達の目標はミナミまでの移動距離を半分以下にすることだ。これはそんなに無理な話じゃないだろう。東京 大阪間が600キロぐらいだったかな？ だから300キロ以下のポイントに飛べば無理せずそこで終了にする積もりだしな。」

「それじゃあ危険はないの？」

ユフィリアが念押し of 質問を加える。

「それは……………」

「不測の事態は常に存在するっス。特に最新の拡張パック ノウア

スフィアの開墾 はイレギュラー要素つスね」

「そうか、新規にゾーンが『開拓』されてるかもしれないんですね？」

「?.....どういうこと?」

シユウトの理解に追いついていないユフィリアのために、今度はジンが解説を加える。

「拡張パックによって冒険に適したゾーンが追加されるんだが、どうやって追加してると思う?」

「どうやるの?」

「どこかの 妖精の輪 の周期が変化して、そこまで行くルートも一緒に追加されるんだよ。そうじゃないと日本サーバーの何処が新規開拓ゾーンか分からなくなっちゃうから、いちいちヤマトを歩いてしらみ潰しにしなきゃならなくなるだろ?」

「そっか、クエストで誘導するにしても、移動手段が必要になるってことだね?」

「なるほど。.....よく使われるシブヤとかカンダ（書庫塔の林）の妖精の輪 だったら、タイムテーブルを把握している人間がいても不思議じゃない。けれど、拡張パックが追加されていたら、周期が変わっている可能性もある.....」

ニキータが話をまとめるように呟く。

「ポータルタウンだったシブヤなんかは特に危険だな。どういう変更が加えられているのか、正直、分からない。何も変わっていないかもしれないし、予想してない事態があるかもしれない。」

「.....だから、秘密で行動していたんですか?」

「実は安全にタイムテーブルを確認する方法もあるんす。」

「ちよつ、まつ！」

ジンが慌てるものの、石丸はそのまま説明を続けてしまう。

「サモナー 召喚術師 の使う特技、ソウル・ボゼツシヨン 幻獣憑依 を利用すれば、海外ポータルに飛んでも憑依を解除すればOKのはずっス」

「それは何？」

「召喚した幻獣と、術者の中身を入れ替える特技っス」

「あー、それってつまり……………」

「レベル、か……………」

「んー？ 全体的に難しくてワカンナイけど、よーするに、葵さんのために秘密にしてたってこと？ つまり、ジンさんは優しいって結論？」

「それは無い。絶対はない」

「そうは言っても、ただの照れ隠しでしょう？」

ユフィリアとニキータにそれぞれ持ち上げられ、何故かジンがブチ切れる。

「甘い。八チミツ餡子シロップ並に甘いつ！ お前らは付き合いが浅いからどうなるか予想が付かないんだ！ いいか、ソウル・ボゼツシヨン 幻獣憑依の話なんてしてみる、アイツはレベルを上げるとか言い始めるのに決まってる。それに自慢げにアイデアを言い触らすに違いない。」

「……………まあ、そうでしょうね」

「しかも、その後でアイツが大人しくしてる訳がない。『全国津々浦々・召喚幻獣ゲットの旅』をやるハメになっちまうだろうが！

『85レベルになったー！ 今度はフェニックスだかんねー！』とか言うのに決まってるだろー！！」

「あー……………」

「ありそう」「でも楽しそうっ！」

「お前ら、アキバまで一緒に行つたんなら分かるだろ？ あいつ、あの体形だからロクに走れないんだぞ？」

「あれは、かなり面倒でしたね……」

「だから、想像力が全く足りてないんだっての！ その先のルートはだいたい決まってるんだよ！ 俺がオンブ紐でアイツを背負って戦うハメになんたろうが！ 『強いんだから別にいいじゃん？』とか言うのに決まってる……」

「その時はヨロシク！」

顔だけをヒョイッと覗^{のぞ}かせて、料理中のレイシンがコメントを付け加えた。

「オンブ紐つて割と悪くないアイデアの気も……」 (ボソッ)

「子連れ戦士だあ」

「『ちやーん』っスか？」

「プッ……ククク」

「絶対に、イヤだあ……!!」

(うわあ、切実だなあ……)

「だけどオンブ紐でジンさんに召喚術機能が追加されるんなら、やる価値があるんじゃない？」

「というか、葵さんが歩けるようになればいいんじゃない？」

「外観再決定ポーシオン はこうなるとレア中のレアモノっスか

ら、今から手に入れるのはまず無理っス。古参のジンさん達が持っていないのなら、手に入れる見込みはゼロっスね」

「石丸さんは持ってないんですか？」

「かなり前に譲ってしまっただっス」

「そこ、話はまとまったか？」

「はい！質問っ！ギルドのみんなで仲良く冒険するのって楽しいと思うけど、それってダメ？」

「はあ……パーティが7人になると、バランスが崩れるからダメなの。例えば回復人数が一人分増えるだろ。それだけで行動限界が大きくなる。回復役なんて2人いても良いぐらいなのに」

「でもでも、普段からジンさんにはあんまり回復してないから……」

「そのメリットを打ち消しつつ、更に俺にオンブもすると？」

「うーん、ダメ？」

「ダメ。却下。やはり議論の余地は無いな」

「だけど、育ってしまえば、強力な召喚能力をゲットできるじゃないですか」

「ダメだ。仮に回復役をもう一人追加したとしても、俺がオンブするマイナスが消えないだろ。」

「じゃあ……全力の時だけ、降ろせばいいんじゃないですか？」

「……そこまで言うならお前が背負えばいいだろ、シュウト。なに、遠慮してくれるな」

「いや、それは……（笑）」

「耳元でぎゃんぎゃん騒いでも、もしかしてイケメンシュウトさんなら全く気にならないんじゃないか？ どうぞ？ どうぞどうぞ」

「えっと、あの……すみませんでした」

「なんだか葵さん、可哀想……」

「照れ隠しが悪口になっちゃうのは褒められないわね」

「そうか、だからさつき一緒に来なかったのか……」

「……実際のところ、単純に戦闘パーティーに加えてしまうのはマイナスが大きいつス。カトレヤの情報部門は葵さんが一人で支えてるようなものつス。小規模ギルドとしては破格の人材つスね。」

「そうなんだ？」

「例えば、自分達がここに居る理由だけ考えても、ほとんど葵さんの力つス。部下なしの独力で、しかもギルドハウスに引き籠もり、人に直接会いに行くでもなく、念話で情報交換するだけで可能なことなんて限られてるつス。その状態じゃフレンドリストすら増やせないハズなのに、現に今もミナミの仕事を取り付けているんスよ。過去の蓄積を含めて桁違いつスね」

「そこ、あんまり葵のことを褒めるなよ？ ホメられると嬉しくなつて頑張り過ぎるんだから」

「それで失敗するのがパターンだからね。……さ、ゴハン出来たよ。運ぶの手伝ってくれるかな？」

「はい！」

サクサクと歯ざわりのいい天ぷらを塩で頂く。白身魚の天ぷらも素晴らしいけれど、この日は野菜の天ぷらが実に美味しかった。野菜の天ぷらにこれまで興味が無かったのでシュウトは不思議な気分になる。冒険者の体になって味覚にも変化があったのかもしれない。

食事中、ジンが「かき揚げを食いたい！」と言った。皆が同意したが、醤油やみりんが無いため「タレが作れない」とレイシンに言われて却下されてしまった。

ちなみに以前に手に入れた魚醤は半分近く譲ってしまったものの、

レイシンが注意深く使っているため量としてはかなり残っていた。調味料としての目的で作られていないため、現代日本で入手できるものと比べてかなり完成度が低い。生臭さを感じさせないように用途を絞る必要がある、炒め物などでしたっかり火を通してからでなければ、レイシンは決して食卓に出そうとはしなかった。牛井にせよ、かき揚げにせよ、タレに醤油が必要になるものに、魚醤を使う気は全くないらしい。こと食に関しては頑固なほどに頑なであったが、実はそれがレイシンの作る食事のアベレージを高める秘訣になっている。

シユウト達はかなり本気で醤油や味噌が恋しくなる頃だった。今日の昼食は日本食風味になってしまったことで、美味しく満足したけれど、少し悲しい味になってしまった。

「ちよつとのんびりしすぎだな。1時間経つちまう前に確認に行かないとな」

「たぶんこの時間帯は残り10分ぐらいっス」

食後の余韻もほどほどに、そう言つとジン達は立ち上がった。

「私も行く!」

「いや、みんなで行きましょう」

「別にいいけど、時間ないぞ? 食事の後片付けはどうすんだ?」

「平気だよ。こうしてお皿を重ねて……………ポイっつと」

レイシンは自分のマジックバッグに食器類を放り込んでしまっていた。

「いや、確かにそれで大丈夫かもしれないが……………」

「凄い裏技ですね……………」

「汁物の食べ残しとかは無かったしね。それに、この方法でシチュ
ーとか良く保存してるし」

「そうか、こぼれないのか。まあ、いいのか……………でも、なんだ
かなあ」

「カルチャーショック受けてないで、さ、行こう」

「そうすっか」

19 ミナミへ行くには？（後書き）

0時越え、体力切れ、またもや直してない状態でございます。
；y||ー（。。。）・。ターン

妖精の輪 使用シーンまで辿りつかないとかの痛恨の……
しかも、ところどころ暴走しております（特にキャラ達が）

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！>（|ー|）<
謝っても許されようがないのが創作活動なのですな？うわーん。自
業自得。

川辺に現れたレッサー・ヒドラをあっという間に倒してのけたジンだったが、

「くっそー、ダメかあ。大したことないじゃん。……あ、もうダメだ。やる気失せた。」

……と言い、荷物から毛布を引っ張り出して広げると、ゴロンと地面に転がった。

「何イジケてんですか、もう……」

シュウト達は随分と人の少なくなったシブヤを走っていた。今でもこの街に残っているのは別荘として利用しようと考えている一部のプレイヤーや、不便を厭わないために偏屈だと思われる人達ばかりだ。多くのプレイヤーはシブヤに銀行施設などが無いことによつてアキバに移り住むことになっていた。

シュウトもまた、大災害後の世界をシブヤからスタートしたため、はじまりの地獄絵図を知っている。『ここは地獄だった』と知っていることに、今では不思議な優越を感じていた。

カトレヤ に来た最初の頃、頑なにシブヤに居続けようとして

いる葵やジン達を不思議に思っていたのだが、今ではシユウトにもあのギルドハウスに愛着を感じるようになり、疲れたのちに帰るべき『家』だと思うようになっていた。だが人々の減少が止まらず、日常生活に支障を来たすほどになりつつあり、流石のジン達もアキバへの転居を考え始めている。それもどこか先送りしているところがあったが、今回の葵のアキバ行きで少し何かが変わってしまふのかもしれない。

フエアーレンゾ

妖精の輪 と呼ばれる転移魔法陣のところへ辿り付く。ゲーム時代には常に誰かがここに居て、転移待ちの間に雑談をしていたものだった。雑談に夢中になって5分の転移時間を逃すプレイヤーも多かった。

それが今では利用者もいなくなり、周囲に人の気配はまるで無かった。

「俺が先に飛んで、まず転移先の安全を確認する。帰還してから石丸が交替で飛ぶって算段だな。確実にどちらかがシブヤに残っていないと手の打ちようがないだろ」

「日本サーバー内なら念話を通じるので、フレンドリストを確認すれば日本かどうか分かるっス」

ジンは 妖精の輪 の前に立つと、振り返った。

「じゃ、先に行って来るから」

「私も行くから」

「ユフィリア、いまの説明を聞いてなかったのか？」

「分かってるけど、行くよっ。こっぴつてドキドキ感の問題でしょっ？」

「ユフィが行くなら、私も」

「どうしてそうなるんだ？」

「もうみんなと一緒に行けばいいんじゃない？」

「一連托生っスね」

「まあ、いいか。どうなったとしても、どうにかなるだろ」

そう言っただけで全員で魔法陣に飛び込む。大災害 以後はシユウトもこれが初めての経験だった。転移自体は帰還呪文を使っているのでもいづらでも経験があるのだが、妖精の輪 による転移にはまた違った趣きがあるような気がする。などと、考える暇もなく到着していた。

「よし、と。とりあえず敵影なし。フレ（フレンドリスト）をチェック」

「うん。名前は光ってるから、日本みたい」

「あとはゾーン名称をメモるんだが、……どうだ、石丸？」

「……見覚えがあるっス。もしかするとここかもしれないっス。名前からも、たぶん北関東の何処かっスね」

「じゃあ、ここが目的地だったんですか？」

「そうではなくて、ここからもう一度ジャンプすると、1/2の確率で自分の知っている場所に行けるかもしれないんす」

「じゃあ、時間がないな。さっさと行くか」

1/2の確率ということは、タイムテーブルによる転移先がA地点とB地点の2ヶ所と言う事を意味している。一時間ごとに交互に転移先がA地点・B地点と入れ替わりになるはずだ。シブヤの妖精の輪 のタイムテーブルには幾つかの転移先が設定されているため、今の時間帯を逃すと、この場所（北関東のどこか？）に戻ってくるためには、また数時間先まで待たなければならぬ。そのために、時間に余裕がなくなっていた。

今から一度転移してみて、ダメならばシブヤに帰還し、今の時間帯の内にもう一度ここ（北関東のどこか）まで転移して戻って来て、次の時間帯になるまで待つてから、このポイントから再度の転移を試してみればいいことになる。

「でも、本当に飛んでしまっていないんですか？」

「このパターンは議論しても無駄だろ。確認しなきゃ始まらない。嫌なら俺だけでも行くぞ！」

「私も！」

「なんじゃココ？」

「岩肌？ずいぶんと険しいような……？」

「山だよな？一瞬だけ耳がきーんって」

「ハズレっスね」

「じゃあ、戻るぞ。帰還呪文だぞ、フェアリーリング妖精の輪 には入るなよ」

「急ぎましよう」

そうしてシブヤの街に戻り、ダッシュで 妖精の輪 の前へ。すぐさま飛び込み、先ほどと同じ場所に戻る。今度は余裕をみて数分待つてから、もう一度ジャンプすることになった。時間帯が変化しているため、今度は険しい岩肌を持つ場所には出なかった。

「うん、とりあえず日本だよ？」

「どうだ？」

「見覚えがあるっス。念のためにゾーン名を確認するっス……………」

「おお、やったな、石丸！」

「上手くいったっスね！」

「俺はてつきり、これは失敗するパターンだとばかり思っていたんだが。やるもんだなあ。」

「ラッキーっス」

「なんか、2人だけで盛り上がったるね？」

「最後の美味しい部分に立ち会っただけだから」

「いいじゃない、苦労しないで済んだんだから。素直に喜びましょ」ところで、ココ、ドコ？」

「ここは、広島と岡山の境界付近っス。東に向かえば、近くの高梁たかはし川がわに出るハズっス」

「高梁川とか言われてもサツパリだなあ。もしかして、石丸って鰐を食うトコの人？」

「ハズレっスが、概ねそんな感じっス」

「鰐わにって、ワニ革のワニ？」

「この場合の鰐わにってのは、サメのことだな」

「広島の一部にサメの刺身を食べる地域があるんス」

「美味しいんですか？」

「俺も食ったことは無いなあ」

「正月なんかは、鰐がなければ始まらないっスね」

「そうなんだ？」

「なるほど」

ここから東へ進んでミナミへと向かうことになる。シュウトは葵に念話を入れて経緯を話しておく事にした。すると『にはは、合流予定日に2〜3日足りなかったから、助かったよ。ジンパーならどうにかすると思ってたし』と発言していた。

(通りで、強引に出発を促がしたワケだ……)

葵の台詞をジン達にそのまま報告する気持ちにはなれず、シユウトはそつと自分の胸に留めておくことにした。どうせ後でバレると思つので、ここで敢えて事を荒立てなくてもいい。程無くして高梁川と思われる川が見えてきた。

「一級河川はいいけど、どうやって渡るか？」

「橋が架かってない場合は、泳ぐか、大地人の集落を探して渡し舟を利用っスね」

「妖精の輪 を使わない長距離の旅ってこれが面倒なんだよな…

……つて、オイ、大物だな」

「え？………モンスターですか？」

「らしいぞ。川上方向だな」

シユウトが目を細めるようにして敵の影を探す。川の周辺は開けているので遠くまで見通しが利き易い。

「見えました。多頭竜……ヒドラですね」

「あれ？ ヒドラって瀬戸内海側にも出るんだっけ？」

「そうみたいっスね」

「戦いますか？ まだ逃げられそうですけど」

「レベルどれ位？」

「えつと………76ですね。ランクはパーティ×3ですかね」

「それなら丁度いいや。俺だけで戦って来るから、ちっと待っててくれや。そろそろレベル上がりそうなんだ」

「私もいいでしょ？」

「おう、俺とユフィリアだけで倒してこような」

「おう」

「わかりました。僕らは待機で」

となれば、ジンが全力で戦うのが見られるのだろう。じっくり観るのはこれがはじめてだ。

「ユフィ、パーティアウト。2人きりのパーティにするから、俺を誘ってくれ」

「……はい、私がパーティリーダーだよ。」

「EXPポット持ってんだろ？ 飲んでおけよ？」

「うん。……それで、作戦は？」

「え？……えっと、開始直前に適当な呪文を掛けて、後は待機」

「

呪文って？」

「何でもいいぞ。斬撃ガードでも、反応起動回復でもなんでも。」

「それだけ？」

「それだけ。」

「む……」

「あるえ？ご不満ですか？ いやいや、えっとー、ホラ、なんだっ

け？ お、俺のカッコイイところを可愛いユフィリアさんに見て

欲しいかなあ、って？ そっとう感じ？」

「んー、それなら、まあ、しょうがないか」

「（ほっ）」

「ジンさん」

「ん？」

ユフィリアはジンの前に立つと、頭に手を伸ばしてフェイスガードを引き降ろした。

「がんばってねー！」

「おっ。」

「（なあ、シユウト？）」
「（なんです？）」
「（なんでアイツ、俺のフェイスガード下げたんだっけか？）」
「（え？……全力を出すときって、それを下げるんじゃないんですか？）」
「（え？ あー、そうだったっけ？）」
「（違ったんですか？）」
「（いやいや、いいんだ。別にそれならそれで。お約束は大事にしないとな、うん）」

これ以降、ジンは全力時にフェイスガードを下げた戦うことになる。

レッサー・ヒドラ。

ヒドラは複数の首を持つドラゴンの亜種モンスターである。その名前からギリシャ神話に出てくるヒュドラを原形とするが、日本の神話に登場する八岐大蛇の影響も受けており、日本独自の亜種モンスターに仕上がっている。レッサー・ヒドラはその小型バージョンに相当する。

基本性能は洋の東西を問わず首の数の多さと、再生能力の高さが最大の特徴である。西洋のヒドラであれば複数の蛇が胴体から生えており、たとえ切ったとしても、切られた部分から分かれて2倍の頭を生やして再生してくる。このため、切断面を焼くなどして再生を阻止することが必要になった。今回の日本型ヒドラは太くて長い首を持ち、首の数こそ倍々に増えて行かないが、首の数だけ胴体の再生回復力が高まるため、首を先に落とすしていかねばならない。（それぞれの首のHPは胴体とは切り離されている）戦力的には2パーティでも戦えるが、これらの条件のためにランクが上がり易く

なっていた。

また、首の数が多いために必然的に目の数も多い。目の数が多いというのはなんということの無い特徴の様で、意外と厄介な性質を持っている。背後などに死角を持たず、命中精度にも高いポーナスを与えられていた。その戦いにくさは実戦を経験してみなければ分かり難いものだろう。多頭竜は種類によっては首ごとに別々のステータス異常攻撃を持っているため、その命中精度の高さと相まって、モンスターレベル以上に苦しめられる場合も少なくない。腐っても最強の幻獣たるドラゴンの端に連なるもの、ということだろう。

ヒドラはその図体に関わらず、素早く距離を縮めて来ており、既に戦闘距離に入っていた。ジンが片手を挙げて戦いを開始する。ユフィリアが何かの呪文を投射。ジンは割と強く戦う時にするようにフローティング・スタンス を発動させると、するすると無造作な接近を始める。

シュウトはもう少し良い位置で観戦するべく飛び出してゆく。残り数秒で接触だ。間合いは明らかにレッサー・ヒドラの方が広い。見る間に、前方の首がムチのように獲物に目掛けて飛んだ。一瞬早くジンの姿が消える。同時に初撃が加えられていた。その姿を目で追えば、青く輝く一撃を加えてそのまま切り抜けていくところだった。

（なんだ……？）

何をやっているのかよく分からない。しかし、目で追えないほどのスピードではなさそうだ。続くレッサー・ヒドラの反撃は苛烈である。素早く反応し、野太い首が次々とジンに襲い掛かる。何かの

液体を吐き掛ける首まであるのだ。それらを躲し、防ぎ、一呼吸の後にまた青の斬撃が飛んだ。しかし胴体に加えられたダメージはかなりの速度で傷口が塞がれて行くはずだった。現に初撃の傷口は既に周囲の肉が盛り上がり始めている。まずは再生力を下げるために首から落として行くのがセオリーなのだ。それでもジンは構わずに3撃目も同じく青い光を放ち、切り抜けていく。その衝撃にヒドラがグラ付いた。

「おっと、終わったかな？」

「え？ もう終わりなの？」

待機して来るべき出番を探っていたユフィリアがキョトンとしていた。それもそのハズだ。

「うっし。……………おい、剥ぎ取りたのむわー！」

レッサー・ヒドラの巨体が力なく地に沈んでいくのをシュウトは信じられない気持ちで見ている。何しろ開始からまだ10秒経っていないのだ。

「何だ、それ……………」

分かっていたつもりだったが、やはり信じられない。次元の違う戦闘力に呆然となる。

「じゃ、頼むな？」

「了解」

レイシンが自慢の『剥ぎ取り包丁』を手にレッサー・ヒドラに向

かつて行った。装備関連の素材よりも食材の方が確率的に多く手に入りやすい代物ではあったが、仲間内ではレイシンの剥ぎ取りが一番良い物が手に入るのだ。

「早かったね？」

「というか、強過ぎませんか？」

「そうか？……………石丸。今のレッサー・ヒドラってHPどのくらいだ？」

「5万点以上つスね。多くても8万点で、9万には足りないくらいじゃないっスか？」

「そっだよなあ……………」

「くっそー、一撃あたり3万弱、2万2千〜2万8千のあいだってことか。なんだよ、ぜんっぜん大したことないじゃん。…………あ、もうダメだ、やる気失せた。」

ジンは荷物から毛布を引っ張り出して広げると、体に巻きつけるようにゴロンと地面に転がり、『イジケ虫』になってしまった。

「こんちくしよー、ふざけんなよ。やってられっかってんだよー」

「何イジケてんですか、もう……………」

「ジンさん、元気だそ？」

「無理……………てか慰めるつもりなら、一緒に寝てくれ」

「別にいいよ？」もぞもぞ…………ピトっ

「おおっ、女の子のぬくもり！柔らかかさ！……………って、鎧があったら意味ねえじゃねーか。ぐおー！パージだ！鎧をパージさせるおお！……………」

「元気っスね……………」

「時々、度を越してバカよね……」

ニキータが容赦なくユフィリアを引き剥がしに向かった。「もうちょっと」とお情けを絶るジンの情けない声が周囲に響く。

「大体、アサシネイトの2倍以上のダメージがあるのに……」

「いえ、実際にはもっと凄いです。今の攻撃ペースだと、約2〜3秒に1回っスね。2.5秒毎だとすると、1分間なら24回の攻撃が可能っスね。2万5千点計算で、……分間60万ダメージっス。」
「ろ、60万って…… 暗殺者 が60人分ってことじゃないですか」

「より正確にはアサシネイトの再使用規制時間の5分で考えないと計算が合わないっス。ジンさんは5分で300万ダメージっスね。暗殺者は最初の1秒で1万ダメージが可能だとして、残り4分59秒でどのくらいダメージが出せるかって話っス。仮に9万点だとすると、アサシネイトを加えて10万点となるので、ジンさん1人ですら 暗殺者 30人分といった具合っス」

「約5分で9万点ですか…… 5分が300秒だから、えっと1秒でダメージ300点だと思えば、もうちょっと行けそうですけど、それでも敵の強さや状況にかなり左右されるでしょうね。」

「単純攻撃力で 暗殺者 の15〜25人分といった規模っスね」

ユフィリアを引き剥がされ、泣く泣く立ち上がったジンが溜息を付き、毛布を叩いてバッグにしまっていた。

「おっとレベルが上がったな。どりどり……」

「レベルアップおめでと。どう?……ってジンさん?……あれ、動かなかなくなっちゃった」

「ジンさん、大丈夫ですか？」
「……………いや、ヤバいかも。予想より上がり幅が大きいのかな。これで100レベル近くまで上がるとなると、とんでもないことになるそうだなぞ」
「20レベル近く残ってますもんね」
「それって、どうなるの？」
「んー、俺、力に溺れちゃうかも。こりゃ、キツチリ修行しないとマズいなあ」

(今より更に強くなるのか…………)

大災害 時に既に上限レベルに到達していたシュウトは、まだレベルアップの経験がない。アキバでも91レベル到達のニュースはまだ流れていないのだが、自分だってその内に、ぐらいは思っていた。

「剥ぎ取り、終わったよ」
「おっ、お疲れさん」
「……………ところで、さっきのアレはどうやったんですか？」
「ん？ アレってドレのことだい？」
「とりあえず、あの消えるヤツは何なんですか？」
「消えた？俺が？」
「攻撃前に急加速したヤツっスね？ 消えてはいないんすが、一瞬目で追えなくなる感じっス」
「はーん、縮地のことか。別にいつも使ってたんじゃん」
「そうなんですか？」
「まあ特技とかじゃなくて、武術のリアル縮地なんだけど、切り抜きの始動でいつも使ってるぞ？」
「どうやるんですか？……………というか、何でそんなこと知ってるんですか？」

「別に、普通に雑誌に書いてあったし。やり方の説明はムズいけど、キックしないで両足同時に身体を前に滑らせるんだ。こんな感じ」
「って、30センチぐらいしか移動してないじゃないですか」
「特技じゃないからだって。難しいし、まだまだ下手なんだよ。種明かしをしちまうと、フローテイング・スタンス を使っていないと、こんなもんだね」
「それ、教わってもあまり意味なさそうですね」
「初動の加速アップ効果はあるし、俺には重要なんだけどな」

「じゃあ、攻撃の方はどうなってるんです？」

「何だ、知らなかったのか？ あの青いヤツは、みんな大好き ドラム 竜 ドラム 破斬 ドラム だぞ？」

「やはりトータルダメージ系っすね」

「そうか、ブーストさせるのはそっちなんですね。でも、それだともっと強い技を使えば更にダメージが出るんじゃない？」

「……まって！ 最近、お話が難しいと思うの。もしかしてイジワルなの？ イジワルしてるの？」

「そんなつもりは……」

「申し訳ないっす」

「じゃあ、簡単に説明してよね？ 簡単にだよ？」

「そんなの、どっから説明すればいいんだか」

「じゃあ、竜破斬 って何？」

「えっと、竜殺しのサブ職で追加される戦闘系特技3点セットの1つだ。構えである フローテイング・スタンス、防御アップ ドラゴンバスター の 竜血の護り、そして最弱系攻撃特技の 竜破斬 ドラゴンバスター だな。」

「竜破斬 は特に威力の低い攻撃特技で、普通に使えば通常攻撃と大差ない威力しかないはずなんす」

「何で弱い特技を使うの？」

「もともと、弱威力の攻撃特技は平均ダメージを高めるためにあるんだ」

「例えばっすが、暗殺者アサシネイトの絶命の一閃は全職中でも最大ダメージの特技っすが、再使用規制が5分なんス。」

「うん。そっちは何度も聞いて知ってる」

「トータルダメージをアップさせる場合、その5分間に強・中・弱威力の攻撃特技をローテーションさせるだろ？」

「ローテーション？」

「アサシネイトみたいな極大攻撃を何度も使いたい場合、再使用の規制時間があるから、初っ端に使うんだ。一度の戦闘はだいたい5分〜10分、長くても15分ぐらいだから、最初に使えば2〜3回使えることになる。そしたら、次は強攻撃特技を使う。これも1〜2分とかの長めの再使用規制があるわけだ。またまたその間に中攻撃特技を使う。このパターンで同じように弱威力特技を使って、それも無くなったら通常攻撃だな。そのうちに再使用規制が解けたら弱や中威力の攻撃を使って〜を繰り返し、また強威力特技を使い、無事に5分が経過したら、最初に戻ってもう一度極大攻撃を使うわけだ」

「うんうん」

「実際には、状況に応じて使用特技を選択しなきゃならないから、こんなに単純な話じゃない。MPの節約の話もあるしな。でもまあ、一番影響がデカイ部分はショートカットだな。殆どの場合、ショートカットに登録している範囲でローテさせることになるから、使用特技は登録数が上限になってる。」

「ふむふむ」

「余談になるけど、味方のショートカットの内容を覚えることだったりとか、敵対プレイヤーが登録しているショートカットを把握することが戦闘の初歩では重要なポイントになるんだ」

「うーむむむ」

「本当に理解してるのか怪しくなってきたぞ……」

「要するに、トータルのダメージを上げようと思ったなら、なるべく強い威力の特技をはじめの内に使いつつ、一番回数を多く使う攻撃の威力を底上げする必要が出てくるわけだ」

「特に弱威力の攻撃特技は再使用規制時間が短いので、何度も使えるってことっス」

「攻撃特技は沢山あるけど、ショートカットに登録できるものはその中でも限られてしまう。その結果、通常攻撃を使わなければならなくなる……」

ニキータが話を纏め、確認するように呟く。

「竜破斬 は通常攻撃の代わりに使うものなんだよ。技後硬直や再使用規制もほぼ無いし、MP使用量も極微だ。コストは最高の技だからな」

「コストパフォーマンスじゃなくて、コストの良い技ですよ。通常攻撃並みの威力しかないのに僅かとは言ってもMPまで使うのはバカらしいって意見が主流ですけど」

「その分、見映えがいいんだがな。青のライトエフェクトが美麗だべ」

「あれはキレイだよな」

「さっきの質問に戻りますけど、もっと威力の高い技を使えば、最大ダメージも高くなるんじゃないんですか？」

「いや、変な話だけど、俺の持ち技だと 竜破斬 が最大ダメージ技だな。80レベルまでの手持ち特技をいろいろとブーストしてみただけ、強大な物理限界の壁を突破できたのはコイツだけだったわさ」

「わさ？」

「物理限界、ですか？」

「んー、俺はそういう名前で呼んでる」

「それはどういうお話？」

「簡単に言うのは難しいんだけど、物理ダメージ系の攻撃特技ではアサシネイトだけが突出して強いんだよ。もう殆ど緊急特技クラスの強力さなんだ。」

「5分毎に使える緊急特技みたいなものっすね」

「そうそう。何しろ発動から発生までにタメだのなんだの余計な手順が一切ない。一瞬で攻撃しておいてダメージ最大とかどんだけチートなんだって話で……」

「それをジンさんが言いますか？」

「つまり、状況的にみてアサシネイト以外の技って、物理限界に阻まれているように見えるんだよ。この場合の物理限界ってのは、イメージが難しいけども、ナイフでの攻撃はナイフの長さまでの深さにしかなりようがないだろ？その長さが最大ダメージ量を決めてるって感じなんだ」

「じゃあ、デツカい武器ならデツカいダメージになるんだ？」

「理屈としてはそうなんだけど、一番デカい武器を使っても、そのダメージ量はアサシネイトの半分にも満たない。物理限界に阻まれてるからだ」

「暗殺者 はそんなに大きな武器を使うわけでもないですしね」

「現実世界だと一部の臓器を破壊すれば連鎖的にその他の臓器も破壊されて死に至る。心臓を壊せば血流が脳に届かなくなって意識を失い、死亡するわけだ。だけどゲームの場合は生命力がHPとして管理されていたから、臓器ごとの関連性などがかなり低い。逆にこれを利用して、巨人やドラゴンなんかは足を叩いているのに殺せたりしたわけだ」

「そうか、足を叩いても倒せるんだね？」

「今はゲームが現実化したことで微妙な感じだけだな。」

「話を戻しますケド、竜破斬は物理限界の無い技なんですか？」
「たぶん。んつと、こつちも正確に話そうと思うと難しくなるんだけど、もつと物理攻撃じゃなくなってるって感じかな」

「特技や通常攻撃で同じレベルの、例えばゴブリンとドラゴンとを殴って比較すると、その結果、威力に大きな差が生じる。……ドラゴンに対してはかなり威力が減じられてしまうわけだ。防御力の差も勿論あるんだが、サイズ補正その他もろもろの側面が大きいんだな。つまり巨体の連中は相対的に武器で殴られても痛くないんだ。ナイフが全部刺さっても、巨体だから傷が小さいっていうかね。その概念を表現しているものを、防御力とは別に、物理抵抗とか防御率とかって言う。ドラゴンはこの物理抵抗とか魔法抵抗もだけど、そういうのが一番高い種族なんだよ。」

「そういう訳で、竜破斬を使ってゴブリンを殴るとドラゴンを殴るのではダメージ量の変化・減少が小さいんだ。だから、元々のダメージは低いんだけど、ドラゴンだの物理抵抗の高い敵に使っても威力が変わらないから、通常攻撃よりもダメージのある攻撃技になるって寸法だな」

「それは対竜属性攻撃だからじゃないんですか？」

「それもあるんだろうけど、技の元ダメージが小さいから、対竜属性だけだと通常攻撃との有意差が生まれなかったんじゃないかな。それで色々と無視する攻撃になつちまつてるんだと思う。」
竜破斬

は、第3の攻撃なんだ。」

「第3……つて？」

「物理でも、魔法でもない、第3の特性攻撃。無属性ですら、ない。非属性とでもいうべきかねえ。より純粋な『ダメージ』に近い概念

の攻撃かな。まあ、普通に使う分には威力が低いから何の問題も無かったんだろ。それを俺の擬似特技『極意』を使って、『第3攻撃特性』性をブーストさせてるんだよ。これで物理攻撃特性が薄まって、物理抵抗も物理限界も弱まっているんだと思う。要するに毎時クリティカル的な勢いってことだな。その他にも『極撃』、『手首クッション問題の解決』、『フローティング・スタンス』の運用、『移動斬り』、その他モロモロ合わせてるから、ほとんどオリジナル技になってる」

「……盛り込み過ぎじゃないですか、それ？」

「そうなんだけどなあ。普通に連続使用してもあんまりダメージは出ないし、準備に2秒近く掛けても威力が出るほうがいいかなって」

「あと面白いのは、物理限界を無視するようになると、逆に部位破壊が発生して足を切っても死にくくなったことだな。その意味じゃアサシネイトの方が使い勝手のいい技だと思うね」

「でも、アサシネイトは足とかはあんまり斬りませんよ？ガイドラインが出ますから、首筋とかに」

「そうなのか？ ……直死の魔眼っばいなあ。やっぱり概念攻撃なのかな？」

「うーん。分かったような？分かんなかったような？」

「大丈夫、僕にも半分ぐらいしか分からなかったから」

「私もね」

「分かりにくいなあ。まあ、しょうがないな。このぐらい盛りにして、ようやっと2万点越えだからなあ。」

「さっきの『極撃』って何ですか？」

「重撃と鋭撃の合成で極撃。造語だよ。ハードパンチとソリッドパンチの合成みたいな話だな。俺も練習中だから、完成度は5割強だと思っ」

「それは難しいんですか？」

「合成するのはな。理論上は喧嘩しないんだけど、やるのは流石にムズい。だけど、シユウトは鋭撃は分かっているハズだ。アサシネイトこそ鋭撃そのものだからな。暗殺者は鋭撃系のキャラだから、重撃の習得は苦手かもしれない」

「それなら後回しですね」

「じゃあ、『クッション問題』って何ですか？」

「そいつは説明すると長いぞ。武器攻撃は手首がクッションになるって話だ。」

「簡単に！お願い、簡単に！」

「ガーディアン 守護戦士の武器は片手持ちが基本だろ？ 盾で防御するのが実質メインだからな。これのせいでパワーはあるんだけど、武器攻撃力が弱いんだ。二刀流と同じで、武器の片手持ちはあまり威力が出ない」

「剣道でも二刀流は使えないと言われているっす」

「剣道の場合、小手を打つたり、その小手を防いだりするのに手首のスナップ、いわゆるハンドスピードが必要なんだ。大体は『手首は固めろ』って教えてるはずだけど、競技特性からするとあんなの嘘だからな。『小手先の技』って言葉が戒めとしてあるんだけど、二刀流を使えないものと判断している以上、小手先の技が重要な意味を持つのが今の競技剣道なんだよ」

「じゃあ、なんで手首を固定しろなんて教えるかってことだけど、実際の日本刀なんかを使って巻き藁で試し切りをする場合、手首を固定しないと切れないからなんだ。手首がクッションになっちゃうんだな。剣先↘手首↘ヒジで作る角度が90度を超えるほど広いから、必然的にクッションが大きくなるし、それで手首の固定力も足

りなくなるんだな。片手持ちなら尚更だ。『座頭市』みたいに剣を逆に持てば角度が狭くなるからクッション性は下がるけど、攻撃範囲がとて狭くなってしまう。座頭市はその場で居合い切りをしていたけど、アレは本来は忍者みたいに移動切りするための持ち方なんだ。」

「ダ の大冒険っスね？」

「ア ンストラッシュだな」

「で、手首をガチガチに固定して斬るんだけど、これにも問題があるって、それだと刃が立たなくなるんだよ。『刃が立つ』ってのは、刃筋がブレないようにキレイに振ることを言うんだ。試し切りでも中級技術以上。実戦だと至難だな。力任せに振り回しても力の伝達が上手くいかないから、表面にちょこつと傷を作るぐらいで弾き返されることもあるらしい。仕方がないので、フォームを固めて固めて刃筋がブレなくなるまで繰り返し練習するのが本流だけど、まあ、無駄だろうな」

「……無駄なんですか？」

「上段から正面の振り下ろし、袈裟、横薙ぎの3つぐらいをマトモに習得するのでも数年は掛かるだろうし、それも威力だのは度外視で、だよ。そんなんだから、戦うだけなら鉄の棒で殴った方がずっと早い。人間同士だったらパカーン！と殴っちゃえば勝てるんだからな。示現流とかはもともそんな感じらしいね。合理的だし、最強と言われる所以ゆえんだな。そうやって実打撃を磨いていく内に、示現流の達人は刃筋まで立つようになり、手がつけれなくなるんだろう」

「うわあ〜」

「一応、簡単に刃筋を立てる方法もあるんだ。軽く握って、素早く振れば実は刃なんて勝手に立つんだ。でも、それじゃ手首がクッションになっちまうから切れなくなる。……矛盾だな。ついでに言え

ば、手のひらだけ柔らかく握って、手首だけ固める、だなんてことは人体の構造上、不可能だ。」

「じゃあ、どうすれば……？」

「冒険者は、モーションがあるだろ。フォームガチタイプで解決してるんだよ」

「それではダメなんスか？」

「いや、別にいいんじゃない？ 切れれば問題ないんだし。」

「……つまりコンビ二弁当っスね？」

「そんな感じだな」

「ジンさんはどうしているの？」

「俺は柔らかく握って、クッション距離の小さい手首に近い位置でブチ当ててる。………理屈としては、刃先で斬ると作用点が遠いから、手首の固定力が数倍必要になる、とかだと思う」

「あ………」

「それって、凄いことなの……？」

「いや、別に。普通のことだよ」

「？」

「だから、『切れれば別になんでもいい』んだよ。」

「むつかしいよ、いじわる〜」

「ハハハ。バカでは強くなれないし、かといって屁理屈では勝てないんだな、コレが。」

「それじゃ頭の弱い子はどうすればいいの？」

「頭の良いコーチを見つけてりゃいい」

「そっか。……コーチ！ 私、まだ行けますっ！」

「……ホントにノリのいいヤツだな。俺じゃ咄嗟に返しがでねえぞ」

「えっと、何が問題なんだろう……？」

「………元々の話は片手剣の威力アップ方法っスね」

「片手剣は両手で持つ剣よりも手首の固定力が弱い。だからクッシ

「ヨン性が高い。従って、威力が減じられてしまう……ってことよね」
「ジンさんの結論は『手元でブチ当てる』だから、手首のクツシヨ
ン性によるマイナスを最小限度に抑えているって話になるんだけど」
「んと、『切れればいい』んじゃないの？」

「特技の攻撃モーションを使えば、刃筋は立つ。でも手首のクツシ
ヨン問題は解決してないってことなのかな」

「ねえ、その攻撃モーションって何？」

「ゲームキャラの『動作』のことだ。エルダー・テイルの攻撃
モーションはかなり評判が良い方だけど、それでも魅せ技の側面が
強く残っている。アーケードゲーム『バーチャファイター』以降、
ポリゴンキャラを使つての格闘ゲームの時代になつたんだが、この
方向が発達していき、モーションキャラの技術が導入された
初期のころに、本物の武術家にキャラ・モーションのデータを作る
ために協力してもらつたことがあるそうだ。現実の武術家の動きを
記録して、それでゲームのキャラの動きにしようとしたわけだな。

「だけど、格闘ゲームなんかで使うには攻撃に予兆が無さ過ぎて、
プレイヤーがまったく反応できなかったらしい。それじゃ余りにバ
ランスが悪すぎるってんで、それ以降は派手で見映えの良いモーシ
ヨンが主流になつたんだ。」

「武術家は防御されないために技を磨いているわけっすから、考え
てみれば当然の話だったんす。防御不能ゲームになつてしまつたら
しいっす」

「派手なポーズを多用するのは、そのせいなのね……」

「えー？ カッコイイでしょ？」

「そうかしら……」

「あの、すみません、冒険者の筋力なら手首の固定力は段違い
なのではありませんか？」

「全身の筋力が高まっているから、やはり手首の力は相対的に弱い

ままなんだ。でも、良い視点だぞ、ニキータ。これに気が付いている人はあまり居ない。簡単な実験でそれを証明しよう。」

「まず、なるべく早く歩いてみてくれ。この時、足首の力を可能な限り使うこと。グイ、グイってな」

ジンとレイシン以外の全員が早歩きする。足首の力だけでも飛び上がれそうなので歩くよりも弾む感覚に近い。これは通常の早歩きのイメージそのままの動き方だ。

「じゃあ、次。足首の力は使わずに、カカトで早歩きしてくれ。

サツサツと足の動きが鋭くなった印象を受ける。

「もっと足の回転を早く！」

「えー？でも、これ走っちゃうよ？」

「いいぞ、そのまま走っちゃえ！」

少し回転を速めただけでスムーズに小走りのような動きになっていた。

「最後、足の回転はそのままに、足首をちゃんと使ってみ」

「あれ？」

「……………これって？」

良く分からないのだが、少しチグハグな動きになってしまつ。

「変なかんじ〜」

「そうだろ？……つまり、足首をちゃんと使おうとすれば、回転が遅くなり、回転を早めると足首が間に合わなくてチグハグな感じになる。これがクツション問題の足首バージョンだな。」

「足全体のパワーが、足首のパワーよりずっと大きいことで起こる問題っスね」

「そういうこと。だから、動き出しの数歩はカカトで蹴り出せばいい。ちゃんと使えるようになれば、冒険者の強大な筋力、特に脚力がダイレクトに地面に伝達されることになる。カカト歩きをされていて、回転を早くしたらスムーズに走ってる状態になったろ？そのぐらい伝達効率が改善されてるんだよ」

「なるほど」

「そんでさ、これでシューウトなんかはアキバ最速の暗殺者アサシになつたかもしれないわけだよ」

「たったのコレだけで、ですか？」

「元々トップグループだろ？みんな筋力は同じなんだから、後はカラダの使い方だで差が付くかどうかだ。ちよつとあの木まで走ってみるよ」

「カカトダツシュですよね？」

「もちろん。リラックスして、つま先の力は抜けよ？」

軽く深呼吸してから、カカトでダツシュしてみる。

「消えた！」

「凄い……」

「そりゃ、戦闘モードで見ないと目が追いつかないさ。それが暗殺者の全速なんだ」

戻ってきたシューウトに対して、ジンとレイシンが声を掛ける。

「うーん、すまん。アキバ最速はまだ無理だったな。あの位なら何人か他にいるかもしれない。というか、まだレイの方が速いからなあ」

「いやあ、でもかなり速くなったと思うよ？」

「そうですか」

「私、見えなかったよ！」

「もう少し教えてもらえば、本当にアキバ最速になれるかもね」

「そうだな。もうちょっと色々教えないな」

「……動いてみて、ちょっとだけ分かりました。モーションデータが限界を作ってしまうんですね？」

ジンはニヤッと笑ったきり何も答えなかった。

「でも、なんでこういうのを、もっと早く教えてくれなかったんですか？」

「そうだな。こういうのを色々教えたら、それだけで強くなれると勘違いさせちゃうかもしれないから、だな」

「うっ、……すみません」

「いやいや、物事には順序があるってだけだよ。そろそろ頃合だろうと思つてさ。本当に強くなれるのか疑問に思われる前に、小技をひとつかふたつ、覚えて貰おうかなってさ」

「そうですか……」

素直に喜んで良いものではないのだと、理解する。

（いや、今のタイミングなら喜んでもいいのだろう、たぶん満足さえしなければ。）

「そろそろ出発しよう。川を渡る方法を見つけないとな。……ダメ

なら泳いで渡ろうぜ？」

「水着が目的でしょ？ ジンさんのエッチ」

「そ、そげなことねえっぺさ。あれだよ、シユウトだってあんな澄ました顔してるけど、ありやかなりのムツツリだぜ？」

「そうなんだ……」

「なんで、そこで引き合いに出すんですか！」

「若いんだから、しょうがないわよ……」

「若いもんね……」

「……コーラーとして宣言します。橋か、渡し舟を探します。ダメなら上流まで迂回して、泳がなくていいポイントを見付けます。」

「え、面倒くさいじゃん」

「決定事項ですから」しれっ

「ホラ、ムキになっちゃった。ジンさんのせいだよ？」

「お前のノリの良さが原因だろ？」

「出発しますよ！」

「はい、はい」「ハイ」

こうしてミナミへの遠征は始まってしまった。この時、僕達は
まだ何も知らなかった。これから起こる運命の分岐と、その後の決
定的な出会いのことを。いま暫くはただ時を待たなければならな
かった。

20 竜破斬 (後書き)

20話で切りが良さ気だったのでこんな形でやってみました。

説明回なので、合わない人にはつまらないかもしれませんが、仕様というか、作風でもありますので、その辺りはご容赦願います。 > (|) <

新展開はミナミ行となるわけですが、大雑把なタイムテーブルは原作を守るつもりでありますので、アレとかアレが発生します。……

そうです、牛ど(以下略)

たいへん失礼いたしました。 > (|) <

21 フリーライド (前編)

「その3万つてのは何よ？」

「一撃のダメージのことだよ。3万160点。その1回を除けば、同じ技の平均値はだいたい2万3千点あたりになるけどね。技術的にまだ未完成なんだと思うよ」

「2万3千でも十分にチートじゃない……」

「いや、本当にチートみたいだよ？ 僕の解析では、師範システムに介入して強引にレベルを引き上げていると出ている」

「師範システム……？ あの初心者対策用の？」

「レベルを操作する仕組みだよ。やっぱりシステムが柔軟だったということじゃないかな？」

「……面白いわね。ちよつと興味が湧いてきたわ」

「それなら、知り合いになってみるのもいいかもしれないよ？」

「そうね。そのぐらいの価値はあるかもしれない。ところで……」

「？」

「アンタは、私の知っているアンタなの？」

「もちろん。僕は君の知っている僕だよ」

「相変わらず、アンタたちって意味が分からないわね」

「僕は僕なのであって、僕たちじゃないんだけどなあ」

「めちやくちやしんでえぞ、オイ」

「いえ、まったくの想定内です」

「嘘つきやがね……」

大変に苦勞しながらも現実世界で高梁川と呼ばれる川を渡る。ジンとシユウトの会話を聞きながら、ニキータは安堵とも疲れともつかぬ大きな溜息をついていた。

「大変だったねー？」

ユフィリアは楽しそうな笑顔で嬉しそうに話しかけてくる。彼女は大変なら大変で、大変だったことも楽しかったことにしてしまう。ほつれた髪を撫でてやりながら、「そうだね」と相づちを打つ。ああでもない、こうでもないと話すユフィリアの話に耳を傾けながら、その屈託のない笑顔に癒されていることを自覚する。自分と比較してテンションが段階ほど上の位置で安定している様なので、そこまで差があると逆にこちらも一緒にいて落ち着くのだと思っていた。

ふと見れば、ジンが葵に念話で連絡を入れていた。

「で、合流場所はまだ決まらないのか？……ああ？……ぐわっ、そういうのはレイと話せよ、切んぞ？」

ぐったりと疲れた様子のジンに、どことなく前途の多難さを思っている間をおかず、レイシンが念話を始める。

「うん……………うん……………へえ、そうなんだ？……………うん……………それは凄いねえ」

葵からの念話はその後も長々と続き、モンスターとの小戦闘になっても、レイシンはまだ念話を続けていた。口だけの相づちなのかちゃんと話を聞きながら戦闘もこなしてしまっているのかニキータには判別できない。戦闘のコンビネーションに支障を来たしている様子もなく、特に問題もないらしい。

「レイシンさんって、意外と万能タイプよね？」
近くにいたシュウトに向かって、そんな事を言ってみたくなる。
ジンばかりが目立っていて、レイシンの評価が低かった事に気がついてしまったからだろう。

「そうだな。実際、戦闘もかなり上手いと思う。大技と小技のバランスもいいし、何よりも距離の取り方が良くて、なんていうか、カッコイイ戦い方って感じなんだ」

シュウトが自分のことみたいに嬉しそうに話すのを見て、眩しい気持ちになる。彼はこういうことで嫉妬を感じたりはしないようなのだ。

「へえ、へえ、カッコ悪い戦い方で悪うござんしたね？」

「いや、別にそういう意味じゃ……」

耳聴く聞きつけたジンがシュウトにツッコミを入れる。こちらは悪気は無いどころか、悪気しかない。

「でも、ま、レイのヤツがこのパーティの要かなめだからな。」

「そうなんですか？」

「それはまた……」

要であれば当然ジンだろうと思っていたので、ニキータにしても予想外の話だった。

「うむ、健全なギルド運営は、美味しい食事からなのだよ。これが真理だな。」

「はあ……」

「信じてねーな？ ……いいか、日本人はちゃんとした食べ物があればあんまり文句は言わないんだぞ？ 食事だけでは我慢できずにキレル民族なんだ」

「それって単にジンさんが……」

「ああん？」

「八八八……」

シユウトが笑って誤魔化していた。ここのところヤブをつつく回数が増えている気がする。

「それに日本人ばかりとも言えない。社会情勢が不安定になるのなんかも、食料難から始まるのが珍しくないんだ。何年前だかにあったエジプト辺りから始まった中東での一連の騒乱とかは、小麦の価格上昇が原因だと言われているしな。……それから物語の中でも食料事情をちゃんと扱っているものだってあるんだぞ。例えば、『^{うの}橙乃ままれ』という人が書いた『まおゆう 魔王勇者』というお話（エンターブレイン刊）の中でも、食料事情を改善するところから世界を変えて行ったりするな。それに続く『ログ……』」

「ごめん、終わったよ」

「おう、お疲れ。……なんか言ってたか？」

レイシ^ンがタイミ^ング良^く念^話を終^えて^いた。

（ん？ タイミ

ング良^く？）

「アキバ凄い！ってずっと言ってたよ。なんか、明日だかに牛丼屋がオープンするんだって」

「牛丼って、あの牛丼か？」

「そう。醤油がなきゃ作れないハズだからね、遂に出てきたってことじゃないかな？」

「スゲエな、アキバ……」

「えーっ！？ 牛丼食べたかった」

「一足違いね」

「なんだよ、牛丼なんて食べに行ってたのか？」

「なんで？普通に食べるよ？」

いわゆる牛井のチェーン店に女性が入るのは抵抗があるものだったが、一部の店舗は女性だけでもかなり入り易くなっている。……もつともユフィリアの場合は、家で作るか、大学の学食で食べていたのかもしれないが。

「そっちは何の話？」

「んー、いつもの家事が万能だとかの話」

「ああ、ご飯は重要だよな」

レイシンに尋ねられ、ジンが微妙にズレたことを答えていたが、それでも通じるらしい。

「そっか、万能なんだ……」

それを耳にして、ユフィリアが神妙な顔付きになって深々と何度か頷いていた。

「どうですか石丸さん？」

「そうっすね、ここからは山陽自動車道や山陽新幹線のルートを通るつもりっす。」

石丸の説明によれば、海岸線に沿って移動するのが一番確実ではあるのだが、瀬戸内海はノコギリの刃のような地形になっているため、海岸沿いのルートでは距離がかさんでしまうのだと言う。石丸は手の平を見せて、指の外側を輪郭にそって一本一本なぞるルートを示していた。ショートカットするには、山陽自動車道や山陽新幹線と同じように、つまり指の付け根にあたるルートを通るのだと言う。

石丸にしたところで、詳細な地図を持っているわけでもない。いくつかの特技 や磁石などの基本的なアイテムを駆使して移動ル―

トを策定してゆくことになるのだ。彼一人に任せ切りになってしま
うことに、ニキータは不安のような、申し訳なさに似たものを感じ
ていたのだが、石丸はむしろ嬉しそうにしていた。自分が役に立
てることが喜んでいられるらしい。

「本来は東海道か中山道なかせんどうを使って西に向かうはずだったっすからね」
「ろくに地図とかなくて、平気か？」

「手持ちの、アキバで入手できるタイプの地図は全て荷物に入れて
あるっすから」

「それで何とかやり繰りするしかないな」

「そうっすね。けれど、ミナミまでは手持ちの地図があれば問題な
いっす。大きなルートは地形や方角、太陽や月、ちよつとした星の
見方さえ知っていれば、そんなに迷わないっすから。自分は東京の
街中を歩く方が迷いやすいぐらいっすね」

「そうか、助かる」

ジンと石丸の会話を聞きながら、同じ能力を高めていくよりも、
別々の能力を組み合わせる方が強いことを思う。『旅をする』
と言う一点において、ジンよりも石丸の方が秀でているのだろう。

このところ、ニキータは自分の方向性やスタイルを考えることが
増えていた。ハッキリ言えば、決めかねている。流れつくように
お金の管理を引き受けており、流されるようにして弓を持たされ、
戦闘でも流れのままに今のポジション（センター）にいる。それで
特に不満もないのではあるが、それでは主体性までない気がしてし
まう。

彼女としては、ユフィリアだけ守ればそれで良かったのだ。迷
いが生じている原因は、実のところ守りたいものが少しばかり増え
つつあることに本人がまだ気が付いていないから、なのかもしれな
い。

山道では馬が使えず、合間に戦闘もあれば徒歩の時間が増えてしまふ。ミナミまで3日程度の距離だったが、ロスを含めると5〜6日は掛かる様子だった。歩いている最中にはジンが歩法と走法の細かい部分をシュウトに教え込んでいく。細かいとは言っても、ひとつひとつが大改造に近い。内容的に聞いた事がない話ばかりをしていて、たぶん高度な内容なのだろうとニキータは思っていた。

基本になる立ち方、体重の掛け方、重心移動、ヒザやモモの上げ方に関わる深層筋群の話とその実際の使い方に加えて、腰の割り方、足の降ろす時のポイント、ハムストリングの使い方。それらの前提になる筋肉の操作法など、話の触りだけでも多岐に渡っている。

「ダメだな、体重の掛け方とか、ハムストリングの使い方とかが甘すぎる」

「大丈夫だよ、まだ初日だし、前に本職でも数年かかるって言ってたから」

「バラすなよ、レイ。　こういうのはノリと勢いで習得するのが一番いいんだぞ？」

「無茶苦茶じゃないですか！」

「無理があるっスね」

ユフィリアは自分にもできそうな内容だからと一緒に参加する。分からなかった部分を訊かれるため、ニキータも理解するべく集中することになっていた。大体いつもこのパターンを踏襲することになるので、慣れっこである。

「ジンさん、私もハムストリングって言うのの使い方がわからないよ??」

「だから、オシリにギュって力を入れてみるって。……………なんな

「俺が触ってやるのか？一発だぞ」

「それ、えっちだよ？」

「じゃあ、俺のオシリを触ってみるか？分かり易いぞ」

「え〜？」

「そんなのでテレるなよ。もつと凄いいことだったことあんだろ？」

「セクハラですよ。それと触らせて悦ぶだなんて変態っばいし」

「そうだよな。……最近、ジンさんえっちだし」

「欲求不満とか？」

「そうなの？」

「変態に欲求不満………ニキータさん何気にヒド過ぎるのことですよ？ チツ、これだから女子供はっ！」

「性差別反対！」

「うるへー、わがまま言ってんじゃねえや！」

「アハハハハ！」

夏場で長くなつた日中を十分に使つての移動を終え、素早く夜営の準備を済ませてしまふ。特に燃料に竹炭を使うことで、ほとんど煙も出ない上に料理に必要な強い火力も得られるようになり、様々な手間を省くことが出来ていた。

ジンは食事の準備が完了するまでの間を使って、今もシューウトに速く走る方法を教えていた。一段落したところで、シューウトがおずおずといった調子で口を開く。

「うし。……そろそろメシだから、このぐらいにしとくケ。」

「あー、ジンさん、その、模擬戦と違ってやらないんですか？」

「はあ………ちよつと足が速くなつたもんだから、どの程度まで通用するかを試したいわけですかい？ あわよくば俺に勝っちゃったりできるかもしれない、って？」

「いや、そんなつもりは……」

「勝つ気マンマンかあ。若いなあー。いや、けっこう、けっこう」
「ですから、そうじゃないんですって……」

「……あのな、『力に対する責任』ってのがあるんだけど、ぶつちやけ、そういうのって他人に教えられるものじゃないんだよな。自分で会得するしかないっていうか」

「はあ、力に対する、責任、ですか……」

「弟子やら生徒がそういう方面で心配な場合、指導者側は『ほどほどに強くする』をやるハメになるんだよね」

「そう、でしょうね……」

「まあ、『強くなる』ってことは、根本的な部分から変化することだから、弱い時に相手を見て判断できるこっちゃねーんではあるんだけども」

「……」

「強くなるのは面白いし、楽しいし、イイコトだけど……正直、モロバレな態度とかは稚拙すぎんぞ？」

「……すみません」

何気ない会話かと思いきや、一瞬で説教300%となり、鼻っ柱をポツキリと折られているシュウトに同情を禁じえない。顔を赤くして俯いているので、本人としては思うところがあつたのかもしれないが、脇で聞いていたニキータにしてみれば、「言葉で伝わらないことならば言わなければいいのでは？」などと思ってしまう。流石にその考えには自己矛盾を感じて取り消すことにする。言葉で言わないよりは、言うておいて貰った方がいいには違いない。

分かり易い態度のシュウトの素直な部分は悪くない、むしろ好ましいと思ってしまうだけに、可哀想だった。

「模擬戦に関してはその内にな。まだ意味がない」

「そうですね……」

シュウトはしょんぼりとしていた。もしかすると勇気を出して言ってみたのかもしれない。(返り討ちにしてはキツ過ぎないかしら?)と感じてしまう。

「……だけどもあ、レイと戦^っるんなら、良いかもな?」

「レイシンさんと、ですか?」

シュウトがパツと顔を上げる。ジンは決まり悪そうに「本人に聞いてみな?」と言葉を濁していた。

「別にいいけど、……明日でいいかな?」

「分かりました」

食事が終わり、後片付けの他に何か別の仕込みをしていたレイシンが話を聞いてOKする。シュウトは少しはにかみ、嬉しそうにしていた。

「ユフィリア、後でちょっと付き合えよ?」

「え? いい、けど……」

こちらではしゃがんでいるユフィリアに、ジンが身をかがめて上から声を掛けていた。ユフィリアはOKしつつも、目が泳いでニキータの顔をうかがってしまう。その視線を追いかけてジンもニキータの方を見やる。

「そう睨むなよ、ニキータ。心配なら付いて来てもいいぞ?」

ぶらぶでいちゃいちゃなのを見せつけてやんよ」

「ラブラブなの？」

「まあ、ラブラブかどうかはともかく、イチャイチャではあるな」

「イチャイチャなんだ？」

「そうそう。楽しいだろ？ いちゃいちゃするの」

「え〜っ、わかんない。あははは」

「ウフフ。……じゃあ、遠慮なく付いて行きますね？」

「あ、やっぱし？」

天幕の中でジンからの呼び出しを待っている間、ユフィリアにソワソワとしている様子はみられなかったが、念話がかかってくると、弾けるように立ち上がった。外に出ると、自作の矢を作っていたシユウトに声をかける。

「シユウト、ちょっと出てくるね？」

「ああ、どこ行くんだ？」

「ジンさんとラブラブでイチャイチャ」

「……あーはいはい、どうぞ、お幸せに」

「じゃあ、行ってくるわね？」

「行ってらっしゃい……………って、保護者同伴でラブラブ？」

ガイドラインを伝ってジンの所へと歩いていく。パーティを解除していないので、同じゾーン内ならばガイドラインによって居場所を知ることができる。2人は手を繋いで歩いていた。しばらく歩いて、テントからかなり離れた場所まで来てしまっていた。周囲の景色は月明かり以外には深い闇にくるまれている。虫の鳴き声もまばらだ。ユフィリアの出している魔法の灯りだけが頼りである。

始めの内はモンスターが出るかも知れないと警戒していたが、も

しそんなことになればジンが念話を使って先に警告してくれるだろうと考え直す。油断はしないが、過度な緊張はしなくなる。

遠くに灯りが見え、開けた場所に鎧姿で立っている戦士を見つけた。

「ジンさん、来たよっ！」

そう言っただけでユフィリアは小走りにジンの腕に巻きつくようにした。ニキータが見ても、ドキッとしてしまう。

「おい、いきなし巻きつくなよ。ビックリすんだろ？」

「え？だって、ラブラブするんじゃないの？」

「それは確かに素晴らしいアイデアではあるな。星空を見ながら、愛でも語った方がいいかい？」

「……その鎧姿で、ですか？」

ゆっくりと歩いて、ニキータも会話に加わることでできる距離まで近付いていく。

「そういえば、その鎧はどうして？」

「モンスターでも出たんですか？」

「まあ、余計なモンスターを仕留めるぐらいはしたけどな、コレはまた別だな」

「？……それじゃあ、これからどうするの？」

「そう慌てなさんな。ちょっとだけ待っててくれ」

「何かたくらんでますね？」

「はてさてほほ……。……ユフィ、その服カワイイな。良く似合ってる」

「ありがと。でも、いつも着てるのだよ？」

「あれ、そうだったけ？ いや、ホントに可愛いつて（笑）」

「お気に入りではあるんだけどね。やっぱり冒険中はクレリック施療神官のカッコの方が気分が出ると思っただけ」

「そつだよなあ。街中ならともかく、世界観を考えろって思うカッ
コとかあるもんな」

「……………おまたせ」

雑談をしていたためか、背後から声が掛かるまで人が近付いてく
るのに気がつかなかった。

振り向くと、そこにはレイシンが立っている。

「レイシンさん？」

「やあ……………みんなも、わざわざごめんね」

「レイは灯りをあつちに置いてくれ。ユフィリア達はその辺で、い
や、もうちょい下がった辺りで見ててくれ」

「何をするつもりですか？」

「んー、俺は身も心も紳士なんで、レデイの前で暴力を振るうのは
気が引けるんだけどさ」

「ちよつとね、シュウト君とやり合う前に勘を取り戻しておきたい
と思つてね」

「じゃあ……………」

「え？ もしかして今から2人が戦うの？」

「そつ、ちよつどいい余興エンタメだろ？ シュウトにはナイショだぞ？」

「うんうんー！」

シュウトとは「意味が無い」と言つて戦わないのに、レイシンと
は良いの？と少し引つ掛かりを覚えるが、この組み合わせは確かに
興味深い。楽しさに関して雑食のユフィリアだけではなく、ニキ
ータまで高揚を禁じえない。

「二ヶ月ぶりだね?」

「ああ、前にも言ったが、竜破斬 を出さないとかは保証できないぞ?」

「分かってる」

対峙する2人を見ながら、その静かな緊張感に周囲の景色のコントラストが怪しくなってくるのを感じていた。石丸やシュウトになら戦いを見ているもっと詳しいことが分かるのかもしれないが、ニキータにはこれからの出来事が、たぶん半分も分からないと思われた。

レイシンはかなり本気なのだろう、武器には愛用のドラゴン・ホーンズを構えている。これを使うのはあの日の戦い以来だった。ジンはいつもの装備だが、こちらはいつもより強い気迫が感じられた。

傍らのユフィリアを見て、どちらに感情移入して観るのだろうかと思う。ジンになったつもりでレイシンと戦っている風に観るのか、レイシンになったつもりで、あのジンに挑む風に観るのか。それともどちらにも入り込まずに2人を外から眺める風にしてみるのだろうか……? ニキータはレイシンになったつもりで観るつもりだった。

自分達も含めて3箇所配置された灯りをもってしても、やや薄暗い戦いの場で、影が動くような静けさとともに戦いが始まった。

22 フリーライド (後編)

ゲームにおける白兵戦・格闘戦をもつとも単純な形で表現しよう
とすれば、『交互に殴りあう』となるだろう。

ここから要素を増やすことで現実に近づいてゆく。攻め手が攻撃
特技を繰り出してダメージを与え、技後硬直によって今度は相手が
攻撃する番へと切りかわる。例えば モック 武闘家 は連続技を繰り出し
てダメージを与えようとし、ガーディアン 守護戦士 はそれを防ぎ切って反撃
に転ずる形になり易いだろう。

技後硬直によるターンエンド(攻守交替)や確定反撃を様々な工
夫で隠しながら、上下左右に揺さぶられるアタックを見切って避け
たり確実にガードしたり、一方的な連続攻撃に素早く割り込んだり、
といった様々な部分に戦士の技量が現れてくる。実戦のソレはゲー
ムという戦闘もどきからすると、軽く数倍〜数十倍の難易度にもな
るだろう。

武器を使うタイプの モック 武闘家 であるレイシンは足技を得意とし、
武器と足技を組み合わせてコンビネーションを構築するタイプのフ
アイターである。

一般に足技の威力は腕による打撃の3倍と言われているが、同時
に使いこなす難易度も3倍かそれ以上になる。身体を支え、移動に
使う2本の足の片側を攻撃に利用するのだ。難易度の高さは当然の
帰結であった。威力を乗せるための重心移動ひとつをとっても、技
のレベルを決定するほどの重要事項になる。

また激しい戦闘で足技を使っていれば、自ずと転倒しやすくなる
のが道理というものだった。たとえば現実で野生動物と戦っていて

転んだりすればどうなるか。相手にもよるが、まず大きな失敗となるだろう。如何に豊富なHPに守られているとはいえ、様々なモンスターと戦うシビアな冒険の舞台において、無闇な転倒は致命的な事故の原因となり易い。つまり足技を頻繁に使うということは、それだけで高い技量が要求されることを示している。

武器を使う モンク 武闘家 は少なくとも、その大半が爪など 武闘家 専用の武器であり、レイシンのように棍や両手両刃武器はあまり使いたがらない。これは 武闘家 の特徴となるコンビネーションの多くにパンチ系の技が組み込まれているためだろう。武器の使用はそれらパンチが組み込まれたコンビネーションの使用を不能にしてしまうのだ。専用武器である爪や防具として表現されている籠手であれば、パンチ系の特技を邪魔することがない。それは大きな利点と言えた。

大きな武器を使えば、その分攻撃の威力は大きく増加する。レイシンは高威力の武器と足技の組み合わせを選択しているため、高ダメージ仕様なのは間違いないが、その代償として一般的な 武闘家 にとつてダメージ源となっている派手な連続技の多くが使えなくなっている。その選択は想定している敵に理由がある。つまりジンと一緒にいる以上、レイシンの仮想敵も必然的にドラゴンとなる。

多段にわたる派手な連続技は、その後半に高ダメージ技が集中するため、一度開始したら技を出し切らねばダメージが確保できない。その結果、長い技後硬直を甘んじて受け入れなければならず、一定以上の実力者を相手にすれば確実に反撃を受けることになる。かといって、それを嫌って途中で技をキャンセルすれば、ダメージを与えることが出来ない上に、中途半端な技でMPだけを消耗することになってしまう。ドラゴンと戦う際の戦闘継続性とMPの使用効率、可能な限りの大ダメージ、ジンとのコンビネーションといった

諸要素をバランスさせた結果、レイシンは単発技をメインとする現在のスタイルに辿りついていた。

ただし、たとえ単発技メインといっても前衛戦士職の中にあつては 武闘家 の連続技はやはり段違いに豊富である。………そして現在も単発技同士を組合せてコンビネーションさせつつ、ジンを攻め立てていた。

前転から浴びせ風のカカト落としに武器の振り下ろし攻撃を重ね、着地からそのまま最下段の水面蹴りに繋げる。たまらず飛び退って回避するジン。追撃でキレの良い中段蹴りをガードさせておき、反撃を見越してのサイドステップから武器攻撃へと連携させていく。ジンは鋭い多段攻撃を弾き返すために盾を大きく振るう。見切ったレイシンはヒット寸前で回避し、一定の距離を保つようにする。

開始から20手ほどとなる。さほど素早い動きではないが、テンポ良く確認するような動きで2人は戦っていた。まだクリーンヒットこそ無いが、レイシンが戦いを一方的有利に進めていた。

間合いをとつた2人はここから戦いのステージを上げる。武器を握り直すレイシン。ジンは気迫が増して行く。具体的には70レベルまで抑えていた力を75レベルにまで戻してゆく。

ジンは一般的な意味においては、あまり面白みの無い ガーディア 守護戦士 ン だった。

一線級のプレイヤーを参考にしようとする場合、まずどのような戦法や連携を使うのかを把握し、その登録しているショートカットを割り出したとしても、コンビネーションを『部分的に真似する』といったことをやりがちである。

近年のゲーム事情では、ショートカットテーブル自体を交換できるようになっていたため、戦う敵の属性ごとにショートカットテーブルを作成して使い分け、また長期戦であれば再使用規制の掛かった特技を交換する予備のショートカットリストも作成するのが、廃人級プレイングに於いてはもっぱら常識となっていた。このため偵察を繰り返したところで、ショートカットリストの全体像を知ることとは難しく、自然、部分的に真似するのが限界になる。すると、華麗な決め技だけを真似したがるプレイヤーが増えることになり易いのだ。

そもそも戦闘には流れがあり、その決め技を出すに到る経緯があつて始めて、その連携が決め技になるもののだが、攻略サイトや一部の雑誌が決め技だけを大きくピックアップすることもあつてか、一部分だけを真似しようとする風潮を加速させていた。

そこを行くと、ジンが登録している特技のショートカットはかなり大雑把で魅力に乏しい。

大災害 があつてショートカットテーブルの交換ができなくなった現在、多くの戦士達が何の特技を登録するかで吟味を重ねている。ショートカットの内容はトップシークレットでもおかしくない重要情報であつたが、ジンの場合は何故か逆にいくつかスペースが余っていたりする。 守護戦士 なので一応はタウンテイニングと盾を使う特技をメインに緊急特技も基本として入れてある。そこに竜殺し の特技を入れたら、後はオマケのように使い勝手の良い攻撃特技をいくつか入れてあるのみ。……つまり、バレやすい構成になつているのだ。それは相手に動きを読まれる（＝読ませる）ことを前提にした構成にするためだ。

エルダー・テイルは膨大な情報量を持つ複雑なゲームであり、も

ともと特技の数も多い。このため相手の使用特技自体を把握するのが困難になっている。対戦格闘ゲームと異なり、特に一般プレイヤーなどであれば、敵どころか味方の使う特技ですら把握しないで戦っていることも珍しくない。普通に遊んでいれば（PKに襲われないう限り）プレイヤー同士で戦うことは稀であることも大きな原因である。

ジンは相手に動きを読まれることを前提に、読み合いを仕掛けていく戦法を取っている。実のところ相手がこちらの動きを読んでも読めなければ、『裏をかくこと』ができないためである。裏をかくことができない場合、単純な力押しで勝負を決めることになり、結局は効率が悪くなるのだ。一部のプレイヤーが特技構成を秘密にするのは、どんな技を使ってくるのか分からなくすることで、相手が対応できないようにするためだ。……このことを逆にすれば、読まれてしまえば対応されてしまう、ということの意味している。つまり、ジンは使用特技を読まれても負けに直結しないことを優先して特技を選択していることになる。

打って変わり、鋭い踏み込みから圧倒的な速度を持つ斬撃が放たれる。レイシンはそれを辛うじて武器で防いでいた。これはニキータにも一目で理解できた。話に聞いていた『極撃』であろうと確信する。……と同時に、防いだレイシンに驚きを禁じえない。知っていたからこそ防ぐことができたのだろう、と思う。

片手剣としては最も重量のあるシリーズであるブロードバスタード系を使うジンは、それを軽々と、……否。重く、鋭く振るう。ジンの極撃とは単なる通常攻撃のバリエーションだったが、この時既に中級特技クラスの速度と威力を持ったものになりつつあった。

レイシンが自分の間合いに素早くポジションニングして有利に戦いを進めていくスタイルなのに対し、ジンはどんどん前進していくスタイルである。盾を活かし、時に強引に、時に鋭く、時に柔軟に間合いを詰めていくのだ。カウンターになることもあるが、基本的に相手を後退させることが目的に含まれる。格闘戦では後退しながら威力のある攻撃を加えることは難しいため、相手を後退させるほどの前進力を持つことは即ち自身の被ダメージを減少させることに繋がっていくのだ。基本原理に基づく王道的な戦法でもある。

元来、長剣を使う戦士の標準的な有効距離は90センチ前後とされる。その距離に入る一瞬を絶妙に捉えて攻撃するのが一流の剣士の条件であった。全てはその間合いを軸に攻防が収斂されていく。如何に相手よりも速くその間合いに入るのか、如何に自分が的確にタイミングを捉えるか、如何に相手のタイミングを崩すのか、如何に間合いを勘違いさせるのか、エトセトラ、e t c。

この『90センチ大会』という格闘ゲームにそのまま挑んだとすれば、ジンなどでは二流どまりの戦士にしかなれない。剣術とはそれほどに研鑽が積まれている世界であって、果てしなく『上には上がいる』のだ。

逆にこの90センチの間合いを外してしまえば、たとえ一流の剣士といえど、十分な実力を発揮することはできなくなる。その大元の原因はフォームを固めていることにあった。かといって、フォームを固めなければ『刃を立てる』ことができない。もしくは反復練習を繰り返していない動作では必要な威力・速度・精度で得物を振るうことが出来なくなる。そもフォームとは『威力・速度・精度』が高くなるものとして抽出され、反復動作を繰り返す動作であるため、そこから外れれば『威力・速度・精度』が下がるのが道理である。

……同様に、特技の使用はシステムのサポートによって『最適な動作』を実現させている。つまりインパクトから逆算して既定動作（剣ならば振りかぶるなどの準備動作）を開始し、敵も止まっただけの訳でもないため、攻撃の理論値を実現可能とする許容範囲内に入ったところで技を炸裂させることになる。

ジンの異常に高く感じる防御力の秘密（のいくらか）は、命中の直前に僅かに打撃面をズラす技術（既にセンスに近い何か）にある。人型サイズ同士の戦闘であれば、自身が攻撃し易い距離は相手にとっても攻撃し易い距離となるはずであったが、ジンは『90センチの呪縛』から解放されているため、攻撃のための前進によって、同時に敵の攻撃を不発にさせることが可能になっている。……しかし、それも練習に付き合わせた当の本人を相手にしては、そうそう通じるものではなかった。

武器よりも腕自体がムチであるかのような速度になっている。腕の先にあるはずの武器は、もはや霞むような速度でレイシンを襲っていく。連続する攻撃音。レイシンはほぼ勘だけで攻撃を防いでいた。瞬間的に反撃に転じ、逆に自分から間合いを潰してヒザ蹴りを放つ。ジンも同時にヒザを放ってレイシンの攻撃を逸らしていた。レイシンはそのまま武器の一撃を素早く繋げに行く。

「ぐっ……」

交錯したかと思えば、レイシンが大ダメージを受けてグラついた。安易に当てに来た（＝ガードさせるのが目的の）一撃を見切つて、ジンは斬り抜けを重ねている。立ち止まっただけの打ち合いと見せて、突然の移動斬りだった。相打ちスレスレの同時攻撃でカウンターを取っていくその技法は、ジンが「青」と呼ばれた頃の業^{わざ}である。

その過去も身近に知っていたレイシンは、普段よりも何倍も凄みを増した笑みを浮かべる。ジンもそれに呼応するように笑みを浮かべた。

呼吸も忘れて見入っていたユフィリアが、今の内にとばかりに空気を求めてあえぐ。ニキータも深く息を吸い込み、肺にたつぷりと新鮮な空気を送り込んでおく。

いとも簡単にレイシングローキックを決める。

レイシンの蹴りは当たる直前までミドルとの区別が付かない。このためジンはローに対する防御を捨てる。ヒザの部分は可動部位に近いため鎧が薄い。しばらくすれば自動的に修復すると言っても、ダメージを受ければ鎧は変形することもあって、ローキックなどはそう何度も受けたい技ではない。

レイシングもう一度ローでくるのを見てジンは一歩下がる。……と、突然に速度とキレを増した後ろ回し蹴りがジンの頭部を襲った。

「ガ……ッ！」

咄嗟に盾で受けたが、やはり衝撃を殺しきれていない。

「モーション入力かよ……」

特技 をショートカットにあるアイコンからではなく、ジェスチャーに似た体の動き・サインによって発動させる方法が存在していた。一部のプレイヤー達にとってはかなり早い段階から既に知られていたものであった。モーションの一部の動きを真似るその入力方式はゲーム時代には当然ながら公式として存在していなかったため、「アクション入力」「モーション起動」「任意発動」などの様

々な名前で呼ばれることになる。

その主なメリットは、ショートカットに登録していない特技であっても使用できることだろう。デメリットは動作最適化が働かないため、自分で命中させなければならない点にある。蠅ハエのような小さくて動きの素早い相手に攻撃する場合にはショートカットからアイコンで入力する方法が圧倒的に適しており、自身に効果を発揮するタイプの特技は命中失敗などのリスクが無いため、ショートカットに登録していないものをモーション入力によって任意発動する方法が適している。一般プレイヤーの多くは（ゲームはともかく）実際の戦闘に関しては完全に素人であったため、いざという場面で信頼がおけないものとして敬遠されることも多い。

2人は間合いの攻防と激しい打ち合いに戻っていた。斬り抜けを警戒するレイシんと、モーション入力によって増加したコンポのバリエーションを警戒するジン。それでも2人は変わらぬ速度で攻防を繰り返していく。

「……………ユフィ？ どうするの？」

ユフィリアが呪文詠唱を始めていた。それに気付いた2人が手を休める。完成した呪文が投射されると、ジンのHPが回復していた。

「回復魔法、か」

「だって、まだ戦うんでしょ？」

それだけを言うと、今度はレイシンのために回復呪文の詠唱を始める。

ジンは口元をニヤつかせて笑うと、レイシンへの回復呪文を邪魔

するべく、その射線に身体を割り込ませようと走る。ユフィリアは驚いてビクツとしていたが、レイシンもそうはさせまいと、ジンに体当たりするようにして妨害を阻止しようとする。

「ユフィさん、こっちへ！」

ジンを押し返し、その反動も利用して離れた場所へ走る。

「まだまだっ！」

ジンがダッシュし、好んで使うシールドを用いての突進技を繰り出す。緑色の軌跡を曳いて急加速し、レイシンを後ろから襲う。

「ハッ！」

走り高跳びのバーをパスする風の、見事な背面跳びでジンの攻撃
ハイジャン
特技を回避すると綺麗に着地し、ユフィリアからの回復呪文を受け取る。

「ククク」

「ハハハ」

楽しげな2人はさらに戦闘を加速させていく。

(イチヤイチヤ、か。確かに見せつけられちゃったわね……)

戦闘嫌いのニキータですら心がざわめくのだ。隣のユフィリアは落ち着き無く、体を動かしながら観戦するのも当然だろうと思う。もどかしいのだ。飛びこんで参戦したいけれども、しかし、2人の邪魔をしたくもなかった。

「あれって、レイシン……さん？」

「え？」

段々とレイシンがジンを圧倒し始める。良く見れば 狼牙族 の特徴が各所に現れ始めていた。レイシンが 狼牙族 であることなど、これまで殆ど意識したことがなかっただけに、意外に感じてしまっ。

狼牙族 は平素は少し髪の毛の多い人間といった外見をしているのだが、戦意が高揚してくると狼の特性をあらわす。瞳が黄金に輝き、狼のごとき耳や幻の尾が出現するのだ。それと同時に筋力も上昇し、戦闘力が一時的に高まるのだ。…… レイシンは足を止め、獣性の解放を始める。

「種族特性ね」

「ちがうよ。アレって……」

「どういうこと、ユファイ？」

ユフィリアの変化に気が付いて、ジーンが「問題ない」とジェスチャーで示した。

「さて、と。ここからは俺の趣味だな。」

レベル抑制を止め、81レベルに力を戻す。そして迷うことなく フローティング・スタンス を起動させた。そのまま第2段階の能力を呼び覚ます。戦闘モードの上位版であり、いわば『戦神モード』とでも言うべきものだった。その名を『荒神』という。

今やレイシンの意識は中次段階へと達し、フリーライド を開始していた。

もともと優しい人間であるレイシンは肯定的な人格的特徴の持ち

主であり、バランス性に秀でている。この場合であれば 狼牙族の種族特性を利用し、身体そのものが持つ意識と自身の意識をバランスさせていた。レイシンは獣化も暴走も狂人化バーサクもしない。それは実際のところ、勇者的な性質に近いものである。

フリーライド とは、身体の乗りこなしの事であり、その自由化を意味する。 冒険者 に対して肉体的に遥かに劣る人類では、その肉体の能力を十全に振るうことが出来ない。想像力が足りない。感覚が追いつかない。そのためシステムサポートに『依存』させられている。もつと言えば、『自己を保全するため』にリミッターが掛かっているのだ。力を振るえば、その力のフィードバックから自己が侵食を受ける。その危機感^は戦闘の高揚を超えて、根源的な恐怖を喚起する種類のものだ。自分と思う自分が『変わってしまふ』という危機に晒されることになる。

フリーライド に成功したレイシンは90レベルの存在としてその力を自由に振るうことが出来る。それどころか、狼牙族の種族特性が解放されている現在、その能力は90レベルを越えたものになるのだ。……これによってジンのアドバンテージは消えた。逆に9レベルを越えるハンデが押し掛かることになる。

「いくよ？」

「来い！」

確かに、ひとつひとつの違いは分かりにくい。伸びが違う、キレが違う、圧力が増し、技の戻しがコンパクトになる。それらが合成されることで手がつけられなくなっていた。

ジンの最強状態はほとんど理解できない種類のものだったが、レイシンのそれはニキータにも感覚的に理解できていた。巧いのでは

なく、強い。そういう種類の戦闘法を確立させつつあるのが『彼ら』なのだ。

(ジンさんは、この先にレベルに達している……！)

成長した 冒険者 はドラゴンとも戦う強者となれる。如何に仲間と連携してその力を高めようと、それぞれの戦士は各個に最強と対峙しなければならぬのだし、対峙しうるのだ。

いつかの砂浜で見せた、ドラゴンと戦うスタイルで戦うジンは、レイシンに圧されながらも対抗しようと足掻いていた。やがてあり得ない方向に身体がズレて攻撃を回避し始める。その様子を表現するのであれば、空ではなく、『地を飛んで』いた。

フローティング・スタンス の高級運用。

この技は「大地から浮力を得て回避力を向上させる構え」として、サブ職 竜殺し の目玉と見做される回避系特技である。回避性能だけであれば、他にもより高性能な特技が存在しているが、この特技はその性質から使用者の運動性能を激変させる可能性を秘めていた。

通常、体重を越える浮力を得れば、人体は浮かび上がってしまう。しかし、空を飛ぶための特技ではないため、足を付けている間だけ大地から浮力が供給されるという仕組みになっている。装備重量の大小に関わらず得られるその浮力の限界は、ジンの行った実験では遂に分からなかった。体重の数倍の重量を掛けても、浮力が無尽蔵に強化・供給され、一定の状態を生み出し続けるためだ。浮力の限界を知ろうにもジンの身体が先に持たなくなってしまう。ならば無限の浮力が得られる、と表現してもさして間違ってもいないだろう。

と思われた。

回避性能に関しては、簡単に言ってしまうえば『軽くなって動き易く』なる。実際には装備重量は消えていないため、重いまま軽いのと同じように動けるようになる。感覚的に分かり難い部分なのは、重いままなので実際には速く動けるわけではない部分だろう。例えば走ろうとすると、両足が地から離れる『空中局面』があるため、浮力の効果は限定的になるのだ。従って、回避の初動を助ける意味合いが強い。停止慣性力を振り切って回避性を向上させるためのものなのだ。

しかし、その使用法は序の口に過ぎない。その本領は、地に足を付けたままでこそ発揮される。例えば、野球でみかけるスライディングタツクルの場合、名人ともなれば5メートル以上の距離を滑って移動し、大きなカーブやS字を描いて野手を躲すことすらしてのけるのである。フローティング・スタンスの使用者は大地からの浮力を得ていることから、単なるスライディングであれば、30メートルを軽く越える移動が可能となる。しかも、地に足が付いていれば原理上360度全方向に身体を滑らせることが可能だ。実際には使用者の体重移動そのもののレベルが限界を決定する程だった。

加えて転倒事故防止効果と無限の浮力があるため、身体を深く倒しても、その方向に移動しようとして力を加えれば簡単に立ち上がることも可能だった。その動きはおもちゃの起き上がり小法師に近い。アイススケートなどでは勝負にならない多方向性は、結果的に地上にあつては人体に不可能な運動性能を与えたことになる。ジンは地を滑り、翔け、舞った。

強大な圧力を発するレイシンに一方的に攻められながらも、するとなめらかにポジションを変えてゆく。死角に入り、近接から

極撃を連打することすらやってのける。攻めに転じ、反撃を受け流し、また攻めに転じていく。ドラゴンと戦うためのスタイルとは、つまるところ、自分よりも強い者と戦うためのスタイルだった。

攻めるジンが、突然に半歩下がる。

一瞬遅れて銀色の弧が地から駆け昇っていた。後退を兼ねたサマールソルトキック。その銀の弧は一瞬速く振り抜かれた蹴り足の残光に過ぎないため、エフェクトを見てから回避するのでは間に合わない。それ以前に接近戦で真下から襲ってくるこの技に対処するのは至難と言えよう。

ギリギリで回避できたジンは、レイシンが体勢を立て直すタイミングを狙うべく素早くダッシュを掛ける。

しかし、それはレイシンの狙い通りの行動だった。誘いである。至近距離からのワイバーン・キックをジンはシールドでガードする否、ガードさせられている。吹き飛ばされ、ジャリジャリと大きく後退。いち早く体勢を立て直したレイシンは最大加速をかけ、一瞬でその姿が掻き消えた。

刹那、月を背負うレイシン。続く空を断つ黒き一閃は、まさに死神の鎌。ガードしようとしたジンの左肩から血しぶきが暗闇に弾けた。

フローティング・スタンスの弱点とは、ノックバックと呼ばれる吹き飛ばし攻撃への耐性が失われることにある。吹き飛ばされることでダメージを運動エネルギーに変換し、そのまま飛散させる効果も付随するのだが、一方で前線構築を主眼とする通常のゲームプレイングにおいては、前衛戦士職にとってかなり大きなデメリットにもなりえる。ダメージを低く抑えられたとしても、前線が崩

壊すればチームが負けてしまう可能性がある。

互いに手口を知り尽くしているため、レイシンはジンをノックバツク誘発で後退させ、その間に体勢を整えて大技を叩き込む作戦に出ている。

断空間。

ジャンプ中を条件として放たれる武器振り下ろしの高威力特技で、レイシンの決め技の一つだ。今回の場合、放物線を描く比較的ゆったりとしたジャンプではなく、ダッシュからそのまま突き刺さるようなライナー性のジャンプを用い、全身の力を解き放つ最大の一撃となった。

ノックバツクから回復するかどうかのタイミングでは回避は間に合わない。ジンはシールドによるガードを試みるも、レイシンの愛用武器ドラゴン・ホーンズに左肩を深く抉られていた。それはほぼ勝負を決する一撃である。

が、

「ダメエええーッ!!!」

語尾が高音を越えて超音波になるほどの、ユフィリアによる全力の制止。

ニキータは動けずに、ただスローモーションのように起こった出来事を観ていた。

戦闘モードですら目で追うのが厳しい全速のレイシンが放つ強大な一撃に、ジンがガードごと左肩を破壊される。そのままレイシンはジンの背後に着地しようとしていた。たたらを踏んだジンが、振

り返る。その時、僅かな手元の操作で剣が青の光を点した。絶対死を意味する最強の……、ユフィリアの絶叫も虚しく、レイシンの背中へとジンが突進し、2人のシルエットが重なった。

駆け出すユフィリアになんとか付いて行こうとしたが、足が巧く動かない。

地面に吹き飛ばされるレイシン。ジンは、激突の衝撃にもんどおりを打って仰向けに倒れる。ゆっくりと身を沈めながら手の中の力を空に解き放った。振るわれた剣から青の輝きが闇夜に溶けて、夜空の星々を彩る。

戦いは、終わった。

「ジンさん！レイシンさん！大丈夫!？」

「こっちはなんともないよ。ありがとう。」

「あーっ、くっそおー、使っちゃまったか……。肩がイテー」

ホツとしながらも駆け寄る。ジンの肩は派手に血が噴出していた。

「待って、回復するね?」

「おう、サンキュ。……それと、良く止めてくれたな。偉いぞ、ユフィリア」

「えへへー。でしょ?」

呪文詠唱を始める。ジンは膝枕を要求し、寝転がったまま足を動かしてユフィリアの膝に頭を乗せている。

レイシンがジンの傍に立つ。戦闘の終了と共に、
狼牙族 の種

族特徴は消えていた。

「大丈夫？」

「見た目ほどじゃねーけど、ちよつと痛えな。……………勘は戻った
だろ？」

「お陰さまでね」

「それと、悪かったな ドラゴンバスター 竜破斬 を使っちゃった。」

「当たってないから、ね。死んでもユフィさんに復活させて貰えば
いいだけだし」

「そうだけど……………それにしても、くっそー、勝てなかったか。
残念」

「はっはっは」

「治癒終わったよー」

「サンキュ。つてか、鎧の耐久値も激減だろ、これ？」

「大穴が開いてますね」

「修復が始まってるよ」

「ランニングゴストが馬鹿にならないんだぞ？ 練習費として代金
を要求するっ！」

「はっはっは。負けたんだからそっち持ちでしょ？」

「おっ、なかなか言うじゃねーの？ なら、もっぺんやつか？今度
は 極意 も使ってやんよ？」

「いや、勝ち逃げさせてもらっよ。明日の食事の準備もあるしね？」
「キタネー、いつもそれじゃねーか」

2人のコンビネーションは、こうして本気をぶつけ合うことで培
われたらしいことをニキータは知った。正直に言っつて、大人しいレ
イシンがジンにここまで対抗できるとは思っつていなかった。

それとワケが分からなくなるほどの高速戦闘に驚愕する。あの速
度で戦いながらアイコン操作もするととなると、全く手も足も出そう

にない。ジンが 竜破斬 を使ってしまつのも仕方がないことのように思えた。

実際にはモーシヨン入力も混ぜて利用しているため、ニキータの想像通りでは無かつたのではあるが、実力差を垣間見れたのは彼女たちにとって大きな刺激となつた。

ニキータは聞きたかつたことを思い切つて尋ねることにする。

「ジンさん、どうしてシュウトとは戦わないんですか？ レイシンさんとは戦うのに」

「んー、アイツは今、大きく伸びていく時期だからな。俺と戦つて1〜2秒長く生き残るのに汲々とさせていいタイミングじゃないっていかさ」

「大きく、伸びる？」

「予兆はもう始まつてる。けど、シュウトにはまだ言つなよ？……」

……まあ、俺もアイツに合わせて手加減なんかしてらんないつてのもあるけどな。そういうのって、無駄だろ？」

「そうですか……」

やはり、理由は在つたのだ。その見立ては自分よりもずっと正確だろうと思つた。

「明日からはしばらく、レイにボッコボコにされるのを見て楽しむとしようぜ？……リア充、死すべし。」

そう意地悪く笑っていた。照れ隠しだろうと思つて聞き流す。ニキータにしても、シュウトが戦つところを見るのは少しばかり楽しみでもあつた。

「ただいま」

「おかえり。早かったじゃないか？」

何処となくフラフラとした足取りで戻って来たユフィリアに挨拶を返す。

「どうだった？」

「何が？」

「ラブラブで、イチャイチャだったんだろ？」

「えー？ うん……………すっごく、激しかったよ」

「え？」

そのまま手をひらひらと振ってユフィリアは天幕の中に入った。
った。

「たしかに熱かったわね」

「そうなん、だ……………？」

ニキータまでどことなく熱っぽい表情をしているのにどきまぎする。「もう、休むわね。オヤスミ？」とシュウトに声を掛けて、彼女も天幕に消えた。

「というか……………何が激しかったんだ？」

普段から冷静なニキータが誤解を解かなかったこともあってか、その夜のシュウトはうまく寝付けなかったという。

「例えば、ショートスペル法っス」

「それはどうやればいいの？」

石丸の説明にユフィリアは興味津々となって身を乗り出した。

「アイコン入力をせず、自分で呪文を詠唱するっス。この時、ショートカットに登録してアイコン入力した時と同じ長さの呪文を唱えるのがショートスペル法っスね。」

「それって、……………もしかして丸暗記っこと？」

「そうっス」

「なんとなくですけど、一字一句間違えてもダメなんじゃ？」

一緒に聞いていたシュウトが質問を加える。

「もちろんっス。一緒に動作も真似する必要があるっス」

「…………前から思ってたんだけど、『この世界』って、ものすごくアタマが良くないとダメなトコロ？」

ユフィリアの言葉に全員が苦笑いしていた。

特に問題もなく一日の移動を終え、夜は誰が決めるともなく特訓の時間になった。夕食後のメインイベントはシュウトとレイシンの模擬戦である。

弓をメインウェポンとするシュウトだったが、近接武器を使っても想像以上に戦えている。短めの武器を使う 暗殺者 は、手足を武器とする 武闘家 とでは間合いが力ち合ってしまう。位置取りボクシングではレイシンに一日の長があつたため、これを崩すべくシュウトは戦いを加速させていくが、それもきつちりと捌いて返し技を決めていく横綱相撲にてレイシンが勝利を収めていた。必殺のアサシネイトを封じていることもあり、シュウトにはかなり不利な状態でもあり、善戦していたことになる。

シュウトや石丸からみればレイシンの強さこそ予想以上となる。シュウトが勝つても全くおかしくないはずが、フタを開けてみればレイシンの完勝なのだ。「上手なのは知ってたけど、こんなに強かつたっけ？」が正直な感想だろう。

逆に昨夜の戦いを観戦していたニキータ達からすれば、シュウトが予想よりも巧みに戦っていた、となる。字義の通りにレイシンは『一回りも強く』なっていたため、この結果は自然な帰結と感じていた。

ボコボコにされたシュウトをみて満足したジンは、さっさと何処かに消えてしまっていた。理由は言わなかったが、レッサー・ヒドラと戦った時にレベルが上がったため、追加の鍛錬が必要になっているのだ。

もう一度と再戦を希望したシュウトだったが、次は明後日と言われてしまう。「連コインしても意味なし」とジンから言い渡されていた。反省やイメージトレーニングをしてから再戦しなければ同じことを繰り返すばかりになってしまう。数をこなすべき時期もあれば、1回1回を大事にすべき時もある。

こうしてシュウトまでもがかなりの速度で戦闘をこなしていたため、ニキータが具体的にどうやっているのか？という質問をし、モーション入力による特技の任意発動の話題になり、更にユフィリアが「魔法を使う人はどうすればいいの？」と尋ねたため、それに石丸が答えていたところだった。石丸は仮説を混ぜて4つの方法を説明する。

シヨートスペル法。

18個まで登録できる特技のシヨートカット・リストから『アイコン入力』を行うと、呪文の場合は短い詠唱ののち魔法がその効果を発揮する。（呪文はシヨートカットに登録されると『短い詠唱』で使えるようになる）

この短い詠唱シヨートスペルの内容を全て記憶し、自分の口でもって詠唱すればシヨートカットに登録していないものでも任意に発動することが出来る。シヨートスペル法とはこの様な魔法版モーション入力のことである。

逆にシヨートカットに登録していない呪文の場合、魔法書から選択すると『通常の長さ』で詠唱したのち発動される。こちらも記憶して詠唱すれば呪文を発動できる（ロングスペル法）のだが、特にメリットが無いために無視されている。

シヨートスペル法では常識を超える早口ならばアイコン入力よりも素早く呪文を発動できる可能性があると言われているが、それよりもアイテムなどで詠唱時間を短縮した方が現実的な手段とされている。急こうとすればするほど、途中で嘔んだり、暗唱をトチる可能性が高くなるからだ。

高レベルのステータス値の影響で記憶力なども高まってはいるが、どんな工夫があるのかはまだまだ模索されている状態だった。

カスタムスペル法。

ショートスペル法を応用する仮説理論。対個・対全体といったように対象を選択できる呪文の場合、詠唱時の呪文の語尾や表現が変化している。ここから、ひとつの対象にしか使用できない呪文であっても、語尾を変化させるなどすることで複数の対象に効果を及ぼすことが可能かもしれないとする仮説。

また、炎の属性魔法などの呪文含まれる特定の文言を別のものに差し替えることで、例えば毒属性などに変えることができるのではないかと予想されていた。これらはまだウワサの域を出ていない。

ファストブリッド法。

石丸が考案したテクニク。先に魔力を高めてからショートスペル法で詠唱するもの。詠唱からの増幅時間を短縮し、発動を早めるテクニク。増幅時間のいくらかを詠唱の前に持つてくるため、呪文使用全体の長さは短くはならない。むしろ自分で魔力を高めるために長くなり易い。

これはちよつとしたタイミングのズレを引き起こすだけの代物なので、通常のアイコン入力と、このファストブリッド（速弾）法との2種類の発動タイミングによって回避しにくくなるといった効果がある。……といっても呪文ごとに発動タイミングは違うため、早いか遅いかの違いは人間同士のハイレベル戦闘以外では殆ど影響しない。よって、発動までの時間が長い呪文に使うのが適切な使用方法である。

ロングスペル・ブースト法。

石丸の仮説理論。ブーステッド・スペルによって魔法の威力を増幅しようとする試み。

呪文詠唱を自らで行えば魔法の任意発動は可能で、それがショートスペルでもロングスペルでも結果は変わらない。するとロングスペルからは意味が失われ、長い詠唱時間というマイナスのみが残ることになってしまう。ショートスペルになることで圧縮された『力ある言葉』をロングスペル中に置き換えて埋め込むことが出来れば、あるいは強化・増幅できるのではないか、といった内容。鋭意研究中。

「こんな感じっス」

「そうなんだ。ありがと……」

説明だけでもユフィリアの心を折るのに十分な威力があった。呪文を丸暗記するだけでも大変なのに、その一部を変更しようと言っているのだ。どちらにしても石丸とは、^{クラス}職業 が違うため、ユフィリアはユフィリアで独自に研究・開発をしなければならないことになる。

「動作入力、か……」

一方の二キータは高速戦闘のことで頭を悩ませていた。

アイコン入力は実際の戦闘と脳内でのメニュー使用とを同時に行わなければならないため、一定以上のスピードで戦うことになる。難易度が飛躍的に増大する仕組みであった。特技ごとに設定されている発動までの時間や技後硬直、再使用規制とあわせて自然と戦闘速度を制限しているのだ。

物理攻撃を行う クラス 職業 ならば極端な話、使用可能表示のアイコンを端から順に使っていけばいいだけかもしれないが、例えば呪文使いの場合は『使う呪文』を間違うと狙った効果が得られないことになってしまう。味方の毒を回復したいのに麻痺を回復させても意味はないのだ。このため、複雑な戦術を駆使しようと思えば速度よりも正確さがより求められることになる。

一般的なプレイヤーの感覚で言えば、脳内アイコンをメインで見えて選択していればRPGのコマンド戦闘のような感覚で戦っていけるようになっていく。これはゲームプレイヤーに最強の肉体を持たせたものが 大災害 と呼ばれるものの性質だからだ。従って、その戦闘力はショートカットの選び方によっても大きく上下してしまう。

この段階では使用可能なアイコンを素早く入力することが即ち『最速の戦闘』であって、それ以外にはない。ニキータの認識もここに近かった。

上級プレイヤー達は味方との連携を重視するため、アイコン選択に振り分ける集中の度合いは相対的にみてかなり低くなる。周囲の情報を処理していれば情報量はあつという間に数倍化するのだ。ましてやフルレイドやレギオンレイドのような レイド 大規模戦闘 を制御下において処理するのは困難を極めた。

彼らにとって最速の戦闘にはあまり大きな価値はない。味方との連携をゆっくりでも適切に行う方が数倍重要であるためだ。戦闘には手順があり、守るべき原則を守らなければチームプレイは機能しない。従って、その範囲における最速の戦闘とは、熟練をもつてのみ得られる究極のチームプレイを意味する。

一方、ジン達はソコ戦闘が基本であるため、移動とポジション

グこそが命だ。特技の使用は二の次である。言ってしまうえば、ポジションの伴わない特技使用などは最適には程遠い代物でしかない。言葉だけの『最適』が実践において宙に浮いてしまうのを、彼らはよく理解していたのだ。間合いの外から繰り出される派手なモーションで予告された攻撃など、アクビをしてから対処しても間に合ってしまうものでしかない。

高速戦闘と言われるものは、結局のところ演出の問題が大きい。アイコン入力による特技の場合は極端にアソビが小さいために大した変化はつけられず、従って誰が使っても特技そのものに掛かる時間は変えられない。特技使用『前後』の動き方に変化をつけることによって速度感を演出することが重要なポイントになるのだ。

これは演出だからと馬鹿にしたものではなく、フェイントやブラフ、強引き、柔軟な変化といった虚実であったり、正確なリズムやテンポの変化、精妙なタイミング、距離感、ポジションといった間合いの運用、加えて戦術や部分的には戦略までもを包括する戦闘センスを発揮する場となっている。

この演出の一部に利用するものとして、ニキータの気にしているモーション入力による特技使用がある。その利点は大きく分けて2つ考えられる。

モーション入力を行うと、動作最適化が失われるため、アソビが大きくなる。この一見するとデメリットに見える部分を利用することで、逆に自由度を高めて運用するのだ。

例えばジンの 竜破斬 はモーション入力によるアソビを最大限に利用しており、青色エフェクトの非属性エネルギーを剣に点したら、後は殆ど自分でアレンジした攻撃技にしまっている。(竜破斬 は通常攻撃の代わりに使う低威力技のため、モーションパターンが20を越えていることも大きな要因になっている)

このようにアンビ（＝自動制御の外側）を運用するのが一つだ。

もう一つは技の繋ぎにモーション入力を利用することで、技の起動を短縮することである。

レイシンの場合は通常攻撃のローキックによってモーション入力の前提条件を満たし、二段目の後ろ回し蹴りとリンクさせて特技を発動させていた。アイコン入力を行えば、「ローキック 後ろ回し蹴り」のコンビネーションが素直にそのまま使われるが、モーション入力を利用した場合、「ローキック（通常攻撃） 後ろ回し蹴り（特技）」ということが可能になるのだ。……その結果、ローキックまでで止めることができるのと同時に、ローキックが含まれるコンビネーションからは後ろ回し蹴りへの派生が可能になってくる。

これは当然、その他のパンチ系、キック系のコンビネーションの全てで派生が可能であることを意味する上に、ショートカットに登録していないコンビネーション技までもがモーション入力によって引き出されることになる。その組み合わせは使いきれないほど、覚え切れないほどに膨大なもので、大きな可能性が秘められていた。こうして武器使用者であるレイシンは、コンビネーション技の不足をこちらの利点によって補っているのだ。

「どうすれば……」

「戦闘速度のこと？……レイシンさん、どうすればいいと思いますか？」

「うーん、数をこなせば、その内に慣れてくるんじゃない？」

（わぁー、テキトーだー）

（やっぱり、そうなるのよね……）（苦笑）

話がまとまった(？)ところで、解散の流れとなる。ニキータはシュウトと一緒にテントに向かって歩きつつ、雑談に興じていた。

「ジンさんはメチャクチャだけど……」

「レイシんさんはテキ……大らかよね」

2人揃って溜息をついてしまう。

「でも、レイシんさんがああ言っていると、少しホツとするかも」

「そうかな？ 逆に焦りそうだけど」

「フフ、やっぱりジンさんの方がスキ？」

イタズラっぽい顔をするニキータをシュウトはひと睨みし、視線を外して前を向いたまま答えを返した。

「ジンさんはなんだかんだ言っても色々と教えてくれるからね」

「それは、そうなのよねえ……」

足音に気付いたシュウトが振り向くと、背後からユフィリアが走ってきてニキータを抱きつくところだった。

「ニナ〜！」

「ワオ………どうしたの？」

「絶対にイジメだよ！ あんな呪文なんか覚えられないよ！」

「ああ、さっきの……」

「虐待かもしれない。ううん、虐待だった」

深く何度も頷くユフィリア。ニキータは苦笑いするばかりなので、仕方なくシュウトが口を挟む。

「それだって『本気になってやろうと思えば』できるんじゃないか

？」

「うつつ、だって、いしくん簡単そうに暗記して「何でできないん
スか？」みたいな感じなんだよ？」

石丸の真似がそれなりに似ていて笑いを誘われる。キョトンとし
て本気で分かってなさそうな雰囲気は良く出ていた。

「……さすがだ、石丸さん」

「目の前で簡単そうに実演されると、逆にハードル高くなっちゃう
感じ？」

「あるある」

「そう！そうなの！」

「つまり、こっちは高速戦闘で悩んでて、こっちは魔法の強化で悩
んでるわけだ」

「そうなの？」

「私の場合は、永続式の援護歌も問題よね。どうやって強化すれば
いいのか見当も付かないし」

「永続式の援護歌か………確かにどうすればいいのか分からない
な」

「うーん、ニナが自分で歌うとか？」

「口で歌えるなら単純に数が1つ増えるかもしれないけど、通常の
援護歌が使えなくなるよ」

「そっか」

「永続式の援護歌は強力なサポートスキルだから、それでも良いの
かもしれないけど………」

「………ところで、何かあった？ 2人とも急に強くなりたい、
みたいな感じだけだ」

一呼吸おいて、腰に手を当てながらシュウトが尋ねる。

「うーんと」

口ごもるユフィリアは分かりやすく目が泳いでしまう。後ろめたいというよりも笑いを堪えようとして見える。

「……………そうなのよね。焦ってる感じに見えた？」

「少し、ね」

ニキータが言いよどむようにしながら、ついとアゴを上げて闇に漂う星明りを見つめる。赤い髪がふわりと動いて、風の存在を知らせる。沈黙が冷めて固くなる前に口を開いた。

「昨日ね、ジンさんとレイシンさんが闘うのを観戦したのよ」

「ニナ!？」

ここで驚いたのはユフィリアの方だった。

「えっ……………それで、結果は？」

「だめだよ、ジンさんにナイシヨって言われてるのに」

「内緒？」

「平気よ……………というか、むしろ『オトナ』だったら言われた通りにしてるだけじゃダメでしょう？ 良い方向に期待を裏切る努力をしていかないよ」

「オトナ?……………それは、そうかもしれないけど」

「それに、シュウトには話もしちゃいけないのに、私達には平気で見せたりしているのって、おかしくない？」

「おかしい!そんなの絶対おかしいよ!」

付き合いが長いからなのか、ニキータは幾つかのキーワードを用

いてあっさりユフィリアを懐柔してしまっていた。

ニキータは社会人経験が短く、まだ実社会に対して失望するに至っていない。真面目に努力すれば評価されるとどこかしら信じている部分が眼差しに表れており、このことが現実世界ではまだ大学生のユフィリアやシュウトに対して「オトナの世界を知っている人」として説得力を発揮することになっていた。

「なぜナイシヨにするのかを考えれば、たぶん先入観を持たせたくないんだと思うの。ということは裏を返せば、私達は答えに近いものを見ているってことになるハズよね？」

「うん。あの時のレイシンさんの事だよね？」

「たぶん、ね」

「ジンさんじゃないのか。そうか、それで……」

シュウトの瞳が思案に沈む。呟きは幾つかのことに納得がいった、という様子だった。

「でも、なんで先入観を持つちゃダメなの？」

「え？………思い込んだり、頭から決め付けたりするから、じゃない？」

「それ、言葉が変わっただけじゃないかな。何となく分かるんだけど、理由はさっぱりというか」

「だけど、ぶつつけ本番じゃなきゃダメってことなんて、あるの？」

「あ………」

シュウトが何かを思い出したような声を出していた。別のものと繋がったのだ。

「なに？」

「ああ、前にジンさんに言われてて、こっちも悩んでいたんだけど、『感覚の再現はタブー』だって言われたんだ。それで『自己ベスト

を目指せ』って」

「うんうん。コンサートとかお芝居みたいに同じことを何度も繰り返し返すなら、少しずつでも上手になっただ方が嬉しいよね」

「え……？」

「わたし、何か変な事いつちやった？」

「いや、そんなこと、ないと思う……」

他者のモノの見え方に、一瞬だが触れた気がした。シュウトの認識していたものよりもずっと広い一般的な現象としてなんらかの真実を内包しているのかもしれない。

「ねえ、『自分化』の反対って、何だと思う？」

ニキータは自分の疑問を問いかける。

「自分じゃなくなること、みたいな話だろうけど……」

ジンが話していた内容の中ではシュウトにとっても気になる言葉の一つだった。

「それって、昨日のレイシンさんみたいだよな」

「え？」

「そうなの？」

「……わたし、また変な事いつちやった？」

「うん、全然、そんなことないわ」

ユフィリアの感覚的なものにニキータが舌を巻く。彼女は時々、異常なまでに鋭い時があるのだ。石丸とは違う意味で、同じものを見ているハズなのに、互いに違うものを見ているのかもしれないという気分させられる。しかし、決して不快には思っていないかった。年下の友人の、尊敬できる部分である。

「違う、自分……………?」
最近どこかで感じた、苦いような、熱いような記憶を辿ろうと、自然とみぞおちの辺りにシュウトは手を当てていた。

「だけど、不思議よね。別に努力しろとか言われたわけじゃないのに」

「ジンさんはズルいから何も言わないつもりかも」

「……………いや、僕はいろいろと注文つけられてるんだけど?」

「シュウトは、だって、ねえ?」

「うん。リア充死すべしって言ってたし」

「そんな理不尽な……………」

「シュウトが死んだら、わたし泣いてあげるからね。一滴ぐらいなら気合で泣けると思う」

「女優魂ね?」

「嘘泣きはいらぬよ。どうぞ、お構いなく。……………それよりユフィリアも不公平だと思うならジンさんに教えて貰ったらどうだ?」

「……………ジンさんがどうしてもって言うなら、教わってあげないこともないよ?」

「なぜ、上から目線……………」

「質問は困りますっ。マネージャーを通してください」

「なぜ、スキヤンダラス芸能人……………」

「ウフフ……………実は、もう頼んでみたんだけど、ダメだったのよ」

「そうなんだ?」

「うん。『まずはともかく特技の呪文を覚える』って。『それが終わったら仲間の特技も全部だからな』だって……………」

「それはそうか。回復職は予測よりも反応速度だからなあ。覚えて

なきや仕事にならないし」

「覚えることばかり。ゲーむつてもつと楽しいものじゃなかったっけ？ ねえ、もしかして何か間違ってるとか？」

「大丈夫、完璧に合ってるから。」にこっ

「ぶー」

「ところで、勝ったのってレイシンさんだろ？」

「アタリ」

「……………意外と自分が負けるところを僕に見られなかっただけだったにして」

「ウフフ、それはありそう」

「でも、ホントのホントはジンスさんの反則負けなんだよ」

「へえ、何やって反則？」

「あの 竜殺し の特技を使いそうになったのよ」

「ああ、 竜破斬 か。モーション入力だと瞬間的に使っちゃうかもね」

「そういうもの？」

「私が止めたんだよ」

「それ、地味に凄いよ」

結局、話はまとまらないままで終わった。シュウトにとっても有益で示唆的に感じてはいたものの、分からないことが分かっただけで、謎が増えた気分になっている。

しばらく時間を潰していると、練習を終えたのであるうづジーンが「眠い眠い」と言いながら帰ってきた。

「なんで、いつもそんなに眠そうなんですか？」

「ん？ ああ、眠気っていう謎パラメーターと対応するのは、たぶん意識活動だからさ。そもそも極意するのは意識強化法のことだったりするんだよ。つまりこの世界だと意識を使えば眠くなるってことさ」

「意識、ですか……？ それって意識を使えば強くなるってことですか？」

「微妙にニュアンスが違うけど、まあだいたいな。意到る気、氣到る血って言うんだ。太極拳だったっけかな？ 意識の有るところに気が集まり、気の集まるところに血が集まるってね」

「はあ……？」

「だから、気を集めるための意識なのさ。血液うちゅーのは解釈が難しいが、氣功治療だと血が集まれば怪我とかが回復しやすくなるって感じ、かな。」

「なるほど」

「解釈をたれると、一つには血つてのは実体だってことだ。意も気も形がないものだけど、血液は実在してる。つまり実体を操作するために、実体の無いものを動かすってロジックなんだ。」

「それともう一つ。これは俺の解釈だが、吸血鬼みたいなものもあるけど、『勇者の血筋』みたいな血の力と関係していると思ってる。遺伝子みたいなものが発見される前は、大半が血で説明されてただろ？ 血つてのは命の象徴であり、力の源だったりするわけだ」

「それじゃ、遺伝的な力なんですか？」

「んー、この話のポイントは昔の人達が強さの理由・原因をそんなようなモノとして表現しようとした、って部分にあるんだがな……」

……って、俺は眠いんだった。この話は、またふあ〜」（アクビ）

「あ、はい……」

「そつだ。シュウト、明日は俺とだからな？」

「え、模擬戦ですか？」

「いや、こないだの目隠しのヤツ」

「はい。わかりました」

可も無く、不可も無い。そんな一日。それは、ささやかな祈りの日々。

24 過去を眺めて

ミナミへと向かう旅は5日目の夜に入っていた。既に加古川は抜けているので、明日は午前中にもコウベ周辺に辿り着く。そうなればミナミまでは目と鼻の先だ。6日目の夕方には『相手方』と合流する見込みである。

今回の旅はシュウトにとっては半ば強化合宿となってしまう、3日目はジンと相手に気配を消す練習、4日目はまたレイシンの模倣戦をしている。いい加減に敗北続きでどんよりしてきたシュウトは、「本気で勝ちに行く！」と決意してジンを相手に思い切った作戦に出ていた。

「ちょっと待て！ 何やってる！？ これ殺気だろ？ 殺気だよな

?!」

「……………」

「くっそ！ フローティング・スタンスッ！」

「……………いきますよ？」

「ぐっ、間にあわねえ……………！」

ギリギリと限界まで引き絞られた弦が弾けてしまう寸前。力の高まりとともに、力ある言葉を唱える。

「アロー・ランページ！」

「キャッスル・オブ・ストーン ……！」

暗闇の中、襲い来る矢による範囲攻撃特技に対し、目隠したままのジンはガーディアン守護戦士の緊急特技を用いてシャットアウトしていた。キャッスル・オブ・ストーンならばブラインドネス盲目のステータス異常状態であっても成立するためだ。

ジンはミニマップとフローティング・スタンスの対不意打ち性能とを利用して対処しようとしたのだが、間に合わせる事ができなかった。しかし、矢が一本飛んでくると思っていたところで、この範囲攻撃である。結果的にキャッスル・オブ・ストーンの使用は正しい選択となっていた。

「てんめ、シュウト！ なにしやがる！！……………んっ？ しまっ
た！」

攻撃されたことで気配の探知を一瞬忘れ、シュウトを完全に見失う。

そもそもシュウトは今の段階ではミニマップ機能に反応されるような気配は発していない。ジンは「在るはずのものが無い」といった僅かな違和感を頼りにシュウトの位置を特定しようとしている。なので、探知に集中していないタイミングに消えられてしまうと発見するのはかなり困難になってしまう。

目隠しのジんに気配を消して触れることが出来ればシュウトの勝ちという勝負である。条件は「ダッシュの禁止」のみ。……………つまり、攻撃してはいけないとは言われていない。三番勝負に限定されてしまったため、弓を使つての攻撃で気を逸らす作戦は最後の奥の手だった。

初戦は小石をたくさん拾っておき、同時にばら撒いてかく乱する作戦だったが、タッチの直前で避けられてしまった。二戦目は木に登って空中からフェザーフォール羽毛落身を使つて接近する作戦に出たが、もう一步のところでもたまたも逃げられた。

ここまでくると、触ろうとする時の殺気か何かで避けられている
としか思えない。しかし、それならそれでやりようはある。

予想通り、ペたり、と手の先にジンの体が触れる感触がする。ゆ
っくりと眼を開き、勝利を宣言する。

「僕の勝ちです」

「マジかよ……………」

2人は別々の意味合いの溜息をついていた。

「シユウト、最後のはどうやった？ どうやって殺気を消した？」

「殺気が分かる様だったので、手を伸ばしたまま目をつぶって歩き
ました」

「考えやがったな。……………じゃあ あんめえ、お前の勝ちだ」

ジンの言葉に小さく拳を握り込んでいた。ガッツポーズなんてい
つ以来だろう。

「ニヤロウ、3回目で負けるとはなあ。……………で、どうすんだよ？」

「どう、とは……………？」

「おいおい、賭けをしてただろ。俺に何か訊きたい事があつたんじ
やないのか」

「あ……………ああ！ そうでした」

シユウトは約束のことなどすっかり忘れ去っていた。いざ質問し
ようと思うと巧く言葉が出てこない。勝てるとは思っていなかった
ので準備などしていない。まともでないまま、なんとなく言葉にす
ることになってしまう。

「ええっと、その、どうやったら強くなれるんでしょうか？」

「はあ？……一応、その、いろいろと教えさせて頂いてるか、と思うのですが？」

「いえ、それはそうなんですけど、もっと、こう、具体的にあるんじゃないかと」

「そりゃあるけどさ、今後の予定だのの兼ね合いで色々ムズかしいわけですが」

「そうですよね……」

自分でも今の質問にはかなり無理があった気がする。

「じゃあ、あの、ジンさんって凄く強いじゃないですか、どうやって努力とかしているんでしょう？」

「何が言いたいのかわからんのだが？」

「えっと、努力はしてるんですよね？」

「努力の方法なんて聞きたいのか？　そういうのは高校ぐらいまでで卒業しとくもんだろ」

「……すみません」

「努力つてのはな、三日坊主のことを言うんだよ。三日間だけ頑張ればいいんだ」

「三日だけですか？　その後は？」

「三日続けてまだ続いてたら、それはただの生活習慣であって、努力じゃなくなってるだろ」

「え……」

「俺は努力だの『がんばる』だのは嫌いだぞ。『する』のも『させる』のもな。……第一、努力をするために努力するっておかしいだろ。努力するために気力を奮い立たせて、実際に努力するところまで辿りつけないことだって、しばしばある」

「間々ありますね」

「だろ？　それは、第一段階の努力には成功してんだよ。だけど、そ

ここで満足しちゃったんだな。これはもう仕方ないことだと思っ。…
…山は動いたんだよ。」

「分かりますけど、それはどうかと……」

「エルダー・テイルみたいなMMOだって、ある段階から先はほとんど苦行みたいなもんじゃねーか。それでもやってんだろ？それは何でだ？」

「それは、……何ででしょうね？」

「つまり、そういうことだ」

「はあ……」

「それからウツトリ野郎は苦手だ。というか、大っ嫌いだ。いんだろ？ たかだか努力したぐらいで、さも大仰に自分の努力が大変だったみたいに言っつてウツトリしてる奴が」

「たまに、いるかもしれませんが……」

「そういうヤツに限って『結果の出ない努力には意味がない』とか、『努力できるのが才能』とか言いたがるんだよなあ……。……そんなもんは努力してない奴が言う台詞だろ？ みんな努力ぐらいしてるっつーの」

「ハハハハ」

乾いた笑いしか出てこない。自分が責められている気分になってしまっ。

「結果つてのは努力の方向や現状を確認するものなのを言うんだ。結果が出るのなんて当たり前なんだよ。それを社会的成功と混同させて結果がどうのこうのと偉そうに言い始めるヤツがいるからメチャクチャだ。過剰なプレッシャーをかけて周囲を潰しちまってる。それで言いたいことは『ボクがんばってます、ホメて？』なんだぜ？ ダッセーよ！ ウゼーっつーんだよ……！」

「いろいろ、大変なんですね……」

「それじゃあ、あの、ジンさんはどうしてそんなに強いんですか？」
「質問の意味がわからん。相対的には俺が強いんじゃない、お前らが弱いだけとも言えるんだが」

「そうかもしません。でも、それは理屈ですよね？」

「そうとも言う。基本的に、努力したからって強くなれるわけじゃない。けど、強い奴はなんらかの努力をしたと思っただろうな」

「それなら、やっぱりジンさんも努力したってことですよね」

「まあ、流石に努力してないと言ったら嘘になるだろうな。俺史上において最も必死だったと思うよ」

「必死だったんですね？」

「ああ。メシが不味かったからな」

「……………は？」

「いや、だから、メシが不味かったら本気出さだろ。初日に試さなかったか？俺はゲーム中の最高クラスの料理を大枚はたいて買って来て、食ったぞ。結果は言うまでも無いが……………」

「湿気た塩抜きせんべい味ですか」

「本気でこの世界から脱出しようと思う十分な理由だと思わないか？」

「えっと……………（眼がマジだ…………）」

「冗談も混じりにしか聞こえないが、半分は本気なのかもしれない。これまでのジンの付き合いからすれば、それが本当の理由ではないと思う。それでも努力するに足る十分な理由ではあったのかもしれない。シュウトにとっても、あの食事は良い思い出からは遠い。」

「それでも一人飛び抜けて強くないですか？何が違うんでしょう」

「そりゃ、だって、お前らぜんぜん努力してないんだから弱くて当然だろ？」

「言ってることが違いますか？ さっきは『みんな努力ぐらいしてる』って」

「そりゃ、こんな状況だし、努力ぐらいして当然だろ」

「え？……それはその、どういう？」

「努力の内容や質の話に決まってるだろ。それじゃあ、お前、自分が本当に努力してたと思ってるのか？」

「そのつもり……… だったんですが」

「じゃあ、なんで『ここ』に居るんだ？」

「……… それは」

真っ直ぐに核心を突いて来る。自分のしていた努力に自信が持てるか？といわれれば、確かに自信などない。

「だけど、スタートラインは同じでしたよね？ だったらどうしてどうやって……」

「待て待て、スタートラインは同じだけど、同じじゃないぞ？俺とお前らとじゃ使ってる常識が違うだろ」

「……… やはり知識の差ってことですか？」

「知識じゃない。常識だ」

「常識……」

「そう、常識」

「常識なんかで、そんな差が生まれたりするものですか？」

「俺にも経験があるが、学生時代には常識なんて平均的な考え方の集積で、反面教師的な扱いなんだが、社会人になると、成功法則の集合だったりで、扱いが変化するんだよ。学問的な考え方も全て知ってて当たり前前の状態で思考を共有するためのツールになるんだ」

「それは………」

「続きは明日にしよう。……ちょうどピッタリの場所があるから、続きはそこで話してやるっ」

翌日の午前中の早い時間に、石丸の先導で丘のような場所へ上がつて来ていた。

「わあ……いい眺め！」

峰を越えたのか、夏の青空の下に広がる景色には海が広がって見えた。

「たぶんこちら辺は須磨の辺りで、向こうの方に港町コウベがみえると思うっス。反対側は一ノ谷っスね。」

「一ノ谷ってどんなところ？」

「聞いたことはないっスか？ 源義経が逆落としをやったと言われている所っス」

「逆落とし………馬で崖を駆け下りるシーンかしら？」

「それっス。鶯越つばしこえが一ノ谷かで学説が分かれているんすが、そもそも逆落とし自体が創作の可能性もあるそうなので………」

女性2人は石丸の解説に耳を傾けている。

眼下に広がるパノラマ的な景色には住居のような人工物はほぼ無く、神戸の中心市街地周辺に作られた大地人の街が遠くに見えるのみであった。その時、シュウトの視界に長く続く『スジ』が入ってくる。

うつすらと刻まれた大地の傷。それは雪溪の奥深くで人の存在を拒絶するクレバスを連想させるものだ。大地の引き裂かれたその姿は、最大サイズの巨人を数倍する化物がつけた『爪痕』を連想させる。これは阪神・淡路の震災を忘れまいとする願いから刻まれたモニュメント（慰霊碑）と言われていた。

「『爪痕』ですね。もしかして、これですか？見せたかった場所と
いうのは」

横に立って同じ景色を眺めていたジンに尋ねてみる。

「そうだ。俺らオタクの間では 神人の爪痕 と呼ばれている。…
元ネタは『涼 ハルヒの憂鬱』 っていうラノベで、アニメにもな
った有名なヤツだな」

「……流石に名前は聞いた事があります」

「見てねえか。……んー、西宮にしのみやにあるとされる学校からの坂道が凄
く象徴的でさ、そこから遠くの大阪の街が見えるらしいんだよ」

「はい……」

「神戸の震災があつた時、西宮は被災したらしいが、その坂道から
見える大阪はまったく無事だったそうだ。それは被災した人達から
は不思議な光景だったんだろうな……自分達だけが非日常的な異世
界に閉じ込められた感覚だったのかもしれない。それが作中の『閉
鎖空間』のモデルじゃないかと言われている」

「……………」

無言で頷く。シユウトにとつてもあまり無関係な話とは思わない。
自分達もまた、大災害 によってこの閉鎖的な空間に閉じ込めら
れている。

「基本ストーリーは、無自覚に神のごとき力を持った少女の、孤独を癒すって話だ。彼女はストレスが溜まってくると、現実から切り離された閉鎖空間の中に、『神人』と呼ばれる巨人を呼び出し、町を破壊させてストレスを発散してるんだが、……………アニメ版で破壊されていたのは、大阪の梅田だったりするわけだよ（苦笑）」

「それは、運命の不公平さか何かを正すために…………？」

「さあ、な。……………それでまあ、彼女の生み出した閉鎖空間の一つが、ここ エルダー・テイル の世界かもしれない、だなんて妄想したヤツがいたんだろうな。そんなこんなあのクレバスは神人の爪痕 って呼ばれているわけだ」

「そうなんですか……………」

「つまりさ、人間はみんな『いつかの未来』を生きているんだよ。東日本の震災があつて、『戦後が終わつた』なんて話があつたみたいに、みんな何かの未来を、何かの後ろを歩いて生きている」

「はい……………」

「そういうものを切り離すことはできないし、避けられもしないし、選べないこともしばしばで、なんというか、変えられない部分も多いから、決して良い事ばかりでもないんだ。……………『良い部分』

だけを受け継ぐことなんて、出来ないっていうかさ。血筋だとか、常識みたいなものもひっくりかえして、全部の土台みたいになってる」

「実際、『常識が違う』ってのは、お前のせいじゃない。何が常識かってのは周囲の人達がそれぞれに選んで、決めているものだろう。だから、決してシユウトの責任ばかりじゃないんだよ。努力できなかったり、弱かったりするものは、本当には自分のせいとは限らないんだ」

「ですが……………」

「そうだな。個々人で選べる範囲は確かにある。だけど、同時に受け入れるしかない部分も多いんだ。実際問題としてお前が生きてここにいるのは、お前の周囲にいる人達が努力してたからだろう。それは凄いことだよ。決して蔑ろにはできない。……それでも、お前さんが弱いのは、お前の周囲にいる人間が努力を怠ったからだ。何を自分たちの常識とするかは、全員が必死になって考えなきゃいけないものなんだ。現状は日本人の選んだ結果でもあるだろうし、同時に俺の努力不足と言えるものでもあるんだな、これが」

「俺はまあ、オッサンだし？ 何を自分の常識とするか、みたいな部分で多少は選ぶ時間があったというかね。……いや、俺の周囲の人達がたまたま努力してくれて、たまたまその恩恵に与っているだけなんだろうけどさ。だいたい努力できるのは運が良いからで、成功するのは人のお陰って言うくらいだしさ。個々人の努力なんてチリみたいなものかもしれないわけだよ。……でも、そんなチリだって積もったら灰の山になるかもしれないし、そうしたら、その灰だって、いつか不死鳥が飛んで行くかもしれない」

ジンはにっこりと笑って見せた。

「孤独な女の子を救うのにだって、幾つもの奇跡が必要になる。必要なその時に自分が手の届く場所にいられるかどうかってのもあるだろうし、努力できる場所にいられたとしても必要な能力を持っていないとも限らない。厳密に考えて、客観的に眺めれば、それらは無限に奇跡へと近づいてしまうものでも、あるだろう」

「それでも、もし、お前が努力しようと思っただったら、……」
「……………なんでしょう？」

「いや、何でもない。……幸運だと、いいな」

言うべきことをいい終えたらしきジンは、黙って景色を眺め続けていた。

ジンが何を伝えたかったのかは今ひとつピンとこないままだったが、シュウトはこの景色を覚えておこうと思った。

「ジンさん」

「なんだ？」

「ところで今の話って、どういう意味だったんでしょ？」

「えっ、っ？……いや、まあ、コンテキストは重要っていうか」

「あ、そうだったんですか……」

「うむ。俺も場所の力を借りて話すしかないような、茫洋としたものだしな」

「なるほど。……そろそろ出発しましょうか」

「だな」

ミナミの市街地よりも北に数キロ入ったところに拠点を構える

冒険者 の一団があった。おかしなことに 大地人 の集落などは存在しない場所を選んで住んでいる。たまたま2つほど山を越えて獲物を探しに出ている 大地人 の猟師が目にし、不審げに首をかしげていたのだが、だからといって何がどうなるという話でもない。

冒険者 の行動はむかしから良く分からないことが多いのだ。彼

はその日の糧を得るのを諦め、自分の村に帰ることにした。

猟師は 大地人 であつたから知ることは出来なかつたが、彼らは Plant Hyaden のギルドタグをつけていない。それは今のミナミではありえないことだつた。

ハーティ・ロード。

ミナミを本拠地とする戦闘系ギルドの中でも3本の指に入る大規模なもの一つであつた。しかし、これは既に過去の話となつている。表向きは分断工作を受けて瓦解した事になつていた。

大災害 ののち、ミナミもまた大半のプレイヤーがやる気を失つていた。一部のプレイヤーが元気なのはアキバとも同じだが、時間経過と共に目に見えない疲労が蓄積していく。誰もが救いを求めていた。そんなタイミングで他の大ギルドが Plant Hyaden への参加を表明したことを耳にしたのだ。

結果として、ハーティ・ロード も雪崩れを打つように内部から崩壊している。一たび大勢が決してしまうと、ドミノを倒すように Plant Hyaden は支持を根こそぎ集めていくことになる。

当然 ハーティ・ロード にも先んじて打診があつたのだが、ギルドマスターの一存によつて無視されていた。そのことすらも後から非難される原因となつた。 Plant Hyaden への参加が遅れたことで、他の大ギルドの後塵を拝することになつてしまった、と仲間たちから怨嗟の声すらあがる。彼らはギルドを裏切つた者達のはずだつたが、ミナミ全体がひっくり返つた状況では、どちらが裏切り者なのか分からなくなつていた。

人目を避けてこの地に拠点を構えている彼らは　ハーティ・ロイドの『第3レイド部隊』だった。

本隊（第1部隊）から豪傑と名高い　武士サムライの霜村、第2部隊から切れ者の　盗剣士スワッシュユバツクラである葉月、という具合にエース級の人材と選抜された精鋭を集めて中心に据えてしまい、しかるのちに人数を増やして調整していく予定になっていたのだが、その途中で　大災害　に巻き込まれたものだった。

そして、この部隊の目玉となるのは、女性の　守護戦士　だった。彼女の名を

「さつちん！」

「陸実か、さつちんと呼ばないでくれ。みんな真似をするだろう？」

「よいではないか。あたしとさつちんの仲ではないか！」

「そういうことを言ってるわけではないのだが……」

お調子ものの陸実をたしなめ、彼女は目元に掛かった金色の前髪をかき上げるようにした。太く編まれた金髪がたらされた背中はずつきりと伸び、表情には凜としたものをたたえるクールビューティ。背はやや低く、その金属鎧に濃紺の金属スカートといった出で立ちがまさに

「だけど、さつちんってほんつとに型月のセ　バーまんまだよねえ」

「キャラ作成時に金髪碧眼にしろと言ったのは陸実じゃないか。お陰で　大災害　からこつち、皆にジロジロと見られてかなわない」

「大丈夫！すつごく似合ってるから」

彼女は友人にとても恵まれているのだった。

実際のところ、第三部隊は彼女のために結成されることになったものだ。さつきは高校剣道において、個人戦で全国大会入賞の常連組だったのだ。それが陸実の策略によってMMORPGなどという

コアなゲームにハメられてしまっていた。ところが、こちらでもメキメキと実力を伸ばしてしまう。コツコツと言うよりは時間も忘れてドツカンドツカンと努力し、いつの間にか一線級プレイヤーである。

サブカルに明るくないことにつけ込み、睦実がセイー風の装備を勧めたり買い与えたりしたため、本人の知らないところでコスプレプレイヤーとして名を上げてしまっていた。こうなってくると悪ノリする人間が現れるもので、彼女のために軍団を集めようかと話が盛り上がり、気が付けば中核メンバーの選出が済んでいて、あつという間にフルレイドでの連携訓練が始まっていた。ついでだから、とサブ職で 剣聖 を取らせようとする作戦が立案されたりもしたが、まだ実現には至っていない。

つまり、彼女は友人にとても恵まれていたのだ。

しかし、運悪く今回の 大災害 である。それでも精鋭メンバーを集めていた第三隊は Plant Hyaden になびく脱落者は出さなかった。崩壊した ハーティ・ロード は一部のメンバーを集めてナカスへ落ち延びることになる。ギルドマスター自身が一番残って戦っていたのだが、責任者としてその責務からは逃れられず、メンバーを率いてナカスへ向かうことになった。

代わりに残ったのが士気の高い第三部隊である。ギルマスの論理では、誰かが抵抗の意思を示しておかなければ、逃げたことになってしまふし、それでは落とし前が付かないのだという。分かったよくな判らないような理屈だが、それで良いのが ハーティ・ロード でもあった。

さつき自身は、 大災害 があってからは真摯に剣の道に生きて

いた。始めこそ本物のモンスターを相手に怯えもしたものが、ゲームの知識と実際の格闘技の技能が合わさり、今では気力・心身ともに充実した状態に達している。その剣に曇りはなく、風格のようなものすら立ち昇って感じられる。第三隊のリーダー格にして自家の霜村でさえも一目おく女剣士となっていた。

30人弱の一団が都市部から離れてある程度の期間を生活しようと思えば、それなりに高度な能力が要求されるものだが、特に大きな問題もなくこなせているように見える。

今、さつき達は12人の実動部隊とともに、連携訓練を兼ねた狩りを行っていた。

「いったぞ！」

「追い込め！」

狩人達に気がついた鹿が飛び出し、跳ねるように駆けてゆく。周囲に人影が現れ、次々に行く手を遮っていった。逃げられたのではなく、ルートを限定して追い込んでいるのだ。

突如として女剣士が、鹿の行く手に立つ。最初から立っていたのか、脇から飛び出して来たのかは分からない。それほどに静かな佇まいであった。

慌てた鹿は止まりきれず、その脇を闇雲にパスしようとする。ゆらり、と剣先が動いたかと思いきや、鋭い踏み込みから銀色の閃光がはしった。

「さすがさつちん！お見事」

「このくらい大したことはない。よしっ、みんな、今日はこのくらいにしよう！」

「おー！」 「りょうかい」

「え〜？まだまだ大丈夫だって」

「自分達で食べられる分だけあればいい。また狩りにくれば練習にだってなる。モンスターはともかく、動物達は無限に湧いて出てくれるとは限らないんだ、無駄な狩りは避けなければ」

「さすがさつちん。ウサギを狩るのも全力だね！」

「バカ言っていないで支度しろ、睦実」

「ほーい」

弓や魔法を使えば、鹿などを狩るのは簡単で、あまり練習になどならない。逆に彼らのように近接武器で仕留めようと思えば、かなりの連携を身につけなければならず、そうそう巧くいくものではない。それなのに、彼らはいとも容易くこなしているように見えた。

この一事だけをとっても、地力の高さが窺えるものであった。

「見えたか？」

「どうやら当たりですね。彼らが ハーティ・ロード です」

「うしっ、これで無事に合流できそうだな」

シュウトは 珍しく軽装のジント2人で先行偵察に出ており、彼らを発見していた。

携帯電話代わりの念話があっても、この異世界で合流するのは難しい。ランドマークになる場所で落ち合うならともかく、彼らの指定するポイントは山の中であった。土地勘が無ければ、仮にあったとしても、どこもかしこも同じような景色に見えてしまいやすい。こういう場合はそもそも相手が地図の見方を知っているかどうかからして疑わねば、そうそう合流などできるものではない。

結局はリーダーの代わりとなるミニマップ機能を使えるジンが出張ってくるのが一番手っ取り早く、基本通りの二人組ツーマンセルでシュウトを相手として連れて来ていた。

「じゃあ、帰ってしまう前に、彼らに話かけるんですよね？」

「いや、しばらくストーキングする」

「え？」

「なんだよ、狩りしてるのを偶然 見掛けたって言って、信じて貰えるかわからんだろ。ヤツらに拠点まで案内して貰ってから、正規の手順を踏むのさ」

「何か、もの凄く警戒してませんか？」

「……お前はお気楽でいいなあ。こんなうさんくせえ仕事だったのに、まあ」

「仕事って、ナカスへの護衛ですよね？」

「おいおい、今の狩りを見ても、まだ護衛が必要に見えたのか？」

「それじゃ、何の仕事なんです？」

「さてな。面倒なことにならなきゃいいがね」

「……………まさか」

ゲームの中で出来ることなどは、所詮はクエスト周辺に限られていたものだ。嫌になれば帰還するなりログアウトすれば良いだけだ。それは今度も同じだろうとシュウトが考えていたとしても、そんなに間違った考え方とは思えなかった。

「それにしてもあの子、かなり手練チツクだったな」

「そうでしたか？」

「たぶん剣道だと思う」

残念ながら、シユウトには細かな違いは分からなかった。どうやら守護戦士のようなので、ジンとは同じクラス同士として、なにか通じるものがあるのかもしれない。

「ああ、かなり基礎を積んだ人間の動きだった。ありや、師匠が一角の人物だったんじゃないかな？……………しっかし、あのクラスの人間まで エルダー・テイル をやってるとはなあ。なんとも懐の深いこって」

「もし、彼女と戦ったとしたら、勝てますか？」

「ん？ 剣道ルールなら負け確定だろ（笑）」

「剣道ルールじゃなければ？」

「論外だな。この世界はただの剣道が通じるほど甘くなんかないさ。仮に対人戦で『三倍段』できたとしても、その程度じゃドラゴンに勝てるものじゃない。マシンガンやミサイルが欲しいぐらいなのに」

「確かに、そうですね」

科学的な兵器の代わりに、この世界には魔法がある。特に回復魔法の存在は 冒険者 の行動限界を大きく引き上げているのだ。

「ま、それでも女の子と戦うのは苦手だな」

「そうなんですか？」

「暴力とセックスは衝動として近い。あんまり強いと、グチャグチャに叩きのめして犯してやりたくなるからな」

「……………」

「女子にはドン引きされるからな。お前さんしか聞いてないから言ってみたまでのことよ。本気でレイプしようとは思ってないさ。それに、もともと戦う必然がないだろ。人間は味方だ。特に俺は美少女の味方なのだよ」

「そう、ですよね……………」

戦闘が日常化していることによる倫理観の喪失なのか、単に英雄が色を好む傾向なのか？と思ってしまふ。『自分化の否定』がジンに与えた影響の片鱗という可能性も考えられる。

この時、まだシュウトは戦士として生と死の狭間に身をおけていない。幾分かは弓使いであることも関係しているかもしれない。ジンの台詞の半分ぐらいは、自分とはあまり関係のないことだと思っていた。

「そろそろ動きますね」

「追跡しながら、レイ達とも合流するぞ」

「同時ですか？」

「当然だろ。レイ達が見付からないように誘導しろよ」

「……………僕がやるんですか？」

「当たり前だろ。俺がやるんじゃないや簡単過ぎる」

「簡単でいいじゃないですか！」

「ホレ、いくぞシュウト！」

「うつつ、ストレスが……………」

こうして、シュウト達一行は、ハーティ・ロードの一団と合流することになった。

「だからミナミの近くはダメだ。こっちの指定してるポイントに迎えに来させるよ。……………ああ、そうだ」

ジンは葵を経由した念話で合流方法を確認していたが、既に何度もやりとりをしている。外から聞いている限りではモメているらしく、話の端々から察するに相手がミナミで待ち合わせしたいと言っ
て来ているのを、ジンが断っているらしい。

「この辺りで待ち合わせするんじゃないの？」
ユフィリアに質問されるが、シュウトにも事情が飲み込めていない。

「そのはずなんだけど……………」

実は相手のキャンプ地点は先に確認してあった。最初は無駄な手間だと思っていたものだが、ジンのしている念話のやり取りにどこかしら不穏な空気を感じられ、今では逆に正解だったのかもしれないと思いつつある。

慣れない土地で待ち合わせ相手と合流できない場合、かなり不安な気分になるもののだが、こうして相手の居場所を確認していると余裕をもっていられる。相手からの指示に一方的に従わずに済むような『優位に立っている感覚』があるのだ。その気になればそのままキャンプ地点に行ってしまうだけだと思えば気も強くなれる。

ジンが嫌っているのは、万一にもミナミの街中に入って『登録』されてしまうことなのだろう。そうならば当然、アキバやシブヤに戻るのに 帰還呪文 を使えなくなってしまう。今度こそ本当に馬や徒歩で帰らなければならぬ。この条件は相手方も了解済みのはずなのだ。

しばらくの後、ついに相手が折れたのかそれから30分ほどで出迎えの一行が現れた。

その6人パーティは狩りに参加していたメンバーの一部なのだろう。先頭の馬に乗っているのは、あの女剣士だった。この世界では金髪など珍しくもないが、背は低いのに貫禄のようなものがあるので見間違い様が無かった。少し離れたところで馬を止め、馬上から挨拶してくる。

「カトレア のご一行ですね？ 遠路、ご苦労さまでした。」

ジンが動かないのでシュウトが返事をしようとしたのだが、小声で何か言ってるのが聞こえてしまつて笑いそうになる。「挨拶するなら馬から降りろ、小娘」とかなんとか。

「出迎えありがとうございます。……………えと、よろしく願います。」

練り込まれたパンの生地にあたふりと空気が含まれているようなゆつたりとした動作で馬から降り、軽く撫でて騎馬に配慮を示し、それからこちらに近付いて来た。こここのところ走法・歩法を習つて意識が高まっているためだろう、彼女の軸がブレない歩き方や、なめらかに継がれる足捌きに目を奪われる。自然で無理がない。訓練によつて身に付いたものが素直に表れているようだった。

脳内メニューでステータスを確認するのを忘れてすこし慌てる。レベル90の守護戦士、ギルド名はハーティ・ロード。名前は平仮名で『さつき』。後ろから森呪遣いの『睦実』という女の子が走ってきて横に並ぶように立った。

「ハーティ・ロードのさつきです。改めてよろしく願いします」

「カトレヤのシュウトです。こちらこそ、よろしく願いします」

手を差し出されて、その小さな手を握り返そうとしたところで、横にいた睦実が「ホア〜」とあまり聞いたことのない声を上げて驚き、自分をマジマジと見つめていた。(あ、この感覚、久しぶりかも?) と思いつつも、シュウトは口元が引きつるのを止められない。……と、背後では堪えきれずにジンが嘔き出していた。

「ブーッ!」

「?!」

「ブワツハハハ! や、やべーっ!」

「ジンさん、……どうしたんですか?」

「ばっか、お前、目の前に本物のセバーがいるんだぞ? マズい、これはマズい。まさか、ここが二次元とは知らなかった! 油断したわ。そうだよ、画面の中の世界じゃん」

「残念でした! さっちゃんはあたしのヨメだからねっ! 触らせてあげないよ!」

「なんだと!? 独り占めする気か!」

「あたりまえだし!」

「睦実、恥ずかしいからよしてくれ……」

「ジンさん、大人げないですよ……」

からだに巻き付きながら所有権を主張している睦実にも、さつき嬢はかぼそい声でやめるように求めていた。

シユウトは初対面の相手に爆笑され、顔を真っ赤にして俯くさつき嬢に同情する。後ろに立っている ハーティ・ロード 側の男性四人はというと、苦笑いしつつもジンの意見に肯定的な反応を示していた。同類相憐れむ(?)ということだろうか。

さつき達の後について集落の中に入る。規模的には30人程度で住んでいることになるようだ。食事場所や倉庫のように寝る以外の機能を集約した天幕が別々にあるため、数は人数分よりも多く感じる。その一角の空いたスペースに案内される。

「では、この辺りに天幕を設置してください。もし、お持ちでなければ、予備の天幕をお貸ししますが？」

「それは大丈夫っす」

行儀よく控えめにしていたユフィリアに気が付いた男たちが何度もチラチラとのぞき見を始めていた。集落に入ってから物見遊山なのか、人が集まって来る。関東人を見てやろうという部分があるのだろう。

「では、また後ほど…………… ああ、そうでした。この近くには温泉がありますので、女性の方は後で一緒にしましょう。それとトイレに関してですが…………… コラア!!!」

さつき嬢は丁寧な態度が一変し、無作法な仲間達を一喝していた。みな破顔しつつ、クモの子を散らすように逃げていく。配慮しようと努めてくれていることが分かるだけに、さつき嬢の態度のギャツ

プや仲間達との仲の良さが合わさっておかしくなってしまう。

「おんせ……？」

ニキータの瞳に期待の輝きがにじんでいた。どことなく女性同士は仲良くやれそうだと感じてホツとする。ジンにしても何だかんだで睦実という子と打ち解けている気がするし、ユフィリアはどこに行っても大人気と来ている。

ジンの心配もなんのその、懐に飛びこんでみれば気のいい連中ではないかとシユウトは安堵していた。

「責任者の霜村から後で挨拶があると思います。それまでくつろいで長旅の疲れを癒して下さい。では、我々はこれで。」

さつきは軽い会釈をして引き上げていく。その後ろ姿も凛としてサマになっていた。

「ぜんぜん呼びに来ないね？……昨日も温泉に行った時、よそよそしかつたんだよ。こつちの話とか、もつと聞きたかつただけど……」

「何か準備をしてるんじゃない？」

「それは歓迎パーティ的な？」

「どうかしら？」

「……………」

ユフィリア達が会話していてもジンは無言のままだった。

「しつれいしまーす。……えっと、ウチの霜村がお会いするそーで

「す」

合流後、夕食時に挨拶するのかと思っていたら、シュウト達が呼ばれたのは翌日の昼頃になった。ジンは呼びに来た睦実^{トモ}に聞こえないように一番後ろを石丸と歩いて文句を言っている。暗殺者の特性によるものか他の職業^{クラス}に比べて目や耳がいらしく、シュウトには聞き取れていたりする。

「おうおう、お約束通りだろうとは思ったが、待たせ過ぎだろ。こりゃ、バカの集団で確定だな」

「その確率はかなり高いっスね……」

隣を歩いているニキータの目がすつと細まり少し怖いような表情を作っている。よく鈍いといわれるシュウトだったが、笑いを堪えているのだろうなあ、と分かるようになっていた。吟遊詩人も耳がいいので聞こえてしまうのだろう。

集落の中央付近にある大型天幕の前で立ち止まる。

中に入る前にシュウトが礼を言おうとすると、睦実^{トモ}はまじまじとユフィリアを観察していた。今度は小声で「どひゃ〜」である。どいう噂になっているものか、昨日から彼女を一目拝もうと男子がテントの周囲をウロウロとしていた。

普段の3倍ぐらいの笑顔で「ありがとっ」と睦実^{トモ}に声をかける。しどろもどろになっている姿に、（ジンさん並みの意地の悪さだ）と嘆息する。ジンなどは人をリア充扱いしてくれるが、似た者カッブルこそ早く朽ち果てればいいのにと口に出さずに思う。

天幕の中は天井が高く、中で歩いたりするのに十分な広さが確保されていた。奥には机が置かれ、そこに男が一人座っている。まる

でその人物の執務室に入って来たような雰囲気の設定だ。脇にも男が一人控えておりこちらが先に口火をきつた。

「ようこそいらっしやいました。ハーティ・ロードの葉月です。この部隊のサブリーダーをしています。こちらがリーダーの……」

「霜村だ。よろしく頼む」

「ああ。カトレヤだ。よろしく。」

ジンが眠そうなまま適当に返事を返している。

「では、貴方が後見人のジンさんですね？」

「後見人？……まあ、そんなようなものかな」

脳内メニューから見れば、ジンはカトレヤのギルドタグを付けていないのが分かってしまう。葵はジンの立場を説明するのの後見人という方便を使ったのだろう。

「立たせたままで申し訳ありません。こちらに飲み物を用意していますので……」

室内の椅子は霜村の座っている一脚のみ。葉月が金属性のカップが乗せられているトレイの所に歩みよろうとしたため、ユフィリアが手伝おうと動きかける。

「そこのお嬢さん、申し訳ないが手伝って貰えるかな？」

「私？……はい。」

ユフィリアが動こうとした機を捉えて、霜村が手伝いを頼む。

「……………」

彼女が飲み物を配り終えるまでの間、ジンは無言のままだった。

飲み物は果汁を加えた冷たい紅茶のようで、爽やかなフレーバーが涼しさを演出していた。アキバにあるものに近い。砂糖の甘さは無かったが、これはこれで美味しいのだ。

「さっそくだが、本題に入りたいと思う」

霜村はそう切り出したが、結果的にこれは嘘だった。彼はしばらくミナミの現状と Plant hwyaden の非道さを延々と語り続けた。

衛兵の武力に脅されて Plant hwyaden に入ったものも多いし、多くの商店も脅しに負け、Plant hwyaden に未加入の 冒険者 との取引を停止させた。表面的に自粛と言ってみたところで、高圧的な権力の存在が背後にチラついていれば脅かされているのと変わりはない。各ギルドにはそれぞれにカルチャーがあったはずなのに、それが乱暴にひとまとめにされてしまっている。今も同胞は苦しんでいるのだ、といった内容をたづねると3回は繰り返して強調していた。……正直に言って、あまり新鮮な情報とは思えない。

いい加減にうんざりといった様子でジンが割り込む。

「つまり、レジスタンス活動に協力しろってことか」

「そうだ。話が早くて助かる。」

熱意が伝わったものだと思釈した霜村は、同志になるものだと思っているらしい。

「Plant hwyaden はやり方を間違えている。武力による脅しでミナミを統一などしても知らぬ間に不満が溜まっていくだけだ。これを見て見ぬふりすることはできません。我々は富や権力に目の眩んだ濡羽とその側近達を打ち倒さねばならない。そうして始めて日本が、いや、世界の 冒険者 が協力しあうことができようになる。今こそは皆で手をとりあい、この難局を乗り切るべき時だ。そのためにまず圧政に苦しむミナミの同胞を解放することが求められている」

「なるほど。……では、仮に濡羽を倒したとして、その後はどうする？代わりに統治する気はあるのか？」

「いや、俺は手を出さん。ミナミの同胞を解放できればそれだけで満足だ。」

「どうするつもりなんだ？」

「ミナミは英雄の街だ。志を持った若い者達に任せればいい」

「ふむ………坂本龍馬のように、か？」

「そうだ！それが分かるか？いや、まさにそうなのだ！」

我が意を得たり。気持ちよさげに大笑する霜村。

「話はわかった。しかし、スマンが最初に契約した話とは違うからなあ。レジスタンス活動を手伝わせるつもりなら、報酬もそれに見合ったものにしなといけない………」

それを聞いて霜村はニヤリと笑う。

「当然だろう。こちらにも支払う用意がある」

「いやいや、チト値がはるからな。止めといた方がいいかもしれな
い」

「構わん。言ってみる。」

「高いぞ?」

「よし、いくらだ」

「大負けに負けて、100万」

(ざわっ……)

この世界の貨幣価値を現実世界のそれと比べることは難しいが、感覚的には10倍以上、とすれば100倍(金貨100万枚で1億円)ぐらいの価値があるかもしれない。エルダー・テイルの世界はジツとしていればあまりお金は掛からないのだが、冒険しようと動き始めるとかなりのランニング・コストが掛かる仕組みである。一般的な冒険者の貯金額は3万もあればいい方だろう。

かなりマトモな性能の白ものアーティファクトが金貨1万枚程度で取引されているため、流石に100倍には感じないのだが、何日かごとに修理に費用がかかるためトータルで見れば高価なアイテムということになる。例えば、経験値やアイテムを入手するのに強いモンスターと戦いたい。安定して勝つために強い装備を使いたい。強い装備は修繕費が掛かるのでお金が必要になる。結果的にお金は貯まりにくい。という循環になっている。つまり、金額が高額になればなるほど価値が高くなって感じるのだ。

それほどの額をあつさりと要求してみせるジンの非常識さに焦りを感じる。余りにも高い金額の報酬を要求するということは、それに見合う膨大な仕事量を要求されるのではないか?という不安までもが喚起されるためだ。

「ふっ……いいだろう!その程度ならば問題ないっ。 ミナミを取り戻せば十分に支払える額だ」

(ざわざわっ……)

サブリーダーの葉月までもが呆気にとられて霜村を見ている。可愛らしく口を開けているユフィリアだけではなく、普段は冷静なニキータですら目から火花が飛び出しそうな表情になっている。6人に対して支払う報酬として、100万というのは破格中の破格だった。

無茶に無謀で応える。スケール勝負に勝つことで場を呑んでしまい、互いの立ち位置を決定付けるようとする行為である。霜村は計算というよりも勘で処理している部分が大きかった。実際問題、約束をすること、後で踏み倒すことは彼の中では矛盾しない。これは単に約束を守らない『いい加減さ』でしかないはずだが、それが逆に『大物としての評価』を高める結果に繋がっている部分がある。約束するのも大きくし、破る時も大きくなるためだ。

(それって、ミナミの金を自分の裁量で使ってしまうつもりなのか……?)

その金銭感覚はシュウトにとって疑問に思ってしまうものだった。しかし、これがスケール大ききなのか?と自分の感覚の方を不安に思ってしまう。正常な基準からかけ離れた話の展開にめまいのような混乱を自覚できずにいた。

「そうか。ありがたい。……じゃあ50万な」

「ん、何がだ?」

「前金に決まってる。まず半分の50万でいいぞ? 残りは成功し

てから貰うからな」

これには流石に場が沈黙する。ジンは全く場の空気を読まなかった。いや、相手の都合など分かり切った上で、無茶な交渉をしているらしい。いかに ハーティ・ロード が大ギルドだったとしても、ここに残っているメンバーだけで、そこまで大きな資産を持っているとは考えにくい。

「ハツハツハツハ」

大きな声で霜村が笑う。動揺を表さずに笑える胆力は正直に凄いと思う。ここで動揺をみせたりすれば周囲の評価を下げるだろう。その正しさに感動に近いものを覚える。

「まあ、今ならキャンセルでも構わないぞ……キャンセルの場合は当初の成功報酬として約束していた12万をそのまま支払って貰うがな。契約時に仕事内容で嘘を付いたのはそつちだし、俺達はミナミまでこうして実際に出向いてきている。経費と慰謝料を考えても、ビター文マケられないよなあ、普通」

ジンは最初から全力のお断りモードなのかもしれない。仕事内容からすれば12万を回収して帰還してしまうのがベストだと考えているらしい。

「少々、考える時間をいただけますか？」

後ろに控えていた葉月という参謀風の美青年が発言し、一時的に話を保留にしようとしていた。

「それは構わないが、何日考えるつもりなのかな？……金の支払いが済むまでは拘束時間に対しても手当てが必要なのは分かっているよな？」

「もちろんです。そちらもお約束します。」

葉月は慇懃無礼を地でいく笑顔でもって、ジンに快諾してみせる。

「じゃあ、まずは逗留中の食事に関して、そっちから食材を提供してもらわなきゃ、だな。そのつもりでよろしく」

「……………分かりました」

気持ち良いほどサクサクと要求を吊り上げていくジンだったが、葉月も（間こそあったものの）笑顔を崩すことはしなかった。

トレイを持ったままのユフィリアが飲み終えたカップを回収するため、シュウトも残りを一気に飲み干してしまう。トレイごと葉月のところに返しに行くと霜村が座ったまま礼を述べていた。

「君、ありがとう。」

「いえいえ」

「……………それと、少しいいだろうか？」

「何ですか？」

「置いてくぞ、ユフィリア！」

天幕の入り口のところでジンが怒鳴るような声を出したため、慌てた彼女は「ごめんなさい」と言ってジンを追いかけて行った。

「可哀想に、きっと彼女は粗雑に扱われているのだろうな」

「そうかもしれないね……………」

「ちょっと！あんたら、ひやくまんも要求するってどういうこと！」

シュウト達がねぐらに戻る途中、睦実が走って追い掛けて来た。指を突きつけたポーズで文句を言い放つのだが、動揺していたのか途中の声が裏返っている。タイミング的にあの2人から伝え聞いたとは思えない。となれば外で盗み聞きしていたのだろう。ついで、待ち伏せしていなかった理由がその後ろから歩いてくる。

「お客人、私共にも分かるように説明して頂きたい」
厳しい表情をしたさつき嬢が良く通る声で問う。

「筋違いだな。契約内容の変更に準じる報酬の再交渉をしたただけぞ。こっちは担当者と話してんのに下っ端に何を説明しろってんだ？」

シュウトにも分からなかったのだが、つまるところジンはルール違反の指摘をしていた。

これは ハーティ・ロード と カトレヤ の交渉である。ジンは カトレヤ の代表として ハーティ・ロード の代表である霜村・葉月と話しているのだ。ここで睦実やさつきが出てきて カトレヤ と交渉したり、決裂させるような権利はない。それは ハーティ・ロード 内部の指揮・命令系統を無視していることになるのだ。霜村や葉月の交渉能力が疑わしいと思う場合であっても、それはまず霜村や葉月に確認すべきなのであって、カトレヤ に対して不満をぶつけるのは間違っている。逆にここでジンが睦実やさつ

きと交渉する場合、ハーティ・ロード に対して二重に交渉を持つことになる。それは通常ならば無意味でもあるし、もしくは組織の分裂を誘導する行為に近くなってくる。やはりルール違反になっ
てしまう。

ところが、表面的にはワザと難しい言葉を選び、口調もからかい半分である。ビジネスに携わって組織の中で働いているのならともかく、エルダー・テイル をプレイしている人間の何割かが学生であるため、この辺りの機微が通じにくい。その結果、意味もわからず下っ端扱いされたと理解したさつき嬢の怒りに油を注ぐことになっていた。

「なんだと……！」

「フン、だいたい本気でミナミを落とそうってんなら高々100万ぼっちの金も出せなくてどうするんだっつもの」

そう吐き捨てたジンの言葉がシュウトの胸にも突き刺さる。これには本音が混じっているのだろう。考えてみれば、ミナミも 冒険者 1万人規模のプレイヤータウンのはずだ。それを政治転覆させたとして、報酬がたったの100万では割りに合うわけが無い。『100万ぼっち』でうろたえているのはオママゴトかファッションだろうと言われればそれまでなのだ。……そうなると逆に霜村だけは本気ということになるのかもしれない。

「……ならば！その額に見合うだけの実力があるのだろうか?!」
手が腰の得物に軽く触れる。可愛らしい女性と同じ人物のはずが、周囲の空気を尖らせるほどの剣気を発している。

(いくらなんでも、直情的に過ぎないか?)

これまで丁寧な態度で接してきてくれたさつき嬢に好感を持つていただけに、一触即発の状況になったことをいぶかしむ気持ちがシユウトにはあった。ジンがなぜか怒らせるような態度をとっているにしても、それだけでは済まない気がしてしまう。カトレヤ^{わねわね}はいったいどういう風に彼らに説明されていたのだろうか？

騒ぎに気が付いて ハーティ・ロード のメンバーが集まり始めていた。さつき嬢の様子から事態を察知した数人が素早く位置を変える。それに気が付いた他のメンバーにも緊張が伝播していき、野次に近い声まで聞こえ始めた。良い意味においても悪い意味においても、さすがは ハーティ・ロード 、音に聞こえし戦闘ギルドだ。喧嘩師と名高いギルドマスターに似て、そのメンバーまでもが喧嘩っばやいのもかもしれない。

周囲にはさつき嬢を含めても全員で20人は居なかったが、それでも3倍近い。普通に考えれば負けだが、ジンが本気を出せばそうそう負けるとも思えない。……それよりも戦った後の落とし処が難しい。どうやって勝てばいいのか、負けたらどうなるのか。自分達は死ねばシブヤに戻るだけだが、彼らはどこに戻るのだろうか。

「なるほど！ミナミのギルドは都合が悪くなると！こうして大人数で困って人を襲うわけだ！」

ジンは周囲のメンバーに聞かせるように、大きな声でさつき嬢に抗議してみせた。内心ヒヤヒヤしているシユウトからすると、余裕たっぷりのジンが憎らしい。

「……………失礼した」

内心の葛藤を感じさせる間があり、得物からゆっくりと手を離す。

「……場を改めさせてもらっ」

「悪いが、アンタ等の見世物になる気はないね」

「承知した」

振り上げた拳を下ろしたさつき嬢だったが、ジンの横を歩いて抜ける時に小声でやり取りしていた。やはり一度は戦うことになりそうだった。

「矛を収めることが出来るのが武人ってね」

その上から目線の台詞がジンの褒め言葉だとシユウトには分かったが、さつき嬢は特に良い顔をしない。

「……戦うべき時には戦えるのが武人だ」

試合の前に行っていたのと同じように、目を瞑って相手がやってくるのを待つ。周りからは瞑想か精神集中をしているのだらうと思われていたが、さつきにすれば単に目を瞑っているだけだったりする。瞑想のやり方などは知らないし、精神集中のつもりもない。なんとなく落ち着く気がするのだ。リラックスが一番近い。

その後、霜村と葉月に呼び出されていた。葉月は困ったような苦笑いをしていたが、さつきが戦いたいと自分の希望を述べると、霜村は「ならば勝て」と言って終わりだった。葉月が段取りを決め、場所は中央の大型テントを使うことになった。高さがあるため、室

内でも剣を振るうのに問題がないからだ。ギャラリーは最小限に留めることにし、仕度が整ったところで睦実が カトレヤ の連中を呼びに行ってくれた。

ハーティ・ロード の中では、最初から関東の人間に助けを求めらるのに反対の意見があった。しかし、さつき自身にはそんなコダワリは無いつもりだった。ジンという 守護戦士 に初対面で笑われたのは少し傷付いた気もしたが、そんなことは理由にもなっていない。自分でも理由は分からないが、なぜか戦ってみたくて堪らないらしい。その予感はやや確信に近かった。

「連れてきたよ！」

睦実が天幕に入ってくる声に反応してゆっくりと目を開ける。

彼ら が入ってくる。向こうは6人全員だ。こちらには自分と睦実、葉月の3人のみだ。

「んだよ、ここで戦るつてのか？」

「はい。室内で戦闘ができるのはここだけでしたので」

葉月がジンに伝えていた。

「それにしても、客人のもてなしとしては、かなーり趣向を凝らしてるんじゃないの？」

「耳が痛いですね。ちよつとした余興と考えると頂ければ」

「どんな余興だよ。……で、おまえさんは何でここにいるんだい？」

「一応は、中立の立会人のつもりです」

「中立、ねえ……？ まあ、いいや」

かったるそんな態度のまま、ジンという守護戦士は自分の方向に引き直る。

「で、どうする？ 死ぬまでやり合うか？……大神殿に戻る前に復活させりゃいいんだろ？」

「いえ、HPがレッドに入ったところで負けにしましょう」

「ふう〜ん。じゃあ、そっちのお嬢さんとパーティになればいいのかな？」

ジンは理解を示して話を合わせて来る。頭は鈍くないらしい。相手側の吟遊詩人ニキータという人が自分とパーティを組むことになった。外部からでも大雑把なHPの割合は分かるのだが、瞬間的な判定には向いていないためだ。

「さて、じゃあやつか。いっちょモミモミしてやんよ。葉月、合図をくれ」

「ちよつと！余裕ぶっこいてるけど、アンタってレベル81じゃん！？」

開始直前に睦実が騒ぎ始めたことで、相手のステータスを確認していなかったことに気が付く。

「……えっ？」

「それが何か問題か？」

「ふざけんな！ アンタが負けても『ボク81レベルだもーん』とか言い訳できるじゃないさ！」

「ん？ 別に俺が勝つんだからなんの問題もないだろ。それとも、お前等が言い訳できなくなるのが困るとか？」

「さて、まっつてくれ……」

戦い前の緊張感だとか集中だとかが全く吹き飛ばされてしまう。睦実のペースに付いていくのはときどき困難を極めるのだ。

「じゃあ、どうしろってんだよ？……ウチのシユウトとやるか？」

「え？ 僕ですか？」

すっかり観戦モードでいた相手側の 暗殺者 が槍玉にあげられて驚いていた。それを見て、名案を思い付く。

「そうしよう。そっちはその2人でいい。」

「なに？……俺とシユウトの2人と戦るってのか？」

「そうだ」

自分でもかなりの強がりだと思う。しかし、それでも簡単にやられるつもりも無い。 守護戦士 として数分は楽に持たせる自信があった。それと、ジンという相手の戦士がどういう顔をするのかも興味があった。

「いいね！ じゃあそうしよう」

ジンがあっさりと了承すると、慌てたのは自分よりもむしろ葉月とシユウトの2人だった。

「ちょっと、本気ですか？」

「いや、流石に2対1では不利でしょう。ハンデを要求します」

「んー、じゃあこっちは2人で1分以内にレッドにできなきゃ負けでいいぞ」

「私は5分なら耐えられる」

「じゃあ1分半」

「4分だ」

「2分だと有利すぎるだろ？」

「3分だ」

「2分半かよ」

「それでいい。」

「測定は面倒だが、どうせそんなに時間は掛からないからいつか」
「ああ、隙あらばそつちをレッドにするがな」

僅かに後悔の気持ちが沸き起こるが、それを打ち消して集中する。

「よし。シユウト、お前は相手の背後に気付かれないように回って、アサシネイトで終わりにしてやれ」

「…………… 作戦なら相手に聞こえないように言ってくださいよ」

「これもハンドの一部だつつの。いいか、『練習通り』にやれよ？」

「…………… はい」

「さつちん、大丈夫だよ。楽勝だつて！」

「ベストを尽くす」

「準備はいいですね？…………… はじめっ！」

「ヤアアアア！」

得物を構え、正中でジンという 守護戦士 を捉えるようにする。すると途端に不思議な、初めての感覚に襲われていた。

5層構造の中心軸。

さつきは戦いが始まる前からその中に『居た』のだった。通常の中心軸とされる小径軸、その外側に中径軸と大径軸とがあり、更に体外を半径3〜4メートルの範囲でカバーする戦闘軸、その外側を覆うように10〜15メートルの範囲で戦術軸までもが存在していた。一歩で届く距離を『自分の間合い』などと表現するが、一歩で届かない範囲であってもそこは既にジンの間合いだった。

しかも、さつきはジンの中心軸に自己の正中面（剣道における正

中線は面構造になり易い）を合わせるようにしていた。このため、彼女の中心軸の成長が始まっていた。戦闘とは一種のコミュニケーションであり、その本質は「高め合い」にある。ジンの中心軸がずば抜けて強烈なレベルであったため、つられて成長してしまうのだ。それでも、さつきはめげなかった。当然、何が起きているのか本人には1割も自覚できていない。そのため、攻撃をしかけるべく間合いを詰めていくのみだったが、急激な成長によって集中力が増し、入れ込みすぎに近い精神状態にあるのを自覚できていない。

サクツ。

「うそっ!?! いつの間に!」

驚いた声を最初に上げたのは睦実だった。首筋に感じた衝撃や痛みはさほどでもなかったが、さつきのHPはレッドゾーンをしめす赤色の表示になっている。いつの間にか1万点近いダメージを受けてしまっていた。

シュウトの アサシネイト 絶命の一閃 である。さつきの背後へ誰にも気付かれることなく移動し、必殺の一撃を決めていた。

「あの、大丈夫ですか?」

人の良さそうな 暗殺者 が困ったような顔で声を掛けてくる。本当にすぐ背後に立っている。

「これは、流石に……」

「さっちゃんがこんなアツサリ……?」

葉月と睦実が呆然とした声を出す。

「よし、シユウトくつじょぶ！ 勝った勝った！つと」
「……まだまだ！」

自分でも『らしくない』とは思ったが、剣を合わせもしない内に負けたのには納得が行かなかった。後ろを向いた相手に背後から躍り掛かり、一撃を加えようと剣を振り上げる。相手の 守護戦士はまるですべて知っていたかのように素早く振り向くと、さつきの剣に合わせるように剣を打ち付けていた。手に響くかつて無い衝撃に後ずさりし、もつれて尻餅をついてしまう。それは、とてつもなく重たい一撃だった。

ジンに一撃加えようとしたが実際のところ不意打ち気味の攻撃でもあって、さつき本来のキレは失われていた。ジンは剣と剣を打ち合わせるようにするのみである。金属同士が打ち合わされる音と共に火花が弾けた。驚愕を示す大きく開かれた碧い瞳。

ジンは敢えて『極撃』は使わず、より完成度の高い『重撃』のみを使い、特別に重たい一撃を放つ。これもまた戦闘演出である。既にさつき嬢は負けを認めていた。しかし、負けを認める理由が彼女の中には無い。故にジンはそれを与えたことになる。

「勝てると思ったのかい？ お嬢さん」
座り込んださつきからは、ジンが山のように『おおきな人』に感じていた。潜在的な中心軸の巨大構造を背景とした認識のいたずらである。

「技とスピードは素晴らしいが、もう少し強さに幅が欲しいな」
自然な所作で頭が手がおかれる。大きくて暖かな手は、まるで大好きなおじいちゃんに撫でられているみたいだった。自然と顔が赤

らんでしまっ。

しかし、その技やスピードをまるで見せられなかったことには、気が付くことができなかった。

「あ、あの……」

何を言おうとしたのか、何を言うべきなのかわからないまま、口を開いてみたが、その時だった。

「ジンさんは、カツコイイね」

ユフィリアが呟いた言葉が天幕の中にまるで光のように差し込む。淡々とした口調のため、褒めたと言うよりは、非難に聞こえた。

さつきは、突然に降って来た言葉に驚き、言葉を発した当人をみて、『こんな子がいるのか！』とあっけに取られていた。凄くキレイでとてもカワイイ。薄っすらと輝いて見えて、まるで魔法みたいだった。今の今まで何故あの子に気が付かなかったのかが分からない。たしかに昨日も一緒に温泉に行き、あの子の方から話しかけられていたはずだ。男子が異常に騒いでいたのも今なら頷ける。

「なんだそれ？」

「だって、なんか今のズルくなかった？」

ある意味において戦略的な勝ち方をしていたことにユフィリアだけはなんとなく気が付いていた。

客観的には、さつき嬢の背後から一撃したシュウトが凄いとなるべきところなのだ。対戦していたさつきばかりか、観戦していた睦実や葉月にすら察知されておらず、その実力は底知れぬ不気味なも

のに見える。高まりつつある速力と、ジンを相手に練習していた気配消し、加えて場の空気から盲点を衝くセンスまで含めれば、ちょっとした達人クラスの実力だろう。

一方でジンはといえば、戦闘的・戦術的に、単に戦っても勝てたであろうところを、戦わないことで勝ってしまった。さつきの意識を自分に向けさせ、その間にシュウトに背後を取らせている。相手プレイヤーに実力があることで逆に成立してしまうある種のウンディング技を駆使し、本来的な 守護戦士 の役割をこなしていたのだが、やはり生の勝負とは違うレベルでの戦いを展開していたことになる。自分はほとんど働かずに、ちょっとした演出だけでさつき嬢を屈服させていた。彼女はジんに負けたがったのだろう。その心理をかるくつついて引き出してしまっていた。

「とかいって、ホントはちょっと嫉妬したんじゃないの？」

「うん。ちょっとね」

「……………いや、そこは『違うもん』とかって否定するのがお約束なんだが」

「なんで？ そうなの？」

「くそう、萌えが足りん。これがジェネレーション・ギャップか！？」

「……………単にクラスタの違いじゃないっすか？」

あの2人のやりとりを眺めていて、眩しいような、寂しいような気持ちになってしまう。そばにあんな子がいたら仲良くなるのは当然だろう。しかも、負けたのに悔しさが湧いてこない。どうしたことが、自分の心がぐちゃぐちゃになってしまった気がする。

そうしてさつきは、泣きそうになる自分の頬を叩いて気持ち

を元に戻そうとした。睦実のかけてくれたヒールが心地よかった。

26 オピニオンリーダー

「さつき隊長が負けた？」

「それ、2対1だったって聞いたぞ」

「あっさり背後を取られたんだってよ」

「嘘っぽくない？」

さつきが完敗したニュースは集落を駆け巡り、早くもカトレヤの、その中でもシュウトの評判が上がりつつあった。犯人は口の軽い睦実であり、仲間達に訳知り顔で話して聞かせていたためだ。睦実本人は間違ったウワサになる前に『真実』を伝えようとしており、親友のさつきを悪く言わないようにしている分だけシュウトの評価が跳ね上がってしまったている。

噂されているシュウト当人は至って冷静だった。ウワサされて嬉しくないわけではないのだが、褒められるに値しないと達観している。

(まあ、何かしらジンさんが裏でやっていたんだろうし……)

あまりにも簡単に背後を取れてしまったので自分の實力をはかりかねていた。このところ周囲にいるメンバーの影響によって評価基準が高くなってしまっていることもある。

自分達の天幕に戻り、時間をどう潰そう？などと考えていたところでユフィリアが話しかけてきた。

「ねえ、ユミとぜんぜん話してないって聞いたんだけど?」

「ああ……そういえば。ここのところちょっと忙しかったから」

意外な方向からのツツコミに動揺するも、最後に話をしたのはいいつだったろう?と記憶をたぐる。ミナミ遠征出発の前日なので既に1週間は経ってしまったている。念話する時間がなかったわけではない。ジン&レイシンと毎晩交互に戦闘訓練をし、その後で反省したり考察したり練習したりと忙しくしていたら、あつと言う間の充実した一週間だった。

「なんだシュウト、お前マメそうな顔して『釣った魚にはエサをやるらない』のクチか?」

面白そうな話題と思ったのが、ジンがニヤニヤしながらクチバシを挟んでくる。

「もう、ユミは私の友達なんだよ? 付き合ってるなら、ちゃんとしようよ?」

「……いや、釣った魚とか付き合ってるとか、ちよつと気が早いというか?」

「えっ?」

「えっ?」

表情が凍るユフィリア。ジンは必死に笑いを堪えていたが耐え切れずに噴出している。その後ろでニキータが「あらあら、まあまあ」と肩を竦めるのが見えた。

「……まだ、付き合ってたの?」

「そうハッキリした関係ってわけじゃないといいましょうか、僕もどうなっているのか微妙な感じでして」

ユフィリアが今にも鬼神化しそうな雰囲気なので思わず言葉遣いが改まってしまう。

「……………」

沈黙こそが、怖ろしい。

「……………キスしたくせに」 ぼそっ

「ばっ……………ちが、未遂だつて！」

「ばははははは！ ぶはははははは！くるしく、タチケテー！死ぬー！！」

笑い過ぎてのたうちまわるジン。なぜか正座して釈明している自分。それを見下ろしているユフィリア。何かが間違っているのを期待したが、全面的に自分が悪いという判決120%。敗訴は確定の見込みだ。

「ユミのこと、好きじゃないんだ？」

「いや、そんなつもりは……………」

「時間がなくなっても、念話ぐらいできたんじゃないの？」

「そのお、僕から念話かけていいのかどうかとか、よくわからなくてデスネ？」

「そんなのユミだつて一緒でしょ？ シュウトから念話してあげなきゃ可哀想だと思わない？」

「それは……………そう、なんですけど……………」

「まあ、待てつて。ミナミに来てるのは仕事だし、こつこつなのは守秘義務っぽい部分もあるからな。シュウトだけじゃなくて、みんなにもなるべく仕事に関する話は内密にしてもらわなきゃならない。」

そうになると、女の子と話そうにも話題に困るってのはあるんだよね？」

「ヒーヒー言っていたジンだが、一息付くとシュウトの援護に回っていた。」

「今晚にも念話すりゃいいじゃないか、な？ それとフォローも考えなきゃだな。何かお土産を見繕うとか？」

「確かに、お土産ぐらいはあった方がいいかもしれないわね」

ニキータが話題をお土産の方に移らせようと、さり気なく援護射撃をしてくれる。 が、

「ジンさんって何気にヒドいよね」

「あ？……なにが？」

「なんだがプレゼントで誤魔化せるって思ってるみたい」

「そんなつもりはねえけど、今回はしょうがないだろ？ 無いよりマシじゃね？」

「毎日の積み重ねが大事なのに」

「そうだな。その通り。」

「自分もそうだからシュウトの味方をするんだよね？」

「なんでそうなる……？」

「女の子はね、寂しいと死んじゃうんだよ！？」

「死なねえよ！ てか、それウサギの話じゃねーか」

矛先がジンに向いたところで、正座のままそそくさと脱出するシュウト。

「女なんかチヨロいとか思ってるんでしょ？」

「思っていない！ぜんぜん思っていないって！」

「ジンさん、女の子に優しくするのも上手だもんね……」

「ばっか、俺が上手だったら下手なヤツなんていなくなるっつーの」
「でも、もうこっちの子にもコナかけてるし……」

「俺のことは（今は）別にいいだろ！？ 彼女だっていないし、そもそもモテないんだから何も問題はないわけで」

「モテなきゃ何をしてもいいの？」

「いやいや『何も』してないだろ！？」

「そっか………女の子だったら誰でもいいんだ？」

「いやいや、ちよつと待て、待てつて！………ナニコノナガレ?!」

「そうやって何人も泣かせて来たんだよね？」

「サイテーね……」（ニキータ参戦）

「ちよつ、泣きたいのはこっちだつつの！ というか、お前等が泣かせた人数のが圧倒的に理不尽だろうが！」

「そんなの全然だもん」

「またセクハラ？ そんなに過去が気になるのかしら」

「あつと、用事があったんだつた。ワリ、またな」

「あー！逃げる気だ」

「そう言われてもスタコラサツサだぜ！！」

「うわ、逃げてるし……」

ジンにも勝てない戦いがあるらしい。シュウトも自分がポロポロにされるのは仕方がないことだつたと理解した。

もう一度こちらに矛先が向きやしないかと恐る恐るユフィリアの顔を窺う。我ながら情けない態度だが、事と次第によってはジンを追いかけて脱出しなければならない。

「んー、スツとしたっ」

散々ジンをからかったためか、ユフィリアは満足げな表情をしていた。

(まったく良い性格をしてるよ……)

嘆息するシュウトだったが、ユフィリアがこちらに向き直ったため緊張する。

「だけど、シュウトはちゃんとしなきゃダメだからね？」

「はい、すみません」

低姿勢で保身を貫くのがここは得策である。

「お土産にするなら何がいいかしらね？」

「んー、ユミだったら珍しいモンスター関係のも大丈夫だよね？」

「いいわね。面白い素材を出すモンスターとかいるかしら？」

「なるほど……」

女性向けプレゼントにシュウトの意見などあるはずも無いため、ありがたく心にメモさせてもらう。

「ねえ、ジンのこと、どう思う？」

「そうねえ……」

一息ついたかと思いきや、硬い表情で問いを発するユフィリアだった。ニキータは(ああ、本題に入ったのね)と理解した。主語は無かったが、ここに来てからのジンの態度について疑問に思っているのだろう。

「いつもと変わらないと思うっス」

「……………ある意味では、そうかもね」

「……………」

石丸がコメントし、間があつてからレイシンが同意する。シユウトは沈黙したままだ。

「今のジンさん、ちょっと嫌だな……………」

ユフィリアからすれば、ジンが周囲の人に嫌われそうなのがイヤなだろう。それは彼女の優しさが発露したものだというよりも感情移入に近いものだ。しかし、その感情の元になっている原因やら概念に名前を探してあてがおうと思うほど、ニキータは親切でもお節介でもない。

「確かにどこか不自然よね。少なくとも『何か』をしてはいるんでしょ」

特にジンのフォローを望んではないニキータだったが、ユフィリアの顔が曇っているのならば、出来ることはしてあげたいと思つてしまう。

「何かつて？」

「人間の行動原理は大雑把に『愛』か『不安』に分けられるのよ。つまり何かを求めて行動しているか、もしくは何かを恐れて行動しているってことね」

「求めてる？……………ジンさんってそんなにお金が欲しかったのかな？」

「流石にそれはどうかしら？（苦笑）」

「確かに 守護戦士 は装備品の維持にお金が掛かるし、いつもお金で苦労しているみたいだったけど」

「うーん、なんか違うっポイね」

「じゃあ、ジンさんが怖れるものって何かしら？」

「えーと、このあいだ訊いてみたら、焼きうどんと抹茶ラテが怖いって言うってたけど？」

「それは単に食い意地がはってるだけだろ」

シュウトが思った通りのツツコミを入れたので、くすり、と口元から笑いが零れる。

「そろそろ冷やし中華が怖くなる時期ね。あと、サラダうどんも。」

「冷やし中華は『お酢』が無いと美味しく作れないからね。サラダうどんもマヨネーズを作るのにお酢が必要なんだ。今のところアキバで売っていた『お酒の失敗ビネガー』は味がまちまちだから、美味しいものは直ぐに売り切れてなくなっちゃってるからね」

レイシンが食事に関しての注釈を入れる。ニキータにはひと夏を冷やし中華と蕎麦、そうめんローテしたがる家族がいるため、半分ぐらいは本当に怖かったりもするのだが、まるつきり食べないのも不安な気持ちになる。レイシンはパスタ以外の麺も手打ちで作れるらしいのだが、ちゃんとした醤油が無いのでどれもまともに作れないと話していた。

洋食化の激しい世代として自分たちには醤油への依存はありえないと半ば思っていたが、こればかりはとんでもない勘違いだった。からだの反応として依存症の苦しさが出ないので助かってはいるが、ときどきはきゅーっと切ない感覚に陥ることがある。

「私はたこ焼きも怖いなあ」

「ああ、ミナミに来てる間に一度ぐらいは食べときたい」

「私は明石焼きにも興味があるわね」

「それなあに？」

「ダシにつけて食べるたこ焼き風のもので、現地では玉子焼きとかタマヤキと言われているものっスね」

一通り食事の会話で盛り上がり、場が落ち着いたところを見計らって本題に戻していく。

「……………食事のことはともかく、普通に考えてジンさん自身に怖れるものが無いとするなら、わたし達のことを心配してるってことよね？」

「守ってくれてるってこと？」

「でなければ、単に性格が悪いだけかもしれないけど」

「もう」

そう意地悪く笑顔で付け加えるのを忘れない。ユフィリアは唇を尖らせる。

「 守護戦士 …………… そうか、タウンテイニングってことなのかも深く思考に沈んでいたシュウトが答えをみつけて呟いた。

「ヘイト（憎悪値）を高めて、タゲ（ターゲット）を自分に集める。 守護戦士 の戦い方そのままみたいだ」

そう聞かされれば、なるほど、いつもと変わらないとも言える。

「でも、どうしてそんなことをするの？」

「わからない。……………石丸さん？」

「そうっスね。状況から見て ハーティ・ロード は準備不足っス。レジスタンス活動では人が集まらないからか、別の名目で仕事を依

頼りて来ているっス。直前まで合流地点が決まらなかったりしていたのも、我々をシブヤに帰らせないためだとしたらどうっスか？」

「じゃあ、ジンさんは……？」

「がめついフリをすることで、わたし達から目を逸らしていたってこと？」

「たぶん、そうっス」

「えと、……結局どうということなの？」

「僕らを帰らせないようにするためには、例えばユフィリアを人質にしようとするかもしれない」

「私……？」

「だから、そうされたりしないように先回りしていたってことなのね」

「レジスタンス活動なんて嫌だ、帰る！と言ってたら、今頃、実力行使されていたかもしれない。……金を寄越せ、直ぐには帰らないぞ！と言っておけば相手は性急にことを起こさなくて済む」

「そっか……！」

「でも、本当にそこまで考えて動いているのかしら？」

ユフィリアにキラキラとした笑顔が戻ったのでニキータは冷やかしの一言を付け加えておいたのだが、彼女は笑顔のまま抱きついてくる。どうやら『わかっている』らしい。

「……ちょっと、出てくるね？」

そう言ってレイシンが立ち上がる。立ち上がる時にどこか微笑んでいたように見えた。といっても、普段から温厚で微笑みを絶やさないタイプではあるのだが。

「何処に行くんです？」

「夕飯の支度だよ。ちょっと早めだけどね」

「硬軟をとりまぜるんっスね」
「……………」

その日は始めて夕飯に呼ばれ、ハーティ・ロードのメンバーと一緒に食事をする事になった。天幕の外に立つと大人数の話し声が聞こえてくる。中には30人近い人数が座っていて、一斉にこちらを見つめる視線にさらされてしまっていた。

「みんなもう知っているとは思いますが、彼らがアキバからやってきたカトレヤだ！」

霜村に紹介され、先頭のシュウトは軽く会釈しておく。ユフィリアが軽く胸元で手を振ったりしていた。殺気とも期待ともとれる眼差しを感じるが、ひるんだ様子など見せられるはずも無い。

ほぼ全員が集まったことになるのだろうが、ここにテーブルや椅子はなく、地面に敷物だけをひいて思い思いの場所に座って食事をするスタイルらしい。食事の用意してある空きスペースに半ば自動的に座った。

「余計なことは抜きにして、今日は飲み食いを楽しもう！……カンパイ！」

かるく杯を揚げてから飲み物に口をつけたが、それは酒ではなかった。単なる物資の不足かとも思ったが、状況からすれば、酔って暴れることのないようにという配慮かもしれなかった。

「なんかいつもより豪華じゃない？」

「確かに………ともかく食ってみようぜ」

「あ？ なんだこりゃ！？」

「すげえ！ すげえぞ！」

「ウまあー！」

間もなく、各所から声が上がりに始める。どうやら料理の評判が良いらしい。シュウトも食べてみる。それは確かに美味しいものではあったのではあるが……。

「この味付けて……？」

レイシンに向かって尋ねてみると、笑顔だけが返って来た。

「きたねーぞ、睦実！」

「肉ばかりとるなよ！」

「ちよっと、はしたないんじゃない？」

「フハハハ！この串肉は誰にも渡さないよ！」

どうも一部の人間が暴れ始めているらしい。両手の指の股に4本づつ、計8本の串焼きを爪系武器のように装備してかぶりついているのは、あの睦実という女の子だった。

「落ち着け、睦実。慌てなくても料理はなくなったりしない」

「何いつてるの、さっちん！料理は食べたらなくなっちゃうんだよ！？」

「それはそうだが……」

「美味しい料理ともなれば、食べ時を逃す手はないんだよ？ アツアツの内に頂くのがお料理様を持て成す最高の作法でしょ！」

「だからな、恥ずかしいから立って叫ばないでくれ。 客人もみてるだろう……」

さつきがチラリとこちらを窺いながら、睦実の暴走を諫めようとしていた。これと同じような光景をいつもどこかで見ていた気がするのだが、こちらでもやはり虚しい努力でしかないらしい。

「あの小娘、なかなか良い事を言う……」

「さつきさん、苦勞してそうですね……」

その食い意地に共感したのか、ジンが睦実を褒めるコメントを呟く。シュウトはさつき嬢の方に共感を覚えていた。

「おお、ラビ！今日の料理はよく出来てるじゃないか。よくやってくれた！」

霜村が料理担当と思われる少年に声を掛けていた。周囲の人間も彼にホメ言葉を掛けていた。

「いえ、今日の料理は カトレヤ のレイシンさんに手伝っていた
だいたものなんです」

ぴたり。

その一言で完璧なまでに喧騒が途切れた。見事な統制と訓練結果の現れだろう。沈黙する闇の中で誰かの咀嚼音だけが無粋に響いていた。……ジンだった。間もなくゲップも追加される。

溜息とともに「またアイツらか」と誰かが呟くのが聞こえた。

ハーティ・ロード の第3部隊はたしかに精鋭揃いではあったが、それはゲームに限ってのことであり、リアルでの料理スキルを

持っているメンバーがいた訳ではなかった。それなりに料理ができるメンバーも、苦勞して高めたサブ職を変えるのは戦力低下に繋がってしまうため、結果的に料理人のサブ職を高レベルで保持していたラヴィアン少年（通称ラビ）にリアルな料理を教える形で仕事をさせることになっていた。

だが30人分の料理をリアルで作るのはかなりの難事である。大量に作ることによる味付けの加減に始まり、材料の下拵えにかかる時間・分量など、家庭料理とはまったく規模が変わってしまうのだ。材料調達でも先に具体的な指示を出さねばならないのだが、実際にはさつき達にまかせ切りになってしまっている。料理の基本も口々に身に付いていない初心者には厳しすぎる難易度であった。

ミナミの都市機能からほぼ隔離状態にある彼らは、結果、焼いて塩を振るだけといった初歩的な料理を中心に今日まで凌いで来ている。それもしばしば冷めてしまつて美味しくない代物ではあったのだが、それでも湿気た煎餅に比べれば何百倍もマシな料理なのだ。

つかつか、と睦実がシュウト達のところまで歩いてくると、

「ねえ、明日の夕飯だけどさ、あんた達のところにお呼ばれてあげてもいいよ?」

と言つた。空気を読まない人間はこういう時には限りなく強い。

「阿呆う!」

「汚ねえ!」

「裏切りもの!」

「自分だけズルいぞ！」

「恥ずかしいからやめてくれ、睦実……」

あっけにとられたシュウト達が反応するよりも早く ハーティ・ロード のメンバーから怒号が飛ぶ。

「ねえ、レイシン。ついでだからあたし達の料理も作ってよ！ お願ひ！ ね？」

「うーん、別にいいんだけど………どうしょつか？」

仲間をまるつきり無視して頼みはじめる睦実。レイシンは焦らすような笑顔でジンの方を見て判断を委ねる。

「いいならいいでしょ！？ ねっ！ ねっ？」

はしゃぐ睦実に、ハーティ・ロード の面々も事の成り行きをつばを飲むようにして見守っていた。

「……て、ことなんだけど、どうする葉月くん？モチ、別料金だけだよ？」

ジンはあからさまにいやらしい声色を出して葉月を追い詰めようとしていた。（本当に演技なのかな？ 楽しんでやってないか？）などと思わなくもない。

「えーっと………（苦笑）」

「構わん。背に腹はかえられんだろう」

「ですが………すみません、よろしくお願ひします」

ワツと歓声が沸いた。ハーティ・ロード のメンバーはそれぞれのやり方で歓びを表現していた。ガッツポーズをするもの、叫び

声を挙げるもの、ホツと胸を撫で下ろすもの、中には「こつこつサポートの方がありがたい」と冷静なコメントをする者もいる。

「本当に良かったのか？」

「別に構わないよ。人数が多いから大変そうだけど、挑戦してみたかったしね。」

「そうか……」

ジンもレイシンも、それっきり後はなにも言わなかった。

その後は霜村が食料庫を解放すると言ったため、ちよつとした宴になっていった。豪気だとは思うのだが、どうやら備蓄管理などの都合を考慮せずに決めているらしい。シュウトも カトレヤ で裏方仕事を任されているため、慌てているメンバーの動きが見えるようになっていた。

そんな事情とは関係なく、さつそく酒を取りに走るメンバーがいたりし、レイシンもせがまれて追加の料理を作りに行くことになってしまう。

カトレヤ の誇る宴会盛り上げ班こと、ユフィリア&ニキータコンビがあちらこちらに赴いて宴を盛り上げ始めていた。その様子を遠くから眺めるでもなくみていると、さつき嬢が自分の杯をもつて近付いてくる。ジンの両隣には石丸とシュウトが座っていたため、シュウトの脇に座ると、ジンに向かって話しくそうに声を掛ける形になっていた。

「あの、先程は失礼を……」

「おう、なんかしたっけ？」

「後ろから、その……」

「あん？」

「はいはい、そごどいて！」

睦実がジンとさつき嬢との間に割り込むように座ろうとしたため、結果的にシュウトの横に陣取ることになった。手に抱えていた作りたてと思われる料理を重そうにゴトリと置いた。途端に旨そうな香りが広がる。

「おほっ、うまそ〜！」

「そうなの！すっごい美味しいんだもん、もうびっくりだよ！」

「なんだ、つまみ食いしてんのかよ？」

「当然！今は調理場が一番熱い戦場だもん。あたしなんか倉庫で一番よさげな肉を調理してもらったんだから！」

「そこままでしているのか、睦実！？」

「のんべえどもは酒狙いで漁ってたけど、花も恥らう乙女としては食い気が最優先ってね！」

「やるな、小娘」

「任せてよ！」

ハーティ・ロードのメンバーはかじり付くつくように料理を貪っていた。シュウトも真似するようにかぶり付く。十分に腹はくちくなっていたが、周囲の食いつぶりに食欲が刺激されたようで、もう一度食事を楽しむことにしていた。

「たしかに、驚くほど美味しいな」

料理を丁寧に食べ終えて、さつき嬢がぼつりと感想をもらす。

「ホントだよな。ねえ、レイシンちよーだい？」

「ばーか。オモチャじゃねーっつ。それにアキバに嫁が待ってる

から無理だな」

「そっかー、奥さんがいるんじゃないや無理だー」

「大変なのですね」

笑っている睦実とは対照的に、さつき嬢の顔がすこし曇る。夫婦が一緒に巻き込まれたことで、良かったのか悪かったのかは一概には言えない。子供がいなかったため、現実世界側に置き去りにしていないのがせめてもの救いだと笑ってはいたのだが。

「じゃあ、シユウトくんは？」

「え？」

「だからあ、付き合ってる人とか、いるの？」

「それは、その……」

小さな声で隣の睦実から話しかけられていた。突然ふられた話題に困惑するのだが、睦実が少し照れて赤くなった感じなのも魅力的に見える。

「……いるような、いないような？」

「あゝっ、わるい男の人なんだ？」

「そんなことは………あるよ？」 キリッ

「あはははは！ シユウトくんって面白いんだね！」

なんとか睦実を笑わせることが出来たと思つて安堵する。

実際のところ、シユウトからすれば（ユミカとは、いったいどういふ関係なんだろう……？）と思う部分はある。適当に抜け出して今日こそ念話しなければならぬのだが、その義務的な感覚は何か違ってやしないのだろうかと思わなくもない。単に久しぶりに話す緊張感を恐れているのかもしれないのだが。

「あんだ達って、そんなに悪い連中じゃないんだね？……そっちのオッサン以外は」

「フン、見る目の無い小娘だ。俺ほどの善人が一目で区別できんとは……」

「ついでだから、お金のことはちょっと待っててくんないかなー、なんて言ってみたり？」

「なんのついでだ」

「善人なんでしょ？ そのついで」

「……馬鹿を言うな、そこばかりは譲れないね」

「いーじゃん、ケチ！ 払いたくっても、今は銀行も貸し金庫も使えないんだもん。」

「そうなのか？」

ジンの言葉にさつき嬢が答える。

「ええ。ハーティ・ロードのギルドタグではミナミには入れません。たとえ入ったとしても Plant hwyaden に入るように衛兵達に強要されるでしょう。かといって、ハーティ・ロードでなければ、どちらにしてもギルドの共用資産は利用できませんし」

「そうすると別の街まで行かなきゃならないけど、タウンポータルは死んでるから、歩いていかなきゃでしょ？」

「そうなるだろうな」

「まあ、どの位残ってるのかギルマスもわからないって言ってたけどねー」

Plant hwyaden に入れば、個人的な銀行や貸金庫は利用できるようにはなるのだろうが、ハーティ・ロードの資産を利用できなくなる。それまで、どのような資産管理を行っていたのかはわからないが、全てを共用していたとすれば、ゴタゴタ

している間に大半を持ち逃げされていてもおかしくはない。それも分かってはいるらしく、本人達もあまり期待してはいないようだった。

「そんなになつてまで、何で戦う？」

「……………住み家を、奪われたからカナ」

何気ない一言だったが、シュウトはハツとなり睦実をまじまじと見つめてしまう。彼女は宙を、否、何も見てはいなかった。周囲の空間がとろりとした毒を含んだものになってしまったかのようで、ゆっくりと自分の内にも毒が溜まっていくような気がした。

背後から肩をつかまれ、ジンに場所を変えるように促がされる。

「オピニオンリーダー……………」

「オピニオン？」

ジンと場所が変わると、石丸が小さな声で呟くのが聞こえた。

「時々、リーダーとは別の人物が真の影響力を持っていることがあるっス。理を説くのではなく、感情に訴えて、周囲の人達の心を、ひいては集団を動かしている場合もあるんス」

「睦実さんが？」

石丸の解説を聞いている間も、ジンは睦実の話聞いていた。

「……………仲の良かった人達ともバラバラになっちゃったよ」

「そうか」

「そりゃね、一緒にゲームやってただけだし、殆どの子とはリアルで面識なんて無かったよ。大災害があつて、みんなしんどかったからね。やる気も出ないし、ご飯は不味いし、いつ帰れるかも

わからなかったし、イライラして喧嘩したりもしたけど、それでも友達だった」

「ああ。そういうこともあるだろうな」

「……あんなゴーインなやり方しなくても良かったんじゃないのかな？ Plant hwyaden なんか知らないけど、みんなで仲良くすればいいじゃん。どうして一つのギルドに無理矢理つめこまれないかなあ。」

「黙って Plant hwyaden に入っとけば仲間とだって一緒にいられたんじゃないの？」

「そんなの、今更じゃん」

「今更だから、喧嘩するってのか？」

「なにそれ？」

「一度、コブシを振り上げちまったら、『勿体無いから』振り下ろしてブン殴るしかないってのか？ それとも振り上げたコブシを何もせずに下げるのはカッコ悪いか？体面が気になるか？」

「そういう部分がまったく無いわけじゃないけど……。アンタ達にはわからないんだよ。居場所を奪われたことがなきゃ、こつこつ苦しさは分からないんじゃない？」

別に理解されようとは思わない、という投げやりな態度に見えたが、捨て鉢というよりは諦めが先にあるように感じられた。

シユウトは彼ら・彼女らの苦労を考えていた。やはり 冒険者が都市機能から切り離されるのは大変なストレスだろう。シブヤに居きよを構える カトレヤ は、銀行や貸金庫を利用するのに歩いてアキバまで行かなければならない。今でこそ慣れてお金の使い方が計画的になってきたりしていても、当初はかなりの不便を強いられて感じたものだった。片道1時間の距離ですら不便だというのに、銀

行と貸金庫がまったく使えないとなると、その不便の大きさははかり知れない。全ての荷物を持ち歩かなければならず、ということは、モンスターやPKに遭遇して死んだりでもしたら荷物の半分近くを失うことを同時に意味している。

それどころか、彼らは死んだら戻る場所がないかもしれないのだ。ミナミの大神殿で復活するのもかもしれないが、「あの噂」が本当だとしたら、生き返ることの出来ない仲間がいるかもしれない。戦闘において死ぬことが出来ないというリスクまで含めて考えると、一体どれほどのストレスになるのか想像も付かない。

「……別に普通のことだけだな」

「なにが？」

「家を失うことが、だ。大災害があつたんだぜ？ この世界に
いる人間は全員、家を奪われてんだろ」
プレイヤー

「そういう意味じゃないって」

「同じだ。自分だけが不幸で、他のヤツがぬくぬくしてるなんて思
うのは、甘つたれ過ぎだな」

「……………」

「そりゃまあ、お前等の方が不幸が大きいかもしれないさ。だが、
不幸自慢で俺が勝てたとしても、それでお前より偉くなるわけじゃ
ない。だろ？」

「そうだね」

「なあ、仮にミナミを取り戻すとして、お前等の力だけでどうにか
なると思つのか？」

「それは無理でしょ。ゆくゆくはミナミのみんなにも協力して貰わ
ないと」

「だが、ゲーマーじゃ現実の政治に興味なんてないだろ。それこそ

ゲームをやるのに忙しくて、リアルじゃ選挙にも行かないようなのが大半だろ?」

「ハタチで権利は得たけど、あたしも選挙なんて行くつもりなかったし……」

「まあ、俺だって似たようなもんだ。漫画やアニメ、ゲームの中の政治ならともかく、現実の政治になんか、なかなか興味なんてもないもんだしな」

「うん。」

「この世界は、もう俺達の『現実』になっちまってる。だから、誰が統治しようと思わないと違いないと思っちゃまってんじゃないのかね?」

「そうかもしれない。でも、それじゃ困っちゃうよ」

「いまミナミにいる連中は、そこそこ満足してるんじゃないの?」

「もしかなくても、それはたぶんそうだと思う。大災害 直後と比べたらずっと良くなってるとは言えないかな」

「なのに、そこそこ満足している連中と仲良くしようともせず、叩きのめそうとしてるってワケだ」

「……………別に、ミナミの人達をブチのめしたいわけじゃないけど」
「なら霜村の言ってたみたいに、濡羽とやらをボコボコにすれば気が晴れるってのか? そんなの巧くいったって大神殿で復活したらあとは元通りだろ」

「それはそうなんだけど、でも何かはしなきゃじゃん」

「何を?」

「わかんない」

「今、そこそこ満足してる連中が、以前のような不幸で不満足な状態になるかもしれない。それでもやんのか?」

「わからないよ……………正直、あたし馬鹿だし、難しいことは言えそうにないんだけど、でも諦めちゃいけないんじゃないかって思う。」

巧く言えないけど、諦めちゃいけないと思ってる」

「ふむ……」

「諦めれば巧く行くのかもしれない。だけど、きつと『そこそこ』なんだよね。人に諦めさせておいて、『そこそこ』だなんてダメでしょ。理由になつてないよ」

「なら、どうする？どう、したい？」

「そうだなあ……」

「アイツ等にも諦めて欲しい。奴らの一番の望みを……それなら才アイコでしょ？」

そういつて、睦実は笑った。正気なのか狂気なのか、それは恨みが日常化した形かもしれなかった。

「……………（溜息）、まあいいけど、奴らの望みは分かってんのかよ？」

「ん？知らないよ」

「いい加減だな、オイ。一応は現実世界への帰還を謳ってんじやなかったか？」

「そうだけど、あんなどうせオマケか何かでしょ。本気でやっているととは思えないもん」

「ふむ……………」

そう言っただきりジンが黙ったため、途切れるように会話は終わった。

真面目な話をして照れた様子の睦実は厨房に料理を探しに行くと言つて立ち上がる。何やら考え続けていたジンも、「眠い」とだけ言つて天幕を出て行つた。去り際、ユフィリアがジンに気が付き、飛んで行つて何やら言葉を交わし、頭を撫でられていた。ジンが去

った後、その足でシュウト達のところに来て来た。

「ね、何かあったの？」

「いや、んー、なんだろう？あったような、無かったような？」

「ちよつと話してただけっス」

「ふーん？」

「それでは、私もこれで……」

「なんで？ 少しお話しようよ？」

「いや、あの、その……」

さつき嬢は立ち上がったのだが、ユフィリアにがっちり腕を捕まえられていた。それを見て好機と思い、今度はシュウトが立ち上がる。

「じゃあ、僕は行くよ」

「どこいくの？」

「うん、用事を思い出したから」

「キミは何を言ってるのかな？ 夜は始まったばかりなんだよ？」

ゴゴゴゴ……

「いえ、ですからホラ、念話を……」

「？」

「……相手はユミカでしょ？」

「あ、そっか。それなら許してあげる。うんうん。」 にっこり

戻って来たニキータの一言でなんとか解放される。残念ながらもつき嬢の助けを求める視線はスルーしなければならなかった。必要な犠牲として、人柱になつてもらうことにする。なにやら以前にもこんなやり取りを経験していたような気がして、何やら頭が痛い気をするシュウトであった。

天幕から出てみると、外はすっかり暗くなっていた。歩いていくと次第に喧騒が遠のいていき、寂しさのようなものを感じてしまう。自分達のテントを覗いてみるのだが、やはりというべきか、ジンの中にはいなかった。練習しに行ったらしい。シュウトもテントの中では念話する気にはならず、人目に付かない場所を探して暗視を頼りに近場をブラブラと歩いてみる。

日中は随分と暑くなってきたが、冒険者にとつては不平を言うほどでもない。今夜は熱帯夜にはならない様で、柔らかな風が出ていた。星明りを眺めながら、（何を話そう……？）と悩んでしまう。会話の組み立てを計算できるほど、ユミカのことを理解しているわけでもない。

フレンド・リストを眺めながら、念話をかけるだけなのに踏ん切りが付かずにいた。向こうからかかって来ないかな、かかってきたらどうしようかな？などと考えていると、瞬間的にユミカの名前が点滅したような気がしたため、咄嗟にその名前に触れて呼び出しをかけてしまう。1秒とかがからず彼女が念話に出た。

『もしもし？』

「あの、こんばんは……」

虫たちの合唱の中、独り言のような会話の声はしばらくのあいだ続いていた。

ばかぁん！

練習用の木刀がジンの頭を叩く。

「つてえー！……………ダメだ、反応できん」

「フフフ。さあ、もう一本！」

最初は表情の硬かったさつき嬢だったが、いつの間にか自然な笑顔を見せるようになっていた。可憐であった。

「つまりな、腰って言葉は強化装置なんだよ」

「はい……………」

朝早くからジンが鍛錬しに行くのに気付きシュウトが後を追っていくと、ジンは「気分が良いから特別サービスで腰について話してやるう」と講義を始めた。さつき嬢にアサシネイトを入れたシュウトを誉める意図があるらしいのだが、話題のチョイス的にどこらへんがサービスなのかいまいち分からない。しかし、今、意味が分からないからと聞き逃して良い内容ではないことぐらいは理解できている。

「腰ってのは実は謎の部位でな、何処が腰なのかは微妙な問題な

んだ」

「そうなんですか？」

「通常は、尻の上辺りの背骨周辺を腰と呼ぶだろ？胸があつて、腹があつて、胸の後ろが背中、腹の後ろが腰って感じでの区別になつてる」

「そうですね」

「ところが、『腰を入れる』『腰を落ち着ける』などの言葉が指しているのは、骨盤周辺の部位だったりするわけだよ。ケツ周りってことだ」

「はあ」

「解剖学も名称付け以上のものは解釈論になつちまうし、そもそも四足動物に腰が無いことから推量してかないといけないわけなんだが……」

「それって学術論なんですか？」

「いやいや、もつと単純な話だよ。運動分野の科学化はずいぶんと立ち遅れたって言われているんだけども、なんとか部分な視点では全体性を除外オミットしていることに対して盲目的になつてしまひ易いんだな。例えば、腰の機能を高めるのに、腰のことだけを考えようとしてしまう。だけど腰とは何か？と考えて大元にまで戻らないと、実の所マトモな訓練をすることができなかつたりするんだ」

「そういう話を聞いていると、なんだか常識的ですね」

「……俺は常識人だぞ？ いまごろ何をいつてるのかね、チミは」

「えつと、天才とか化物とか規格外の間違いなのでは？」

「だから、天才ぢやないっていつてんじやん」

「いやあゝ、でも」

「昔、偉い人は言いました。十分に発達した科学は魔法と見分けがつかない、と。……ある程度以上の実力が身につくと、それは才能と区別が付きにくくなつていくのだよ」(クラークの三法則)

「……それ、天才だつて暗に認めてません？」

「区別が付きにくいだけだつつの……なんでもいいけどさあ、その

手の逆差別を努力しないための言い訳にはすんなよ？」
「了解です」

「まあいい。結論付近だけ簡単にまとめるとだな。運動全般における『最重要』部位である腰つてのは、二足歩行というか、立つ事自体と関係があるから腰というものになりえてるわけだ。それは、頭蓋骨からだらーんと垂れ下がっている背骨の連なりを前提として
いる」

「最重要……」

「やつと興味が出てきたのか？ 遅すぎだろ、オイ」

「すみません、続きを……（笑）」

「運動の中心は脊椎なんだ。腰なんてものは実のところ『無い』んだよ。鎖みたいに垂れ下がってる背骨が体の中をブラブラとして
るだけなんだ」

「それじゃあ、腰つていうのは？」

「ただの言葉なんだが、もはや強化的な概念装置という風に認識するのが正しい。四足動物とは違い、人間は脚しそくなどの下体かたいの上に上体…… 体幹部が乗っかる構造をしている。そして背骨が体の中を泳ぐようにしながら、運動エネルギーを下体に伝達したり、下体から地面反力をもらってたりするんだ。その伝達効率を高めるための概念装置が……」

「腰つてことなんですか？」

「そう。これらの前提を理解していない場合、いや理解しているヤツなんてほとんどのいないんだけど、腰つて用語を簡単に誤用することになる。背骨との関係を見無視して腰だけでどうにかなると思っってしまうわけだ。腰で打て！みたいな。」

「ただの言葉なんですか……」

「微妙に違っつて。もはやこの概念は存在しているのに近い。人の意識によって裏づけが与えられてしまっているんだ。実際に、人間

自身が腰に意識を置くことによって、な。むしろ腰に置かれた意識のことを本物の『腰』と言ってしまってもいいぐらいだ。」

「腰に置かれた意識が腰……？ でも腰が無いのなら、腰の場所もないのでは？」

「そうそう。だから問題にしているのさ。二ワトリが先か卵が先か、みたいになっちまってるが、腰は何処なのか？ って話はまさに強さの根幹に関わる物事になってしまっている。その位置情報からして、パフォーマンスレベルを決定しかねないものなんだ。これは強くなるだの話の前に、弱くならないための話でもある」

「……………結局は何処が正しい位置なんですか？」

「何処だと思う？」

「いやあ、イジワルしないでください」

「ちつとは自分で考えろって。俺が嘘を教えたり、知らずに間違っていたりしたらどうする気なんだ？」

「それは……………」

「……………んで、そっちは何処だと思う？ 聞いてたんだろ、出て来いよ」

ジンが振り向いて声を掛ける。その場所から現れたのは、さつき嬢であった。

「すみません、興味深いお話をされていたので……………」

「いや、別にいいんだけどさ」

「……………仙骨」

「ん？」

「腰の位置、仙骨ですね？」

「おお、正解だ。武道・武術の要^{かなめ}。仙人の骨だから仙骨って言うらしいな」

「……あの、すみません。仙骨つてドコですか？」
「お前はソコからか………」

それからしばらく、さつき嬢はギコチなく話にくそうな雰囲気
で固まり続けたため、なにやら場の空気が持たなくなりつつあった。
そこに都合よく救世主が現れる。

「さっちーん！………！？」

「睦実………」

「オツサン、またさっちんにチヨツカイだしてんの！？……あ、シ
ユウト君オハヨー？（ハート：機種依存文字）」

「おはようございます」

「どうしてそういう歪んだ目で人を見るかねえ。邪眼の保持者か、
お前？」

「クツ、あたしの左目が疼く………じゃなくって、ここはさっち
んの朝専用スペースじゃん」

「知るか、そんなもん」

「待ってくれ睦実。今日は彼らが先客なんだ」

「そうなん？……じゃあ邪魔だから出てって？」

「よーし、わかった。いくぞ、シュウト」

「あっ、ゴメン、今のナシ！ シュウト君はあ、ずっといてもいい
んだからネ？」

「お前つて………幸せになれそうだなあ」

「あたりまえだし！」

「……それはともかく、ちょっとお嬢ちゃんに頼みたいことがある
んだが？」

「私、でしょうか？」

「そうそう」

ジンは「ちょっと剣道を教えて欲しい」と言い出した。シュウト

も以前に弓矢の掴み取りをしたいと頼まれたことがある。どうやらジンの趣味のようだ。

さつき嬢が用意した木刀で簡単な立会いを行うと、かなりの速度で技が繰り出されていた。最初はまったく反応できなかったジンだが、しばらくすると1撃目を受けられるようになっていた。しかし、そこから難度が飛躍的に上昇してしまい、連続技になると体がまるで付いていかなかった。

「くっそー、反応できんなあ」

「フツ、愚かな。さっちはスペシャルなのだよ」

「まだ続けますか？」

「いんや、堪能さしてもらったわ。ありがとう。……参りました。」

深く頭を下げるジンに、さつき嬢も慌てて礼を返す。

「いえ！……お粗末様でした」

「……………じゃあ、今回はお兄さんが特別にサービスしてあげようかなっ」

「何でしょう？」

「守護戦士の戦い方を教えてやんよ。実戦形式でな」

「それは……………」

さつき嬢に静かな闘気が宿る。昨日は実力を見せる前に負けてしまったため、彼女もどこか燻っていたのだろう。その気持ちはシユウトにも分かる気がした。ジンと戦えるのは、正直に言って羨ましい。それでも対人戦を見せてもらえるだけでも進歩かもしれない。ニキータが教えてくれなければ、レイシンと戦っていたことすら知らないままだったろう。

「でも大丈夫なんですか、ジンさん？」

「おまえさん、何が言いたいのかね」
「いや、さつきは全く反応できてなかったじゃないですか」
「あれは……超反射を使うと剣道にならないとかの色々な事情があつてだね」
「あつさり負けないでくださいよ？」
「でーじよぶだつて。………負けそうになつたら本気出すから」
「それはそれで大人げないです（苦笑）」
「普通に負けたら『勝ちを譲る良識ある大人』風に振舞うし、勝つたら勝つたで『世界の広さ・厳しさを教える』って役割をこなすわけだよ。これが大人の戦略的勝利つてもんよ」
「まるつきり汚い大人のような気が……」
「お前もちゃんとした汚い大人になるんだぞ？」
「こんな風にはなるなよつて言うべきところなんじゃ？」
「わはは。いいからお前は小娘にヒールするように言えつて」
「分かりました。……すみません、睦実さん！」
「なーにー!？」 しゅたた
「あの、ジンさんにヒールしてもらつてもいいですか？」
「シュウトくんのお願いだもん、もちろんだよ?……ほれオッサン、ヒールだ」
「……なんだこの気持ち。あまり悔しくないのが中途半端で、こつ、物足りないみたいだな」
「すぐにソレが癖になるぜ？」
「ヤバ、押され気味」
「………こちらは準備できました」
「うし、やるうか」

こつして2人は再び剣を交えることとなった。

「なんでお前がこっちにくんだよ？」

「逃げられないように監視。あんた達に逃げられたら美味しいご飯が食べられなくなっちゃうから」

「とかいって本当は違うんだろ？……なんつーか、トシの割りに行動がオバン臭いんだよなあ」

「オッサンはうるさい。ちよつとさつちんに勝ったからって調子に乗りおつて。さつちんの仇はあたしが……」

「超絶特技 シュウト・プレス ツ！」

「きゃーきゃーきゃー」

「フツ、峰打ちじゃ」

「あのー、人で遊ぶの止めてもらっていいですか？」

睦実に押し付けられながらも、とりあえず抗議だけはしておくシユウトだった。

午前中は全員総出で食料確保の狩りが行われることになった。それもこれも昨夜の宴が原因なのだ。とはいえ、カトレヤに参加義務は無い。ミニマップの使えるジンが出張れば効率が違うので、最低限、自分達の食料だけは確保しておくことに決まった。ミニマップがあるとモンスターとも遭遇しやすくなることから実質的に戦闘訓練みたいになるのだろう。念のためにハーティ・ロードの部隊からは離れて行動するつもりでいたが、睦実が監視役として付いてくることになってしまった。睦実本人の意図はともかく、あまりにあからさまな行動は色々と名目が出来たということなのだろう。

「そういえば、あたしがこっち来ちゃったから、ユフィさんを貸して欲しいって言ってたんだけど？」

「却下。意味不明だろ。馬鹿じゃねーの？ お前が帰ればいいだろ」

「いやあ、あたしには崇高な使命が……じゃなかった、えっと、周辺の案内が必要だろうって、ね？」

「そんなのはいらん。むしろ詳細な地図でも寄越した方が気が利いてるっての」

「ヒドいわっ、そんなっ、役立たずみたいに言わなくてもいいでしょ！？しくしく」 嘔泣き

「あー、ほんつと、頭悪いよなあー……」

しみじみと呟くジンだったが、シュウトにも意味が分かるようになっていた。確かに言っていることがおかしい。どちらにせよカトレヤに参加義務はないのだ。しかし、睦実は自分が馬鹿扱いされたと思っただけらしい。

ちなみにユフィリアとニキータはまだ準備をしている。それは彼女たちがノロノロしているのではなく、万々に備えて一つのテントで生活しているためだ。順番的に男子の後に着替えているため余計に時間が掛かってしまう。

「にやんだとうゝ、勝負すつか？ フルボッコに……」

「必殺！ シュウト……」

「ぎゃー！ やーめーてー（棒）」

「……………」

「ちよつと！そこで止めないでよ！」

「いやあ、喜ばせてやるのもなんだし？」

「よ、喜んでないっすよ？ 単に関西の血がボケとツッコミを要求しているだけで……」

「はいはい、そうですね。……そういえば、さっちゃんはどうしたよ？」

「アンタがさっちゃん言うな！ さっちゃんは戦闘班の隊長だから抜けれなかったの。あたしも一緒に居たかったんだけど、泣く泣くこっちに来てあげたんだから、感謝してよね！」

「はいはい、ツンデレツンデレ」
「デレてないんだからねっ！」

あの後、さつき嬢は両手剣でジンに挑んでいた。彼女は本来、両手剣のスペシャリストなのだという。守護戦士の両手剣使いはあまり多くはないが、それでも居ない訳ではない。シュウトの見たところ、彼女は頭ひとつかふたつ飛び抜けた使い手だった。

現実の格闘技とゲームの戦闘は別物であるため、なまじ剣が使えるてしまうとチグハグになり易いのだが、プレイヤースキルと見事に融合されたその剣技は、厳選された特技構成と合わさって高度な水準に達していた。扱い慣れた武器を自在に使いこなす姿は、盾など無くとも隙などは感じられない。観戦しても全く勝てる気がしなかった。自分でもよくアサシネイトを入れたものだと思う。

タイムマン戦闘で彼女に勝てる 守護戦士 は日本サーバーでもごく一部のプレイヤーに限られるだろう。最強と噂される黒剣騎士団のアイザックと、他に何人かいればいい方だ。

それでも勝ててしまうジンは……………流石に化物としか思えなかった。

始めは鉄壁そのものだった。驚異的な反射速度で彼女の攻撃を防いでいく。攻めきれないと見るや、ギアを挙げるさつき嬢に合わせてジンもギアを上げたのだが、今度は鉄壁のままぐりぐりと動き回っていた。不動のイメージが強い『鉄壁』が動き回るという矛盾が拮抗を生み出していた。白熱した戦いとなったが、攻撃に特化しているさつき嬢を相手にダメージを完全には遮断することはできない。最後はジンが強引に攻めて押し切る形になった。攻撃と防御の切り替えが段々と短くなり、攻撃と防御を同時に行うまでになっていた。

右腕と左腕がバラバラに動き、相打ちになるはずの攻撃を盾で防ぎつつ、ジンだけがダメージを与えていく。それでも間に合わず、カウンターの斬り抜けを3度も繰り返してトドメを刺していた。

結果はジンの圧勝だが、さつき嬢はかなり健闘していた。レベル差があるとはいっても、ジンのHPが短時間でここまで減るのは初めて見た。彼女が強かったからこそ、ジンが段々と本気になっていく過程をみるのが出来たのだ。それはシュウトにとってかなり収穫になっていた。

たとえば、本来、矛盾といえば『絶対の武器』と『絶対の盾』による二者の組み合わせである。しかしジンは『攻撃』・『防御』・『移動』という三者の同時共存を目指しているらしいことが分かる。特にカウンターの斬り抜けは『攻・防・移』の合成技かもしれない。

(いや、むしろレイシンさんがどうやって勝ったのかが問題だ……)

さつき嬢は90レベル最高クラスの強者と考えて間違いない。それでもジンに勝てないとなると、レイシンはそれ以上の力をどこから持ってきたことになる。シュウトがちょっとした模擬戦で彼に勝てないのも道理というものだろう。

(システムも、プレイヤースキルも超えた『力』……。いや、まずはスタイルの確立からなんだけども)

どうにも、やるべきことは無限にあるらしい。

「ごめんね、まった？」

ユフィリアがテントから出てくるとジンの近くに歩いていった。

「大丈夫だ。ニキータはどうした？」

「うーん、もうちよっとかかるかなあ〜」

「そうか。なあ、ユフィリア」

「なあに？」

「……………」 ナデナデ

「……………髪の毛ハネてた？」

「いんや。別に」 さわさわ

「どうしたの？」

「ん、いいんだ」 ポンポン

「ヘンなの〜」

頭を撫でられたユフィリアは満更でもない、という顔をする。

睦実「イチャイチャしおって、生意気！」と言っていたが、シユウトは（ジンさんは無意味なことはあまりしない。たぶん防御線を張ったか何かだろう……………）と予測を働かせていた。

「あれ？ 睦実ちゃんだ」

「やあ、ははは」

「こっちの組？じゃあ一緒にいられるね！」

「うん。まあ、そうなるかなあ〜」

「……………お待たせしました。えっと、ユフィは？」

「ん、食事中だな」

「食事……………？」

戦闘用の男装に着替えたニキータが出てきてジンに声を掛けていた。

ユフィリアは睦実を捕まえてほとんど一方的に話している。その

様子はたしかに睦実を食べているように見えなくも無かった。

ニキータの登場で解放された睦実は顔を赤くし、ほうほうの態で逃げ出していた。どうも睦実はユフィリアが苦手らしい。その様子を見ていたジンがチャチャを入れる。

「…………お前、もしかしてレズなの？」

「レズちゃうわ！ だって、めちゃめちゃ可愛くない？ 女の子っていうよりも、もっとことう、生き物として可愛いというか。ドキドキして圧倒されるみたいなの？」

「ふう〜ん……………キャラ負けだな」 ぼそっ

「うっさい！ あれは反則やろ！」

ややもありつつも、出発となる。

「そういうえば、Plant hwyaden の人が居るんだね？ びっくりしちゃった」

「そうだよ。潜入班のメンバーは、あっちのギルドに入って貰ってる」

「そういう人間も必要だろうな」

「まあね。今日も買出しに行くことになってるんだ」

「ホント？ 私、たこ焼きが食べたいんだけど！」

「いいよ？ 頼んであげる」

「そんな気楽なものなのか？」

「うん、大丈夫だよ。30人分の食料を定期的に仕入れると足が付いちやうから、ルートを分散させる必要があるのね。だから狩りや間に合うものは自分達で入手するようにしてるんだよ。お肉や魚はともかく、お米だとか小麦粉を手に入れるのは簡単じゃないもん。」

「なるほどな」

「それに、潜入班だと自由に買い食いできるって特典もあるからね」

ミナミの外に潜伏しているのは、何も ハーティ・ロード だけでは無いのだそうだ。30人の集団となると流石に彼らだけだが、4〜6人程度ならばいくつものパーティが Plant hwyaden に入るのを嫌って街の外に留まっているという。その手の冒険者 に対する闇取引も自然に発生していて、なかなか旨味のある商売だとか。ただし足が付いてしまうと一網打尽にされてしまいかねないので、そういう商人とは細心の注意を払って接触しているとのことだ。

「アンタ達、絶対アタマおかしいって！」

その後、シュウト達と共に数度の戦闘を経験した睦実の感想がコシだった。石丸にくっ付いていると言われた睦実は、何をやっているのか全く理解できずにひたすら走らされていた。戦闘には密かに自信があったらしく、微妙に打ちのめされているようだ。

シュウト達はもはや慣れたもので、遊動型の戦陣を自在にこなせるようになって来ている。一度噛み付いた獣が噛み位置を変えながら弱点の喉笛を目指していくかのように、後衛が走ることで前衛に余裕を生み、素早く弱点を突いて行くことが可能になって来ていた。ジンの指示出しの回数もめっきり少なくなっている。

「これが出来れば確かに効率がいいのかもしれないけど……レギオンレイドはどうするつもりなの？」

「んー、俺は即席のしか経験してないからなあ」

エルダー・テイル では上限70レベル頃から次第にフルレイドやレギオンレイドの重要度が高まっていった。最初は軍事マニアを中心に、本格的な ^{レイド}大規模戦闘 の研究がはじまり、いつしか『即席レイド』に対抗する概念として『一体形成』が登場することに

なる。

即席レイドとは、例えばフルレイドであるならば、4パーティがそれぞれ協力して戦うことを言う。あくまでも基本はパーティ・バトルであり、それぞれとして戦っていないながら、たまに他のパーティとも協力しあう仕組みのことだ。これは分かり易く、成立もし易いのはあるが、同レベルのレイドランクモンスターには通用しないことが間々ある。

それに対して一体形成とは一度パーティを解体してしまい、一つの部隊として編み直したレイド戦陣のことを指す。レギオンレイドを行うに当たって、16ものパーティを別々に管理するのは困難でもあって、一体形成は指揮・運用能力を劇的に向上させることになった。D・D・Dを始めとしたレギオンレイドを行うギルドにとっては、基本でありトレンドでもある。総合戦力は即席レイドに対して数倍化したとも言われ、同レベルのレイドランクモンスターを倒すことも十分に可能となっている。効率的に運用されたレギオンレイドこそが、この世界における最強の軍事的単位に他ならない。

昼過ぎには十分な戦果をもって狩りを終えることが出来ていた。シユウトとニキータが弓を用いて若い鹿と数羽の雷鳥を仕留めている。

「よし、それじゃ帰るぞ小娘？」

「つか、小娘って言わないでよ、オッサン！ あたしには睦実って立派な名前があるの。いい？ 睦実の『実』は美しいの『美』じゃなくって、実りのある人間の『実』なんだからね！」

「外見よりも中身で勝負ってか？」

「そう！」

「つまり、外見に自信が……」

「それ以上言ったら殺す！」

「だいたい、名前で呼ぶように要求しといて、俺の方はオッサンか？……まあ、オッサンだけど」

「え〜っ、あたしにジンって呼んで欲しいの？」

「いや、別に」 キツパリ

「またまた〜、本当は名前で呼んで欲しかったんだよね？」 うり
うり

「……そうだな、出来ればさっちゃんに『ジン殿』って呼んで貰いたいかも」

「ナニソレ？」

「いや、ほら、なんか口調的にあの子、『ジン殿』って呼んでくれそうじゃね？」

「呼ばないから。というか、それはあたしが許さん！」

「……！」

ジンの手が動いてさりげなく敵の存在をハンドサインで伝えてくる。睦実がいるため先程から言葉での警告はない。戦闘を回避しようと思えばできるのだろうが、帰ると言ってしまうので今からだと不自然に回り道をすることになる。道なりに進めば自然に遭遇戦になってしまう。

「今、前方に敵影じゃないっスか？」

気を利かせたらしい石丸が演技で誘導を仕掛ける。

「ん、それは気がつかなかったな。……シュウト」

「はい」

「念のためだ、先行偵察を頼む」

「分かりました」

「はい！はい！あたしも一緒に行くよっ！」

「おーい、偵察は遊びじゃないんだぞ？」

「分かってるよ！っていうか、戦闘じゃ殆ど役に立てなかったから、ちよつとぐらい役に……」

「……といいつつ、シュウトくと2人きりになったらどうしよう！と心が弾んでしまう睦実であつた」

「げへへ……って！勝手なナレーションっけんな！」

「じゃ、ちよつと行ってきます」

「あっ！あっ！待って、待ってえ〜」

「……あれって、大丈夫なの？」

「まあ、シュウトと一緒にだし、こんなところじゃそんな強い敵なんか出ないだろ」

「そっか、そうだね」

「……たぶん戦闘にはなるんだろうけど」

索敵のために迂回して獣道のような場所を選んで小走りに進む。

草木を掻き分けているような状態でもあるので、振り返って睦実に気を遣おうとしたのだが、少し遅れる程度でしっかり付いて来ていた。どうやら トレイテ 森呪遣い には得意なフィールドということらしい。

「アレですね」

「どれどれ？……ほんとにモンスターだあ。50体ぐらいいんね？」

「ですね。」

「んー、インセクト系かあ。おいしいのがいるでもないし、6人じやキツめかも。やり過ぎしちゃった方がいいとおも」

「……伏せて」

「（きゃーきゃーきゃー！ このシチュ、おいしすぎだよ?!）」

巨大蜂のようなモンスターが飛んでいたため、睦実の体に覆いか

ぶさるようにして伏せさせる。無事にやり過ごすことが出来たので、ジンに念話で戻ることを伝えることにする。

「このまま戻りましょう。今、念話してしまいます。」

「うん。わかったよー」 ほけー

「……睦実さん？ その足元って」

『おう、どうしたシュウト〜？』

頭の中に念話の向こうのジンの声が聞こえる。と、睦実の足元に何か巻きついていているように見えた。

「警告草 じゃ？」

「ほえ？」

びぎや ああああああああ！！！！！

「くわっっ！」

「ふにゅ！？」

ハイバル・ワーニング
警告草。

マンドレイクの亜種として、トラップ的な性質の強いモンスターだ。レベルは低いのだが、このモンスターに触れられてしまうと途轍もなく大きな警告音を発して周囲のモンスターを呼び寄せる、といった性質がある。またその音の大きさから、至近距離にいると一時的な聴覚遮断状態になってしまう。(時間経過で自動回復)

今も睦実が謝っているようなジェスチャーをしていたが、口パクのようになっけてしまい、言葉は聞こえていない。

『あー、お疲れ。こっちまで聞こえたわ。とりあえず戻ってこい』

『……………、……………』 （わかりました、すみません）

「どうやら念話の声は聞こえるのだが、自分の話し声は聞こえないままだった。」

聴覚異常を回復すると言いたいらしい睦実の無言の提案を、しかし首を振って却下し、腕を掴んで素早く走り始める。案の定、先程の巨大蜂がこちらに向かって飛んで来ていた。さっさと合流しないと余計に面倒なことになってしまう。

「戻りました！」

「おう、お疲れ。」

完全にモンスターを引き連れての帰還になってしまったが、ジンは意外と寛容だった。

「ごめんなさい（涙）」

「はっはっは。思いつきり予想通りだぜ。んじゃま、とつととやっつけちまうか！」

「はい！」「うん！」「応！」

インセクトタイプの敵が50体居ても、別に恐ろしくはない。今日は睦実もいるので回復力も厚い。少し無茶してもいいかもしれない。そうして実際にも戦いは順調そのものだった。

途中でひとつだけアクシデントが起こる。

「シュウト！後ろからも来るよ！2体！」

ユフィリアからの警告に振り向くが、敵影は見当たらない。2体だと言っても挟まれるのはやはり面白くない。

「どこだ?! 見当たらない!」
空から来るのか? と仰ぎみるが、それでも敵の姿は見当たらず、
焦る。

「そつちはまだ範囲外だ、無視しろ!」
前線のジンから否定の声が飛ぶ。

これはユフィリアのちょっとした勘違いなどではありえなかった。

無事に戦闘が終了したところで後処理を放り出してユフィリアの
ところへ向かう。ジンも同じだった。

「ユフィリア、お前いつからだ? ……というか、もしかしてあん時
からずっと練習してたのか?」

「うん。だってジンさんが出来るって言ったでしょ? それで、最
近なんとなく分かるような時があった」

「そつか、……………偉いな」 ナデナデ

「えへへ。……………シュウト、さっきのごめんね?」

「いや、いいんだ。でも、それじゃあやっぱり?」

やはりユフィリアもミニマップミニマップを使えるようになりつつあるよう
だ。

「うん。まだ時々だけど、私もミニマップ使えるみたい。ジンさん
とおそろい」

「そつか、やっぱり何も考えてないってことだな」

素直に驚いたが、素直な誉め言葉までは出てこない。

「違います、これは感受性の問題ですので。……あははは！」
澄まして答えるユフィリアだったが、直ぐに笑い出してしまふ。

「どうしたのー!？」

「なんでもねーよ!……じゃあ、帰るぞ?」

「うん!」「はい」

ジンに向かって真っ直ぐに歩いていくユフィリアの横顔や後ろ姿を見ながら、ちょっと焦りを感じなくもないシュウトなのであった。

荒くれ武闘家：

「今日のお嬢はちょっとどころじゃなくへんだな」

傷顔守護戦士：

「隊長な。まあ、可愛かったが」

高貞守護戦士：

「うむ。いつも可愛い」

変態武士：

「否！怒られたかった俺、大悲哀」

傷顔守護戦士：

「なんだそりゃ」

変態武士：

「できれば怒鳴られたところでケツに蹴りが欲しいのだが、『そういう日もある、次はがんばろう』なんて言われたら萎え萎えじゃないか。だろっ？」

草生守護戦士：

「変態だ」

相槌暗殺者：

「本物だ」

変態武士：

「日にちを計算して、ギリギリのところできつきちゃんの神経を逆撫でしていくのが醍醐味なのだ……」

荒くれ武闘家：

「誰か、こいつの口にモンスターの糞を詰めて縫い付けとけ」

傷顔守護戦士：

「それを『褒美だ』と思うヤツだぞ？手が汚れるぶんだけ損だ」

相槌暗殺者：

「ああ、徒勞に終わるな」

本日のさつき嬢は機嫌が良いのが外から丸分かりで、普通に歩いててもスキップしているような感じだった。いつもなら下手を打った仲間は年上だろうとガンガン叱り飛ばすのに、今日に限っては妙に優しい。なにやら違和感があつて落ち着かない。

さつき嬢は根っからの体育会系女子である。剣道の實力から部活動をすれば必ず部長を押し付けられるほどだ。普段から人を叱り飛ばしていたため、怒ったり怒鳴ったりに嫌味がない。ハタチそこそこの背の低い美少女に叱り飛ばされると妙な性癖を自覚してしまいそうでもあるのだが、かといって猫なで声で優しくされるといふのも確実に何か物足りない。……まさしくこれぞハーティ・ロードの精鋭部隊。やはり、いずれ劣らぬ猛者揃いであつた。(主に変態的な意味で)

さつき：

「これで今日の狩りは終了とする。十分な成果が得られた。みんな良かんばつてくれたな。……私はとても嬉しい」

解散を宣言するさつき嬢。最後のつけたしの台詞では少し照れるような、はにかんだ笑顔がキュートだった。

荒くれ武闘家：

(おい、嬉しいとかいったぞ?)

傷顔守護戦士：

(マジで何があつた?)

高貞守護戦士：

(男か?男なのか?)

変態武士：

(ついに俺を踏みつける快感に目覚めてしまったに違いない。高いヒールの靴を用意せねば……)

さつき：

「それと、すまないがクラスが 守護戦士 の者は少し残って欲しい。では、解散！」

草生守護戦士：

(やばい、俺ら何かやったっけ？ 怒られるんだよな？)

高貞守護戦士：

(やはり説教タイムか……)

変態武士：

(クソッ、どうして俺は 守護戦士 じゃないんだ！)

相槌暗殺者：

(助かつ……た？)

傷顔守護戦士：

(いいからお前等は帰れ！)

変態武士：

(う、うらやま)

さつき：

「残ってもらったのは他でもない。………その、できれば私に盾の使い方を教えて欲しいんだ」

ざわっ

草生守護戦士：

(さ、さつき隊長が俺達に教えてほしいってよ？) ひそひそ

坊や守護戦士：

(転変地異か？この世の終わりが来たのか？)

傷顔守護戦士：

（いままでそんなこと一度も無かったのになあ）

高貞守護戦士：

（でもイイ。凄くイイよ）

坊や守護戦士：

（……ユフィリアちゃんが来て焦ってるのか？）

傷顔守護戦士

（あー、あの子はヤバいな。ゲキマブとか久しぶりに思ったわ）

草生守護戦士：

（ゲキマブｗｗｗｗ 死語にもほどがあるｗｗｗｗ）

高貞守護戦士：

（それがどうした。俺は隊長に操を捧げると誓ったんだ）

草生守護戦士：

（一生童貞ｗｗｗｗ 魔法使い、乙ｗｗｗｗ）

坊や守護戦士：

（ユフィちゃんとさつきちゃんの絡み希望）

高貞守護戦士：

（おふっ、それ凄くイイ）

さつき：

「……ダメ、かな？」

傷顔守護戦士：

「いやいや、別にいいけど。その前に、何かあったのかい？」

さつき：

「その、“再戦”してもらったんだ」

傷顔守護戦士：

「カトレヤの何とかっていうヤツか。それで結果は？」

さつき：

「私の負けだ。ソロの1対1で戦ったけど、完敗だった」

爽やかさに10%の寂しさをブレンドしたかのような、潔く負けを認める笑顔だった。

傷顔守護戦士：

「……わかった。特訓だな？」

草生守護戦士：

「しやーねーな。俺の裏テクを公開する日が来ちまったか」

某や守護戦士：

「僕もオリジナルがありますから」

さつき：

「……………みんな、ありがとう。いま、準備してくる」

傷顔守護戦士：

(しかし、凄いな)

高貞守護戦士：

(ああ。ギルマスも持て余すさつき隊長を倒すなんて)

某や守護戦士：

(うん。名前を覚えておこう。カトレヤの……)

高貞守護戦士：

(暗殺者 だな。たしかシュウトだったと思う)

狩りから戻ったカトレヤのテントではジンがぐったりとしていた。心配したレイシンが声を掛けている。

ジン：

「ぐえー、ねっむ」

レイシン：

「大丈夫？……そういえば朝、さつきさんと戦ったんだって？」

ジン：

「まあな。おかげで限界ぐらいに眠い。ふわわわ〜（アクビ）」

レイシン：

「それで、どうだったの？」

ジン：

「ん？ もちろん勝ったさ。シュウトの手前、簡単に負けらんないし」

レイシン：

「内容は？」

ジン：

「予想より強かったなあ。全力でこそないけど、本気は出したぞ。

竜破斬 とレベルブースト、極撃も無しだったけど、後は殆ど使ったかな？……シュウトにちょっと見せ過ぎたかも」

レイシン：

「はっはっは」

聞くともなしに聞いていたニキータだったが、近い年代のさつき嬢の強さがなんとなく伝わってくる内容だった。たとえ同じ職業^{クラス}だったとしても、自分にはとてもじゃないが真似できそうにない。

レイシン：

「それじゃあ、けっこう苦戦だね」

ジン：

「まあな。それに、あの子の ショルダー・アタック がどうにも避けられなくってさ」

レイシン：

「そんなに巧いんだ？」

ジン：

「それもあるんだけど、避けられないというか、避けちゃダメって
いうか?」

レイシン:

「どづいうこと?」

ジン:

「こつ、顔がグワツと近付いてくるからドキツとするんだよ。お陰
で負けそうになって焦ったぜ。……しかし、アレを盾で防いじまう
ようなヤツは男としてはダメだね」

レイシン:

「余裕あるんじゃない」

ジン:

「いやいや、なかなかどうして。あれがまたコンビネーションの色
気になってたりで良い感じなんだ」 うんうん

ニキータ:

(く、くだらない……)

どつと疲れに襲われるニキータだった。雑処理を置いてでもユフ
イリアを探しに外へ行こうかと本気で考え始める。

ジン:

「明日はこつちの朝練くるか?」

レイシン:

「朝ごはん無しでもいいならね」

ジン:

「それはダメだな。うん、来なくていい」

レイシン:

「でしょ?」

ジン:

「っーか、なんか訓練用の技でも作ろうかなあ。ほどほどの攻撃

力があるヤツ。弱くなるからイヤなんだけど」

睦実：

「へい、おまち！」

シュウト：

「戻りました」

ユフィリア：

「はやくはやく」

睦実、シュウト、ユフィリアが仲良さそうに戻ってきた。

ジン：

「どうした？」

睦実：

「たこ焼き一丁お持ちいたしました」

ユフィリア：

「早くたべよ」

ジン：

「おつ、いいねえ。大阪のは冷めてても美味いんだけど、やはりアツアツがいいよな」

ユフィリア：

「うんうん」

睦実：

「3舟あるから1人2〜3個食べられるよ！」

ジン：

「そうか、ご苦労。……………どうした小娘はもう帰っていいぞ？」

睦実：

「何を言ってるの？ あたしも食べるよ！」

ジン：

「馬鹿言え、おまえの分なぞあるわけがなかるつ」

睦実：

「ちよつと！買ってきて貰っついてそれはないんじゃない？」

ジン：

「どうせ自分の分は別に1舟か2舟確保してあんだろ？」

睦実：

「な、なんの話かなあ〜」

ユフィリア：

「ねえ、はやくたべよ？」

ジン：

「お前の次の台詞は、『さつちんと後で食べるんだから当然だし！』だ」

睦実：

「さつちんと後で……ハッ！ って、そのネタは流石に古くない！？」

ジン：

「その歳で反応できるお前の方が異常だろ」

石丸：

「第2部っスね」

睦実：

「ちっ、バレていたか。じゃあお代だけでいいや」

ジン：

「つけといてくれ」

睦実：

「はあ？ 馬鹿言わないでよー！」

ジン：

「いやあ、葉月が約束のお金くれないから困ってんだよ。それが入ったら払うから」

睦実：

「それ、あたしには関係ないじゃん」

ジン：

「どうせ、自分の分の代金も俺達に請求しようってハラだろ？」

ユフィリア：

「そうなの？ 睦実ちゃん……」 （ 『信じてたのに……』 の表情）

睦実：

「あぐつ、うぐぐつ……まあ、ここはあたし持ちでいいわ。おごりよ！」

ユフィリア：

「ホントに？ ありがと。ずっと友達でいようね？ フレに登録しよ？」

睦実：

「う、うん」

ニキータ：

（ケチヨンケチヨンね……）

憐れ睦実はジン&ユフィリア連合軍の前に全滅の憂き目にあっていた。流石にニキータも（たこ焼きひとつでここまでやつつげなくても）と思う。

レイシン：

「じゃあ、温めてこようか。そろそろ厨房が使えるかな？」

睦実：

「あつ、じゃあ、あたしの分も一緒に温めてもらおうと」

流れて全員が厨房に移動する。厨房に入ると既にラヴィアン少年がひとりで働いていた。

ラヴィアン：

「レイシン先生！」

レイシン：

「もう始めてたんだ？」

ラヴィアン：

「はい！下ごしらえです」

ジン：

「ほほう、レイシン先生ってか」

ニキータ：

「可愛いお弟子さんね」

レイシン：

「少し待ってて、いま温めてしまうから」

手際よく準備しているのを見ていたが、たこ焼きの舟を開いたところでレイシンの動きが止まる。

レイシン：

「これ、ソースが入って無いんだけど？」

睦実：

「えっ！？……ホントだ。忘れちゃったのかな？ごめんね」

ジン：

「マヨネーズは仕方がないが、ソースは欲しいな。……レイ、作れるか？」

レイシン：

「んー、作ったことないし、たとえ作れても時間かかると思うよ」

ふと見ると、ユフィリアが自分の荷物をゴソゴソと探っていた。

ユフィリア：

「あれー、こんなところに茶色の小瓶があるよ！？」

シュウト：

「買ってたのか……」

睦実：

「なにになに？」

レイシン：

「どれ？……（ペロ）……うん、美味しいね。合うつと思うよ」

ジン：

「偉いぞ、ユフィリア」 ナデナデ

たこ焼きをアツアツに温め、上からトロリとソースをたらせば完成だ。睦実慌てた様子で「さっちゃんの処に行ってくる！」と出て行ってしまった。楊枝の代わりに箸でつまんで口へと運ぶ。

（ああ、ミナミに来たんだなあ〜）

ミナミまでやって来たといっても、実際にミナミの街中には入れないし、『別にちょっと遠出しただけ』と大きな違いがなかった。それなのにたこ焼き一つで遠くまでやって来たという実感を得ていた。ミナミのたこ焼きはやはり美味しい。日本でも東西の文化的な違いを強く感じさせてくれる。

ユフィリア：

「ラビくんも一緒にたべようよ〜？」

ラヴィアン：

「ありがとうございます。後で頂きますので……」

ユフィリアが声を掛けていたが、一生懸命に作業していた。

ジン：

「ふう〜ん、野菜切ってるのか」

たこ焼きを食べながらジンがラヴィアン少年の作業を見ていた。

ジン：

「刃物の使い方にもいろいろ話があるんだが……………」

シュウト：

「…………どうしたんです?」

言いかけて停止したジンにシュウトが声をかける。

ジン：

「いや、無粋だな。やめとこつ」

シュウト：

「やめるんですか?」

レイシン：

「別にいいのに (苦笑) 」

ジン：

「いや、せっかくだ。レイも苦労すりゃいい」

レイシン：

「別に苦労ならいろいろしているよ」

ラヴィアン少年がコン、コンとまな板を包丁で叩くリズムが段々と良くなっていく。

シュウト：

「その話って、戦闘でも使えるんですよね?」

ジン：

「そりゃーな。むしろ戦闘向きかもしれない」

シュウト：

「なら、僕が聞きますよ。後で聞かせてください」

ユフィリア：

「んっ、シュウトばかりズルくない？ お料理の話なら私も聞きたいな〜」

ジン：

「へいへい、お優しいこつて。涙が出そうだぜ」

レイシン：

「はっはっは」

ジン：

「おい少年、手は切るなよ？……指入り野菜サラダは食べたくないからな」

ラヴィアン：

「大丈夫です！」

レイシンはそのまま夕食の準備を始めるといっているので、シュウト達は厨房を後にした。

葉月：

「……報酬の前払いの件なのですが、生憎と一番近い銀行施設は『相手方』に押さえられていまして、直ちにお支払いがお約束できない状況なのです。ですが、作戦が成功すれば直ぐにでもお支払いできるようになるでしょう。折りをみてその都度お支払いしていく、ということではいかがでしょうか？」

ジン：

「つまり、金は出さないけど、とりあえず働けてことかい？ そりゃあなかなか図々しいお願いだね」

葉月：

「……でしたら別案もあるのですが、そちらも少々お手伝いいただきたいのです」

ジン：

「言っただけ言ってみな？ 聞くだけなら聞くから」

葉月：

「ありがとうございます」

夕食後、葉月がシュウト達のテントに交渉をしたいと言ってきた。人払いを頼まれたジンは、石丸だけを残してシュウト達には外に出ているように命じる。すこし距離の離れたところでシュウトは特殊な聴覚強化アイテム『順風耳の煉香』を取り出すと、仲間達にその魔法の香炉を嗅がせていた。

このアイテムは日本サーバーでは入手の難しい中国・韓国サーバーといった大陸産のアイテムである。シュウトが シルバー・ソード 時代に韓国サーバー遠征に参加した時に入手していた品だった。「千里眼」と対になる「順風耳」という神の名を頂いている。

使ってみると、始めに一瞬だけツンとする刺激臭があり、直ぐに指向性の聴覚強化効果が現れる。その力を使って残りのメンバーと一緒にテントの中の会話を盗み聞きしていた。

葉月：

「Plant hwyaden の強大な力。その源は何だとお考えでしょうか？」

ジン：

「何なんだい？」

葉月：

「ご説明させていただきます。まず今、ミナミの街は幾つかの重要施設を Plant hwyaden に乗っ取られています」

ジン：

「ふむ」

葉月：

「我々も濡羽の詳しい出自などは把握できておりませんが、それこそが彼女がどのギルドにも所属していなかった証拠だと考えられます。……となれば、施設を買い取った金の出所が不明ということになるでしょう」

ジン：

「それで？」

葉月：

「Plant hwyaden に資金を供給しているのは 大地人の貴族達としか考えられません。どういう方法を使ったのかは見当も付きませんが、Plant hwyaden の強大さの理由、それは 大地人 貴族との繋がりにあります。なればこそ、その繋がりが弱点にもなりえます。つまり貴族共を叩いてしまえばいい。……そうすればお望みのものも手に入るのでは？」

ジン：

「なるほど、筋は悪くなさそうだ」

シュウト：

「そうか。汚い『裏の仕事』をやれということなんだ」

思わずシュウトは呟いてしまっていた。ユフィリアが唾を飲んだ音がはつきりと聞こえてくる。高額報酬を支払われたら、ジンはもしかしたら引き受けるのかもしれない。金のためなら人殺しも厭わない……そう思わせるような声色を出していた。

しかし、冷静になって考えて見れば、そんなことをするのが嫌だから、今回の仕事に対して否定的な態度を取り続けているハズなのだ。ジンは一体『何から』自分達を守ろうとしていたのだろうか。

その答えを耳にしていると思っただろう。

石丸：

「つまり 大地人 の貴族を襲って、金品を巻き上げること
つすね？ それが結果的に Plant hwyaden の力を
削ぐことに繋がる、と」

葉月：

「そうです」

ジン：

「それは結果的に上手くいかないだろうなあ」

葉月：

「どうしてでしょう？」

ジン：

「第一に、その方法では大した被害を与えられないからだ。基本的に金持ちつてのは、現ナマを持っているわけじゃない。たいていどこでも資金の大半を資産という形で管理しているんだ。現ナマ、この世界だと金貨のことだが、それを倉庫とか金庫だかに（総資産の）1〜2割も持つてりや上等だし、それだつて持ち過ぎだろう。普通は有形・無形の資産の形を取つて、たぶん農地だとか商売に回しているはずだ。この世界の社会システムがどうなってるか詳しいところは知らんけども、貴族だつてんなら管理地域の農民に税金を納めさせてんのかもしれない。それなら金じゃなくて、米とか小麦の形をしているかもしれないだろ？」

石丸：

「穀物は持ち運ぶのが不便つすね」

葉月：

「宝石や美術品なんかもあるんじゃないでしょうか？」

ジン：

「んー、宝石にしろ、美術品にしろ、あんまりこの辺じゃ金に換え

られんだろう。高価な宝石ほど足がつきやすくなる。……それに美術品なんかの場合は、自分で買うんじゃないで、贈り物として受け取っているケースもあつたりするんだよなあ」

石丸：

「権力に取り入ろうとする場合に使われる様々なテクニックっすね」

葉月：

「ならば……貴族本人を殺してしまう、というのはいかがでしょう？」

ジン：

「それもNG。家という既得権益にかかる権力の継承には強固なバツクアツプが用意されているのが普通だ。1人2人殺したところで、影響力の強いところなんか代わりなんぞ幾らでもいるもんだよ」

石丸：

「何人が殺したところでイタチゴッコになるだけっすね」

ジン：

「この話に関連する第二のダメな点でもあるな。敵対者が現れたと判断されて人数を動員されたら30人程度のレジスタンス活動なんてすーぐにお終いだろうさ。こんなトコじゃ隠れおおせることは出来ないね」

葉月：

「いえ、そう簡単に見付かるとは思えません。いくら Plaintiff hwyaden といつても、1万人のプレイヤーの1割も動員できないでしょう」

ジン：

「仮に正体不明のレジスタンス相手に5%もの人数動員が掛けられたにしても、たかだか500人だからな。そのぐらいならたしかに逃げ切ることも出来るだろう。しかし、やはり無理だ。問題は 冒険者 じゃない。大地人 の方だろ？」

葉月：

「そう……か」

ジン：

「何万人いるか知らないが、大地人からの目撃情報を集めるようにされた場合、ちよつとやそつとのことじゃ隠れるのは無理になる。それ以前に、現在の優位性である『存在を知られていない』という点を捨ててしまうことになるぞ」

葉月：

「たしかにハーティ・ロードがやったとバレるような真似をするのは厳禁ですね……」

ジン：

「ま、Plant hwyadenに入つちまつて、ミナミで生活しながら獅子身中の虫をやる方がマシなんだろうが」

葉月：

「それは、できません……」

ジン：

「だよな。レジスタンス活動は仲間のモラル管理が最優先事項。裏切り者を出さないのが最大の鉄則だからな」

葉月：

「仲間を信じていないわけではないのですが……」

石丸：

「元ハーティ・ロードのメンバーもいる街中で、反政府活動を長期に渡って行つのはリスクが高すぎるっス」

葉月：

「……そうです！ いっそ大地人 貴族同士のいざこざという形に出来ればいいのでは？」

ジン：

「それをやるには、綿密な下調べが必要だろうな。ま、がんばってみな？ 金の工面が付いたら呼んでくれ」

葉月：

「いえ、とても参考になりました。今日のところはこれで失礼します」

葉月はそそくさと帰っていった。

ジン：

「ふむ。……もういいぞ、シュウト？」

どうやらジンは端からシュウト達が話を聞いていると思っていたらしい。素直にテントに戻ることにした。

ジン：

「意外とあの葉月ってのは悪くなかったな」

石丸：

「そうっすね」

ジン：

「騙して連れて来といて、丸め込んで働かせればいいや〜なんてやりやがるから、正直、学生の合コンの仕切りやるぐらいの能力だろうと思っただけだ」

シュウト：

「ああ……（苦笑）」

ジン：

「喋りながら思考をまとめて行くタイプみたいな。周囲の人間がマトモなら能力を発揮するんじゃないの？ まあ、過剰な現実主義みたいな部分は残ってるっばいが」

シュウト：

「現実主義ですか？」

ジン：

「強盗や殺人みたいな悪いことをするのが真剣に生きることだ、み

たいに思い込む歪んだ現実主義な」

石丸：

「偽悪的っスね」

ユフィリア：

「んー、ちよっとシュウトに似てる所があるよね？」

シュウト：

「えっ？」

ニキータ：

「そうね、世渡りが上手くなったような感じ？」

ジン：

「上位版シュウトか……そんな気もするな」

シュウト：

「僕はピンとこないんですが……」

ニキータ：

「でも、それを言うなら霜村さんとジンさんだって似てるでしょう？」

ユフィリア：

「えーっ、似てるかなあ？」

ジン：

「ぐえっ、あんな雑なのと一緒にするとか、勘弁してくれよー！」

シュウト：

「ジンさんも雑なところはトコトン雑ですよ？」

ニキータ：

「向こうは劣化ジンさんと上位版シュウトのコンビね」

ジン：

「あ、傷付いた。ふかーく傷付いた。やる気なくなって、キター

！ー」(サ テFX) がっくり

ユフィリア：

「じゃあ、なぐさめ なぐさめ」 ナデナデ

ジン：

「うつつ、追加ダメージをありがとう……」

精神ダメージにくずおれたジンだったが、ここぞとばかりにユフイリアが頭をナデナデする。これで慰められるかというところ、大人の男性的には逆に追い討ちに近い追加ダメージが発生する（ことが割とある）のだが、気がつかないのか全くのお構いなしであった。

ジン：

「……………燃え尽きたよ。真っ白に」

ユフイリア：

「大丈夫？」 ナデナデ

ニキータ：

「……………そろそろやめてあげたら？」

シュウト：

「それで、今後の見通しとしてはどうなるんですか？」

石丸：

「厳しいっスね。結論から言えば役者が足りていないっス」

シュウト：

「役者、ですか？」

石丸：

「『打倒、濡羽』を掲げるにしても、倒した後に代わりになる人材
がないっス」

ジン：

「なんだよなあ。霜村みたいな司馬史観というか『龍馬主義』みたいなもんを勘違いして使うと、なにかデツカイことをやりたい、けど、責任を取らない、取りたくない、取らなくていいって意味で日本人にやドンピシャの主義・思想になるっつーかね。今はどうしたって責任を取る人物が必要なわけで……………」

シュウト：

「ジンさんはどうですか？」

ジン：

「アホか、俺みたいな無名なのがどうやって偉くなんだよ。ムリムリ」

レイシン：

「んー、10年ぐらい前ならなんとかあったかもしれないんだけどねえ」

ジン：

「無茶いうなよ、レイ。その頃は今よりも更に馬鹿だったんだぞ。王様役なんて完璧に無理だって」

シュウト：

「……10年前に何があったんです？」

ジン：

「大したことは何もない」

石丸：

「人生いろいろっスから」

ジン：

「んー？ ……石丸先生、どこまで知ってんの？」

石丸：

「あの現場にもたまたまいたっス」

ジン：

「マジかよ……てかどっちの話？ いや待った！言わなくていい。

ひ、秘密でお願いします」

石丸：

「了解っス」

ユフィリア：

「……いしくん、後で仲良くしようね？」

石丸：

「りよ、了解……っス？」

ジン：

「ユフィさん？ 人の嫌がることをするのは良くないと思うんです

が？」

ユフィリア：

「ジンさんのこと、もっと良く知りたいなっと思っるのはダメ？」

ジン：

「……………」

ユフィリア：

「……………」

ジン：

「いやあ、今夜もとってもチャームイングだね。その魅力的な瞳に吸い込まれそうだよ？」

ユフィリア：

「ウフフ、ありがと。でも、そんなのじゃ誤魔化されないよ？」

ジン：

「……………」

ユフィリア：

「……………」

ジン：

「えっと話を戻そう。何の話だったっけ？」

ユフィリア：

「えーっ！ 昔のお話じゃないの？」

ジン：

「無しだ無し！ ありえないから。………… あんなの面白くないし」

ユフィリア：

「つまんなーいー！」

ジン：

「わーっ！ じゃあ、シブヤに戻ったらな」

ユフィリア：

「ほんと？」

ジン：

「おう。俺の部屋にご招待。ピロートークの時にたっぷり聞かせ
てあげよう」 キラッ

ユフィリア：

「うん、わかっ

ニキータ：

「お・こ・と・わ・り・し・ま・す・っ・!」 ビキビキ

ユフィリア：

「ニナ?……えっと、もしかしてピロートークってダメなこと?」

ジン：

「いんや、これぞまさに紳士と淑女のたしなみ。気だるげな雰囲気
でまったりと会話することですよ?」

ユフィリア：

「……いしくん、ピロートークって何?」

石丸：

「主にセックスが終わった後にベッドでおこなうアフタートークの
ことっス」

ユフィリア：

「あー、そっか!聞いたことあるかも?」 うんうん

シュウト：

「……石丸さんも意外と強烈ですね」

石丸：

「そうっスか?」

ニキータ：

「やり口が汚いでしょう。サイテーね」

ジン：

「なんだよ、別に話さないとはいってないじゃ〜ん」

シュウト：

「そこまで嫌がる話だと、ちょっと興味ありますけどね」

レイシン：

「そんな秘密にするような話でもないんだけどねえ」

ユフィリア：

「ふう〜ん……………それじゃ、あとでお部屋に聞きにいくな？」
さらり

ジン：

「なっ!？」

シュウト：

「えっ？」

ニキータ：

「ちよつと、ユフィ？」

ユフィリア：

「……………」

ジン：

「いや、だから……………」

ユフィリア：

「……………」

シュウト：

(ジンさん、オンナノヒトコワイデス) ガクガクブルブル

ジン：

(ぬう、俺の絶対防御陣がこうもやすやすと突破されるとか。やはり相手は食物連鎖の頂点に君臨する天然自然の獣。所詮、我々は食われる運命の養殖モノに過ぎんということなのか。クッ、神よ……………)

ユフィリア：

「……………」

ジン：

「あーあつたく、なんの話だったか忘れちゃったじゃねーか」

ニキータ：

「全部、自分のせいでしょう?。」

ジン:

「どこまで話したっけ?。」

石丸:

「……役者がいないの話から、霜村さんの龍馬主義に行つて、10年前ならジンさんが統治できるかも?つてところまでっス」

ジン:

「えーっと、じゃあ次は Plant hwyaden を倒すのは難しいって話だな。いわゆる現状の支配構造を打ち倒すのが難しい理由はだな、簡単に喻えると、ビルの中に人が沢山いるのに、そのビルを崩そうとしているからなんだ」

シュウト:

「9・11の世界貿易センターの話ですか?。」

ジン:

「そつちとは違うけど、人が居るのにそのビルを崩そうとしたら大惨事ってのは一緒だな」

石丸:

「ビルを崩そうとしても、そのビルの中にいる人達が自然と邪魔することになるんス」

ジン:

「壊されたら困るからな」

シュウト:

「じゃあ、どうすれば?。」

ジン:

「別のビルに人を移動させてから、元のビルを壊せばいい」

ユフィリア:

「そつか。普通はそうするよね」

ジン:

「ビルに喻えればそういう風にも考えられるんだけど、国家とか政府、組織を相手にすると、しばしば中に人がいるのを忘れて、ビル

を壊そうとしてしまう。つーか壊そうとしている連中が、自分達も建物の中に居るのに気付いてなかったりするんだよな」

ユフィリア：

「ふむふむ」

ニキータ：

「要約すると、別の受け皿を作ってから、Plant hwyaden を倒せばよくて、別の受け皿のためには濡羽の代わりになる第二の人物が必要ってことね」

ジン：

「そうだな。……少なくとも、第二の人物だと目めされるようなヤツが欲しい」

ユフィリア：

「やっぱり、ジンさんがガンバっちゃおう？」

ジン：

「それならお前が歌って踊ってアイドルにでもなった方がマシだろ」
ユフィリア：

「んー、歌っちゃおう？ 踊っちゃおう？」

ジン：

「その後でミニミ運営のお仕事もやるんだぞ？」

ユフィリア：

「ごめんなさいでした。私、普通の女の子に戻りますっ」

ジン：

（嘘涙）

「デビュー前に引退を決意かよ」

シュウト：

「それなら、葉月さんのしていた話はどうなんでしょう？ ……僕らに汚れ仕事をさせようってことですよね？」

ジン：

「まあ、な。汚れ仕事って、言うのは簡単だが、いざやろうとすると結構むずかしいハズなんだ。金で雇った外部の人間にやらせた方

が都合の良い場合もあるが、自分達でやらなきゃダメってケースが大半だ。仲間内のモラルを下げたくない場合に限っては外部の人間を使っつてケースもありうるんだがな。ハーティ・ロードは一度ギルドが崩壊しているみたいだから、これ以上仲間に負担を掛けたくないのかもしれない」

ユフィリア：

「仲間想いだね」

石丸：

「しかし、隠密作戦で外部の人間を使うのは信用できないことが多い。秘密を漏らさないという保証が得られないから、信用できる自分達の仲間で行うしかないというのが現実っスね」

ジン：

「外部の人間に秘密を知られちまうつてのもあるから扱いが難しくなるんだ。後で強請^{ゆす}られたりするからな」

シュウト：

「なるほど、弱みを握られてしまうわけですね……」

ジン：

「さつきも話したが、どっちにしても貴族を襲うつてのはNGだ。部分的にはアリだとしても、細心の注意が必要になる。誰にも見られないように犯罪を繰り返すのは、たとえこの世界であっても難しい。バレれば一巻の終わりだ」

シュウト：

「防犯カメラみたいなのが無い代わりに、何かの魔法的な手段でバレるかもしれませんし。やはり Plant hwyaden に所属しておいて内部の犯罪者がやっているって形を取るしかなさそうですね」

ジン：

「まあ、金の流れを追いかけるのは正しい考え方なだけどさ。…
…ノドが乾いたな」

ユフィリア：

「飲み物とるね」

ジン：

「サンキュ」

石丸：

「この場合は実害を与えることで対立を煽るのが常套手段っスね」

シュウト：

「とうとう？」

ジン：

「ああ、基本的に日本人はお宝にはあまり飛びつかないんだ。でも損はしたくないから、藁にはすがり付く。アクションを取らせるには、まず損をしたくないと思わせるように誘導するのがセオリーだな」
ごくごく

石丸：

「東日本の震災の時に、直接の被災地ではない関東地域で買占めが問題になっているっス。これも（自分だけは）損をしたくないという気持ちによるものっスね」

ユフィリア：

「愛と不安なら、不安が先ってことだね？」

ジン：

「なんのこっちゃ？」

石丸：

「どこかに何らしかの対立を発見して双方に損したくないと思わせることが出来れば、ミナミの内部での抗争を誘導することができるはずっス」

シュウト：

「難しそうですね」

ジン：

「だな。とりあえず 冒険者 側に対立を作るのは難しいだろう。

ゲーム時代に他所のギルドと対立してたりがあったかもしれないが、

それは所詮ゲームの中での対立に過ぎない。その手の不満は 大災害 で一度リセットされてるだろう。それと Plant hwy aden の統治によってもリセットされるだろうから、ミナミの冒険者 は2回のリセットが掛かっている。そこから Plan t hwy aden の支配が始まってまだ一ヶ月程度。これじゃ不満を爆発させるには弱いだろう。ハーティ・ロード みたいなハネっかえりは少数派に決まってるんだから、仮に失政が続いたとしても何ヶ月か先まで待たなきゃならん」

シユウト：

「じゃあ、どうすれば？」

石丸：

「大地人 の貴族達は 大災害 によるリセットはかかっていないハズっス。ゲーム時代の設定の通りに、もしくはゲームには設定されていなかったような設定までもが反映されて、そのままのはずっス」

ジン：

「となるから、 大地人 の側で分裂策を展開することになるわな」

石丸：

「そうっスね。 大地人 貴族の關係に亀裂を入れ、ミナミを2つかそれ以上に割ってしまうんす。そうなれば第二の人物も現れるはずっス。これは彼らが勝手に自分達の代表を選ぶことになるはずだからっス。たとえば強い側の勢力は傀儡を、弱い側の勢力は英雄を立て易くなるっス」

ユフィリア：

「どうして？」

ジン：

「勢力が強ければ、自分達の言う事を聞く人物を表に立たせようとするからだな。逆に勢力が弱い場合は英雄的な人物自身の力で状況を覆そうと考えるから、だろっな」

石丸：

「そうっす」

ジン：

「まあ、片方は濡羽のままだろうな。それと仮に上手くいったとしても俺達に都合の良い英雄が立つとは限らない。悪魔みたいなヤツが第二の人物だったりしたら余計に面倒なことになるだろうな」

シュウト：

「確かにそうですね。自分達が望む人物をねじ込む必要がありそうですね」

ジン：

「まずはどんな勢力があるのか、そこではどんな利害関係があるのか、少人数でも突くことのできる利害はどこかって情報を集めるところからだな。事前情報の質や精度によって作戦の成否が大きく変わって来ちまう」

シュウト：

「関西方面のゲーム設定に詳しくないとダメなことですよね」

ジン：

「貴族の名前だなんて、いちいち覚えてないからな」

ニキータ：

「それよりも、そもそも濡羽って人からして、まるで謎なんじゃないかしら？ 本来、対立していたかもしれない貴族達をどうにかして纏め上げたのでしょうか？」

シュウト：

「確かにそうだね」

ジン：

「案外、ユフィリア並みか、それ以上の美人だったりしてな」
に
へらく

ユフィリア：

「怖そうだけど、ちょっと会ってみたいかも？」

ニキータ：

「美人かもってだけで鼻の下が伸びるのはどうなのかしら……」

石丸：

「強制的に言う事をきかせる、といった能力を持っている可能性はあるっス。その場合は作戦の前提が狂うっスね」

ジン：

「そんな能力を持ってたとしたら、目的は何かってことも出てくるだろうな。……………そういえば、Plant hwyaden がアキバと協力しない方針ってのも気になるところだな」

シュウト：

「今のつて、どこからの情報ですか？」

ジン：

「葵」

シュウト：

「葵さん、ちゃんと仕事してるんですね！」

ジン：

「9部9厘までは遊んでんだろっけどなー」

レイシン：

「わっはっは」

ジン：

「まあ、本気で遊ばなきゃ出てこない話だつてあんだろっけどさ」

石丸：

「……………しかし、対外的な排他主義は、内部の結束や統一感を高める時にも使われる手段っス」

ジン：

「ふむ、共通する敵の前に敵味方が協力しあうつて論理だな」

石丸：

「大地人の貴族達をまとめるにも、東ヤマトを敵扱いするのは名目が立て易いのかもしれないっス」

ニキータ：

「それなら確かに……………」

ジン：

「筋は通りそうだな。なんにしても、厄介極まりない」

石丸：

「まだまだ情報が足りていないっスね」

ユフィリア：

「ねえ、結局、ジンさんはどうしたいの？」

ジン：

「んー、俺というか、俺達には戦う必然がないんだよな」

ユフィリア：

「戦いたくないってこと？」

ジン：

「そ。別に勝ち目があるから戦うってわけじゃない。勝ち筋なんてのは戦いながら見つけていけばいいもんだ。だけど、戦う理由がないのに戦うのはさすがに不毛だろうと思ってる」

シュウト：

「……じゃあ何でこんなことを考えているんですか？」

ジン：

「そりゃ、何が理想かを考えるついでだよ。一番いい状態は何かってな」

ユフィリア：

「んー、睦実ちゃん達がちょっと可哀想かも？」

ジン：

「それは ハーティ・ロード の連中と『先に会っただけ』だから？ ミナミに入っちまえば、今の体制でもちゃんと生活している連中が大半だろ。余計なことをすりゃ、大勢に迷惑が掛かるだろうさ。

……それでもやるべきだと思えるような理由が、俺達にはない」

石丸：

「そうっスね」

ジン：

「ま、美味しいメシ食ってりや　ハーティ・ロード　の連中も戦う気
なんざなくなるかもしれない、ってのはあるけどな」

レイシン：

「はっはっは。それなら、がんばっちゃおうかな」

ユフィリア：

「うん。睦実ちゃんってゴハン大好きそうだもんね？」

ジン：

「小娘か……いや、アイツは食い物じゃダメだろうな。快樂主義に
近いから『目の前のモノに強く反応しているだけ』だろう。まあ、
しばらくはシュウトでもあてがっておけばいいんじゃないの？」

シュウト：

「どうしてそうなるんです!?!」

ユフィリア：

「……ダメだよ、ユミが可哀想でしょ？」

ジン：

「ですよーねー？」

ユフィリア：

「シュウトもだよ？」

シュウト：

「僕はどちらかと言えば被害……」

ユフィリア：

「……………」

シュウト：

「……………気を付けさせていたくださいと思います!」

ニキータ：

「目的がないなら、今までの話って意味あるのかしら？」

石丸：

「現状を変えられないのならば、単に現状のままに居るしかないっ
スから」

ユフィリア：

「えっと、どういふこと？」

ジン：

「だから、変えることが出来るなら最善を求めることも出来るが、変えられないなら最善もへったくれもない。かといって変えてみて現状よりも悪くなるんなら変える意味なんて無い。どう変化すべきかってビジョンも実の所みえてこないんだけどな。だから、ないない尽くしだな」

ユフィリア：

「じゃあ、シブヤに帰るの？」

ジン：

「いや、まだだ。……ここで出来ることだけでもしておかないと」

シュウト：

「何か考えがあるんですか？」

ジン：

「うんにゃ、無い」

シュウト：

「ダメダメじゃないですか……」

ジン：

「そう言つなよ。経験的に言えば、よく分かってない内はやるべきことがまだ残ってるものサ」

シュウト：

「じゃあ、情報収集からですね」

ユフィリア：

「うん」

ジン：

「まあ、そうなるか。……なんか最近、頭がちやんと回ってない気がするんだよなあ。なんか気付いてないことがあると思つんだが……。なんかないか、石丸？」

石丸：

「それだけだと流石に漠然としすぎっスから（苦笑）」

ジン：

「うーむ……」 ナデナデ

ユフィリア：

「なんで撫でるの？」

ジン：

「んー、手が気持ちいいから？」 撫で撫で

ユフィリア：

「そっか」

シュウト：

（えっ、そんなのでいいの？）

ジン：

「うーむ………段々アタマがよくなる〜」 さわさわ

ユフィリア：

「もう、私、バカじゃないよ!？」

その後は Plant hwyaden に関わる話題は出なくなり、夜が更けるまでバカ話が続くことになった。

(早く目が覚めてしまった……)

ここは時計に支配されていない世界。日が昇り、空が白み始めればそこから朝である。朝というものは日が昇り始めると途端に明るくなるものだったが、そんなことを知っていても、さつきは好きというわけではなかった。訳も分からぬ子供の頃から朝稽古の習慣が身に付いていたため、良いとか、悪いとかの感情が入る隙間などはない。寒いし、眠いし、辛い。たいてい時間もなくて忙しい。それが朝というものだ。ただ一つ、空気だけは別。朝の空気は一日で一番おいしい。

(子供みたいだな、私……)

不覚にも、朝稽古が待ちきれずに早起きになってしまったらしい。あの2人は今日もきつと来るに違いない。来なかったらどうしようなどとは、さほど考えていない。

人と一緒に朝錬をするのは久しぶりだった。ハーティ・ロードの仲間達も最初の何日かは付き合ってくれたのだが、今では誰も寄り付こうとはしなかった。さつきがすこしばかり激しくし過ぎたということもあったかもしれないのだが、主な理由は この世界では鍛錬にほとんど価値が無いためでもあるのだろう。経験値の取得によるレベルアップによってしか、肉体的な機能の向上は図れない。筋肉痛になっても一時的なもので、超回復などは起こらない。からだを鍛えるということはその意味では無駄なのだ。意味のある

訓練、例えば集団演習や連携訓練などは別にキチンと人数を集めて行っている。だから勘が鈍るといったことの心配はないのだ。ともしれば、さつきが行っている朝稽古などは単なる自己満足と言われちゃうものだ。

(ユフィリアさんには申し訳ないけれど……)

やましい気持ちがないとは言わない。ただ、ちょっと朝稽古の間、あの人を借りるというだけだ。好きだとか、付き合いたいのかと自問してもよく分からなかった。そちら方面はあまり得意な分野ではないこともあるし、そういうものとはちょっと違う感情という気がするのだ。これは素振りの1回1回が鈍っていくのではなく、逆に段々と鋭くなっていくような種類のものであった。

「よっ、早いな？」

「おはようございます」

「えっと……おはようございます」

振り向いて硬めの表情で挨拶を返す。笑顔は必要以上に見せるべきではないという判断からだ。背を向けて素振りしていたのはやはり正解だった。

「ところで、いつも1人なのか？」

「ええ。なんだかんだと朝食前には睦実が来てくれますが、たいてい邪……見てるだけです」

「もしかしてお邪魔だったりとか？」

「いえ、そんなことは。人と一緒だと活気があっていいですね」

「……まったく、こんな美少女と一緒に朝練できるかも？つてシチュをどうしてほっとくのかねえ？ヘタレだね、フニヤチンだね、

論外だね」

「ジンさん、朝からそんな……」

「そのお、すこしだけ厳しくし過ぎたこともあったので」

「鬼教官か、やるなあ」

(うつつ、美少女とか言われてしまった……)

誉められたからと嬉しそうに笑顔にもなれないため、ギコチなく固まってしまふ。同時に鬼教官とも言われてしまったのだが、今となっては「朝稽古でパーティを全滅させるつもりですか？」と葉月に叱られたのも良い思い出である。

練習前のこつした何気ない会話が心地好かった。意図的にリラックサさせようとしているのかもしれない。

「今日は何をやるうかなつと」

「で、では！ 盾の使い方などはどうでしょう？」

「おお、やる気だなあ。じゃあそれでいっか。シュウトには関係ない気もするけど、基本的なことを話しておこうか」

「わかりました」

すこし慌ててしまった感じもあるが、ともかく作戦成功である。

剣道の極意『先の先』。こうして主導権を握って放さないのが勝負の鉄則である。

「結論から言うと、盾ってのは廃れたんだよ」

「え？」

「そうなんですか？」

「理由は諸説あるからハッキリしないんだけど、結果的に盾は使われなくなっただけだ。最終的には鉄砲なんかの火器が防げない

から要らなくなっていくわけだけど、日本ではかなり早い段階から廃れてしまっていたんだな。一方の西洋では盾に紋章を描いたりしていたから、そこそこ残って使われていたわけだけど、まあ、旗みたいなもんだろうな」

「なる、ほど」

「そうでしたか」

「鎧が発達すると両手持ちの武器を使う傾向が強まるんだが、盾の素材が木か鉄か、みたいな話もあるし、決め手がドレとかは言い難い。置き盾とか垣盾とか言われる設置して使うタイプの盾ばかりになったわけだな」

「矢とか鉄砲を防ぐのに使ったとか？」

「そうそう。その進化形が塹壕とかだな。そんなワケで、盾を使う技法なんかは少なくとも日本には無い。どっかのマイナー古武術とかには残ってるかもしれないけど、失われたのと大差はないだろう。あとは暴徒鎮圧に機動隊が使ってるライオットシールドぐらいのものか。アレはどう考えても別モンだろう」

「……いきなり終了ですか？」

「んー。要するに、人間は人間ぐらいとしか戦ってないんだわ。戦闘に多様性が無かったから、盾を使う戦法が残らなかった、ということだろう。時代ごとの科学技術や戦術研究の結果、勝ちパターンとか勝立法則とでもいうべき戦闘教義ドクトリンってヤツが決まってしまうんだろうな。その程度には戦争つてのは『単純』だったわけだ。人数が多いと複雑には出来なかったのかもしれない」

「そうになると、この世界では戦うモンスターの種類の多さによって盾の存在意義が保証されているってことになりそうですね」

「まさに、そういうこと。まあ、盾に異様な強度があるからってのもおつきいんだけどさー」

突如として濃いめの解説が始まったので目を白黒させてしまう。

体は、動かさないのだろうか……？

「で、そこから盾の使い方やらなんやらを考察するわけだけでも、端的に言えば、いろんな敵がいるんなら攻撃をしてくるから、がんばってソレを防ぐ！になるわけだな」

「そう、ですね」

「それは分かり易いですけど……」

「で、攻撃力的な意味では両手武器の使い手に大きく劣ることになる。これは片手武器使いの宿命ってものだね。それを集団戦闘における役割分担によって大目に見て貰っているのが実状かな、とか」

「あははは」

「いえいえ、前衛の戦線維持は重要ですよ？」

「そげなこと言うたかて、前衛を壁扱いする慣習があるのは事実だし」(いじけ気味)

「ええっと、その……(苦笑)」

「気にしてないからフォローしなくていい。さっさと本題に入ろうか」

「早くそうしてください」

「今度も結論から言うと、本格的に盾を使おうと思うと、二刀流に近い運用になるんだな。二刀流は同じ得物を両手に持って処理するんだが、片手剣+盾では、それぞれ別の使い方をする二つの『武器』を持つことになる。その結果、最終的には扱いが最も難しくなってしまうわけだ」

「昨日やっていた攻撃と防御の同時処理ですね？」

「まあ、そういうこと、かな」

「しかし、システムの不可能ではありませんか？」

「てーと？」

思わず言葉が出てしまう。ジンは続けるように先を促がしてくる。

「攻撃を受ければ一瞬ですが硬直が発生する場合があります。そうなれば攻撃が停止した上にカウンターになってしまいます。逆に攻撃途中には盾で防げません。上手く行っても同時攻撃による相討ち、悪ければ一方的にカウンターを受けて大ダメージのはずです」

「それだったら同時かちよこつと速く相手に当てればいいだけだろ？ 相手の攻撃は勝手に当たるような位置に盾を移動させといて、こつちの攻撃を先に当てればいいだけの話なんだし」

「そ、それは……」

「また無茶苦茶な（苦笑）」

「それに、その話は部分的に訂正が必要だぞ。上手くやって先に当てれば相手の攻撃が停止することになるんだつたら、こつちが喰らう分のダメージが無しになるはずだ。それだと逆に安全すぎるぐらいの話だろ？ その場合はもちろん先行攻撃が有利になりすぎるから、相手の停止中にどんどんダメージを積み上げることが出来るようになるはずだな。反証としては、例えばレギオンレイドしてる前衛の 守護戦士 がモンスターの軍団の前でカクカクしながら止まったりするかって話だろうな」

「いいえ、そうはなりませんね」

「PVPだと仕切り直しを誘発させるヒットストップ系の特技を使うこともあるけど、集団戦闘でそれがあるとコンビネーションで八メが出来ちまうから、システムの外してると思う。カウンター停止の件もバランスを破壊するつてんでとつくの昔にパッチ当てられてるし、まず無問題^{モイマンタイ}だね。大災害 以降はフレームでキツチり硬直とかは微妙だから、もうちょい研究する必要があると思ってるけどさ。ノックバックやノックバックのレジスト成功だとか、シチュ

エーションは様々あるから、まったくリスクが無くなっているわけじゃないんだけども」

「……そうですね」

1対1でプレイヤー同士が戦うコンテンツなどを特にPVPと呼び、おおまかには特殊ゾーンや特殊ルールによってゲーム本編とは別に「より対人戦闘の再現性を高め」たりしているケースがままある。エルダー・テイル においても闘技場などが存在するため、PVP戦闘はレイドコンテンツとは動作ルールが部分的に違っていた。

ここでジンが問題にしているものにヒットストップと呼ばれる概念がある。大まかに言えば攻撃命中（もしくはブロック）時に攻撃側・被攻撃側の双方に硬直が発生することを指している。

硬直の時間差を多くつければ、硬直の短い側が先に動けるようになるため有利に戦闘を展開するチャンスになる。時間差をつけない場合は仕切り直しになり、近接している場合には瞬間的な選択と対応が問われる展開になる。

ゲームのメインとなるクエスト／レイドコンテンツでは、硬直を厳密に適用していくと多数の敵になすすべも無く捌り殺しにされてしまう。多数の敵と戦っている際、ヒットストップによる停止時間が連続するとシステマ的な行動不能を起こしてしまうためだ。一方でPVPで動作硬直を緩和してしまうと、殴られても次の行動が継続できることから、より速く多く殴り続ける側が勝つような連打ゲームになってしまい、ゲームとしての面白さは失われてしまう。

特技の使用や再使用規制などの基本的なゲームシステムは共通しているも、ゲームの魅力として表現すべき内容は異なってくるのだ。これらの問題は 大災害 によって、より現実的な物理法則に近似的な形になっていることが考えられ、 冒険者 たちは大きな違和感を感じずにすごしている。

「基本的に人間は1度に1つのことしか出来ない。だから同時に2つのことをやるのが優位性になるんだよ。といつても、同時に2つ以上の処理をするなんてのは、運動の根幹をなすものでしかない。それは特別なことではないのさ。それこそ武術や運動を嗜むものは『オハヨウからオヤスミ』まで、身体の運用能力そのものを高めていくことを目的としている。じゃあ、その高めるべき運用性ってのは何か。筋力が高まらない以上、技術がそれに近い何かってことになる。そういった技術の前提にくるのが、この手の同時制御の鍛錬なんだ」

「それは、かなりの才能がなければ為し得ないと思います」

言っていることは正しいように聞こえる。しかし、実現は至難だろう。相手が格下ならばともかく、同クラスの実力者を相手に出来る技とは到底、思えない。自分を相手に実行してみせた彼だからこそ、その言い分に説得力があるように聞こえるが、それは単に巨大な才能があるだけの話だろう。

「才能が無きゃ出来ないものならばこそ、鍛える意味が有る。なにせ、可能になつたらそれは才能に等しいものになるのだろうか？　グダグダ言わずに始めちまえば、その内になんとかなるってこともあるわ」

論理的なようであり、同時にメチャクチャだった。これも同時制御？などと考えをめぐらせる。見ている場所が果てしなく遠い気もするし、意外と1歩先の足元しか見ていない気もする。一緒に大きな夢を見たいと願うタイプではない。むしろ苦痛の多い現実を足掻いて歩こうと笑っているような、なんともタチの悪い人だった。そ

んなことは誰だつてやっているに違いないのだから。

「ジンさんは、具体論よりも前の部分を重点的に鍛えようとするタイプなんですね？ 以前に……」

「おっと、変なことを口走るなよ？ だいたい正解とっておこう。具体の前にある部分とは、抽象というよりも、本質なのだよ」

「本質？」

「というわけで、さっそく練習すんべ」

といつつ、ジンがやらせたことは右手で四角を、左手で三角を描くという良くある体操（？）だった。

「ゆっくりと確認しながらでいいぞ。この時の脳の使い方だとかの感覚的なものを味わうようにするんだ」

その後、同時制御を使うような簡単な取り決めをした組み手をし、また基礎練習に戻り、組み手をし、と交互に練習を行う。ゆっくりとしたペースのため体に負担は掛からないのだが、頭だけは短時間で疲労が蓄積した風になっている。さつきは経験したことの無い種類の疲労であった。

「異様な疲れ方をしますね、この練習」

円と四角を描きながら、同じことを感じていたらしいシュウトが感想を漏らす。自分だけでは無かったことにさつきはホッとしていた。

「だろ？ いま感じているであろうものが俗に『脳疲労』と言われているものだな。……つまり、頭が良くなっているかもしれないわけだ！」

「本当に頭が良くなるんですか？」

「知識は増えないけどな。脳は一部分が活性化すると全体も活性化する仕組みだから、理屈の上では頭が良くなっているはずだ。ついでだから簡単に説明しておく、勉強もそうだが、鍛錬の仕組みってのはフィードバックループを上手に構築できるかどうか？ってのがキモなんだよ。今回の場合だからだを動かした刺激で脳を活性化させている。脳が活性化された結果、からだの動きが改善し易くなる。からだの動きが改善すれば、更に脳が活性化していくって寸法だ。脳とからだの間でループを作るわけだな」

「それだと無限にループすることになるのではありませんか？」

「大抵は慣れが追いつく方が早いんだよ。反復練習はまさに反復することよって脳を慣らしていく鍛錬だろ？ それらは同じ刺激を与える目的から、慣れや飽きによつてループが中断するんだ」

「その理屈だと反復練習では一定以上は上達しないことになると思いますか？」

「ん？ しないよ？」

「いえ、決してそんなことは無いと思います」

「んー、反復練習によつて専門体力や何やらが身に付いたりすることはあるんだが、それで上手くいくのは、より高度な反復練習を指して日々進化しようとしている連中だけなんだよ。ただダラダラ反復しても上達はしないね。まあ、でも、同じことやり続けていると、省体力化の方向に進む場合があるから、そっちの方面で上達する人も出てきたりするのが人間の面白い部分ではあるんだけどな。どちらにしろ同じ事を反復し続けることではほとんど上達はしないと思ってるよ」

「そうなのですか……」

ジンは停止的・反復練習・上達的・反復練習といった用語を即興で作ったりしながらさつきと会話していた。こうして会話している間に

だんだんと脳の疲労が抜けていく気がするのだが、脳の疲労が抜けていくと脳に加えられた刺激もなくなってしまうのではないかなどと心配な気持ちになったりする。

静かになっていたシュウトの方を見ると、何やら目を輝かせていた。感極まった様子で彼は口を開いた。

「それが答えだったんですね？」

「あ？……お前、何の話してんの？」

「ということは？……えっとこれを応用すればいいんだから……」

「おーい、シュウト先生？ ……ダメだこりゃ」

こうして朝稽古は流れで解散となった。

さつきはいつもとは違う不思議な充実感に戸惑いや嬉しさ、少しばかりの後ろめたさが交じり合って複雑な心境でいた。それでも明日が楽しみなのも本当の気持ちだった。

「できました」

「ああ、ありがとう」

書類を渡そうとユフィリアが机の前に立っている。霜村はゆっくりと顔を上げると笑顔を見せながら礼を述べた。

「すまないな、ユフィリア君。……これも頼めるかな」

「分かりました」

笑顔で別の書類を受け取ると、ユフィリアは新たに設置された机

に戻っていた。一生懸命に仕事している姿に微笑みを浮かべると、霜村は立ち上がって水差しのところへ向かう。伏せられていた金属性グラスにオレンジジュースを注ぐと、彼女の側に近付いていった。

「分からないことはないか？」

「今は大丈夫です」

「さ、飲むといい」

「わあ、ありがとうございます」

机を迂回し、椅子のすぐ脇に立つと霜村はグラスを置いた。触れるかどうかという距離で上から覗き込むようにしていると、その視線に気付いたのか、自然と上目遣いで霜村の様子をユフィリアがうかがう。

「何かヘンですか？」

「いいや、凄く助かっているさ」

「でも暇そうですね？ 忙しくないなら、私が手伝わなくてもいいんじゃないかなって」

「いやいや、大忙しさ。ちょっと見とれていただけだ。チャーミングなものな？」

「んーと、そういうの、よく言われます」

「ワハハ、参ったな。そうだろうとも」

誉め言葉で照れるような反応を引き出したかったのだろうが、ユフィリアはまったく動揺することがなかった。すっと身を引いた霜村は笑いかけるようにした。ユフィリアもいつもより少し大人びた笑顔を返していた。

「おーい！ ちょっと止まってくれないか？」

ミナミの郊外に出たジン達は、情報収集のために 大地人 の商人と接触しようとしていた。離れた処から早めに声を掛けて敵意が無いことを示したつもりだったが、盗賊と疑われても仕方のないやり方なのは最初から理解していた。

「 冒険者 様がなんの御用でしょう……？」

「すまん、トマトを扱っていないか？」

「トマトですか？ ありますけれども」

「少し譲って欲しいんだ。モノを見せてくれないか」

「それは、構いませんが」

ジンは相手の懐にドンドン入り込むようにしながら交渉を開始していた。レイシンに品物を確認させつつ、後方に待機させていたユフィリア達に合図を送って呼び寄せる。特にコミカルな白いウサギ型キャップをかぶったユフィリアがこれでもかと目立ちながら近付いてくる。これは素顔の彼女は途轍もなく目立つためで、せめて顔だけでも隠そうとする配慮のためだった。ちなみにこのウサギキャップはユフィリアの自前である。

「レイ、どうだ？」

「うん、凄くいいね。 全部買い取りたいぐらいだよ」

「……すまないが、もし売約済みでなければトマトだけでも全部譲って貰えないだろうか？」

「よろしゅうございますとも。 ありがとうございます」

丁寧に了承しつつも、どこか胡散臭く思われているのが表情に現

れていた。ミナミの手前で突然にトマトを譲れといってくる人間を怪しまないのであれば、それだけで商売人としては感度が低いというものだろう。

街道の脇に荷馬車を止めさせ、石丸を交えての金額交渉を行う。

通常は生産ギルドがまとめて仕入れるなどをするため、トマトにしたところで仕入れ値に利益を上乗せした額で購入することになる。商人自身が街中で売る場合は許可や場所に掛かるコストが上乗せされることになる。そこをこうして 大地人 の商人から直接に買い付けてしまえば仕入れ値のままとなるために安価で済んでしまう。といっても、こんなことばかりされてしまえば生産ギルドが予定量を安定して仕入れることが出来なくなるため、当然のように様々な工夫をすることになる。それら対策の一つが売買契約を結んで行う『予約しての買取り』である。

ただし、1万人のプレイヤーが生活するミナミの巨大さから、周辺の商人たちが商機を見つけるケースが十分に考えられるため、このギルドとも何の約束もしていない商人達とコンタクトを取れるだろうとジン達は予想していた。このため、今回は実験を兼ねた即席の買い付け兼情報収集作戦を行っていた。

ジンはあまり値切らず、逆に金額に色を付けながら、あからさまに周辺情勢についての質問を始めてしまっていた。何処から来たのか、領主はどんな人物なのか、住み良いか、特産はなんだ、と次々に問いかける。情勢に疎いことを暗に認めてしまい、情報収集のために少し余計に金を出しているのだと相手に悟らせてしまう。目的が分かって安心したのか、その旅商人は親切にもいろいろなることを教えてくれたものだった。

冒険者 が世界の情報に疎いということは、商人であれば大半の人間が知っていることだった。大地に根ざしていないのが 冒険

者なのだ。彼らの言う 五月革命 で 冒険者 たちは変わった。何がどう変わったのかハッキリと知っている者たちは少ないが、この世界に対する在り方が変わったのは感じているようだ。

ユフィリアは大人しく座って話を聞いていただけだったが、ウサギキャップの長いウサギ耳で顔を覆うようにしていても、美人の雰囲気だけは伝わってしまうらしい。顔を見たそうに商人の男はチラチラと視線を送っていたのだが、ついには諦め、少々残念そうにミナミへの旅を再開することになった。

「あつっーい！ もう限界！」

しばらく手を振って見送っていたユフィリアだったが、夏の日差しに耐え切れず、毛並みがフサフサとしているウサギキャップをもぎ取るように脱いでいた。冬用らしいのでこれは無理もない。

「もう！ これ、すっごい蒸すんだよ？」

「お疲れ。悪かったな。どうにもお前さんだけは気を付けとかないと、どっかでウワサになっちまいそうだからなあ」

「……………エライ？」

「もちろん、エライぞ」

「じー」

「んー？ ……こうか？」 ナデナデ

「フフ、もわつとするでしょ？」

「確かに。仕方ない、俺が空気を入れてやる」 わっしやわっしや

「やゝー！？」

ジンに髪の毛をグシャグシャにかき乱され、ユフィリアは走ってニキータの所に逃げる。タイミングよく差し出されたクシを受け取

り、慌てて髪の毛を整えていた。なんとか纏まったところで、ニヤ
ニヤしていたジンに向かって「ベー！」と舌を出す。

「しつつかし、効率悪いな。これじゃ金も掛かるし、仕入れた情報が
正しいかどうかも確認しなきゃならない。だいたいルンドスタード
？って誰だよ、有名なのか？」

「そうですね、どうにかありませんか？」

ジンの言うように効率が良いとは言い難い。シュウトは石丸に話
を振るのみだ。

「そうっすね、生産ギルドの仕入れ担当者になら、情報が集まっ
ているとは思っんすが……」

「そんなとこにコネなんか無いよなあ。拉致つてきて吐かせるぐら
いしかないけど、特定すんのも大変だ。つーか、どつかの小さい貴
族にでも恩か何か着せた方が早いかも」

「何かそういうクエストでもあればってことですよね……」

基本的に情報を握っているのは、各地を旅することもある商人達
か、貴族達に限られていた。元来、大衆の知識水準は識字率などに
左右されるものだったが、この世界では街道といえどもモンスター
が出現するため、町と町との間で情報が交換されない。旅などが出
来るのは屈強な護衛を用意できる貴族達か、死ぬリスクまで納得し、
なるべく安全なルートを発見しようと努める商人達に限られてしま
う。

「……なあレイ、トマトってまだ青いか？」

「青いのも混じってるけど、良く熟れてるのもあるよ。早く料理し
ちゃわないと、だね」

「ほほーう、どれどれ」

かなりの量を買って込んだため、3人のマジックバッグに分けて入れている。ジンはレイシンのマジックバッグに手を突っ込んでトマトを一つ取り出していた。

「ふむ、小振りだが赤くて美味そうだな　はぐっ、あむあむ

「どう？おいしい？」

「ウマイぞー！！」「クワッ

「ねーねー、ジンさん」

「いやあ、味が濃いつつーの？　品種改良しないと青臭くて食べないって話は……」

「あむっ」「もぐもぐ

「はい？」

ジンの食べかけのトマトにユフィリアが首を伸ばして齧りついてしまった。

「おいしー！！」

「おいしー！　じゃねえよ、ナニひとの食いかけ食べてんだよ」「つんつん

「ヤードあ」

ほっぺをつつかれ、ぴよんと跳び下がる。

「なんで？　半分コして食べようよ」

「いっばいあんだから新しいの食べばいいだろ」

「だって、ジンさんの食べてるのが美味しいそうなんだもん」

「んなわけあるかよ。レイにウマイヤツ選んで貰えっちゅーの」

「ホントは美味しいの選んだりもできるんでしょ？　自分ばかり

ずるい！」

「そこまで万能じゃねー……と思うけど」

「私、間接ちゅーなんてべつに気にしないよ？」

「……やはり貴様は別のヤツを食え！」

「じゃあ、それちようだい？」

「あんがっ」「もぐもぐ」

「あーっ！ 食べちゃったあ！」

(元氣いっぱいだなあ……)

元氣すぎて、見ているシュウトはなんとなく疲れたような気分になってしまう。その時、すい、と赤い実が目の前に差し出される。いつの間にか隣に立っていたニキータからだ。

「はい」

「……………」

「要らなかった？」

「いや、ありがとう」

「……………それとも、半分コしたい？」

意地の悪い微笑みで提案してくるニキータに、「やめとく」と答えながらも、すこし気不味いような気がして目を逸らしてしまう。やはりというべきか、クスクスと笑われた。

八つ当たり気味にトマトに齧り付いたのだが、予想外の甘さに驚く。果物のような味と云えばいいのか、これはとても良いトマトだと思う。

「ユファイ！ 半分コしましょ？」

ジンのほっぺを両手で掴み、左右に引っ張って遊んでいたユフィリアだったが、ニキータのところにはスタスタとやってきた。しかし彼女のトマトを一口齧ると「やっぱりジンさんのが美味しかった」とボヤいていた。

次の獲物を狙う鷹のごとき眼差しに自分（のトマト）がロックオンされたのを感じ、シュウトは無言で食べかけトマトを差し出す他なかった。

「あつ、これも美味しいよ？ 2番！」

そう言われて、なんとなくニキータの方をみてしまう。ユフィリアはトマトを返すと次の獲物を石丸のトマトに定めたらしく、「いしくーん！」と呼びかけながら走っていった。すでに目的はトマトの食べ比べになってしまっているようだ。

「食べてみる？ 2番らしいんだけど」

「いただきます」

ニキータが食べているところをまじまじと見てしまった。下を向き気味になり、伏目になった彼女がそっとトマトに口を付け、見えないように歯を立てて齧り取る。

「ホント、甘いわね」

「なんなら、もう少し食べてもいいよ」

「やめておく。見られてたら食べ辛いし」

「ははは……………ゴメン」

トマトを返してもらい、もう一度齧る。やはり甘かった。ニキータが素早く身を寄せると、耳元で囁いた。

「間接キス2人分ね？」

どんな顔をすればいいのか分からなかった。苦手だ、苦手すぎる。別にそんなの狙ったつもりはなかったんだ！などと釈明もしたが、冗談なのは分かっていた。このギルドの女子は性格に問題がある。しかし改善要求は無駄なものも分かっていた。

食べ比べしていたユフィリアが、外敵を発見したミアキヤットのように停止して彼方を見やる。同時にジンも声を上げていた。

「冒険者 だな、ここを移動するぞ！」

ジンの宣言で慌ただしくその場を離れることになった。

時間帯にもよるのだが、ミナミから続く街道にいるため、ミナミから出てくる冒険者や、ミナミへ戻っていく冒険者が頻繁に通ることになる。大地人の商人であれば自分達のステータスをチェックされる恐れなどはないが、冒険者が相手では軽く挨拶されるだけでも危険である。この場所には一つのギルド以外は存在していないことになっている。

遠く離れた場所まで移動を終えると、冒険者の姿をシュウトは確認していた。距離があるので視力の良いシュウトであってもステータスを確認することはできない。

ここまでミナミの冒険者たちと全く遭遇しなかったのは、単にミニマップを使えるジンと一緒に居るからなのだ。考えてみれば1万人規模のミナミを経済的に回すには、大勢の冒険者が毎日なにかの役割を果たしていなければならない。冒険に出るものも1000人ぐらいいるかもしれないのだ。

(当たり前だけど、普通の冒険者だな……)

特に何かを期待していたわけでもないが、そんな感想を抱いてしまう。ミナミには普通で当たり前前の冒険者たちが暮らしている。Plant hwyadenの一員として……。

この日はこのままハーティ・ロードの拠点に戻ることにした。

弥生：

「そういえば、水梨が帰ってくるってね？」

睦実：

「うげっ、帰ってこなくっていいのに」

ニキータ：

「弥生さん、水梨って？」

ふーみん：

「そっか、入れ違いだったかも」

弥生：

「潜入班の子なんだけど、そうねえ、一言でいうと……」

長瀬友：

「ヤンキーの人です。怖いです」

ニキータは ハーティ・ロード 女子組の井戸端会議くだらななおしゃべりに参加していた。目的は情報集めといったところである。この中で言えば、弥生と親しくなっておくのがもっとも効果が高そうに思える。彼女は霜村や葉月の近くで仕事をしているのだ。事務ならなんでもござれな秘書の立場にいる。

ふーみん：

「だけどさあ、水梨って怪しいよね」

睦実：

「何が」

ふーみん：

「ムフフフ」

元氣娘のふーみんが思わせぶりなことを言い始める。早くも重要な情報か？と思ったが、単に恋バナらしい。ちなみに彼女はあだ名ではなく、登録したキャラ名称がそのまま「ふーみん」だった。

もともとエルダー・テイルが人気ゲームだったこともあるが、面白いキャラ名をつけてしまう人も少なくない。ニキータの知っている範囲では「第17代にゃん太夫 髭虎」みたいな人（猫人族）もいたのだが、大災害によってゲームが現実化してしまうと、やはりと言うべきか、笑えないことになってしまった。仲間内では本名で呼べばいいのかもしれないが、ギルド間交流ではステータスで相手の名前が見られるため、「やっちゃったな」という雰囲気が出るのは避けられない。

上には上がいるため、ふーみんぐらいの名前ならばまだまだ可愛らしい程度だが、それでもシリアスな話をしている時に（霜村や葉月が）「ふーみん」と呼ぶとコミカルなことになってしまう。

同年代の同性向けの名前なので仕方ない部分はあるのだが、本人が気にしているかどうかはちょっとした問題になる。開き直れる子はいいいのかもしれないが、彼女は気にしているらしく、呼びにくかったら「ふみ」と呼んで欲しいと言っていた。

ふーみん：

「睦実ちゃんにちよっかい出してくるよね？ラブな予感じゃない？」

睦実：

「またその話？今はシュウト君の時代だよ！」

弥生：

「ちよっと前までは葉月くんがカツコイイって言ってなかった？」

睦実：

「もう忘れちゃった。シュウト君サイコーだよ？この間なんか組み敷かれちゃって、もうどうしようかと思っちゃった」くねくね

ふーみん・長瀬友：

「きゃー!」

ふーみん：

「エロ!」

長瀬友：

「えっちです」

弥生：

「どうせボーっとしてて、かばってもらったとかの話なんでしょ?」

睦実：

「そうとも言う。けど、ドキドキもんでしょ」

二キータ：

(あ、弥生さんと仲良くなりたいかも……?)

長瀬友：

「シュウトさん、かつこいいです」

ふーみん：

「カッチョいいんだけどさー、ちょっと話し掛けにくいんだよね」

睦実：

「話しちゃうと優しいんだよう。ちょっと困った感じの笑顔とかされる、いじめるのは正義だと思っちゃう」

長瀬友：

「話してみたいけど、ちょっと怖いです」

睦実：

「ナガトモ、頑張る? 大丈夫だよ、やさしーから。今度一緒に……」

長瀬友は大人しめの少女だった。短く略されてナガトモと呼ばれたりしている。シュウトに話しかけるのが怖いというのは彼女に限らず、一般的な反応らしい。

シュウトは用事でも無ければ女の子と話すことなんてないと思っ

ているフシがあり、話し掛けるのはそこそこ難しいタイプだった。あまり笑顔も見せないため、つまらない話をするのは怖くなり易い。そんな部分もクールだということになってしまっているので得していると見えなくてもないが、本人は自分がモテるとまでは思っていない。まともに相手してくれる女性は母親と妹だけと言っぐらいなので、女の子を拒否するオーラが出まくっていたのだろう。

一応、ユミカと付き合っているような形になっているハズだったが、シュウト自身が押しに弱いためか、強引な人が勝つパターンに入ってしまったっているようだ。

ニキータ：

「霜村さんとか、葉月くんはどう?」

弥生：

「私は無理」きっぱり

ふーみん：

「そっかなあ? 霜村さんって男らしいし、優しいトコあるよ?」

長瀬友：

「頼もしいです」

睦実：

「おっさん系に興味なし」

ふーみん：

「葉月くんは美形だね。言葉遣いが丁寧なのも好感度高いな」

長瀬友：

「でも、いつもヤンキーと一緒にいます」

ふーみん：

「そうなんだけど、キサラギさんは真面目だし、良い人っぽいよ?」

睦実：

「おっと、ふーみんはキサラギ推しかあ?」

長瀬友：

「キサラギさんはヤンキーじゃないですよね？」

ふーみん：

「勝手な方向にもっていくなつての！」

弥生：

「葉月くんは笑顔で何か企みそうだからね。キサラギくんは実直と
いうか、職責以外のことには手をだそうとしないタイプだよ。慎
重っていうか」

ニキータ：

（これじゃ単なる恋バナ……というか品評会？）

弥生は予想通りの反応だったが、ふーみんと長瀬友には霜村は好
意的に評価されていた。クラブ活動という部長や、会社でも出世頭
のような権力者タイプは意外と人気がある。本人そのものよりもイ
メージに反応しているのだろう。近くで見ている弥生は冷静に人物
の観察が出来ているはずだ。

雑談から情報を引っぱるのには長い時間と分析力が必要になる。
女性としてはかなり論理的と言われるニキータだったが、自分程度
ならば幾らでもいるだろうぐらいにしか思っていない。なんにして
も意図的に情報収集をしたことはなく、上手くやれる自信はない。
そもそも情報の重要性に目覚めたのは 大災害 があってからの話
で、今から思えば傭兵として必死に営業していた気もするので、周
囲のギルドには迷惑を掛けてしまったかもしれない。こうしている
と久しぶりに自分から動く感覚があつて、やましいことをしている
訳でもないのに落ち着かなかつた。

油断していたためか、話題が変わっていた。

ふーみん：

「ところで、ユフィリアさんって、どうなの？」

ニキータ：

「どつて、何が？」

ふーみん、

「だから、その、シュウトくと良い感じなんじゃないの？」

長瀬友：

「シヨックです」

ニキータ：

「うーん、仲は悪くないけど、友達っばいわね」

睦実：

「そうだよ、シュウト君はみんなの共有財産なんだから！」

弥生：

「財産で……」

長瀬友：

「ニキータさんはどうですか？」

睦実：

「ニキータは誰が好みなの？さあ、さあ！」にやにや

ニキータ：

「そうね、レイシンさんかな？ 既婚者なのが残念だけど」

ふーみん：

「料理のできる年上のダンディ……、そっちがあつたか」

睦実：

「不倫願望キタコレ！」

弥生：

「自重しろ、オタ娘」（チヨップ）

睦実：

「いたひ。そう言う こんばんややよ だつて、ねらーのくせに

！」

弥生：

「やめなつてば！」

水梨：

「テメエがジンつてののか、オイ」

ジン：

「あ？」

水梨：

「立てよ、オラ」

夕食前の僅かな時間だった。ジンだけが座つてくつろいで場所取りをしていた。レイシンはまだ厨房、シュウト達は配膳に協力して離れていた。見たことの無い男がジンに詰め寄る。針金のようなイメージの尖っているタイプ。

ジン：

「めんどくせえな、なんなんだ」

水梨：

「ナメてんのか、あ？」

ジン：

「……………」イラッ

水梨：

「テメエだろ、ウチにイチヤモンつけてんのはよ、金、金ってセコいこと言つてンじゃねえぞおい！おい！！」

ジン：

「やかましいぞ、キャンキャン吠えてんじゃねえよ、チンピラ」

水梨：

「喧嘩売つてんのか、喧嘩売つてんだよなあ！」

さつき…

「やめんか水梨！ 客人への無礼は私が許さないぞ！」

水梨：

「おい、さつき！ おまえ、この金の亡者に味方すんのか！？」

睦実：

「ゴリア、さっちゃん呼び捨てんな、チワワあ！！」

水梨：

「ち、チワワじゃねーよ！」

睦実のチワワ呼びわりで緊迫した空気に笑いの成分が混じる。

料理の皿を持っていたニキータの手が笑いを堪えて震えるのをみて、心配したシュウトが受け取って近くにサツと置いてしまう。

ユフィリア：

「ジンさん……」

ジン：

「離れてろ。その料理にコイツのツバでも飛んだら食べられなくなっちゃうだろ？」

水梨：

「んだと？」

ジン：

「ハッキリさせておこうか、俺達は仕事しに来てんだ。ボランテイアじゃない。タダで働いて欲しけりゃ土下座でもして頼むのが筋だろうがよ。金も払わない癖に、タダ働きしなきゃ悪人だってか？ ハンパすんのもいい加減にしろや」

水梨：

「このヤロウ」「ビキビキ

ジン：

「ウチのレイの料理を残さず食べといて、その礼がこれなのか？ ビター文払いもしないで、大したタマゲタだな。大体、自分の所の

ギルドメンバーの管理はそっちの責任だろ。だらしないっつたらないね」

水梨：

「表出るよ、クソが……」

霜村：

「ハツハツハ、水梨 止める。すまん、ウチの仲間が失礼した」

ジン：

「まっただな、ちゃんとして欲しいもんだね」

料理が並べられ、全員が席に着いたが、ハーティ・ロードのメンバーは食べ始めることが出来ずにいた。ジンの言うことは正論でも、感情的には水梨の言うことも否定できない。ここで料理を食べては恥知らずになってしまふ……そんな空気になっていた。

陸実：

「みんな！ちゅうもーく！ちょっと聞いてよ！」

ラヴィアン：

「……今日の料理は、その」

陸実がラヴィアン少年の腕を取り、みんなの前に引つ張り出して来る。その脇にレイシンも立ち、勇気付けるようにその肩に手を置いた。

ラヴィアン：

「僕も一品作りました。ぜひ、食べてみてください！」

「それじゃあ、……しかたないか」「ドレが不味い料理だ？見た目じゃ分からないぞ」

しびしびといった様子で食べ始める　ハーティ・ロード　の仲間達。陸実はしてやったりといった表情で「にかっ」と笑っていた。

ジン：

「ったく、これじゃ誰がリーダーなんだか……」

そう呟くジンも軽く微笑んで見えた。

(ダメだ、真っ直ぐ飛ばなくなった……)

夕食後、ジンとさつき嬢の会話からヒントを得たシュウトは、矢に気をこめる練習をしていた。気の量を増やしてみることを優先して練習してみるのだが、力み過ぎているのか、矢が真っ直ぐに飛ばない。どうしたものかと考え、ジンに相談しようと思つてテントに戻る途中であった。

(あれは………?)

真夏の夜に暗色のマントを身にまとい、戦闘準備を終えた数人が慣れた動きでどこかに向かつていく。嫌な予感がしたシュウトは気配を消してその後を追いかけることにする。

(5人。まだ隠れているのか?………あれは、ジンさん!?)

私服に剣を一本持った切りのジンがぶらぶらと歩いてくる。怪しい5人組は暗闇に乗じてジンを襲う構えだった。

(闇討ちする気が……) ギリッ

シュウトの中で何かが途切れる音がした。

ジン：

「いるんだろ？ さっさと出て来いよ」

キサラギ：

「気付かれていたのなら、仕方ない」

水梨：

「……………」

ジン：

「チワワも一緒か。何だ、逆ギレで人を襲おうって？」

キサラギ：

「大人しくしてもらおうか」

ジン：

「バカ言え、襲う気マンマンだろ？ とっとかかかって来い」

水梨：

「……………」

キサラギ：

「話が早いな。遠慮はしないぞ？」

ジン：

「話が遅いな。俺を殺したらアイツ等はシブヤに帰っちゃうが、それでいいのかい？」

キサラギ：

「それは困るのでね、しばらく石化していて貰おうかと思っている」

ジン：

「そう来たか。なるほどね。んで、誰の指示だ？ 霜村か？」

水梨：

「……………」

ジン：

「なら葉月か」

水梨：

「……………」

ジン：

「なるほど、葉月なわけね」

キサラギ：

「葉月は何も指示していない。少し困った顔をしていたのでね」

ジン：

「くつだらねえ、お前等の大人ゴツコになんぞ付き合って居られる

かよ！」

キサラギ：

「鎧も無し、盾も無し、更に1対4で勝負になるとでも？」

ジン：

「初歩的なのをありがとう。そっちは5人だろ？ もっとも、急が

ないと2対3になっちまうがね」

キサラギ：

「なに？」

水梨の背後から現れたシュウトが音も無く一閃する。水梨はまるで反応できないまま音を失っていた。

キリング・サイレントリイ。

暗殺者の特殊攻撃特技で、背後攻撃に成功すると相手の声だけではなく、あらゆる音を数秒ほど奪うことが出来る。

慌てて振り向こうとする水梨だったが、シュウトはその肩に手をおくことで簡単に阻止し、そのまま背後からの攻撃を続けた。今度は体を振り回して引き剥がそうと暴れるものの、シュウトは素早くタツクルしながら足を掛けて押し倒してしまふ。『ぬっ』と伸びた腕が水梨の後頭部を捕まえ、倒れる勢いのまま、顔を地面に叩き付けた。がっちりと押さえつけると、短刀を何度も何度も突き立てる。

キサラギはまるで動けずにいた。気付けば潜ませていた仲間も人も殺されていた。ひとつにはジンという 守護戦士 が会話を引き伸ばしたためなのだろう。同時にシュウトの無駄のない動きに暗殺者 としての格の違いを見せ付けられていた。真っ直ぐに相手を殺すことだけを突き詰めた無駄の削ぎ落とされた動き。水梨が残り数秒で死ぬと分かっているにもかかわらず、助けに入れない。死の恐怖から必死にもがく水梨だったが、シュウトはその抵抗をもともしない。あまりにも一方的だった。

シュウト：

「がっ……！？」

シュウトという 暗殺者 が蹴られて吹き飛ぶ。彼の殺戮を止めたのは、意外にもターゲットの 守護戦士 、ジンであった。

シュウト：

「どうして、ですか……（ハア、ハア）……そいつらは……（ハア、

ハア）……ジンを……」

ジン：

「いい動きだった、が、お前は怒りをコントロール出来ていない。少し落ち着け」

シュウト：

「今はそんなことどうだっていいじゃないですか！ あいつ等は汚い！死んでいい連中です！」

ジン：

「そんなことは関係ない。お前が怒りに支配されていることの方が、よっぽど大きな問題なんだよ」

シュウト：

「許さない、殺す、有無を言わずに殺す。ブチノメス、八つ裂きに、うおおおおおお！！」

熱がシュウトを突き上げていた。人間としては膨大な熱量がシュウトを怒りと殺人欲求へと駆り立てていた。

ジン：

「しょうがねえヤツだな」

シュウト：

「フーツ、フーツ、フーツ」

ジン：

「わかった。少し、シブヤで頭をひやしてこい。後は俺がやっといてやる」

サツと冷たい風が吹いた。

いつか聞いたのと同じ優しい口調。ジンが宥めるよう言葉を掛けると、突如、シュウトを突き上げていた熱気が冷氣へと変わっていた。すべての血が下がってゆく。

（死ぬ……動いたら死ぬ、逃げたら死ぬ、下がったら死ぬ、呼吸し

たら、死ぬ！？)

今まで相手を殺そうと思っていたのと同じ強さで、今度は死の恐怖に押しやられていた。どうして今まで怒り狂っていたのか、まとめて皆殺しにしようとしていたのか、もう思い出せなくなっていた。逃げようにも逃げられない。ジリジリと下がりながら様子を伺う他にない。ジンが動いた瞬間に逆方向へ逃げられれば、もしかしたら1秒か2秒、生きながらえることができるかもしれない。自分は死ぬという絶対的な確信。ジンがこれまで自分と戦おうとしなかった理由を身を持って知った。その前に立つことすら出来やしない。

しかし、シュウトにとっての救いは意外なところから現れた。

ガギン！

金属が打ち鳴らされる耳障りな音。……霜村による背後攻撃。完全な不意打ちだったが、ジンは振り向きもせずを受け流していた。

霜村：

「今のを止めるか……」

ジン：

「お前も死にたいのなら、相手してやるぞ？」

いつの間にか霜村と葉月がそこに立っていたが、ジンの態度は変わらなかった。シュウトもふらつきながら立ち上がると、武器を構える。

霜村：

「フ、喧嘩両成敗というだろう？」

ジン：

「ぬかせ、両成敗だ？ ふざけるな。無関係 気取りやがって、部下が勝手にやった事だろうと責任者が責任とるのが筋だろうが」

葉月：

「我々が来た時には、そちらが仲間割れしていたように見えましたか？」

ジン：

「関係ない。口出ししないで貰おうか」

葉月：

「見たところ、そちらには目立った被害もない。一方で我々の仲間には被害が出ているようですが？」

シュウト：

「ジンさんを先に襲ったのは貴方達だ。戦闘開始後の損害は実力の問題でしょう」

葉月：

「寸前まで仲間割れしていたのに、麗しい師弟愛ですね？ 貴方を救ったのはこちらの霜村ですよ？」

シュウト：

「それを恩に着て、襲撃を無かったことにしろと言つつもりですか？ 馬鹿にしすぎです」

ジン：

「こういう時にや、誠実さの示し方ってものがあるんじゃないのかい？ 葉月くん？」

葉月：

「たいへん勉強させていただいています」

霜村：

「フム、ここはひとつ、腹を割って話さんか？ ……お前達の目的は何だ？」

ジン：

「……当面の目的は金だ。今はシブヤにギルドを構えているんだが、人がいなくなっちゃった。今度はアキバにそこそこマトモなギルドスペースを購入したい。それと最終的には『現実世界への帰還』が俺達の……いや、俺の目的だな」

ジンが語る目的はごくシンプルなものだった。特に隠す処もない。考えてみれば自分達が東日本からの密偵かもしれないといったシナリオを想定していた可能性もあるのだろう。ジンの台詞には率直な分だけ、説得力があるように思えた。

ジン：

「そっちはどうなんだ？ 濡羽を倒しても、何も変わらないのに、何故、戦ってる？」

霜村：

「人を纏めるのには、分かり易い目標が必要だ。濡羽を倒す。ミナミを奪還する。それ以上のことは必要ないだろう。仲間にはその都度、指示を与えていくだけだ」

葉月：

「付け加えますと、タイミングやシチュエーション次第では『濡羽を倒す』というのとは高いアピール効果を持ちえると考えています。最後の決定打になる状況はありえるかと」

ジン：

「なるほど……落とし処の問題か。濡羽を倒せばお前等は顔が立つ。撤退もできるよになるってわけか」

霜村：

「いや、俺は本気でミナミを奪還するつもりでいるのさ」

ジンと霜村はしばらく睨み合っていたが、さっと身を翻すと、「

いくぞ」とシュウトに声を掛けてその場を堂々と歩いて立ち去ることになった。

キサラギは生き残っていた回復職ヒーラーに蘇生を指示したため、なんとか殺された2人を消滅させずに済んでいた。

チラリと見やると、水梨は地面に倒れたまま嗚咽を漏らしていた。キリング・サイレントリイの効果が切れたのに気付いていないのかもしれない。見ないフリをしてやるのが男の情けというものだろう。

キサラギ：

(涙が出るだけマシさ……)

ファンタジックな世界に突然に放り出されて、こんな状況だからこそ『最強』でいたかった。そう思うのはある意味で当然なのだ。だが、やはり自分達はこちら側の世界でも凡人でしかなかった。キサラギも水梨も、平均を上回る優秀な戦士なのだろうが、優秀止まりでしかない。とてもではないが、さつき嬢には敵わないし、あのシュウトという暗殺者にも勝てそうにない。……キサラギは、もはや諦めてしまっていた。だから涙など出ない。今までも、これからも、出来ることをキチンとこなすだけだ。

キサラギ：

「すみません、失敗しました」

霜村：

「勝手なことをするなと言っておいたはずだが？」

葉月：

「申し訳ありません」

霜村：

「それで、どうだった？」

キサラギ：

「強いです。あの 暗殺者 のカレだけでも途轍もない実力でした」

葉月：

「ふう、もしかするとマトモに相手できるのは、さつきさんだけか
もしれませんね。我々の手に余るのであれば、いつそ帰らせてしま
うのも手かとは思うのですが？」

霜村：

「いや、面白いじゃないか、しばらくほっておけばいい」

葉月：

「ですが、それでは……」

霜村：

「アイツは、たぶんただの善人だ」

葉月：

「善人、ですか……？」

霜村：

「ああ、恐ろしく強いがな。善人というヤツは疑って掛かると我慢
できないほどに恐ろしくなってしまうものだ。だが、味方だと思っ
てほっておけば、こちらの利益になることもしてくれるものさ」

葉月・キサラギ：

「……………」

30 対立と対話（後書き）

今回は書き方を変更してみました。

期間限定の「まおゆう×ログホラ ここだけのお話」をコピペすると改行して表示されるので、なんとなく「なるほど!」と思ってやってみたものです。

文体というかルールを統一するのは初歩中の初歩なのですが、初心者なので色々やってみてもいいかな?とかの甘ったれた根性でお届けしております。

次回はどうしよう?(笑)

よろしく願いいたします> (| |) <

31 パラダイス・ロスト

シュウト：

「あー、昨日はそのー」

ジン：

「時々うざったいやつだな、お前。別にいいよ、もう。殺さなくて済んでホッとしてるぐらいだよ」

シュウト：

「すみませんでした」

ジン：

（危うく、オモチャ兼雑用係がいなくなるところだった）ぼそっ

シュウト：

「今、なんて？」

ジン：

「さっさと朝練いくべ」

シュウト：

「それなんですけど、昨日の今日ですよ？ その、まさかとは思いますが、さつきさんって大丈夫なんでしょうか？」

ジン：

「一味がどうかって話か？ そんな ハーティ・ロード の仲間ではあるんだろうけどさ」

シュウト：

「そうですね、そうじゃなくて、昨日ジンを狙って来た一味がどうかってことですよ」

ジン：

「そんな線引きに意味があるか？ さっちはたぶん戦えって言われたら戦うんじゃないの？ そんなで正面から来るタイプだよ」

シュウト：

「…………… 闇討ちは嫌いだろうとは思いますが」

ジン：

「ま、アレを見たらそんな風に疑う気は失せるけどな」

ジン達に気が付いたらしく、遠くから会釈を送ってくる。どことなく嬉しそうな様子であった。

ジン：

「なんか犬っぽいっつーか。散歩してブラッシングしてやりたくないんだよなあ」

シュウト：

「ハハハ（苦笑）」

ジン：

「同じ犬でもチワワとどうしてこうも違うもんかねえ？」

シュウトはふと思いついたことを尋ねてみた。

シュウト：

「ところで、ジンさんがここで朝練を始めたのって本当に偶然なんですか？」

ジン：

「本当も何も、偶然だなんて一言も言っていないだろ？ たまたま朝練しようと思っただら可愛い女の子とかち合うだなんて、こんな嬉し恥ずかしい偶然がありえるのはマンガ・アニメ・ラノベの中ぐらいのもんだろっがよ」

シュウト：

「じゃ、じゃあ？」

ジン：

「ボクちゃん、独り寂しく朝練する美少女をほっとくほど悪党でもな

ければフニヤチンでもなくてよ?」

シュウト:

「……………そうですか」

昨日の続きで盾を使う練習になったのだが、少し難易度を高めていこうという事で、組み手のアレンジについて話している時だった。

ジン:

「そついやあ、せつかくだから、今の内にさつちんと模擬戦させてもらえば?」

シュウト:

「さすがに正面からじゃ勝ち目はないと思うんですが……………」

さつき:

「私はどちらでも。今度は背後からだって遅れをとるつもりはありませんよ?」

ジン:

「いいねえ。おい、何か言い返せよ シュウト?」

シュウト:

「……………むしろ、ジンさんが手本をみせるというのはどつです?」

ジン:

「手本? そりゃいいけど、何の?」

その結果、ジンに向かってさつき嬢とシュウトが構えを取ることになっていた。

ジン：

「どうしてこうなった……?」

シュウト：

「いって言ったじゃないですか」

さつき：

「勉強させていただきました。睦実も呼んでおきましたので……」

ジン：

「小娘の場合、二度寝してんじゃねーの？ うわーい、俺、死ぬかも?」

シュウト：

「それじゃ行きますよ?」

それぞれに武器を構えるシュウトとさつき。ジンは2人をしぶしぶ迎え撃つことになってしまふ。2対1での模擬戦闘だった。

ちなみにさつき嬢が睦実を呼んでいるのは彼女なりの『計画通り』でもある。ユフィリアを呼ばれてしまふとしょんぼりな気分になりそうだからだ。ある意味で乙女そのままである。

ジン：

「ヤバ ヤバ ヤバ」

さつき嬢が正面から、シュウトは背後からの攻撃を組み合わせてジンを攻めていくのだが、綺麗に捌かれてしまった。鼻歌混じりに2人の攻撃の合間を縫って反撃までしてくる。またもや蹴られて後退させられるシュウト（本日2度目）であった。

さつき：

「信じられない……この人は背中に目でも付いてるのですか?」

シュウト：

「ついてるんです。そのつもりで戦って!」

実際のところ、シュウトとさつき嬢ではコンビネーションが十分に噛み合っていない。1+1が2にも届かず、精々が1.7ぐらいになってしまふのだ。一人当たりの戦力に換算すれば90%程度の実力しか発揮できていないことになる。その微細な戦力低下は一流もしくは超一流と言ってよい2人を平凡なレベルに押し戻していた。ジンが対処できるのは当然の結果であつた。

例えばチラッとジンが誰も居ない空間を見ると、さつき嬢はそこにシュウトが居るものだと思つて躊躇してしまふ。動きを止めようとする一瞬、止まっている一瞬、別の技に切り替えようとする一瞬、それはジンにとって十分すぎる時間だつた。ポジションを変えたり、反撃を加えたり、本当にシュウトに対応したりできる。ソロ戦闘における対多数戦闘の経験で2人は遠く及ばないのを実感していた。これならお互いに1人でジンと戦つた方がマシというものである。

と、この状況にさつき嬢がブチ切れる。2人には気付かれてはいないが、朝練開始からしばらくの間は乙女チックモード炸裂のサービスタイムなのだ。それもあつてか、状況を悟つてからなんと10秒も我慢していた。そこからシュウトに声を掛けるまで更に5秒も費やして台詞を考慮する。これは本来の彼女を知っている人間からすればとんでもないことであり、もはや賞賛に値するものであつた。

「ラチがあかない。シュウト君、私が突っこむ、君はフォローを頼む」

意識すると、「ウザいから私がメインで行く。後はお前がどうにかフォローしろ」と言つたような意味だつた。これはシュウトにもちゃんと伝わっているため、どうにも苦笑いするしかない。つまりところ、お互いが遠慮しているからコンビネーションが成立しない

のである。どちらかが主導権を握らなければならぬのだ。遠慮を美德としている場合、互いに譲り合いの精神を発揮することになり易く、モタモタしていれば負けてしまうことになりかねない。よって、決断は早ければ早いほど良いのだが、相手にどう思われるだろうか？といったことだとか、お互いの立場だの役割だのプライドだのを考慮するのに時間が掛かったりするし、様子や顔色を伺うことが日本人的にはどうしても必要になってくるのだ。

しかし、さつき嬢はバツサリである。さすがに女性で戦闘隊長をしているだけあって、切り替えが早いと感心するシュウトであった（が、このシュウトの感覚より本来的には更に15秒も早かったりする）。

さつき嬢はもともと勝ち癖のかたまりのような存在であり、物心付く前から剣道を続けているにも関わらず、飽くことなく戦い続けて勝利への意欲を失うことのない特殊なタイプの人間なのである。

格段に動きの良くなった2人に、さしものジンも顔色が変わる。

シュウトが居ようと居まいと、先にそこに居ても無視して自由に剣を振るうさつき嬢にジンだけではなくシュウトの顔色も変わっていたのだが、良い意味でシュウトにとっても合わせ易くなっていき、ジンの意表を衝く効果もあった。

ジン：

「バカ野郎！ お前等2人がマジとか、死ぬっつーの！」

それでも内心ヒヤヒヤしているのはシュウトの側だったりするのだが、（大丈夫、ジンさんが本気になったら、たぶん分かる）と要らぬ線引きをしまい『安全な範囲』でジンを追い詰めるのを楽しんですらいた。

シュウトにとっては念願のジンとの対戦だったが、意外にも特に感慨のようなものは感じていない。昨晚の殺されかけた恐怖体験のインパクトもあるだろうし、『気配消し』の練習で間接的に対戦していたこともあるためかスムーズに馴染めている。どちらかと言えば、ジンとさつき嬢の2人ともが近接・白兵戦のスペシャリストであることで、間近で感じる迫力のようなものに圧倒される部分が面白かった。

ジン：

「シュウト、うぜえ！」

気配を消して背後に接近してからの攻撃だったが、ギリギリで防がれている。しかし先程までとは違ってジンからは余裕が消えていた。

ジン：

「なるっ、フローティング・スタンスッ！」

さつき：

「その技はたしか……ドラゴンスレイヤー 竜殺しの？」

ジン：

「フン、オワコンサブ職とか言っただけで、痛い目みせっかな！」

さつき：

「いえ、別にそんなことを言っただけ……」

シュウト：

「気にしなくて大丈夫です！ それより、来ます！」

さつき：

「なっ？ その動きは一体……？」

ジンの歩行速度が激変していた。それはまるで空港などで見かける『動く歩道』の上をジンだけが歩いているような状態にあった。

ダッシュから斬り込もうとするのだが、さつき嬢の周囲を円の動きでスルスルと逃げていくジンに、シュウトはなぜか攻撃を躊躇ってしまふ。

シュウト：

（なんだ？ 思ったよりずっと戦いにくい気がする）

ムーンウォーク 無重力歩行

ムーンウォークと言えば、バックスライドと呼ばれるポッピングダンスの技法をマイケル・ジャクソンが再命名したことで有名になった『後ろに下がるテクニク』のことだが、この場ではジンによるフローティング・スタンスの戦闘応用技のことになる。

竜殺し の追加特技 フローティング・スタンス は使用者に浮力を掛けて体を軽くし、回避力を高める。それと同時に、地に足が着いている状態での地形効果の大半を無効にする技であった。しかし、もともとこの特技にはジンが使っているような歩行速度を高める機能・効果はない。

これはジンがシュウトに対抗するためにこの場で瞬間的に編み出したもので、戦闘演出力の一端を示すものであった。戦闘による成長はシュウトだけに起こる現象ではない。ジンもまた、レイシンやさつき嬢と戦うことによって成長していた。

接地状態で浮力が無限供給される仕組みのため、走ってしまうと空中局面（走っていると両足がどちらも空中に浮いているタイミンがある）の存在によって浮力の効果を失ってしまう。ゆえに、このムーンウォークでは接地状態を維持し、歩きながら、体を滑らせ

ている」のである。体を滑らせるため、常にどちらかの片足を接地しているその所作が、どこことなくムーンウォークに似ているのだ。

この技は「歩き」と「走り」で言えば、「走り」に近い速度を出すことが出来る。それでもシューウトなどがダツシュをすれば簡単に追いつくことが出来る程度の速度でしかない。しかし、それがかなり厄介な性質を持っているのだ。これはジンがムーンウォークで移動を続ける限り、追いつくためには常にダツシュしなければならぬことを意味していた。言うなれば、最高速度ではなく、『低速移動力の底上げ』ということになる。

次に通常のシューウトの間合いを考えると、ステップインから武器を振るう際のリーチまでが攻撃の届く範囲となる。ここに掛かる時間と距離の範囲が命中するかどうかを決定する因子となる。しかし、ジンのムーンウォークは「ダツシュでなければ追いつかない」という微妙な速度にあるため、ステップインに入る時の距離が少し遠いだけでも空振りする危険が出てくる。シューウトのクラスになると当たらない時には攻撃しなくなるため、回避されない限りは滅多に空振りなどしないのだが、その分ダイレクトに「戦にくい」という感覚になり易い。

広く観察した場合、突進攻撃チャージ以外の大半の技がダツシュ（ステップイン）（停止） 攻撃という手順を踏む事になる。このため、かなり深くステップインしなければジンは届かない範囲に逃げていってしまう。かといって深くステップインしてしまうと、ジンからの攻撃を先に貰ってしまうことになる。これらは多くの攻撃は「停止状態」や「歩き」に近い状態で行動が行われているためだ。ジンの移動方向によっては、連続攻撃の2発目、3発目が届かなくなる、といった効果も期待される。

逆にジンが攻撃に応用する場合に、ムーンウォークは「歩き」の動作であるため、機動性が高まったことで中間距離の有利さが単純に増すことになる。白兵戦の距離感ではダッシュする機会の少ない守護戦士の移動力は軽視されがちではあるのだが、ダッシュによる姿勢変化等は武器攻撃において少なからぬ影響を及ぼすため、そうそう軽んじてよい問題ではない。戦闘時に安易なダッシュを減らし、歩きの所作の中で攻撃・防御を行えること……この利点だけとつてもその有利さは特筆に価していた。

また、これは後に判明することになるのだが、歩いている動作と移動距離にズレがあるため、錯覚効果があり、これがジンの使う「リアル縮地」との相性が非常に良い。その初動を見切るのが困難になる効果まであったため、もはやこれはジンにとっての「当たり技」であった。

『重撃』という特別に重たい攻撃を使い、剣を受けたさつき嬢の動きを瞬間的に封じておく。ボクサーが左フックを引っ掛けてコーナーから脱出するような動きを盾で再現し、盾で殴りつけながら、さつき嬢と位置を交換する。これによってシュウトはさつき嬢が邪魔となつて攻撃できない。慌てて脇に避けるのだが、そこを『鋭撃』と呼ぶ特別に鋭い攻撃を使った切り抜けするジンの攻撃を受けてしまっていた。

さつき嬢にはシュウトを、シュウトにはさつき嬢を盾に使い、戦闘を有利に展開させてゆく。基本通りの展開をこの2人を相手に普通にこなしてみせる、ということの凄み。

シュウト：

(不味いな、手に負えなくなつて来てる)

ムーンウォークによる戦いにくさをまだ分析できていないため、反撃がままならない。さつき嬢もかなり戦闘思考力・考察力がある方なのだが、ジンのシステムは難解で分かりにくいためか、どうにもならなかった。普段からジンの話を聞いているシユウトにもよく分からないぐらいなので、こればかりは仕方がない。

ジン：

「オラオラあ、どうした？ もう降参か？」

さつき嬢：

「まだまだあ！」

『負けず嫌いのさつちゃん』がここに来て顔を出す。遂に本気モードの到来であった。

さつき嬢のスタイルとは、ゲームの動作と武道の動きを融合させているところにまずポイントがある。ゲームの動作とは、特技使用時のモーシヨンのような派手で分かり易いものであり、逆に武道の動きとは、技の予兆を消すことを追求するモーシヨン・レスな動きになる。

例えば、モーシヨン入力によって特技を発動させる時に、モーシヨン・レスな動作を織り込んだ場合、ゲームの緻密で高度な反射能力を逆手にとって、その計算を狂わせることが出来たりする。それら「(仮称)ゲーマー殺し」を戦闘のポイントとなる要所所でだけ使われたりすると、相手は何をされているのか理解できないまま負けてしまう状態を演出することが可能になって来るのだ。たとえ原理が分かったところで反応できなければ同じ結果になることもあって、そうそうさつき嬢の優位性は覆ることがない。

ジンがさつき嬢に勝てるのは、モーシヨン・レスな武術・武道的

な動作に対しても超反射による対応・対処が可能であったというのが大きな要因になっている。訓練による防御は、訓練していないものに対しては効き目が弱まってしまふ。ところが超反射は訓練内容に関わらず、反応速度そのものを劇的に向上させる。その結果、モーションの有無がどうあれ、対処能力を發揮して防御を可能としていた。

予兆の小さな突き技・斬り技に対してジンの反応が遅れ始める。本当のところは対処可能な時間が狭まっているために遅れて感じるだけなのだが、そうとは分からないシュウトにはチャンスに思えた。ジンに処理負荷が掛かっている点では正しいため、結果的に正しい判断をしたことになる。

シュウトは“とっておき”を使うチャンスを探していたのだが、さつき嬢の動きを見て考えを改める。彼女に有利なポジションを優先して技を放ってしまう。

シュウト：

「アサシネイト！」

ジン：

「うらっ！」

大胆にも捨て技に 暗殺者 最大の奥義を使ってしまう。案の定、ジンに躲かれてしまふ、が、僅かに体勢が崩れていた。シュウトは目の端でさつき嬢が笑ったのを見た気がした。

さつき：

「レイジング……」

ジン：

「なにっ!?!」

僅かなモーシオンから繰り出される高速の突進突き。輝く刃がジンの首を襲うが、危ないところで弾き返している。さつき嬢の動きは止まらず、弾かれたモーシオンをそのまま利用して掲げた両手剣を強く振り下ろす。ジンはこれを横に避けた。と、彼女の姿が一瞬にして消えた。次の瞬間、懐に入り込んでいたさつき嬢の強烈なシオルダー・アタック がジンを襲う。体の急接近にギコチなく攻撃を受けてしまうジン。足元が軽く浮き上がるほどの威力であった。

シュウト：

(あの人は、もう……)

前回さつき嬢と戦った時も防げなかったのだ。ということとは、ワザとあの技を受けているのだろう。ところが、今回の3発続いた攻撃は尚もとまらず、半回転からの鋭い薙ぎ払いが続く。ジンは盾に当たるように咄嗟にコントロールしていたが、今の技が『浮かせ直し』になったため、もはや完全に空中に浮き上がっていた。

シュウト：

「まさか……!?!」

さつき嬢：

「……エスカレイド ツ!?!」

ビリビリとした気迫がシュウトの頬を叩く。追撃のクロス・スラッシュが空中で為す術のないジンを打ちのめす。ここまでで既に6連撃。だが、さつき嬢はまだ止まらない。そう、止まるはずが無かった。

レイジング・エスカレイド。

高レベル ガーディアン 守護戦士 のみに使用可能となる、このクラスには珍しい派手な連続攻撃特技であった。習得（中伝で6連撃、奥伝では7連撃、秘伝の習得に到つては最大8連撃にまで増加する）。

この技は魅せ技の側面が強く、その使用に時間が掛かるためDPS（ダメージ・パー・セコンド＝秒あたり攻撃力）もさほど大きくないし、途中でガードされると技が入らなかつたりストップしてしまうこともあった。パーティバトルでは使用者が攻撃中を狙われる的にされることがあったり、技の途中に回復魔法を使われたりすること、連続技補正でダメージが減少していく、といった諸要素のため、PVPなどの特殊な状況で決め技に使うのがせいぜいとされていた。

それでも秘伝にするといわくつきの必殺技が見られるとあって、一度はこの技にハマる者も少なくない。と言つても上限90レベル解放から既に3年近くが経過している。その使い勝手の悪さから飽きられるのも早かつたのである。

よつて、本来は次の7撃目がこの技の締めくりとなる。

深い前傾姿勢で突進するさつき嬢。彼女の大剣が地に触れてガリガリと音を立てる。武器が真紅に染まった。摩擦熱が燃え盛る大炎となり、武器を伝つて彼女の全身を包む鎧と化す。大地の束縛から解き放たれた大剣は、炎から生まれた上昇気流に乗つて一気に加速しながら空中のジンを貫かんと翔け上がる。燃え上がる炎 という名の7撃目。

さつき：

「Blazing Flame!!」

ジン：

「うばあー！ってアチャツ！熱つち！」

ブレイジング・フレイムの燃えるジャンプ斬り上げに巻き込まれてダメージを重ねられてしまうジン。が、終わったと思ったその時

さつき：

「おおおオオオ！！！」

さつき嬢は落ちてこない。燃える大剣は更に白熱し、輝きが目を焼く程に強まっていく。その白き閃光に引き寄せられるように、彼女も、ジンも、地に落ちてくることが出来ない。

シュウト：

「やはり秘伝使い……！！」

パラダイス・ロスト

楽園追放

連続攻撃特技 レイジング・エスカレイド の秘伝習得者のみを使うことの出来る8撃目にして、英国の詩人、ジョン・ミルトンの叙事詩の名前を冠する最強の一撃である。しかし、この技の習得者は極めて限られている。なぜならば、上限90レベルの秘伝習得限界は「4つ」であるためだ。

そもそも秘伝の習得はフルレイド（24人組）以上の組織力をもつてクエストに挑むことが最低条件となる。そして魅せ技の要素が強いこの技を秘伝のままにしておくことはまず考えにくいことなのだ。その最終技 見たさに秘伝を習得した者であっても、飽きれば失伝させ、別の特技を秘伝にし直すことになる。シュウトにしたところで、この技に関しては動画サイトで記録されたものを見たことがあるだけだった。ブームはとっくに終わっている。

技としては、敵対者を楽園から強制的に追放するというその名のイメージにそって、強烈な威力を誇っている。命中後、ダミーボム3回の小爆発の後で、大爆発を起こす、といったものだ。

ダミーボムとは、威力こそ極めて低いが、反応起動回復呪文などの回復トラップ技を破壊する特性があった。これは技の最中に目標に対する回復呪文が間に合ってしまったため、その中の反応起動回復を3回分削ることを可能にしていた。実のところ、同時にソーンバイド・ホステージなどの追加ダメージ技も破壊してしまうのだが、これは レイジング・エスカレイド を即死級コンボにしないための配慮だと言われている。

その後、光エネルギーを込めた武器攻撃が爆発する。かなりの大ダメージ技なのだが、ダメージに連続攻撃の補正が掛かっているため、程良いダメージ量に抑えられていた。

更にこのパラダイス・ロストには特別ないわくがあった。上限100レベルの解放と共に、90レベル後半に習得する隠し特技ではないかとウワサされていたのだ。秘伝のみの隠し技にしては技のモーションなど、その完成度が高かったことと、そもそも レイジング・エスカレイド が複数の攻撃特技の組み合わせで構成されていたことによる。

実際にここで目にしたシューウトはそのウワサが真実だろうと感じていた。技の演出が動画で見たものとは味付けが変更されているのだ。これは最新の拡張パック ノウアスフィアの開墾 による変化の結果だと思うと信憑性が増してくる。

シューウト：

「マズ……」

一瞬気が抜けていたが、このままパラダイス・ロストを受けてしまえば今のジンのHPでは死にかねない。そう考えた途端、体が反応して腰がすつと落ちる。割り込みをかけるべく飛び出そうとしたその瞬間

ジン：

「うおおおお！」

空中姿勢のままジンが氣勢を上げたため、シュウトの足が止まる。ジンはまだ終わっていない。諦めてもいない。

輝きを増した純白の光は、技そのものを見えなくさせつつある。強烈なエネルギーが込められた一撃が今にもジンを打ち据えようとしている。ジンの手元にも青色の輝きが宿る。緊迫感だけが加速していく。轟々とした雑音が周囲に満ち、光と共に世界を塗りつぶしてゆく。楽園と、それ以外のものへと……

さつき：

「Paradise Lost！」

ジン：

ドラゴンバスター
「竜破斬！」

ダミーボムの小爆発も、パラダイス・ロスト本体の爆発も起こらなかった。着地する2人。さつき嬢もまた死ななかった。どうやらジンはパラダイス・ロストの威力を相殺しただけで済ませていたらしい。

ジン：

「ふー、あつぶね、死ぬかと思った。まあ、アレだな、今日はこの辺にしといてやろう」「うんうん

シュウト……

「本当に、よく死にませんでしたね」

ジン：

「まあな……………って、どうかしたか？」

さつき：

「……………いえ、なんでもありません」 にこっ

ジン：

「？」

何事かを考えている様子のさつき嬢のことは気になっていたが、朝練は終わりということでは有耶無耶になってしまった。

睦実：

「ちょっと！ なにその氷の乗った涼しげな冷麺は！？」

ジン：

「フハハ、説明台詞をありがとう。これぞレイの得意とするトマトの冷製パスタである。言うまでもないが、めちゃウマだな」

睦実：

「だーから、何でアンタ達の方だけなの?!」

ジン：

「んー？ 素行の悪いのがいるもんで、見せしめ、みたいなの？」

睦実：

「なんのこと?…………… チワワあ！アンタまた暴れたワケ

!？」

チワワ
水梨：

「チワワって呼ぶんじゃないよー!」

睦実：

「くぬヤロー……」

ジン：

「おい、チワワは嫌だったよ?」

睦実：

「自覚がある癖に生意気。じゃあ別のあだ名をつけてやるっじゃないの。んーと……」

弥生：

「マル オイ」ぼそっ

ニキータ：

「ブフツ、ごふつ、ごふつ……プククッ」

ジン：

「じゃあ、マ フオイってことで」

水梨（チワワ マル オイ?）：

「ふざけるな、ポツ ー!」

シュウト：

（さすが関西人、ノリが違うなあ）

変なところで感心してしまうシュウトであった。

シュウト達という人数増もあったことで、物資節約のための朝昼兼用ごはんタイムになっている。そのためか、一日の雌雄を決するとはかりに食って掛かる睦実の姿は、なんだか風が吹くなどと同じ自然現象のように感じられた。食事中のマイペースはシュウトの愛するものの一つである。

ジン：

「そういつこったから、そこらへんで指を啜えて見ているがよいわ」

睦実：

「ぐぬぬ……ヤダー!おねがい!ひとくちだけ! ねっ?ねっ

？」

ユフィリア：

「むつみちゃん、私のを少しあげるよ？」

ジン：

「バカ、そいつにひとくち与えようものなら、皿の半分、いや、2/3をもつていかれるぞ?!」

睦実：

「そこまでズーズーしくないわ、アホー！」

ユフィリア：

「大丈夫だよ、私、そんなに食べなくても平気だから」

睦実：

「ユフィちゃん……………」うるっ

ジン：

「見たか？聞いたか？これが天然の女子力ってヤツだ。分かるか？ そこの作り物・マガイモノとは格が違うね」

睦実：

「何を言うか！ユフィちゃんを規準にしたら、女子の総人口の半分が死に絶えるっつーの！」

ジン：

「まいったね。圧倒的じゃないか、我が軍は」

睦実：

「くうっつ、女子力の違いが戦力の決定的な差にはならないことを教えてやるっ！」

ハシヤフォークでチャンバラを始める2人。ジンが笑いながら余裕で捌いていた。

さつき：

「睦実、やめてくれ！ 恥ずかしいっていつてるだろうっ」

レイシン：

「……本当のところを言うとね、糖度が高くて、料理に使うには酸味が足りないかなって思ったんだよ。このトマトだと、そのまま食べたり、塩を振ってトマトジュースにした方が美味しいと思う。それで良く熟れた甘いものは、そのまま食べられるようにサラダに入れたんだけど、全員分には少し足りなかったから、熟れ切っていないものを加工して冷製パスタにしてみたんだ」

シユウト：

「そうだったんですか」

ニキータ：

「やっぱり無駄な争いね……」

ジン：

「ならば！今すぐ平凡な女子共に女子力を与えてみせる！」

睦実：

「きさまの冷麺を食べてから、そうさせてもらっ！」

ジン：

「なんと！ 食われなければどうということはない」

ユフィリア：

「もう、ジンさん、遊んでると食べ時を逃しちゃっよ？」

ジン：

「それもそうだな」しゅたっ

睦実：

「あっつ……」

ユフィリア

（おいでおいで）

睦実：

「やたっ！ あたしにも食べる皿があったんだ！こんなに嬉しいこととはない……」

ジン：

「つーか、小娘にやるぐらいだったら俺に食わせろって」
ユフィリア：

「えー？ ジンさん、食べたかったの？」

ジン：

「なんだよ、俺と半分コしたかったんだろ？ 遠慮すんなよ」

ユフィリア：

「ダメだよ。睦実ちゃんかわいそうだもん」

ジン：

「パスタを食わなくても死なないさ。だろ？」

ユフィリア：

「そうだけど〜」

ジン：

「いいだろ、な？」

ユフィリア：

「えへへ、でもやっぱりダメ。また今度の時ね？」

睦実：

「やったー！ 阻止限界点突破！」

ジン：

「チツ」

睦実：

「でもスーパーイライラしたから、シュウト君で癒されたい！」

シュウト：

「なぜっ!？」

ジン：

「ズーズーしいヤツ！」

さつき：

「睦実、恥ずかしいから、やめてくれ……」

ふーみん：

「ナガトモ、チャンスだよ！」

長瀬友：

「あうあうあう……」

31 パラダイス・ロスト（後書き）

書き溜め分放出の関係で更新速度がちょっとだけ速まっておりますが、通常通りでございます。 > (| |) <

多少編集なりしたいところなのですが、客観的に自分が見られるように成長したところに、と思っております。来週とか来月とか来年とか来世とかでしょうか。 > (| |) <

32 怒って、笑って、泣いて

32

弥生：

「こらっ」バシッ

霜村：

「おう？」

ユフィリア：

「え？」

ユフィリアの体に触れようとしていた霜村の手を、弥生が払いのけていた。その動きにユフィリアの方がびっくりしてしまっ。

弥生：

「女の子の体に触らない！ よそのギルドのお嬢さんなのよ？」

霜村：

「ハッハッハ、少しぐらいなら円滑なコミュニケーションにもプラスだろう？」

弥生：

「バカいうな、野獣」

ジト目で吐き捨てる弥生を軽い笑顔で受け流す霜村。このやり取りに年季が垣間見えた。

弥生：

「ごめんね、ユフィリアさん」

ユフィリア：

「大丈夫です。ちょっとぐらいなら慣れてますから」

そのトシで慣れてるってアンタはおみずの人か？と思った弥生だったが、顔には出さなかった。

弥生：

「手伝ってくれて助かってるけど、嫌な思いをするぐらいなら来なくていいんだからね？」

ユフィリア：

「……弥生さんは善い人ですね」

弥生：

「そう？このぐらい普通でしょ」

ユフィリア：

「……………」

共感のようなものを感じるユフィリアだったが、どちらかといえはニキータに似ているのだと思い直していた。

霜村：

「すまないが、こつちのも頼む」

ユフィリア：

「わかりました」

弥生：

「全部押し付けてやらせようとしてるでしょ？」

霜村：

「そんなことはないぞ」

弥生：

「貸しなさい」

ユフィリア：

「そっかー、なるほどー」「ニコニコ」

弥生：

「……………」

「こちらをみてニコニコとしているユフィリアに「何？」と疑問符を浮かべる弥生であった。

ジン：

「ぬー、撫でる頭がない。なんか最近、ユフィリアのヤツがちょくちょく居ない気がすんだけど？」

シユウト：

「言われてみれば……………」

ニキータ：

「……………」

テントの中でぐったりと横になっていたジンがユフィリアの所在を話題にしてくる。そろそろ気がつく頃だろうと思っていたので案の定だった。もうしばらく誤魔化しておきたいのだが、下手なことを言つと藪をつついてしまいかねない。思案のしどころだった。

ジン：

「で、アイツどこ行ってんの、ニキータ？」

ニキータ：

「さあ、誰かとオシャベリしてると思いますがけど」

ジン：

「……………ふうーん、何か隠してるのな？」

ニキータ：

「あー、それはどついでしょっつ…」

言い当てられてドキツとする。仕方が無いので「受けて立って」
しまった。ジンが微細な表情や反応を読めるとしても、そこから先
は具体的に何をしているかまでは分からないはずだ。

シユウト：

「何の話ですか？」

ニキータ：

「ジンさん、ユファイがなくて寂しいって」

ジン：

「……………別にニキータが相手してくれてもいいんだけど？」

ニキータ：

「へえ、やっぱり誰でも良かったんですね？」

軽く牽制を入れてみたがあまり効果はなかった。それどころか、
横になっていたジンがニヤリと笑うと体を起こし、そのままにじり
よってくる。6人が生活するテントといっても、そこまで大きいわ
けではない。少しの距離の変化でも相当の圧迫感になってくる。

ジン：

「『誰でもいい』ってわけじゃないさ、ニキータだからだろ？」

ニキータ：

「それは嬉しいですけど、ユファイが聞いたらどう思っのかしら？」

シユウト：

「あのー、さつきからちょっと2人とも怖いんですがー」

ジン：

「おいおい、お前がそんなことを言っのかい？」

ニキータ：

「……………」

ジン：

「自分だけ、安全な範囲に居られるなんて思うなよ？」

ユフィリアを盾に使うようなコメントを無意識に言ってしまった、そのことに気付くよりも早く揚げ足を取られていた。気まずく思うそのタイミングを捉えたかのように、ジンの手が伸びて頬にそっと触れてくる。顔に掛かった前髪をかくような動きで、人差し指の側面が軽く触れる。産毛が逆立つような、しびれる感覚に思わず目を瞑ってしまった。顔の紅潮が敗北感と重なる。ジンからみれば、やはり自分も小娘に過ぎないのだ。

ジン：

「ん……………天才的なタイミングだな、にやろつ。……………どした？」

動きを止めると、葵らしき人物からかかって来た念話にジンが出たため、窮地を脱することが出来てしまう。安堵とちょっとした拍子抜けの感覚を自覚したものの、その意味は区別して考えないことにする。手は自然とジンに触られた頬を触っていた。感触を確かめているのか、打ち消そうとしているのかは自分にも分からなかった。

ジン：

「んー、これから雑用は全部シュウトに振っていいから。ん？ ああ、やらかしやがったから雑用奴隷に決定した」

シュウト：

「……………」がつくり

ニキータ：

「何かあったの？」

シュウト：

「文句が言えない程度には、あつたかな？」

苦い表情のシュウトは、以前に比べると格段に表情が増えて親しみやすくなった気がする。

ジン：

「……………それは、わかつちやいるんだがな。いやいや、まだダメだ。ああ、また」

念話の向こうではどういふ話になっているのか、おや？と思ったのだが、窺い知ることはできなかった。

ジン：

「ちよつと寝つから、後はよろしく。シュウトは葵に念話しとけな」

シュウト：

「分かりました」

念話が終わった時には全ての興味を無くしていたようで、自分のスペースに戻るとゴロンと横になってしまった。寝息が聞こえてくるまでさほど時間は掛からなかった。もしかすると不貞寝なのかもしれない。

ニキータ：

(……………)

ちよつとした隠し事があるのは、たぶんお互いさまなのだ。

昨晚、たぶん戦闘があつたハズだ。ユフィリアのミニマップはまだ不確かな感覚でしかないと言うが、それでも何かがあつたことは分かっている。しかし戻つて来たジン達は何も言わなかったし、こちらも気付いていることは匂わせずにおいた。

問題はその沈黙がどういう意図によるものか、ということだろう。

ニキータ：

（私達がジンさん達を信じているぐらいに、彼らは私達を信じてくれるのかしら……？）

その想像は少しばかり不吉なもののように思えてならなかった。

傷顔守護戦士：

「それじゃレイエスはうまく決まったのかい？」

さつき：

（こくり）

草生守護戦士：

「やはり、狙い通りw」

高貞守護戦士：

「いや、その彼も見事だよ。隊長のシヨルダーを受けたくても怖くて受けられないからな」

坊や守護戦士：

「斬殺確定ルートですよね」

芝生守護戦士

「漢なのは認めてやらなくもないww」

さつき：

「みんな、ありがとう。この感謝の気持ちをどう伝えればいいのか分からない」

こくりと小さく頷くと、嬉しそうに礼を述べるさつき嬢だったが、

何故か恥じらいのようなものが混じって見えた。

実は盾の使い方を教えてもらっているだけではなく、作戦を授けてくれたのも彼らだった。確実に当たる技を中心に戦術を構成すべきだろうと言ったところから レイジング・エスカレイド の浮かせ技になるシヨルダー・アタックが突破口になるだろうということころまで一緒に考えて貰っていた。

草生守護戦士：

「しっかし、今時レイスカを秘伝にしっぱなしなんて隊長ぐらいじゃね？www」

坊や守護戦士：

「そうですね」 クスクス

さつき：

「好きなんだから、別にいいじゃないか。どれを秘伝にするかなんて個人の自由だろう？」

高貞守護戦士

「チームプレイを疎かにしない範囲で、だかな」

この話題ではいつも笑われてしまう。よほど レイジング・エスカレイド を秘伝のままにしておくのは珍しいことらしい。あまり笑われてしまうと戦闘班の隊長として威厳を損ないかねない。何せみんなの方が年上なのだ。自然とムツツリとした表情になってしま

傷顔守護戦士：

「どうしてレイエスが好きなんだい？」

さつき：

「実際の剣道をやったら出せないような派手な技がバーン！と決まるのが良くて」

傷顔守護戦士：

「そんな理由かよ……（苦笑）」

草生守護戦士：

「強いつたって、まだまだニュービーってことだな」

さつき：

「もう2年以上プレイしてたんだから、初心者扱いは止してくれ！」

いい流れが来ているように思える。こうして仲間達と打ち解けて雑談しているのがとても心地良かった。全てが順調すぎる気がして怖いぐらいである。

さつき：

（ん、睦実……………？）

睦実：

「だから、ついてくんなっつもの」

水梨：

「おいっ！タコ焼きの代金を払えよ！」

睦実：

「あ、アレね、アンタのおごりにしといて」

水梨：

「またか！？ 冗談じゃねーよ！」

傷顔守護戦士：

「よう、睦実！」

草生守護戦士：

「今日の差し入れは何だ？WWW」

水梨：

「は？差し入れ？」

睦実：

「ざっけんな！アンタ達にくれてやる食い物なんぞあるくわあ〜！」
坊や守護戦士：

「美味しかったよ、あのタコ焼き」

さつき：

「ああ、本当だ。ありがとう、睦実」

水梨：

「ハ、こいつらに食べられたって？ダッセえ」

睦実：

「うっう、こいつらに無理矢理……もう、お嫁にいけない」

傷顔守護戦士：

「人聞きの悪いことを言うなよ」

睦実がもって来てくれたタコ焼きだったが、特訓の礼として自分の分を仲間たちに振舞ってしまったのだ。睦実は自分の分を分けてくれた。最初に『断腸の思い』と断りを入れてはいたが。

睦実：

「だいたい、ソースがかかってなかったんだから、オゴリでしょ」

水梨：

「……すまん、実はソースが品切れだったらしくて」

睦実：

「知ってていわなかったなキサマあ!？」

芝生守護戦士：

「ん？俺らの食ったのにはソースがかかってたよな？」

高貞守護戦士：

「ああ。何せ隊長の優しさの味がしたからな、忘れられんよ」

水梨：

「なんだよ、ソースあったんなら別にいいじゃねえか」

睦実：

「アレはユフィちゃんの私物だもん。アンタのゴチは決定しました」

坊や守護戦士：

「……………てことは、ソースだけはアキバの品だったってことですよね」
芝生守護戦士：

「やべっwwww うまいとか叫んじまったwwww」

水梨：

「チツ……………」

カトレヤ の彼らが来たことで、少しづつ状況が変わりつつあるのだろう。考えてみれば、そういった影響を無条件によしとすることは難しいのかもしれない。この世界では好ましい変化だけが起るわけではないのだから。

傷顔守護戦士：

「なんかさ、思いつきり戦いてえな、 Plant hwyade
n の連中と。なんにも考えずにさ」

芝生守護戦士：

「んなこといったって、本当は勝ち目なんてねーだろ、常考」

さつき：

「おい、戦う前から諦めるようなことを言うな！」

芝生守護戦士：

「そりゃあ……………」

坊や守護戦士：

「僕らは30人弱ですしね。カトレヤ の人達が加わっても40人にも足りない」

さつき：

「人数の問題じゃない。こっぴうのは戦い方の……………」

睦実：

「だったらさ、もうみんなでアキバに行っちゃえばいいんだよ」

さつき：

「睦実？」

睦実：

「うーん、悪くないアイデアじゃない？ シュウトくん達とずっと一緒にいられるし。オジさん、マジでねらっちゃおうかしらん？」

水梨：

「おい、何いつてやがる。頭が涌いたか？」

睦実：

「そんでき、Plant hwyadenにおん出されたから、アキバで暮らしますって言えばいいんだよ。同じ日本人だもん、きっと受け入れてくれるよ。でしょ？」
ここに

芝生・坊や守護戦士：

「……………」

傷顔守護戦士：

「……………スマン」

自縄自縛という言葉が脳裏に浮かぶ。

さつきは究極的には戦いの理由には拘らない。正義であった方が当然嬉しいし、当然、やる気は出るだろう。それでもただの戦士であるうとするのは、自分が戦う理由をもつ事は、そのことに左右されてしまうことを意味するからだ。戦士は刀と同じ武器であり、その信頼性が揺らいではならない。自然にそういう風に考えている自分がいるのだが、それが何の為なのかは努めて考えてはいなかった。

弥生：

「ニキータ！一緒に食べましょうっ？」

ニキータ：

「じゃあそつしようかな」

さつさと席を移動してしまったニキータに、ユフィリアがジンの顔をみてどうしようかと悩んでいた。ジンは軽く手を動かして許可を与える。その時のちよつと済まなそうなユフィリアの表情をジンは見ていなかったと思う。

睦実：

「よっこいしょつと。邪魔だつて。早く場所変わつて？」

ジン：

「うつぜえ。シュウト、お前がそつちに行つてやれよ」

睦実：

「うん、その方がいいや。さつ、ばつちこい！」

床をパンパンと叩いてシュウトの移動を促がす睦実。自分に選択権はないのかとシュウトは暗澹たる気持ちになるのだが、たぶん無い。ユフィリアがいればユミカのことで何とか誤魔化せるのかもしれないのだが、そもそも、いつの間にかオモチャ状態で翻弄される人生になってしまっていることが問題かもしれず。どこで間違えたのか思い出せない。

さつき：

「すみません、いつも睦実が無茶を言つてしまつて」

ジン：

「いや、困るのはシュウトだから別にいいよ。さつちんもここで食うかい？」

さつき：

「」迷惑でなければ……」

睦実

「今日はスペシャルゲストも居るからね。おいで、ナガトモ！」

そしてシュウトと睦実の間に強引に長瀬友を座らせた。おかげでシュウトは密着感がとんでもないことになってしまっている。

シュウト：

「ごめんね、ちょっと狭いんじゃない？」

長瀬友：

「いえ、ただ大丈夫れす」

ジン：

「出たよりア充め、また新しい子とか もげて死ねっちゅーの。こんどドサクサ紛れに切り落としちまうか……」

さつき：

「なんだか、すみません（苦笑）」

その後、ジンとさつき嬢が戦闘談義を始めたのだが、睦実の話し声に遮られて上手く聞こえなかった。シュウトは隣の女の子との密着感にもめげることなく、あちらの会話を聞いておきたいという気持ちが強かったりする。

長瀬友：

「あの、つまらないですか？」

シュウト：

「え？ いや、そんなことはないよ」

長瀬友：

「す、すみません」

シュウト：

「……いえ、こちらこそ（今、なんで謝られたのだろう？）」

睦実：

「ねーねー、シュウト君ってどんな子がタイプなの？」

シュウト：

「タイプ、ですか……………」？」

そういわれても、タイプとはどのようなようにして決めるものなのだろうか？ そんなことは考えたこともない。忘れたい過去のことは忘れておきたい。となると……………」。

シュウト：

「妹とは違うタイプの女の人がいいかな、なんて」

睦実：

「妹さんがいるんだ？ どんな子なの？」

シュウト

「えっと、横暴で乱暴で、人を財布扱いしてガサツな感じの……………」

さつき：

「それ、睦実のことじゃないか？」

睦実：

「さっちゃん!？」

長瀬友：

「妹さん、嫌いですか？」

シュウト：

「いや、異性として見られないってだけで、嫌いになんてなれない

よ

長瀬友：

(やりました!今度こそ、ちゃんと会話しました!)ガッツ

ジン：

「むむっ、シュウトの妹だと期待できんじゃないの? 可愛いのか

」?

シュウト：

「どっでじょっ? 普通ですよ」

ジン：

「怪しいな。くっそ、携帯があれば写メみせろって話になんだけど」
シュウト：

「妹の写真なんて撮ってませんって（苦笑） それにまだ高校生ですよ？」

ジン：

「『まだ』じゃなくて『もう』かもしれないぞ？ まだ圏外だけど、JD（女子大生）になるまで待つよ 義兄おにいさん？」
シュウト：

「冗談じゃないですよ！」

ジンが義理の弟だなんて絶対にごめんこうむりたいと思うシュウトであった。

睦実：

「逆だ、逆に考えるんだ……………そう、妹に似てるなら背徳感が萌えに繋がると考えれば」

長瀬友：

「睦実ちゃんは妹に向いてない。私の方が適任です」

睦実：

「ナガトモ！？ そんな娘に育てた覚えはないぞおー！」

長瀬友：

「育てられていませんので」

睦実：

「ふっ、そんなこと言ったって、ナガトモにシュウト君を攻略することなど不可能だけどね」

長瀬友：

「ムッ、そんなこと言われたくないです」

睦実：

「じゃあ、お兄ちゃんと言いなながら抱き付いたりできる？」

シュウト：

「なんかモメてませんか？ 大丈夫？」

長瀬友：

「シュウト、お兄……ちゃん？」ぴとっ

シュウト：

「お兄ちゃん！？ えっ、いや、それって？」

長瀬友：

「ダメですか？」

シュウト：

「ダメって、いや、ウチの妹がこんなに可愛いわげがないっていうか？」

睦実：

「魔物や……女は魔物や……ナガトモが魔物になってしまった」

長瀬友：

「……………」うるうるっ

シュウト：

「えっと……（どうすれば？）……（どう？）」 ナデナデ

長瀬友：

（ぱぁー）

大人しく頭を撫でられて嬉しそうにしている長瀬友、ハンカチを噛んで悔しそうな演技に没頭している睦実、それを笑って見ているさつき嬢、ジンはニヤニヤと意地の悪そうな笑みを浮かべていた。

その時、別の場所で笑い声が聞こえて来た。向こうも随分盛り上がっているようだ。そちらに視線をやると、やはりと言うべきかユフィリア達が話題の中心にいる。ユフィリアの近くには霜村がいて、彼女に絡んで冗談を言っているらしい。……素早くジンの様子を伺うが、特に表情からは何も読み取れなかった。

睦実：

「そういえばさ、弥生ちゃんがすごく助かってるって言ってたよ？」

ジン：

「何の話だ？」

睦実：

「だってほら、ユフィちゃんが書類整理とかを手伝ってくれてるでしょ？」

ジン：

「ああ、そういうことが。……………二キータめ」

食事が終わるや、ジンはズルズルと会話を続けていたユフィリアを連れ出し、テントに戻っていく。溜息をひとつ付いたところで、さっそく始まっていた。

ジン：

「お前なあ、霜村んトコに入り浸ってんじゃねえよ」

ユフィリア：

「むー、バレちゃった？」

ジン：

「じゃあ、手を引くんだぞ？」

ユフィリア：

「なんで？ イヤだよ」

ジン：

「おい、分かかってないのか？ 仕事を頼んで好意を持つように仕向ける初歩的な手だろ？」

ユフィリア：

「そんなのに引っ掛かったりしないもん」

一般的に、誰かを好きになるとその人のために「何かをしてあげたい」と願うようになる。相手のために行動してあげた場合、表面的にはもちろん感謝されるのだが、それもいつしか重圧になってしまふことが多々あるだろう。人は潜在的に『貸し借りの関係』を作ってしまう易いことから、相手のためになる行動をしてあげることが相手に対して貸しを溜めることになってしまふのだ。一方で、借りを溜めてしまった相手は好意を返済するプレッシャーを感じるようになってしまふ。このため、しばしば優しくされるのが負担になってしまうのだ。

逆に、『仕事を頼む』といった行為を要求することによって、相手に行動させ、その動機を勘違いさせる心理誘導のテクニックが存在する。「私がわざわざ をしてあげたのは何故だろう？」「もしかして好きだから？」という様に、自分で自分を説得することによって好意を抱くことになり易くなる。

相手のために何かしてあげること、相手に対して貸しを作ることができ、且つ、その理由は相手の依頼に拠るものなので、相手の責任だということになる。一般的にみられる現象ではあるが、心理的な依存に近い状態だろう。

相手からの好意を行為の形で表現されたら、普通は（可能な範囲で）お返ししたいとごく自然に望むものだ。ところがユフィリアはその強制力からは半ば自由でいられる。否、自由でなければ彼女のような人間は生きていけないのだ。彼女は周囲の人間から与えられる好意がズバ抜けて多い。すると他者からの好意（行為）という入力と自分の行為（好意）という出力が絶対的に釣り合わなくなる。原理的に『お返し』が出来ない状態が常態となるのだ。それは一般

的な感覚からすれば、一方的に優しくされて、何も返さないという空気が読めないことにも成りかねないものでもあった。彼女が常に元気に振舞っていたり、馴れ馴れしかったりするのは、これらの現象を背景としていた。

ジン：

「だから、ギルドの方針的にマイナスだから止められて」

ユフィリア：

「それはギルドの方針じゃなくて、ジンさんの考えでしょ？ ギルドの方針は情報収集のはずだもの。そのために動いているんだから、マイナスのはずないよ」

ジン：

「そのやり方じゃ欲しい情報は手に入らないんだ。だから、止めてくれないか？」

ユフィリア：

「もつとちゃんとした理由じゃなきゃ納得できない」

ジン：

「霜村のところには欲しい情報はないんだ」

ユフィリア：

「そんなの分からないでしょ？ 例え今なくても、集まってくるかもしれないし」

ジン：

「お前なー、いい加減に……」

ユフィリア：

「私、ジンさんの女じゃないんだよ！？」

微妙な空気になってしまふ。ケジメの問題でもあるかもしれないし、ユフィリアがジンのコミュニケーションを嫌がっているのだとしたら、罪の告発という性質を帯びてくるだろう。

ジン：

「……………ユフィリア」

ユフィリア：

「怒っちゃヤだ」

ジン：

「はあ？」

ユフィリア：

「怒るんだつたら話なんて聞かない！」

シュウト：

「それはあんまりじゃ……………」

ユフィリアの言い分にシュウトが呆れる。女子には怒られるのを過剰に怖がるため、怒られるのは何が何でもイヤだというタイプもいるのだが、しかし、ユフィリアはそんなタイプではない。

どうしたものか様子伺っていたジンが怒気を孕む前から、ユフィリアは巧みに怒るのを封じていた。予感というよりも、本能的なものだろう。

ジン：

「わかった。じゃあ、怒らない」

シュウト：

「いいんですか？」

ジン：

「霜村に近付くのを止めてくれれば、それでいいから。な？」

ユフィリア：

「どうして？ イヤだよ」

ジン：

「つまり、自分はギルドの方針に従って動いているから問題はないってわけだな。その判定をしようにも、俺の発言は嫉妬に基いてい

るから無効なわけだ。そしてお前は俺の女じゃないから、言うことを聞く必要がない、と。」

ユフィリア：

「そっだよ……」

ジンに論理で言い包められるのを警戒して、ユフィリアの表情が鋭くなつていく。

ジン：

「じゃあ簡単だな」

ユフィリア：

「何が？」

ジン：

「お前が、俺の女になつちまえばいい。それで丸く解決するだろ」

ユフィリア：

「……………え？」

普段はニヤニヤと笑うジンにしては、爽やか風味の笑顔であった。予想外の展開に今度はユフィリアが呆然としている。

シユウト：

「はあ？」

石丸：

「なるほど、第三者に判定を求めると思つたんすが……………」

ニキータ：

「そうか、この場合はそれでも解決するわね」

ただしユフィリアが受け入れれば、の話だろう。そうはならないとニキータは考えている。

ジンは、スツとユフィリアの傍に近付いてゆく。

ユフィリア：

「変だよ、こんなの……」

ジン：

「なんで？」

ユフィリア：

「ヤ、触っちゃダメ」

ジン：

「俺の女になれば言うこと聞くんだろ？」

ユフィリア：

「そんなの……」

ジン：

「つか、お前、顔が崩れてるぞ？」

ユフィリア：

「!?!?……ちよつと!ちよつと待って!」

顔の上と下で別々の表情になってしまっている。目元は怒り顔を作るうとしていたが、口元はくによくやとほつれて笑みが零れてしまっていた。慌てて後ろを向いて顔を押しさえていたのだが、やがてパツと振り向いた。

快心の笑顔。 怒り顔を作るのはどうやら諦めたらしい。

男女の恋愛関係では惚れられた側が勝つ。そのシンプルな法則に素直に反応しての『勝利の笑み』ではあったが、あまり嫌味は感じられず、純粋な喜びを表現してみえた。相手を操ろうとする支配欲が感じられないためかもしれない。

ユフィリア：

「これでジンさんは嫉妬してるって認めたことになるんだよね？だつたら……」

ジン：

「いや、それとこれは無関係だろ？俺は、嫉妬してないって証明したくなかつたんだ」

ユフィリア：

「そんなの、だから一緒でしょ?!」

ジン：

「まあ、一緒でもいいけどさ」

しかし、一緒ではないと彼女自身が気が付いてしまっていた。同時に、「付き合おう」と言われたのであって、「好きだ・愛している」と言われたわけではないのにも気が付いてしまう。その2つは彼女にとっては天と地ほどにも違う。

ジンの口調に優しさが混じってゆく。しかしこれがくせ者で、手加減するどころか逆に素早く畳み掛けていく。

ジン：

「一生懸命なのはいいけど、なんか少し焦ってるよな？」

ユフィリア：

「別に、そんなことないよ」

ジン：

「たぶん、ミナミに来る前からだよな。糞野郎の矢を喰らったぐらいからか？」

ユフィリア：

「……………」

ジン：

「そんな焦って認められようとせんでもいいだろ？」

ユフィリア：

「じゃあ、ジンさんは、どうして信じてくれないの？」

ジン：

「とどうと？」

ユフィリア：

「今回だつてそつでしょ？ 私のやることは認めてくれない。だから黙つてたんだよ」

いつの間にか、問題の根となる原因が話題となっていた。

ジン：

「んー、結構、誉めたりしてたと思うんだけどなあ」

ユフィリア：

「お客様扱いされたくないの。私だつてギルドの一員なんだから、もつとちゃんと」

ジン：

「つたつて半人前は半人前だろ？ ……呪文は覚えたのかよ」

ユフィリア：

「お、覚えたもん」

ジン：

「よし、それは後で問題だすからな。ともかく、俺がお客様扱いを止めたからつて一人前になれるわけじゃないんだぞ。半人前は上手にお客様扱いされとけつて」

ユフィリア：

「私、子供じゃないよ？」

ジン：

「恋愛方面ばかり大人になつたつてしょうがねえだろ」

ユフィリア：

「うー」

不満げな唸り声だつた。彼女にも何がしかの言えない言葉はある

のだろう。

実際にはユフィリアの望みは既にその半分が叶えられていた。『認めてもらえなくて不満』という状態は、そのことに相手が気付いていない時が一番問題なのだ。認めてもらえなくて不満という状態をジンがここで知った（と確認できた）のだから、そこからはユフィリアが努力すれば済む話となるのだろう。

ジン：

「それから、何かやるんだっいたらせめて得意なことをやれよ」

ユフィリア：

「どういう意味？ 回復呪文のこと？」

ジン：

「客観的にみて、自分にできる得意なことだ。……ニキータ、ユフィリアの得意なことは何だ？」

ニキータ：

「それは……………」

意地の悪い質問に口籠る。ジンの口から指摘されると、自分の口から指摘するのではどちらがマシだろうかと比べて、口を開く。

ニキータ：

「男の人にチャホヤされること、でしょうね」

ユフィリア

「……………」

彼女の瞳に瞬間的に悔しさが滲んだのを見た気がした。魅力は彼女の大きな武器のだが、それを武器だと認識することを彼女は頑なに拒んでいる。自分の最大の特徴を自己とは認められないのだ。故に、美人でモテるのに承認欲求が強くなってしまふ。だからと、これを若さと言い捨ててしまふのは酷というものだろう。他者に対

する誠実さを欠いたとしても、彼女の魅力は自動的に発揮されてしまわずだ。その時、彼女の人格が他者に必要とされない状況になるだろう。

シュウト：

「しかし、それは今やっていることと変わらないのでは？」

ジン：

「いや、全然違う。誰かをチャホヤするのと、誰かにチャホヤされるのじゃ真逆だろ」

ユフィリア：

「チャホヤされようと思ったことなんてないよ！」

シュウト：

「それ、聞きようによっては、もの凄い勝ち組発言なんだけど……」

ユフィリアに睨まれて、ジンは目を逸らす。

ジン：

「……霜村はともかく、葉月辺りはお前に偽情報を吹き込もうとするかもしれない。それは一人前だと認められようと頑張る誰かさんが得た貴重な情報ってことになるだろう。でも俺がそれを信じなかったり採用しなかった場合、俺が嫉妬しているからだってことになるよな？」

これでユフィリアの理屈を使って、ジンがそのままユフィリアを論破したことになる。この結論を避けなかったのか、避けられなかったのか。たぶんジンは避けたかったのではないだろうか。しかし、ユフィリアはこの結論を望んでいたのだと思う。だから、ジンは逃げなかったのだろう。

ユフィリア：

「……………ジンさんは、イジワルだね？」

テントを歩いて出てゆくユフィリア。怒って、笑って、最後には悲しそうだった。

ジン：

「ニキータ、頼む」

ニキータ：

「了解…………… 今日はずつきさん達と一緒に寝ますね」

ジン：

「任せる」

テントを出るとき、ジンの大きな溜息が聞こえた気がした。

33 泥にまみれて

さつき：

「んーっ！」

眠気を追い払うように、手足や背中を震わせながら『伸び』をする。すこし心配になってテントの外に出てみるのだが、いつもと変わらない朝の雰囲気、大して寝過ごしてはいないようだと言胸を撫で下ろす。

昨夜は夕食の後、しばらくしてからユフィリアとニキータが合流していた。いつもの様に覗きを警戒しながら温泉に入り、戻ってからは遅くまでオシャベリの華が咲いた。夜更かしをするみんなよりも先に寝てしまったさつきだったが、朝練に遅刻するかと思って、少し冷や汗をかいてしまった。

いつも元気なユフィリアが少し大人しい。もしかして落ち込んでいるのかと思って心配してしまうのだが、淡々としている彼女の方が、さつきには何倍も魅力的に感じられた。

少々意外だったのは、カトレヤ に入ってからまだ1ヶ月ぐらいと言っていたことだろうか。シュウトの話がせがむ睦実を相手に知っていることを話して聞かせていたが、話の合間に カトレヤ というギルドがどれほど大切な場所かが感じられて、羨ましくなってしまう。なんとなく ハーティ・ロード だつて負けていないぞという気持ちでギルド自慢の話になったりしていた。

みんなを起こしてしまうのは申し訳ないので、準備は外ですることにして荷物を魔法のカバンに放り込む。それが終わったところで

睦実に声を掛けようとして、隣に寝ていたユフィリアの寝顔にしばらくみとれてしまっていた。

ただ顔が綺麗とやったことではありえないその存在感に、剣士としての勘が何かを告げていた。戦いの強さとは別の、何がしかの強さを持っている子なのだろう。どこまで行っても剣士でしかない自分にはそれは良く分からない種類のものだ。

さつき：

(……だから、なのだろうか。あの人の傍に居られるのはこの子だから?)

さつき：

「睦実、ほら、起きるんだ。……今日はシュウト君がまつてるぞ?」

睦実：

「うー、んー、うーん」

ジンに教わった通りの台詞を言うと、睦実は寝たまま歩き始めた。寝間着から着替えるように言ってみたが、あまり言葉が理解できないようなので諦めるしかなかった。

パジャマ姿のまま、枕を抱きかかえてフラフラと歩く睦実の手を引っ張ってやり、ゆっくりと歩いてゆく。朝練の場所まで辿りついたところで乾いた木の根元にしゃがませてやった。やはりというべきか、睦実は枕を抱きしめたまま寝息を立てていた。しばらくは寝たままでも問題はないだろう。

体をほぐす様にひねったりしておいてから、鎧を着込むことにする。それが終わってもまだ時間があるようなので、毎日の習慣で素振りを始めながら、あの人達を待つことにする。最初はゆっくりと、感触を確かめるように。そして段々と鋭く。

決意を固めるように。

ジン：

「よーし、そこまで！」

ジンの掛け声で動きを止めるさつき嬢とシュウト。2人の模擬戦はさつき嬢がやや優勢の形で終わっていた。今回、彼女は片手剣に盾を持って戦っている。両手剣ほどの圧力はないが、軽く十人並み以上の実力はあった。今回は仲間達に習ったという盾の戦術を試すのを兼ねてお披露目しようということで、その相手役をシュウトが務めていた。

片手剣の攻撃力が低いために戦いが長引いただけで、やはり正面からの戦いでは分が悪い。こうなるとアサシナイト頼みになってしまうため、『当たれば勝つ！』といった軸での展開に陥り易い。必殺技をチラ付かせながら小技でダメージを蓄積していくのだが、おかげで余計に防御力の差が大きく感じてしまう。そう言ってもアサシナイトを外してしまつたら敗北まで一直線となるわけで、簡単に使えるわけでもない。捨て技にしても有利に展開するチャンスに変えたいところだったが、生憎とそんなに生易しい相手ではなかった。

集団戦ならばわりと簡単に当てられるアサシナイトも、このクラスの相手に1対1でやっているにはキツチリと防がれてしまう。しかも、さつき嬢はシュウトの武器の長さを把握するや、目測での見切

りを入れてくる。サムライ 武士 などの防衛特技にあるものをプレイヤー
スキルで補って使ってくるのだから参ってしまう。元々が両手剣使
いのため、盾で防ぐよりも武器受けや見切って回避する傾向が強い
のだろう。シュウトにしても、武器のリーチに不安を覚える相手と
いうのは中々いない。ジンもそうだがこのクラスのプレイヤーだと
もうなんでもアリなのだと思うしかなかった。

ジン：

「うん、おもしれー使い方だったな？」

さつき嬢：

「そうなんです。みんな色々考えるもので」

ジン：

「シュウトは気付かないで回避してたみたいだけどな（笑）」

さつき嬢：

「アレは天然のものなのですか？」

ジン：

「うーん、ある種のセンスかな。何か持ってるんじゃないか」

さつき嬢：

「そうですね。羨ましい限りですね」

ジン：

「ああ。まったく」

シュウト：

（この2人は何を言ってるんだろう？ また遊ばれているな……）

もしくは、どこまでも凶々しくなんでもかんでも欲しがると貪
欲であるか、だ。

人は持っているものは鈍感に忘れ去り、持っていないものにはか
り敏感になる。そんな態度であっても、強くなるうとすることはま
るで偉いかにように言い募り、最上の価値へと押し上げようとする

のだ。勝利に強欲な人間はしばしば誉められ、憧れの対象のように言われる。これらプラス思考の鈍感な罫とは、他者を敗北させることを肯定し続け、省みることを忘れさせる。

シユウト：

(そうか、そんなことを考えていた時もあったっけな……)

だから、弓を使うようになったのだ。元々は一方的に攻撃する武器として嫌いだったのだ。それも今からすれば自己嫌悪の象徴みたいなものかもしれない。安全な場所に居て好き放題に人を批判する輩が嫌いだった。そんな相手を逆に安全圏から一方的に攻撃する目的であえて使っていたのだ。

ところが使ってみるとこれがなぜか性に合っていたし、独特の難しさがあって使っていて飽きなかった。元いたギルド シルバーソード のギルドマスター、ウィリアムも弓使いだったため、憧れのようなものがあつたのも大きかったと思っっている。

しかし、ジンもさつき嬢も安全な場所に隠れてなどいない。体を張って仲間を守る一流の 守護戦士 なのだ。自分のバカらしい考えなど、彼らの前では妄言に過ぎないし、今日まで思い出しもしなかつたぐらいなのだ。たまたま才能や素質があつてどうのこうのと言われたので、少し昔の記憶が刺激されたのだろう。

ジン：

「じゃあ、そろそろ終わりにすつかー」

シユウト：

「そうですね」

さつき嬢：

「……………」

ジン：

「小娘のヤツ、寝っぱなしかよ」

シュウト：

「悪いことしましたかね？」

ジン：

「叩き起こして回復して貰えよ。せめてその役には立たせない
と」

シュウト：

「寝かせておいてあげてもいいのでは？」

ジン：

「つつても、もういい時間だろ？」

ジンの前に廻り込み、さつき嬢が立ちはだかる。

さつき嬢：

「すみません。私とここで、もう一度……」

ジン：

「ん、戦いたいのか？ 別にいいけど、明日じゃダメなのかい？」

さつき嬢：

「そうでは、そうではなく、『全力で』戦って頂きたいのです！」

ジン：

「へ？」

バレたな、と思った。何度も剣を合わせているのだし、なんとなく分かるのかもしれない。

それに本当のところ、ジンはさつき嬢に対する興味を失い始めていると思う。もう全力を出さなくても勝てる範囲に収まりつつあるからだろ。彼女の成長よりもジンの成長の方が速い。レイジン

グ・エスカレイド に パラダイス・ロスト という奥の手も見せてしまっていて、どこかしら『怖さが足りない』。それはシュウトも感じていたところなのだ。さつき嬢は確かに強いのだが、何か足りていないような気がしてしまう。シュウトにはどこかキレイすぎるように感じられるのだった。

ジン：

「えっと、勘弁してください」 ペこっ

さつき：

「……っ！」

疲れた感じで簡単に頭を下げてしまうジンに、さつき嬢が傷付いた顔をする。

昨晩はユフィリアで、今日はさつき嬢と立て続けに絡まれば精神的に疲れるのはわからなくもない。それもこれもジンのいい加減さ（？）が招いた結果だと思えば、少しばかり自業自得だと思う気分もあるのだが、それで彼女が割りを食うのでは可哀想な気がする。

さつき嬢：

「なぜです?! 全力で戦わないのは失礼です! 剣士にとって侮辱です!」

ジン：

「いや、でも、俺が勝ってるわけだし。そりゃ、手加減して負けてたら失礼かもしれんけど、別にそうじゃないだろ?」

明らかにジンは困ってしまっていた。一方でさつき嬢は泣きそうだった。

ユフィリアとさつき嬢に自分を重ねると、シュウトには見えてくるものがあった。たぶん、ジンが本気で相手してくれないのがイヤなのだろう。と、底冷えのする死のイメージを思い出して身震いし

てしまう。アレをまた味わいたいのか？と言われると、当面はおなかいっぱいとしか思えない。それにしたところで、ジンが全力だったかどうかなんて分かりはしないのだ。

すると、眠っていた睦実の目に光が走る。彼女はさつき嬢を守るためならば、暗黒の世界からだろうと駆けつけるのだ。

睦実：

「くおらあああ！ さっちんイジめんなああああ！！」

ジン：

「ゲツ、めんどくせえのが起きやがったか！？」

睦実：

「どういうこと？ 別に全力で戦うぐらい、いいじゃない。そんなにご大層なもんなワケ？」

ジン：

「実は、全力で戦うと寿命が縮まっちゃうんだよ。1分で1年ぐらい」

さつき：

「えっ!？」

睦実：

「嘘こけこの野郎！ 厨二病設定で誤魔化すな！」

ジン：

「ぶわあくれたか。っーかさ、別に実力なんて隠してないんだよ。ちよつと強がって見せただけっていうか？」

睦実：

「……やっぱりそうよね。そうだと思ったんだ。それ以上 強いわけないもんね。んじゃ、帰ろっか？」

シュウト：

「そうですね……」

二キータを真似た感じのさりげないフォローを入れてみる。我ながら上出来だったと思うのだが、さつき嬢は動こうとしなかった。

さつき嬢

「いいえ！ 戦っていただくまでは、ここを動くわけにはいきませ
ん」

ジン：

「はあ、強情だねえ。なんかワケがあるとかなら、一応は聞いてや
つけど？」

さつき嬢：

「いえ、その……………衛兵と戦えるようになりたいのです」

ジン：

「衛兵、か…………」

ここでその話題が来るのか、とシユウトは唸ってしまった。

ハーティ・ロード の作戦行動はミナミの衛兵達の存在がネットクになっっている。ミナミ内部での戦いは衛兵に邪魔されるために自由にならない。100レベルの衛兵を倒す手段があるとすれば、同じように100レベルの力を身につけるか、ジンのような特別な能力を会得するしかない。

衛兵が相手では仕方が無いにしても、さつき嬢は戦闘班の隊長なのだ。戦闘班の隊長が味方の足を引っ張っているのだと思えば、そのことが重く押し掛かっていたとしても不思議はなかった。

ジン：

「仮に戦える実力があつたとして、衛兵は倒しちまうとそのまま死ぬぞ？ 大地人 だから復活しないハズだし、蘇生の魔法もたぶん効かないぞ？」

さつき：

「分かっています」

ジン：

「それでも、……『人を殺して』でも戦うつてののか？」

さつき：

「それが、私に求められている役割ならば。味方を守る武器として在るのみです」

熱に浮かされたような熱い眼差しでジンに訴えるさつき嬢の姿に、少しばかり冗談交じりだったジンの表情が変わる。なんとも言えない表情をしているため、どう思っているのか読み取ることができない。

睦実：

「フーかき、あたしらだってヤバいんだもん。衛兵の人達が死んじやったら、そりゃ可哀想かもしれないけど、あたし達だって神殿のブラックリストに登録されてたら消滅しちゃうんだから、こーいうのってオアイコでしょ？ 殺したって文句なんか言われたくないよね」

サラツと怖いことを言つてのける睦実にまたもやエグいものを感じるシュウトだった。

確かに、シュウト達とは立場が違うのだ。自分たちの考え方は自分たちが死なないという前提に立っている。それは彼女達からすれば単に甘いだけなのかもしれない。

この場合の神殿のブラックリストによる消滅死は、能動的な殺害の感覚が必要とされない。何となく登録しておけば、何かの切っ掛けで死んだ時にいつの間にか消滅することになってしまう。ブラックリストに加えた側の人間は、相手を消滅させたことにまったく気

が付かないかもしれないのだ。なんとなく名前を知っていればいたずらの感覚で登録できてしまうし、それで消えても本人の責任と言いついてしまおうようなアツサリしたものだろう。街中での犯罪の取り締まりに利用すれば、衛兵とのコンボが発動して凶悪な威力を発揮することになるだろう。

ハーティ・ロード　でも、ギルドマスターだけは念のためという事でナカスへ行かせていた。表面的には責任者が仲間を引率するのが当然の責務だからということになっていたが、側近はギルドマスターの安全を優先して言い包めていた。

また右腕と言われている霜村もまた登録されている危険はあるのだが、本人が気にしていないというので放置されている。これはギルド内部の不安症に歯止めをかけた意味合いが大きかった。霜村が平気そうにしているため、下の人間達が心配だからと自分勝手な行動をとるのを許さないことができた。

ジン：

「……………フム、本気なのは分かったけどさ」

さつき：

「では……………」

ジン：

「だからって俺が全力を出す理由にはならないんだけど」

睦実：

「ちょっとお、けち臭いこといってんじゃねーわよ!?!」

さつき：

「睦実、止めてくれ。　どうしたら、全力をみせて頂けるのですか?」

ジン：

「んーと、そうだなあ。ハダカ踊りでもしてみろ？ そんなじゃないや裸エプロンで1日ご奉仕とか、いや、今晚あたり夜伽にくる方がいいなあ。まあ、そんな場所はないから外ですることになっちまうんだけども」

さつき：

「えっ……………？」

睦実：

「ふっつっざげんな！！！」

淡々といやらしい要求をするジンに絶句するさつき嬢。一方で睦実は本気で怒り始めていた。掴みかかろうとするのでシュウトが仕方なく後ろから取り押さえるのだが、足をバタつかせて抵抗される。シュウトにもジンの考えていることが分からない。バカにしているだけのようにはか思えないのだが、実際のところそんな人であるハズがなかった。

ジンは額に手をやり、苦い表情で言葉を吐き捨てた。

ジン：

「おまえらさあ、勘違いもいいい加減にしてくれないかなあ。人の本気が見たいんだったら、それだけの覚悟をみせろよ。何でもかんでも要求すれば手に入るってか？ 言うだけならタダだって？ 言ったモン勝ちかよ……………男の本気はそんなに安っぽいもんじゃないって、わっかんないかなあ！」

心底から面倒臭そうに、最後は怒鳴り声を叩き付けるジン。男性であるシュウトはこの台詞の攻撃対象からは外れているためか、むしろ頼もしさのようなものを感じてしまう。

さつき嬢はともかく、睦実が黙ったことが意外だった。反論だけ

ならいくらでも出来そうなのに、彼女はきちんとその重みを受け取っているように感じられた。

シユウト：

「でも、ちょっと要求が酷じゃありませんか？」

ジン：

「ユフィリアのヤツはキスしろつつたらキスしたけどな」

その言葉にさつき嬢は息をのみ、睦実は複雑な面持ちで「可哀想……」と呟く。

ジンが躲したために、ほっぺにキスしただけなのだが、躲してしなければそのままキスしていたはずだ。

シユウト：

「そう、でしたね。……そうすると、僕は何も支払っていない気がするんですけど」

ジン：

「お前はオモチャ兼雑用係だからいいんだよ」

シユウト：

「………やっぱりですか」がくり

前日のアレは聞き間違いでは無かったらしい。なんとなく（オモチャ兼雑用係にしては悪くない待遇かも？）などと、どうでもいいことを考えてしまう。

あの時、ユフィリアはまるで迷わなかった。もしも、ためらっていたらどうなっていたのだろう。笑って誤魔化したりしていたら、今のカトレヤは無かったに違いない。ジンの性格からしたらチャンスはあの一瞬しかない。紙一重でその後の運命が変わっていたことに今頃になって少し怖くなってくる。それでも自分はジンと一

緒にいたかもしれないのだが、ここにこうして来る事はたぶんなかっただろう。

シユウト：

(なんとというか、難しいな……)

さつき嬢が衛兵と戦えるようになるということは、彼女を『人殺しにする』という意味かもしれないのだ。強くするというだけならば、実際に手を下してしまうまでは人殺しにはならないし、可能性に過ぎないとも言える。仮に強くなること自体が良い事だったとしても、彼女が衛兵と戦えるようになったと知れば、霜村や葉月が放っておくとは考えられない。さつき嬢を駒のように用いてその気持ちを斟酌することなどは思い付きもしないのではないか。霜村たちを信頼することなど、シユウトには到底無理な話だった。

逆に見れば、さつき嬢はジンに対して「人殺しをしたいので、どうか共犯になってください」と言っていることになる。その要求の厚かましさを考えれば、おかしいのはどちらなのか。

それに対してジンはスケベ要求を返している。スケベ要求＝絶対防御陣なのだとしたら、やはり彼女達が人殺しのような取り返しの付かないことをしてしまうのは嫌だということになるだろう。

シユウト：

(ジンさんなら、どうする……?)

さつき嬢が手を汚す前に、自分が代わりになったりするのだからか……? いや、それはどこかしらこの人らしくない。もう少し違うこと考えるのではないか。

シユウト：

「もしも、なんです、ジンさんが衛兵と戦わなければならなかったとしたら、どうするんですか？」

ジン：

「……………戦わないだろうな。そんなことをするのは無意味だ」

睦実：

「なんなのよ！アンタは……………」

ジン：

「最後まで聞けって……………衛兵達の着ている鎧、ムーバルアーマーは都市魔法陣から力を得ている。ならば、『都市魔法陣を破壊』してしまえばいい。そうなれば、もう脅威じゃなくなるハズだろ？」

睦実：

「そつ、か……………」

驚いた顔をするさつき嬢たち。シュウトは、ジンの答えが何となく想像した通りの方向だったことに満足する。

ジン：

「ま、その魔法陣がどんな形をして、どこにあるのかなんて知らないんだけどな」

シュウト：

「でも、その作戦なら犠牲者を出さずに済みますよね？」

ジン：

「いや、そう簡単にいくとは限らんし、別の形でも犠牲者は出るかもしれない。だから、なるべくなら最終的な手段であって欲しいとは思っているんだよ」

さつき：

「別の犠牲というのは？」

ジン：

「魔法陣を壊した後で直せばいいけど、壊れればなしかもしれないだろ？ そうなると衛兵が機能しなくなることで、治安が悪化する

ることになる。そうになると、例えば女の子が夜に1人で歩くのは難しくなるかもしれない」

シュウトの頭をかすめたのは、よりにもよって、丸王のイメージだった。ユフィリアやニキータにちよっかいを出そうとしてくるため、今では敵対関係にあるアキバの中堅ギルドのマスターだ。

シュウト：

「となると、都市魔法陣の破壊は『ミナミの街そのもの』を破壊してしまうことに成りかねないですね」

ジン：

「まあ、昔から街に人が住んでるんじゃないかって、人の住んでいる場所が街だっというけどなあ。そういうのも含めて、取り戻したい『ミナミ』ってのはどんなものなのか？みたいな問題は出てくるかもしれないわけだ」

ここまでで衛兵を直接的な武力で倒す必要がなくなり、戦略的・戦術的な意思決定の問題に変換してみせたことになる。『都市魔法陣の破壊』という作戦行動となれば、それは既にさつき嬢ひとりの問題ではなく、ハーティ・ロード 全体の議題になるべきだからだ。

それは同時に、さつき嬢がジンと戦うべき理由もなくなったことを意味していた。

シュウト：

(本当は、ただ戦いたかっただけなんじゃ……？)

今の話で逆に困った顔になっている彼女に微笑ましい気分になっ

てくる。単に負けず嫌いの女の子が戦いたかっただけ、という方が
しっくりくる気がする。

さつき嬢たちと別れて自分たちのテントに戻る途中、聞きたかつ
たことをジンに質問する。

シュウト：

「……というわけで、矢が真っ直ぐに飛ばなくなったんですが？」

ジン：

「ふうーん、よかったじゃん。進歩進歩。」

シュウト：

「進歩なんですか？……ここからどうすればいいんでしょう？」

ジン：

「ははっ、そりゃあ自分で試行錯誤しようや」

シュウト：

「……覚悟の問題ですか？」

ジン：

「プッ、ちげーよ。なんというか、必要なことはたぶん教えている
と思う。あとは、自分で切っ掛けを掴めってことさ。『分かる』っ
てのは連鎖しやすいというかね」

シュウト：

「そついつもんですか……？」

ジンが速度を落としたので自然と自分が先にテントの中に入ろう
と身を屈める。中で待っていても、そのままジンは居なくなってい
た。

早めのランチを食べるために中央の大テントへと足を運ぶと、直ぐにこちらに気付いた睦実が近付いて来た。

睦実：

「ねえシュウト君、さっちゃん知らない？」

シュウト：

「えっと、あ後は見掛けていませんが……」

睦実：

「え………？　じゃあジ、オッサンは？」

シュウト：

「そういえば、ジンさんも戻って来ていませんね。一緒に居るのかも」

睦実：

「あたし、行かなきゃ！」

シュウト：

「ちょっと待って」

飛び出そうとする睦実を制止し、弥生たちの所にニキータと一緒にいたユフィリアの元へ急ぐ。走り回って見付かればいいが、朝練の場所にいない場合は面倒なことになる。彼女のミニマップをアテにさせてもらった方が近道だと思えた。

ユフィリア：

「ん、シュウトおはよ」

シュウト：

「ああ。悪いんだけど、ジンさんとさつきさんの居場所って分からないか？」

ユフィリア：

「えっと……………んー、分かると思うけど、何かあったの？」

睦実：

「ホントに？ どこなの？」

ユフィリア：

「急ぐんだったら、私も一緒に行くよ！」

小走りで朝練の場所に向かおうとする睦実だったが、ユフィリアが「こつちだよ！」と少しズレた方向を指し示す。どうやら彼女に確認して正解だったようだ。

ユフィリア：

「この辺りのハズだけど？」

睦実：

「いたっ！ さつちん！……………えっ?!」

地面を転げまわって真っ黒になった様子のさつき嬢が、地面に座り込んで呆けていた。一体、ここで何があったのか、土ぼこりにまみれた顔には涙の痕跡が残っていた。ボロボロと言ってよかった。

睦実：

「さつちん……………？ だい、じよぶ？」

さつき：

「むつみ？」

おそろおそろ無事を確認する睦実だった。さつき嬢の反応は薄かったが、意識はしっかりしているように感じた。

睦実：

「その、へ、へんなこととかされなかった？」

さつき…

「ん……別に」

睦実：

「まさかの、泥水で口をすすぐ展開!?」()

ユフィリア：

「え？ それってどういう意味？」

さつき：

「何を言ってる？……ああ、ドロドロなんだな。水浴びしなきゃな」

睦実：

「まさか、白い液……体中を泥水で洗う展開?!」

ユフィリア：

「ねえ、それってどういう意味!?!」

さつき：

「泥水？ ……少し落ち着いてみないか、睦実」

シュウト：

「大丈夫みたいですね？」

さつき：

「なんだか、ご心配をおかけしたようで、すみません」

たぶん、ジンと戦ってこうなったのだろう。泣いていたらしき部分は気になったが、当のジンの姿が見当たらなかった。後ろでは睦実がユフィリアに何やら耳打ちしている。たぶん泥水がどうかの話を教えているのだろう。……すると急に立ち上がったユフィリアが怒っているかのように、ずんずんと歩いていくので、その後を追いかける。すこし離れた場所で木にもたれ掛かっていたジンを直ぐに発見することができた。

(ジョジョの奇妙な冒険 第一部にて、ヒロインのエリナ・ペンドルトンがディオ・ブランドーにくちびるを奪われた際に、綺麗な水ではなく、泥水で口を洗ったシーンのネタ。ここでは「キスされ

「ちゃった?!」(ぐらいの意味)

シュウト:

「ジンさん!」

ジン:

「よっ」

見たたによつては、こちらの方が何倍もボロボロに思えた。剣も盾も壊れかけていて、この時はまだ自動的な修復の途中だった。かなりの耐久力を消耗しているだろう。鎧にも刀傷があちらこちらにある。気になったのはフェイスガードを下ろしているということだった。ジンが全力だったとしたのなら、どうしてこんなに傷だらけなのだろう。まるで何十人かと同時に戦っていたかのようにだった。

そのジンの前にユフィリアが立つ。仁王立ちを思わせる態度だった。

ユフィリア:

「さつきちゃんに、ちゅーしたの?」

ジン:

「なんだよ、いきなり?」

ユフィリア:

「ちゅーしたの?」

ジン:

「してねーよ」

ユフィリア:

「じゃあ、もつと、すごいことしたの?」

ジン:

「あー、えらい目にはあったが、えろい目にはあってねーよ」

ユフィリア:

「ほんとうっ？」

ジン：

「さて、どうだかな……」

フェイスガードの奥の表情はシュウトからは見えなかった。しばらくするとユフィリアはパイとそっぽを向いてさつき嬢のところへ戻っていった。シュウトはジンの無事を確認しようとしたのだが、さつき達の所へ行くようにと追い払われてしまった。

まだ気持ちがシャキツとしていないさつき嬢をつれて集落へと戻る。この件が大きな騒ぎにならないようにと配慮をして、シュウトとユフィリアは先に食事に戻ることになっていた。食事が始まってしばらくしたころ、服を着替えたさつき嬢を連れて睦実が食事に加わる。覇気こそ感じられないのだが、特に問題はなさそうに思える。

しかし、食事が終わってもジンはそのまま戻ってこなかった。

33 泥にまみれて（後書き）

大事なところなので時間が掛かっております。申し訳ございませんぬ>（――）<

今回のさつき嬢に何があったのかは本筋とは直接的に関係してはいないので、近々書いてしまいたいと思っております。申し訳ございません>（――）<

次話からが問題ですね。あと何話かかりやがるのでしょうか。はやくアキバに戻りたいです。

重ね重ね、申し訳ございません>（――）<

34 ターニング・ポイント

石丸：

「ジンさんが戻ってこないっスね」

ニキータ：

「そうね」

シュウト：

「食事をしないなんて普段のジンさんじゃ考えられないんだけど」

ユフィリア：

「……………」

食事が終わってもジンが戻ってこない。心配しているというよりは、対処に困ってしまう状態だった。1人でもたぶん危険はないし、1人になりたいのであれば放っておくのが優しさかもしれない。シュウトは戻ってくるまで待っていればいいという方に心が傾いていた。

レイシン：

「おまたせ」

シュウト：

「レイシンさん、実はジンさんが……………」

レイシン：

「うん。わかってるから」

食事の片付けが終わったらしいレイシンが天幕に戻って来る。相談しようとしたシュウトを遮ると、荷物から何やら包みを取り出している。

レイシン：

「ユフィさん。悪いんだけど、これを届けてもらえるかな？」

ユフィリア：

「えっと、中は何ですか？」

レイシン：

「お弁当だよ。おなかをすかしていると思うからね」

ユフィリア：

（こくり）

ジンの居場所が分かるのはミニマップ持ちのユフィリアだけなので、彼女に頼むことになるのだろう。すこしは大人の配慮らしきものもあるのかもしれない。ユフィリアが素直に頷いているのがシュウトには意外だった。

ユフィリア：

「行ってきます」

レイシン：

「よろしくね」

石丸：

「いってらっしゃいっす」

ニキータは軽く手で挨拶を送る。ユフィリアが天幕から出て行ってしまつと、シュウトの方に向き直つて無茶な要求を始めた。

ニキータ：

「じゃあ、尾行して様子を見てきて」

シュウト：

「ええ？ いや、それって何かマズくないかな？ 仲間の尾行つて

……」

ニキータ：

「私達だと気付かれちゃうでしょ？　ここはシュウトしかないのよ」

シュウト：

「だからって、気付かれたら後でどうなることか」

ジンとは別の意味で怒らせると恐ろしい相手だった。女性はどこまでやるか分からない部分が恐ろしい。

ニキータ：

「ユフィとジンさんは仲たがいがみたいな状態なのよ？　気にならないの？」

シュウト：

「そりゃ気にはなるけど、僕がついていったからって何ができるわけでもないんだし」

ニキータ：

「シュウトが居るだけでも違うから。それとユフィに何かあったら助けてあげて」

シュウト：

「何かって、何？」

ニキータ：

「何か、よ」

義兄弟ならぬ、義姉妹の契りか何かは知らないが、少々過保護な姉貴役にせっつかれ、半ば無理矢理に天幕から追い出される。ユフィリアを心配してくれないのか？などと問われれば、言い返せる言葉の持ち合わせもない。ニキータが何の心配をしているのかは何となくわかったが、その手のシーンに居合わせたりした時の居心地の悪さを想像すると、そこにあるのが決して渡つてはいけない川であつても渡りたくなくなってしまふかもしれない。はたして手持ちの金貨は六文銭の代わりに使えるのであろうか？

シュウト：

(本当に、なんでこんなことをしているんだろう……?)

律儀にユフィリアの尾行をしよう。残念ながらシュウトの思考回路には『ブツチして適当なところで時間を潰しておく』といった考え方はない。生来の生真面目な性格ゆえ、頼み事をされると、なるべくちゃんとこなす方向に流されてしまうのだ。

相手はミニマップ持ちなので、特技の再使用規制時間などを考慮しながら、見失わない程度に距離をとって追いかけて行く。ジン相手では長時間の追跡行は厳しいのだが、ユフィリアが相手ならまだ誤魔化しようもある。

木立の中、坂道をユフィリアは楽々と登っていく。しばらくすると中腹の開けた場所に出た。その中心部に毛布を敷いたジンが寝そべっているのを発見する。彼女は変わらない調子で近付いて行った。シュウトは視力強化・聴力強化のアイテムを用意しながら、付近で隠れ易く、観察できそうなポジションを探すことにしていた。

鎧姿のまま、寝そべって目を瞑っていたジンの頭側にユフィリアが立つ。ヘルムは脇に置いてあるため、横になってはいても、表情が見えなくもない。

ジン：

「よっ」

ユフィリア：

「うん」

目を開け、普段と同じ挨拶をするジン。立ったまま返事を返すユフィリア。しばらくそのまま二人は無言だった。

唐突に、ゆったりめのボーダーチュニツクを軽く持ち上げて、デニムのホットパンツを見せる。その裾にはレースがあしらわれていた。

ユフィリア：

「どう？ 可愛いでしょ」

ジン：

「ああ。……………魅力的なフトモモだな」

ユフィリア：

「もう、服を見ようよ！」

むくれるような言葉遣いだったが、笑顔の雰囲気が入り混じっていた。機嫌は悪くないらしい。

ジン：

「で、その手に持っているのは何かな？」

ユフィリア：

「んーと、レイシンさんからお弁当なんです」

ジン：

「さすが気が利くなあ。サンキュ？」

ユフィリア：

「……………」

笑顔で手を伸ばすジン。黙殺するユフィリア。

ジン：

「あれ？ いや、どしたの？」

ユフィリア：

「んー、今日のお洋服って、ジンさんのにどうかな？」

ジン：

「……………もちろん、最高に可愛いです」

ユフィリア：

「えへへ、そうでしょう？」

身体を起こし、かしまって弁当を受け取るジン。ユフィリアも毛布の上に座り、洋服のことをいろいろと話していた。ジンは食べながら話を聞いているようでたまに頷いている。

ユフィリア：

「でね、すつごく綺麗なレースだねって言ってたらくれるってことになって」

ジン：

「じゃあ、それが？」

ユフィリア：

「そう。お願いしてホットパンツの裾に縫ってもらったの。一緒にこのトップスの裾をナナメにカットしてもらって、そうするとこのレースが見えるでしょ？」

ジン：

「チラ見せか。ふーん、洋服の改造とかしてんだなあ」

ユフィリア：

「アイテムが少ないからやり繰りしなきゃだし」

ジン：

「……………それって、もしかしてお金の問題？」

ユフィリア：

「ううん。種類の方」

なんとなく興味をそそられた様子のジーンがいくつか質問を加えていく。

結論的には、普段着のアイテム数はそんなに多くないということだった。いろいろな種類はあるが、バリエーションは少ないのだろう。ローマ風のトーガはあっても、普段着で欲しいブラウスがあたり無かったりするようだ。

当然、今年のファスト・ファッション・アイテムがメニュー作成できるはずもない。ゲーム時代においてもキャラクターの外見に装備品を反映させるためには（ポリゴンなどで）データを作成し、拡張パックを導入した際に使用可能にするという手順が必要となるためだ。

最新の拡張パック ノウアスファイアの開墾 で追加されているかもしれないメニュー作成アイテムは、どこかでクエストを行うなどして、まずレシピを見つけなければならない。妖精の輪 の都合などによってそちらの進展はあまり見られていないことから、必然的に前回の拡張パックのメニュー作成アイテムが現状では最新のものとなる。……つまり、前回の拡張パックという時点で3年以上昔の話となり、しかもデータ作成に掛かる時間から、流行のアイテムなどは4〜5年前に一般的に広く認知されていたものが春モノ・夏モノ・秋モノ・冬モノと何点かずつ同時に増えていくことになるのだ。

エルダー・テイル には20年の歴史があるためにかなりの点数の被服アイテムがあるとはいつても、これでは服装にうるさい子たちのニーズとはマッチしにくい。

元からファンタジー系の戦闘ゲームであるため、防具としての『布鎧』の方が重要視されるのが普通であって、街中で着る普段着の必要性はそこまで高くない。最新の布鎧の強さやデザインがより多

くのプレイヤー達の興味の中心に来ることになるため、低レベル防具などとして再現される街着・普段着の需要は趣味のラインを越えることはなかった。

ところが、現在ではこの世界に囚われたことによって『街で過ごす時間』が意識されるようになって来ている。ゲームであればログインしてさっさと冒険に出かけていたプレイヤー達が、ログアウトできないことによって生活着のようなものが必要になってしまっただ。鎧で寝たり、くつろぐのは中々難しいため、柔らかな素材の寝間着などが欲しくなるのは自然の成り行きであろう。

現時点では新しいアイテム作成法によってある程度まで自由に洋服を作ることが出来るようになってきているのだが、そこではまた別の問題が発生することになる。自分達でデザインしなければならぬことと、全てをハンドメイドしなければならない点であった。前者は正解の保証が得られないこと、後者は大量生産が難しいことを、まず最初に意味することになる。

ジン：

「じゃあ、流行の服みたいなのは無いわけか？」

ユフィリア：

「んつと、あたらしい作り方だと手作りになっちゃうでしょ？」

ジン：

「ああ、数が出ないわけね」

ユフィリア：

「ちょっといいかもって思う服だとマーケットで早いもの勝ちになっちゃうし。だからって張り付いているわけにもいかないから」

ジン：

「シブヤだとその辺でも不利だな……」

ユフィリア：

「大丈夫だよ、全然？」

少しすまなそうな顔のジンに笑顔で応える。

洋服などのアイテムを作るとそれぞれの作者がマーケットに流すことになる。センスも技術も持っている作り手は相対的に少ないことから、どうしても人気は集中することになる。しかし、それが流行を作るか？というのと、商品としての絶対数が少なすぎることで流行というほどのブームは生まれない。ファッション雑誌などのメディア戦略うんぬん以前に、マーケットで人気の商品を大手の生産ギルドが作るような展開にならなければ、この世界独自の流行は生まれようがないものだった。

既製のアイテムもダメ、新しいアイテムもダメとなると、ユフィリアたちのようにファッションに関心を持つ女子は第三の道を模索することになる。その一つが『改造によるアレンジ』であった。といっても、改造するにも洋服を扱うためのスキルは必要になる。布を自分の好みのサイズにカットしてもそれはダメージとして認識されてしまい、時間が経てば元に戻ってしまうからだ。スキルを持っているプレイヤーが『折り返して縫い止める』などの処理を行うことで、新しい洋服として形成されている部分があった。

ユフィリア：

「首を長く見せる効果があるから、ニナはもうちょっとデコルテを開けたほうがいいっていつも言ってるんだけどね」

ジン：

「悪い、そのデコルテって何だ？ オデコじゃないのは分かるんだが……」

ユフィリア：

「この辺のことだよ？」

ジン：

「ああ、胸元？ 鎖骨まわりか。わっつけわかんねーな」
ユフィリア：

「わたしだって、いつもそうなんだよ？ ジンさんはいつも良く分からないこと言っただけだからいるよね」

ジン：

「……なに、これってリベンジなん？ だけどゲーム関連用語とかは知っとかないとまずいだよ」

ユフィリア：

「マンガとかアニメの話だっていっぱいしてるよ？」

ジン：

「ああ、そうでしたっけね（苦笑）」

ニキータの場合、デコルテを開いてしまうと胸元に視線を集め易くなる。このことを嫌っているらしく、鎧などでも胸を小さくみせる効果のあるものを選ぶ傾向があった。現在の男装ファッションもこれらを勘案した結果である。

現実世界でのニキータは『小さくみせるブラ（ ）』系商品の愛好者であった。大きなバストには胸板が厚く見えたり、洋服のラインがすつきりと見えないなどの事情がある。一部の女性達は巨乳にコンプレックスを抱くこともあって、男性からはなかなか理解できないのだが、意図的に着ヤセさせるブラジャーには需要が存在していた。……これは残念ながらエルダー・テイルには同様の下着類は存在していない。そもそも下着自体がなかったため、現在のアキバでは下着そのもののブームが起こっているような段階だった。

一方のユフィリアはというと、フェミニンなものが似合い過ぎることから、「お前はそれ以上、まだモテたいのか？」といった同性からのツッコミを回避する意図もあって、デニム素材のものを使うなどしてスポーティな感じに見せていることが多い。元気な彼女のイメージとも似合っているため、フェミニン全開な白ワンピースで

も上にデニムやミリタリーなジャケットを足すことで、可愛く成り過ぎないように工夫していたりする。そのことによって更に男子が話し掛け易い雰囲気になっていたりもするのだが、本人からすれば「愛嬌ということなのだろう。」

（ 実在の商品です。ワコールから2010年4月頃に発売開始しています。作中は2018年の設定ですので、ニキータの場合で言えば、高校生時代に存在していたことになります。）

ジン：

「洋服に気を使っている割りに、鎧だのはいいい加減な組み合わせじゃないか？」

ユフィリア：

「んー、貰い物だから使わないのは悪いだとか色々あって。性能も良いみたいだったし」

ジン：

「……………あー、ミツグくんが沢山いらっしやるようで、何よりです」

ユフィリア：

「ちがうの！ あんまり違わないけど、違うの！」

ジン：

「いや、いいんじゃないスか？ 別に」

ユフィリア：

「ムカつく」

ユフィリア達は以前に仕事の報酬を「ちょっと良い装備で支払う」というので受け取ったことがあった。それがどこで間違ったのか、裏で「俺のプレゼントした装備を使っている」といった自慢話みたいな誤解をされることになってしまった。それを切っ掛けにプレゼ

ント競争が発生し、断りきれずに受け取るしかないような状況になったことがあった。

ゲーム男子の悪意の少なさはユフィリアにとっても救いではあったのだが、いかんせん悪意が無さすぎた。その大半が性的な見返りを要求しない親切心からの贈り物でもあったので、断るに断れない。ユフィリアよりも周囲への見栄のためであったり、年齢の上下もあるので、ウブであるが故に受け取らないと傷付いてしまう相手などもいた。そうして断りきれない人が1人いるだけで話がややこしくなり、全てをありがたく頂戴することになってしまったのだ。それ以降はニキータがお断りするようにしているのだが、装備品はその時の名残もあってそのまま使っていた。

大災害 の直後の失望・絶望からすれば、ユフィリアの存在が周囲の人々に勇気などの感情を与えていたことも大きい。奥伝の巻物や装備品などのアイテムは所詮は『ゲームの中のもの』でしかない。ユフィリアを切っ掛けとして得られた「生きる意思」のようなものに比べてしまえば、その価値はなんでも無いものでしかなかったのだ。贈り物をする『純粋な喜び』を損なう様なことは、この当時はしてはならないことでもあった。

実は女の子からは「自分の作った洋服を着て欲しい」といったオファーが今でもあったりするのだが、ユフィリア達はこのタイミングで カトレヤ のギルド員になってシブヤに活動拠点を移していた。ユフィリアとニキータは究極的にはこれらのオファーを受ければ洋服に困らなくすることも可能かもしれない。しかし、それは自分たちを利用しようとする意図が強い提案でもあった。これに乗っけてしまいファッションのオーソリティーになっってしまうには、ユフィリアと2人きりという立場は弱く、不安定でもあったことから、ニキータは慎重に振舞っていたのだ。

こうして、気付くといつも通りの調子で話していた。シュウトはもつと気まずい展開になるとばかり思っていたのだが、2人とも水に流してしまっているようだ。

ジン：

「うん、ごちそうさまでした。まんぞく」

ユフィリア：

「ね、ジンさんってココで何をしてたの？」

ジン：

「それを聞くからには、やはり膝枕をしていただきませんか」

ユフィリア：

「……私、ジンの彼女の彼女とかじゃなけど、そのぐらいならいいよ」

ジン：

「あ、縦だからな、縦」

ユフィリア：

「縦って、こいつ？」

ジン：

「そうそう。縦こそが本式ですよ。花の慶次ですよ」

ユフィリア：

「やっぱり、よく分からないこと言うよね？」

ユフィリアの膝側に身体を横たえ、ジンはその脚に頭を乗せた。なんとなく手持ち無沙汰なのか、彼女はジンの髪の毛をいじったりしている。しばらくしてからジンが切り出していた。

ジン：

「……帰るべきかどうかを考えてた」

ユフィリア：
「……そう、なんだ？」

ジンの真面目な様子に対して、ユフィリアは意外そうな口調での返事だった。

ジン：

「ああ。もうここで出来ることって、あんまり残っていないからな」
ユフィリア：

「そっか……」

ジン：

「ごめんな？」

ユフィリア：

「何が？」

ジン：

「んー、リーダーが悩んでたら、何していいのか、どうしていいかわかんなくなっちまうだろ？」

ユフィリア：

「そんなの、全然よかったのに」

ジン：

「そういうわけにもいかないんだよ」

疲れで薄くなった笑顔を見せるジンであった。いつも自信満々であっただけに、少しばかり弱そうな部分を見せられると反応に困ってしまう。

ユフィリア：

「じゃあ、帰るんだ？」

ジン：

「そうなるかな。もうさっちゃんにしてやれることも無いし……」チ

ラッ

ユフィリア：

「……………そんなの引つ掛からないよ？」

ジン：

「ちえ、可愛げねーの。ヤキモチ焼くフリぐらいしろよ」

ユフィリア：

「あははは」

ジン：

「後はそつだ、料理少年の仕上がり具合を見て決めるぐらいかなあ」

ユフィリア：

「ラビくん、上手になって来てるよね」

ジン：

「師匠が鬼だからな」

ユフィリア：

「そんなこと言って、仲良しなのに」

ひとしきり笑うと、会話が途切れる。夏の日差しが段々と強まってきたが、風も吹いていて、それほど暑さを感じなかった。風に乱れる髪を、ユフィリアが背中側に流している。

ユフィリア：

「良い場所だね」

ジン：

「ああ。開けてる場所だから、中央付近にいれば襲われても戦いやすい」

ユフィリア：

「そうじゃなくて、ちょっと公園っぽいでしょ？」

ジン：

「そうか？ この世界なんて、どこもかしこも自然だらけだろ」

ユフィリア：

「ジンさん、いじわる」

ジン：

「ははは。確かに、こういうのは理想のデートに近いけどな」

ユフィリア：

「ふーん、ジンさんの理想のデートって、どんなの？」

ジン：

「公園かなんかで、好きな女と毛布の上に転がってのんびり、みたいのだな。まあ、もうちょっと日差しが柔らかくて、涼しい方が気持ちいいだろうけど」

ユフィリア：

「うん。いいね、そういうの」

ジン：

「だろ？」

ユフィリア：

「いつか、みんなで行こうね？」

ジン：

「いつか？……現実に戻ってからってことか？」

ユフィリア：

「うん。みんなでハイキングとか、バーベキューとかもいいよね？」

ジン：

「今だってさんざんやってるだろ？ 冒険に出たら毎回バーベキュー

「みたいなもんなんだし」

ユフィリア：

「だから、現実に戻ってからもやりたいなって……」

ジン：

「それも悪くない、か。全てが終わって、いい思い出になっていたら。だけど……」

ユフィリア：

「……………」

ジン：

「みんなとじゃなくて、2人で行かないか？」

ユフィリア：

「……………」

目には見えない境目を越えてしまったかのようにだった。昼と夜の境目のような分かり易いものではなく、朝と昼の真ん中に境があるかのような、あるか無きかのもの。空の青色が地上に近付くに連れて自然と白さを帯びていくように、空のどこかに目に見えないが青から白へと決定的に変わっていく場所があるはずなのだ。そんな分水嶺が実は誰にも気付かれないようなささやかでちっぽけだったかのような。そして普段は絶対に感じ取れないような変化をいつしか見逃していて、気が付けば通り越していたみたいな気分になる。

ユフィリア：

「あのね、私……………付き合えない」

ジン：

「そうか」

ユフィリア：

「ごめんなさい」

ジン：

「別にいいさ。……………あー、念のために聞いておくんだけど、ギルドはどうするっ？」

ユフィリア：

「……………辞めなきゃダメかな？」

ジン：

「そんなことはないさ。居てくれた方がありがたいとは思ってるし」

ユフィリア：

「うん。なら良かった」

ジン：

「まー、しょうがない。……また誰か、あたまナデさせてくれる子を探さなきゃな?」

ジンは起き上がって膝枕を終わりにしようとしたが、ユフィリアが肩に手を置いてそれを阻止したようにみえた。

ユフィリア：

「そのくらいなら、私にしてもいいよ?」

ジン：

「は? ……………そのくらいで済ますわけないだろ?」

ユフィリア：

「そっか、じゃあ、ちゅーとかしちゃうんだ?」

ジン：

「ちゅーだけじゃねえって、もつと凄いいことだっでするよ。俺だってもういい年のお兄さんですよ? 性欲だっですれなりにあるんだし」

ユフィリア：

「うーん、そうなんだけど、ちゅーまでにしておいて?」

ジン：

「…………えっと? 何をおっしゃってますか、あーた?」

ユフィリア：

「他の子と付き合いたいんでしょ? ちゅーまでだったらいいよ」

ジン：

「ワケがわからん……………おまえ、それ、俺をキープしておきたいとかって意味なわけ?」

ユフィリア：

「んつと、そうなっちゃうのかな?」

あまりの展開に、ジンだけではなくシュウトのあいた口も塞がない。ユフィリア本人はニコニコと笑っているのみだった。

ジン：

「えっと、なんなの、これ？」

ユフィリア：

「なんだろうね？」

ジン：

「笑うところなのか？……………えっと、もしかしてキスは浮気に入らない人？」

ユフィリア：

「ううん、キスは浮気だよ」

ジン：

「じゃあ、浮気はアリな人？」

ユフィリア：

「まさか。浮気なんて絶対にダメでしょ」

ジン：

「ダメだ、意味がわからん。……………キスはいいんだよね？ じゃ

あニキータを口説くか」

ユフィリア：

「えっ？」

シュウト：

（えっ？）

流石にこれ以上、ギルド内部の人間関係を引っ掻き回すのはやめていただきたいと思うシュウトであった。

ジン：

「カワイイよな、なんかムキになって突っ掛かって来たりするトコとか。しっかりしてそうなのに内面よわそーなトコとか、おっぱいも大きいし」

ユフィリア：

「……………」

膝枕していた脚を引き抜き、落下するジンの頭の左右に手を着くと、ユフィリアはキスをしそうな距離でジンを睨みつけていた。

ユフィリア：

「ニナはダメ！絶対にダメだからね！ダメ！」

ジン：

「あれー？ どうしちゃったのかな？」

ユフィリア：

「ニナには手を出さないって約束して」

ジン：

「んー、どうしよっかなー？ やっぱそういうのって心がけ次第なんじゃないの？」 ニヤニヤ

ジンの反撃が始まっていた。イヤらしい声色で脅すようなことをいいながら、ユフィリアの頬に手を伸ばして撫でる。近すぎる距離に気が付いた様子でユフィリアが体を起こしたので、ジンも向き直るよつに座り直した。

ジン：

「ふむ、なんとなく分かってきた感じだけど……、まだ矛盾しててよく分からんな。てか、逆じゃねーの？」

ユフィリア：

「逆って何が？」

ジン：

「ニキータの相手って、俺じゃないの？」

ユフィリア：

「……………！」

動揺するユフィリアに対して追撃するジン。のし掛かるようにしてユフィリアをゆっくりと押し倒す。

ユフィリア：

「ダメだよ」

ジン：

「ちゅーまでならいいんだろ？」

ユフィリア：

「それは、違う話……」

ジン：

「ニキータには手を出さないって約束する」

ユフィリア：

「本当？」

ジン：

「ちゅーはするけど」

ユフィリア：

「じゃあ、今日だけ、だったら……」

ジン：

「あー、でも、ちゅーだけで我慢できっかな？　こんなに可愛いと我慢できなくなるかも？」

ユフィリア：

「嘘、だよね……？」

シュウトの方にも、にわかに緊張が走る。こういう状況を止める様に言われていたのだが、どうやって止めればいいのか全く考えてもいなかった。むしろ邪魔しない方が良いのではないか？馬に蹴られて死ぬべきなのは自分？　いや、弓を準備してここから仕掛けてみるか？　もうさっさと逃げ出すべきでは？　見ちゃ不味くないか？　でもちよっと見てみたいような？などと混乱していた。

ジン：

「ユフィ、覚悟を決める」

ユフィリア：

「だ、だって……………」

ジン：

「ではっ、いただきまーす」

ユフィリア：

「せっ」

ジン：

「せ？」

ユフィリア：

「せきにん、とって……………」

瞬間、沈黙が訪れた。

ジン：

「ぶはははははは！ それヤバっ！ ばはははははは！」

ユフィリア：

「何で、笑ってるの……………」

ジン：

「す、すまん。いやあ、ユフィリアさんでもテンパるとそんなウブ

なセリフを言うもんなのな？ 責任ってお前。ククク」

ユフィリア：

「もう、やだ！」

ジン：

「いやいや、可愛かったから。　　しかし、お前の責任なら取りたいヤツなんていくらでも……………」

取り敢えず危機は回避されたようで、シュウトは浮かしかけていた腰を下ろしていた。顔を真っ赤にして下からジンをポコポコと叩いたりしていたユフィリアだったが、ジンの様子が変なのに気が付いて止める。何かを言いかけたジンの反応がなくなっていた。

ジン：

「そういう、ことが……………」

ユフィリア：

「今度はどうしたの…………？」

ジン：

「もしかして、いや、でも」

ユフィリア：

「ジンさん？…………ねえ、ジンさん？」

ジン：

「まだ間に合うか？…………ギリギリ、今だったら」

ユフィリア：

「もう！ 私の上で考え事しないで！！」

ジン：

「ん？ ああ、すまん」

素直にユフィリアの上から退くと、ジンは何やらブツブツと呟きながら考え事を始めてしまっていた。流石のシュウトも、その呟きまでは聞き取れない。

ユフィリア：

「ねえ、本当にどうしちゃったの？」

ジン：

「うん、ここでやる事が出来た。……………ユフィのお陰だな」

ユフィリア：

「それって何？ 教えて？ 私のお陰なんですよ？」

ジン：

「まだ確証はないんだ。教えるのはいいけど、お前ってギルドの仕事で役に立ちたいんだよな？」

ユフィリア：

「うん。そうだから教えて欲しい」

ジン：

「なら、どっちかを選ぶんだ。話を聞いて仕事なしか、話なしで仕事ありか」

ユフィリア：

「両方。ダメなら、仕事」

ジン：

「イイ子だ。……シュウト!!」

シュウト：

「はい！」

遠くから呼びかけられ、木陰で思わず返事していた。いつの間にかバレていたらしい。「来い」というジェスチャーをされたため、小走りでジンのところへ移動するのだが、その間にユフィリアの顔が驚愕からゆっくりと冷たいものになって行った。

シュウト：

「なんでしようか？」

ユフィリア：

「へえ、シュウト、見てたんだあ？」
ゴゴゴゴゴ

シュウト：

「いえ、それは、えっと……？」

ジン：

「おいおい、許してやれよ、どうせニキータの策略だろ」

ユフィリア：

「ニナが？……どうして？」

毛布をはたいて荷物にしまいながら、ジンがシュウトの援護をする。

ジン：

「どうせシュウトが見てる前なら、俺がスケベな事をしないって読んだんだろ？」

ユフィリア：

「そっか……」

シュウト：

「それって、僕がジンさんにバレバレなのが前提ですよ……？」

ユフィリア：

「それじゃ、ジンさんっていつからシュウトに気付いてたの？」

ジン：

「そりゃあ、追跡で気配を消したトコだろ」

シュウト：

「最初っからじゃないですか」

ジン：

「おまえ、センスが良すぎて最適ルートを選ぶクセがあるからな。結構おもしろかったよ」

シュウト：

「そうですか……」

ジン：

「んじゃ、さっちんをイジメに行くぞ」

ユフィリア：

「……………えいつ」

ユフィリアがジンのお尻に軽くキックを入れていた。ジンは避け

なかったが、なぜ蹴られたのか意味が分からない様子だった。

ジンの言う『準備』をするためにユフィリアは1人で ハーティ・ロード の集落を歩いてきた。そこに話しかけるのは霜村であった。

霜村：

「ユフィ！」

ユフィリア：

「……なあに？」

呼び止められて彼女は歩みを止める。霜村はごく自然にユフィリアを愛称で呼ぶようになっていた。

霜村：

「来てくれ。また手伝ってもらいたい仕事がある」

ユフィリア：

「……………」

少し、考えるような表情をした後で、イタズラっ子の笑顔で返事をする。

ユフィリア：

「えっとね、事務所にNGだって言われちゃったから、また今度ね？」

霜村：

「おいおい、急だな。少しぐらい大目に見て貰えないのか？こっちも困ってるんだぞ」

ユフィリア：

「事務所の社長がおつかないから、アハハ、ごめんね、しもぴー」
手を振りつつ、彼女は行ってしまった。後ろから弥生が近付いて霜村にコメントする。

弥生：

「あらら、フラれちゃったわね、しもぴー」

霜村：

「ふむ……」

回復力の飽和問題からヒーラーの増員が課題となっている。だが霜村の場合はユフィリアの様な美人を口説くことで無意識に箔を付けようとしている様に思えてならない。

考え事をしていた様子の霜村が口を開く。

霜村：

「……………悪くないな」

弥生：

「何が？」

霜村：

「しもぴー、がだ。卑猥な響きがあつてイイと思わんか？」

弥生：

（こいつ、本物の馬鹿だ……）

中身の無いヤツだと呆れてしまうのだが、まあ、器だけはそこそこ大きいかも？と思う弥生であった。

ジンとシュウトは、戦闘班が使っているという2番目に大きなテナントに入る。中ではさつき嬢の女性メンバーの他に、男性メンバーも数人がたむろしていた。こちらに気が付いた睦実がさっそくジンに食って掛かる。

睦実：

「来たか、オッサン！ またさっちゃんにちょっかいを出す気だな！？」

ジン：

「なんだ小娘、構って貰えなくて寂しかったか？」

睦実：

「アホ抜かせ！ がるるるる」

ジン：

「吠えんなよ。しょうがねえなあ、必殺！ シュウト」

シュウト：

「またですか？」

いい加減、ジンに突き飛ばされるのにも慣れてしまつ。抵抗すると威力が倍々になってしまいそうなので、ぶつかる時に威力を小さくするべく身構える。

睦実：

「甘い！ ナガトモ・シールド ッ！」

長瀬友：

「えええっ！？」

シュウト：

「ちよっ、マズいですって！」

睦実がそばにいた長瀬友を盾に使う。これは流石に冗談で済まな

い予感がした。背中を押そうとしているジンの手に思い切り体重を掛けて抵抗しようとシュウトは踏ん張ってみせた。

ジン：

「ふむ、そう来たか。よし！シュウトよ、ブチュっとして来いっ！」

睦実：

「なんと!?!」

長瀬友

「えう!?!」

シュウト：

「そんな、無理ですって!」

ジン：

「いいや、俺が許可するっ!……お前、空気読めよ。ほっぺでいいから適当にやってこいって」

シュウト：

「いやいやいや!」

睦実：

「ナガトモ、ここはやっぱり危険だから、あたしが引き受けるよ!」

長瀬友：

「ダメ!睦実ちゃんは私が守るんだから!」

ジン：

「さっ、行って来い。スーパー役得攻撃 シュウト・ファンネル
ッ!」

どんっ。と中途半端に突き飛ばされ、睦実達まで残り半分ぐらいの距離で立ち止まってしまふ。そのまま近付けずにいると、逆にジリジリと寄ってくる睦実と長瀬友。顔を引きつらせ、ゆっくりと後退をかけるシュウトだった。

荒くれ武闘家：

「うおおっ、ナガトモが……」

傷顔守護戦士：

「そうか、長瀬派だったな」

芝生守護戦士：

「やはり」『ただしイケメンに限る』んだろ、常考」

相槌暗殺者：

「イケメン限定だな」

荒くれ武闘家：

「何故だ！？ あんな子じゃないはずなのに！」

高貞守護戦士：

「そりゃ、あの子はヤンキーが嫌いだから」

荒くれ武闘家：

「俺は別にヤンキーでもないし、不良とかヤクザでもないぞ？」

坊や守護戦士：

「その、見た目が山賊っぽいというか」

傷顔守護戦士：

「荒くれてるっていうか」

荒くれ武闘家：

「そ、そうだったのか……」

芝生守護戦士：

「無残WWW」

そこまで広くないテントの中を影となって駆け抜けるシュウトは、奇怪な声を出す睦実と、顔の前でコブシを握ってピーカーブースタイルの長瀬友とに追いかけていた。直線距離が短いため全速は出せないものの、本気で逃げているシュウトだった。ところが女の執念によるものなのか、2人は本来の実力以上の力を出して追いか

けてくる。

ジンの近くを通った時に、足を引つ掛けるフリをされて体勢を崩してしまっていた。そのタイミングで長瀬友に「どーん！」と声に出しながらの体当たりをされる。もつれ合って倒れこむ際に下敷きにならないようにと咄嗟にかばう。抱きとめられた形の長瀬友。その期待に満ち満ちた眼差しを前に何も出来ずにいると、だんだんと悲しそうに表情が変化していく。梅干を食べた時のすっぱさの数十倍の気分になり、（えいやっ）とその頬にくちびるを押し当てたやわらかい。長瀬友の輝く笑顔に対し、睦実がくやしそうに地団駄を踏んだ。……離れた場所にいた荒くれ武闘家も撃沈している。

さつき：

「ところでその、……どのような御用ですか？」

ジン：

「どうした？ ほれ、ちゃんとしろって」

さつき：

「はい、ジン……殿」

ジン：

「うむっ」

照れくさそうにジンの名前を呼ぶさつき嬢に、睦実が鋭く反応する。

睦実：

「うむっ。じゃねーだろ、オッサン！ さっちゃんに何をした！」

さつき：

「大丈夫だから、睦実」

睦実：

「まさか、さっちゃん……無理矢理に？」

口元に手を当て、はわはわはわ、と大袈裟なりアクションでさつきの被害を確定させようとする。何も無ければいいハズなのに、睦実はまだだんと何かが無かったら困るような態度になっている。内心では既に安心しているからこそ、とれる態度であるう。

ジン：

「無理矢理とか、んなことせんわい！ 力尽くで無理矢理なんて気持ち良さそうじゃないだろうが。……そういうんじゃないかって、もつとこうアレだろ、追い詰められて自主的に差し出すことになり、嫌々だったハズが悔しいけれど段々と感じちゃう！？ 的な。その方が萌えるだろ！」

睦実：

「どこのクリームゾンだ！」

その時にユフィリアがニキータと石丸を連れて天幕に入って来た。人数比的に男臭かったテントの華やかさが一気に高まる。ユフィリアがジンの所にスタスタと近付く。

ユフィリア：

「連れてきたよ。これからどうするの？」

ジン：

「うむ、ご苦労。えー、では、これから皆さんに悪口を考えて貰います」

ニキータ：

「悪口？」

睦実：

「バトロワのネタだね」

シュウト：

「えつと何処の誰に対しての悪口を考えればいいんですか？」

ジン：

「あんまり限定したくはないんだが、基本的には Plant h
Wyaden かな。アキバとかでもいいぞ」

石丸：

「……レツテル貼りっスか？」

葉月：

「それで、これはどういうことですか？」

ざわつく天幕の中に、いつの間にか入って来ていた葉月がジンに
問いかける。数人が動いて葉月に場所を譲った。

ジン：

「俺って善人なもんで悪口とかって苦手なんだよね。だから助けを
借りようかと思って」

葉月：

「奇遇ですね。僕も苦手です」にっこり

睦実：

「実はあたしも苦手で……」

さつき：

「嘘はよくない」

数名の同意にも屈せず、自分の正しさを証明しようとする睦実だ
ったが、葉月が話し始めたので黙った。

葉月：

「悪口を考えて、何をするのです？」

ジン：

「ひとつ、暇してるであろうミニナミの連中を楽しませてやるうかと
思ってたな。デカイラッパを吹きたい」

石丸：

「情報戦っスか？ しかも真正面からの？」

葉月：

「……何が狙いです？」

ジン：

「さてね。誰かさんの金払いが悪いから、暇つぶしかな」

ニキータ：

「とりあえずはミニナミに噂を流すってことで、その内容を考える、
と」

さつき：

「私達は戦闘班です。潜入班は葉月の直轄なのですが……」

ジン：

「……この話、乗るだろ？」

不敵な笑いを見せるジン。葉月は真意を量りかねているようだった。

ジン：

「最終的な目標はミニナミのプレイヤー達に不信を根付かせて、分断
を図ることだ。その前段階として、まずは噂を流しやすくする下地
を作りたい」

石丸：

「方法はどうするつもりっスか？」

ジン：

「何でもアリでいいだろ」

石丸：

「噂話の場合、情報拡散閾値キャズムを超えるのは、そう容易では無いと思

われるっス」

睦実：

「うげっ、いきなり難しくなってきた……」

ユフィリア：

「ジンさん達は大体こうなんだよ」

シユウト：

「問題はメディアってことですか？」

ジン：

「この世界の場合、テレビやネットが無いことで、暇つぶしの方法は限られてしまうだろう。生産ギルドでもなきや、案外、頭は暇だろ？ そういう場合、噂話が大きな娯楽になる。何処其処で何があつたとかの話で持ちきりになり易いハズだ。だけど、本気で噂なんかを流そうとしてもテレビで連日報道し続けるぐらいの質や量を確保するのは難しい。酒場でちよつとした噂を流しても、知らない人間はまったく知らない、なんてことになっちまうだろうな」

葉月：

「かといって、同じ人間が同じ噂を流し続けるのも難しいのでは？ それこそ我々の現在の優位性である『存在を知られていない』という点を捨ててしまうことになるでしょう」

ジン：

「ひとつの優位性に拘ると何の進展も得られなくなる。優位性ってのはその時々で乗り換えて行くべきものだ。どんな優位性に乗り換えるかってのを考えるのが戦略であり、指揮官のセンスというものじゃないか？」

葉月：

「……つまり、情報的な優位を得るべきだと？」

ジン：

「どっちにしてもお前等は少数だ。それなら情報の上流に居る仕組みを持つべきじゃねーの？」

シュウト：

「噂話が広まりにくいとしたら、どうすればいいんですか？」

石丸：

「メディアを変えればいいってことなら、雑誌とかっスね」

ジン：

「いや、この場合は紙ペラ一枚で十分だろ。ミニミの冒険者が1万人だとして、500〜1000枚もばら撒くなりすれば十分じゃないかな」

ユフィリア：

「んと、高いところからバサーってやればいいの？」

ジン：

「捕まらなきゃ、そんな感じもありだな」

長瀬友：

「すみません、その、それは不自然ではありませんか？」

ジン：

「ととうと？」

長瀬友：

「紙をバラまいたりした場合、誰がこの噂を流そうとしているのか、みたいなことが気になると思うんです」

シュウト：

「確かに、そうなるでしょうね」

ジン：

「どう思うっ？」

石丸：

「そうっスね。謎のままにしてみましたっか、もっとキャラ付けをしてしまっかじゃないっスか」

ジン：

「どうでもいいと思われるのが一番悪いからな。煽るつもりなら、もっと謎っばくしてもいいな」

睦実：

「黄金 ットとか？」

芝生守護戦士：

「どこから出てきたwwwwww」

傷顔守護戦士：

「それなら謎の覆面怪人Zとか」

荒くれ武闘家：

「鋼の錬金玉すだれはどうだ？」

睦実：

「真面目に考えんか！」

高貞守護戦士：

「……それをお前が言うのか？」

ニキータ：

「つまり、予言者とかってことね」

ジン：

「そうだな。何とかの予言者みたいなキャラ付けで構わない」

葉月：

「どの位の頻度になりますか？」

ジン：

「紙が用意できるかどうかみたいなお部分もあるが、なるべく頻繁に

かな」

ユフィリア：

「毎週水曜日とか？」

ジン：

「そういう規則性はあった方が期待は高まるかもしれないな」

石丸：

「しかし、注目が集まるほど、ばら撒くのは難しくなって行くっス」

シュウト：

「……途中からばら撒かなくても良くなるんじゃないですか？」

ニキータ：

「どづいこと？」

シュウト：

「1〜2回目で話題になっていた場合、3回目は日にちを予定しておくと警備が厳しくなります」

ジン：

「だろうな」

シュウト：

「そのタイミングで、翌日に3回目の予言を見たという人物が現れたらどうです？」

葉月：

「それは、面白いですね……」

段々と葉月が乗り気になってくる手応えを感じていた。

さつき嬢：

「肝心の内容はどうするのですか？」

ジン：

「こういうのの基本的な要素みたいなのがあったよなあ？」

石丸：

「物語性、感情に訴えるもの、信頼性、具体性、意外性などと言われているっスね」

ユフィリア：

「ひとつかふたつ、具体的な例がないと考えられないよ？」

ジン：

「実は今、アキバからギルドが来ていて濡羽と何かの交渉したんだが、断られたらしい、とかだな。この場合、アキバからギルドが来ているのは事実だな。交渉とかはしてないが」

睦実：

「うそっ、そんなギルドが来てるの？」

ジン：

「無論、俺達のことだ。アキバから来てるだろ」

睦実：

「なんだ、そういうことか……」

ジン：

「結果、ミナミとアキバは戦争になるかもしれない。アキバは大軍でミナミを襲う計画があるんだが、そうなったらミナミに勝ち目はないだろう」

睦実：

「にやんだとう？」

石丸：

「アキバのプレイヤー人口が約15000。ミナミは9000程度。90レベルの冒険者 だこの割合はもう少し広がることになるっス」

さつき：

「そんな条件だけでアキバが勝つとは言い切れないでしょう。どこを戦場に設定するのか、補給がどうなるのかも重要です」

ジン：

「しかし、生産ギルドの規模でもアキバが有利だ。当然、装備品の充実度だって違ってくる。……みたいな風に議論を呼ぶようなことを言うのも一つの手だろうな。濡羽はアキバとの協力を断ってしまったので、アキバは戦争を計画しているのだとすれば、濡羽の責任ってことになる」

シュウト：

「随分と好戦的ですね、アキバ（苦笑）」

ジン：

「ありそうな話を大きくデッチ上げるのが基本だろ」

葉月：

「全部を語ってしまわずに、相手に言わせるのも有効ですね。」

傷顔守護戦士：

「ネットが炎上するのにも似ているな」

睦実：

「もう少し悪口っばいのはないの？」

ジン：

「これじゃ俺が全部考えてるじゃねーか。えっと、濡羽は金を湯水のように使って女王のような暮らしを堪能しているぞうだ。もう現実世界には帰還したくないと言い出しているらしい。反対したヤツがこの間1人消されたってな。……こんな感じで適当にログインしてなかったヤツの名前を入れておくとかだな」

睦実：

「ふっふ、よくまあ、そんなに悪口ばかりスラスラと出るもんだね？ 性格わるーい」

ジン：

「テンメ、それが狙いか」

高貞守護戦士：

「それでレツテル貼りするんなら、金満女王とか、下僕でハーレムみたいなのか」

芝生守護戦士：

「下僕になりたいファンが急増したりなWWW」

ジン：

「ユフィリア、例は出しただろ、何かないか？」

ユフィリア：

「えっと、えっと………鼻毛が出てるとか？」

余りに可愛らしいその発言に1/3が黙り込み、1/3が爆笑し、残りの1/3は失笑していた。

芝生守護戦士：

「鼻毛女王WWWWWWWWWWWWWWWWW致命傷WWWうえWWWうえWWW」

ユフィリア：

「ダメ？　じゃあ毛の処理が甘いとか、服のボタンを掛け違えてるとか、虫食い穴の服を着てるとか！」

ジン：

「あはははは！　お前も向いてねえわはははは！」

石丸：

「…………… 案外、悪くないんじゃないっすか？」

ジン：

「ハアハア…………… そうだな。少し話を盛ってやって、絶世の美人だが、鼻毛が出ているのに気付いていないとかつてのなら、本人的はキツいかもしれん。大悪人だの大きな悪口は我慢できても、小さいのは納得いかないかもな」

長瀬友：

「…………… 鏡を気にしちやいそうです」

シュウト：

「そういうえば、濡羽つて人は本当のところどんな人なんですか？」

葉月：

「調べてはいるんですが、本人を覚えている人間はいないですね。グラマラスな女性という噂はあるんですが、絶世の美女かどうかまでは……………」

ジン：

「絶世の美女じゃないんだつたら、絶世の美人とかつて煽れるだけ煽つとして、人前に出てきたトコでガツカリさせる手も使えるかもしれないんだけどな。ついでに美人とか自分で宣伝してたクセに！　とか笑いものにしたりな」

傷顔守護戦士：

「それは本当に美人だつたら使えない手だが」

ジン：

「そうだが、あくまでも美人だと認めない手もある。幻術を使うなんて卑怯だぞ、ぐらいまではイケる気がしないでもない」

荒くれ武闘家：

「アンタ、鬼だな」

ジン：

「そうか？ 知り合いに比べたら俺なんて初歩的なレベルだけど…」

…」

段々と雑談のようになって来ていて、幾つかのグループになって話あっていた。

葉月：

「レットルの定番と言えば、宗教なんかもありますね」

ニキータ：

「優秀なギルドを妄信していると言ったりできそうね」

さつき：

「それでは黒渦さんは熱狂的な信者というわけだな」

長瀬友：

「地味で暗いとか、友達いないとか……」

ユフィリア：

「私の彼氏に色目使ったとか、援交パパ10人いるとか……」

ジン：

「もういい、いいんだ。もうゴールしていいから!」

高貞守護戦士：

「何かミナミの劣等感を刺激するネタがあればいいんじゃないか？」

シュウト：

「アキバの方が優れているものというのと、そういえば最近、牛井の店ができたって」

坊や守護戦士：

「それってアキバでは牛井が食べられるってこと？」

すっかりと乗り気になっていた葉月は、さっそくミナミで噂話を流すプリテストを行うことを宣言した。それもさっそく明日の朝から行うという。

葉月：

「夕食後にもう少しシナリオを詰めましょう。明日は早朝から出発して現地で打ち合わせを」

ジン：

「決めたら速いな。ミナミの中には入れないが、俺たちも参加させてくれ」

さつき：

「ペーパーのバラ撒きは紙の素材を準備するのだな」

葉月：

「購入できる分と、付近で入手できるもので都合を付けましょう」

ジン：

「すまんが、明日の朝練は無しだな」

さつき：

「わかりました」

夕食の仕度が整ったというので、全員で移動する。

何かが始まる予感に小学校の遠足前のような雰囲気生まれていた。楽しみで眠れないような感覚。閉塞的な状況を全員で打破しようとしたことで、心がひとつになった気分だった。

ジン：

「なんとか形になりそうだな」

シュウト：

「そういえば、こづいづのって葵さんに協力して貰えばいいんじゃない」

ないですか？」

ジン：

「アイツに頼めれば楽っちゃあ楽なんだが、今回は出番なしだ」
シュウト：

「それはまた、どうしてですか？」

石丸：

「……目的っスね？」

ジン：

「まあな。アイツに狙いを悟られると不味い。不用意な破壊や混乱を招くからな」

シュウト：

「いったい何の話をしているんですか？」

ジン：

「まだ確証がないから、秘密だ」

思わず石丸の表情を伺うシュウトだったが、石丸も聞かされては
いないようだ。

少し浮かれ気味のユフィリアの笑い声を聞きながら、歩く速度を
速めるシュウト達であった。

草木も眠る丑三つ時

篝火が焚かれた。しかしそこに人影はない。また、たいまつが燃
えているのでは無かった。

カたシはヤ……

燃えていたのは、鬼火。人ならざるものの魂のかけら、怨念の焰である。

えかせ二くりに……

妖しい光に照らされたのは壮麗なる大内裏。宮殿の姿をした城だった。

タメルさケ……

低く地の底から響く音が声のように、何かの呪文のように聞こえる。

てエひ……

大内裏の内から燃えるような、凍てつくような波動が繰り返し発せられていた

アしエひ……

建物の大きさからはありえないほど大勢の気配が伝わってくる。

われしコにケリ……

それは忌わしき儀式のようでもあった。今にも終わろうとしていくそれは……

内からゆっくりと門が開かれる。誰もいない。その暗闇の内をう

かがい知ることできない。

ぺたり。

ぺたり、ぺたり。

ぺたり、ぺたり、ぺたり。

暗闇からゆっくりと現れた『足』が段々と増えてゆく。それは素足の子供のものにも思える。

と、篝火の近くを通った『それら』の姿が垣間見えた。異形のモノであった。

人の棲まぬ中央街路を練り歩く異形の群れは、その数をいつまでも増やし続けていた。

早朝、シュウト達は既にミナミ近くのゾーンに一時的な拠点を構えていた。水梨やキサラギといった潜入班のメンバーに加えて葉月が指揮を執ることになっている。シュウト達はジンと石丸の3人だったが、レイシンが食事を作ったところでユフィリア達が合流することになっていた。

慣れたもので、ジンのミニマップが無くとも、水梨たちはミナミの冒険者に見付からないように手際よくルートを決めている。テナの設営などの準備が終わったところなので、水梨と交替でミナミ

に入っていた潜入班のメンバーと合流し、口頭で噂話を流す打ち合わせや、予言ペーパーの配布準備を行うことになっている。

そもそも大阪もまた、東京とおなじくメガシティと呼ばれる都市化した地域である。東京にとってのアキバがほんの一部の地域に過ぎないように、大阪にとつてのミナミもまた僅かな面積に再現されたプレイヤータウンに過ぎない。周辺に広がる区域の大半には誰も住んではおらず、街並みの特徴を活かした形でゾーンが形成されている。

元々関東に住んでいるシュウトには大阪周辺の初歩的な地理的知識も持つてはいない。実際のところ関東でも読めない地名は多かりたりするのだが、住んでいる近くの名前ならば常識的に知っているし、他県であつても聞き覚えがあることは多い。ところが、大学に入って地方の人間と知り合いになると、地名が変だ、読めないといった話題になるもので、そこで始めて自分の常識を疑うことが出来るようになるのを知った。このように、住んでいる内に最低限の地理的知識を得ているものだし、それがアドバンテージになっているものだろう。

しかし、ここはミナミであり、完全なアウエーである。一応は発案者兼アドバイザーという形で同行していたジンにしても、手持ち無沙汰なのは否めないようだ。下手に散策に出れば 冒険者 と出くわし兼ねない。……もちろんシュウト一人ならば見付からずにやり過ごすことは十分に可能ではあつたが、余計なことをして遊ばない気分は幼稚なものとして押し殺してしまうべきシチュエーションであつた。

と、頭の中で念話の呼び出しコールが鳴った。

シュウト：

「ジンさん！」

ジン：

「ん、どうかしたかー？」

シュウト：

「その、ニキータからの連絡で、ユフィリアが倒れたって言うんですが」

ジン：

「は？……倒れた？」

シュウト：

「どうも向こうも慌てているみたいで、状況がよく分からないんですが」

ジン：

「なんか変なモンでも食ったのかよ、ったく」

ジンが代わりにニキータの方に念話を掛けていた。シュウトは心配して近付いて来た石丸に状況の説明を繰り返していた。

シュウト：

「何か、魔物がどうのって言うていたみたいなんですが」

石丸：

「倒れる前に、っスか？」

困惑するシュウトに、思案顔の石丸。要するに一度、集落に戻るのか、ニキータ達に任せても良いのかどうかを判断するのだろう。……ジンの念話が終了した。

ジン：

「んー、参ったな」

シュウト：

「どうでしたか？」

ジン：

「状況的にはミニマップで魔物を感知して、それで倒れたらしい」

シュウト：

「そんなことがあるんですか？」

ジン：

「まあ、不慣れな内はなんかの切っ掛けで広範囲の情報を得ちゃまって、インプット過多になることはあるんだが」

石丸：

「ジンさんの方にその魔物の反応はあるんすか？」

ジン：

「ないな。もつと遠くなんだろう」

シュウト

「どうしますか？ 戻った方がいいんですか？」

ジン：

「まあ、さて。今から確認すつから。基本的に意識が無くなったのなら安全装置が働いたってことだろうから、しばらく寝てれば目が覚めるハズだ。問題は魔物の群れかもしれん。念のために確認しておく。ミニマップのブーストは疲れるから嫌なんだが……」

ジン：

「ウオオオオ!!」

呼吸を整えたジンが裂帛わひつぱくの気合を発すると、気の爆流が噴き出した。叩かれるような衝撃にシュウトは咄嗟にヒジで顔をかばってしまっている。そのままジンは掛け声と共に更に次元を引き上げていった。外に押し出された気がジンに向かって戻ろうするかのよう

殺到し、痛いほどに密度らしくものが高まっていくではないか。そのままジンの姿を見続けていると次第に透き通るような表情に変化していくのが分かる。シュウトにはその到達点は計り知れない。ただ美しいとだけ感じていた。

数秒の後、頭をふら付かせながらジンはヒザを付いていた。

ジン：

「確かに、来てるな。数は数えられなかったが、1千や2千じゃきかない。ミナミと同じの規模の大集団つてところか」

シュウト：

「そんなっ……」

ミナミと同じということは、1万規模ということになる。モンスターとしては前代未聞の大集団ということになるだろう。

石丸：

「方角はどっちっスか？」

ジン：

「向こうの方、かなり距離はあったと思う」

慌てた様子で地図を取り出そうとする石丸。付近にはジン達の騒ぎに気が付いたハーティ・ロードのメンバーが様子を見に来ていた。

ジン：

「やっべ……」

シュウト：

「ジンさん……?」

ジン：

「ワリ、頑張り過ぎた。ちっとばっかし寝るわ。石丸、しばらく……たの、む……………」

石丸：
「了解っス」

あつさりと倒れたジンは、はやくも寝息を立てていた。ジンの体をそつと横たえると、石丸の作業を覗き込む。ジンの指し示した方向をゆっくりと追いかけていくと、とある一点に辿り付く。

石丸：

「ハイアンの呪禁都……………」
シュウト：

「ということは、もしかして」

石丸：
「この時期から考えれば、スザクモンの鬼祭りっスね」

ゾツと身震いしてしまう。ジンの言うとおりであるのならば、1万近いモンスターの大量が移動していることになる。

石丸：

「…………この可能性は考慮していなかったっスね」
シュウト：

「これから、どうしますか？」

石丸：
「まずは事実を確認するところからっス」

そういつと石丸は葉月と交渉し、居残り組から偵察隊を出すように取り付けてしまった。

作戦行動は一時中断となり、偵察の結果を待つ。

焦げるような焦燥の中、シュウトは自分に何が出来るかを考え続けていた。

35 暗夜行路（後書き）

志賀直哉とはまるで関係のないタイトルです。

いつもお世話になっております>（――）<

話の演出だとかバランス的にもいろいろとあるんですが、こんなバランスでやっております。

いつも通り、見直しは後回しで更新だけ先にさせていただいております。連休だとなんだかんだとサボリ気味になりますね。>（――）

（――）< 申し訳ございません。

36 アカウンタビリティ)

閲覧には注意をお願いします。

内容の一部が原作小説ログ・ホライズンのネタバレとなる可能性があります。
あります。

これは橙乃ままれ先生からお話を伺った訳でも、許可を頂いたわけでもありません。

個人の考察を元に展開を予想して書きました。(予想が外れている可能性もあります)

閲覧は自己判断(自己責任?)でお願い致します。 > | | <

(宇礼儀いこあ)

シュウト:

「ミナミに警告を発して下さい」

強い口調のシュウトにひるんだというわけでもないのだろう。葉月は瞬間的に目を逸らすと、ジンに向かって条件を提示した。

葉月:

「いいでしょう。ですが、その前に貴方の理由を説明してください」

ジン:

「だがなあ……」

葉月：

「そのくらいは、いいでしょっ?」

1時間前

睦実：

「やっぱり、あたしも一緒に行くよ」

睦実が同行を申し出る。一度、固辞されてはいたのだが、やはりヒーラー無しで行動させるわけにはいかないと思い直してのことだ。

ふーみん：

「だいじょぶだって。ユフィちゃんに付いててあげなよ。ね?」

長瀬友：

「では、行つてきます」

元気な 吟遊詩人 ふーみんが倒れたユフィリアを気遣う。これみよがしな魔女ルックの長瀬友が、黒のトンがり帽子を触りながら出発の挨拶をする。同行する荒くれ武闘家は必要以上に張り切っていた。

さつき：

「気をつけてな?」

急遽、葉月からのリクエストで偵察に出すことになったのだが、いかにも人数を分散させ過ぎている。少数での偵察だからといっ

ても、そうそう危険な目には遭うわけではないのだが、全てに万一を考えての予備戦力を用意できるはずもない。せめても、というつもりもないのだが、戦闘班の隊長として見送るぐらいの手間をさつき嬢は惜しまなかった。仲間達が馬を奔らせて出ていく。彼女はしばらくの間、その場で見送っていた。

いらいらした様子の水梨が周囲を歩いていたが、石丸は「偵察隊の連絡を待つのが最優先」だと主張して、その名の通り、石になつたように動かなかつた。これに葉月は驚き、何箇所かに念話で確認を取っていた。その結果、ミナミ内部でもまだ噂になつていないことが分かつている。石丸は「スザクモンの鬼祭り」の可能性があると話して聞かせていたが、ならばどうやってその情報を得たのかと疑問に思っているらしい。

ジンとユフィリアがダウンしたこの1時間の間、シュウト達に出来ることは殆どなかった。石丸は事実関係の確認を優先し「まず共通認識を得るっス」と言っただけ、座り込みをして動かない。

人間の組織行動というものは、実際のところ十分な共通認識を得てしまえば半分以上終わったようなものだからだ。共通認識の確保を疎かにし、無闇に行動の優先順位を高めた場合、誤解や勘違いが乱発されるようになる。組織内部での方向性の違いは対立に発展するケースもあるのだ。……逆に共通認識を得ることに成功した場合には、対立を起こし難くなり、加えて組織構成員のモチベーションが高まるとされている。

一方のシュウトは考え続けていた。今回の件が「スザクモンの鬼

祭り だとした場合（誰も挑戦しなかったか何かで）クエストに失敗したのだと考えられる。古くからあるレイドコンテンツなので、24人もいれば十分に突破できるはずだったのだが、今ではクエストの失敗によってステージが上がリ、大規模集団戦闘に移行しているのだらう。それでも普通に考えたらレギオンレイド1部隊もあれば十分に突破できなければならなかった。ジンが口にしたミナミと同クラスの大集団というのは余りにも行き過ぎた数である。

シュウト：

（ サファギンの豪族 の時も妙に数が増えていたみたいだけど…… ）

シュウトが気になっているのは、この世界全体の人数が増えている可能性だった。大地人の数も3倍以上になっているのだが、魔物達は3倍どころではない。ゲームバランスというクビキから解放されたことで、まるで際限なく増加しているような気がしてくる。

シュウト：

（何が起っているのだろうか…… ）

その疑問に答えられる人間は、もしかしたらこの世界にはいないのかもしれない。

葉月：

「もしもし…… ああ。本当か？…… 分かった。そのまま続けてくれ。そっちで…… 」

葉月に念話が掛かってきた。その様子に石丸が腰を上げる。

石丸：

「どっつつか？」

葉月：

「……おっしやっていた通りです。数の把握や種族の特定はまだですが、モンスターの大量団が確認できました。千や二千ではないそうです。広域に分散しているために数えるのは難しいと……」

水梨：

「マジだったのかよ……」

事実の重みと、問題の大きさから沈黙が生まれる。全数の把握はまだできていないが、もはやハーティ・ロードの一部隊で相手できる数では無かった。

相手が仮にゴブリンのようなレベル差のある相手だったとしても、1人の冒険者が100体を相手できるものではない。せいぜい10〜20体といったところだろう。従って、1万のゴブリンを相手にする場合、冒険者側も1000人規模の軍隊行動を起こさなければならぬのだ。そして、そんな人数動員が可能なのは、付近ではミナミを置いて他になかった。

このように自分達の処理限界を大きく超えている場合、責任感を失って無関係だと考えるようになってしまう。一概にそれが悪いことだとは言えないのだが、往々に客観的な立場になると失われる視点もあるものだった。

葉月：

「とりあえず、本体に合流しましょう」

石丸：

「それは何故っすか？」

葉月：

「何故と言われても、我々がこんな問題に対処できるわけがありません。被害が及ばないように一時的に退避しておくべきでしょう」

石丸：
「ここからの数手はよく吟味するべきです。状況がどう変化するかを考え……」

葉月：
「いえ、それには及びません。合流してからでも避難する場所を決める時間ぐらいはあるでしょう」

シュウト：
「ちよつと待つてください。ミナミに警告を出すべきなのでは？」

水梨：
「何を言っただやがる？」

葉月：
「貴方の考えているように、結局はミナミが対処することになるでしょう」

シュウト：
「それなら」

葉月：
「準備する時間を与えてやるメリットがありますか？　むしろ我々の立場からすれば混乱して欲しいぐらいなのですよ？」

取り付く島もなく葉月は撤退の準備を始める。その根底にあるのは不安だった。このまま行けばミナミの周辺は確実に戦場になる。そうなればここにいる小集団では殺される他に選択肢がない。仲間との合流を急がなければ、最悪の場合、ミナミの　冒険者　とモンスターとに挟み撃ちにされかねない状況にいた。

この状況をどうしたものか？と考えるシュウトだったが、強引にでも相手に話を聞かせる手が思い浮かばなかった。葉月と対等な立場に立てていないことが最大の原因だと、この段階ではまだ気が

付いていない。

この事件で一番の被害をこうむるのは、一般の 大地人 なのだ。Plant hwyaden に協力している貴族達ではなく、この地域に住んで農業や畜産で生計を立てている 大地人 なのだ。先日トマトを譲ってくれたようなミナミに向かう商人たちも巻き込まれてしまうだろう。それ以外にもどこに小さな集落があるかも分からないのだ。どちらにしてもミナミが対処するしかないのだから、これは早ければ早いほど良い。無駄な犠牲を出すのは本当に無駄でしかないのだから。

その時、ふらりと歩いてくる人物がいた。

ジン：

「……シュウト、状況はどうなってる？」

眠りから覚めたジンが体を引きずるような調子で歩いて来ていた。まるで深酒して目覚めたばかりの二日酔いサラリーマンの態である。

シュウト：

「はい、どうやら スザクモンの鬼祭り の様です」

シュウトも余計な挨拶は抜きにして本題に入る。大丈夫そうに見えたし、これから大丈夫であってもらわなければ困るのだ。石丸もジンのところにパツと駆け寄ってくる。

石丸：

「地図から割り出した方角に ハイアンの呪禁都 があったことから推測っス。この1時間で偵察隊を出して敵影を確認したところ

まで終わっているっス」

シュウト：

「今は葉月さんが仲間と合流しようとしているところですよ」

ジン：

「スザクモンかよ……………」

予想よりも深刻な顔で黙り込むジンだった。その様子に気が付いたのだらう、葉月が軽い嫌味を言うために近付いてくる。これまでの復讐もあるのかもしれない。なかった。

葉月：

「これはこれは、今までどちらにいらっしやったのです？ 我々はもう撤退しなければならぬのですが？」

ジン：

「だろうな。残念ながら、間に合わなかった……………」

葉月：

「なんの話でしょう？」

ジンの思わせぶりな口調に怪訝な顔をする葉月。

ジン：

「すまんが、噂話の件は無しだ。部下の口止めを徹底してくれ。今、下手に動くわけには行かない」

葉月：

「それは一体…………？」

ジン：

「普通に考えて、この状況をどうにかできるのはミナミだけだろうとなれば、この困難を乗り切ることでもミナミの心は一つになってしまはずだ。下手なことを吹き込もうにも時期が悪い。これが終わった後、戦勝モードの浮かれ気分ですべておじゃんになっちゃうハズ

だからな」

葉月：

「……………たしかに、ミナミがこの戦いに勝てればそうなるでしょうね」

ジンの言葉に刺激されたのか、葉月が思案顔になって言葉を返していた。

ミナミがこの戦いに勝つかどうかは、確かにまだ未確定ではあった。しかし、大地人 貴族との繋がりからすれば、濡羽は泣きつかれるか何かして戦いに出ることになり、たつぷりと貸しを増やすことができるはずだった。

戦いになったとして、ミナミの 冒険者 が負けるとは思えない。どれだけ連携が拙かったとしても、総戦力では比べ物にならないからだ。たとえ死んだところで、大神殿からもう一度出撃すればいいだけである。

仮に死なないという前提の 冒険者 同士の戦争を考えてみるとすると、それは陣地の奪い合いという形式になると考えられる。アキバとミナミとが戦争になったというケースであれば、 冒険者 は死んでも大神殿で復活できるため、死んだ場合には出発した街にまで強制的に後退させられることになるだろう。つまり、復活してから戻って来るまでの間に支配する陣地を増やすという行動を繰り返すのが基本的なゲームになるのだ。また、 冒険者 は街に入っ てしまえば復活のポイントが上書きされる。このため、『街中への侵入を阻止』するのがセオリーになるのが分かる。

この時の問題は最終的な勝利の難しさにある。単純化してアキバの戦力がミナミの2倍あるとした場合、アキバ側が連戦連勝して支

配陣地を増やしていくことになるのだが、ミナミに近付くほどにミナミからの再出陣が速くなってくる。一方でアキバ側は、前線が遠くなっていくことで、戦闘被害者の復帰が遅くなってしまふのだ。すると戦力に応じた割合で支配陣地の割合・線引きが決定しやすくなると思われる。

ここでアキバ・ミナミの間に大神殿の在る街が一つあると仮定してみよう。すると、そこを中継地点にできるようになるため、街を先に奪った側が一方的に有利になるのが分かる。こうなってくると今度は相手を陣地から追い出す方法が問題になってくる。アキバ、もしくはミナミの兵士が相手陣営の 冒険者 をその街から追い出すことが出来れば、一端は勝利できることになるからだ。

話を今回のケースに戻すと、相手はモンスターであることからミナミを乗っ取ることなどは考えなくてよくなる。このため単純な意味では負けようがないとも言えるのだ。

この他に考慮しなければならぬのは生活基盤インフラの破壊についてである。新宿に相当する地点に対してベヒモスが行ったような破壊が行われれば、物理的に人が住めなくなる可能性も出てくる。その他にも農業に携わる 大地人 が死んでいなくなってしまえば、ミナミに供給される米や野菜といった農作物が得られなくなってしまうだろう。たとえ 大地人 達がモンスターから避難できたとしても、森林や農地が破壊されてしまえば、似たような効果をもたらすことになる。

ここまでが大まかにシュウトの考えていることだった。今はジンが戻ってきたことで話が通し易くなっているように思える。

ジン：

「撤退するにしても、あの集落じゃ戦いに巻き込まれるんじゃないか？」

葉月：

「それは合流してから霜村と協議します」

ジン：

「避難するにしたって、しばらくミナミ周辺からは離れることになるだろ。コウベよりも西か、山を越えて北かって話なら、今すべきことは食料だの準備なんじゃねーの？協議してからじゃ間に合わないだろ。向こうに残ってる人間で移動準備をさせながら、こっちで仕入れりゃいい」

葉月：

「確かに、しばらくミナミから仕入れるのは難しくなりそうですね……」

何かを悩んでいる様子の葉月にシュウトが言葉を掛ける。

シュウト：

「ミナミに警告を発して下さい」

水梨：

「さっきから何なんだ、相手に塩を送れってのかよ？」

黙っていた水梨が強く反応して言葉を挟んでくるが、構わずに続ける。ジンはニヤニヤと笑っているのみだった。

シュウト：

「敵とか味方とかじゃなくて、まずは一般の 大地人 への被害を小さくするべきでしょう」

葉月：

「そんなことですか？しかし、我々が撤退するのにも時間が必要ですよ。それこそ食料を仕入れたりする必要もあるなら尚のことですよ」

シュウト：

「その食料供給を支えているのはこの地域の 大地人 達ではないですか」

葉月：

「確かにそうです。一方でミナミの食料事情が悪化すれば、離反者だつて出易くなってくるでしょう?」

シュウト：

「語るに落ちてますよ。やはり濡羽に一矢報いることさえ出来れば、貴方がたはミナミがどうなつてもいいんですね」

強い口調のシュウトにひるんだというわけでもないのだろう。葉月は瞬間的に目を逸らすと、ジンに向かって条件を提示した。

葉月：

「いいでしょう。ですが、その前に説明していただきたい」

ジン：

「何を?」

葉月：

「どうして急に手伝う気になつたのですか? いえ、貴方は何を知つたのですか?」

ジン：

「いやあ、はっはっは。単なる暇つぶしかもよ?」

葉月：

「無駄な事は止めませんか? 今は時間が一番貴重なはずです。……そのぐらいのサービスをしてくれてもいいでしょう?」

葉月に人払いをさせると、ジンは石丸を連れて天幕の中に入ろうとした。天幕の入り口に手を掛けたところで振り向き、シュウトに声を掛ける。

ジン：

「正直、お前には聞かせたくはない。対外交渉で使えなくなるかもしれないからだ」

シュウト：

「……………」

ジン：

「この話はちょっとばかり重たいかもしれないぞ？ 華やかな表の世界には出られなくなるかもしれない。それでも…………聞きたいか？」

シュウト：

「はい」

急な脅しに緊張するが、好奇心が優ったのかもしれない。いや、きつとそれは違う。

ジンはさつと天幕の入り口を広げると、中に入るように示した。それはこの人へと続く道への入り口に違いなかった。

葉月：

「時間がありません。始めましょう。」

ジン：

「うーむ、本当は確証がない話なんだけどさ。名探偵だったら話さないレベルっつーか」

葉月：

「前置きはいいりませんから、早く聞かせてください」

ジン：

「んーと、実はさ……………」

話は気軽な口調で始まった。そのために意味を掴むことができない。人間は準備の出来ていない物事を知ること無意識に拒絶する。何の話をしているのかシュウトにもさっぱり意味が分からなかった。

葉月：

「いったい何の話をしているのですか？」

ジン：

「もう1回言うと、だ。実は、Plant hwyadenの目的は現実世界への帰還を阻止することだと思っただよ」

石丸：

「……………本当っすか？」

シュウト：

「えっと、それがどうかしたんでしょうか？」

ジン：

「俺はホラ、現実世界に帰還しようと思ってるわけじゃん？ だからそれを邪魔する相手は『敵』ってことになるだろ？」

シュウト：

「ええ、まあ……………」

葉月：

「アレですか？ 昨日話していたような、濡羽が贅沢し過ぎて帰りたくないだとかの話ですか？」

確かに先日はそういう話しをしていた。ではジンの目的とは何だったのか？

シュウト：

「じゃあ、今回やろうとした噂話って、現実世界への帰還を妨害するのを妨害するためだったとか、そういう話だったんですか？」

ジン：

「そうだよ」

石丸：

「……………」

石丸が沈黙する。葉月はくだらない話を聞かされたものと呆れ顔をしていた。

シュウト：

「もう少し、分かりやすく説明して貰えませんか？」

石丸：

「……………問題は、どうやって現実世界への帰還を阻止するか、という部分っスね？」

ジン：

「その通り。もし、自分が現実世界に帰還したくないとした場合、どうやる？」

石丸：

「仮説思考っスね？」

葉月：

「そんなのは意味のない議論でしょう」

ジン：

「なぜ？」

葉月：

「この世界に閉じ込められた 冒険者 の『誰か』がこの問題を解決してしまうかもしれないからです。それこそ、ノウアスフィアの開墾 が……………」

ジン：

「それだ。続けてみる」

言いかけた言葉の意味に気付いたらしき葉月の顔色が変わる。ジ

ンは先を促がした。

葉月：

「ノウアスファイアの開墾 が、日本にしか適用されてでもない限りは、防ぎようがない」

シュウト：

「まさか……………」

ジン：

「そのまさかだ。もしも Plant hwyaden が日本を支配できたとすると、現実世界への帰還の芽を摘み取ることが出来てしまっつてわけだ」

石丸：

「……………時差っスね」

シュウト：

「この世界にいる全員が、帰れなくなる……………」

全身に鳥肌が立った。衝撃こそ小さかったが、最大級の悪寒に襲われる。

確認こそされていないが、ノウアスファイアの開墾 が解禁されるまでに時差があるのは間違いなさそうに思える。世界の裏側ではまだ1日前の段階なのだ。

ジン：

「いやあ、こんなこと考えて本気でミナミまで手に入れちまうだなんて、天才の仕業だろうなあ。こういうことを計画する敵は、怖いぞ？」

シュウト：

「敵、なんですかね？」

ジン：

「ああ。敵だな」

この話を聞くまでは、もしかすると濡羽はミナミを平和裏に統治するために悪役を選んだ善人という可能性もあったのだ。それがたった一つの要素が加わることでひっくり返ってしまっていた。

葉月：

「まだ、そうと決まったわけではないでしょう？」

石丸：

「そうっスね。しかし、これで説明が付く部分も多いっス。ミナミの恐怖支配やアキバとの協力を拒んでいる部分などとは矛盾していないっス」

ジン：

「どちらにしても、この先の行動次第だろうな。ナカスを攻め落とそうとするのかどうか。そうすればアキバ、ススキノを支配しようとして動き出すだろう。……もしかしたら、積極的に現実世界への帰還方法を探そうとする可能性もあるんだけどな」

シュウト：

「その場合はどうなるんですか？」

ジン：

「そりゃ、最後の最後でその手段を潰しちまえば、もう帰れなくなるんだろ？ 女王の立場ってそうやって使うのに便利だしな」

正直に言って、頭がまだついていかなかった。場の雰囲気が悪くなくなってしまったのでジンは明るく責任を丸投げする。

ジン：

「まあ、この問題は俺達がどうにか出来るスケールの話じゃなくなっちゃってる。アキバの 円卓会議 の連中がどうにかするしかねーべ。……ダメなら、最後に俺がちよちよと何とかしてもい

「し」

最後に何か付け足した気もしたが、シュウトはその決意には気付くことができなかった。

どちらにせよ、その時にはジンもそれどころではなくなっていたのではあるが。

葉月：

「……何か、何かこの機に乗じることが出来ないのでしょうか？」

ジン：

「無駄だな。さっきも言ったが、この事件でミナミは纏まる。分裂
スザクモン
工作している時間は無いぞ」

葉月：

「しかし……」

ジン：

「ここはもう負けだ。きつぱりと諦めて、次のことを考えるんだな」

見開いた目を隠すように、葉月は手で顔を押しさえていた。ぶつとんだ現実に思考が追いついていかないのは彼も同じなのだろう。

シュウト：

「ジンさんは、どうするつもりだったんですか？」

ジン：

「んー、噂話の方が軌道に乗ったら、この話と一緒に葉月に買って貰おうかと思ってたんだよ」

石丸：

「……アイデアを売るつもりだったんスか？」

ジン：

「なんか、フランチャイズっぽいだろ？」

葉月：

「…………どこまでもお金なんですね？」

ジン：

「まーな？ タダ働きは散々してきたし、もう飽きたのさ。そういうのは二十歳未満の主人公が苦勞してやるべきものだろう？」

ジンはいい笑顔でにっかりと笑う。言葉とは裏腹な、少年の笑みだった。

ジン：

「実際、『この世界は樂園だ！ 現実に帰る必要はない！』みたいな洗脳が始まったりしても対抗できる様にしときたかつただけだなあ」

葉月：

「……………この後、ミナミはナカスへと侵攻するんですね？」

ジン：

「たぶんな」

葉月：

「わかりました。…………ミナミに警告を出しましょう。ただし、我々が撤退するための物資を確保してからです。そのぐらいの時間的猶予はあつてしかるべきでしょう？」

シュウト：

「……………そうなつてしまつてしょうね」

シュウトとしては焦つてしまふのだが、仕方が無い部分もあると呑むしかなかった。

ここからは慌ただしく仕事に取り掛かることになった。葉月は霜村と連絡をとつて撤収の準備を始める。水梨やキサラギ、その他にもミナミに潜入していた仲間達と手分けして、当面の物資を確保して回る。街中での活動はシュウト達には手伝えないため、街の外で

物資を受け取ったり、PKやモンスターに教われないようにとサポートに回った。

その時、更に事件が起こる。

偵察に出ていた長瀬友やふーみんの一行は、「これ以上は近付くことが出来ない」と判断して偵察の続行を断念していた。魔物本隊との距離はまだ随分あるのだが、周囲のモンスターまでもが活性化しているのか、襲われる回数が増えていた。集落に戻る途中ではあったが、今も戦闘の最中にいた。

芝生守護戦士：

「下がれ！このままじゃ持たなくなる！！」

亜人間とダイアウルフの混成部隊だった。馬に乗っているところを襲われたため、最初から泥仕合の様相を呈していた。ミニマップが無いため不意打ちへの対処は難しかった。

傷顔守護戦士：

「くそっ！こんなところまで……………長瀬、やめろ！」

長瀬友：

「もう一撃します！」

長瀬友の動きに気がついた傷顔守護戦士は制止をかけたが、止まらずに詠唱を開始してしまっていた。撤退するためにも 妖術師

の彼女が範囲攻撃呪文を使う方が有利になるという判断からだ。
妖術師 はヘイト値を集め易いのだが、相手とのレベル差があるため、決まれば大きい。難しいタイミングだった。

芝生守護戦士：

「そこ、抜かれちまうぞ！」

荒くれ武闘家：

「長瀬！ むう、間に合わん」

長瀬友：

「ヒッ」

アイコン入力による自動的な呪文詠唱の途中のため、長瀬友になす術はない。呪文に影響しない範囲の微かな悲鳴が漏れるのみ。ダイアウルフの攻撃であればレベル差からそこまで大きな被害とはならないのだが、魔法攻撃職の防御性能は90レベルといっても守護戦士 達から見れば紙に等しい。何よりも後衛の女性が野生の獣に襲われることに慣れるのは難しい。

ふーみん：

「このう！」

吟遊詩人 のふーみんが長瀬友を襲おうとしていた獣の前に立ち塞がった。武器を振りまわしたのだが、そのままダイアウルフに噛み付かれてしまう。その背後から亜人間に次々と武器を突き刺されてゆく。

長瀬友：

「チエイン・エクスプロージョン！」

ワンテンポ遅れて長瀬友の呪文が完成する。次々と炸裂していく魔法の火球が周囲をオレンジの炎と黒煙とに染め抜いた。

長瀬友：

「ふーみんな！ふーみんな！」

仲間達がふーみんなを襲っていた魔物達にトドメを刺すのだが、ふーみんなは無言で膝を付いていた。そのまま危険なスピードで頭を地面に打ち付ける。糸の切れた人形そのものの動きだった。

長瀬友：

「やだっ、ふーみんな？……………ふーちゃん！」

傷顔守護戦士：

「落ち着け、長瀬。もう死んでる」

芝生守護戦士：

「まだ来るぞ！ 後退しないとさすがに不味い」

荒くれ武闘家：

「うおおお！」

荒くれ武闘家が自己回復の特技を使う。

荒くれ武闘家：

「よしっ。これで俺がメインを張ればしばらくはもつだろう」

芝生守護戦士：

「お前、なんのつもりだ？」

荒くれ武闘家：

「ナガトモ、ふーのアイテムを拾ってやれ。死体が消えるまでは俺達がここを死守する」

傷顔守護戦士：

「そうだな……。死体とは言っても魔物に食わせるのは忍びない」

長瀬友：

「みなさん……。ありがとう」

芝生守護戦士：

「アホ杉www意味ねえwww……。……。だけど、そういう馬鹿は嫌いじゃないぜ」

死んだふーみんは、しばらくすればミナミの大神殿で復活することになる。ふーみんは潜入班ではないため、そのギルドタグはハーティ・ロードのものだ。ミナミの街中にある大神殿から、誰にも見咎められずに外に出ることは難しいだろう。しかし、今ならばミナミのすぐ外に葉月が潜入班の仲間を従えて待機している。それが今は一筋の希望のように思われた。

葉月：

「参りましたね。偵察に出ていたふーみんさんが死亡したそうです」

水梨：

「俺が助けに行く！」

すぐさま水梨が立ち上がった。誤解されやすいのではあるが、水梨は仲間思いで義理堅い性格をしている。ぶっきらぼうで口も悪いため、仲間からは敬遠されているし、それを本人も理解している。それでも仲間のためならば真っ先に駆けつけようとする熱さが彼にはあった。要は不器用で照れ屋なのだが、だからといって良い人間

と断言することはできない。その口の悪さから得ている利益があるのも事実だからだ。彼を恐れて従う人間もいる。その人間関係を切れないが故の悪評は甘んじて受け入れるべきだと本人も自覚していた。

キサラギ：

「俺も行くぞ」

葉月：

「いいでしょう。2人に行ってもらいます。こちらとしても、これ以上の人数は割けませんしね」

キサラギはふーみんに恩義を感じている部分があった。優しくして貰ったことがあったのだ。男女の好意というほどはつきりとしたモノではなかったが、こちらの世界に来て受ける異性からの親切に必要以上に感激している部分は否めない。そう思って本人は必要以上に彼女のことを考えないようにしていた。

同時に水梨の熱さを羨ましく思う。ストレートに助けに行くと彼が言わなかったら、自分は名乗り出るのを躊躇っていただろう。

シュウト：

「今、何か騒がしくなかったですか？」

別の場所にいたシュウトがなんとなくジンのところに様子を伺いにくる。

ジン：

「ああ、急ぎの用事ができたらしい」

シュウト：

「そうですね……」

ジンの視線の先を追いかけると、ミナミの方向へ急ぐ水梨とキサラギの姿があった。

36 アカウンタビリティ () (後書き)

こう、肝心な部分の描写がどうにもアンチクライマックス的で納得
が行かないのですが、仕方が無いといいましょうか。

今回も見直したつもりですが、もうダメかもしれません(苦笑)
えっとミナミ編は実質的にはここで終わっています、もうちょっ
とだけ続くんじゃない状態です。 > (| |) <

よろしくお願いいたします。 > (| |) <

EX さつぎの運命（前書き）

33話「泥にまみれて」の別視点＋続編になります。

EX さつきの運命

さつき嬢

「いいえ！ 戦っていただくまでは、ここを動くわけにはいきませ
ん」

梶子でも動くまいと身構える。目に本気であるという意思を込め
て睨みつけるようにした。

ジン：

「はあ、強情だねえ。なんかワケがあるとかなら、一応は聞いてや
っけど？」

呆れた様子のジンがどうしたものか？という風の思案顔で尋ねて
くる。

さつき：

「いえ、その……………」

さつき：

（理由……？ 理由ってなんだろう？ 単に戦いたかった。何故、
戦いたいのだろう……）

ジンとの戦いを熱望していたさつきだったが、言われたように明
日でも別段構わないはずだった。それが『今日でなければいけない』
という不思議な強迫観念に支配されており、しかもそのことに本人
は気付かずにいる。原因はユフィリアにあった。昨晚彼女たちと共
に過ごしていたことで、どことなく卑怯なことをしているという罪

の意識が炙りだされていた。

実際のところジンとユフィリアは付き合っている訳ではない。そのことをさつきは知らなかったのだが、別段、誤解をしていたという訳でもない。自分は二人の間に割り込もうとしているのだからと素直に理解していた。だから急がなくてはならない。

さつき嬢：

「……………衛兵と戦えるようになりたいのです」

ジン：

「衛兵、か…………」

思いつきの発言だったが、割と悪くない理由だった気がする。ジンだけでなく、その近くに立っていたシュウトの顔色までもが変わっていた。

さつきとしては、衛兵と戦うことなどはあまり考えてこなかった。システムの冒険者よりも強く『設定』されているのだが、戦う対象などではない。濡羽が衛兵達を味方につけたのは巧い手だったと思っているが、やはり戦える相手ではない。

ジン：

「仮に戦える実力があつたとして、衛兵は倒しちまうとそのまま死ぬぞ？ 大地人 だから復活しないハズだし、蘇生の魔法もたぶん効かないぞ？」

さつき：

「分かっています」

ジン：

「それでも…………『人を殺して』でも戦うつてののか？」

さつき：

「それが、私に求められている役割ならば。味方を守る武器として在るのみです」

人殺しだのと言われて引きそうになるのだが、ここが勝負処なのも間違いない。勢いで乗り切ってしまう、ジンと戦えばそれでいい。半ば自棄^{ヤケ}になりながら言葉に力を込めた。

この時のさつきに人殺しの覚悟はないし、殺そうとも戦おうとも思っていないかった。むしろ、大地人が人間と同じ存在であるということすら確信が持っていない。大地人と接触する機会がそれほど多かったわけでもないし、人目に触れないようにミナミの周辺に潜伏している現在では、尚のこと。大地人と知り合って言葉を交わす機会などには恵まれようもない。

睦実：

「フーかさ、あたしらだつてヤバいんだもん。衛兵の人達が死んじやったら、そりゃ可哀想かもしれないけど、あたし達だつて神殿のブラックリストに登録されてたら消滅しちゃうんだから、こーいうのってオアイコでしょ？ 殺したつて文句なんか言われたくないよね」

睦実からの援護射撃だ。それをこんなにありがたいと思ったことはない。勇気付けられていた。

ジン：

「……………フム、本気なのは分かったけどさ」

さつき：

「では……！」

ぼつりと呟いたジンの言葉に歓喜が沸き起こる。

さつきは年上の男性とこのような交渉をしたことが無い。それが別の高揚を彼女にもたらしていた。年上と言えば、霜村や戦闘班の仲間もそうなのだが、ゲームでの交渉というと彼女としてはもう少し力任せなものだった。この時は『感覚的に別！』という気分である。

ジン：

「だからって俺が全力を出す理由にはならないんだけど」

睦実：

「ちよつとお、けち臭いこといつてんじゃねーわよ!？」

さつき：

「睦実、止めてくれ。 どうしたら、全力をみせて頂けるのですか?」

ここはとても、とても大事な処だった。

睦実のチャチャ入れに肝を冷やしていた。 もう一息だろうと固唾を呑むように問いかけたのだが、予想していない答えが返って来てしまう。

ジン：

「んーと、そうだなあ。 ハダカ踊りでもしてみる？ そんなじゃなきゃ裸エプロンで1日ご奉仕とか、いや、今晚あたり夜伽にくる方がいいなあ。 まあ、そんな場所はないから外ですることになっちまうんだけども」

さつき：

「えっ……………？」

頭が真っ白になった。

睦実：

「ふつつつざけんな！！！」

怒鳴り散らして、掴みかかろうとする睦実の声が遠くに聞こえる。危険を察知したシユウトが素早く睦実を背後から取り押さええている。それでも足をジタバタと動かし、もがいて抵抗していた。

ジン：

「おまえらさあ、勘違いもいい加減にしてくんないかなあ」

動きが止まる。肉体か精神か、もしくはその両方だったろうか、動きが止まった。

ジン：

「人の本気が見たいんだったら、それだけの覚悟をみせるよ。何でもかんでも要求すれば手に入るってか？ 言うだけならタダだつて？ 言つたモン勝ちかよ」

厚かましいお願いだったろうか。失礼なことを言ってしまったいたのかもしれない。

ジン：

「……………男の本気はそんなに安っぽいもんじゃないって、わっかんないかなあ！」

遂に声を荒げたジン。

（嫌われてしまった……）という嫌な気持ちは何度も心の中でリフレインする。好き・嫌いよりも遙か以前で『人間的に失格』というような烙印をおされた気になってしまう。

シュウト：

「でも、ちょっと要求が酷じゃありませんか？」

ジン：

「ユフィリアのヤツはキスしろつつたらキスしたけどな」

睦実：

「かわいいそう……」

決定的だった。何の覚悟もない自分との差を思い知らされる。

睦実は強要されたと思ったのだろう。しかし、それは違うはずなのだ。その場所は覚悟なしに立つことは出来ないのだろう。ユフィリアに対して尊敬の念すら抱いてしまう。ああいう子は遙かな天空を軽々と跳び越えて、その先の未来へと飛んで行ってしまっただろう。自分は地上からそれを見ているしかないのかもしれない。

自己否定の渦に呑まれ、さつきの判断は怪しくなってきた。ユフィリアを過大に持ち上げ、自分のことは貶めて考えることで打ちのめされていた。さつき自身もかなり才能には恵まれているのだが、恋愛的な要素が混じると途端に自信が持てなくなってしまう。無粋な剣道女というのが本人の自己イメージだった。

シュウト：

「もしも、なんですが、ジンさんが衛兵と戦わなければならなかったとしたら、どうするんですか？」

会話はまだ続いていたようで、シュウトがリードしていた。それを半ば無関係のような顔で聞いていた。否、耳に入っていたただけなのだが、妙に意味が分かっってしまうため、失意の内にあっても呆然とはさせて貰えなかった。

ジン：

「……………戦わないだろうな。そんなことをするのは無意味だ」

睦実：

「なんなのよ！アンタは……………」

睦実の苛立ちも分かる。自分達の存在を無意味といわれた気がしてならない。

ジン：

「最後まで聞けって……………衛兵達の着ている鎧、ムーバルアーマ

ーは都市魔法陣から力を得ている。ならば、『都市魔法陣を破壊』

してしまえばいい。そうなれば、もう脅威じゃなくなるハズだろ？」

睦実：

「そつ、か……………」

別の方向からのアプローチもあったのだと驚いてしまう。自分は戦士だから、戦うことだけを考えて専門化するべきだと思っていた。だが、この人はそうではないのだ。蒙が啓かれた思いだった。

ジン：

「ま、その魔法陣がどんな形をして、どこにあるのかなんて知らないんだけどな」

シュウト：

「でも、その作戦なら犠牲者を出さずに済みますよね？」

ジン：

「いや、そう簡単にいくとは限らんし、別の形でも犠牲者は出るかもしれない。だから、なるべくなら最終的な手段であって欲しいとは思っているんだよ」

さつき：

「別の犠牲というのは？」

ジン：

「魔法陣を壊した後で直せばいいけど、壊れっぱなしかもしれないだろ？ そうなれば衛兵が機能しなくなることで、治安が悪化することになるだろう。その結果、例えば女の子が夜に1人で歩くのは難しくなるかもしれない」

さつき：

(そんな先のことまで……)

目の前のことしか、否、それすらも見えていない自分との差を痛感する。

シュウト：

「となると、都市魔法陣の破壊は『ミナミの街そのもの』を破壊してしまうことに成りかねないですね」

ジン：

「まあ、昔から街に人が住んでるんじゃないかと、人の住んでいる場所が街だっというけどなあ。そういうのも含めて、取り戻したい『ミナミ』ってのはどんなものなのか？みたいな問題は出てくるかもしれないわけだ」

気付くとジンと戦う理由が無くなってしまっていた。必死に頭を

動かしてみるのだが、何も出てきやしない。普段から考え慣れしていないのが災いしていた。戦い以外のことはからきしだった。

睦実：

「ホント、むっかつくヤツだよねえ」

さつき：

「うん……………」

睦実：

「……………だけど、あたしよりずっと考えてんだよね。あたしより真剣マクなのかも？って思っちゃったよ」

さつき：

「本当に、そうかもしれないな」

その後も睦実は色々と話かけてくれていたのだが、さっぱり聞かえてこなかった。ゆっくりと歩いてきたのだが、そうして曖昧な相槌だけを繰り返している間にテントの近くまで戻って来てしまっていた。

睦実：

「でさ、あたしにジンって呼んで欲しいのか？って言ったら、さっちゃんに『ジン殿』って呼んで欲しいんだって。ホントばっかだよねえ」

さつき：

「ジン、殿……………？」

幾つもの細かな電撃がさつきの脳を、体を駆け巡る。強迫観念がぶり返し、いてもたってもいられなくなっていた。

睦実：

「どうしたの？さっちゃん」

さつき：

「うん……………どうやら盾を忘れて来たみたいだ。普段使わないからかな？ちよっと取ってくる」

睦実：

「一緒に行こうか？」

さつき：

「いや、一人で大丈夫だから」

始めはゆっくりと歩いていたのだが、睦実が見えなくなるぐらいから段々と早歩きになり、次第に駆け足になっていた。そのまま朝練の場所に向かうのだが、やはりというべきか、そこには誰もいない。

さつき：

（どうしよう、テントの前まで行ってみようか？）

一時的に盛り上がった気分も、こうなるとダメだったな、としばらくでゆく。彼らのテントを訪れて、ジンを呼び出せるとは思えなかった。そこまで大胆にはなれない。

それでも彼らのテントの方に向かって歩いて行った。一目、テントを見たからと何かが変わるわけでもないのは分かっていたのだが、そうせずにはいられない。未練を転がし、その甘くて鈍い痛みに酔っていられるのも、あと僅かだった。

ジン：

「よう、もしかして俺に何か用とか？」

足元を見ながら歩いていたので、びっくりして顔を上げる。立っていたのは、あの人だった。

さつき：

「あの、そ、その……」

ジン：

「ふむ、裸踊りでもする気になったとか？」

ニヤニヤと笑いながら、無理な要求を言ってくる。そうだった、この人はそんなことは望んではいないのだ。

それでもさつきは問いかける。

さつき：

「ハダカになったら、本気を出していただけるのですか？」

ジン：

「……………ハダカの女の子相手に出す本気ってのは、アレな方だけどな。せつかくハダカになってるのに、わざわざ服と鎧を着せて、それから戦えって？」

渋い顔を作るジン。たしかに滑稽なシチュエーションには違いない。さつきは手の内を惜しみなくさらけ出すことに決める。

ジン：

「悪いが、タダで見せるわけにゃいかないね。それ相応の『対価』が必要でいける」

さつき…

「……………す」

ジン：

「ん？ なんだって？」

さつき：

「……………呼びます」

ジン：

「呼ぶ？ 何を？」

さつき：

「貴方を、これから先ずつと、……………ジン殿と、呼びます」

ジン：

「は？」

ぽかんとした表情になるジンだったが、次第にその顔が歪み、喜色を浮かべてゆく。地の底から響いてくるような笑い声と、プレッシャーに襲われる。

ジン：

「悪くないぜ。ちょっとやる気が出てきた」

さつき：

「では？」

ジン：

「しかし、ちゃんとして貰わないとな。俺以外を『殿』付けで呼ぶんじゃないぞ。この世界で俺だけに使うこと」

さつき：

「はい」（誰にも言ったことは無いのだから、問題ない）

ジン：

「俺と話す時だけでもダメだ。他人と話す時や文章、心の中、独り言、フィクションだろうとナレーションだろうと、全てでジン殿と呼ぶんだ。約束できるか？」

さつき：

「大丈夫です」（そのぐらい、なんでもない）

ジン：

「期間は現実世界に帰還するまででいい。現実世界への帰還に尽力すること。大丈夫か？」

さつき：

「はい。勿論です」（現実世界に戻っても……）

ジン：

「実際、これは呪いに近い。お前に愛する人が出来たとしても、俺のことを考えたり、思い出したら直ちにジン殿と呼ばなければならぬ。それは魂に食い込むかもしれない。人生が歪むかもしれない。それでも、構わないな？」

さつき：

「構いません」（望むところです）

さつき：

（結ばれることは無いだろう。それでも構わない）

さつき：

（だって貴方が、私の運命、だと思っから………！）

武器を構えてジンと対峙する。熱いような寒いような感覚だった。緊張と興奮とで心臓は早鐘を打っている。耳元の血流がうるさい。早く始めてしまったかった。

ジン：

「始める前に、残念なお知らせだ」

さつき：

「なんででしょうか？」

ジン：

「ある意味において、俺に限界はない。だから全力と言っても、現段階で見せられるものに限られる。一部分はお前さんの能力次第とということでもある」

さつき：

「はい。それは、構いません」

意味は分かりにくいけど、成長途中とかそういうことを言っているのだろう。

ジン：

「それから、俺が全力を出すと、それを見ることが出来なくなってしまう。だから、手加減する必要がある」

さつき：

「それは、約束と違います」

ジン：

「直ぐに意味が分かるさ。そっちこそ、最初から全力でやれよ？俺の限界を引き上げるためにもな」

少し、カチンと来た。

刻みつける。実力で、無理矢理に、力づくで、私の存在を刻み付ける。

そう、思っていた。

いつ、始まったのかも分からなかった。

たしかに「行くぞ」とジン殿は声を掛けたはずだった。しかし、まったく見えなかった。初撃で総HPの半分近いダメージを受けている。

その後も何も出来なかった。させて貰えなかった。

あつという間にたたみ込まれ、後は分かりやすく手加減される。全力を出せば出すほど、手加減しなければならなくなるのだ。そうしなければ自分はずぐに死んでしまうのだった。

一人ではまるで相手にならない。剣を振り下ろすよりも速く前蹴りで簡単に吹っ飛ばされ、何度も地面を転がった。これで何度目なのかも分からない。直ぐに立ち上がるうとするのだが、体が動くことを拒否していた。実力差があり過ぎてどうしようもない。

ジン：

「どーした？ もう終わりか？ さっさと立ってって」

立ち上がるまで何度も何度も蹴られて転がった。それはダメージが小さいからだ。剣で攻撃されるのにはもうHPが足りない。蹴られて転がりながら、次第に朝練の場所から離れた場所へ移動して行った。

モタモタと立ち上がるうとしないさつき嬢を前に、ジンは困っていた。このままだと単に負け癖をつけて終わりになってしまう。心が折れていようと、ここで下手に終わらせる訳には行かない。立ち上がって反撃するようになるまで何度でも痛めつけなければならなかった。こうなっては、泣こうが喚こうが許されないのだと分かるまで続け、反撃するしかないと体に覚えさせなければならぬ。

ジン：

「HPが1点でも残ってれば普通に体は動くだろ、さっさと立て！」

さつき：

「しかし、……もっ」

ジン：

「甘ったれんな！ ガーディアン 守護戦士 は最後の最後まで立って、仲間を守るためにいるんだよ！」

さつき：

「もっ……動けません」

ジン：

「ふざけんな、戦いたいって言ったのはお前の方だろうが！ お前が立たなきゃ、お前の仲間は死ぬんだぞ！」

さつき：

「もっ、ゆるし………」

怒鳴り散らされ、蹴られ続けた結果、涙を流し始めるさつき嬢であつた。

ジン：

「イジケてんじゃねえ！さつさとかかつて来い！泣いたつてダメだ！絶対に終わらないぞ！」

修行というよりも虐待に近くなっている。ストレスや負荷を掛けて人間の精神を壊す方法はいくつもあるが、素人感覚でそれらを真似る危険はジンも十分に理解していた。ギリギリのところに来ている。しかし、ここで終われば、彼女の 守護戦士 としての能力は失われてしまいかねない。酷いトラウマで戦うことを拒否するようになってはダメなのだ。また、自分より遥かに強い相手と戦う時に動けなくなるようでも困る。

なぜならば、彼女は『女性』だからだ。

ジン：

「仲間を見捨てんのか？ 敵に殺されるのを泣きながら見てるつもりか！？」

さつき：

「う、うわあああ！！」

気力を振り絞って攻撃してきたさつき嬢を、ジンは軽く剣で捌く。そのままの勢いで地面に倒れこむさつき嬢。

ジン：

「もう終わりか？ダメだな、そんなんじゃ。睦実やナガトモが敵の

男共にレイプされるのを泣きながら見てればいいよ。お前は本心じやそれを望んでいるんだろっさ」

さつき：

「ああああああ！！」

理性の糸が切れたのか、激しくジンに襲い掛かってゆく。何度か転ばされたが、それでも構わず襲い掛かる。その姿は、まるで狂戦士だった。

ジン：

「もういい、よくやった、お前の勝ちだ！……………って、全然聞こえてないのかよ！？」

攻撃を捌くこと自体は容易い。理性が飛んで暴走しているさつき嬢の動きは単調だった。問題は話を通じないことで止める方法がないことである。殺してしまうのは簡単だったが、それは最後の手段にしたい。攻撃するなどして目を覚まさせたいが、どうにもHPを減らし過ぎている。

ジン：

「こら！目を覚ませ！……………まっじいな、どうする？」

攻撃は苛烈さを増すばかり。対策を考えようにも、防御に専念しなければならぬ状況ではあまりにも慌ただしい。

ジン：

「ちよい休憩つ キャツスル・オブ・ストーン！」

10秒の休憩中に対策を考えようとしていたその時だった。

さつき：

「…… レイジング・エスカレイド」

ジン：

「なっ!?!?……くっ、そういうことか!」

レイジング・エスカレイド の連続攻撃が次々と弾かれていく。絶対的な防御力を誇る キャツスル の前に、それらの連続攻撃は無効だった。レイジング・フレイムも防ぎ切り、最後のパラダイス・ロストのモーションが始まる。

7秒・8秒……

さつき嬢の狙いは、最後のパラダイス・ロストを キャツスル・オブ・ストーン 終了直後に命中させることにある。これは考えるよりも遥かに難しいことだった。当然、早すぎれば キャツスル・オブ・ストーン によって防がれてしまう。遅すぎれば今度はジンに防がれてしまう。ジンは0・1秒あれば十分に 竜破斬 で相殺することが可能だった。時間的な猶予は0・1秒未満。そのタイミングにきっちり当ててくるのは至難の業だろう。

シヨートか、ロングか……

本当にギリギリのタイミングだった。パラダイス・ロストの光エネルギーが極大化する。技が発動するまで残り1秒を切り……

さつき

「Paradise Lost!」

瞬間、ジンの体にコントロールが戻る。が、しかし……

ジン：

「ぐわっ……！」

間に合わなかった。

直後、ダミーボムの小爆発が三回続き、続けて鎧に刻まれた刀傷が白熱してゆく。大爆発。吹き飛ばされるジン。……至近距離での爆発に鼓膜が破れそうになるのだが、この技には元々その効果はないらしく、耳は無事で済んでいた。

結果、完璧なタイミングであった。

たとえ0.1秒以下であっても、それがただの物理攻撃であったのならば、ジンは剣や盾で防ぐことが出来たのだ。問題はパラダイス・ロストが魔法攻撃に近い性質を持っている点にある。故に竜破斬を発動、及びブーストさせて相殺する必要があった。

このレイジング・エスカレイドでパラダイス・ロストだけを当てるという方法は、技を単体で使用することでその元ダメージを測定する時に使われるやり方であった。レイジング・エスカレイドを多段ヒットさせると『連続技補正』によってダメージが減少してしまうため、パラダイス・ロストの元ダメージが分からなくなるためだ。

ジンの防御力は異常に感じるレベルにあるとは言っても、命中した技のダメージを減少させる方法はどうしても限られてしまう。今回は瞬間的にレベルを高め、そのレベル差による補正を使うしかない。辛うじてダメージは4000点を下回らせ、残りHPは7000点強という状態にある。

ジン：

「やつべえ、面白くなつて来やがった」

特技を狙って使用できるのだから、理性はなくても意識はあるの
だろう。とりあえず、MP切れを狙うことにするとして、今の戦闘
ペースでMPが切れるまでの時間は概算で約20分。攻撃機会が1
秒毎に(たつたの)1回だったと仮定しても、20分×60回=1
200回。1撃辺りの許容ダメージは6点以下。両手剣使いのさつ
き嬢を相手には不可能な数字だ。20分の間、1200回の攻撃の
大半を躲し続けなければならない。合理的な判断をするならば、念
話で仲間なりを呼べばいい。しかし、その判断をジンは笑って踏み
躪る。……このチャレンジは面白すぎた。

フロートイング・スタンス を起動、同時にムーンウォークを
開始する。上位戦闘モード『荒神』も発動した。楽しい楽しいダン
スの始まりである。相手の攻撃範囲内で回避し続けるのだ。正直、
剣や盾の耐久値も心許なくなつて来ている。バランスよくリソース
を運用しなければならぬ。幾分かはダメージを覚悟し、鎧で受け
たりしなければならぬだろう。

フェイス・ガードを下ろしたジンの口元には笑いが張り付いて離
れなかった。

細い細い光の筋を追いかけていた。呼吸は荒く、周囲には血と鉄
の臭いばかりする。何度も突つ伏し、弾かれ、転がりながらも、そ
の細い雷のような光を追いかけて行った。もうどれくらいそうして
いるのだろう。1度、その光に手が届いたように思った。すると手
応えが返ってきた。それが何なのかを知ろうと、また光を追いかけ
てゆく。それはいつまでもいつまでも続いた。

段々と鋭くなっていくさつき嬢の攻撃にプレッシャーを感じながらも、ジンは丁寧に作業を続けていた。偶然か、危険な間合いにまで踏み込まれての一撃をなんとか盾で受け止め、技後硬直モーション・バインドの間に距離を取っていく。

細い光の筋を追いかけながら、さつきは昔のことを思い出していた。正確には過去のことを現在のことだと混同していた。剣道八段範士の祖父に様々なことを教わっていた。厳しかったが、好きだったおじいちゃん。しかし、稽古の時は大先生と呼ぶように躡けられていた。甘えたかったのだが、いつも彼女にとっては『大先生』だった。

始めて剣道で賞を貰ったときに頭を撫でてもらったのが切っ掛けだった。もつとがんばって誉めて貰いたかった。でも、頭を撫でてくれたのはその時が最後だった。

そろそろ20分が経過する。軽く1000合を超える剣撃をジンは捌いていたのだが、しかし、勢いが衰えるどころか切れが増していくばかり。いい攻撃を3〜4発貰い始めていた。残りHPもだが、そろそろ剣や盾の状態が不味い。自動修復が追いつかない速度で削り取られている。

高校3年の秋だった。「風邪をひいた」というと珍しく朝稽古も休んで1週間ほど布団で寝ていたと思ったら、そのまま帰らぬ人となってしまうていた。あまりにもあっけない終わりだった。特別な言葉などは何も残してくれなかった。最後の言葉も覚えていない。それほど唐突な最期だった。

さつき：

「おじいちゃんが死んだ！ 死んじゃった！！」

ジン：
「知るか、バカ野郎っ」

燃え尽きる前のろうそくの炎か、恐るべき猛攻が繰り出される。レベル差も越えた真なる斬撃が連発される。辛うじて受け、避けしていたのだが、ジンであつても何発か貰つてしまう。攻撃なしでは捌き切れるものではない。残りHPの確認に反射的に目が動いた瞬間にさつき嬢から繰り出された技は、トドメの一撃だった。……が、そのタイミングで彼女のMPが切れ、不発に終わった。ジンの右腕では 竜破斬 の青いエフェクトが発動している。

ジン：
「ふざけんな！俺は、お前のジジイじゃねえ！！」

残しておいたHPの分を削り切る勢いで蹴りをぶちかます。楽々と吹っ飛んでいくさつき嬢。ジンはそのまま背後にあつた木にもたれ掛かつていた。同時に 竜破斬 の攻撃エネルギーを振り払って散らしてしまう。危ないところであつた。

ジン：
「くっそ、ちょっとは俺のこと好きかなあ〜なんて思ってたけど、結局、ジジイの代わりだったのかよ……」

『未完の美』というものがある。
ミロのヴィーナスに代表される、不完全さの持つ不思議な魅力のことだ。ヴィーナスは両腕を失つたことで、あらゆる可能性を逆に獲得することになった。

さつきの祖父は孫娘を完成させてしまうことを恐れたのだった。剣道の修行段階に「守・破・離」があるように、孫娘を完成させ、一個の別の存在となってしまうことを恐れた。祖父は孫娘を愛して

いたため、完成してしまうことによつて孫娘に対する興味を失うことを恐れたのだった。そうして彼は、さつき嬢の完成を待たずして逝くことを選んでいった。彼女の完成を他者へと委ねることにしたのだろう。言つてしまえば酷い責任放棄なのだが、その役割がたまたまジンのところに廻つて来ていた、というのが大まかな意味で事の真相である。

これがさつきの運命であつた。

ある種の人間は完成しうる。しかしそれで終わりとはならない。完成した人間は、今度はその完成度をまるで密度を高めるように高め続けることになる。努力の無限階段スバイラル・フロアによつやく足を踏み入れたに過ぎず、これからが真の始まりと言つて良かった。

無意識に蓄積されたジンを相手に得た1000合を越える打撃経験は彼女の宝になるだろう。自覚的に引き出せるかどうかは今後の彼女の努力次第だと言えるが、何発かはフリーライドの領域をも超えて、その先の世界に到達していたように思われる。

さつきは幼い頃の記憶を見ていた。どこかで見たことがあるような、小さな女の子の記憶。一生懸命に自分を守ろうとしてくれている。

さつき：

（ああ、この子って誰だったかな……？）

とても、とても大事なことを忘れていたような気がする。

睦実：

「さっちゃん……………？ だい、じよぶ？」

おぼろげな過去の記憶から引き戻される。目の前には現実の睦実が心配そうに覗き込んでいた。

さつき：

「むつみ？」

さつき：

（ああ、そうか、そうだったのか…………）

そうして、さつきは自分が剣道を始めた最初の理由を思い出していた。

EX さつきの運命（後書き）

いつもお世話になっております。>（「（< いわゆる」さつきエピソード」です。おおさめください。

手直りする体力などはございません。

しばらく死なせてください。>（「（<

睦実は見ていた。なぜだろう、いつもとは何かが違っていた。

ハーティ・ロードの集落は低レベルモンスターが出現するゾーンを選んで設営してあった。そのため、放っておいても基本的に全員が90レベルの彼らが襲われることは少ない。実際のところ、人が襲われるよりも設営してある天幕や物資への被害があったら「こまるなあ」と思う程度のことだ。

今朝からこつち、状況が変化していた。珍しくグレイウルフが数体で集落を襲いに現れたのだ。いち早く状況を察したさつき嬢が迎撃に向かっていった。気楽な調子で「1人で構わない」と言う。それでも睦実だけは後を追った。しかし邪魔になりかねないので、陰からの観戦だ。

灰色狼 グレイウルフ。

いわゆるオオカミと言えばタイリクオオカミ（ハイイロオオカミ）のことだとされる。エルダー・テイルにおいては、架空の怪物というよりも野性動物と考えてよいだろう。狼は通常、2〜15頭ほどの社会的な群れ（パック）を形成して狩りを行う。

日本ヤマトに生息している以上、こちらではニホンオオカミなのかもしれないが、特に絶滅したニホンオオカミの特徴を継承しているとは思われなかった。

現実の話としては、ニホンオオカミをDNA調査した結果、タイリクオオカミとも犬とも違うと系統である確認されている。日本が大陸から離れて列島となったのが17万年前と言われているため、

そこから大きく進化したのかもしれないが、むしろ大陸側でのオオカミの分布に大きな変化があったと考える方が現実的だろう。

ちなみにニホンオオカミの絶滅理由は狂犬病やジステンパーといった伝染病、人間による駆除、開発による生息区域の分断などの複合要因と言われている。

10体近いグレイウルフを誘き寄せ、さつき嬢は自分のところに襲うように仕向ける。いわゆるボディ・プルと呼ばれる接近行為だ。戦闘開始してからはタウンテイング特技を使い、逃げ出さないように戦ってゆく。睦実の主観ではゆっくりと戦っているように感じられるのだが、テンポ良く次々と倒していた。無駄な動きが減り、そのバタバタ感の少なさがのんびりした動きに感じさせている。

残り半数となったところで、突然に乱入してくる大きな影があった。鬼熊 デーモン・ベアーというパーティランクのモンスターである。これには驚き、援軍を呼ばねばと睦実が腰を浮かせてしまった。鬼熊はグレイウルフを追い散らしてしまう。

鬼熊 デーモン・ベアー。

怪力を誇る巨大熊の一種であり、日本では木曾（長野）の妖怪を意味する。老いた熊が妖怪に変化したものといわれ、「手のひらで軽く押しただけで猿がつぶれた」「10人掛かりでも動かせない巨石を谷底に落とした」などの逸話が残されている。

ゲームでは60レベルのパーティランクモンスターである。その怪力からダメージ量が大きく回復に気を配る必要があるが、特殊能力を持たない力押しのモンスターゆえ、パーティで戦えば問題とはなりにくい。

現れた瞬間はちょっと驚いた様子のさつき嬢だったが、気を取り

直すと仲間に助けを呼ばずにソロで戦い始めてしまう。その姿には
気負うところなどはなかった。

押し掛かるうとする鬼熊を躲して回り込み、素早く打撃を浴びせてゆく。比較的小柄なさつき嬢だが、90レベルの冒険者ならばこのレベルの敵に一方的に押し倒されてしまうことはありえない。鬼熊が相手であれば、踏みとどまって押し返すことすら可能だろう。パーティ戦闘でメインタンの役ならばそういう戦い方をしても良いが、ソロ戦闘では一度捕まると、爪や牙による攻撃を連続して受けてダメージが蓄積してしまう。周囲を動きまわり、直線的なダッシュを封じて勝機を見出すのが正しい戦い方になる。これは後衛が居ないからこそ選べる戦術であった。

睦実のイメージでは、さつき嬢というのはもう少し尖っていた。今の彼女は円熟した安定感や『まるみ』のようなものを感じさせる。剣気を発して勝ち気に逸るキラキラしたイメージが薄まり、流れを掴み、まるであらかじめ分かっていたかのように躲し、受け、斬り付けていった。ソロ戦闘での動き方などはジンに似ている部分もあったのだが、睦実にはその違いまでは分からない。……やがて、難なく倒し切ってしまった。

睦実：

「さつちん、凄かったよ！」

さつき：

「いや、このくらい大したことないから」

睦実：

「そんなことないよっ！本当に凄かったのに」

謙虚な台詞だったが、あっさりとし過ぎていて反応が薄い。物足りなくて言葉を重ねるのだが変化は現れない。

睦実

「じゃあ回復するね」

さつき：

「ああ、頼む」

回復ようとする睦実はなぜかさつき嬢にじっと見られていた。いつもそっけないのに、なんだかいつもより余計に見られている気がしてしまう。2人きりだからだろうか？へんに意識してしまい、どきまぎする。

さつき：

「ありがとう、睦実」

いつもより丁寧で優しい。

長い間ぞんざいに扱われていた妻が、急に夫に優しくされて居心地の悪さを感じてしまうように、なんだか浮気を疑いたくなくなってしまふ気分だ。(やはりジンオッサンに何かされたのに違いないっ)安直な結論で他人の責任にしてしまい、動揺している自分を落ち着けようとする。

睦実：

「さっちゃんがやさすいよお！ 変わっちゃった！やっぱり何かされちゃったんだ！」

さつき：

「またなのか？ いい加減に落ち着こう、睦実」

もう何度も繰り返したやり取りに苦笑するしかないさつき嬢であった。

ふーみん：
（ここって……？）

どこかの天井だった。目覚めたばかりで状況が掴めない。しかし見たことにはあるような気がする。元氣娘の 吟遊詩人 ふーみんは、寝台というには硬い寝床に手を付いて体を起こす。大理石のヒンヤリした硬い感触が手に心地よかった。このところ建物とは言えないテントでの生活が続いていたため、どうして街中に居るのかわからなかった。瞬間的に（もしかして今までの出来事は夢でしかなくて、現実世界に帰ってきちゃったのかな？）などと考えたのだが、途端に死んだらしいことに思い至る。

ふーみん：
「そっ……か」

死んだのか。

なんともいいにくい。大神殿のブラックリストに登録されてなくてホッとしたような、しくじって情けないような、仲間たちに今頃どう思われてるのかか？といったモロモロを想像する。死んだらどうするか？みたいな事を幾度となく考えてはいたのだが、あまり役に立たないことが分かった。これからどうするべきだろうか。

ここは玄室と呼ばれる遺体安置所だった。光の差し込む窓もあるし、暗闇の死角がなくなるようにほんのりと輝く鉢植えが置かれてもいた。まだ朝の時間帯だからか、外からはあまり音も聞こえてこない。

第一の心配事は、ここはミナミで、ミナミは P l a n t h w

yaden の場所なのだから（人がいたらどうしよう?!）というものだったが、これまでの死亡経験によれば、大神殿には誰もいないことがけっこう多い。ゲームであれば、死んでいる状態で灰色の画面で続きを見てから大神殿に飛ばされるところだったが、ちょっとどころではなく勝手が違って感じていた。死んだ後の情けなさみたいなものがなかった。ふーみんの言語感覚では『やつべ』が精一杯だ。

玄室の石扉を開けるのが怖かった。どちらかと言えば、ここに居たらいいんじゃないか？などとヒヨってしまふ。街中を歩いたらきつとキヨドる。どないせーっちゅうねん！と半ギレの涙目だった。

と、石扉が触る前から自動的に動き出した。外側から誰か入ってくるらしい。とっさに隠れる場所を探す。死者蘇生の台座の影ぐらいいしかない。ピンチである。さかさかと動いて隠れる。

水梨：

「おい、まだ中にいるか？」

僅かに開けた隙間から体を滑り込ませて入って来たのは、仲間の盗剣士、水梨であった。とっさに仲間に念話したりするといったことを失念していたことに気がつく。

ふーみん：

「水梨！？……来てくれたんだ？」

水梨：

「馬鹿野郎、あっさり死んでんじゃねーよ」

ふーみん：

「うっっ、しめんよう」

嬉しさと情けなさで、グズグズになってしまふ。ヤンキーかぶれだが、そんなに悪いヤツではないらしいと知っていたつもりだった。もう、ひたすらにありがたい。

挨拶もそこそこに、大神殿の入り口へ連れられて移動する。そこで外の様子をさりげなく伺っていたのは、暗殺者のキサラギだった。

ふーみん：

「えっ、キサラギさん？」

キサラギ：

「ああ、無事か」

ふーみん：

「はい、なんとか」

水梨：

「チッ」

その様子に水梨が舌打ちする。笑われたらしい。だらしなく弛んだ笑顔を見られたに違いなかった。キサラギは気になっている男子であったため、（来てくれた！）と知って本当に嬉しかった。水梨にも感謝してはいるのだが、キサラギに玄室まで迎えに来て欲しかった！と自分に都合の良い妄想が入る。彼は控えめな心遣いをするタイプなのだ。誰に対しても。

ふーみんはすばやく路地裏の目立たない場所に引っぱって行かれる。ミナミはギルドにとってホームでもあったし、潜入班のメンバーはどうしても隠れられる場所に詳しくなる傾向があった。レジスタンスとなって視点が変化すると、そういう場所にも何故か気がつ

くようになるものだ。キサラギは簡単に状況を伝えた。

キサラギ：

「これから外まで脱出する。俺達2人で君を隠しながらになるな」

ふーみん：

「わかりました」

キサラギ：

「冒険者はあまり問題じゃない。人数は多いが、いちいち他人のステータスを見たりしないからな」

ふーみん：

「じゃあ、楽勝じゃないかな？」

水梨：

「厄介なのは衛兵だろ」

大地人 はステータスを見ることは出来ないし、出来たとしても所属ギルドを知る方法は限られている。その意味では衛兵もまた大地人 なので心配しなくても良さそうなものだったが、P I a n t h w y a d e n の統治が始まってからはその辺りに確信が持てなくなっている。不参加者が捕まったという話は幾らでもあった。それが 冒険者 による密告チクリによるものなのか、衛兵にそのような機能があるのかは判断できなかつた。まず後者だと思っていだろう。

キサラギ：

「究極的には、捕まろうと P l a n t h w y a d e n に参加してしまえば問題はないんだが、しかし、衛兵達に捕まってしまうとどの位の時間が掛かるのか検討もつかない。その場合は確実に置いて行かれることになる」

ふーみん：

「置いていかれるって、どういこと？」

キサラギ：

「今はあまり時間がない。10分して戻ってこなかった場合、葉月は我々を見捨てて集落に戻る算段になっている」

ふーみん：

「そんな……」

キサラギは黙っていたが、たぶんここを逃してしまつたとその後は合流できなくなるだろう。理由は聞かされていなかったが、葉月はナカスに向かうつもりだ。知らぬ間に状況が大きく変化しているらしい。

水梨：

「イヤかもしれないが、俺達も一緒に居てやるからよ」

ふーみん：

「ありがとう……」

ナカス行き of 件を知つてか知らずか、水梨が励ましの言葉をかける。仲間に見捨てて行かれるのはつらい。それが敵の街中であれば尚のことだ。今からのミッションに失敗した場合は、せめて一緒に居てやるぐらいしかできないだろう。スザクモンの鬼祭りらしき状況が終了した後でも、ナカスまで移動するのは3人だけでは不可能に思える。3人とも武器攻撃職だ。今のミナミでナカスまで一緒に来てくれる前衛・後衛を探すのはかなりの難易度が要求されることだろう。つまりとところ Plant hwyaden を裏切る人間を何人か見つけなければならぬのだから。

この先の数分で流れが大きく変わってしまうにしても、先のこと
はわからない　そうキサラギは自分に言い聞かせた。

さつき：

「今頃、水梨とキサラギが街中に入っているころだ」

長瀬友：

「ほんとうに、すみませんでした……」

霜村：

「そう気にするな。今は奴らの幸運を祈ろう」

偵察から戻って来た長瀬達の報告を受けるために霜村が集落の外れ、さつき嬢が戦っていた付近に出てきていた。ふーみんが死んだことで沈んだ様子の一同を責めることはせず、励ます霜村だった。

報告によってモンスターの数が多いのは分かったが、具体的な数量の報告はそれぞれの感覚になってしまう。完全にバラバラだった。8千程度という者もいれば、10万ちかいと答えるものもいる。だから間をとって5万、というわけにはいかないものだろう。

5万人がどのくらいの数かというと、東京ドームが満席で5万5千と言われている。甲子園球場ならば4万だ。それを多いと感じるか、少ないと感じるかは個人差によるのだ。狭い範囲に固まっていれば少なく感じ易い。しかし広い範囲に散らばってしまえば、5万程度ではそちこちにポツポツと点在することになるため、集団とは見做せなくなる。

一緒に行かなかった自分が悪いと謝罪しながらも、長瀬友を励ます睦実を見ながら、遠くミナミの街を想う。きつと、そうひどいことにはならないだろう。今、あそこにはあの方がいる。あの人なら

ば、全てのお膳立てを引っくり返して台無しにすることだって出来るだろう。……問題は、果たして対価なしで動いてくれるかどうか分からない部分だ。

胸が痛む

私は、残酷だ。

それに気付かないほどに残酷だ。気付いた今でも変わらないほどに人でなし。

きつと、私達は対価なしに要求し続けてしまったのだ。ちょっとぐらいいいだろう？ 余技でどうとでもなるだろう？ だから、何も支払わなくてもいいに違いない。そうやって善人をすり潰してしまったのだ。誰が言った？ 私は言っていない。誰か他の人が言ったのに違いない。そうやって責任を逃れて来たのは、たぶん私達全員の責任だ。

今も、ジン殿がいれば大丈夫だと思っていたがつている自分がいる。自分からの好意を失うぞと脅迫して、誰にも真似のできないことをして貰おうと思っている。誰にも聞かれていないのを良い事に、虚空に向かって命令する。嫌いになっちゃうぞ、尊敬を失うぞ、だからどうにかしておいてね？ いやいや、直接には何も言っていないよ？ 貴方が自分でそれをするのでしょう？

自分だって、多少は周りからそういう風に見られていたのに。だから分かってても良かったのに。それなのに、気付かないフリをしたあの人が居たら自分は楽ができる。しめしめ。押し付けちゃえ。自分はその程度だった。そんなので強くなれるわけがなかったのに。……そばになんて、居られるわけがないでしょう？ だって自分はこんなにも弱いものだから。

さつき：

(ジン殿……………)

ゆつくりと近付いてくる人物に霜村も気が付いた。頭を押さえながら歩いてくる姿からは、どこかしら疲労が抜け切っていないように見える。それでも変わらない。彼女は、きらめき。

ユフィリア：

「しもぴー、助けて」

キサラギも水梨もごく自然に堂々と歩いていく。潜入班なら出来て当然だった。おっかなビックリのふーみんも2人に庇われつつ、なるべく背筋を真っ直ぐに伸ばして歩こうと苦戦していた。

久しぶりのミナミの街中だが、周囲に目を配る余裕はない。さつさと外に出てしまいたかった。どうやら 冒険者 には気付かれずに済みそうである。朝食の時間は過ぎていると思われたが、人並みはまばらだった。

水梨：

「後は、外に出るだけだな」

残り70mぐらいだろうか、もう出口は見えている。水梨の額に浮かぶ汗を見て、悪いことをしているのだと思う。後でお礼をしようと思った。うまくいったら、いいや、きつとうまく行く。

間の悪いことに、衛兵が3人組スリーマンセルでこちらに向かつて歩いてくる。気付かれたか？と一瞬あせるのだが、そんなハズはない。ただの巡視だろう。ここから脇にそれると不自然になつてしまう。もうすれ違ふしかなかった。距離にして5mもないところをすれ違ふことになるだろう。

ふーみんは心臓が口から跳び出そうだと思つていた。中学校の文化祭で演劇をやることになり、脇役で台詞を言った時だつてこんなに緊張しなかつた。学校の先生に怒られるのと、ゲームの衛兵に怒られるのではそんなに違いはなさそうに思えるのだが、早鐘を打つ心臓が『そんなわけがない』と事実を付きつけてくる。

衛兵は何事かを話していた。日常の細々としたことが、どうでもいふようなくだらないお喋りかもしれない。彼らはこの世界ではゲームの登場人物、NPCではないのだ。もしかしたら下手なアメリカンジョークを言っているのかもしれないし、奥さんの不満を漏らしているのかもしれない。この街で昨日食べためっちゃウマなカレーの自慢話をしている可能性だつてある。そのためだろう、別段こちらを見てはいなかつた。すれ違ふ。すれ違つた。助かつた……？もしかして助かつちやつた？

金属音。

咄嗟に振り向くと、衛兵の1人が金属の何かを地面に落としたりしい。衛兵の1人、青年衛兵が「驚かせたようで、申し訳ない」と謝りながら地面に手を伸ばしている。

中年衛兵：

「君たち、ちょっと待ちなさい」

ぎくり。

あるうことか、水梨とキサラギは武器に手をやっていた。過剰反応だった。反射神経が良すぎたかもしれない。

青年衛兵：

「もしかしてそっちの君、ああ、そうだ。やっぱり……」

バレた。

もう、どうして？ あとちょっとだったのに！

キサラギ：

「すまない……」

ふーみん：

「ああっ、キサラギさんが悪いんじゃないよ。悪いのは水梨だから」

水梨：

「そうだな、スマン」

うつっ、素直だ。かわいいところもあるなんて卑怯者め。

外に向かって三人は走る。しかしダメだ。直ぐに追い抜かれてしまふ。残り距離は40m程度。しかし、それはとてつもなく遠かった。トイレを我慢しながら探して階段を駆け上がっている時ぐらいに絶望的だった。階段を登る振動で（以下略）

その時、何かが変わった。

ジン：

「ここは任せる。先に行け。外に走れ」

あれ？この人って、どうして？ だって……

顔が見える程度の軽い逆光。いつ来たのかも分からない。飄々と重々しく？存在感がもの凄くあるような、全く感じないような、言葉にするのに苦労しそうな人。

水梨：

「また、アンタに……」

ジン：

「ホレ、さっさと行けっつもの」

キサラギ：

「恩に着る！」

キサラギに腕を引かれ、ふーみんはそのまま走る。水梨も続いた。

中年衛兵：

「待ちなさい！」

がいん。

いつの間に抜いたのか、その手には剣が握られていた。軽く剣の平で衛兵の胸鎧を叩いている。途端に反応を始めるムーバルアーマ。衛兵たちが戦闘態勢に移行する。

ふーみんは振り向くことが出来なかった。自分の代わりにあのジンという守護戦士はたぶん……。

街の出口はもう目の前だった。

ジンが近くにいないのを見計らって、石丸に話しかける。ハ―
ティ・ロードの他のメンバーはみんな忙しそうに動いていた。撤
収の準備を済ませようとしているところだった。

シュウト：

「石丸さん、ちょっといいですか？」

石丸：

「何か要件つスカ？」

人の耳がなさそうな場所まで引つ張って行き、ずばり要件を尋ね
る。余計な手順を踏むのは無駄だろう。

シュウト：

「さっきのジンさんの話なんですけど、どう思いますか？」

石丸：

「ああ、その件つスね……」

シュウトはどう考えていいのか分からずにいた。信じるべきか、
疑うべきなのかも分からない。話を聞いていたあの場ではなんと
なく納得した気分だったが、落ち着いてみるとどうにも落ち着かない。

石丸：

「気にしなくていいんじゃないっスカ？」

シュウト：

「いや、ですが……」

石丸：

「そうっスね……証拠を固めてから結論を導く通常の思考とは違って、仮説思考は答えを先に予想してしまい、そこから検証を繰り返す手法っス。しかし、仮説思考では答えを決め付けてしまうと、証拠を捏造してしまうことになり易いっス」

シュウト：

「えっと、例えば容疑者に自白を強要するような話でしょうか？」

石丸：

「犯人ありきで証拠を集める場合は、柔軟性の欠如が冤罪を生み出す原因に成りかねないっスね。ただ、この人物が犯人の場合はどうな証拠があるか？といった形で予想を立てることが出来るなら、捜査するポイントを絞ることが出来るようになるわけっスから、使い方によっては便利だし、効率が良くなるものとも言えるっス」

シュウト：

「今回の話の場合では、どうでしょう？」

石丸：

「正直に言って、もう話を聞く前の状態に戻って思考するのは無理っス。ミナミがどんな行動を起こしても、それが現実世界への帰還を妨害しているからかもしれない、といった形で考えることになっってしまったと思うっスね。チェックリストがひとつ増えて、もう減らすことはできないっス」

シュウト：

「なるほど……」

石丸は『変質した』と認めて受け入れていた。それはなるほど合理的なように思える。一要素として心に留めて、単に一要素として扱えばいいのかもしれない。

石丸：

「付け加えるとすれば、対立しうる代案を別に用意してみるといいかもしれないっス」

シュウト：

「代案ですか？」

石丸：

「答えが一つしか予想できていないことが問題っス。物語形式で、別の動機から行動を説明するストーリーがあれば、素直にどっちか分からなくすることが出来るようになるはずっス」

シュウト：

「……それじゃあ、余計にわからなくなるような気もするんですけど（苦笑）」

石丸：

「どちらにしろ、正解が分かるわけじゃないっス」

説得力のあるストーリーがジンの提示した一つしか持っていないことで、受け入れ難いのに受け入れざるを得ないような気分になっているようだ。つまり、自分はまだ信じたくないらしい。別の、自分が信じたいようなストーリーがあれば、別に信じなくて済むということなのだろう。しかし、そう自覚するとこれは幼稚な考え方に見える。

シュウト：

「それでは具体的にあのストーリーのことはどう思っているんですか？」

石丸：

「帰還せずに、この世界に留まりたいと考える人間はそこそこ現れるものだと予想できるっス。もう少し居心地がよくなってくればアキバでもそう考える人間が出てくるのはむしろ自然っスね。その点では特に不思議はないストーリーともいえるかもしれないっス」

シュウト：

「それがたまたま、ミナミの女王だった、ってことですよね？」

石丸：

「元から女王だったなら、そういう風に考える人物がいても不思議じゃないっスガ、問題はいち冒険者から始めて、意図的にミナミを手中に収めたというその行動力っス」

シュウト：

「……考えるほどに、凄いですよね」

シュウトのモヤモヤとした感情は、ある意味では、ジンの異常さに慣れて来ていたことが原因であった。ジンのような異常な戦闘力の場合、選ばれた天才なら可能かもしれないとシュウトは思うようになって来ている。その異常さを超える異常を為し得た人物が他にいたことが信じられないのだし、信じたくないらしい。部分的にはそれが女性だから信じ難いという側面もあるかもしれない。

世の中は、広い。

シュウト：

「……そういえば、ジンさんって？」

石丸：

「さあ、どこっスかね？ さっきから見掛けていないっス」

なんとなく、間違えてしまった気がした。

37 流転(後書き)

) T T)

HHHHH (、) HHHHHH

^ (—) >

∴ Y=I) ° () ・ ターン

∖ (^ O ^) /

ユフィリア：

「しもぴー、助けて」

ふらついているユフィリアが現れ、霜村に救いを求める。真剣な表情も相まって頬がコケて見える。しかしその瞳は逆に精気に溢れ、力強く輝いていた。

霜村：

「起きたか……」

睦実：

「わっ、わっ、大丈夫だった？」

ゆっくりと頷く霜村。対照的に睦実はわたわたと慌てた調子で心配を重ねた。ユフィリアは無事を喜んでいる彼らの反応が収まるのを根気強く待っていた。

弥生：

「ちょっとゴメンね。今の助けて欲しいってどういうこと？」

霜村の秘書役をやっている カンナキ 神祇官 の弥生だ。頭が良く反応も早いのだが、その分だけ気は短いのだろう。話題が戻るのを待っているユフィリアの態度を察して、すばやく助け舟を出していた。

霜村：

「うむ、何かあったか？」

ユフィリア：

「えつとね、ここから少し離れた場所に 大地人 の村があるでしょう?」

弥生：

「そうだった?」

さつき：

「ええ、確かに。この付近の 大地人 の村はそこだけでしょう」

ユフィリア：

「助けてあげないと、みんな死んじゃうでしょう?」

その場にいた者達は考慮していなかった話題を持ち出されて、少し驚いた顔になっていた。この時、ユフィリアは『現実の論理』で話をしていった。これがゲームであれば、魔物が大規模な移動を始めていても、村が壊滅するというイベントが絡んでこない限り、放っておいても村は無事なのだ。プログラムされたゲームはプログラム外のことは起こりえない。魔物が大規模に移動を始めていても、そのルートから外れている場所にある村には、本来は何も影響はないはずなのだ。

さつき：

「さつきからこの集落にもレベルの高いモンスターが現れている。魔物が大規模に進軍している影響で、各地のゾーンに巣食っていた動物やモンスターが逃げたり、興奮して暴れたりしているのだと思う」

さつき嬢はユフィリアに答えるというよりも ハーティ・ロードの仲間達に聞かせるように状況を説明していた。

霜村：

「助けてやるとなると、騒ぎが収まるまでのあいだ城壁のある都市まで連れて行ってやる必要があるが………弥生、撤収の準備」

備はどうなっている？」

弥生：

「まだしばらく掛かると思う」

霜村：

「ここで部隊を割るのは面白くないな……」

表情の読めない霜村に対して、ユフィリアはまっすぐに見ていた。睨むでもなく、ただ焦点を動かさないうで見ている。もしかすると美人はその視線に電磁波か何かを込める能力を有していないとも限らない。そんな、見られているということ意識してしまう目力があつた。

仮に村人を助けるとする場合、撤収するための準備に人を残して部隊を分割し、少人数で村へ急行することになる。その後でどこか城壁のある都市まで村人たちを護衛していかなければならないのだ。「助けましたのではご自由に」と放り捨てようものならば、結局はモンスターに殺されてしまうのがオチだ。助けるのならばキチンと安全が確保されるまで面倒をみなければならない。部隊を指揮する霜村はその責任において、無駄な行動を選択する『ロス』を避けることも十分にありえる話だった。大地人が死ぬのは可哀想かもしれないが、そこまでしてやる義理もまた、ない。この世界においては、自衛できなければ大半の人間が死ぬのは当然の成り行きなのだ。

軽く鼻で笑うと、霜村はユフィリアに問う。

霜村：

「ところで、お前の所の事務所の社長だと、こういう時にはどうするんだ？」

ユフィリア：

「えっ、ジンさん？ ……うーんつとね、『チューするんだつたら、オレがなんとかしてやる』とか言うかも？」

嬉しそうにジンの話をしているユフィリアだったが、それを後ろで聞いていたニキータは「バカ……」と思わず呟いていた。頭が痛くなってくる。

霜村：

「ほう、そうか。なるほどな」

ユフィリア：

「……………あっ」

霜村からは何も言わなかった。

霧困気を察したユフィリアが遅まきながら自分の失態に気付き、みるみる顔色が変わっていく。到着した場所はあるうことか笑顔であった。それも有無を言わせぬ『かなり強い笑顔』だ。女子が本気で笑う時、それは全てを弾き返すバリアとなる。侮れないもので、一流の使い手が駆使すると某ATフィールドを遙かに上回る強度を有するとさえ言われている。

霜村は、ユフィリアが助けを求めてくるのであれば、キスを要求できる立場にいる。だが、自分からは何も要求しない。ユフィリアは村人の命とキスとを天秤にかけることになってしまっていた。普通に考えて顔も見たことがない他人の命のために自分がキスしなければならぬのでは、さすがに割りにあわない。一方でたかがキスでしかなく、命とでは比較にもならないだろう。しかし、女性としての視点ではやっていいことと悪いことがある……………。

ユフィリアが笑顔のまま硬直しているのをしばらく楽しんだところで霜村が仲間たちに向かって宣言していた。

霜村：

「よし、これから村の救出に向かう！」

ユフィリア：

「……しもぴー、いいの？」

霜村：

「フン、人助けをするのに女にキスを要求するなんて、ケチ臭い野郎の真似なんぞできるか」

そついい捨てると霜村は不敵に笑った。弥生に撤収の準備を終わらせておくように言いつけ、救出に出るメンバーを選び始める。すべき事を得て　ハーティ・ロード　の仲間達は活気付いていた。

霜村は今回、男つぷりを上げる選択をしたに過ぎない。自分だけがキスされるのでは、男性メンバーに優越できても、士気を引き上げることは出来ない。ユフィリアが男性メンバー全員にキスするように要求する場合は女性メンバーに対して示しがつかなくなる。このためジンを引き合いに出すことで自分達の『感覚的な正しさ』を訴えて見せている。それは　ハーティ・ロード　のメンバーにとつては腑に落ちる落とし処になっているのだろう。

ハーティ・ロード　のメンバーは給与などを目的にレジスタンス活動をしているわけではない。いわゆるタダ働きであつて、その意味ではシユウト達と立場は異なっている。金などなくても戦うのは、自分達のためだからであり、仲間同士の絆によるものだ。その一方で、シユウト達のような他の　冒険者　を雇つて、扱き使おうと思つていたのである。安く雇つて、奴隷のように便利に使おうと思つていたのだから世話が無い。もう少しまけると交渉するのが常識の世界でもあるので、値引き交渉は意地汚さではなく可愛げなのだ。嫌なら契約しなければよかった」と言い捨てて平気なフリ

をしようとしてもいたのである。

議論の場合、反証は自分達でおこなう必要はない。それは相手が自分達で責任をもって行うべきものだろう。これと同様に、個人間で雇用契約という名の奴隷契約を相手に押し付けてしまっても別に構わないものなのだ。反証に相当する行為は、相手が自己責任で行えばいい。嫌なら約束などしなければいいだけなのだ。………そうしてみるとジンはかなり巧く立ち回ってみせたことになる。要求を吊り上げることで決して契約はしなかった。このため、思い通りにいかなかったという意味で、ハーティ・ロード側を苛立たせていたのだが、どこかしら恥知らずな行為をせずに済んだとしてホッとしている気分もある。ホツとしながら、しかし「生意気なヤツだ」と安心して敵扱いをしていたわけで、その気分を巧く汲みとって霜村は利用していた。

ユフィリアは、普段から誰かに何かをお願いすることが極端に少ない。親に対しても交渉して渡り合って『自分の要求を通す』ということをあまりしてこなかったためだ。彼女の周りでは彼女が望んでいると知ればそれをしようとする人物が少なからず現れるため、自分の望みを周囲に知られないように注意深くくなっていったし、自分で出来ることは自分でやるようになっていった。ウィンドウショッピングで「可愛い、欲しい！」などと言おうものなら、それをもって男子が（時たま女子も）現れるのだ。それも小さい頃は嬉しかったものだが、しばらくすると彼女の部屋はプレゼントでいっぱいになってしまったのだ。人前で下手に欲しそうな素振りをみせたら大変なことになるのだ。同じアイテムの重複だけではなく、バージョン違いも選り取り見取りだった。

実際には今も、ハーティ・ロードのメンバーらは彼女の望みを少なからず叶えてやりたいと望んでいた。イイカツコをしたかった。

それで霜村の決断に安堵していたりする。男女を問わず、『彼女に認められること』は自尊心を満たすことにかなり貢献することになる。

ジンをケチ臭いと言われて少しムツとしていたユフィリアだったが、気持ちを切り替えて救出に向かう準備を始めた。何はともあれキスせずに済んだのだから、蒸し返さずにそれで済ませたのかもしれない。もしもキスを要求されていたらどうするつもりなのかは、その態度からは伺い知ることは出来なかった。

尚、この話を後で聞かされたジンは「村人の命で脅してキスなんかさせねーよ!」と憤慨することになる。ユフィリアにしても分かっていよう、まだよく分かっていないのであった。

ジン：

「あーあ、やっちゃまったよ」(ぼそっ)

その時、ケチ臭いといわれた男はなぜかタダ働きをしている自分を呪っていた。水梨たちを先に逃がしてやる。制止する衛兵たちから自分がターゲットになるように仕向ける。

がいん。

剣の腹で衛兵のひとりの胸元を軽く叩いてやると、途端に彼らのムール・アーマーが反応を現していた。水梨たちの違反は、Plant hwyaden に入っていないものを罰するとい

った後から付け加えられた、いわば文化的な違反である。これに対してジンが行ったことは、衛兵を攻撃したというシステムに裏打ちされた根本的な違反である。予想の通りに、水梨たちへのロックオンは外れ、自分がターゲットになった。

ミナミの都市魔法陣から膨大なエネルギーが送り込まれる微かな気配を感じる。ムーバル・アーマーの戦闘^{ファイト}起動は速やかに済んでしまった。異物を排除しようとして街そのものが軋んでいるのがジンには感じられる。自己免疫系の白血球に攻撃されるウイルスにでもなったかという風情であろう。

中年衛兵：

「一緒に来てもらおうか」

ジン：

「ヤなことだ」

青年衛兵：

「抵抗するなら、それなりに対応する」

得物をチラつかせて安っぽい脅しをかける若い衛兵を無視した。水梨たちが街の外に出て行くのを見守りながら、足元に出現した強制転移の魔法陣をひよいと避ける。これは元々、移動すれば簡単に無効化できる代物だ。

中年衛兵：

「貴様！」

ジン：

「悪いが、捕まる気はないんでね。このまま帰らせてもらおう」

ダンディ衛兵：

「ならば、覚悟したまえ！」

洗練された、しかし野太くゴツイ両手持ち大剣を構える3人組み衛兵に微笑みかけると、ジンはフェイスガードを引き下ろした。全力である。背後からの突きを見もせずには逃げながら、水梨たちの出て行ったゲートに向かって移動を開始する。残りは50m程度だが、1キロにも匹敵する濃密な時間の始まりだった。

ジンの目的は1人も殺さずに突破することだ。すると、衛兵の処理限界数は20人程度になる。足を止められ、四方から攻撃を受ければほどなく死亡することになるからだ。衛兵は次々と人数が増えていくため、20人が集まってくるまでの時間を考えれば、かけられる時間は30秒がいいところだろう。これはあくまでも衛兵を殺さない場合の限界を考えた場合の数値である。

現在のジンの実力は通常レベルで81。擬似特技 極意 を駆使したレベルブーストで130〜140レベルといった具合である。レベル換算で1.6倍強。レベルだけでは測れないものを含めて別の表記法を使えば、90レベルのレイドランク×2.5付近ということになる。レイド×1が24人組み相当なので、90レベルの冒険者 で60人と同規模の戦力を有していることになる。厳密には60人の冒険者で倒せる敵を、ジンは1人で倒せるということだ。実はこの2つの意味は大きく異なっている。

衛兵を相手にした場合、ジンは70体までなら確実に倒すことができる。巧くやれば200体ぐらいまでなら可能だろうとも考えていた。エルダー・テイルのようなMMORPGは、よくある日本製のRPGとは違い、50〜60レベルでストーリー上のラスボスを倒せてしまい、99レベルでカンストさせるのはただのオマケ、といった仕様にはなっていない。この世界のハイレベルモンスターは恐竜的な進化を遂げており、レベル差は戦力を決定付けてしまっている。このためジンと衛兵とのレベル差は30以上あるのだが、9

0レベルの 冒険者 にとっての60レベルとは違い、感覚的には50レベル以上の実力差を感じさせるものになっていた。

それから街中で出現する衛兵たちの特徴は、戦力の逐次投入にある。本来、それは愚策なのだ。100人対1人では勝てなくても、1人対1人を100回繰り返すのならば勝てる目も出てくる。しかも後者はジンにとって確実に勝てることを意味しているのだ。特に衛兵は敵として見たとき、かなり戦いやすい部類に属している。力押ししてくる敵はあまり怖くなかった。

仮に 冒険者 のレギオンレイド(96人組)と戦うことになったとしても、単なる力押しが集団だったとしたら、現状でも十分にねじ伏せてしまえるのだ。人間の怖さはそんなところにはない。多様性と考える力、連携、粘り強さ、隙を見つける観察力、目標を達成しようとするときの集中力……。数値に表れることのないそれらの特徴を無視するわけにはいかなかった。なぜならば、自分もまた人間のプレイヤーに過ぎないのだから。

ジンは考える。

もしも、衛兵100人と 冒険者 のレギオンレイドが正面から激突したらどうなるのだろう。もしかしたら 冒険者 は勝つてしまつのではないか。いや、普通に戦えばメインタンクは瞬殺されることになるので壁を構築する手段が足りないのだ。それでもどうにかかりはしないのだろうか?と考えてしまつのだ。そしてその方法はあるいは自分相手にも通用するのではないかと。

フロートイング・スタンス を使う間もなく、次々と現れる衛兵をかわし続ける。特技を使う場合、技後硬直に当てられると防ぎようがないため、少しばかりコツが必要になるからだ。同時に3人

から突き出された大剣の一つを弾いて作った隙間に体を捻じり込む。目まぐるしく連続する展開に、もはや目はさほど役には立っていない。見てからではまるで間に合わないため、距離感の補正に使うだけだ。そうしてミニマップから得られる情報に連動させた聴勁にも似た自動計算の感覚に身を任せる。ひたすらに柔らかく、深く身をゆだね、ひたり切り、さらに柔らかく……。

次々に追加されてくる衛兵は13人を数えていた。彼らはジンの予想よりも少しばかり連携がうまくいった。

正面に立ち塞がる衛兵に身をすり寄せ、そのまま寄りかかりながらターン。一気に全員を置き去りにしながら、最後の距離を駆ける。タッチダウンまで残り10m。衛兵はさらに3体が2秒前に出現したばかり。追加はまだ先だ。冒険者の移動距離は鎧を着た守護戦士といえども、秒間10m近くある。もはやジンを止められるものはいない。が、

目の前に衛兵がレポートで出現し、間をおかず滑らかな突きが放たれる。ジンは体を貫かれてしまう。逃れようのないタイミングだった。

ルール違反者にペナルティを与えるというゲーム上の要請によって衛兵たちの能力は決定されている。今回の場合は『街の外に出ようとするものを阻止する』という目的に拠っている。冒険者が街の出口付近で違反行為をして、そのまま直ぐに外に逃げるのを許す訳にはいかないからだ。それでは出口付近ではルール違反の行為がやりたい放題ということにもなりかねない。

しかし、いちいち街の出入り口を閉めるのは不便だ。システム上、衛兵が起動するたびに門が閉まるのだとすると、たとえ街中での犯

罪だとしても、門が自動で開け閉めされることになってしまふ。それは門としての機能を大きく損なうことになってしまふ。

結果、犯罪者としてターゲットされた人物が一定以上門に近付いた場合、衛兵が強制的にレポートの後に攻撃し、これを殲滅するということになっていた。この手の情報はよほど犯罪に詳しい冒険者でもなければ、知ることの無い部分に類するのだろう。

衛兵中隊長：

「バカな!？」

感じるはずの手応えがない。ジンを貫いたはずの衛兵中隊長がとっさに振り返る。すると、突き殺したハズの相手が転びそうになりながら外に飛び出て行くところだった。

『カウンターの斬り抜け』である。名も無きその技で、突如として現れた衛兵中隊長を突破し、ジンは脱出を成功させていた。強烈な前方推進力を引き出し、斬り殺す訳にはいかなかったため、剣は触れる程度の威力しか出せなかった。結果、反動が足りなくて転びそうになっていた。

こうしてジンは脱出に成功した。

衛兵中隊長は胸元に残る微かな鎧傷を舐めるような手つきで触った。いまの自分の攻撃を回避することもそうだが、街から出て行くこともありえないことなのだ。触っていた微かな傷痕が時間経過によって自然に消える。30秒程度という時間の間に出現した衛兵20人はそろって呆然と佇んでいた。そこではなんの痕跡も残らなかった。

街の出口付近にいた 冒険者 数人は、何かのもめ事なのは分かっていたが、その早業に、始まったと思ったら終わっていたと思うだけだった。衛兵が犯罪者を懲らしめるのはそう珍しいことでもない。

ミナミの街の外では、水梨たちがなんとなく立ち去り難く、その場にまだ突っ立っていた。

ふーみん：

「ううう、あのジンって人、やっぱり死んじゃったよね？」

キサラギ：

「そう、なるだろうな」

水梨：

「……………」

ふーみん：

「どうしよう？ どうしたらいいかな？」

キサラギ：

「それは流石に、どうにもならぬ……………」

ジン：

「たったった……………つと、10点満点っ！」

その時、転びそうになって手を振り回したジンが街から飛び出してくる。実際に時間差で言えば30秒程度しかかかってはいない。他人を見捨てて来たことで沈んでいた気持ちが立ち直るよりも速く出てくるのに決まっていた。

ふーみん：

「え、っ？」

水梨：

「な、に……？」

ジン：

「ありや、おまえらまだそんな所にいたのかよ。ほれ、追っ手が掛かる前に逃げんぞ？」

キサラギ：

「あ、ああ」

ジンは恥ずかしい独り言を聞かれた照れ隠しに、マトモそうなことを言つて誤魔化していた。

衛兵は都市魔法陣の機能している部分までしか出てくることは出来ない。出てきたとしても、ムール・アーマーが機能していないため、脅威ではなくなっているだろう。しかしミナミは今や *Plant Highway* としてひとつに纏まっており、街の外へは 冒険者 が代わりに追撃してくる可能性があった。

水梨：

「いや、だからちょっと待て、……どうやって逃げて来たんだ？」

ジン：

「ん？ がんばって、必死になって逃げて来たに決まってるんだろ」

ふーみん：

「それはそうかもだけど、いや、でも、だって……えええ？」

キサラギ：

「後にしよう。とりあえず今は戻らんな」

なんだかいろいろと納得のいかなかったふーみんは、「あたしの心配を返して」と意味のわからないことを言ったりした。ジンにアホの子扱いされ、ちよつとへこんだりしていた。

一方でジンは「金回りだのプライドだので面倒だろうから、俺のことは報告しなくていい」と口止めするのに留めておいた。だれも本当のことは見ていなかったし、推測でいろいろと言われることにはなったが、さつき嬢以外で正しく理解できた人間はいなかった。

そのまま一行は仲間の元に戻って報告をしていた。葉月は無事を喜び、シュウトとの約束どおりにハーティ・ロードの元メンバーである Plant hwyaden の参加者数人に分かっている外部状況を伝えた。元の仲間を優遇したのは『種まき』のようなものらしい。

撤収の準備はほぼ終了していたため、この念話が終われば出発できるはずだった。

本拠地の集落でまっている仲間たちとの合流は、念のために迂回して行う予定でいたのだが、霜村たちが作戦行動で外出中だと連絡を受けたため、大体の待ち合わせ場所を決めるべく葉月はあちこちに確認をとっていた。

迂回するにしても、北に淀川が流れていることが問題だった。この川を渡ることのできるポイントは限られてくる。もっと言えば、実際の地理の他にゾーン間の繋がりを理解していなければならず、地図をみて思うように移動するのは難しいことだった。現実世界で都市部にあたる地域は、大阪にせよ東京にせよ、かなりの広範囲に渡っているのだが、ゲーム世界での大地人人口の少なさから、大半が廃墟、もしくは完全に自然にかえってしまった。これらの部分、特にミナミやアキバといったプレイヤータウンに隣接する地域では、初心者向けゾーンの設定などの関係で割合こまかいゾーン設定がされてしまっているため、距離は短くても移動には時間が掛かってしまう。

一方で霜村たちの作戦は救出した村人の安全を図るという部分まで含まれるため、ミナミ以外でモンスターの脅威から身を守ることの可能などこかの都市を目指す必要があった。簡単な打ち合せの結果、港町コウベに向かうことに決まる。これまで拠点としていたハーティ・ロードの集落のあるポイントは比較的フィールドゾーンが大きく、そのつながりも緩いため、直線的な移動を行うには効率が良い。村人の救出を行う時間を考えても、迂回する葉月たちよりも速く移動できるかもしれない。

こうした事情を勘案してハーティ・ロードの面子は港町コウベへの移動途中のどこかでの合流を目指すことになる。これは野外で行うのは想定よりも難しいため、本来はやってはいけないアクロバティックな選択だった。現実世界であれば、車を利用することで国道や高速道路を目印にしてそのどこか、と決めることができるのだが、その手のインフラは崩壊して痕跡がない場所も多い。逆にいえば、それだけ自分達の能力に自信があるということでもあるのだろう。

スザクモンの鬼祭りによるモンスター群の脅威に加え、ミナミの冒険者たちの迎撃がいつ始まるのかという二重の恐ろしさもある。首の後ろにちりちりとした焦りに似た感覚を覚えながら、葉月は移動を開始した。ゾーンを移動すれば途中でPlant highwayの冒険者と行き会うかもしれない。最悪、戦って突破することも必要かもしれない。

葉月：

（だが、それでもやらなければ）

その先にすべきことがあった。遙か遠くの景色を見て、彼はいま、突き動かされている自分を感じていた。

39 戦いの舞

傷顔守護戦士：

「マズいぞ！」

高貞守護戦士：

「既に始まっていたか!？」

さつき：

「各自、散開して救援に当たれ!油断するな！」

一同：

「了解!」

霜村達が村に到着した段階で既に魔物が村の中に入り込んでいた。家の前で閉じられたドアを破壊しようとするモンスターが見えたため、咄嗟にさつき嬢が散開の指示を出していた。

霜村の選んだメンバーは、霜村本人とさつき嬢、睦実、長瀬友、傷顔守護戦士、高貞守護戦士の6人で、睦実、長瀬友の2人を除けば残りは前衛の戦士職という防御重視の選択だった。戻りに村人を護送することも視野に入れているのだろう。ここにユフィリア、ニキータ、レイシンというカトレヤ組が加わっていた。言いだしっぺのユフィリアが「絶対に行く!」と言い張ったのは言うまでもない。

村の各所で個々人が戦うことで応急処置的に時間を稼ぎ、霜村を中心とした本隊が援軍に行くという戦法で手早く処理を終える。前衛が多過ぎる配置であったことも、今の時間稼ぎには向いていた。

終わってみると、村人には重症者が出ていた。かなり酷い傷で本

来なら死を待つしかない者が3人もいる。ユフィリアと睦実が涙を流してすがり付く家族を引き剥がし、回復呪文を使った。苦しんでいたのも一瞬で、中級の即時回復呪文であっさりと完治させることができた。

即時回復呪文とは、多くのRPGでメジャーな存在の、『瞬時にダメージを回復する』タイプの回復呪文のことを意味する。ある意味では通常の回復呪文ということになるのだが、施療神官の反応起動型回復呪文や、森呪遣いの持続型回復呪文に対応する用語として、即時回復呪文と呼ばれている。

ユフィリア：

「間に合って良かったね」

睦実：

「うん、うん……………」

うつむいて泣きそうになっている睦実の姿を見ながら、さつきにはその気持ちが分かって心苦しかった。つい先ほどまで「別に助けなくてもいいものだろう」などと思っていたからだ。

ところが目の前に被害者がいて、その家族が悲しんでいれば、たとえ間に合って助けられたにしても、自分が恥ずかしくなりもするのだ。助けに行こうと言い出したユフィリアなればこそ、素直に「間に合って良かった」と言えるのだ。しかし、自分達にそんな資格があるのだろうかと複雑な気分になってしまう。別段、油断していたつもりもないし、最善を尽くしていたつもりだったのに、それだけでは全く足りていない。

本当に、助けられて良かった。間に合ってよかった。自分達に助ける力があってよかった。そして、ユフィリアが助けたいと言ってくれて本当によかった。

高貞守護戦士：

「さつき隊長！ モンスターの追加です。広場に来てください」

さつき：

「了解した！」

睦実&ユフィリアと一緒に広場へ移動する。村の中央部であろう広場に来ると、状況は一瞬で理解できた。東の峰から亜人間がこちらへ向かってくるのが見える。蠢くその姿は軽く100体を超え、その勢いはまだ途切れることがない。最終的に200体になるのか300体なのか、はたまた1000体を越えるのかもしれない。

仲間たちに広がる沈黙が重い。

数が多過ぎる。こちらの戦力は9人きりだ。何よりもここで仲間を失うわけには行かなかった。誰かが死んだ時、万一、蘇生が間に合わなければ、ミナミに転送されてしまう。今度はふーみんの時のように助かる見込みはないだろう。しかし、放っておいて逃げ出せばこの村人は全員が死ぬしかない。

村の代表者が血相を変え、脱出の準備を急がせるために出て行った。しばらく他の都市に避難するにしても、こまごまとした荷物を持って行くこうとする者が少なからずいるためだ。いろいろと諦めるしかないだろう。

霜村：

「やるしかなかつ」

他のメンバーもその言葉に同意する。しかし、その悲壮な決意は自暴自棄と紙一重のものだった。良くない雰囲気の流れに流されている。こんなコンディションでは、僅かにでも均衡が破られた時にどうな

るものか。さつき嬢は粘ることが出来なくなると予感していた。

レイシン：

「ちよつと良くない雰囲気だね」

ニキータ：

「数の多さに萎縮してるのね……」

レイシン：

「何かで気分を変えられればいいんだけど」

ニキータは自分がほとんど恐怖を感じていないことが不思議だった。この場にジンがいれば余裕で眠そうな顔をしていただろうし、シュウトがその横でワクワクしているのに、顔には出さずに澄ましていたはずで、それを見て自分は和んでいたのだろうな、と思う。シュウトは平和主義そうな顔をしているが、実はかなりの戦闘好きだ。アレなら元々戦闘ギルド シルバー・ソード にいたのも当然だろう。ジンと一緒に戦っていればそれで幸せなのだから、周囲の女の子はおもしろくないに違いない。

彼らがいらないのに、自分は恐怖を感じていない。本当におかしくなってしまったのかもしれない。（慣れは怖いな……）と独りごちる。一息ついて、どうしたものか？と考えていると、横に来ていたユフィリアと目が合った。

ユフィリア

「ニナ、どうしたの？」

ニキータ：

「……………そうね、久しぶりにアレ、やるっか？」

ユフィリア

「アレ？……………うん！」

悪い方に想像を働かせてしまっている仲間達を励していたさつき嬢だったが、あまり効果は上がっていない。残り時間も少ない。霜村はなぜか沈黙したままだった。……さつき自身にとっても、そんなに勝ち目があるとは思っていない。しばらく時間を稼いで、村人達と一緒に逃げられればそれで正解なのだ。自分達の役割は一時的な時間稼ぎに他ならない。そう頭では分かっているけど、まだ途切れぬ魔物の群れが見えていると、目に見える分、不安になってしまうのだろう。

リイイーン

その音にハツとなって振り返ると、そこにはユフィリアが目を閉じて立っていた。彼女の後ろにはニキータが弓を持って控えていて、続けて2度、3度と弓弦を弾くと、幻想的な音色が心地よく周囲に響き渡った。弓は 吟遊詩人 の使う武楽器という特殊な装備だろう。しかし、彼女達は一体何をするつもりなのか。その奇妙な光景に目がまるくなった。

前触れもなく、すい、とユフィリアが動き出す。表情の消えた彼女は、その美しさがいつそう際立ってみえた。首筋に手をやり、茶色の長髪を持ち上げる。しつとりと重そうな髪が艶やかに輝き、そのまま開くように手を離せばフワッと広がり、そのまま滑らかに波打って流れ落ちていった。

ハーティ・ロード のメンバーは度肝を抜かれていた。何が始まったのか理解が追いついていかない。髪をかき揚げたユフィリアを見て、（シャンプーのCM？）と思うのが精一杯だ。冷静にツツコミを入れられたのはそこまでであり、流れ落ちる髪に視線どころ

か、魂まで奪われそうになっている。……凶悪なまでの美しさは脅威以外の何物でもなく、冷たく輝く美貌からは痺れそうな気配すら漂ってくる。否、息を呑むと、空気の冷たさにノドがひりつくではないか。

傷顔守護戦士：

（バカな、今は夏だぞ……）

突如として出現した幻想的な舞台に、戦場の重苦しさは吹き散らされてしまう。

ゆっくりと開かれていくユフィリアの瞳。腕を天に掲げてゆく姿に、祈りのような神秘的な表情が加わる。その場に居たものは、大地人の村人も含めた全員が、モンスターの接近も忘れてうつとりと見入ってしまった。

そつと腕を下ろすと、ユフィリアは不安そうに自身を抱きしめた。観衆も寒さのようなものに身をすくめる。そこに炎のような赤が目に飛び込んでくる。……ニキータだ。ユフィリアを庇うように前に進み出ると、2人は恋人のように寄り添って立った。ユフィリアが安堵の薄い微笑みを浮かべるや、世界にあたたかさが戻ってくる。

ニキータの手に握られたサーベルや、派手な色遣いの男装ファッションは、分かり易い男装の麗人のそれだった。仕草は男性にとつての男性らしさではなく、『女性からみた男性らしさ』を表現している。そのことによってニキータはこの状況をフィクションへと変えてみせてしまった。これには大きなプラス効果がある。

ユフィリアの美しさは現実のものである。それ故に、脅威となってしまうのだ。現実であれば、簡単に心を許さないようにブレーキ

を掛けなければならぬ。だからなのか、逆に人間はフィクションの中に真実を見るのである。自分よりも一回り以上も若いアイドルに血道を上げる人間がたくさんいるように、フィクションであれば遠慮なく熱中することが許されるということを、多くの人が体験として知っている。

ユフィリアとニキータが全てを計算していたというわけではない。始まりは、ちょっとした余興でポーズをとってみせたりしたことだった。大災害 からこつち、あちこちのギルドで傭兵のように集団戦に参加していたことで、盛り上げ係のような真似をしていたのである。好評を博して何度もリクエストされるようになり、お呼びが掛かり易くなっていったので、そのまま続けていたのだ。飽きられないように簡単な趣向を凝らすようになり、落ち着いたのが現在のユフィリアを守る男装のニキータという演目だった。

これはジン達の前では一度もやったことがない。シュウトはシルバー・ソード 時代に見ているハズだったが、ジン達の前で演じるのは少しばかり気恥ずかしかったこともあるし、何よりも『必要がなかった』のだ。

ユフィリアとニキータは、お互いの背を預けるようにして立つと、それぞれの得物を魔物の群れに向けて『戦う』という決意を表現してみせた。

長瀬友：

「すごい……きれい……」

睦美：

「ファビュラスマックス……」

睦実が長瀬友と手を取りあって興奮しているのをみて、ニキータ

はウインクを送る。この手のサービス精神がなければこの役は務まらない。

睦実：

「きゃー、きゃー、きゃー！」

長瀬友：

「ああつ、ニキータ様あん」

身悶える2人。ナガトモなどはシユウトに熱を上げていたはずが、あっさりとニキータに転んでしまった。彼女たちのようにノリが良いのはこういう時にはありがたい。

霜村：

「ふはははは！……なるほど、見事な芸だ。我等も負けていられんな！」

愉快そうに大笑する霜村が前に出る。

刀を胸元に掲げ、ピタリと動きを止めたかと思うと、長い刀をズラズラズラつと引き抜いてゆく。霜村の愛用する変身刀『華不花』である。鞘から抜き放たれたその一振りには、既に一回り以上も大きさが異なっている。それはどうやっても鞘に収まるはずがないものだった。軽く振ってから肩に担ぐのだが、その姿は悔しい程にキマっていた。

ハーティ・ロード の戦士たちも次々とおのれの武器を抜き、構えてゆく。その姿には歴戦の誇りが戻ってきていた。

レイシン：

「それじゃ、こっちの番かな？」

そう呟くと、意外と茶目っ気のあるレイシングが、マジックバッグから異様な武器を引き出す。美しくも禍々しい黒色で染め抜かれたドラゴンホーンズだ。中央部に盾の代わりとなる竜頭の飾りは精巧な作りで、まるで生きているかのよう。初めて見る者たちをギョッとさせながら、準備運動のように軽く打ちこみの形をなぞっていく。最後に高く跳びあがると、気合の入った一撃をビシッと決めつつ、さつき嬢の右側に並んだ。

さつき：

「マドウー、いえ、変形のファキールズ・ホーンズですね？」

レイシング：

「正解。……話は聞いているよ、凄く強いんだってね」

さつき：

「いえ、私などまだまだです。ジン殿と組まれている貴方には物足りないでしょう」

レイシング：

「そっか、もう知ってるんだね？」

さつき：

「……はい」

恥ずかしそうな、誇らしそうな表情をすると、さつき嬢は剣を上げて合図を送った。それに応えて傷顔守護戦士が気合の入った声を上げる。

傷顔守護戦士：

「おおおおお〜っ！」

だん、だ、だん！

この声が合図だったのだろう。ハーティ・ロードのメンバー

がそれぞれに同じリズムを刻んでいた。地を踏みしめるもの、手を叩くもの、武器を打ち鳴らすものもいる。

だん、だ、だん！

傷顔守護戦士：

「ウォー・クライ！」

打ち鳴らされるリズムに特技の使用が続く。その効果が体に纏わり付くように感じられる。

ウォー・クライ。

守護戦士の用いる大規模戦闘用の特技のひとつであり、味方の士気を鼓舞することで、各種能力値を上昇させる効果があるものだ。通常の特技であれば、1グループ（冒険者）の場合は、1パーティの6人）までにしか作用しないものが大半だが、この特技はレギオンレイドまでの仲間全員に効果を波及させることができる。

他のBuff（）と競合しないことや、効果が長く続くこと、リキャストが短いなど、デメリットが殆ど存在しない代わりに威力も小さい。1人分のウォー・クライは重ね掛けできないが、別の守護戦士がそれぞれ使えば、4人分までを重ね掛けすることができる。4人が使ったとしても、まだその効果は小さいのだが、9人まで強化可能であるため、チリも積もればなんとやらで、使うと使わないとは大きく違ってくる。

（）バフ。自分や味方の能力値等を向上させる呪文やスキルの効果。

だん、だ、だん！

高貞守護戦士：

「ウォー・クライ！」

傷顔守護戦士に続いて二人目の ウォー・クライ が発動した。

だん、だ、だん！

だん、だ、だん！

リズムに合わせて体を動かすことで、心までもひとつになっていくようになった。ユフィリアも楽しげに体を揺らして手を叩いている。この儀式は ハーティ・ロード 独自のものなのだ。誰かが遊びで始めたものが、そのままギルドのしきたりようになって続けている。現実世界にいた時はモニターの前でみんなが音を鳴らしていたものだ。

だん、だ、だん！

だん、だ、だん！

段々とさつき嬢の背中に全員の視線が、気持ちが集まっていく。焦らすかのような反応のない彼女を動かそうと、音が強まっていく。最高潮に達するかどうかという時、逆手にもった剣をサツと掲げると、さつき嬢は一気に地面に件を突き刺し、その言葉を発した。

さつき：

「ウォー・クライ ！！！」

秘伝にまで高められた ウォー・クライ の効果が全員に波及していった。能力値の上昇だけではなく、士気がたかまることで一体

感に包まれる。全員が自然と鬨の声を上げていた。魂に炎が灯る快感は、向かってくる敵モンスターを恐れる気持ちを粉々に打ち砕いてしまう。

守護戦士 のさつき嬢を中心に、右に 武闘家 のレイシン、左に 武士 の霜村が立った。後衛は 吟遊詩人 のニキータ、施療神官 のユフィリア、 妖術師 の長瀬友に決まる。

他のメンバーは自然と村人の脱出を誘導する役目を担う。

睦実：

「さっちゃんを、お願いね？」

ユフィリア：

「うん、まかせて！」

頷き合うと、睦実は走って行った。

作戦は村の入り口で迎え撃ち、後退しながら広場に誘導するといふものだ。入り口で防衛しようとする、モンスターが広がってあちこちから村に入り込んでしまったためだ。あえて動線を決めて誘導し、最終的に広場の入り口で押さえ込むことにする。

さつき嬢は襲い来るモンスターに先制の一撃を決めた。

ジン：

「タウンテイニング・アサルト ……いいぞ！」

初撃だけジンがタウンテイング系の攻撃特技を使えば、後はアタッカー4人が敵に群がるように躍り掛かっていく。こちらは前衛に5人を配置しており、暗殺者のシユウトとキサラギ、盗剣士の葉月と水梨が 守護戦士 のジンをオマケのように中心にして 囲む超攻撃的シフトであった。後衛は潜入班のヒーラーが1人で務めている。その他の潜入班の仲間や、妖術師 の石丸、吟遊詩人のふーみんは今のところ補欠要員としてベンチを温めている。

葉月たちはミナミの地理をよく把握していて、冒険者があまり利用しないゾーンを選んで移動している。冒険者とすれ違う場合も、顔を合わせないような地形だったので問題はなさそうに思える。しかし、どうしても遠回りせざるを得ない様子で、移動するゾーン数が多くなってくると、敵の出現頻度も高くなってしまふ。出てくるのは大半が雑魚モンスターなので、殲滅速度を優先すると物理攻撃職がMPを惜しまずに突撃する方が良くなってくるのだろう。

範囲攻撃呪文をもっている妖術師を配置する場合、ヘイト管理に失敗してターゲットが後衛に跳ねてしまうことを考慮しなければならぬ。このせいで妖術師のプレイヤーは慎重な特技使用が求められることになるのだし、吟遊詩人の永続式援護歌などの支援が必要になってしまう。雑魚が相手であればアタッカー陣に多少の無茶をさせてでも殴らせてしまい、ダメージを回復役が補う方が、遠慮のない分だけ早い。

物理アタッカー4人の突撃という圧倒的な殲滅速度から、ジンはタウンテイングだけしていれば良くなり、長期戦にはなりそうもないことから、いつもよりも暇そうにしていた。ここはアタッカーの面目躍如ということであろう。

葉月はレイピアの二刀流使い。範囲攻撃を中心とした構成であり、

たびたびProc()が発動していることから装備品はかなり良いものを使っている。敵の群れを広範囲に刈り取って行く戦い方に上手さがあつた。指示出しも速く、流石に参謀タイプだと思われる。

()プロック、手続き発動。ここでは武器攻撃時の『追加攻撃』によるダメージの意味。属性剣であれば、炎や氷、電撃などが追加ダメージになる。暗殺者は威力の高い毒をProcとして武器に付与することができる。

もう一人の 盗剣士 である水梨は、長剣に小盾を用いるライトフェンサー型で、攻守のバランスが良い。以前にシュウトに一蹴されているのだが、一緒に戦ってみるとかなり良い使い手なのが分かる。特に視野が広く、(粗雑なイメージとは真逆の)フォローの早さが印象に残る。どちらかといえば、範囲攻撃よりもDebuff() 攻撃の使い方が本来の持ち味のようだ。

()デバフ。buffと反対にマイナスの影響を敵に与える効果。

キサラギは派手さの無い暗殺者で、物足りない気分させるが、安定した実力で信頼を勝ち得ているようだ。弱った敵にトドメを指す場合はどうしてもオーバーキルになってしまうのだが、それがなければシュウトとさして変わらないダメージ量を出しているように思える。

逆に水梨からみたシュウトの印象は、ひたすら効率的に動こうとする機械みたいなヤツという評価だった。ちよつと見ただけでも確かに上手いのだが、それがどこか異質だった。デキの悪いAIが操っているというわけではなく、未来のコンピューターが未来予測して最適手を選んでいるような気持ち悪さなのだ。良く見ると細かく

ポジションを変えて敵の流れをコントロールしていたりするし、周りのペースに合わせてゆっくりと振舞っているらしいフシも散見される。

水梨にしても負けたことが引つ掛かって、意識しすぎなのかもしれないのだが、見ている間に気付いてしまったのだ。……ヤツは手加減している。

ジンの方はといえば、今は完全にぼんくら 守護戦士 でしかなかった。

水梨のジンに対しての心境は複雑だった。初対面の印象は最悪で、仲間から伝え聞いた話に憤慨し、集落に戻ったら文句を言おうと決めていて、実際にそうしたぐらいだ。集落に呼び戻された理由が、そのジンを襲うためだと知らされて、流石に早まったと反省していたのだが、葉月などは「むしろ意外性があつていいかもしれない」と言つて気にしなかった。その状況の中、シュウトに殺される寸前でジンに助けられてしまった。

……ジンが自分を助けようとしたわけではないのは分かつているのだが、だから恩義を無視するのは自分のルールではありえないことだった。

顔を合わせる度、チワワだのマルフォ だのとからかわれもしたのだが、ぐつと堪えていた。だが、それが良かった。

結果的にジンはふーみんを助けに現れた。もしかしたら、水梨じぶんと一緒にいるというだけで、ふーみんを助けるのを止めてしまつていたらかもしれない。自分が邪魔にならなくて本当によかった。ジンがふーみんを助けるのを邪魔せずに済んだことは、ジンに対しての感謝というよりも、もっと別の、運命や神に対する感謝に近かった。

水梨は自分が少しばかり誇らしく、恩義を大事にすることの正しさに確信の度合いを深めていた。

葉月：

「ここで軽く休憩してMPを回復させましょう」

ふーみん：

「瞑想のノクターン 使いまーす」

ジン：

「進捗はどのくらいだ？」

葉月：

「遅れ気味です。モンスターの対処に時間を取られているのが原因です」

キサラギ：

「こればかりは仕方ないだろう」

葉月：

「スザクモンの本隊とミナミの冒険者が戦い始める前に脱出できれば、問題は無いでしょう。霜村の本陣と合流するぐらいの時間はあ
るはずですよ」

シュウト：

「村の救援に向かっているんですよ、そっちはどうなっています
か？」

ふーみん：

「さっき睦実に念話したけど、大規模のモンスターに襲われてて、
戦いが始まったって。」

水梨：

「おい、そいつはマズくねえか？」

ふーみん：

「睦実の言うことだから話半分じゃない？」

ジン：

「場所を選んで迎え撃てば大丈夫だろう。それより村人に犠牲を出
さないようにするのがな……」

石丸：

「離脱のタイミングっスね」

シユウト

「ここから支援には？」

葉月：

「残念ですが、辿り付くころには全て終わっているでしょうね」

ジン：

「なら、気にしてもしかたあんめえ。なるようになる。……………景
気付けに何か食うもんとかないのか？ 甘いのかさ」

葉月：

「ありません。…………そろそろ出発しなければ」

ジン：

「ちえー、つまらん」

鬱蒼と生い茂った木立の中を一斉に立ち上がり、先を急ぐ一行であつた。

さつき：

(なんて戦い易いんだろっ…………)

レイシンの手際の良さはさつき嬢からすると特筆ものだった。彼女の感じている印象をことばにすれば「ベテラン運転手の扱う高級車に乗っているような安心感」となる。

『強い/弱い』の評価で考えれば、『強い』の部類には入るだろう。その程度の自負はあつた。しかし、『巧い/下手』で考えたら

もしかすると『下手』だったのかも知れない(！)……それは驚きであった。自分のゲームプレイングや、大災害 以降の生身での戦闘を、周りの人はどういう目で見ているのかが気になってくる。メインタンクなのをいいことに、もしや周囲にカバーやフォローを押し付けていただけなのでは……………。

さつき：

(ジン殿の相棒パートナーをされている方なのだから、自分なんて…………)

比較してはいけない相手と比較すれば萎縮するより他にない。これ以上に不安が増殖する前に解消してしまおうと、戦いの最中にレイシンへ身を寄せる。

さつき：

「すみません、その…………へ、へた 　で」

恥ずかしくて顔など見られない。「へた」の一言は本当に小さな声でつぶやくことになってしまった。「え、何？」などと聞き返されでもしたら、もう一回言い直すことは無理だったろう。

レイシン：

「あ…………、ゴメンね、ちょっと余計なお世話だったかな」

さつき：

(うああああ()><()

あまり感じたことのない自意識の苦しみに悶えてしまう。

レイシンにしたところで、初めて組む相手なので丁寧に戦っていたに過ぎない。実はさつき嬢が可愛いのでサービスが過ぎてしまった部分はあったのだが、自分が悪かったのだらうと逆に謝ってこられてしまい、余計に身が縮まる思いをすることになってしまった。

さつき嬢は、これも仕方がないことだと分かっていた。目を逸らして避けていたものへの報いであるはずなのだから、甘んじて受けなければならぬ。

暗い思考の愉しみに浸りながらも、次々と目の前のモンスターに対処していく。普段よりも余裕があった。

さつき嬢を特徴づける要素のひとつは、その反射速度にある。そもそもゲーマーというものは反射速度にはうるさい生き物だ。ちょっとした時間さつき嬢をみても、たいていは「あのぐらいなら俺でも」
と思うものだ。ところが、彼女はそのまま1時間でも2時間でも集中したのと同じ状態を続けることができる『持続型高速反射』の持ち主であり、これだけでも反則級の能力と言ってよかった。

コンピューターなどの画面をみての操作といった部分反射力と比べ、戦闘というのは全身運動かつ、視野の確保などの複合要因によってなかなかたたない。剣道の経験によって高められた彼女の反射速度はより実戦に適応したものに昇華されている。廃人ゲーマーも含めた精鋭揃いの部隊であっても、しばらく一緒にいれば誰もがさつき嬢に頭を垂れることになった。これはある種の反射速度崇拜もある。

多くの人間が経験（による大雑把な対処）や予測によってこの反射速度を補おうとする。それらは高めることによって別種の能力に変質するとはいつても、やはり初期的には『逃げ』に近い。完全な上位能力となるとジンのような超反射ということになってしまっただが、やはり素質や才能の差として認識されている部分が大きく、訓練対象として捉えられていない。

レイシンの勘にしても、やはり経験や無意識の予測、予兆を感じ取る観察力などの『感覚の総和』によって超反射へと近づけたものである。ちゃんとした高速反射を使えているさつき嬢には尊敬の念

を感じないではなかった。

しかし、かといって反射速度だけで戦闘が巧くなるといわけではない。特にレイドではさまざまなリソースを管理し、最適な行動へ近づけていかなければならない。その中でも特にヘイトの管理は重要だった。

霜村：

「ヘイトを処理するぞ。ユフィ、回復を頼む」

ユフィリア：

「うんっ」

メインタンのさつき嬢はともかく、レイシンや長瀬友に蓄積したヘイトは定期的に処理しておくのが良い。霜村はパーティのヘイトをかき集める特技を使うと、続けてその処理のために『鬼神』と化す。

鬼神。

サムライ

武士の爆発力を支える特技のひとつで、主に加速状態になることができる他、特技使用時のキャストタイムの短縮や、スーパーアーマーと呼ばれる『よろけ』や『ノックバック』などを無効にする能力が付与される。内容的に攻撃型スタンス（構え）にも近いのだが、短時間の自己Buff扱いのため、スタンス系特技を重複させられることも爆発力に寄与している。

しかし、その最大の特徴は、使用時間中のヘイト低下（毎秒）にある。この要素をうまく駆使することでパーティ戦闘やレイド戦闘でのヘイトコントロールをこなすことが可能になってくるのだ。：

… 武士とは、もっとも鋭利な武器を扱い、死をも恐れず、逆にその恐怖を身に纏うことができる東洋の恐るべき剣士なのだ。鬼神化によって挑発タウンテイングを超えて、相手に恐怖を与えながら闘い、己へのへ

イトを失っていく能力でもあった。

使い方によつてはかなり有利となる特技なのだが、武士の特技の例にもれず、この技の再使用規制時間も長い。しかも手持ちのヘイトがゼロになれば強制的に終了となつてしまう。暗殺者や盗剣士といったアタッカーにとつて垂涎の能力なのだが、前衛の戦士職タンクからすれば使い方が難しくなつてしまう。

俗にタゲ回しと呼ばれる戦術による『メインタンクの変更』にも関わらず、さしたる混乱も見られなかった。大きく加速した霜村は、立て続けに強力な特技を使つていく。敵を蹴散らす意味の他にも、ヘイトを集めて鬼神化してられる時間を延長するのがその狙いであつた。

さつき嬢も一息つきつつ、タウンテイニング特技を使つて自分へのヘイトを再度獲得してゆく。このためにもう一度さつき嬢にターゲットが変更されることになるはずだが、ユフィリアは誰になにも言われなくとも反応リアクティブヒール起動回復によつてクッションを作つて対処していた。つまり、予期せぬタイミングでさつき嬢にターゲットが跳ねたとしても、慌てなくて済むのだ。

MPを供給しているニキータは、弓を射ながら、辛抱強くその時を待っていた。村人が脱出を終えれば、ここからの撤退が始まる。さすがにハートイ・ロードの面々は一流で、誰も不満や焦りといった感情を漏らすことがなかった。なれば、自分もカトレヤの一員として先に引くような真似はしたくない。

霜村：

「来るぞ、備えろ！」

不意に発せられた霜村の言葉を裏付けるように、背後から何かが飛び、モンスターを巻き込んで大きく炸裂していった。それは、雷

を纏った大きな鳥、召喚術師の扱う 雷鳳凰 だった。

弥生：

「おまたせ！準備はオーケーよ！」

ラヴィアン：

「レイシンせんせー！お疲れさまでーす！」

霜村：

「よしっ、撤退するぞー！」

ここで現れたのは、居残って撤収作業を担当していた弥生たちであった。弥生は丁寧な片付けを放棄して素早く仕事を終わると、いち早く援軍としてやって来ていた。そうして 雷鳳凰 で作った隙を無駄にせず、素早く撤退を行う。

気がつけば村に人影は既になく、村人は睦実たちに護衛されて村を後にしていた。これからはこのリードを活かして追いつかれぬように逃げていけばよい。

港町コウベに向かう間に、今度は葉月たちと合流しなければならぬ。しかし、状況はだんだんと悪化の一途を辿っていた。村人を護衛しながらの逃避行であり、まだまだ油断できる状況にはない。

それでも、ミッションを成功させて一段落がついたことを素直に喜び、誉めることを霜村は忘れることはなかった。

災難を避けるべく、人も動物も、モンスターでさえ西へ、西へと移動していく。そんな中、かなりのスピードで東へと疾走する小集団パーティがあった。

猫科の騎乗生物の背が波打つと、その下で乾いた大地が土煙へと変わり、背後に長く尾を引くことになる。たくましい筋肉が躍動し、人が跨がってもまるで速度が落ちる気配がない。……それは大型のサーベルタイガーであった。

一 剣牙虎 サーベルタイガー。

現実には剣齒虎けんしこもしくはスミロドンと呼ばれ、猫科に分類される肉食獣の総称、絶滅した幻の虎である。その特徴はなんとと言ってもその巨大な牙だ。ゲームに登場するサーベルタイガーは大きさも強さもまちまちだが、騎乗生物としては大型強化されている。虎の中でも最強と目されるベンガル虎、もしくはアムール虎を何倍も強くしたものがサーベルタイガーだ。

騎乗生物として彼らを従えるのは難易度も高く、貴重レアであるとは言えるが、さほどの特殊能力は備えていない。純粋な強靱さが売りという剛毅な代物である。召喚時間が長く、巡航速度・最大速度も馬を大きく引き離している。特に踏破能力に優れることから山岳部も得意、ジャンプ力もある。このように馬と比較すれば圧倒的だが、その他の特殊能力を持つ騎乗生物、たとえば飛行能力を持つグリフォンなどには見劣りすることになる。ちなみに要求する食料（＝肉）はかなり多い。

戦闘力も低くはないが、90レベルの 冒険者 の役に立つとい

う程ではない。騎乗戦闘時に、相手の騎乗生物（馬や大型狼、戦闘猪など）を噛み殺すのが主な利用法として想定されている。

流れる景色は面白く感じるほどにあっけなく消え、どん欲に次の景色を呑み込み続ける。強靱な骨格をもつサーベルタイガーだが、その背中では意外なほど柔らかく、鞍を使って跨がっていてさえ安定する場所ではない。慣れぬものは振り落とされるのを恐れてしがみついてしまう。一つには、その圧倒的な速度感に原因がある。馬に比べ全高が低く、騎乗者の視線も地面に近くなるため、余計に速く感じてしまうのだ。

併走する者たちの先頭で、日除けに風除けも兼ねたフードを被った男が歯を見せつけるようにして笑った。犬歯が牙のようにのぞく。獰猛な笑みだ。黒いサーベルタイガーを楽々と乗りこなし、手練れだけが持つ、危険な気配を散らしている。前方で騒ぐモンスターの集団をジャンプ一発で軽く飛び越えてしまい、更に突き進んで行く。まるでミナミへと吸い寄せられるかのように。

霜村を中心とした一行は、村人の救出に成功し、港町コウベへと向かって移動を続けていた。出だしこそ良かったものの、この道行きは難航することが分かっていった。

まず最初に意識されるのは、冒険者と大地人とは体的にも速度的にも大きな隔たりがあることだろう。車や電車、飛行機といった移動手段を持たない大地人は、日頃から運動を運動とも思わずに行っている。従って、現代人であるプレイヤー達と比

べて、遙かに強靱な足腰をしていた。高齢者や子供達は別にしても、遅いと文句を言わなければならぬほどひどい話ではない。単にそれ以上に 冒険者 という存在が規格外だった。

これはシンプルに、モンスターの驚異に対処できる速度が足りない、ということである。襲われても追いかけられても逃げることは難しく、戦って追い散らすか、倒してしまっしかない。

加えて、移動している方向があまり良くなかった。ハイアンの呪禁都 や、そこから来ていると考えられる スザクモンの鬼祭が原因の大群からは反対方向へと遠ざかっているのだが、大群が生み出している『流れ』によって押し出されている周辺の動物やモンスター達までもが、同じ方向に逃げているらしい。

村人の50数名を、今は20人ほどのメンバーで護衛している。全方向への警戒を必要とするが、いかんせん手薄なのは否めない。少なくとも数の馬を呼びだして使っているが、戦闘になった時に暴れださないとも限らない。何頭かは軍馬だからいいにしても……、と霜村にしては悲観的な思考を重ねていた。村人の正確な人数も把握しておかなければならないと気付いて、指示を出す相手を考える。差配は弥生に一任してしまうのが楽でよい。考える役目は（今はいないが）葉月がやるべきなのだ。

霜村：

「……さつき、どうかしたか？」

念話をかける手間を惜しんで歩いていたところ、どことなく暗い雰囲気のさつき嬢に声を掛けていた。霜村は何も考えず先に話しかけたため、タイミングが悪かったかどうか、さつき嬢の反応を観察する。

さつき：

「いえ、特には……」

霜村：

「そうか。俺にしるとは言わんが、話しやすい相手に相談ぐらいしろ。そういうことも、これからはお前の仕事だから」

さつき：

「……はい」

返事をしたので頷くと、霜村はその場を立ち去った。

さつき嬢の方は、今までなら聞き過ぎてきてしまっていたような言葉の中に、様々な意味を感じとっていた。

これまでは他人に弱みを見せられなかった。それはちよつとばかり行き過ぎた態度だったかもしれない。コンディションを整えるのも戦士の仕事の内なのだから、メンタルな部分もキチンとしていなければならない。それは一人でどうにかするべき問題なのだ。……しかし、霜村はメンタルも含めたコンディションを調整するのに他者に頼れと言つ。

さつき嬢のリーダー像は『強い人間が仲間を引っ張るもの』という漠然としたものだった。部活で部長をしてきた経験からも、なるべく自分はそうあるうとしてきた。結果、最良だったと言えなかったかもしれないが、それは自分がまだ弱いからだろうと思っていた。

考えてみると、ハーティ・ロードのギルドマスターにしても、霜村にしても、人に何かをやってもらっている部分が多い。役割分担して任せてしまうことも多いし、「面倒だからまかせた！」といつて押しつけて笑つてごまかすことまである。

様々なリーダー像があつて、自分のリーダー像が正しいわけでは

ないのはなんとなく分かる。

自分のイメージする『強いリーダー』のことを考えると、自然と『敬愛するジン殿』へと思いが跳ぶことになった。あの方ならばどう考えるのだろう？と思っても、やはり本人に相談するのは（フレンドリストにも入ってないし）気恥ずかしい。

さつき：

（レイシンさんだったら……………）

優しそうだし、相談してみてもいいのかもしれない。戦いの実力もあるし、気配りも上手だ。他のギルドの人なので、変な気兼ねもしなくていい。うん、ばっちりじゃないか？

さつき嬢は、レイシンの姿を探して何気ない風に歩いてみることにしていた。まもなくその姿を見つけたことができたが、どうやらユフィリアが先客のようで、話しかけられたところのようだ。

ここに至る展開は、実はレイシンの『ポジショニング戦略』による影響が濃く反映されているのであった。

地域や年代によっても異なるのだが、一般的に引込み思案などで責任者をやりたくないタイプの人物が「充実した人生を送りたい」と考えた場合に重要な要素となるのが、この周囲の人間関係における『優位なポジションにいること』なのだ。日本では出世レースなどのトップ争いよりも、中堅の立場を争う方がよほど熾烈であったりする。出る杭として叩かれることなく、周囲の信頼を勝ち得て、困った問題には自分で対処しなくて済む、などという都合の良い席があるのだとすれば、そこが一番居心地が良いと考えるからだ。

男子の場合、よいポジションにいられば、女子の側から話しかけて来やすくなるし、自分から連絡をしなくても遊びに行こうと誘われることも多くなる。

この延長線上にあるのが参謀タイプのビルドで、責任ある立場によるプレッシャーは華麗に回避しつつ、世界を背後から牛耳って愉悅に浸るといふ頭脳派の真骨頂なのだ。

本来、モテポジションはレイシンの定位置であった。現在こそ、結婚してシュウトにその場所を譲っているものの、今でも優しそうなお兄さんとして一定の信頼を得ている。ジンにしてもこれらの仕組みに苦々しく思っただけでも、やはり役割もやり方も違うために対抗することはできなかつたりする。

現在レイシンのとっている中堅よりも少し上というポジションは、他のギルドのさつき嬢からも相談されやすい位置ということになる。理屈っぽい話ではジンに相談しても、もう少しソフトで感情的な話題となれば「レイシンなら優しくしてくれそうだし」という頼り方になりやすいのだ。

また、レイシンの戦闘の要諦もポジションにある。それは本人がそういう人物だからそうなのか、自分の勝ちパターンが戦闘にまで影響しているのかどうか、もっと言えばどこまで自覚的なのかすら、（長い付き合いのジンにも）わからなかった。もはや、そういう生存戦略で生きていると表現するのが適切なのだろう。

レイシン：

「……………それでどうしたの？」

ユフィリア：

「あの、ちょっと言っておかなきゃいけないことがあって」

レイシン：

「なになかな？」

間の悪いことで、ちょうどこのタイミングでモンスターの襲撃を知らせる声が聞こえてきた。

レイシン：

「あっと、ごめんね」

さつき：

「いきましよう、レイシンさん！」

ユフィリア：

「私もいく！」

さつき：

「いや、全員が動いてはダメだ。君らはこの場所を守っていてくれ！」

ユフィリア：

「そっか、わかった！」

後ろでその姿を見ていたニキータは、先ほどから少しばかり違和感を感じていた。何に対する違和感なのかを考えていて、試してみることにした。静かに歩み寄り、後ろからユフィリアの肩を先に触れる。不自然ではない程度に、一瞬遅らせて声を掛ける。

ニキータ：

「ユフィ？」

ユフィリア：

「ニナ？……どうしたの？」

普通に反応するユフィリア。やはりだ。背後からの接近に彼女は気が付いていない。

ニキータ：

「あなた、……ミニマップはどうしたの？」

ユフィリア：

「あ、……うーんとね、気絶して、起きたらもう使えなくなってる」

ニキータ：

「そう……」

ユフィリア：

「ごめんね？」

ニキータ：

「どうして？ 謝ることなんて無いでしょ」

ユフィリア：

「だって、モンスターが襲ってくるんだよ？ こういう時にあれば
すごく便利なのに……」

少し悔しそうにうつむくユフィリアをそっと抱きしめる。

ニキータ：

「そうね、ちょっと残念だったかも。でも、しばらくすれば元
に戻るかもしれないでしょう？ ダメなら、後でジンさんにも相談し
てみましょう」

ユフィリア：

「うん……」

ぬくもりが伝わるようにと思って抱きしめる。しかし、慰めるだ
けではダメなのだ。彼女が後悔しないように、村人を護り切らな
ければならない。ここで自分には何ができるのだろうか？……そう自問
するニキータだった。

全員で周囲を警戒し、モンスターに襲われても一時的に耐え、さつき嬢やレイシンが戦闘に加わることで、モンスターをはね除けてしまう。これは村に到着したときに行った戦術と同じものだ。敵の数が少ないので今はこれで間に合ってはいるが、この先はどうなるか分からない。葉月達がいらないことで、アツッカー不足が少し響いている部分もあった。

レイシン：

「流石だね」

さつき：

「いえ、そんなことは……」

戦闘終わりの何気ない会話というやつだ。人から誉められるのはやはり嬉しいもので、口元がゆるむ。とはいっても、素直に喜べる状況にはいなかった。戦闘中もどう相談を切り出したものだろう？などと考えながら戦っていたほどで、墮落したとまでは思わないが、以前ほど戦いに集中できていない気がしていた。

考えてみると、この流れは相談するのに悪くない展開の気がする。照れくさいのだが、思っていたことをそのまま口に出すことにする。

さつき：

「私は、その、弱くなってしまいました」

レイシン：

「そうなの？」

意外そうなレイシンの言葉に首肯する。

ジンの本気を体験して、自分の中にあっただ指針が崩れてしまったように感じていた。

戦士とは、心の持ちようで強さが大きく変化してしまうものなのだ。自分の可能性を無邪気に信じるのが才能のようなものでもあって、可能性を疑った者から順に『成長の限界』が壁となって立ち塞がることになる。

さつき嬢は以前ほど自分のことを信じられなくなっていた。

レイシン：

「……そっか、『弱さ』を知ったんだね」

カミソリのような言葉に心の肌を傷つけられ、血がゆっくりと滲み出す様を見ているような気分になる。これまでは『弱さ』を他人に押しつけ、自分は理解しないように努めてきたのだ。強くなるということとはそういう残酷なことだった。

さつき：

「これから先、どうすればいいのか……」

もう強さだけを見て、追いかけることなどはできそうにない。

レイシン：

「これまでに積み重ねてきた努力だって、そう簡単に消えたりはしないよ」

努力は裏切るとジンは何度も言っていた。それを分かっているレイシンだったが、裏切るまでは信頼できるのも努力というものだ。それに結局のところ、人間にできることは努力と呼ばれる何かではない。

ここでレイシンは自分のフィールドで思考する。

さつき嬢の状態をざっと見れば、下ごしらえや本体の料理は終わっているらしいことが分かる。あとは仕上げと飾り付けだけだ。「またオイシイところだけでもっていきやがった」と言われそうなシチュエーションに苦笑する。

彼女が求めているのはジンの言葉だろう。同時に、レイシン自身の言葉でなければ、説得できはしない。これは一見、不可能なように聞こえるが、そうではない。

多くの場合、人間が厳密に『言葉のみ』によって説得されることは希だ。その大半がバックボーンを感じ取ることで説得されている。たとえば「言っていることがめちゃくちゃでも、自信満々に振る舞えば、それだけで説得できる確率が上がってしまうものなのだ。」

料理をきれいに盛りつけたり、食器や、場合によっては食べる場所にまで手を加える理由も同じだ。論理的に考えれば、「きれい」と「料理の味」の相関関係は低い。料理が同じでも、食器が違えばそれだけでおいしくなるかといえ、それは疑問だろう。

ならば、何故きれいに飾り付けるのか。

答えは、逆からの説得を防ぐためである。お皿が汚れていたり、盛り付けが雑だったりして料理が美味しそうに見えない場合、ろくに味わいもせずただマズいと決めつける人間が一定の割合で存在してしまうためなのだ。もっと普通に「普通の味だ」と決めつけられた場合、その評価を覆すためには、これはもうかなり美味しくなければならなくなる。閉じられた目を開かせるには、最初の何倍ものエネルギーが必要になってしまうのだ。

人間は“意外と”味がわからない。雰囲気や味わっているケースも多い。一緒に食べている人や、その時の会話の面白さが味に上乘

せられてしまう場合もある。

このように、バックボーンに影響を受けやすく、そこから自分で自分を説得する効果が大きいのだ。

きれいに飾り付ければ、それだけで美味しく感じてしまう人もいる。金額が高いとそれだけで美味しいと思ってしまう。実際にそんな効果を狙っている場合もあるだろう。それで高い値段を取ろうとすれば確かにズルいかもれない。……それでも、マズいと決めつけて不幸な食事になるよりは、美味しいと思って幸せになるほうがずっといいものだろう。

今回のさつき嬢のケースで考えれば、レイシンの背後にジンが居ると感じさせればいいのだ。しかも彼女は聡い。無駄な演出を加えなくても自分の力で理解するだろう。

レイシン：

「『強いだけの人間は、鈍感で弱い。』」

さつき嬢は、はっ、と顔を上げる。ジンの言葉なのに気が付いたのだろう。続きを期待する瞳に思わず（可愛いなあ）とのんびりしたことを思う。

レイシン：

「ただ強いと弱い人の気持ち的理解できないから、バカになってしまふ。それは弱さだよ。怖いもの知らずの人は、慎重さに欠けるから危険を察知できないし、何度も同じミスをしてしまふ。孤独を知らない人は、仲間との絆を大切に思わないから連携も巧く行かない」

さつき：

「では、弱いままでもいいのでしょうか？」

レイシン：

「弱さはそのままではただの弱さでしかないから、磨いて使えるように整えないといけないんだよね」

さつき嬢は頷いた。1度、2度と頷き、言葉をゆっくりと胸に落とすようにする。

多くの強さは弱さの裏返しである。弱さと共に強くなっていくのだ。最初から人は弱さと共にある。同時に強さも共にあるのだろう。

レイシン：

「料理でも同じだと思うよ。味の濃いものばかり、火も強火だけ、なんてのじゃ美味しい料理は作れないよ。いろいろな食材があって、調理を工夫しなきゃね」

さつき：

「強い技や速い技だけで戦わないのと同じなのですね……」

スピードがあつて、反射神経も良かったために、さつき嬢は自分の強さを狭めているところがあつた。これらが通用しなかったため、ジンに封じ込められてしまったのだ。

レイシン：

「美味しいものを組み合わせるとき、やり過ぎると辛すぎたり、しよっぱくなったり、甘すぎたりするんだよね」

さつき：

「えっ？………はい」

もう大丈夫だろうと思ったレイシンだったが、残り半分を付け加えることにする。彼女は弱さまでも強さにしようとしている。それでは強くなるうとしていたであろう、これまでと変わらなくなってしまう。

レイシン：

「素材の味を活かした薄味が美味しい場合も多いよ。味の濃い調味料は邪魔になることもあるし」

さつき：

「それは、強くなり過ぎるなということでしょうか？」

レイシン：

「料理なら、『美味しいかったらそれでいい』んだよ」

さつき：

「勝てばそれでいい、でも勝利するには強くなければ……」

少し混乱したらしい彼女に、言い過ぎたか？と頭をかく。どうフオローしたものだろう。こちらの意図は果たして伝わるのだろうか。

さつき：

「いえ、相手が弱ければ、強くなくても勝てますね。でも、そのおつしやり様では、弱いままでも勝てということになるのでは？」

レイシン：

「弱いままで勝ったらダメなのかな？」

さつき：

「それは強いということじゃ………あっ」

ジンが壊した『小さな器』を取り除いてしまう。彼女はこれから

もつと大きな器を自分の力で作って行かなければならないのだ。自分もその手伝いが出来たのかもしれない。それは嬉しいことだった。

さつき：

「なるほど、強いから勝つのであれば、『味が濃いものだけが美味しい』ということになってしまふのですね？ ええっと、味が濃すぎれば美味しくなくなる。つまり、強さは弱さにもなる……」

レイシン：

「わかったみたいだね？」

さつき：

「いえ、まだ全然です。強さが弱さになるとしたら、今度はどうすれば……？」

レイシン：

「美味しければいいんだよ」

打てば響くように理解を示し、パツと笑顔になった。真面目一本な印象が強いけれど、笑うと年齢に似合うあどけなさが残っている。作り笑いをあまりしない子だからだろう、見ているだけで気分のいい笑顔だった。

さつき：

「でしたら美味しければ笑顔になります。笑顔が答えですね」

レイシン：

「それはいい答えだね」

さつき：

「勉強になりました」

すつと一步下がり、一礼する。非の打ち所もない礼儀正しさだっ

た。

淀川に通された、旧時代の遺産でしかありえない大きさの橋に差し掛かる。ところどころ朽ちて崩れているため、馬車や荷車が通るのは難しいのだが、冒険者が川を越える目的に利用するのならばこれで十分だった。

葉月と同じ組にいるシュウトは何気なく東の方を見ていた。川の周りは視界が良く利く。この向こうにスザクモンの鬼祭りによる大軍団がいるハズなのだ。しかし、スケールが小さくなった世界といえども、そう遠くまで見通すことは出来ない。行きに淀川を渡った時に比べ、その川幅は2倍か3倍ほどもあった。これは回り道をして河口側へやって来ているためなのだろう。

密集したゾーンは抜けたようだが、この先もモンスターの数は減らないどころか、増えていくらしい。霜村達はかなり先行しているのだが、村人を連れていく分、その速度は遅い。合流は西宮にしのみや付近になりそうだと葉月は全員に伝えていた。

西宮といえば、ジンの話していたナントカいう物語の舞台のはずだ。なんとなく（……幸運だといいな）と言ったジンの台詞が脳内で再生される。海の見える丘の上からの景色。それらは、そんなに日にちは経っていないのだが、けっこう昔のことに感じられてしまう。

橋の上にはモンスターの影はみえず、ジンはすこし下がった位置

で石丸と話をしていた。

シュウト：

「2人で何の話ですか？」

ジン：

「いや、これからの展開についてだな」

シュウト：

「これからですか、どうするつもりなんですか？」

石丸：

「どちらにしても、レイシンさん達と合流するまではこのままっスね。そのまま村人の護衛をするつもりなら港町コウベまで……」

ジン：

「金を払う気があるなら、元々の依頼通りにナカスまで護衛ってことになるかもな」

シュウト：

「それなら、高確率でコウベまでですね（苦笑）」

もうお金を払うつもりなんてないだろう。ナカスまで移動するという話も聞いたが、ジンから『あの話』を聞かされたことによる影響だ。気持ちは分かる気がする。ミナミの周辺で中途半端に活動するよりも、ナカスに拠点を持ちたいのだろう。

シュウト：

「その、葉月さん達がナカスに行ったとして、それからどうなると思いますか？」

ジン：

「……そりゃお前、Plant hwyaden 《プラント・フロウデン》に蹂躪されるだろうな」

誰も話さなかったので、ジンが続きを口にする。

ジン：

「痛めつけられて始めて人間は動き出す。まあ、殴る前に「殴られそうだったから」ってんで殴り返しちまうほど早漏なのも困った話だろうし、しょうがない部分はあるんだけどさ。それにナカスの連中だって、ミナミに攻撃される前から殺気立つほどバカじゃないだろうよ」

そうなると、ミナミに対抗するにはミナミに攻撃されなければならぬことになる。

シュウト：

「もうちょつと何とかならないんでしょうか？」

ジン：

「もちつけ。俺の話に影響されすぎだろ。合ってるかどうか分からないんだからさあ。……単に、通商条約を結ぶだけかもしれないだろ？ ナカス側にアキバの 円卓会議 みたいな代表者が出てこない場合、ナカス自身が長いものに巻かれる可能性だってあるんだし」

石丸：

「対抗策としては、ナカスに自治を確立し、先にアキバと同盟を組むなどが考えられるっすが……」

ジン：

「まあ、そつちはそつちで『自治を確立するためのピンチ』が必要になるかもな」

途方も無い話だった。ナカスに出向いたことすらない自分達がここで考えていることは不毛でしかないのだとシュウトにも分かってくる。たぶん、自分が納得したいがために抵抗しているのだろう。ジンを悪役にして論破されることで諦めたいのだ。

シュウト：

「ならば、いつそ、ミナミが世界を陥れようとしていると教えてしまえば……」

ジン：

「色眼鏡で相手を見るように誘導しろって？ ……だからさあ、その手のフィルターで相手を差別するのは慎重にやらなきゃならないんだよ。勘違いじゃ許されないんだぞ？」

石丸：

「ナカスが取り込まれるのは、別に悪いことじゃないかもしれないっす」

シュウト：

「石丸さん？ それって……」

石丸：

「ミナミとナカスの2つの Plant hwyaden になれば、自然と分裂しやすくなるはずっす。中心部から距離が遠ければ、意思の伝達も維持するコストも大きくなっていくのが自然っす」

ジン：

「たしかにそうだな。ナカスの街を焼き払って、ミナミへ移住させるように促がしたりしない限り、そう悪いことばかりじゃないのかもしれない。もっと言えば……」

そこでジンは言葉を止めた。

もっと言えば、アキバがミナミに取り込まれるのも、そう悪い話ではないのかもしれない。それは内部から Plant hwyaden を変える力になるかもしれない。そんな内容だろうとシュウトにも予想が付いた。

橋の上は少し風が強く、夏場には心地好かった。橋を渡りきろう

という時、シユウトは風にのって響く、女性の笑い声を聞いた気がした。

銀髪の女：

「なによ、コレ？ めっちゃくちやじゃない……」

高台から見下ろす景色は、モンスターの群れで満たされていた。好奇心の疼きに満ちた瞳はゾクゾクとしているのが明らかで、その光景を飽きることなく眺め続けていた。傍らに佇む愛馬の首の下から手を回し、その顔をいやらしい手つきで撫でる。その白馬は微動だにしない。否、馬ではない、角が突き出している。一角獣であった。プラスチックをはめ込んだような、つるんとした瞳には青い光が灯っている。

25 mほど離れた距離には、モンスターがいる。しかし、どうしても近づけないらしい。銀髪の女とその相棒を中心とした直径50 mの範囲だけが、モンスターの居ない空白地帯だった。この高台は、モンスターで埋め尽くされていたのだ。

銀髪の女：

「何か用？」

白く尖った顎が僅かに上がる。それは彼女が電話する時のクセらしい。念話でもなんとなくその姿勢になってしまうのだろう。青いカチューシャに付属しているリボンが揺れた。

謎の念話相手：

『ご挨拶だねえ、君のために僕も働いているのを忘れて貰いたいな』

銀髪の女：

「また、別人？あんた達って本当に謎ね？」

謎の念話相手：

『フフフ。君がご執心の“彼”だけど、ミナミへの介入を狙っていたのが失敗したみたいだよ。いや、介入する前に潰された形かな』

銀髪の女：

「フン、それでこんなになるわけじゃない。運命だとも言いたいワケ？」

謎の念話相手：

『この地域では、それを「天の配剤」と言っね』

銀髪の女：

「God's dispensation……」

謎の念話相手：

『これで、東と西、2人の付与術師が対決することになるだろう』

銀髪の女：

「そうよね！とっても興味深いわ！でしょう？ よりにもよって^エ

付与術師^{ンチャンター}が2人だなんて。さすが日本、面白いわ。面白過ぎるじゃない！ フフフ、アハハ、アハハハハハハ！」

彼女の笑い声は綺麗に響き、風にのってどこまでも、どこまでも運ばれていくのであった。

霜村：

「慌てて攻撃するな！ヘイトを考える！」

予期していたことだったが、そうなってみるとアツという間だった。村人を護る霜村の部隊は、今や周囲をモンスターに囲まれている。救い主になれるとすれば葉月たち分隊との合流しか考えられなかったが、四面楚歌なのは変わらない。

霜村：

「弥生、どうだ？」

弥生：

「ダメ、まだ距離があるみたい」

霜村：

「……自力で凌ぐしかないな」

範囲攻撃呪文を使えるメンバーは、目の前の敵を焼き尽くしてしまいたい衝動と戦わなければならなかった。しかし、下手に呪文を使ってしまうえば乱戦となる。乱戦になれば護っている村人に犠牲が出てしまう。どれだけ焦ったとしても、味方の守護戦士たちで壁を作って、前線を構築して敵を押さえ込まなければならぬ。

これはゲームでは当たり前の常識でしかないことだが、こうして実際に戦っていると、その当たり前を信じて良いのかどうか疑問に思えてくるのだ。ポリゴンで作られていない敵のリアルさが、ゲームと現実の境界を曖昧にしてしまう。醜い亜人間たちの臭気や耳障りな叫び声などは、確実に現実のものでしかないのだ。生理的な

嫌悪感に加え、周囲を囲まれているという圧迫感。プレッシャーは決して小さなものではない。ハーティ・ロードのメンバーはよく耐えて、戦いを継続していた。

そんな絶望的な状況の中でも、輝きを失わないものもいる。

さつき：

「レイシンさん、ここは私が」

レイシン：

「……任せたよ」

レイシンがフォローした方がいい場所は他にある。ここは自分だけでなんとかできると踏んで交代を促した。

肩の力を意識して抜いていく。さつき嬢はおのれの状態を自然体へと近づけようと試みていた。

さつき：

（ただ勝てばよい、とは思わない）

レイシンの思考法と比較すれば、『勝てばそれでよい』というのは、なんでもいいから『食えれば良い』といったことになるだろう。笑顔が答えであるのなら、卑怯な戦い方はしたくない。卑怯な戦い方は心にしこりを残すことになる。それはいつか、自分の技や身を縮めてしまいかねない。やはり、自分に恥じることのない振る舞いをするべきなのだ。

強さが弱さに、弱さが強さになるのだとすれば、それぞれ相手ごとに対処法が変わってくるだろう。従来の『構え』が自分の方向性を決めていたとすれば、自然体といわれるものは最終的に全ての相手、全ての状況に柔軟に対応できるものになるはずだ。泰然自若の

境地にやがて至れば、これもひとつの無敵の構えということになるのかもしれない。

荒くれ武闘家：

「さつき隊長、ありゃ、また強くなつてねえか？」

変態武士：

「……………」

荒くれ武闘家：

「聞こえてんのか？ 返事ぐらい……おい？」

持ち場を離れて、さつき嬢に近づいていく変態武士であった。

変態武士：

「さつきちゃん、戦闘中にすまない」

さつき：

「なんででしょう？」

周囲のメンバーはだいたい大人だ。さつき嬢を隊長と呼んでいても、冗談半分だったりする。それは演技なのだ。このため、特に「ちゃん」付けで呼ばれた場合は、演技は入っていないものとして対応していた。

変態武士：

「君って、確かハタチぐらいだったよね？」

さつき：

「ええ、それがなにか？」

次々と敵を倒しながら、受け答える。まだまだ心には余裕がある。

変態武士：

「すごく強いよ、すごく強いんだけどさあ」

さつき：

「いえ、私なんてまだまだ、ぜんぜんですが……」（苦笑）
変態武士：

「君って、どこまで強くなるつもりなの？」

彼は聞かすには居られなくなっていた。どこまで伸びるのかそら恐ろしくなったのだ。その問いにさつき嬢は少し長く考えて、

さつき：

「さあ………いけるところまでじゃないでしょうか？」

と言った。そんなことは考えたこともない。人の限界は遙か彼方にある。可能だと分かったのだから、歩むまでだろう。迷いは晴れた。強さも弱さも自分のもの。共に在るべし、である。

睦実：

「大丈夫！さつちんがいる限り、負けたりしないよっ！」

少し離れたところから睦実がそんなことを言っているのが聞こえてくる。自分の声が聞こえないのは分かっているが、どうしても言わずにいられない。

さつき：

「睦実、恥ずかしいから止めてくれ……」

ニキータ：

「落ち着いてください。大丈夫です。その石を下ろして」

ニキータは村人がパニックにならないようフォローに回っていた。モンスターの脅威から護ろうと思っていたのもあるが、半分は村人自身を警戒していた。

この世界での 大地人 はNPCではない。大人しく護られていくれるとは限らないのだ。以前に護衛した親子のケースでは、恐怖にかられて子供が走り出してしまった。今回もがんばっている冒険者 を助けようと、手頃な石を投げて援護しようとしていたのだった。これは下手するとモンスターの注意を引きかねない、自滅的な行いだった。

たとえ善意からしようとしたことでも、跳ね返って来る結果までもが善意に満ちているとは限らない。

血の気の多い村人：

「あんなに数がいるんだ、手伝った方がいいんじゃないのか？」

村の狩人：

「そうだ、ここから弓をいるぐらいなんでもない」

ただジツと待っているのは辛いのだ。無力感にさいなまれるのを嫌うのは、 大地人 であろうと 冒険者 であろうと同じだった。ニキータの説得になんだかんだと文句を言う彼らの心の底にある感情をみて、仕方のないことだと思う。

ニキータは無言で髪留めに手を伸ばす。くくっていた赤い髪が解かれて流れ落ちる。首のコリをほぐすように左右に首を振ると、髪の毛も一緒に揺れ動いた。男装の麗人をしていたものが、理知的な

お姉さん風美人に戻る。

ニコリ。

視線を集めたところで、呼吸をとらえて笑いかける。ユフィリアの視線を集める力は天性のものだが、ニキータのそれは純然たる演技力であった。

ニキータ：

「敵の標的になるように、私の仲間たちが注意を引いています。このまま皆さんが狙われることのない状態にしておきたいのです。」

一般の 大地人 となると、ヘイトなる概念を知らない可能性が高い。モンスターなどの安易なカタカナ語も避けておく。あくまでも丁寧な対応を心掛けたお陰なのか、立場のありそうな村人が諫める立場に回ってくれた。

近くで巡回回復員をしていた睦実がニキータに声を掛けてくる。

睦実：

「さっすが、ニキータ」

ニキータ：

「アリガト」

そこに村の少年が話しかけてくる。

気弱そうな村の少年：

「でも、本当に大丈夫なの？」

睦実：

「ふっふっふ、大丈夫！ほら、あそこにかっちょいおねーさんがいるでしょう？ あの、さっちゃんがいる限り、あたし達は負けたり

なんかしないよっ!」

その時、ラヴィアン少年の召喚した光の精霊が、まるで照明弾のように空へと昇っていった。

水梨：

「あれは何だ?」

遠くの空に輝く自然のものとは思えない輝きを見つけて水梨が声を上げた。

葉月：

「リュミエール光の精霊? …… 召喚術師のものか」

キサラギ：

「冒険者の救難信号?」

キサラギが第一に想定したのは、ミナミの冒険者達の独自ルールの存在だった。ああした合図で付近の冒険者に救助を求めるのは、Plant hwyadenが単独で支配しているこの付近でなら、十分な可能性があることだった。

ふーみん：

「合流地点だって近いから、仲間のかも! 確認しまっす」

付近のモンスターが予想よりも多かったため、西宮よりも東のポイントでの合流に変更となっていた。霜村達は進路をやや南よりに

していたものの、現在は交戦中である。
光の精霊の輝きは、目視で測っただけだが、まだそれなりに先なのだ。ここからダツシュして直ぐに到着、というわけには行かなかった。

ジンが葉月に近付いて声を掛ける。

ジン：

「悪いがヤボ用だ、先に行っててくれ」

葉月：

「なんの話です？」

葉月が耳打ちできそうな距離まで寄って、声を潜める。それに合わせて、ジンも声のトーンを落とした。

ジン：

「後ろから敵が来てる。しばらく俺たちで殿しんがりをやる」

葉月：

「ですが、3人だけでは……」

ジン：

「おろ、心配してくれんの？」にやにや

葉月：

「まさか」

ジン：

「任せとけ。いや、タダ働きはこれつきりにしたいんだがな。そつちこそ、俺たちがいなくて大丈夫か？」

葉月：

「笑えない冗談ですね」

ジン：

「ならいい。直ぐに追いつく。向こうには（こっちの）仲間もいる

「からな」

葉月：

「……分かりました」

ジンがシュウトと石丸を連れて離脱した。といっても、単に立ち止まったただけだ。軽く手を振って見送っている。

ふーみん：

「アレってどうしたの？」

キサラギ：

「さてな、なんでもないだろう」

団体行動的な意味ではマナー違反だが、葉月が了承したのだから問題ないはずだ。移動するにしても、残りのメンバーが居れば事足りる。

ふーみん：

「フーン。そうそう、あの光はやっぱりみんなだって。それとビッ
グニュースだよ！」

フードの男：

「いくぜっ!!」

フードの男は、『いつも通りに』突っ込むことを選んだ。彼の黒いサーベルタイガーは迷うことなく跳躍し、敵のただ中に着地する。大胆というよりも無策無謀のたぐいだろう。霜村の部隊を襲ってい

た亜人間の群は、突然の闖入者に発狂したように慌て、怒る。

男はフードを投げ捨てるや、敵に囲まれているのも気にせずにはじめてしまう。仲間たちもその背後から攻撃を始めたため、部分的に挟撃する形になっていた。

霜村：

「援軍か？ いったい何者だ？」

ラヴィアン：

「ぎるます〜！」

霜村：

「なっ、アギラだと？ ヤツはナカスにいるはずじゃ」

アギラと呼ばれたフードの男は、爆発のような威力の技で敵を吹き飛ばし、突進して霜村の隊に加わる。

（フードの男）アギラ：

「準備運動、終わりっ！」

霜村：

「アギラ！」

アギラ：

「よう、シモ！元気だったか？」

霜村：

「貴様、なぜここに？」

アギラ：

「そりゃアレだ。サプライイズ！ってな？ みんなも元気にしてやがったか？」

芝生守護戦士：

「マジでギルマスｗｗｗｗウケるｗｗｗｗ」

“喧嘩師”アギラ。

彼こそ、ミナミ有数の戦闘ギルド　ハーティ・ロード　のギルドマスターである。クラスは モンク 武闘家。サブ職は 巨人殺し で、デカいのを殴るのが大好き。背はちょっぴり低めのナイスガイ（自称）だ。

彼の二つ名“喧嘩師”の由来には諸説ある。面白ければ他のギルドとの戦闘も厭わないという側面もあるにはあったが、たまにそういうことあったというだけで、ギルドとしてはそこまで喧嘩っばやいわけでもない。ギルドの顔としてその異名はどうかと尋ねると、「ハツタリが利いてて良い」が公式見解らしい。……本当のところは、自分の名前を呼ばれたく無かったため、だという。ゲームの導入を手伝って貰った隣の家の兄ちゃんに「アキラ」と書いて渡したつもりだったが、少しばかり（いや、かなり）字が汚かったのだ。さっさと名前を変えるよと言えば「それは何か負けな気がする」と答える真性の××だった。

結果、仲間内にはギルマスと呼ばせ、ギルド外の人間は喧嘩師と呼ばせていた。呼ばなければ殴る。蹴る。やっぱり喧嘩っばやい。「うるせえ、俺は喧嘩師だ！」と叫びながら、衛兵に連れて行かれる。拘束が終わって戻ると、レイドに行こうと待っていた仲間が遅いぞクソギルマス！と怒られる（ここまででワンセット）。……それが彼、アギラという男だった。ちなみに、アギラと呼んでも殴られないのは初期のメンバーだけだ。もはや殴り過ぎて飽きたらしい。

大災害　からこつち、ギルドが半壊したとはいえ、本人は一向に気にした様子もない。誰かが死んだわけじゃあるまいし、と気楽なものだった。

アギラの後に続いて黒いサーベルタイガーも飛び込んでくる。筋肉の塊のような圧倒的な迫力を前に、村人が恐怖に突き落とされる。逃げ出そうにも周囲は敵に囲まれているのだ。ニキータが咄嗟にかばうように壁になった。危険はないのだが、それが分からなければ危険なのと一緒だ。

睦実：

「あれっ、くろぼん？ どうしてここにいるの？」

騒ぎを見に来た睦実が、アギラのサーベルタイガーを見つけてナデた。もふもふである。攻撃してこないサーベルタイガーは、大きいだけで猫とさして変わらない。強いて言えば、寝返り 下敷きのコンボには注意が必要だ。

アギラ：

「くろぼんじゃねえ！ クロスケだっつってんだろ、睦実！」

睦実：

「変わんないじゃん。なんだ、ギルマスもいたんだ」

睦実のため息に、ヤンキー顔 + 中指を立てて応える。イキナマ上等。

そのまま俺様アピールをするべく周囲を巡ろうとしていた時だった。見慣れない女に近付いて顔を確認する。

ユフィリア：

「ん？ どちらさま？」

アギラ：

「おっ、おっ、おっ………」

振りむいたのは突き抜けた美人だった。瞬間的に気後れしてしまい「お前こそ誰だ」の一言が言えなかった。硬派〓奥手の図式から、アギラもまたそっち方面は苦手だ。否、コブシが通用しないものの大半が苦手である。

しかし、男たるもの度胸で負けるわけにはいかない。胸を張って問いただした。

アギラ：

「しっ、新人か？ おまえ」

ユフィリア：

「おまえじゃないよ、私はユフィリア」

アギラ：

「お、おう」

ユフィリア：

「あなたは？」

アギラ：

「俺はギルマスだ」

ユフィリア：

「ぎるます？ おかしな名前だね」

アギラ：

「おう。その、アレだ。スイーツみたいか、そうか」

ユフィリアの天然ボケにも気が付かず、噛み合わない会話が続いていた。初戦は引き分けだろうと自分本位のジャツジを下し、負ける訳にいかないとその場に踏みとどまる。周囲の「戦闘中だぞ、邪魔！」という視線には気が付きもしない。見事にテンパっていた。

ユフィリアのような クレリック 施療神官 は、雑魚モンスター相手の集団戦で特に威力を発揮する。敵から受けるダメージ量が小さい場合、反応起動回復が数回〜十数回の攻撃を帳消しにすることができるた

めだ。

その効果によって慌てて回復しなくても大丈夫とはいっても、戦闘中にヒーラーがその場から動けるハズもない。アギラにしつこく話しかけられても、逃げられないとなれば対応せざるを得ない。

実際のところ、ユフィリアは別に困ってはいなかった。この程度で困ったり迷惑がったりするのであれば、美人などは務まらない。それでも守護者は現れる。

アギラ：

「そうか、ウチのギルドじゃないのか」

ユフィリア：

「うん」

アギラ：

「じゃあ、アレだ、俺のトコに来いよ」

ユフィリア：

「え？ だけど今のギルド気に入ってるし」

アギラ：

「それじゃあギルドはそのままでもいい」

ユフィリア：

「んつと、どういう意味？」

ニキータ：

「会話中失礼。というか戦闘中よ、彼女の邪魔をしないで！」

常識を逸脱した美人の次は、常識的な美人の登場だった。髪留めを外したままのニキータが、喧嘩腰でユフィリアをかばいに現れる。これにアギラは内心でホツとしていた。女性とのコミュニケーションも喧嘩の延長でしかやりようがない。怒ってくれないと巧く話せないのだ。ユフィリアはほわほわと言葉を返してくるので噛み合わないのだ。今のニキータは喧嘩腰なので話しやすい。

アギラ：

「別にいいだろ、雑魚しかいねーんだし」

ニキータ：

「だったら先に全部倒してからにきなさい！」

アギラ：

「上等！まるっと倒してきてやらあ。それでいいな？」

ニキータ：

「ええ、それならいいわ」

アギラ：

「……………」

ニキータ：

「まだ何か？」

アギラ：

「お前、イイ女だな」

ニキータ：

「は？」

アギラ：

「いいね、いや、気に入った！」

歯を見せつけて笑うと、そのまま格好良いところを見せようとして敵に突っ込んで行った。まるで鉄砲玉だ。ニキータは（もしかすると困ったことになったかも？）と頭痛に近いものを感じていた。

ヘイトだのを無視してやりたい放題に戦い、そのままの勢いで相手を混乱させてゆく。しかし、彼はただのバカではない。真のバカである。その膨大な戦闘経験がギリギリ破綻しないラインを綱渡りさせていた。滅茶苦茶をしている数が違った。計算などしなくても、なんとなくの直感で『やっつてはいけないミス』は避けることが出来る。大規模戦闘^{スレイド}は自分の庭も同然。敵の中を動き回りながら、

次々と場所を変えていく。

その時、ひとつの光景に目を奪われる。アギラはちょうど近くで戦っていたさつき嬢に話しかけている。

アギラ：

「おい、アレは誰だ」

さつき：

「お久しぶりです、ギルマス。えっと、レイシンさんですか？ アキバから来た傭兵の人ですが」

近くで戦っていたので、さつき嬢からはアギラの姿が見えていた。挨拶がまだだったので、挨拶をしたのだが、しかしアギラの目はレイシンをみたままだ。なんだか夢中になっていた。

アギラ：

「すげえ蹴りだ……」

さつき：

「え？」

アギラ：

「こつか？……こつか？」

確かにレイシンの腰の入った蹴りは美しいものだったが、さつき嬢にはどこが違うのかわからなかった。モンク武闘家だから分かる何らかの違いに反応した様子で、そのまま繰り返し蹴り技ばかり使うアギラだった。

しばらくしても、まだ何かが違うているらしく、レイシンのところに突撃していった。失礼なことを言わなければいいが、と心配するさつき嬢だった。

アギラ：

「おい、その蹴りはどうやるんだ？ 俺に教えろっ！」

レイシン：

「えっ？ 別にいいけど」

人にものを頼む態度ではなかったが、レイシンはOKした。

ハイキック（上段回し蹴り）。

以下は右足で蹴る場合で説明する。左足が前、右足が後ろにある状態から、右足で軽く地面を蹴って勢いをつけ、左足を軸にしつつ、腰の回転運動によって右足を回して相手を蹴る、というのが一般に認知されている『回し蹴り』の動作である。

これに対してレイシンのハイキックは、蹴り足（右足）の勢いで腰を回していくという、より実戦的なもの（プロ仕様）であった。

左軸足中心による蹴りでの回転運動の場合、腰を回して、右足を『振り回した結果』として蹴りが発生することになる。その準備として左足を軸として固める必要があることから、2テンポの動きになっってしまうのだ。

右蹴り足中心で蹴る場合、左足はそこまで重要とはならない。また、この方法では勢いをつけるための右足の始動（地面を蹴る部分）を、そのままキックの動力として活かすことができる。左軸足中心の場合は、腰の回転が始まるまで待たなければならぬため、右足で大きな勢いを付けられないのだ。地面を強く蹴ってしまうと、腰の回転よりも蹴り足が先行してしまい、腰が回り切る前にヒットして中途半端に終わるのだ。それを失敗だと認識するので、右蹴り足

中心の蹴りになることはまず考えにくい。

それ以外にも、左軸足中心で腰の回転運動を強化するには、上体をネジるなどして腕を逆に回す動きなどが必要になってしまう。実戦では腕を振り回すと上体のガードを開けることになるため、あまり有効な動作とはならない。

右蹴り足中心の動作であれば、蹴り足の前進力をそのまま腰の回転運動に利用するため、腕を振り回す必要がなくなってくる。また踏み込みの前進力を活かせることから、蹴るための準備は不要で流れの中で蹴っていけるし、そのことによって踏み込みの速度も増すのだ。相手よりも一瞬でも速く動作に入れば、それだけ強い蹴りを出すことが可能になるし、主導権を握って押していきやすくもなる。

それもこれも 冒険者 の蹴り技であるため、このような運動構造の差があろうとも時間的にはコンマ数秒以下の話でしかない。しかし、その僅かな差が実力を決定する力をもってしまうこともあるのだ。そしてアギラはこの違いに一目で気が付くことが出来たのである。

レイシンにしても情報源は当然ながらジンだった。ジンも蹴りは得意だが、蹴っている本数がレイシンとは1〜2桁ほど違う。身体開発度の差が支配的なヒザ蹴り以外は、既にレイシンの方が巧くなっていた。

アギラ：

「こうか？」ビシッ

レイシン：

「いや、もつと踏み込んで、こう」スパァン！

アギラ：

「なら、こうか？」シュパッ

レイシン：

「いいね」

アギラ：

「……こうだろ！」ズパン！

レイシン：

「それ！」

アギラ：

「おおおおっ！やべえ、超カッキー！」

プロ仕様の蹴りに大興奮し、見せびらかすように蹴りまくるアギラだった。悩みなんて無さそうなギルマスの姿に、メンバーはいつしかリラックスしていた。

また、援軍の存在も大きかった。アギラの側近をやっているメンバーともなると、全員がほぼ葉月・霜村クラスの強さや装備を揃えている精鋭である。こうした心強い味方の参戦もあって、敵の数を大きく減らすことに成功していた。

そしてここにもうすぐ葉月たちが合流することになる。

シュウト：

「200は居ますね。なのに3人で戦^やるんですか？」

ジン：

「別に、俺だけでも倒せる数だけど？」

シュウト：

「そつですけど……」

相談もなく殿を引き受けたジンに不満の声を漏らす。200体も居たら、最低でも30分はかかりそうなものだ。こんな回復役もない状況では長く戦い続けることはできない。

石丸：

「作戦はどうするつもりっすか？」

ジン：

「んー、適当で。好きにやっちゃって。ま、全部倒す必要もないし、葉月たちが追いつかれない程度に時間潰して、数を減らせばこはオーケー」

シュウト：

「……つまり、葉月さん達と一緒に戦いたくなかったんですね？時間が掛かるから」

ジン：

「そゆこと」

ジンの最も効率の良い選択なのだろう。しかも下手したら自分だけ残ってここで足止め役をやっていた可能性もあるのだ。そう考えると、仲間とされている分だけマシかもしれないと思えてくる。

ジン：

「よっしゃ、眠くなる前に始めようぜ。石丸、先制してくれ」

通常は 守護戦士 がタウンテイングを行って、ヘイトを集めてから魔法を使わなければ石丸が狙われてしまうもののだが、全力のジンは後から始めても間に合わせる自信がある。

石丸：

「ジンさん」

ジン：

「何っすか？」

石丸：

「本当に、好きにしていいいんすね？」

ジン：

「おつよ、ヘイト管理もお任せあれ」

頷いた石丸が攻撃魔法を唱え始める。ジンは軽く肩を回した後で武器を抜き、フェイスガードを下ろしていた。氷系の範囲攻撃魔法フリージング・スフィア が炸裂する。

くるり。

ジン：

「ん？……なんだ？」

突撃しようとしていたジンが振り返り、石丸をまじまじと見つめる。呪文の投射から技後硬直を終えた石丸は再度別の呪文の詠唱を始めていた。魔法を連発する構えだ。

ジン：

「なんなのか分からんが、マズい気がする」

謎解きをしたいが足が先に行こうとしている、といった様子でジンは飛び出して行った。代わりにとばかりにシュウトが石丸を観察する。

シュウト：

「砂時計？……そんな小物使ってみましたっけ？」

石丸の装備をちゃんと見た覚えがないので確信は持てなかったが、

ジンの心に引つかかる何かがあるとすれば、首から下げた紐で結び止めた砂時計ぐらいしかない。30秒単位だろうが、今もさらさらと砂が落ちている。

シュウト：

(ん？ 今、砂時計を使ってるってこと？)

詠唱終了で次の魔法が発動する。光の範囲攻撃魔法 スターダスト・レイン だ。その技後硬直が解けると、石丸は胸元にサツと手を伸ばし、砂時計を『くるり』とひっくり返していた。そして間を開けずに次の呪文詠唱に入る。

好きに戦って良いと言われているので、シュウトは弓を準備していた。ここでジンが敵の先頭ラインに到達。初撃から 竜破斬 を放つ。一瞬の青い輝き。シュウトも敵に狙いを定めていると、石丸の爆炎の範囲攻撃魔法 チェイン・エクスポージョン が決まった。

ここまでは正常通りだった。通常、 妖術師 が範囲攻撃魔法を連発すると、 守護戦士 がタウンテイニングするよりも多くのヘイト値を獲得して敵に狙われることになってしまっただが、ジンの場合は話が別なのだ。

全力のジンがブーストして放つ 竜破斬 は最高ダメージが2万を軽く超えている。加えてそれを2秒半というハイペースで繰り出すことが可能なため、そうそうヘイト値を追い抜くことは出来ないし、石丸がしているように先に魔法攻撃による先制を行ってしまっても、敵が石丸に攻撃する前までにはジンが敵からのターゲットを石丸から奪い返すことが出来てしまう。

その時、2度目の フリージング・スフィア が炸裂した。

ジン：
「なっ!?!」
シュウト：
「早い!どうして?」

シュウト達の間では、まだ同じ呪文は使えない時間のハズであった。

……これが石丸のハイエンドスキル スペルオーバーラッピング ジュークボックス、その原形となるものである。原理としては重複詠唱法を連続させることにある。

重複詠唱法（スペルオーバーラッピング）

まず同じ魔法を2回連続して使うことを考えてみると、「1度目の呪文選択」「詠唱」「呪文発動」「技後硬直」「再使用規制時間による待ち時間」「2度目の呪文選択」「詠唱」「呪文発動」「技後硬直」……という流れになっている。

石丸の行った重複詠唱法とは、再使用規制時間中に、マニュアルによる呪文詠唱を始めてしまい、規制が解けたところで呪文を発動するというものであった。呪文詠唱はショートカットリストのアイコンを選択することによってオートで行われるため、再使用規制時間中に呪文詠唱をすることは出来ない。そこを自分で詠唱するマニュアル詠唱を利用することで、時間を短縮して呪文を放っているのである。

呪文詠唱5秒、再使用規制20秒の呪文を例にすると、一般の魔法使用は再使用規制20秒に詠唱時間の5秒を加えた、25秒後に再使用することが可能であるのに対して、重複詠唱法では再使用規制16秒目にマニュアル詠唱を開始し、21秒目には呪文を再使用

することが可能になるのである。その差は4秒。これは呪文詠唱にかかる時間が長い魔法ほど、その恩恵も大きくなる特性がある。呪文詠唱10秒の魔法なら9秒の短縮が可能になった。

（実は物理攻撃系の特技でもこの重複法を使うことができるが、キヤストタイムが短いため、ほとんど価値が生まれなかった）

マニュアル詠唱に必要な完全な呪文の暗記と、規制時間をきちんと把握すれば、実のところ誰にでも使用可能なのだ。……1度だけならば。

石丸の ジュークボックス のように連続し続けるとなると、それは異次元の高難易度技に激変する。そもジュークボックスとは、音楽を自由に選曲するチェンジャーデッキのことである。石丸はそう遠くない未来において、全ての呪文を自在かつリアルタイムに組み合わせて使用することが出来るようになった。詠唱時間や再使用規制時間だけでなく、それぞれの呪文にかかる発動時間や技後硬直までの諸要素を全て把握し、マニュアル詠唱に必要な呪文とその身振りを完璧に記憶する。更に呪文の組み合わせの最適化をリアルタイムで行うのだ。コンピューターならぬ生身で。

事前に使う呪文の順番をルートとして決めてしまえば、人間にも可能な範囲の難易度におさめることはできる。普通はそうするのだが、石丸はそれを選ばなかった。

この技の難易度を1段階引き上げている場所は、実は『時間を正確に把握すること』であったりする。現在のところ、時間を計るための道具は貴重品に類する。ストップウォッチどころか、アナログの腕時計も馬鹿でかい代物になってしまふ。……このため、石丸は砂時計を利用していた。

ジン：

「ヤバい、敵が足りないとか！（笑）」

石丸の範囲攻撃呪文の嵐は、ジンの周囲の敵をかなり減らしてしまっていた。この場合、攻撃する敵がいなければ、ジンはヘイトを高めることができない。たとえ5000点のヘイト値をもっているも、石丸が10000点のヘイト値を持っていたら、ジンがターゲットにされることはないのだ。仮に3体の敵がいても、まっすぐに石丸に向かって走って行ってしまう。その2体までをジンが倒せたとしても、残り1体が石丸のところへ攻撃しに行ってしまったら、ジンの失敗、この場合は敗北ということになる。1体だけならシュウトが十分にフォローできる範囲だが、3体などの規模ではない。150体以上の敵がまだ残っているのだ。

ジンの能力を引き出すこと。それが石丸の選択であった。

葉月達のように、普通の 守護戦士 としてジンを扱えば、その能力を殺してしまうのだろう。つまらなくてアクビしながら眠そうにしている、ただのぼんくら守護戦士になってしまう。だから、ジンは逃げた。殿しんがりが必要なのも本当だったかもしれない。それでも、窒息したくなかったのだろうと石丸は思ったのだ。

ジンの後衛を務めるといふこと。……つまり、世界最強の 守護戦士 に前立ちさせた自分がすべきことは何か？という問題に対する、これが石丸の答えだった。

ジン：

「ヤバい（笑） シュウト！飛んでるヤツはおまえが何とかしろ！」

シュウト：

「了解ですー！」

ジン：

「それとおまえのヘイトも寄越せ！」

シュウト：

「いっぺんに幾つも無理ですよ（笑） 自分でどうにかしてください！」

二人とも必死になって、石丸を護るべく敵を倒して回っていた。

ひーひー言いながら、しかし、楽しくて仕方がないのだろう。こみ上げる笑いを隠そうともしていない。

その様子に石丸も満足の笑みを浮かべるのであった。

42 それぞれの選択

ジン：

「よし、このぐらいでいいだろ」

全クラス中最高のMP量を誇る 妖術師 が、ヘイトも気にせず 範囲攻撃魔法を（常軌を逸した速度で）乱れ打ちした結果、ごく短時間の内に200体ほど居たと思われるモンスターの、実に7割までを打ち滅ぼすという脅威的な戦果をあげていた。途中から潰走する敵モンスターが増えていったためにどうにかなった、というのが真相ではあったが。

ジン：

「シュウト、ここはもういいぞ。先に走ってけ」

シュウト：

「ジンさん達はどつするんですか？」

ジン：

「石丸は俺が乗せていく。ぶっつけで2人は無理だからな」

『乗せていく』『2人は無理』とはなんだろうか。オンブでもするつもりなのかと考える。全力のジンなら石丸を背負ってもかなりの速度で走れるのかもしれないが、それならば一緒に走っていけばいいはずだ。

シュウト：

「一緒に走って行かないんですか？ 今度は何を？」

ジン：

「無論、新必殺技出すよ。無論っ」

「どうぞやら」「無論」と言いたいだけらしい。

ジン：

「じゃあ、1分後にこつちも出発すつから、俺に追いつかれたら罰金な？」

シュウト：

「なんかズルくないですか、それ」

ジン：

「とりあえず、真っ直ぐ行け。まだいるだろうから」

シュウト：

「分かりました。困ったら念話します」

文句をいいつつも、さつさと走り出す準備をしている。しつこく襲ってくる敵を次々と時代劇のヒーローのように切り捨てているジンに「お先です」とだけ声を掛けて、返事も待たずに飛び出した。

空気が重い。もたれ掛かるように前傾しながら更に回転を上げていく。今は、ほぼ太股を交互に上げるだけで走っている。地面に対するキックはカカトダツシュを習得したシュウトであってもロスにしかない。地面に軽く触れるぐらいの感触で十分で、強く踏むだけでも上に跳ねてしまうのだ。

シュウト：

（木の上って走っていけないのかな。アレって速いんだろうか？）

木の枝のしなりが反動になって、ジャンプの飛距離になるのかもしれないが、野生の肉食獣が獲物を追いかけているような速度（時速100キロ付近）で走っているのだから、今更かなあ？と思って

いた。

体幹部をしつかりと移動させる。インナーマッスルの使用、モモ裏の筋肉を意識すること。習った数々の項目をチェックしながらも、シユウトの感覚は周囲の情報取得に忙しく働いていた。現在の速度では、小石や木の根につまづくと簡単に転倒して事故になるためだ。一歩ごとにどこを踏むのかを連続してチェックし続けている。

口元を強めに引き締める。さつきから暴力的な風により、「い」を言う時の形に口が歪みそうになっていた。そうそう格好良いとはいかぬものである。

ジン：

「だいぶ速くなってきたなあ、アイツ……」

石丸：

「そろそろ1分っすが」

ジン：

「じゃあ、こつちもそろそろ行くか。背中に乗ってくれ」

あらかた敵を片付け終えたジンは、剣を納めると、盾だけ持った状態で石丸をオンブする。首に回された腕を右手で押さえ、フロ―ディング・スタンス を起動。

ジン：

「いくぞ。 しつかり掴まれ」

好んで使用するシールド突進チャージの特技を選択。緑のエフェクトを残しつつ、爆発のようなロケットスタートがかかる。特技の移動距離が終わり、短めの技後硬直が発生しても勢いのままに滑り続けている

る。

これは フローティング・スタンス を応用し、高速で滑って移動しようとする試みであった。ジンは勢いを殺さない様にしながら、再使用規制の解除とともにシールド突進を再使用する。一気にスピードが上乘せされ、その場から姿が消え、見えなくなっていた。

しばらくしてシュウトが追いついた時には、霜村たちの戦いはようやく終局を迎えるところだった。長丁場の戦闘は他のモンスターグループの追加もあり、一時は困難な状況に陥っていたのだが、アギラの連れてきた最精鋭メンバーや、葉月たちが合流したことで士気を盛り返し、次々とモンスターを撃破していた。勝ちが決定的なものでもはや覆ることはない。彼らは残敵の掃討に移っていた。

遠目からだいたいこの状況を把握したシュウトは、戦闘に参加するべく走りながら弓を取り出した。速度を落として矢をつがえ、低い長いジャンプから空中で矢を放つ。こうして遠距離からの支援を行いつつ、周囲で手薄そうな場所を探して援護の矢を送っていく。

ユフィリア：

「シュウト！」

こちらを目敏く^{いびき}見つけたユフィリアが合図を送ってくる。軽く手で挨拶を返すと、次の場所へと移動した。

各所で状況終了の報告が始まっていた。ハーティ・ロードの

ギルドマスター、アギラは気炎を上げたままで、敵を求めてあちこちを走り回っている。

アギラ：

「他に敵はいねえか？ アイツで最後なんだな？」

弥生に敵の数を確認すると、最後の数体を潰しにダッシュする。

アギラ：

「うおおおっ！ラストだオラア！死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！」

強引な割り込みに慣れっこの傷顔守護戦士が無言でその場を譲る。
こうして戦闘は終わりを迎えた。

霜村：

「呆けてる暇はないぞ！ここから直ぐに移動する！損害の確認いそげ！村人の点呼も忘れるな！」

アギラ：

「おっひょっひょ、シモが仕事してやがる」

霜村：

「うるさい、貴様、畳むぞ」

アギラ：

「上等。やれるもんならやってみろや！」

霜村：

「へっぽこモンクが！」

アギラ：

「役立たずブシめ！」

コブシを合わせ、腕を打ち付けると、最後はお互いの胸にコブシ

で触れた。ハイタッチのようなもので、なんらかの合意に達したらしい。そこに葉月がやってきていた。

葉月：

「……ギルマス、どうしてここに居るのですか？」

アギラ：

「おうインテリ、元気してたか」

葉月：

「ナカスへは行かなかったのですか？」

アギラ：

「行ってきたぜ。それから超スピードで戻ってきた」

親指を立ててサムズアップ。

葉月：

「それで、街の中へは？ ナカスの街に『登録』して来ましたか？」

アギラ：

「いや、面倒だったから入る前に……」

葉月：

「……………」

無言で剣を抜く葉月に、アギラは全く懲りていない対応をする。

アギラ：

「バーカ、嘘に決まってるんだろ。だいたいオメーらは心配しすぎなんだよ。要は死ななきゃいいってだけだろ？」

容赦なく切り付ける葉月の剣を躲し、続く斬撃から跳び下がって逃げた。メンバーとの過激なコミュニケーションは定番のものだったが、このノリに付いていけないとハーティ・ロードに居るの

は厳しい。

これで ハーティ・ロード 側は（ナカスにいる者達を除いて）全員が揃ったことになる。ここで、霜村から正式にナカスへの撤退がメンバーに告げられた。

予想外だったメンバーも多いようで、反応は様々だ。それでも一番騒いでいたのは、到着したばかりのアギラ達だった。「なんだそりゃ!? いま戻ってきたばっかだぞ!」という怒鳴り声はなかなか生々しいものがある。

ユフィリア:

「ジンさん達、遅いね?」

シュウト:

「おかしいな? 直ぐに追いついて来るって口振りだったのに」

ハーティ・ロード のナカス行きと直接関係ないシュウト達は、ジン達の心配をしていた。念話してみようかと思っていると、アギラと葉月とがこちらに近付いてくる。

西の“喧嘩師”の異名はシュウトも耳にしていた。変わり者でもあって、かなりの有名人だ。シュウトは話したりした事が無かったが、総じて（良い意味でも、悪い意味でも）面倒臭いヤツだと言われていた。

どうするつもりなのかと様子を伺っていると、アギラはニキータのところへ真っ直ぐに近付いていった。シュウトには葉月が話しかけてくる。

葉月:

「追いついて来たのはキミだけかい?」

シュウト：

「ジンさん達なら、直ぐにくると思います」

葉月：

「いないのか、いや、逆に都合が良いかもしれないな」

シュウト：

「何の用でしょう？」

葉月：

「我々 ハーティ・ロード は、これからナカスへと向かう。これで、当初の依頼通りに、君たちにはナカスまでの護衛をして貰うことになるわけだが……」

シュウト：

「そういえば、最初はそういう話でしたね」

2人は同じ苦境を味わった者同士が醸し出す『お互いの苦労への理解』をまったりと漂わせていた。

葉月：

「ああ、随分と昔の話みたいに感じている。と、話が逸れたな。……ギルド カトレヤ に対して、正式にこの依頼をキャンセルしたいと思う」

シュウトにすると少し意外な内容でもあった。何となく 港町コウベ までは村人を護衛していくつもりでいたためだ。それに、随分と親切な気がしていた。普段の葉月なら、付いてきたければ勝手に？と放置しそうなものだ。

葉月：

「村人の護衛なら、ギルドマスター含めて6人の援軍がいる。ここからなら君たちの手を借りなくても大丈夫だろう」

シュウト：

「なるほど、そうかもしれないね」

意外そうなこちらの顔を見て、説明を付け加えたようだ。（言い出しっぺの）ユフィリアなら 港町コウベ まででは同行したいというかもしれないなあと心で思いながらも、理由には納得する。

葉月：

「さて、キャンセル料金の件なんだが、こちらとしても正式な手続きを踏む以上、当然、支払いたいとは思っている。しかし……」

シュウト：

「しかし？」

演技がかった口調の葉月に先を促す。最後にどんな冗談をいうつもりなのか、ちょっと楽しい気分になる。

葉月：

「キミの要請によって、私はミナミへ警告を発した。これは我々の活動という観点からすると、大きなマイナスを生む行為だった。よって我々からも損害を君たちへ請求する必要があるが生まれてしまった。これを請求するにしても具体的な金額を決めるのは困難で、主観に大きく依存せざるを得ない。また、我々がナカスへと向かう以上、君たちの支払い期限はこの場で、今すぐということになってしまう。よって、君たちの事情を考慮し、大変遺憾だが、仕方がないので、キャンセル料金と相殺してチャラということにしてあげよう」

シュウト：

「要するに、支払いたくないんですね？（笑）」

さて、なんと言い返そう？と考えていると、葉月は魔法の鞆に手をつ突っ込み、モゾモゾと何かを取り出そうとしていた。葉月から突き出された袋を受け取ると、ずっしりと重い。中味は金貨のようだ。

先手を打たれたらしい。

シュウト：

「これは？」

葉月：

「謝礼だよ」

シュウト：

「何に対する謝礼ですか？」

言外にジンに対しての謝礼かどうかを尋ねてみる。

葉月は口角を上げるようにして笑みを作って答えた。

葉月：

「もちろん、食事に対する謝礼さ。約束は守らないとね」

シュウト：

「そう来ますか……」

巧い落とし処だと思う。どうやら尻尾を切って逃げてしまったらしい。この辺りで手打ちにしろということだろう。

葉月：

「もちろん、大半は君たちが勝手にやったことなのだが……、ふー
みんを助けて貰ったことには、感謝しておくよ」

シュウト：

（ふーみんさんを、助けた……？）

何の話なのか分からない。高速で思考を回すのだが、まだ話が先に続いている。

葉月：

「もう一つは、まだ礼を言うには速すぎる。だろう？」

シュウト：

「……ナカスへ行つて、それからどうする気ですか？」

葉月：

「さてね。できる限りのことをしてみるつもりだよ。それが『あの話』を知った者の義務であり、権利、なによりも自由であるのだから」

決意をたたえたその瞳に、シュウトは頷き返した。それぞれの場所でお互いにできることをするのだ。この世界のために。

アギラ：

「あのよ、俺の名前はアギラってんだ。お前は、何てんだ？」

ニキータ：

「キャサリンよ、キャシーでいいわ」

アギラ：

「そうか！キャシーだな？」

場外が響めく。ギルマスの不思議な動向に聞き耳を立てていた仲間達が驚いたためだ。アギラが自分の名前を名乗るのはかなりのレアケースである。

何の話をしているのかと気になっていたシュウトが近付くと、どうやら秀囲気的には口説かれているらしいことが分かったが、ニキータがなめらかに口からデマカセを言っていたので、思わず吹き出してしまった。アメリカの青春ドラマか、お水の源氏名みたいに感じたのだ。

嘘を付いているところを見られたニキータは瞬間的に表情を曇らせていたが、シュウトは笑っていたためそれには気が付かなかった。

アギラ：

「あ？……って、お前、キャサリンじゃねーじゃねーか！」

ニキータ：

「チッ」

アギラ：

「その舌打ちはなんだゴラア！」

シュウトに笑われたためか、脳内メニューからニキータのステータスを確認して、嘘の名前なのを知ってしまったらしい。

平然と舌打ちするニキータ。つかみ掛かりそうな勢いのギルマスを、メンバーが慌てて羽交い締めにして止める。4人がかりだ。ニキータと言えば、しれっと明後日の方を向いて関係なさそうな態度を決め込んでいた。その強気はどこから？と思うシュウトであった。

睦実：

「さつきちゃん……」

さつき嬢はしばらく前から葉月たちが現れた方向を眺めていた。

つまりは、ジン殿が来ないかと思って待っていた。背後から声を掛けてきた睦実に反応して振り返る。

さつき：

「どうした、睦実？」

さつきちゃんでは無いのか？といぶかしむ。何度も止めてくれと頼ん

でも止めてくれなかったではないか。

睦実：

「シュウト君たちね、ここでお別れなんだって」

さつき：

「そうか……………」

せめてご挨拶して、今までのお礼を言っておきたいのに、と思っていた。まだまだ、学びたいことも多い。朝練があんなに楽しかったのは初めてだった。

さつき：

「なら、シュウト君たちに挨拶してこないとな。これではばらく会えなくなってしまうだろうから。いこう、睦実」

睦実：

「……………」

さつき：

「睦実？」

思い詰めているような表情だった。動きを止めた睦実の肩に触れる。ため込んでいた感情が、堰を切って溢れた。

睦実：

「さつきちゃん！シュウト君達と一緒に、アキバに行こう？」

さつき：

「睦実、突然どうした」

睦実：

「だって、気になっっている人がいるんでしょう？ 本当は一緒に行きたいはずだよ。私も一緒に行くから！きつと楽しいよ！そうだよ、こうなったら、あたしも本気でシュウト君ねらっちゃっおうかなあ

「
無理をして、痛々しい睦実が見ていられなくて、抱きしめる。」

さつき：

「私のことを、もう『さつちん』とは呼んでくれないのか？」

睦実：

「え？　なんで？　嫌がってたのに」

さつき：

「大丈夫だよ、もういいんだ。もう分かったんだ」

大切な友を、その名で呼ぶ時が来たのだ。いつか言おうと思って
いた言葉だが、その機会は案外早くに訪れた。

さつき：

「むっちゃん。今までずっと守っていてくれたんだね」

睦実の口元がわななき、瞳から涙がこぼれる。

申し訳ないことをしていた。彼女はずっと覚えていてくれたのだ。
「さつちん」というのは、「私は覚えてるよ」という意味だったの
だろう。剣道を始めたのは、むっちゃんを守りたかったからなのだ。
それなのに、稽古の忙しさにいつしか幼い日の記憶が薄れ、淡い友
情の思い出しか残っていなかったのだ。

さつき：

「すまない。きっと、竹刀で頭を叩かれすぎちゃったんだと思う」

睦実：

「なにそれ？　ひどいよぉ」

泣きながら笑う睦実をもう一度抱きしめる。

さつき：

「むっちゃんがいて、仲間みんながいて、オマケでギルマスとかもいる、『ここ』が、私の居場所なんだ」

そうして泣きじゃくる睦実の頭をしばらく撫で続けていた。

睦実：

「……………だけど、あのオッサンのことはどうするつもりなの？」

さつき：

「ええ？ いや、いいんだ。良くないんだけど、ほら、ユフィさんとかいるし？ 絶対に勝ち目とかないし？ いや、そうじゃなくて、そういうのはちょっと違うというか。アレだよ？ そう、敬愛なんだ。尊敬の気持ちの方が大きいというか？」

睦実：

「ユフィちゃんはまだ付き合っていないって言ってたけど、やっぱりそばにピッタリくっついてないと……………」

さつき：

「うつつ、それは、その通りなんだけど」() ()

だんだんと頭が混乱してきたさつき嬢は、目をぐるぐるさせながら、活路を見いだすべく、思い切った行動に出ていた。生前、師であった祖父は、「焦って来ると、無茶な手段に出るところがあるから気を付けなさい」と言っていたが、まさにそんな感じであった。

軽く決意するとシユウトのところへずんずんと歩いていく。そして、

さつき：

「シュウト君！」

シュウト：

「は、はい」

さつき：

「いい機会だ。この際、お互いにフレンドリストに登録しようじゃないか？」

またもや場外がどよめく。そんなにイケメンがいいのか！？と怨嗟の声が黒い波動となってシュウトの背中に突き刺さった（気のせいである）。

シュウト：

「はあ、それは構いませんが、なんでまた？」

さつき：

「君は、その、兄弟子のようなものじゃないか。何かあったら、ちゃんと報告するのだぞ？」

シュウト：

「わかり、ましたけど……………兄弟子なのに、報告ですか（苦笑）」

さつき：

「少なくとも3日に1度は連絡をくれ。いや、その日の練習を朝・昼・夜と、その都度、教えてくれてもいいんだけど」

シュウト：

「ま、まとめてご報告したいと思います」

さつき：

「わかった。そうしてくれてもいい」

各自が短い別れの挨拶を済ませていた。シュウトの所に来ていた睦実が、ユフィリアとお別れの握手をしようと囲んでいた。ハーテ

イ・ロードの仲間たちを蹴散らして抱きしめる。ニキータは弥生と話していたが、長瀬友がうつとりした表情で腕を絡ませて、至近距離から見つめていて話しくそうにしていた。レイシンは泣いているラヴィアン少年の頭に手を置いて慰めていた。

アギラ：

「じゃあな、キャシー、また逢おうぜ！」

ニキータ：

「それは無いわね。永遠にさようなら」(にっこり)

アギラ：

「ケツ！ふざけんな。アキバぐらい、いつでも行けるってんだ！」

ニキータ：

「はいはい」

睦実：

「シュウトくん、じゃあねー！元気でねー！」

シュウト：

「睦実さんも！」

さつき嬢が軽く手を上げ、そしてジンが来るはずの方向をチラリと見てから、そのまま去っていった。

ユフィリア：

「ふふっ、恋の予感？」

ニキータ：

「冗談でしょう？ あんな単細胞、30分もしたらこっちのことなんて忘れてるわよ」

ユフィリア：

「気に入らなかったかあ。それじゃあ仕方ないね？」

ニキータ：

「……それより、ジンさん達、遅すぎるんじゃない？」

シュウト：

「そろそろ念話してみようか」

ユフィリア：

「待って！ 来た！」

念話を使おうと脳内メニューを開いたところで、ユフィリアが豆粒大のジンを発見していた。

イイイイーーーーー
イイイイーーーーー
イイイイーーーーー

まるでバックストレートを駆け抜けるF1マシンの如きスピードで、眼前を通り過ぎて行く。4人共そろって首を左から右へと動かしてみってしまった程だ。

何事かを叫んでいたらしきジンは、前回り回転受身を試みていたが、モーターレースのクラッシュ映像のように、吹き飛ばされる木の葉よろしく舞い上がって何度か転がり、そのまま下生えに突っ込んだ後も止まりきれず、ボウリングの玉のように樹木にストライクをかましていた。

途中で手を離して降りていた石丸は、ゴロゴロと何十回か回転したところで、シュウト達の目の前に『しゅた』と立ち上がって止まり、パンパンと埃を払う余裕すらあった。

(沈黙)

誰も何も言えずにいると、しばらくしてジンが四つん這いで出てきて、ユフィリアに回復を要求していた。とりあえず小走りで向かう。

シユウト：

「大丈夫ですか？」

ユフィリア：

「ジンさん、背中痛いの？」

ジン：

「うんにゃ、足の裏。火ぶくれで歩けん」

説明によると、超スピードで滑るまでは良かったのだが、ブレーキが無いことと、摩擦熱によって足の裏が燃えるように熱くなるそうで、辿り着くまでに時間が掛かってしまったらしい。途中に何度か休憩して、自然治癒による回復と、足裏の装甲が元に戻るのを待っていたために時間が掛かったらしい。

シユウト：

「それなら走ってくればいいじゃないですか。みんなもう行っちゃいましたよ」

ジン：

「うむ、カツコ良く登場しようと思ったんだがなあ。いいスピード出てたる？」

ニキータ：

「……大クラッシュを見られなくて、返って良かったかも」

ユフィリア：

「あははっ」

ニキータの毒舌にユフィリアが笑っていた。ジンは頭を書いて渋

い表情を作る。

ジン：

「そうか、終わったか……………」

ハーティ・ロードの一団が立ち去った方向を見るともなく眺めて呟くと、ゆっくりと立ち上がった。

シュウト：

「帰りますか？」

ジン：

「いや、帰る前にミナミの陣容を偵察といこうぜ」

レイシン：

「近寄れるかな？」

ジン：

「ダメ元だろ」

この偵察は意義が大きい。ミナミの危機対処能力や、兵の動員力などの大まかなものが読み取れば対処がしやすくなるためだ。情報は少しでも多いほうがよい。

そうして、馬を召喚して約1時間、東へ行こうと試みたのだが、残念ながら近付くことは叶わなかった。

ジン：

「こりゃ、無理だな」

レイシン：

「そうだね。帰ろっか？」

ユフィリア：

「うん！ 帰ろう?」

馬を降りると、鞍を外して放してやる。ジンがミニマップで周囲の索敵をする。帰還呪文はその使用に時間が掛かるため、使用中は無防備になってしまうためだ。

シュウト：

(問題は、ここだ……)

ジンがオーケーを出すと、それぞれが脳内メニューから帰還呪文を選択。最後に登録された都市へと戻るべく、オートでの呪文詠唱が始まった。しばらくして、ユフィリア達の足元に転移魔法陣が浮かび上がると、ジンは静かに手を下ろして唱えているフリを止めた。

気配に気が付いたユフィリアの目が見開かれた。口元はそのまま詠唱が続いてたため、「なぜ?」と問い詰めるような意思を視線に込めて、ジンを見ている。

ジン：

「すまん。3日、いや4日で戻る」

咎めるような視線を残して、ユフィリアは消えた。次々に転移していく仲間たち。それを見送るジン。

ジン：

「で、お前は知ってたんだな、シュウト?」

軽く頷くと、ジンは面倒なことになった、とばかりに溜息をついていた。

42 それぞれの選択（後書き）

メリー苦しみます（イブ）

クリスマス連休に愛の呪いを。リア充共に怨念の祝福を！

くけけけけ orz

43 アクアとブルー

ジン：

「……まいったな、お姫様はお冠だとさ」
ユフィリア

シュウト：

「自業自得ですよね（苦笑）」

ジン：

「頼むから、マジでお前だけでも帰ってくんない？」

シュウト：

「そうしたいのは山々なんです……」

ジン：

「何でだよ、一緒に来たって何もでねーぞ？……くっそお、99
%嘘だって分かってるのに」

ミナミでの仕事を終え、ハーティ・ロードと分かれたシュウト達は、ホームタウンであるシブヤへ帰還しようとした。ところが、ふーみんを助けるためにミナミの街中に入ってしまったジェンは、帰還呪文では戻れなくなってしまった。このため仲間達に黙って徒歩で戻るつもりで、仲間達には黙って残ってしまった。事前に情報を得ていたシュウトは一緒に残ったのだが、ジンに「さっさと帰れ、なんなら殺してやるのか？（ゴゴゴゴゴ）」と言われたため、咄嗟に「いえ、実は僕もミナミの中にジンさんを探しに入ってしまったんです！」と嘘を付いていた。ミニマップを使えるジンでもこの嘘を完全には否定出来ず、しぶしぶ同行を認めることになってしまった。これらの事情を説明するためにレイシンに念話したところ、ユフィリアが久しぶりにお怒りモードでダンマリ姫君をやっているらしく「ヤバいぞ、早くどうにかしないと（ガクガクブルブル）」という状況であった。

ジン：
「よっこらせっと」

年齢相応の掛け声を放ちつつ、しゃがんで何やら始めたかと思えば、鎧を脱いで、片っ端から魔法の鞆に突っ込んでいるところだった。

シュウト：

「……………寝る準備ですか？　こんなところでキャンプとか？」

ジン：

「走って帰る準備だろ。なんつーの？　滑って行くのはさすがにムリだって分かったからな。……………どっかでマグマの上とかを歩ける感じの、『永久に溶けない氷の靴』みたいな入手しないとダメだ」

シュウト：

ジン：

「普通のRPGだったらな。MMOじゃ厳しいかもしれん。かといって炎耐性のアミュレットとかで代用じゃ意味ないし」

シュウト：

「靴がすり減るからですよね？」

ジン：

「そう。というわけで、せっかくの新技だがしばらく封印」

シュウト：

「あれだけ派手に転んだのに、まだ諦めてないんですか（苦笑）」

ジン：

「当然」

MMORPGの場合、多人数プレイになる環境から、イベントクリアに必須の装備品というものは設定しにくい。6人パーティであ

れば6組、24人であれば24組も揃えなければならぬためだ。仮にマグマの上を歩かせたい場合は、呪文を使用したり、消費アイテムやイベントで入手するキーアイテムにマグマを凍らせる機能などを持たせたり、謎を解くことで橋が架かって通過できるようにする仕組みにしておく方が合理的だ。

必須素材集めで渋滞し、モンスターのリポップを几帳面に並んで待つ日本人プレイヤーの図というのは、運営サイドのデザイン能力の低さを露わにしているものでもある。

シュウト：

「でも、鎧なしで大丈夫なんですか？」

ジン：

「もともと俺一人だったら鎧とかあんま要らないし。フィールドゾーン突っ切ってシブヤまで戻るだけなら軽い方がいいやん」

シュウト：

「えっと、それって……？」

ジン：

「自分の身は自分で守ろうぜ？」キラッ

シュウト：

「がんばります……」

気配を消して誤魔化せばなんとかなるだろうと、かなりいい加減な算段を立てる。どちらにしてもジンがモンスターと戦うのに付き合っていたら、命など幾つ合っても足りる訳がない。もちろん、シュウトは死ねばシブヤの大神殿に戻るだけなので問題はないのだが、それも締まらない。死んで戻るぐらいなら、帰還呪文で戻るべきなのだ。僅かなりともジンの役に立たなければ残った意味がないではないか。

シュウト：

「大まかにはどうする予定ですか？」

ジン：

「んー、1人だったら1日200キロぐらいの予定だったけど、お前がいるとどうなるかなあ」

シュウト：

「1日200キロって凄くありませんか？」

ジン：

「現実に大阪と東京間がだいたい600キロって言われてるだろ？ トンネルだのショートカット無しだけど、ハーフガイアだからロスがあるとしてもそのまま600キロで計算するとして、時速60キロで10時間の距離だな。人間の世界記録で100mは時速約40キロ。マラソンは42キロを2時間だから、時速20キロ。そのペースで10時間走れば200キロ。冒険者の体なら、マラソンの練習をしていなくて1日200キロならぜんぜん不可能じゃない」

シュウト：

「そんなに巧く行くもんですか？」

ジン：

「問題は、道の起伏だとか、川を渡ったりの手間、道に迷うだのの基本的な『旅』の部分だな。モンスターはレイドマスターじゃなきゃ、どうとでもなる。そんなのよりレイが居なくてメシがないところが一番の難問だ」

シュウト：

「いえ、まっすぐ行くこうにもスザクモンの大軍勢なんですけど……」

ジン：

「ぶっちゃけ、側面からなら横切ることぐらいは出来るだろ。まあ、この位置からだとも右手（＝南側）に淀川があるから、キョウウの方向からくる軍団とは『正面』になっちまうんだがな」

シュウト：

「……さすがにジンさんでも正面突破は無茶ですよな」

ジン：

「んー、やってやれなくはないかもだけど、試してみたいとは思わないなー。これから走っていくのに疲れるのヤダし。途中で P l a n t h w y a d e n の連中が出てきそうだし。いや、もう戦ってるかもだし」

シュウト：

「……………」

川でもその上を移動できる幽鬼系のモンスター以外は、淀川のような物理的な障害によって行動を阻まれる。それが結果的にモンスタ-の軍勢が移動する筋道を決定している部分があつた。

スザクモンの鬼祭り は ハイアンの呪禁都 から、地獄の蓋が開かれてモンスターが湧き出して来ていることから、ミナミ周辺に縄張りをもつ亜人間の氏族たちと相性がいいとは言えず、鬼祭りの鬼どもに押し出された周囲のモンスターが被害を拡大させる傾向にあつた。

これはもう少し未来に発生する ゴ布林王の帰還 が周辺氏族を取り込んで大軍団となつたのとは事情がことなっている。

ジンの台詞は強がりか、はたまた負けず嫌いだろうと思いつながら、天を仰ぎみるシュウトだったが、そこで奇妙なものを見ることになつた。

シュウト：

「ジンさん、あそこに飛行機が飛んでるんですが？」

ジン：

「ん？…………おおっ、ありゃあ、一番デカイドラゴンじゃねーの？」

シュウト：

「あれが、神竜…………？」

神竜。

世界の各サーバーに1体づつ存在しているとされ、冒険者では決して倒すことの出来ない桁違いの戦闘力を持つている『絶対的存在』であった。古来種が関わるハイエンドクエストで稀に(間接的に)登場する。彼らの存在は大きすぎるため、身震いしただけでも付近のモンスターが雪崩を打って逃げ出すほどの影響を作り出してしまふのだ。それら余波がシナリオに使われることがあった。

エルダー・テイル というゲームと、セルデリアという世界は、どこまで行っても征服しきることの出来ない『闇の部分』を持っている。ハーフガイアとして与えられた広大な冒険の舞台が一つと、この神竜に代表される決して勝つことの出来ない異形の魔物がそれに該当するだろう。

問題なのは何も神竜だけではない。前回の大型アップデートの際には、イギリスを含む北欧サーバーにおいて、神竜のひとつ、月光竜 ムーンライト・ドラゴンが、オリジナル・フェンリルとの戦いに敗れるという展開があり、ワールドニュースとなった。

日本のシュウト達にはほぼ関係ない話ではあったが、引用元となる北欧神話の主神オーディンがフェンリルに飲み込まれて倒される展開は有名でもあったことと、フェンリル自身が『月喰らい』の異名で呼ばれる最上級の魔物となれば、『月光竜』では分が悪そうに思え、これは予定されていた展開なのだろうと考察されていた。…ネタ的には「アース神族がんばれ」(北欧の 冒険者 がんばれ)というのがだいたいの気分であろう。

ちなみに現在シュウト達の遙か頭上、ジンのミニマップの範囲外を飛んでいるのが、日本サーバーの神竜、 聖龍 ディヴァイン・

ドラゴンであった。“神風”と呼ばれるストームサンダーブレスを使用する凶悪なまでの絶対的破壊者ではあるが、知的で平和主義者であるため、自ら好んで戦うことはない。時々、他のモンスターでは飛ぶことも出来ない高高度を優雅に飛んでいる姿をみることができる。これら神竜には重力や推力、空気力学、その他の『空を飛ぶための科学的理由』は適用されない。揚力で飛んでいるわけでもないし、極限環境下での生存能力からみても、酸素呼吸すら不要だと考えられている。前述の 月光竜 はまさに『月から飛んできた』という逸話を持つ神竜でもある。

ゲーム時代のモニター画面では上空をみることはあまりしなかったし、森の中やダンジョンに潜っていけば空とは自然と縁遠くなるもので、シュウトでも咄嗟に何なのか分からなかった。目撃情報は多いが、意外とみんな自分の目では見ていなかったりするものなのだ。この世界にあつて、自分の目で見るということは、解像度の差を越えて強烈なインパクトを感じさせる体験といえた。実在するということの重さのようなものがそうさせているのかもしれない。

シュウト：

「……ジンさんなら、アレも倒せたりするんですか？」

ジン：

「わはははは。さっすがに一人じゃ無理だろ。桁外れなんだろ？」

アレと戦うには、いろいろな“理由”が要るだろうさ」

シュウト：

「理由、ですか？」

ジン：

「戦う理由とか、強い理由とか、勝つ理由とか、もつと仲間がいる理由とかだな。要するに、『主人公』にでもならないと無理っつーか。もしくは主人公の仲間になるとかだけど、そういうヤツと知り合いになる予定は、今のところないなあ」

シュウト：

「今でも十分に主人公みたいな強さですけど」

ジン：

「んなもん、レギオンレイドにも勝てない程度ですよ。……まあ、主人公はともかく、スーパーヒーロイン級はひとり近くにいるけど、さ」

シュウト：

「それじゃ、ユフィリアを口説けば主人公ですか？」

ジン：

「俺はフラれたばっかだけどな！ お前、がんばってみるか？」

シュウト：

「いえ、遠慮しておきます（汗）」

ジン：

「性格はまだまだお猿さんだけど、きっと今にスゲエ女になるぞ？」

そんな話をしながら、ゆるゆると走り出す。最初の1時間は準備運動だと言う。ジンはミナミの偵察をしたがっていたが、シュウトを連れて近付くことは出来ない。モンスターに一人で襲われることになってしまったため、『ちょっとそこらに待たせておく』という訳にも行かず、仕方なく北側の山岳部に入り込んで、キョウの方向へと向かって走っていた。

何度かモンスターの集団と出会いもしたのだが、宣言通り、あっさりと突破していく。左右に斬り抜けながら、敵が死んでも死ななくてもお構いなしに踏み込み、突っ切る。敵モンスターが狙いを定めて攻撃するよりも、ジンがすり抜けるほうが素早く、相手を次々と置き去りにして敵陣を抜け切ってそのまま離脱してしまう。シュウトはジンに注目が集まっているのを利用して気配を消し、同じように敵の間を走り抜けていった。

ジン：

「そろそろ走るぞ？」

シュウト：

「了解です」

シュウトの全速力からすれば物足りないが、気持ちよいぐらいのスピードで快調に飛ばす。ジンと併走しながら（文明が発達する以前の人類はこうだったのかもしれない）、などと考えていた。

その時のことだった。

バシッ

ジン：

「おっ、何の音だ？」

スピードを落として振り返るジンに合わせてシュウトも立ち止まる。しばらく様子を伺っていると、またもや「バシッ」という音と共に（雨雲もないのに）、蒼い落雷が落ちた。続けて数度の落雷があつて、それは段々とこちらに近付いて来ていた。

シュウト：

「ジンさん、これは一体？」

ジン：

「向かって来てるな。……なんというか、『強い気配』だけど」

シュウト：

「雷系の上級モンスターですか？」

ジン：

「わからん」

ジンが軽く合図したので、シュウトは弓を持って下がった。同じラインで踏ん張っても邪魔になるのは分かっていたが、正体不明の敵を相手するのに、シュウトにしても先に下がるのは気が引ける。それが分かっているので、ジンは合図を送って下がらせることをするのだ。

またも蒼い雷が落ち、その辺りから白い馬のような獣が現れた。子馬かロバかと思うような小ささだったが、意外にも人が乗っているのではないか。蹄が地面を叩く音が無く、走って近づく姿には余りにも静か過ぎたことから、異様な不気味さを醸し出していた。現実か幻覚かの区別を付けにくく感じるほどだ。

ジン：

「とりあえず、人だな」

ジンは構えを解いてこちらに敵意の無いことを表す。セオリー通りの対応だ。

シュウト：

（蒼い雷を纏った、白い一角獣！？）

聞いたこともない騎乗生物に跨がって現れたのは、銀髪の女性だった。素早く脳内メニューを開いて、表示されるステータスを確認する。

アクア、 吟遊詩人、 レベル90、 ギルド無所属。

アクア：

「コニチワー、イイ、オ天気、デスネー」

シュウト：

(なぜ、カタコト?)

ジン：

(雷が降ってるけどな)

小声でそれぞれにツツコミを入れる。

長い銀髪、ちよつと白過ぎる肌。青い瞳はエネルギーに溢れて見える。白のドレスだが、陰になっている部分が青く見える不思議な代物。形はアイドルの舞台衣装に似ていた。

一角獣から降りると、カタコトの会話を続けようと近付いてくる。

アクア：

「ワタシのニポーンゴ、ワカリマスデスカー？」

ジン：

「ああ、何とかな」

シュウト：

「とてもお上手ですね？」

アクア：

「何だ！あなた達、英語がすごく上手じゃない！日本人だからてつきり英語なんて話せないと思ってたわ！ あーあ、せつかく私の日本語学習の成果が火を噴く時だと思ってたのに！」

ジン：

「いいや、俺は英語なんて喋れないぞ？」

アクア：

「……………どついついつと？」

シュウト：

「これって翻訳機能ですよ？ 随分と高性能な感じで、ほとんど違和感ありませんけど」

シュウトは元所属ギルドの関係で、ゲーム時代に海外サーバーで冒険した経験があつての発言だった。

アクア：

「あー、そういうことなの？」

ジン：

「……みたいだな」

微妙な空気になってしまつが、彼女はあっさりとながら無かつたことにした。強キャラの持ち主らしい。

アクア：

「まあ、いいわ。好都合よ」

ジン：

「……で、そちらさんは、海外サーバーのゲームマスターか何かでいいのかい？」

アクア：

「なんの話？」

ジン：

「俺の所に来たんだとすれば、その可能性がかなり高いと思うんだが？」

海外からの客人なのはシュウトにも分かるが、ゲーム製作関係者だと予想する理由がわからず、突飛に感じてしまう。

アクア：

「残念だけど、違つわ」

ジンの台詞に、アクアは笑みを作る。ここまで凄みのある笑いを
みることには、なかなか経験できないように思われた。

ジン：

「だが、『ログ』にアクセスできるんだろ？」

アクア：

「あなた、そこまで狙っていたってわけ？」

ジン：

「狙っちゃいないが、考えはするだろ」

アクア：

「それもそうね。……私の所には念話が来たわ」

ジン：

「で、動いてるって訳か。怪しいな。外れなんじゃねーの？」

アクア：

「壁の花はイヤよ。踊ってた方が、マシ」

ジン：

「ちげえーねえ」

アクア：

「アクアよ」

ジン：

「ジンだ。こっちはシュウト」

そうして2人は握手を交わした。シュウトには意味のわからない
(別の意味での)片言会話に面食らってしまう。

後にシュウトがジンに確認した意味・内容は大まかに以下となる。
エルダー・テイル はアップデート後にバランス調整をするた
めに、プレイログのようなものを使っているらしい。世界各所の開
発運営チームが、バランスを破壊するアイテムやサブ職、召喚獣な

どを設定しないように確認できるようにしているのだ。ジンは 守護戦士 としては異常な攻撃力をもっているため、ゲームであれば バランス修正の対象になるはずだと考えていた。しかし、大災害以降はその気配がない。したがって、一番可能性が高いのは誰も世界の管理なんてしていない状態になってしまっているということだろう。つまり、本当に異世界に来てしまっていることになる。…この状況は、少なくとも日本サーバーの管理者が不在、もしくはジンを黙認・放置しているとも保留して考えなければならない。

ここにアクアが現れた。ということは、プレイログを見られる立場で、且つ、会話内容から英語圏の人間となる。たとえば海外サーバーの管理者がジンのところまでやって来たという可能性がある。(アクアの騎乗生物は走っている時に音がしないことから、低空飛行タイプなのが分かる。そうなれば、少なくとも海を越えてくることは出来ることになる)

この場合、『この世界』は実はまだゲームの中であり、現実世界からその光景を見ている管理者が存在していることが考えられる。管理者がアクアという『キャラクター』をパソコンで操って、ジンのところまで移動させた可能性が出てくる。

ジンは目立つ活動を控えているわけだから、ピンポイントでジンにたどり着くには、ほぼプレイログにアクセスするしかない。ジンが真っ先にその可能性に言及したことから、アクアはそれらの背景を察して「狙っていたのか？」と質問したのだ。これでジンが圧倒的な攻撃力を持っているとアクアが知っていることが分かり、その上で管理者からのアクセスを待っていたのか？という意味になる。ジンはその可能性ぐらいは当然に考えていたと答える。目立たない立場でいることで、『別の理由による接触』が不可能になる。そうしてプレイログを見られる立場の人間から接触される可能性があることも(一応は)考えていたらしい。

また、ジンを『この場所』で捕捉するということは、ほぼモニタ―にされているということの意味している。継続的に追跡しなければ、場所が中途半端過ぎて出会うことなどは考えにくい。「偶然、道に迷って声をかけました」は不自然だし、正直に言っただけ無理がある。

つまりアクアはモニターしている何者かの指令で送られて来たと考えられるのだ。ここで彼女は、「私の所には、念話が来るのよ」と言う。言外に、正体不明、アクアも会ったことはないのかもしれないという意味だとジンは理解した。同時にジンの所には念話じゃなく、人を（アクアを）送ったということになる。この違いをどう解釈するべきか？というのはまた別の問題として残る。

指令を出す存在には必ず何かの目的がある。それは自分たちの目的（現実世界への帰還）から見れば、実は関係ないのではないか？ 怪しいのでは？と問うのだが、アクアは「壁の花はイヤ」、つまり、何もしないでジツと立っているだけは嫌だ、それならば、操られていようが動いていた方が（踊らされていた方が）何倍も良い。そこから何かの情報なりを得られる可能性が高まるというものだと言えた。

『自分で選んで騙されている人間』に、「おまえ、騙されてんじやねーの？」というセリフはナンセンスで意味がない。信用ならなという点で、信用できる。アクア本人は騙す気が無くて、結果的に指令された内容によっては自分たちを騙すことがあるかもしれないが、それは自分たちが気を付けるべきことだろう。相手は信用ならないと『知っている』のだから。また、彼女同様に『騙されてみる』のも一興というものだろう。現状ではそう簡単に死なない（死ねない）のだから、何が自分たちにとっての『損』なのかは実際にその状況になってから考えるべきことだからだ。

レベルの近いもの同士が短時間で互いに理解しあつたのを見たのだとシュウトはまだ理解できずにいた。会話自体、凝つた嘘を混ぜられる単語数でもない。隠しているのか、知らないのかの区別は付けられないが、一定の信用を与えてもいいとジンは判断していた。

ジン：

「さつきから気になってたんだが、日本で有名なツンデレ声優の声だよな？ 実は声優さん本人がプレイヤー？とかってドキドキしてんだけど」

（注意：あくまでも2018年が舞台です）

アクア：

「ああ、私、自分の声を忘れちゃってるから」

ジン：

「自分の声を、忘れた？」

アクア：

「この体だとほぼ完全な声帯模写ができるの。声だけじゃなくて、耳もいいから、反響があれば他人が聞こえているであろう声も再現できるわ」

自分の声を録音して聞いてみると、自分が聞こえているものとは少々異なつたものとして聞こえる現象はよく知られているだろう。これは頭蓋などに音が響いた結果なのだが、アクアは声色を変える前の自分の声を正確に記憶していなかったため、どんな声だったのかを忘れてしまつていた。

完全な声帯模写が可能になると、どんな声を出すかが自在に成りすぎてしまい、『元の声』のようなものは曖昧すぎて分からなくな

ってしまうものらしい。

人間の聴覚は僅かなニュアンスの違いも聞き分ける能力を持っている。モノマネ芸人の場合は、逆に印象的なニュアンスを強調することで『聞き分け』を逆用し、イメージ補完させることをしているのだが、アクアのケースは自分のニュアンスを把握していなかったため、口調だけが似ている下手なモノマネのように思われてしまう結果となった。……つまり、アクア本人ではない別のプレイヤーが大災害 に巻き込まれたのだらうと周囲に思われたのである。それは同時に彼女のアカウントを別人が盗用しているように思われることを意味した。

アクア：

「私の場合、逆に声質を一定に保つ方が難しいのよ。男声と女声から、声の座標みたいなもので、分かりやすい声を使っているのよ」

ジン：

「つまり、お前の『日本語学習』とやらは、ネットで日本のアニメを見ることなわけだな、お嬢さん？」

アクア：

「……心外ね、違法にアップロードされたものなんて見てないわ（キリッ）」

ジン：

「それはともかく、いろいろな声真似が出来るってことだよな？、じゃ、じゃあ……」

放送を自粛しております。しばらくおまちください。

ジン：

「神だ、神がいた……」

アクア：

「フツ、これで分かったでしょう？」

オタク系宴会芸における究極的な神技を目の当たりにし、ジンは轟沈していた。元ネタの大半を知らなかったシュウトは、よく分からないやりとりに呆然とするばかりである。僅かな時間で声を調整し、女性の声どころか男性の声も自在に操っている。もはや七色どころではなく、万色の声と呼ぶのが相応しい。

ジン：

「んで、そろそろ本題に戻りたいんだけど、何しに現れたんだ？」

座ったまま、ジンが尋ねる。ジンにあって、それで何をする気だったのかということだろう。

アクア：

「トウキョウに戻りたいんでしょう？ 助けてあげようかと思って」

シュウト：

「……あの騎乗生物は、どうみても一人用ですけど？」

アクア：

「私には『別的手段』があるのよ」

そういつと、手を顔の高さまで持ち上げ、指輪をみせる。

ジン：

「なるほど、それで？ 何を企んでる？」

アクア：

「ちよっと手伝って欲しいだけよ」「（ニッコリ）

ジン：

「怪しさ満点だな」

そういつつも、ジンは立ち上がる。オーケーしたという意志表示のようだ。

アクア：

「それじゃ付いてきて」

一角獣に跨がり、こちらに声をかけてくるアクア。

ジン：

「お前だけ馬に乗っていくのかよ」

アクア：

「アンタ達は走っても十分に速いじゃない。この子でも追いつけないかと焦ったわよ。それと！」

ジン：

「ん？」

アクア：

「馬じゃないわ。それに一角獣ユニコーンでもない。この子は蒼雷キリの一角獣ンなのよ！」

愛馬を自慢する、誇らしい顔での宣言であった。キリンと言っても、アフリカのサバンナなどに生息している首の長い草食動物のことではなく、最上級に位置する幻獣としての麒麟キリンのことだろう。日本では某ビールメーカーのシンボルデザインとして有名だ。

シュウト：

「……キリンって、あんな形でしたっけ？」

ジン：

「いや、たぶん別のゲームのキリンをそのまま真似たんだろ。そんな無茶しやがったのは一体どのサーバーだろうな？」

シュウト：

「ああ、東洋の神秘ってヤツですね」

日本文化をよく知らないまま真似る開発陣がいる場合に起こる、
トンデモな装備などがあるらしい話はシュウトも耳にしていた。
武士^{ムライ}や神祇官^{カンナギ}のようなメイン職業があることで、文化的な統一性は低くなってしまっているのだ。世界の各サーバーごとで日本的な装備やアイテムの解釈は、様々なバリエーションを見せている。

アクア：

「ゴチャゴチャ言っていないで、行くわよ？ ほんつとにもう！さつきから全部聞こえてるのよ！私の耳は他人の数十倍の感度なんだから、悪口なんて言ったら5キロ先からでも蹴りにいくから、よく覚えときなさい！」

そういつて先頭を走り始めたアクアを追って走る。

先ほどから全くモンスターが現れないのは、彼女のキリンによる能力だとシュウトが知るのもうしばらく後のことになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6739n/>

神殺しの青

2011年12月30日01時51分発行